

ファフニール VS 神

サラザール

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

トラックに跳ねられて死んでしまった10歳の少年。彼は神に転生して世界を守ることになる。これからどうなる!?

\*この作品は銃皇無尽のファフニールとドラゴンボール超をクロスオーバーしたものです。片方、もしくは両方ともダメな人はバックしていただいて大丈夫です。

# 目次

## 序章

プロローグ	1
VS 青のヘカトンケイル	1
神界の神達	1
神界の神達	2
原作の序章	25
VS 紫のクラークン	29
神界の神々	35
バトルロイヤル	41
ニブル所属の悠	53
神とデート	60
ドラゴンズ・エデン	
ミッドガル	68
入学	77
VS 白のリヴァイアサン	1
ブリュンヒルデ教室	89
接近	96
元上官	107
迎撃準備	113
”白”のリヴァイアサン	122
兄妹喧嘩	132
VS 白のリヴァイアサン2	140
ミッドガルの長	149
キス	156

世界神對抗親善試合（野球編）

クラスメイト見習い

対バジリスク試験

スカーレット・イノセント

一日の朝

ドジっ娘

健康診断

竜人

同じクラス

改名

ドラゴン信奉者団体

馴染み方

暴走

選択

ビーチ

ヘカトンケイル襲来

V S キーリ

V S 青のヘカトンケイル2

石頭

クリムゾン・カタストロフ

二年前

侵攻

口論

船旅

真実

414

404

395

387

380

368

354

339

328

312

301

285

273

260

253

242

228

217

202

194

182

171

164

罪との向き合い方	421
お礼	432
ミストルテイン	444
決戦に向けて	456
二人の時間	465
”赤”のバジリスク	472
可能性	481
作戦決行	488
V S 赤のバジリスク	498
祝勝会	510
スピリット・ハウリング	
決意	517
お姫様	522
保護	533
出発	544
晩餐会	554
エルリア公国	569
お兄ちゃん	578
魂送祭	586
”黄”のフレスベルグ	596
噴水の銅像	608
デートの誘い	616
V S フレイズマル	624
V S 黄のフレスベルグ	633
取引の代償	643

王子様	652
ミドガルズ・カーニバル	
面白い情報	662
通学	669
行事	678
お見舞い	688
リーザの涙	700
学園祭準備	711
青と緑	719
学園祭	726
誤解	741
神とデート 2	749
学園長の正体	760
蠢く蔓	773
V S 第一世界の世界神	787
V S 緑のユグドラシル 1	799
可能性	809
エメラルド・テンペスト	
それぞれの思い	818
友人のシャル	825
最高位の神	837
日本到着	850
大きな欠点	865
遊園地	877
アリエラの生い立ち	887

二人目のお兄ちゃん	897
研究成果	908
一方的な親子喧嘩	918
暴露	933
ティアの覚悟	942
V S 緑のユグドラシル 2	952
新たな中枢	963
小さな命	976
ブラック・メネシス	983
二つの厄災	983

## 序章

### プロローグ

学校帰りに本屋で立ち読みしている少年、大島 亮はドラゴンボール超という漫画を読んでいた。読み終わるとレジに行き、本を買った。

（そういえば今日は銃皇無尽のファフニールの十五巻が出てたけど、明日買うか）

そう思い本屋を出ると横断歩道に少女が立っていた。さらに左側からトラックが向かってくる。

（危ない!!）

亮はそう思い買った本を手離し、少女を歩道へ押しした。少女は転んだが、すぐに立ち上がり、無事を確認したが、亮は跳ねられ、頭を打った。



「……………ん？ん？は……………」

気が付くと真つ白な場所に倒れていた。トラックに跳ねられそのまま倒れて死んだはず。起き上がり、周りを見渡すと、横断歩道にいた少年が椅子に座っていた。

「君はさっきの…」

「うん。君に助けてもらった神だよ」

「えっ？」

神と名乗った少年はポケットからリングゴを出して笑顔でそう言った。しかも服装は変わっていた。姿は人間だが、ドラゴンボール超に出てくる全王の服にそっくりだった。さらに側には従者らしき人が四人いた。



「僕は”絶対神”ゴッド、十二の世界の頂点に君臨する神だよ」  
「ど、どうも大島 亮です。その……”絶対神”ゴッド様はどうして僕の前に……」

戸惑いながら聞くとゴッドは申し訳ない表情で答える。

「僕のせいで君を死なせてしまったからね。ごめんね。だからお詫びとして君を神にしてあげるの」

「なっ……か、神!!!」

亮は驚いて尻餅をついた。いきなり神が現れて神にすると言われると流石に驚くか、もしくは唾然とする。

「君は素質があるからね。清く正しい心を持つ人が神に相応しいんだよ。それに君のことはいつも見てたからね」

「俺のことを？」

「うん。 そうだよ」

ゴッドは水晶を作り、そこからスクリーンのように画面が表示された。そこには地球が写っていた。

「世界は十二個存在していて、君の生まれた世界は第一世界と呼ばれてるんだよ。そしてそれぞれに一人の神が世界を管理しているの。それが世界神。創造と破壊を司る象徴だよ」

「つまり僕はその世界神つてのにしてくれるんですか？」

「そうだよ。実は五年前に第十二世界の世界神が引退しちやって誰にするか困ってたんだよ。そしたら君を見つけたわけ」

「僕を？」

「うん。君は優しくしてそして周りに気を配っていて、困ってる人をほっとけない、そしてトラックに引かれそうになった僕を助けてくれた。だから君を選んだわけだよ」

「そうですか……」

ゴッドはそう言うのと水晶を従者に渡し、亮の前に立った。

「どうする？無理強いはしないけどやってくれる？」

ゴッドはそう言ってきて亮は悩んだ。いきなり神だの十二の世界だの言われて混乱していた。けど、自分の事を評価してるれて頼んでくれてるのに断るのは失礼だと思った。

「分かりました。引き受けます」

「ホント!? ありがとう! じゃあ”神界”に案内するね」

「神界?」

”神界”はね、神たちがいる場所だよ! 君にはそこで勉強して世界神になつてもらうからね!」

「はい。よろしくお願いします!」

そう言つて亮はゴッドとともに神界に向かった。

◇

ここは”神界”。十二の世界の神々が住む場所であり、仕事したり遊んだりしているところである。色んな建物があり、娯楽施設や映画館、シヨッピングがある。

特に目立つのが、高層ビルのように高い建物。そこは絶対神ゴッドが住んでいる。亮はその五階の客室にいた。そしてもう一人、スーツ姿の人が立っていた。年齢は二十歳ぐらいで髭を生やしていた。

「はじめまして、私は”絶対神”ゴッド様のお世話を務めております”神官王”シンと申します」

「はじめまして、大島 亮です」

「そんなに緊張しなくて大丈夫です。それではこれからの事を説明しますね。」

そう言つて神官王は手から光を出し、スクリーンになった。そこには世界神としての仕事内容が書かれており、説明した。

”世界神”の仕事は一つは世界の歪みを直す事です。歪みとは世界に必ず起きる現象であり、放つておくと世界の破滅に繋がるのです。そこで亮さんには神の気を使いこなしていただきます」

「神の気? 神だけが持つ力のことですか?」

「そうです。神の気を注げば歪みを直すことができます」

映像には歪みと人が映っており、人が神の気らしきものを注ぎ、歪みが修正されるのを見た。

「次に書類仕事です。内容は人間の死亡率や文明の状況、世界の状況を書類にして提出してください」

” 神官王 ” は映像を閉じ、更に神の仕事について説明する。

「最後に世界の脅威となる存在を排除することです。それは特訓をしていただきたいと思います。よろしいですか?」

” 神官王 ” の説明が終わると亮は質問する。

「世界の脅威になる存在はどういうことですか?」

「それは人間がたくさん殺されたり、地球を破壊しようとする存在と戦い、そして倒して欲しいのです」

「それは僕が判断するのですか?」

「そうです。こちらから指示することがありますが、基本は世界神に任せます。それでは訓練場に案内します」

そう言って神官王は地下3階に案内した。階段を降りながら、質問した。

「ゴッド様はどうしているんですか?」

「ゴッド様は書類仕事しております。あの人は12の世界を創ったお方ですので我々の何十倍働いているのです」

さらっとすごい事を言った。世界を創ったなんて神の存在を知ったばかりの人は誰でも驚くだろう。

「あとゴッド様を怒らせない様をお願いします。かつては世界も36あったのですが、ある世界神が一つの世界を滅ぼしてしまい、お怒りになったゴッド様は、世界神ごと24の世界を一瞬にして消されました」

「えっ!!!」

さらに恐ろしい事を言った。しかも笑顔で。

「ゴッド様は人間だけでなく我々神を試してあるのです。もちろん亮さんのこともですよ」

「不安になってきました」

「大丈夫ですよ。滅多なことには怒りませんから。それに、亮さ

んのは気に入ってますので安心してください」

「僕をですか？」

「はい。自分を助けてくれた人間は初めてだと言っておりました。よほど嬉しかったんでしよう」

そう言っているうちに地下三階の訓練場に着いた。

「それでは訓練開始です準備はいいですか？」

「大丈夫です」

「それではどうぞ」

そう言っつて亮は訓練場に入っつていった。

## 一年後

「お疲れ様です。今日からあなたも”世界神”です。頑張ってください。」

「ありがとうございます」

あれから一年が過ぎた。僕は特訓の末にドラゴンボール超に出てくる破壊神ビルスレベルにまで強くなり、戦えば戦うほど強くなるサイヤ人の特性と超サイヤ人に変身する力、そして破壊のエネルギーを手に入れた。さらに勉強も教えてもらい高校卒業レベルになった。そして今、”世界神”になり、これから仕事場の第十二世界に向かうところである。服装はドラゴンボール超の破壊神と同じ服装に、黒いシャツを着ている。”絶対神””ゴッドと””神官王””シンに見送られていた。

「亮君、頑張っつてね！」

「はい！頑張ります！」

ゴッドと握手をした。手を離すと”神官王”が杖を渡してきた。その杖は天使ウイスの持つている物と同じだった。

「こちらをどうぞ。この杖で場所を確認したり、物を保管したり作り出すことができます。あと通信もできますので何かあればいつでも連絡してください」

機能はアニメと同じ物だった。

「ありがとうございます！それでは行つてきます！」

「期待していますよ」

「亮君、じゃあね」

亮は杖を地面に突くと光になって下界に向かった。

## V S 青のヘカトンケイル 1

第十二世界、最近資源が豊かになった世界である。何故なら二十年前、突如日本にドラゴンが現れた。名前は”黒”のヴリトラ。その怪物は物質を無から作り出す上位元素（ダークマター）という能力を使い、軍隊の攻撃を無効化した。

さらに他の怪物も姿を現し、”黒”のヴリトラは突如姿を消した。

それ以降、次々とドラゴンたちが現れ、さらに人間の中にドラゴンと同等の力を持つものが現れ、人々はそれをタイプ・ドラゴン、”D”と呼ばれる様になった。そのおかげで物資を創り出すことができ、第十二世界の経済が活性化された。



ここはイタリアのミラノ。ビルの屋上でピザを食べている少年がいた。大島 亮である。

亮はこの世界の”世界神”として世界に起きる歪みを治し、いろんな国を回っていた。”世界神”になって二ヶ月が立っており、近くに歪みを感じ取り杖で確認していた。

「なるほど……ニキロ先のピザ屋を右に曲がって裏路地をまっすぐ行くとあるのか」

そう言うと亮はピザを食べ終えて、自分の身体を透明にして歪みのある場所に向かった。

その途中、裏路地で人の気配を感じ取った。覗いてみると、若い年くらいの少女が四人の不良に絡まれていた。

「やっ……やめてください」

「悪いな。金を出してもらおうか？そしたら逃すぜ」

「出さないなら分かってるだろうなあ」

不良たちは金属バットとナイフを取り出し脅した。流石にやばいと思い、透明化を解除し、姿を現した。

「おいおい、卑怯な奴らだな」

そう言うのと少女と不良たちは亮を見た。

「誰だお前？ 見ない顔だな？」

「なんだその服、ダセエ！」

「全くだ。兄貴、こいつもやってしまいますか？」

「当然だ。坊主、悪いがお前も金出しな！」

そう言つて不良の四人は亮にナイフやバットを向けて来た。

「悪いけど僕は人間と戦うのは嫌いなんだ。悪いことは言わないからさっさとその子を放してくれないか」

「ほう、いい度胸だ。覚悟しろ！」

不良の一人はバットを振り回して攻撃して来た。亮は小指で止め、そのまま人差し指で真つ二つに折った。

「「「何っ!!!」」」

不良たちは驚いた。その隙に少女を助けた。

「大丈夫？」

「うっ……うん」

「いついつの間に」

「ふぎけやがって、やっちまえ」

「「「おおー!!」」」

そう言つて不良たちはかかって来た。すかさず亮は気を出し、すると不良たちはバタバタと倒れた。

少女は驚いていた。こんなことができる人を初めて見たからである。亮は倒れたのを確認し、少女の方を見た。

「もう大丈夫だよ。怪我はない？」

「はっはい。大丈夫です。ありがとうございます」

少女は亮にお礼を言った。

「気にしないでいいよ。それじゃあね」

亮は歪みのある場所に向かおうとした。

「待ってください！」

すると少女は亮を呼び止めた。

「どうしたの？」

「あの…あなたは一体……」

「僕は大島 亮。君は？」

「れっレイミア レイフォードです」

「レイミアか。じゃあまたね」

そう言っつて亮は裏路地の奥へ行つた。レイミアは不良たちが起きる前にその場を後にした。

◇

「ここか、結構大きいなあ」

亮は歪みのある場所についた。周りに人の気配がないかを感じた。幸い誰もいなくて安心し、歪みに向かって神の気を注いだ。すると歪みは元に戻りなくなつた。

「これでよし。さてと次に向かうか」

亮は歪みを治し、杖を出した。杖で歪みのある場所を確認したが、今のところはなかつた。

亮は神界に戻つて書類仕事をするため、身体を透明にし、空を飛んだ。街を見渡すと先程チンピラから助けた少女、レイミアを見つけた。

友人らしき人と話している。無事を確かめて”神界”に戻ろうとする。

するとでかい力を感じた。その場で止まり、杖で力を感じた方向を見ると、青い巨人を見つけた。

それは七体いるうちの一体、青のヘカトンケイルだった。ヘカトンケイルの能力は不死不滅（アンデット）、幾度攻撃を受けても復元し、消滅させてもその場で復活することから厄介な相手だと言われているドラゴンだ。



ヘカトンケイルの進行方向を見るとミラノに向かっていた。このままでは街が危ないと思った。

（ヘカトンケイルはまず海に飛ばしてから全身に攻撃すれば大丈夫だ。だが、ニブルの連中にバレるかもしれない。仕方ないか）

亮はそう思い、ヘカトンケイルのいる場所にむかった。亮はヘカトンケイルの正体を知っていた。ヘカトンケイルは”黒”のヴリトラが創り出した架空武装である。

架空武装とは”D”がドラゴンと戦うために上位元素（ダークマター）を武器に創り出した物質である。”D”はその力を使い、ドラゴンと戦うために訓練している。

話を戻すが、”黒”のヴリトラは”緑”のユグドラシルに追われているため、日本のどこかに隠れている。

ユグドラシルに居場所がバレない様にするため、ヘカトンケイルを創り出した。

「確かこの辺りだが……あつ見つけた」

亮はヘカトンケイルを見つけた。ヘカトンケイルは森の木を踏みつけながら進んでいた。

ヘカトンケイルは何かを察知して動きを止めた。亮は気の上げ、竜巻を起こした。

竜巻はヘカトンケイルを飲み込み、海の方に向かった。竜巻は海のところまで消え、ヘカトンケイルは倒れた。

「よしー海の方こうに飛ばすぞー」

亮は両手をヘカトンケイルに向け、気功波の準備をした。ヘカトンケイルは立ち上がり、それと同時に亮はヘカトンケイルの腹部に狙って気功波を打ち込んだ。

「ギヤリック砲!!!」

亮はベジータの技を使った。

ヘカトンケイルの体は脆いため、通常攻撃でも体を破壊するこ  
とができるため、僕は威力を抑えた。

ヘカトンケイルは海の方に追いやられた。そしてヘカトンケイルの上に行き、超サイヤ人になり、気功波を打ち込んだ。

「ビックバンアタック!!!」

爆発が起こり、亮はバリアで自身を守った。煙は徐々に消え、ヘカトンケイルの姿はなかった。念のため杖で確認し、消滅したことを知る。

(さてと、誰かに見られない様に早く神界に行くか)

亮は”神界”に戻って行った。しかしその近くにニブルの船があり、兵士たちはドラゴンとの戦闘をしっかりと見ていた。この事から亮はニブルやアスガル、そしてミッドガルに知れ渡った。

## 設定

大島 亮 11〜16歳 男 第12世界の世界神

趣味 料理 特技 瞑想 好きな食べ物 チーズケーキ

神々から振り回されることがたまにある。世界神の中では新人で唯一戦闘力を変化させることができる。他人に対する恋愛は敏感だが、自分に対する好意は鈍感なところがある。困ってる人を放っておけない。ドラゴンと戦うのはいずれ世界の脅威となると思っているからであるが、ヘカトンケイル以外は悠達と倒そうと思っている。

絶対神 ゴツド 一兆歳以上

趣味 12の世界の監視 特技 創造と破壊

すべての世界の頂点に君臨する神。実力は12の世界を一瞬に消すほどの力を持つが、戦うことはしない。1億50年前まで、世界は36存在していたが、ある世界神が自分の管理している世界を滅ぼしたことに怒り、世界神ごと24の世界を消滅させた。滅多な事には怒らないが、神々達から恐れられている。

神官王 シン 一兆歳以上

趣味 大食い 特技 仕事

絶対神ゴッドに支える神官の王である。全世界最強戦闘力の持ち主で、世界神が束に掛かっても足元に及ばないほどの実力を持つ。

## 神界の神達 1

ここは”神界”。神々が住む世界である。さらに神々が仕事をしている高層ビル”天上塔”十階に第十二世界の”世界神”、大島亮は書類仕事していた。内容は自分が管理している世界の物資情報をまとめていた。彼が神になって半年が過ぎようとしていた。

「やっと終わった。あとは神官様に提出してここでの仕事は終わりだ。あとは戻って空間の歪みを治しに行くか」

亮は書類を持って十五階にいる第一神官室に向かった。今いる場所は十階、”世界神”が仕事している階であるため、階段を使っている。すると上から声がした。

「亮くん。仕事お疲れ様。頑張ってるね」

階段の上から降りてきたのは第二世界の”世界神”、矢島弥生さんである。この人は頼りになるお姉さんで、力持ちである。力だけなら世界神最強である。亮が見習いの頃、稽古をつけてくれた神。

「弥生さん。お疲れ様です」

「亮くん、エドワード君見かけた？」

「見てませんよ。またサボってるんじゃないですか？」

「俺つちがなんだって？」

急に声がしたので後ろを見るとパジャマ姿の神がいた。

「エドワード君、探したよ。”神官王”様が呼んでたよ。仕事をお願いしたいそうよ。それよりまたパジャマなの？ちゃんと服を着なさいよ」

「すみません。最近忙しくて時間感覚が狂っちゃって」

「それでも服ぐらいちゃんとしなさい」

このだらしない人はエドワード タッチ、第四世界の”世界神”。よく仕事をサボる上に服装がだらしない神である。仕事は出来るがちゃんとしないので真面目に仕事すればいいとみんな愚痴っている。

「亮ちゃん、さっき俺つちがサボってるって言ったでしょ」

「……違うんですか？」

「いやその通りだよ。最近ゲームが忙しくてね。テヘツ」

「全く、あなたって人は……それより早く神官王様のところに行ったら?」

「そうだった。じゃあ俺っちはこれで」

そう言つてエドワードさんは上に上がつて行つた。

「ちゃんと仕事してくれればいいのに、ハア〜」

「まあいつも通りじゃない。それじゃあワタシは仕事に戻るね」

「はい。それでは」

そう言つて亮は弥生と別れ、第一神官室に向かつた。



神には階級があり、一番偉いのが”絶対神”ゴッド、次に偉いのは”神官王”シン、その次が神官六人、その下が”世界神”で、一番下は自然を司る神々である。”世界神”や自然を司る神々は人間の中から選ばれるが、神官以上はゴッドが生み出しているため、昇格はないが仕事をこなす度に給料が変わってくる。そして今、第一神官室に書類を渡し終えた。杖で歪みを確認したが全く無く、帰る準備をしていた。

「亮ちゃん。おつかれ〜」ギユツ

「八重さん!!!」

後ろからショートカットの神が抱きついてきた。彼女は井上八重、第7世界の”世界神”である。歳は同じだが、神歴は亮より二年先輩だ。

「八重さん、何度も言いますが抱きつくのをやめてください」

「いいじゃない。わたし達だけなんだし」

「それでもビックリしますよ。しかも……その……」

「?」

ハッキリとは言えなかつた。胸が当たっていると。この人は

大胆でいつも僕に抱きついてくる。周りの目があるから何度も言っているが、それでも抱きついてくる。

「それより八重さん、これから仕事があるんじゃないですか？確か今日は神官様達と第七世界に行くんじゃないですか？」

「あくそうだった！そのあとは第九世界に行つて仕事を手伝つて、それから第三世界で文明調査だった。じゃあ行つてくるね」

そう言つて出て行つた。八重さんは計画を立てるのが好きでいつも計画通り仕事している。急な仕事が入つてもキツチリこなす仕事ができる神であるが、見習いの頃からずっとあの調子である。先輩達に聞くと普段はあんな神（ひと）ではないという。何でだろうと思うと先輩達は鈍いなくと言われる。何が鈍いのだろう。まあそんなことより、帰る準備をして家に帰つた。

” 天上塔 ” のすぐ横に十二階建のビルがある。普段はそこで寝泊まりしている。亮が住んでいるのは四階で、他の世界神も住んでいる。家に帰り、ジャージに着替えてベットに飛び込んだ。仕事が多い上に八重さんから抱きつかられて大変だ。そしてそのまま寝てしまった。

## 7時間後

目が覚めるとテレビの音が聞こえた。つけないで寝たはずだったので見に行くとエドワードさんが見ていた。

「エドワードさんまたですか？」

「亮ちゃんおはよ！じゃあさつそくだけど俺の部屋に来てくれ」

「ハア、分かりました」

そう言つて亮はエドワードさんの住んでいる1階に向かった。

「それでエドワードさん、ゲームで追い出されたんですか？それともお酒を飲み過ぎて追い出されたんですか？」

「……両方だ」

「……」

エドワードは何十年も前に結婚している。奥さんは美人でと

ても優しいのだが、お酒とゲームが大嫌いでバレては追い出され、僕の家に不法侵入してくる。そして最後は一緒にいて行つて僕も謝つてる。

「どうしてバレたんですか？」

「それがアイツ、急な仕事が入つたみたいですぐに出かけたからお酒を飲みながらゲームをしてたんだよ。これならバレないと思つたら急に忘れ物で帰つてきてそのまま追い出されたんだよ」

「この機会にやめたらどうですか？」

「それはやだ！やめられない！俺たちからゲームとお酒を取つたら何が残るわけ？」

「クズしか残りませんね！」

「酷い……まあ反省はしているから当分はしないさ」

「当分って……あんた1週間も我慢出来なかつたじゃないですか」

「大丈夫だよ！今度はちゃんと我慢するから！」

「本当ですか？」

そう話しながらエドワードさんの家に着いた。インターホンを鳴らす。するとエドワードさんの奥さん、カーリーナさんが出てきた。

「あら、亮君おはよう」

「おはようございます。カーリーナさん」

「亮君が来てるってことはあの人も来てるんでしょ？」

「……はい」

カーリーナさんは第四世界の海の神であり、十二の世界の海の神を仕切っている神（ひと）である。エドワードさんはこの人には頭が上がないのである。

「いつもご迷惑をかけてすいませんね。じゃああんた！来な！」

「ごっごめんなさい」

「それじゃあ亮君 ありがとう」

そう言つてカーリーナさんは半泣きのエドワードさんを家に入れた。そういえばみんなはカーリーナさんのことを女将さんと呼ん

でたな。今後はお神さんと呼ぼうと思った。

#### 設定

矢島 弥生 59〜64歳

趣味 下界のお寺巡り 特技 裁縫 一人称 ワタシ

第2世界の世界神。見た目は女子高生で、皆の優しいお姉さんで、しつかりしている。世界神の中で一番の力持ちである。

エドワード・タッチ 48〜53歳

趣味 ゲーム 特技 パソコン 一人称 俺っち

第4世界の世界神。見た目は中年のオッサンで、仕事はできるが、だらしなくていつもパジャマを着ている。

世界神の中で唯一 瞬間移動ができ、どの世界でも一瞬で移動できる。

井上 八重 11〜16歳

趣味 カメラ 特技 暗算 一人称 私

第7世界の世界神。計画を立てるのが好きで、急な仕事が入ってもこなすことができる。亮とは同じ年だが、世界神としては2年先輩である。亮に好意を持っており、抱きついたりしている。亮は気付いてないが他の神たちは知っている。



## 神界の神達 2

第六世界、特殊な能力を持つ人間がたくさんいる世界である。第十二世界の”D”の能力である物資を創り出す生命体は存在しないが、魔術や超能力を持つ者が多いと言われている。

「アンジェリカさん、分析が終わりました」

「ありがとう、あとはあの町の調査ね」

森の奥にある泉で亮と茶髪のポニーテールの九歳の少女がいた。この世界の”世界神” アンジェリカである。亮より三つ歳下だが、神歴は一年先輩である。神の中でも洞察力が優れており、人を見る目がある。

今日は第六世界で自然や町の調査をするため来ている。神は一人で仕事をするのがほとんどだが、たまに他の世界の仕事を手伝うこともある。

「亮さんは仕事慣れましたか？」

「はい、最初よりは楽になりました」

「それは良かったです。あと、何で私のほつぺをぶにぶにしているんですか？」

「なんとなくですよ」

アンジェリカの歳は小学校低学年に見えるため、他の神達は可愛くてついほつぺをぶにぶにと突いてくる。本人は嫌がっているが、顔は赤くなっている。

「いい加減にしてください。それより変装しますよ。この姿じゃ怪しまれます」

「そうですね。では……」

二神（ふたり）は杖を地面に突くと服装が変わった。亮は赤と白のチェック柄に青のジーパン、アンジェリカは白いフードを被った怪しい格好をしている。

この町はアンジェリカのように白いフードを被った人が多く、超能力や魔力が強い人がいる。商店街に入つて周りを見渡すと、住民の顔が元気が無い事に気付く。アンジェリカも気付いたようで亮に

話しかけた。

「最近この町に魔物が現れたみたいで、夜中になると暴れ出すそうよ」

「でも超能力を使って追い払えばいいんじゃないですか？」

「それが出来ないの。この町には掟があつて夜の十時から五時まで超能力を使っていけないみたいなの」

「どうしたですか？」

亮は首を傾げて聞き、アンジェリカは周りを見渡しながら答える。

「何でも二百年以上も前にこの町の人が暴れ出して町を壊滅寸前までにしたみたいで当然その人は追い出されたんだけど、また起きるかもしれないから当時の町長が超能力を封じる腕輪を創り出したそうよ」

「なるほど。掟があるからから戦えないわけですね。でもそこままでしてまで守らなければいけないんですか？」

「もし掟を破れば家族全員ギロチンで処刑されるみたいですよ」

「残酷ですね」

「仕方ないよ。それがこの町のルールなんだから。それより私たちがここに来たのは仕事しに来たんじゃない？」

「そうでしたね」

亮達は話しながら町を歩いた。途中、アンジェリカは亀のぬいぐるみを買ったり、レストランで食事をしたりと寄り道をする羽目になった。



「着きました。ここですよ」

付いたのは町から少し離れた洞窟の入り口にいる。この中に例の魔物がいる。

「アンジェリカさん。力が全く感じられないんですが、本当にここですか?」

「そうですよ。でもおかしいですね。気配が感じ取れないですね。……ん?」

アンジェリカは洞窟の壁に傷がある事に気付く。

「この傷……まだ新しいですね。それに気配が全く感じ取れない……まさか……」

アンジェリカは最悪の事態に気付く。すると、町の方から爆発が起きる。

「!!!」

二神（ふたり）は町を見た。煙が上がっている。亮は杖を取り出し町の映像を見る。すると緑色のドラゴンが町を荒らし、火を吹いていた。

「遅かったですね」

「ええ、でもおかしいですね。まだ昼なのに町を襲うなんて」

亮達はドラゴンが暴れているところを見た。町の人たちは超能力を使って戦っているが全然効いていない。すると亮は森の方に気配を感じ取る。

「アンジェリカさん!森の方に怪しい気配を感じます!」

「つ!? 本当ですか!」

亮は森の泉を写した。そこには黒いフードを被った男が水晶に向けて手を動かしていた。

「なるほど、この者がドラゴンを操っていたのですね。亮さんはこの男をお願いします。アタシはドラゴンをなんとかします」

「分かりました!」

亮は森へ、アンジェリカは町へ向かった。

町は半壊しており、白い軍服を来た軍隊達がドラゴンに攻撃をしていた。後方に立っていたのは軍隊長のオーロット將軍、この町最強の超能力者である。

「くそつ、なぜ奴に効かないんだ！」

「將軍、町の人たちを非難させました！」

「そうか、あとはこの怪物だけだが、なんなんだあの生き物は!」

この世界はドラゴンという存在をほとんど知らない。火を吐く生き物はサラマンダーだけで、この生き物を見るのは初めてである。

「このままでは持ちこたえられません。我々も非難するべきです」

「馬鹿者！我々は軍人であり、この町を守る義務がある。怪物の思ふ壺になるぞ！弱点は必ずあるはずだ！頑張れ！」

オーロットはそういうが、本人も奴には敵わないと分かっていた。しかし、軍人としての誇りがあり、引くことができなかつた。

ドラゴンは暴れ続けた。建物を壊し、敵意を向ける者に火を吹いた。そして破壊尽くすと今度はオーロット達に目を向け攻撃を仕掛けて来た。すると、青い玉が飛んできてドラゴンに当たると爆発し、そのまま倒れた。

「!!!」

オーロット達は驚いた。何が起きたのかわからない。オーロットは青い玉が飛んできて方向を見るとまた驚いた。見たこともない服を来た少女が宙に浮いているからである。その少女はレーザービームを放った。ドラゴンは打たれ、消滅した。

「彼女は……一体……?」

オーロット達は啞然としていた。それもそのはず。自分達でさえどうしようも無い敵を簡単に倒したからである。

その少女ドラゴンを倒したのを確認すると森の方へと飛び去った。



「くそっ！何者なんだ！」

森の泉には黒フードを被った男が水晶で一部始終を見ていた。その男の名前はアランドロン。二百年前にこの町を破壊した男の子孫である。彼は先祖の復讐のため、ドラゴンを召喚し、町を襲っていた。本当なら夜中に襲うが生き物をパワーアップする術を覚え、ドラゴンにかけて昼間から町を襲いに向かわせたのだ。

「せっかく魔術を習得してドラゴンを呼び出したのに！復讐計画をまた練り直さなければ！」

「残念だがそうはさせない。」

「!!」

後ろから声が聞こえ振り向くと亮がいた。

「誰だ！」

「僕は神だ」

「神だと？フンツ！笑わせるな！その服装……俺様のペットを倒した奴の仲間だな。これでもくらえ！」

そう言つて黒フードの男は岩を持ち上げ亮に向かって攻撃した。だが、亮は人差し指からビームを出して岩を粉々にした。

「なんだと！」

男は驚き、剣を作り出し襲いかかってくる。亮は気を上げて暴風を起こし、黒フードの男を巻き込んで飛んで行った。

亮は杖を取り出して地面に突き、森を元に戻した。すると上からアンジェリカが降りて来た。

「亮さんお疲れ様です。やりましたね」

「ええ。アンジェリカさんもお疲れ様です！」

そういうと亮はアンジェリカの頭を撫でた。

「ちよっ……ちよっとーやめてくださいー！」

「すっすいません」

アンジェリカは顔を真っ赤にして亮の手を払った。

「全く、あなたたつて神（ひと）は……それより早く戻りますよ。」

町の人たちに見られますよ」

「そうですね。では」

亮は杖を地面に突き、光になって神界に向かった。

「お疲れ様。二神（ふたり）とも。お茶でもどうだい？」

「ありがとうございます」

「いただきます」

神界の休憩室で、亮とアンジェリカは髪をオールバックにした神（ひと）からお茶を貰った。この神（ひと）はパトリック。第八世界の”世界神”で気遣いができる神である。更にこの人はからかうのが好きで亮はよくからかわれていた。

「パトリックさん。もうすぐ奥さんの誕生日ですね」

「そうなんだよ。プレゼント何がいいか迷ってるんだよ」

パトリックの妻、メアリーさんは第二世界の山の神であり、二の世界の山の神達を仕切ってる。

「髪飾りはどうですか？」

「十四年前にプレゼントしたんだ」

「花がいいですよ？」

「それは六年前にプレゼントしたよ。ああ、なんにしよう」

僕とアンジェリカさんが提案してもすでにプレゼントしているからと却下した。パトリックさんは新しい物をプレゼントしようと考えてる。この人結構優柔不断で仕事にも影響している。

「それじゃあ一日仕事を休んでデートに行ったらいいんじゃないですか？」

するとスーツ姿でブリーフケースを持った少年がやってきた。第一世界の”世界神” 河本 義晴である。亮とは同期で知的なところが好きな神である。

「それいいな！義晴ありがとう」ギュッ

「抱きつかないでください。てか苦しい。亮にアンジェリカ、助けてくれ」

「さてと仕事に行きますか」

「そうですね」

そうやって亮とアンジェリカは休憩室を出た。義晴は同期の頃から仕事は助けてくれるが、こういったことには助けてくれなかった。

「待ってくれ！助けて〜」

義晴の声”神界”中に響き渡った。

## 設定

アンジェリカ ブラック 9〜14歳

趣味 チェス 特技 スケート 一人称 私

第6世界の世界神。神々の中で洞察力があり、人を見る目はある。神歴は亮より1年先輩である。皆から可愛がられ、妹扱いされている。

第6世界出身でかつて世界の全ての魔術を習得した魔術師とされている。

河本 義晴 11〜16

趣味 読書 特技 掃除 一人称 俺

第1世界の世界神。亮とは同期で、ライバルでもある。知的なことが好きで、いつもブリーフケースを持ち歩いている。中身は本や書類が入ってる。

パトリック ホワイト 36〜41歳

趣味 釣り 特技 神経衰弱 一人称

第8世界の世界神。からかうのが好きで、亮や義晴をからかっている。その反面、空気を読み、周りに気遣える。

## 原作の序章

” 天上塔 十階、亮とエドワードは書類仕事をしていた。亮は今までの歪みのあつた場所をまとめ、エドワードはパトリックから依頼された人間の生存率と死亡率をまとめていた。今は部屋に居るのは二神（ふたり）だけで、他は自分の管理している世界に行っている。

「そういえばお神さんとは仲直りしました？」

「したぞ！土下座して5回ビンタされて許してもらった！いつもなら6回のところを1回免除してもらった」

「……」

エドワードは笑顔で言った。亮はあの一件からエドワードと会うのは久しぶりに会う。亮は苦笑いして仕事を進めた。

「それより八重ちゃんとはどうだい？」

「相変わらずですよ。いつも抱きついて来て、僕のチョコを取ったんですよ。どうにかなりませんか？」

「どうにもならないね（本当に鈍いな〜）」

「そんなこと言わないで下さいよ」

「諦めることも覚えたほうがいいぞ（若いつていいなく。妻にも話してやるか）。」

亮はため息をついて仕事を続けた。するとエドワードは書類を終わらせた。

「それじゃあ俺たちはこれでな。まあ頑張れ！」

「……はい、お疲れ様です」

エドワードは書類を持って十五階の第四神官室に行った。亮は自分の世界の状況を調べた。

亮が”世界神”になって二年が過ぎ、ミッドガルはニブルから独立して、アスガル傘下の教育機関となり、”D”の人権が世界に認められた。

その理由はヨーロッパにあるエルリア公国と呼ばれる国が関係している。王族の中に”D”が現れたみたいで、現公王アルバート・クレストが人権運動をしたおかげだそうだ。



「なるほど……よしつと、自分の第十二世界（仕事場）に向かうか」

亮は杖を取り出して自分の管理してる世界へ向かった。

◇

ドラゴンが現れてから二十二年、日本 七登市にヘカトンケイルが襲来した。住民は避難したが展望台に少年と少女がいた。彼らは”D”で五歳の頃から能力が生まれたが、二人は大人達にバレないように隠し通していた。そして少女はヘカトンケイルに向けて攻撃した。

「来ないで……来ないでよ……」

少女は少年の傍で泣きながら懇願している。

「深月は——諦めないんだな」

少年は小さな声で話し掛けた。

「諦められる訳……ないもん」

掠れた声で深月は答える。

「どうしてだ？父さんと母さんは避難した。他の皆だつてとつくに逃げ出してる。ここままで守るものなんて——」

「あるよっ！私達の家があるもんっ！あの町は、私達が家族で居られる場所だもんっ!!」

少年はの声を遮って深月は叫んだ。

「……そっか、分かった」

小さく息を吐くと、悠は深月の頭に手を乗せる。

「兄さん？」

「あとは——俺に全部任せとけ」

◇

「ここが七登市か……ん？あそこに誰かいるな？」

亮は日本の七登市に付き、歪みを探していた。すると人の気配を感じ、その場所に向かう。そこにはヘカトンケイルに攻撃している少女と立ち尽くす少年がいた。

「あれが物部 深月だな。そしてあの男が物部 悠……んっ？あの葉っぱは？」

亮は地面から生えた葉っぱを見つける。そして悠は葉っぱに話しかけている。

（なるほど、あれが”緑”のユグドラシルだな。そういえばここで悠と取引するんだったな。さて、どうなるか）

すると悠は深月の前に立ち、上位元素（ダークマター）を生成し、巨大な大砲を創り出した。

「対竜兵装 マルドユーク!!!」

（あれが対竜兵装 マルドユークか……すごい気を感じるぞ！）

「砲撃（ファイア）!!!」

悠は大砲を打ち、ヘカトンケイルを消滅させた。悠はそのまま倒れた。体力を回復させるために悠に近づこうとするが、沢山の人の気配を感じ取った。

（ニブルか。仕方ない、逃げるか。）

そう思い、亮は展望台を後にした。

亮は太平洋の無人島におり、杖で歪みを調べていた。

「今度の歪みはイギリスか……近くにニブルの基地があるが、透明化すればいいか。」

杖で確認すると急に光り出した。

「通信か……はい、大島です」

通信の相手は第一世界の世界神 河本義晴である。

「亮、急に悪いな。実は一週間後に会議が入った」

「分かった。じゃあ明後日な」  
「そう言って亮は通信を切ってイギリスに向かった。」

## V S 紫のクラーケン

カリブ海にあるイギリスの領地 セントマーティン島、二十年以上も前にドラゴンが現れたことでニブルの基地となった。作戦司令室に座っているのは基地長のホープ准将、彼はコーヒーを飲みながらパソコンでドラゴンの資料を見ていた。

(ん、甚大な被害が出てるね。どうしたものか)

彼はコーヒーカップを置き、新たな資料を見た。

(この者が”青”のヘカトンケイルを倒した少年だな。あれから姿を見せないがどうしているのだ？イタリアのインド洋に現れてドラゴンを倒し、そのまま去って行った。……)

ホープ准将は口を手を加えて考えていた。

突如扉からニブルの将校が慌てて来た。

「ホープ准将！一大事です！」

「どうしたアラン大尉？何事だ？」

「大変です！」紫のクラーケンがこつちに向かって来ます」

「なんだと!？」

ホープは思わず立ち上がった。それもそのはず、”紫”のクラーケンはセントマーティン島を訪れるのは二回目だからである。

一度目は二十年前に現れ、この島を半壊して去って行った。それ以降、セントマーティンはニブルの基地となった。その怪物が再びこの島に来るのだから驚くのは当然だろう。

「基地内の兵士達に伝えろ。作戦司令室に集めろと。そして軍艦の準備をしろ！」

ホープ准将はアラン大尉に指示を出した。

「ハッ！」ビシッ

アランは敬礼し、駆け足で作戦司令室を後にした。ホープはコーヒーカップとパソコンを手にして基地長室に向かった。

(まさか”紫”のクラーケンが再びここに来るとは……目にも見せてやる！)

ホープそう思い、顔を凄ませた。



セントマーティン島の浜辺にある洞窟は大島 亮がいた。

「この辺りだけど、もっと奥か？」

そう呟いて、奥に進んだ。

彼はこの島に空間の歪みを感じて来ていた。

（しかしこの島は杖で調べたが、”紫”のクラーケンに半壊させられてからニブルの基地になったのか。住民達は今、ロンドンで暮らしているそうだしな。基地を作るだけじゃなくて町を元に戻せばいいのに）ハアゝ

亮は息を漏らして、思っていた。すると歪みを見つけた。

「今までよりちっちゃいな」

そう言い、歪みに神の気を注いだ。神の気を注がれたことによつて、歪みはなくなった。

「仕事はこれで完了つと。あとはニブルの奴らに見つからないように逃げなきゃな」

そう言つて亮は身体を透明にし洞窟を出て行った。

「あと会議まであと六日か。まだ時間はあるな」

亮は杖でスケジュールを確認した。そこには仕事内容が書かれていた。洞窟から出ると海の向こうに気配を感じる。

「なんだ？この気は？」

亮は杖で気配の感じる場所を見た。すると、クラーケンがこちらに向かって来ていた。

「色が紫？まさか”紫”のクラーケンか？」

そう言うと、杖で”紫”のクラーケンの資料を映し出した。

紫のクラーケン。”黒”のヴリトラや”青”のヘカトンケイル同様、突如姿を現したドラゴンの一体である。クラーケンはカリブ海をテリトリーにして島に行つては町を荒らしているドラゴンだ。

クラークの能力は絶対矛盾（アブソリュート）で、触手はミスリルできており、目から放たれる反物質弾はどんなものでも破壊し、防御を固めても破壊される能力。

（なるほど。そういうえばそうだったな。これは超サイヤ人で迎え撃つか）

そう思うと基地の方から警報がなり、基地を見た。

「緊急警報、緊急警報、紫のクラークン!! 兵士達は軍艦の準備を! 将校は作戦司令室に召集を!」

ニブルも気づき、戦闘態勢に入っているようだ。

「ニブルも大変だな。ここは奴らよりも先に仕留めるか」

亮は再び杖を見てクラークンが映った。

「結構早いな。ニブルの連中にはバレるが仕方ない。迎え撃つか」

亮は杖を仕舞い、クラークンのいる場所に向かった。

◇

「諸君!ここでクラークンを仕留めるぞ!いいな!」

「ハッ!!!」

作戦司令室ではホープ准将が指示を出していた。ホープはなんとんでもクラークンを仕留め、ニブルの功績を上げようと考えていた。

「しかし大丈夫でしょうか?クラークンには全てを破壊するミスリルの触手と反物質弾を放ちます。我々に太刀打ちできますか?」

アラン大尉は不安を口にした。

「心配はないよ。奴は一体だけだ。数ではこちらが有利だ!隙を ついて攻撃すれば奴にも効くはずだ!」

逆にホープ准将は自身があった。彼はクラークンを倒すべく、データを集め、人員と軍艦を増やしていたからだ。

彼の両親は二十四年前、クラーケンを倒すため、立ち向かったが、敵わず死んでしまった。若かった彼は復讐のため、ニブルに入り、今の地位を手に入れた。

(いつでも来い！紫のクラーケン!!)

ホープ准将は闘志を燃やしていた。すると作戦司令室に一人の将校が入ってきた。

「報告します。准将、準備ができました」

「いよいよか！よし！向かうぞ！」

「ハッ!!」

ホープ准将はアラン大尉と将校とともに軍艦へ向かって。すると、

『ズウウウウウウウン!!!』

海の向こうから爆発音が聞こえた。

ホープ達は海の向こうを見た。

「何が起きた!?!」

さらに通信機から連絡が入った。

「どうした!?!」

『准将！大変です！紫のクラーケンが何者かによって攻撃されてます！』

「なんだと!!」

ホープ准将は驚いた。それもそのはず。ドラゴンは厄介な相手であり、倒すどころか傷をつけることすら不可能とされ生き物だ。それを攻撃するなど軍隊以外考えられなかった。

「そいつはどここの船だ?」

『船ではありません！人です！人が手からレーザーのようなものを放って攻撃しております。しかもその者は宙を浮いています!!』

「なんだと!?!どういうことだ?」

ホープ准将やアラン大尉達は驚いていた。するとホープはあはることに気づく。

(まさかあの男か？二年前へカトンケイルを倒したあの男なのか?)

ホープは考え込んでしまい、しばらくして通信機に向けて軍人に指示を出す。

「分かったわたしも行く。準備をしろ」

『ハッ!!』

ホープ准将は通信を切った。

「お前たち！クラークンのところへ向かうぞ!!」

「ハッ」ビシッ

アラン大尉と共に軍艦へ向かった。



数分前：亮は”紫”クラークンを見つけた。

「見つけたぞ!紫”のクラークン!」

亮は気を上げ、片手をクラークンのほうに向け、気功波を溜めた。

”紫”のクラークンは何かに気づき、その場に止まった。

そして亮は気功波をクラークンに打ち込み、爆発が起きた。

ところがクラークンはミスリルの触手で防いでいた。

「やっぱり超サイヤ人にならないといけないようだな」

亮は気をさらに上げた。すると海は大きな波を起こし、亮の周りは揺れていた。そして力を解放した。

「ハア~~~~~!!!」

亮は超サイヤ人になった。髪の毛は金色になり、力が溢れていた。

クラークンはミスリルの触手で攻撃をしたが亮の気の壁により、弾き返された。さらに目から反物質弾を繰り出したが、亮は気円斬で真っ二つにし、そのまま触手を二本切った。

『ウオオオオオオオオオオン!!!』

”紫”のクラークンは悲鳴を上げた。



「くらえっ!!」

亮はさらに気功波で攻撃して、クラークンは傷ついていた。それもそのはず、超サイヤ人は戦闘力を何倍にも上げる変身であるため、パワーやスピード、そして気功波も威力が上がっている。クラークンは亮を見るとすぐに海に潜って行った。クラークンは敵わないと知り、逃げたのだ。

亮はクラークンの後を追わなかった。彼は逃げて行く相手は無闇に追わないようにしている。それがたとえドラゴンでも。

(逃げたか、当分は現れないだろう…っん?)

亮はニブルの軍艦を見つけた。

(見られたな。早く逃げるか)

亮は杖を取り出し、空中に突き、光となって神界に向かった。

◇

「なんて奴だ。クラークンを圧倒するとは……」

ホープ准将は映像で亮と”紫”のクラークンの戦いを見ていた。

「ホープ准将、どうなさいますか?」

「至急にクラークンの触手を確保せよ。アスガルへはわたしが連絡する!」

「ハッ!!」

ホープ准将は指示を出し、軍艦の何隻かはクラークンの触手を確保しに向かい、他は基地に戻っていった。

(しかしあの少年は何者なんだ? まあ我々の敵では無いとは思うが…そのうち人間に敵意を向けるのでは無いだろうか?)

ホープ准将は悩んでいた。

そして今回の事もアスガルやミッドガル、そして世界の各国首脳達に知れ渡った。

## 神界の神々 3

ここは”神界”にある神々達の仕事場である”天上塔”。その十一階にある世界神専用の休憩室である。あと一時間で”世界神”達の会議が始まるうとしていた。それまで四人の神が休憩していた。一神（ひとり）は大島 亮と第七世界の”世界神” 井上八重。あとの二神（ふたり）は喧嘩をしている。

「抹茶が一番美味しいの！」

「いいえ！紅茶ですわ！」

紅茶と抹茶どちらが美味なのか口論していた。

「アタイは抹茶が一番美味しいの！」

見た目がギャルのこの人はレイチエル・スミス。第九世界の”世界神”で、神々の中で武器の使い手と言われている。自我が激しい神である。

「いいえ、紅茶ですわ！この上品な香りこそ美味しいのですわ！」  
髪が長く大きなりボンで結んだお嬢様口調の女性が第十一世界の”世界神”、小早川 恵であり、”世界神”最年長で戦闘経験は神々の中で長い神である。神歴は一億年を超えている。

二神（ふたり）は普段、仲が良いのに喧嘩するのは初めて見た。  
「亮ちゃん、なんとかして〜」ギョ

この神が亮にちよつかいをかけてくる第七世界の”世界神”、井上八重である。

「八重さん抱きつかないでください。苦しいですよ」

この人は大胆でいつも亮にハグしてくる。八重は亮に好意を抱いているため、こうやってアピールしているが気付いてくれないのだ！

「いいじゃない。それともイヤ？」むにゅ

「……」

腕に八重の胸が当たり、亮は顔を赤くした。彼は平常心を保とうとするが、八重の顔が近くてさらに真っ赤になる。

「八重ちゃんに亮くん、仲が良いのは分かるけど他でやってくれない？」

レイチエルがニヤケながら話しかけてきた。

「そつ、そんな事ありませんよー！」

「そうには見えないけど？」

「若いつて良いですわね。二神（ふたり）とも付き合ってますの？」

レイチエルに続いて恵もからかってきた。

「付き合ってますんよ」

「ん〜……」

亮の横で八重はほっぺを膨らませた

「八重さん、どうしました？」

「……別に」プイツ

八重は不機嫌になり、顔を晒した。

（亮くんって本当に鈍いですね、師匠）ボソボソ

（そうですね。どうしてこの神（ひと）は気づかないのでしょうか？）

二神（ふたり）は小声で話していた。ちなみに恵はレイチエルの師匠で、武術と仕事を教えた神であり、お互い師匠と弟子の関係である。

すると、ガチャツと音を立てて”世界神”の一神（ひとり）が入ってきた。

「お疲れ様〜」

入ってきたのは第三世界の”世界神”、ルドルフ・ワタソン。

”世界神”一の声量の持ち主で、聞いたものは運動神経を一時的に麻痺させることができる（ドラゴンボール超の破壊神ラムーシの能力）。

「亮に八重ちゃん、イチャイチャするなら家でやってくれないか？」

「イチャついてません！」

「……その状態で？」

亮は言い返せなくなった。八重は彼の腕に抱きついた状態で、

誤解を解けなかった。

「それより恵先輩、資料はまとめておきました」

「あら、ありがとう、こちらもまとめておきましたわ。ルドルフさん」

ルドルフと恵はお互いの世界の資料を手伝っていた。ルドルフは男子の中では最年長だが、恵と比べると千歳も歳下である。

「他の”世界神”は揃ってるからあとはワシらだけですよ」

「早いですわね」

「それじゃあ向かいますか」

「そうですね。向かいましょう」

「……はい」

八重はまだ不機嫌だった。



「それでは次の議題は人間の生存率についてです。では第一世界の……」

神々が会議をするのは年に数回であり、二十階の第二会議室で行われる。”絶対神”ゴッドは出席しないが、”神官王”が議長として進める。議題は各世界の文明状況や、人間の様子についてである。

神は人間と関わったり、正体を知られても構わないので何神（なんにん）かの”世界神”は文明を発展させたりしている。

会議は続き、一時間後に終わりになった。

「それでは会議を終わります。皆さん、お疲れ様です」

”神官王”の挨拶で会議は終わり、みんなは帰る支度をした。会議がある日は仕事を早く終わらせる神がほとんどであるが、エドワードは残っていた。なんでもこれから自分の世界にいる自然の神々と会議があるらしく残っていた。

亮も帰る支度をして、会議室を後にした。

「亮ちゃん、お疲れ」

亮に続いて八重も会議室を出て、鞆の中からお茶の入ったペットボトルを差し出した。

「ありがとう八重さん」

ペットボトルを受け取り、その場で口をつけて飲んだ。

「亮ちゃんはこれからどうするの?」

「僕はホテルに泊まるよ。上の階の神(ひと)がうるさくて眠れないんだ」

亮の止まっているのは四階で、その上はパトリックが住んでいるが、最近奥さんの京子と喧嘩してるみたいで、声が響いているのだ。すると八重は頬を赤く染めて恥ずかしそうに言う。

「……じゃあ……わたしの家に泊まる?」

「……え?」

八重の言葉を聞いた亮は一瞬頭が真っ白になった。

「ええ〜八重さんの部屋!」

流石に驚いた。女性から家に誘われたのは初めてだからである。驚くのは当然である。

「もしかして……イヤ?」

「うっ、嫌ってわけじゃないけど……」

断れる雰囲気じゃなかった。気を使ってくれてるのに断るのは悪いと思った。

「よっ、よろしくお願いします」

「こっ、こちらこそ」

亮は数日間、八重の家に住むことになった。

亮の住んでいるマンションの四軒先に八重の家がある。八重は亮を家に入れ、一緒に食事を済ませ、亮はテレビを見ていた。

(……落ち着かないな)

亮は女性の家上がるのは初めてで、戸惑っていた。

「亮ちゃん、お風呂沸いたからの先入っていいよ」

「あつ、ありがとう……」

そう言つて脱衣所に向かった。服を脱ぎ、まずシャワーで髪と身体を洗い、それから風呂に浸かった。

(八重さんに感謝しないとなく)

亮は八重に感謝していた。長く使つてると迷惑をかけると思ひ、一分もしないうちに風呂場を出ようとした。すると突然ドアが開き、バスタオルを巻いた八重が入ってきた。

「亮ちゃん、一緒にお風呂に入らな……」

「……え？」

亮は固まった。更に八重は亮の下半身を見てしまい、二神(ふたり)の声が響き渡った。

それからパトリック夫婦の喧嘩は終わり、亮は自分の家に戻つたが、数ヶ月は会話が出来なくなった二神(ふたり)であった。

## 設定

レイチエル・スミス 159〜164歳

趣味 ダイビング 特技 車の運転

一人称 アタイ

第9世界の世界神。自我が激しく、神々の中では武器の使い手である。

抹茶が大好きで、師匠の恵とはたまに喧嘩している。

小早川 恵 3億4785〜3億4790歳

趣味 ティータイム 特技 家庭菜園

一人称 わたくし

第11世界の世界神。世界神の中で最年長で、レイチエルの師匠である。

戦闘経験は世界神一だが、ここ10000年はトレーニングを

してないので、スタミナがない。

60年前、第12世界の先代世界神と一緒にイギリスのロンドンに来たことがあり、一緒に紅茶を飲んだのがキツカケで毎日飲んでいるが、弟子のレイチェルとはたまに喧嘩している。

ルドルフ・ワタソン      3億3785〜3億3790歳

趣味      マージャン      特技      ゴルフ

一人称      ワシ

第3世界の世界神。世界神の中で恵の次に古株な神。神の中で12の世界一の声量の持ち主で、雄叫びをあげると、聞いたものは運動神経を麻痺し、世界神でも立っているのがやつとである。物事をはつきり言う。

## バトルロイヤル

この真つ黒な世界は虚無の世界。時間も空間も無く、永遠と虚無に満ちた世界。(ドラゴンボール超の無の会です) ”世界神” 同士が全力で戦うときはここにきている。

亮は週に四日ここに来て特訓をしている。一番多く戦っているのは義晴で二番目は弥生である。

さらに武舞台と観覧席がある。この武舞台は”絶対神”ゴツドが作り出したもので”世界神”がどんなに本気を出しても傷一つつかない(カチカチン鋼よりもっと硬いです)。

武舞台の上には十二の世界の”世界神”が全員集合していた。五年に一度ある大会で、どの”世界神”が一番強いかを決める大会で、優勝するとボーナスがもらえ、負ければ給料を三割カットされる。

(なるほど、力の大会と天下一武道会を組み合わせたものか)

亮はストレッチをしていた。ちなみに五年に一度はドラゴンボールで悟空が最初に出場した時の二十一回で、二十二回目以降は三年に一度になる。

「亮さんは初めてでしたね」

話しかけてきたのは眼鏡をかけた中学生くらいの神。彼は第五世界の”世界神”、生駒 八代である。防御力なら、”世界神”最強と言われている。生真面目で、だらしない神達に説教している。

「八代さんは何回目ですか？」

亮は質問をする。

「今回で五十回目ですよ」

「相変わらず真面目すぎるなく八代」

亮と八代が話しかけていると髪がボサボサした神が現れた。

彼はグラン・ロック、第十世界の”世界神”である。仕事はある程度しかしない自由人で、八代からはいつも説教されている神である。

「グラン、何度も言っているが、髪がボサボサだ。ちゃんとセットしなさい」



「別にいいじゃないか？ホントうるさい奴だな」

この二神（ふたり）は同期だが、性格の違いでいがみ合っている（特に八代が）。

すると上空から“神官王”が現れた。

「皆さん。お揃いのようなですね、それでは大会のルールを説明します」

“神官王”は手のひらから光を出し、スクリーンになり、映像が流れた。

「制限時間は30分、時間は私がお伝えします。術や能力以外の武器、破壊のエネルギーの使用を禁止します。あなた方は神ですが、不死身ではありませんので相手を死亡させてはいけません。武舞台から相手を落としてください。戦闘不能になっても武舞台にいる限り負けにはなりません。落とされたら、あちらの観覧席に行くようにしてあります。空を浮遊する技は使えなくしております。それでは準備をして下さい」

“神官王”はスクリーンを消し、“世界神”に指示を出した。全員準備が完了しているようでもう既に戦闘態勢に入っている。

「もう準備はできているようですね」

“神官王”は手を挙げた。

「世界神武道大会……初め!!!」

“神官王”の合図とともに世界神達は戦い始めた。

静寂な虚無の世界が戦場と化した。

あちこちで爆発が起き、“世界神”達はあちこちで戦闘を繰り広げている。

亮はアンジェリカと戦っていた。アンジェリカは“世界神”の中で洞察力が優れている。

亮は超サイヤ人ブルーになっていた。亮は気功波を繰り出したが、アンジェリカは魔術でシールドを作り、攻撃を防いだ。

「亮さん、腕を上げましたね」

「アンジェリカさんこそ、相変わらず強いですね。」

アンジェリカは魔術士で色んな魔術を扱う達人だ。どんな攻撃をしていくのかは分からない。

「そろそろアタシも本気を出しますよ」

アンジェリカはそう言って呪文を唱えた。するとアンジェリカは変化して、ケルベロスになった。

「これはアタシが考えた術ですよ。召喚術とは違って身体能力を極限以上に上がりますよ」

アンジェリカは三つの口から火を吹いた。亮はジャンプをし、上から悟空の得意技、かめはめ波を繰り出した。

「かゝめゝはゝめゝ波!!」

アンジェリカは元の姿に戻り攻撃を避けた。アンジェリカはすかさず氷の槍を無数に出し、亮に向けて攻撃した。

亮は両手を氷の槍に向け、気を高めた。

「ファイナルフラッシュ!!!」

ベジータの技で氷の槍は消滅した。

アンジェリカは氷の壁を造りだし、ファイナルフラッシュを防いだ。



その頃、八代とグランが戦っていた。

「八代くやるな」

「グランこそ、前より強くなってるな」

グランはハンマーを作り出し、八代に振り下ろした。八代はシールドを貼り、受け止めた。

グランは“世界神”の中で物資や道具を一瞬で作り出すことができる。

八代はシールドを消し、レーザービームを放った。グランはハンマーで受け止めた。

『ウオオオオオオオオオオオン!!』

突如、大きな雄叫びが聞こえた。すると”世界神”の動きが止まった。

その正体はルドルフの雄叫びだった。”世界神”一の音量を持つルドルフが叫ぶと聞いたものは一時的に運動神経を麻痺させる。人間レベルなら気絶し、一週間は目を覚まず、”世界神”ですら立っているのがやっとである。その隙にルドルフはジャンプをし、巨大なエネルギー玉を武舞台に向けて放った。

武舞台全体に爆発が起き、世界神のほとんどが倒れていた。ルドルフはドヤ顔をした。

すると背後から衝撃が走った。ルドルフは武舞台に叩き落とされた。

ルドルフの背後から蹴りを入れたのは河本 義晴、足捌きは神々の中で最強と言われている。

「隙を見せたなルドルフ先輩!」

義晴は宙に浮いていた。義晴はONE PIECEのサンジの足技とCP9六式、覇気を使える。六式の月歩で空を蹴っていた。

すると下から気功波が飛んできた。攻撃をしてきたのは亮で、義晴は間一髪避けた。すると義晴の前にエドワードが急に現れて、パンチを繰り出し、義晴は飛ばされたが、月歩で落下を防いだ。

「やりましたね、エドワードさん」

「隙を見せた河本ちゃんが悪いね」

二神（ふたり）はその場で戦い始めた。すると、横から

レイチエルが入ってきて、攻撃を仕掛けた。

「アタイも混ぜてくれない?」

「レイチエルさんか……厄介だな」

「まあ仕方ないか……」

レイチエルは気を練り上げて剣を作っていた。三神（さん）は戦闘を始めた。レイチエルは剣で切り掛かり、エドワードは瞬間移動で避け、義晴は蹴りで攻撃を防いだ。

エドワードは離れたところから気功波を繰り出した。気功波

は二神（ふたり）に直撃し、エドワードのほうを見たが、姿は見えない。瞬間移動で逃げたようだ。



大会が始まってから十分が経過した。場外付近には弥生とパトリックが戦っており、パトリックが不利だった。

「パトリックくん、これで最後よ！」

弥生はパンチを繰り出したがパトリックは弥生の腕を掴み、場外に落とした。弥生は気功波を下に繰り出し、武舞台に戻ろうとしたが、パトリックはすかさず弥生に向けて気功波を放った。

弥生はパトリックの気功波を喰らい、場外に落ち、観覧席に瞬間移動された。

「第二世界 矢島 弥生さん、脱落です」

パトリックはガッツポーズを取っていた。今まで勝てなかった相手に勝ったからだ。すると背後から、

「ビックバンアタック!!!」

亮が攻撃をして、パトリックは落ちた。

「第八世界 パトリック・ホワイトさん、脱落です」

パトリックは観覧席に瞬間移動され、亮に文句を言った。

「卑怯だぞ！背後を狙うなんて！」

「バトルロイヤルだから仕方ないでしょ」

亮は反論し、その場を去った。

その頃、八重はアンジェリカと戦っていた。アンジェリカは雷を繰り出した。すると雷は八重の体をすり抜けた。

八重はヒットの時飛ばしを使うことができる。

「本当に便利な能力ですね。八重さん」

「アンジェリカこそ、私よりその魔術のほうが便利じゃない」

八重は時飛ばしで時間を飛ばし、パンチしたが防がれた。するとアンジェリカは水の魔法を使い、地面にかけた。そして雷撃を繰り出した。

「サンダーブレイク!!」

電撃は武舞台全体に行き渡って八重を含めて数名の”世界神”は浴びて麻痺した。

「例え時飛ばしでもこれならどうかしら?」

「……やりますね……けど……これならどうですか!」

八重はアンジェリカにパンチをした。しかしそれは透明の気弾で、人体に喰らい、アンジェリカは膝をついた。

「なん……ですか?……それは……」

「残念だったね。これで終わりよ!」

八重は気功波を放った。アンジェリカは場外に落ちた。

「第六世界 アンジェリカ・ブラックさん、脱落です」

アンジェリカは観覧席に瞬間移動された。

「あと一歩だったのに」

アンジェリカは悔しがっていた。

八重はすでに戦闘を始めていた。相手はグランだ。グランは槍を創り出して八重に突いたが八重は時飛ばしで異空間に逃げ込み、そこから透明の気弾を放った。

グランは察知して、気を上げて弾き返した。

「八重ちゃんやるね、だけどまだまだだな!」

「……」

八重は苦戦していた。グランは時飛ばしに対応してきて、攻撃を繰り出していた。

グランは大砲を作り、八重に向けて打った。

「喰らえ! 砲撃 (ファイア)」

グランは気の砲弾を打ち、八重は避けた。するとグランは大砲を捨て、八重に向かってパンチをしてきた。八重は腕で防御した。



八重とグランが戦っている横には恵とルドルフが戦っていた。

「やりますわね！ルドルフさん！」

「恵先輩もやりますね」

二神（ふたり）は気功波を繰り出し合っていた。するとでかい  
気を感じ、横を見ると気の砲弾がきた。

「!!!」

二神（ふたり）はグランの放った大砲に気づいた。

ルドルフは気の砲弾を受け止めた。すると上から恵が気功波  
を打ってきた。

ルドルフは気を高め、二つの気功波を弾き返した。そして恵み  
に向かつて気功波を打った！

「クラッシュ!!!」

「!!!」

恵は受け止めた。すると、ルドルフは何発も気弾を放った。恵  
は耐えきれなくなり、高速で逃げた。

「逃がしませんよ！」

ルドルフは恵を追った。すると地面が爆発した。

恵は地面に目に見えない気弾を仕込んでおり、ルドルフが追っ  
てくると爆発するようになっていた。

ルドルフは爆発に巻き込まれ、場外付近にまで飛んで行った。

「深追いは禁物よ」

恵は気弾を放ち、ルドルフは場外に落ちた。

「第三世界 ルドルフ・ワタソンさん、脱落です」

恵は気候波を武舞台全体に放った。”世界神”達は気功波を  
防いでいた。その隙に恵は義晴に蹴りを喰らわせたが、義晴は蹴りで  
防御した。

「俺に蹴りで攻撃するとは、やりますね先輩！」

「まあね！」

二神（ふたり）は互角に渡っていた。

試合が始まってから半分が過ぎようとしていた。武舞台中央には八代と亮、そしてレイチエルが三つ巴で戦っていた。

「流石はお二神（ふたり）ですね！」

「当然です！」

「この戦い、絶対に負けられない」

八代は気弾を放ち、レイチエルは弓矢を創り上げ、矢を引いた。気弾と矢は直撃して爆発し、亮はレイチエルに向かって気功波を打ち続けた。

亮は超サイヤ人2から超サイヤ人ゴッドになり、気弾を繰り出した。

レイチエルはシールドを貼り、攻撃を防いだ。

八代はレイチエルの背後に回り、攻撃をした。

レイチエルはシールドを解除して、防御した。

亮は気を高め、かめはめ波の準備をした。

二神（ふたり）は戦い続けていた。

（亮さんめ、俺たちの隙を狙ってるな）

（そんなんであタイ達に通うすると思ってるの？）

亮は気を高め、気弾を創った。

「か〜め〜は〜め〜……」

「させるか〜!!!」

二神（ふたり）は亮に向かって気弾を放った。すりと気弾は亮の体をすり抜けた。

「何っ!!!」

二神（ふたり）は驚いた。周りを見渡してもいなかった。すると上からでかい気を感じた。

「波〜〜!!!」

亮は空からかめはめ波を放ち、レイチエルと八代はまともに喰らい、場外に落ちた。

「第五世界の生駒 八代さん。 第九世界のレイチエル・スミスさん、脱落です」

八代とレイチエルは観覧席に瞬間移動させられた

「まさか残像拳を使うとは……亮さんも腕を上げましたね」

「してやられたわ。アタイもまだまだだね」

二神（ふたり）は亮に感心していた。

神官王は時間を教えた。

「制限時間、後十分です」

亮はグランと戦い始めると残り時間を耳にした。

「後十分かく。それじゃあ本気出すか！」

グランは気を上げ、亮に向かって気功波を放った。



八重はエドワードと戦っていた。戦況は八重が優勢で、エドワードは苦戦していた。

「エドワード先輩、終わりですよ！」

「いいやまだだよ、八重ちゃん」

二神（ふたり）は体術で戦っていた。

八重はエドワードの腹部にパンチし、透明の気弾で吹き飛ばした。

エドワードはそのまま場外に落ちた。

「第四世界 エドワード・タッチさん、脱落です」

八重は周りを見渡した。

中央には亮とグランが戦っており、場外付近には義晴と恵が戦っていた。

亮達の方に向かった。

恵は気候波を繰り出したが、義晴は蹴りで弾き返した。義晴は



脚に力を込めて、気弾を放った。

「喰らえ、シャイニングブラスタ―!!」

義晴はバジルの技を放った。恵は気候波を受け止めたが、流石に”世界神”達と戦い続けているため、体力は少なかった。

「もうプラス、ワンダー!!!」

義晴はシャイニングブラスタ―をもう一発放った。恵は耐えきれず、場外に落ちた。

「第十一世界 小早川 恵さん、脱落です。」

義晴は落ちたのを見届け、亮達のところに向かった。

グランは機関銃を創り、気の実弾を放った。亮は超サイヤ人ブルーになり、全て避け、両手に気を集中させた。そして両手を前に出して叫んだ。

「魔封波――!!!」

彼は武天老師の魔封波を放ち、グランの動きを止めた。

「なんだこれは!? 動けないぞ!」

亮はグランを持ち上げ、場外に落とした。

「第十世界 グラン・ロックさん、脱落です」

亮は気を解除した。すると背後から声がした。

「やっぱり残ったか、亮」

「やるわね亮ちゃん」

後ろを振り向くと、八重と義晴がいた。残りはこの三神（さん）にん）である。

亮は超サイヤ人ブルーになり、警戒した。

「八重さんに義晴か……かかってこい!」

「おう!」

「負けないよ!」

亮達は戦い始めた。亮は両手から気弾を放ち、義晴は六式の嵐脚を繰り出した。八重は時飛ばしと透明の気弾を放って攻撃した。

”神官王”が時間を知らせてきた。

「制限時間、残り一分です」

八重と義晴の攻撃が激しくなった。どうやら焦っているようだ。

「もうすぐ時間か……」

「仕方ない、決着を付けるぞ！」

「望むところよ！」

義晴は時間を気にし、亮は叫び、八重はそれに答えた。

亮は気を上げた。

「界王拳……!!!」

亮は超サイヤ人ブルーから界王拳を上乗せし、かめはめ波の準備をした。

義晴は脚に気を集中させ、シャイニングブラスターの何十倍もでかい気弾を創った。

八重は両手に大量の気を溜め込んだ。

そして三神（さんりん）は同時に攻撃した。

「かめはめ波……!!!」

「特大のシャイニングブラスター……!!!」

「ハアアア……!!!」

亮達の気弾が爆発し、虚無の世界全体を巻き込んだ。

”神官王”は観覧席に移動し、シールドを貼った。それと同時に時間が30分過ぎた。

”神官王”は爆風を払いのけるとそこには亮と義晴、八重が立っていた。

両者の攻撃は互角で誰も場外には落ちなかった。

「そこまでです。河本 義晴さん、井上 八重さん、そして大島 亮さん、共に引き分けです」

”神官王”の言葉を聞き、三神（さんりん）は同時に倒れた。

”神官王”は亮達の側に行き、体力を回復させ、ボロボロになった服を元通りにした。

こうして世界神武道大会は幕を閉じた。ちなみにボーナスは亮と八重、義晴の三等分に配られた。

設定

生駒 八代 250〜255歳

趣味 そろばん 特技 書類仕事

生真面目で、だらしないグランとは対立している。 防御力は世界

神1を誇る。

グラン・ロック 249〜254歳

趣味 ギャンブル 特技 乗馬

だらしなく、八代に説教されている。エドワードと仲が良い。

物を創り出す早さは世界神の中で最も早い。

## ニブル所属の悠

大島 亮が世界神になって4年が経っていた。その間彼は下界で神としての仕事をしたり、ドラゴンと戦っていた。この4年間で青のヘカトンケイルを2回倒し、紫のクラーケンを追い詰めた。

そのおかげでアスガルやニブル、ミッドガル、そして世界各国の首脳達に存在が知れ渡った。

神は人間に存在を知られるのは特に問題はないが、いつ彼らが敵意を向けてくるのか分からないのでほとんどの神は姿は現れても目の前で力を使おうとはしない。

しかし、文明を豊かにするため、神の存在を知る者はどこの世界もいる。その場合、神に貢ぎ物を差し出すのが暗黙の了解とされている。

大島 亮が管理している第12世界は神の存在は空想上の存在とされているため、亮は少し警戒をしている。

そして亮はカナダの山奥にいた。歪みが大きくなっていることに気づいた彼は現場に向かい、空間の歪みに神の気を注ぎ、修正した。

「なんとか治ったな。今までに比べると一番大きかったな」

亮は杖を突き、歪みがある場所を調べた。するとある荒野の映像が映った。

「次はアメリカか……よし、向かうか」

亮は杖を仕舞い、誰もいないことを確認して、アメリカに向かった。

その途中、防寒着を着ている人間達を見かけて止まった。彼らはどうやら、車のガソリンが切れて困っていた。

亮はガソリンを作り出し、彼らの車に注いだ。すると一人の男が騒ぎ始めた。どうやらガソリンのメーターが急に満タンなるところを見てたそうだ。

亮はすぐにその場を去り、アメリカに向かった。また余計なことをしてしまったと後悔しているようだ。

すると杖が現れた。通信が入っているようで、亮はその場で止まり、連絡を取った。映像には第2世界の世界神、矢島 弥生だった。

「弥生さんどうしました？」

亮は弥生に要件を聴く。

「亮くん、お願いがあるの。そっちの仕事が終わったら第2世界に来て欲しいのか。大量の魔獣達が国を破壊してるの。他の世界神達に連絡してるけど、全然出なくて」

「分かりました！すぐ向かいます」

「ありがとう！じゃあお願いね。」

弥生は通信を切り、亮はすぐに第2世界に向かった。

たまに他の世界での仕事が入ってくる時がある。

本来なら、弥生一人でなんとかなる案件だが、世界神はその気になれば世界を滅ぼすことができるため、こうやって他の世界から頼んでくる時がある。

もし、世界を滅ぼしてしまえば、絶対神ゴッドの怒りを買って、世界を一瞬で消されるのは明白。そうならないためにも世界神は虚無の世界で修行をしている。

亮はアメリカにある歪みは戻ってからすれば良いと考え、第2世界に向かったのだ。



ここはアメリカのフロリダにある要塞。ここはドラゴン信仰者団体がアジトにしている場所である。

24年前、ドラゴンが突如現れたことである人はドラゴンを崇める団体とドラゴンを敵として排除しようとする団体が立ち上がった。

ドラゴンを崇める団体は竜災のあった国に入り込み、テロ行為

を起こし、活動している。

ドラゴンを排除しようとする団体はドラゴン排斥者団体と呼ばれ、個人で活動するところもあれば、ニブルに取り込まれることもある。

ここはドラゴン信仰者団体　ワイバーンの総本部である。ここより少し離れた場所にニブルの軍隊がいた。

しかも少年9人だった。彼らはニブルのロキ・ヨツンハイム少佐の直属の部隊　スレイプニルであり、Dとの戦闘を想定した特殊な部隊である。

今回の任務は、ドラゴン信仰者団体　ワイバーンを殲滅させることであり、ロキ少佐は今回の件をスレイプニルに任せようだ。

先頭にいるのはスレイプニルの隊長　物部　悠とその横にジャン・オンテルシアがいた。

「ジャン、見張りの兵はどうだ？」

「20人です、隊長。」

ジャンの目は常人より遙かに優れており、暗い場所でも人の姿が見えるのだ。

「分かった、他のみんなは？」

「既に潜入してます」

「よし、俺たちも行くぞ！」

「はい！」

悠とジャンは見張りの兵に見つからないよう、慎重に潜入していった。

ここはワイバーン総本部の教祖室、机に座ってダイヤを眺めている太った男は教祖のレッドブルー。彼は竜災に会った国に潜入し、金や宝石を奪っていた。そして奪ったダイヤを眺めていた。

「フッフ、なんと綺麗だ。また金が手に入ったぞ。これもドラゴン達のおかげだ。次はDを誘拐して宝石を創らせよう」

彼は上機嫌になり、ダイヤを置いた。すると警報が鳴った。

「何事だ？」

レッドブルーは席を立った。扉が開き、兵士が入って来た。

「教祖様大変です！ニブルが潜入して来ました！」

「何っ!!」

レッドブルーは驚き、両手を机に叩いた。

「こうも早く攻めてくるとは……戦闘準備だ！お前たち迎え撃て

！」

「ハッ」ビシッ

兵士は敬礼し、教祖室を後にした。

（さてと私は逃げる準備をしよう。私まで捕まるのは嫌だからな。）

レッドブルーは宝石を袋に詰め、非常階段に向かった。

◇

ワイバーンの本部は壊滅状態だった。スレイプニルによって兵士はほぼ全滅、数十分で殲滅させ、兵士達を捕らえたが、教祖 レッドブルーの姿はなかった。

悠は兵士の一人に聞いた。

「お前らの教祖はどこにいる？」

「しっ知らない」

兵士は答えた。その時、スレイプニルのオツテル・アクスがやってきた。

「隊長！非常階段を見つけました。おそらくここから逃げたと思われまます」

「分かった、お前達は援軍が来るまでここに居ろ。俺は奴を追う」

「「「「「ハッ」「「「「「ビシッ」

スレイプニルの隊員は敬礼し、悠は教祖の後を追った。

森の奥に教祖レッドブルーがいた。奴らもここまでは追ってこないと思っただのか、休んでいた。

(さてと、向こうに私の基地があつた筈だ。早く向かわねばー) レッドブルーは宝石の入った袋を持つとうとすると銃声が鳴つた。

「!!」

銃声のあつた方を見ると悠がいた。

「もう逃げられんぞー!」

「くっ……もう追って来るとは……仕方ない!」

レッドブルーは銃を取り出し、悠に向けた。すると茂みの向こうから

「やっと仕事が終わった。さてと帰るか……ん?」

「え?」

亮が現れた。亮は第2世界での仕事を終わらせ、歪みを修正し終え、森を出ようとしていると、この場所についた。

亮はレッドブルーと悠を見た。

(こいつは誰だ? 太っていて……金持ちか? そしてこいつは……そうか! こいつが悠だ!)

亮は悠に気づいた。するとレッドブルーは亮に近づき、銃を亮の頭に向けた。

「動くなよ小僧、少しでも動くところいつを打つからな」

「くっ……」

悠は銃を下ろした。人質を取られてはどうすることもできない。すると信じられない光景を見る。

亮は銃を掴み、へし折つたのだ。

「なっ!!」

悠とレッドブルーは驚いた。さらに亮はレッドブルーに三発パンチを入れ、彼は倒れた。

悠は驚きを隠せなかった。一見ひ弱に見える彼が銃をへし折り、腹部にパンチを喰らわせたのだ。



悠は話しかけた。

「すごいな……」

「そう？僕にとつては普通だよ。物部 悠」

「!!なんで俺の名前を!?!」

悠は驚き、身構えた。

「そんなに警戒しないでくれ。僕は2年前、君がヘカトンケイルを倒すところを目撃したからだよ」

「そっそうなのか？」

悠は少し警戒を解いた。

「ああ。何せ僕は神だからね」

「はっ?」

悠は訳がわからず、おかしな声を出した。

「僕は大島 亮、この世界を管理している神様だ！人は僕のことを世界神と呼ぶ」

そういうと、亮は気功波を作り出した。

これにも悠は驚いた！

「お前、もしかしてDなのか？」

質問すると亮は

「違うよ。僕はDじゃないよ。竜紋がないしね」

そういうと、気功波を消し、杖を取り出した。

「この世界は第12世界と呼ばれていてね、世界は全て12存在してるんだ。僕はこの世界を管理している神なんだ」

そう言つて杖地面に突くと、光が出て来て、スクリーンになり、地球の映像が流れる。

悠は唾然としていた。いきなり自分から神と名乗り、手から青い謎の物体を作り出したのだ。Dなら上位元素（ダークマター）を出せるが、色は黒に近いもので青い物体を作り出す人は初めて見た。

亮は人の気配を感じとつた。

（ニブルの奴らが来るか）

亮はそう思い、手から丸い通信機を作り出した。

「じゃあ僕は行くね。それとこれをあげるよ。いつでもいいから

連絡してくれ」

「わっ、分かった」

亮は通信機を差し出し、悠は受け取った。

「あと、ニブルの連中には言わないでね。神の存在を彼らが知ったら僕、狙われるかもしれないから。じゃあね」

「おっ、おい！」

亮は杖を地面に突け、光となって飛んでいった。

「大島 亮……何者なんだ？」

悠は通信機を握りしめて亮が飛んでいったところを見た。

## 神とデート 1

悠と会ってから半年が経った。あれから悠とは連絡を取り合い、神の存在を信じてもらい、親友になった。さらに悠は二年ほど前に起きた自身の秘密を教えてくれた。

ユグドラシルとの取引で自分の中に繋がっており、兵器をダウンロードするたびに記憶を失うことを知った。

僕が生きていた時は、そうだったと思い出すことがある。そういえばあれから十五巻を買ってなかったと思い、いつか買おうと先延ばしてしまふ。

話は戻すが、取引については協力はすると約束しているが、記憶のことまではなんともできない。

人間の記憶はいくら神でも戻すことはできない。仮にできたとしても、その人の身体に負担がかかり、いつか死んでしまうからだ。

僕にできるのは杖を使って過去を写し出すことだ。悠も納得してもらっている。

さらに、悠には僕の過去を話している。自分は他の世界の人間であることと、何年も前に死んで神になったこと、そしてこの世界を管理していることを信じてくれた。

それから僕達は連絡を取り合う仲になった。

「それでそっちは？」

「訓練ばかりだ。そっちはどうだ？」

僕は家に戻り、悠と連絡を取っている。

「こっちも仕事が忙しくて、休みがないよ。そっちの世界に行ったり来たりだよ」

僕は愚痴を漏らした。最近悠達のいる世界に歪みが大量に発生し、治しても他の場所で起きる。他の世界でも歪みが起きており、他の神達も大忙しだ。

今日も仕事で遅くなり、今ベットで休んでいる。時間は深夜の

1時、第12世界では朝の8時前である。

下界と神界とでは時間の流れが違い、下界での1分は神界では6時間である。ドラゴンボールに出てくる精神と時の部屋と同じである。

しかし日付は下界と同じで、どんなに時間が経っても365年で1年である。

そのため、僕は千年以上生きているが、下界ではまだ4年しか経っていない。そのため、歳は15歳である。

神界に住む神々は歳をとらないので見た目は変わらず、若いというのではない。

「そっちじゃ紫のクラーケンが討伐されたみたいだな」

「ああ。ミッドガルが倒したと聞いている」

1年半前、ミッドガルのDが倒したと噂されている。それを知ったのは昨日のことである。

原作通り、この世界のドラゴンは自分と適合するDと見染めることで、そのDを同種のドラゴンにしようとしている。

そのためミッドガルでは紫のクラーケンが自分と適合したDを同種のドラゴンに変え、竜伐隊は二体のクラーケンを討伐した。

「あくよかった。僕も少しは楽になったよ。それよりあれからユグドラシルとは取引をしたか？」

「いや、一度もしてない」

2年半前、悠はヘカトンケイルを倒すときにユグドラシルと取引をして以来、心の中にユグドラシルが繋がっているようだ。

「何度も言うが、取引だけは不用意にやるなよ」

「分かっている。いつも悪いな、それじゃ」

「おうー」

悠は通信を切った。杖を床に置き、天井を見上げる。

ユグドラシルは色んな植物とネットワークを広げているため、世界のあらゆる植物を消す必要がある。

僕なら簡単にできるが、それはしてはいけないと分かっている。そんなことをすれば、文明に大きく変化して、人間は生きていけ

なくなるからだ。

（方法があつたはずが思い出せない。まあいつか6巻を読み返してみるか）

そう思った僕は<sup>まぶた</sup>瞼を閉じて眠りにつく。

◇

あれから四ヶ月が経ち、仕事が大分減った。僕はデスクでここ半年の空間の歪みが起きた場所を書類にまとめている。

他の神達も、大分楽になったと口にはしている。

そういうえば、この一ヶ月間（下界での時間）八重さんを見てない。

井上八重さん。第7世界の世界神で、同い年だが僕より神歴は二年長い。

後で様子を見に行こうと思ひ、資料をまとめた。

すると杖が光り出した。通信が入ってきた。誰だろうと思ひ、出ると八重さんだった。

「亮ちゃん……」

元気がなかった。

「どうしましたか？」

僕が用件を聴くと、

「助……けて……死ぬ……」

「えっ!!」

思わず立ち上がった。

「今どこですか？」

「第12世界の……デンマークに……ある……コペン……ハーゲン」

「分かった。すぐ行くから。待ってて。」

僕は杖を持って天上塔を出て、第12世界に向かった。

数分でコペンハーゲンにつき、ビルの屋上で服を変え、八重さんの気を探す。

(よしー!見つけたぞー!)

裏路地に八重さんの気を感じ、向かった。しかし、疑問があった。

死にそうなのに気が小さくない。しかも減っていない。どうしてだろうと思っていると、八重さんを見つけ、裏路地に降りて八重さんに近づいた。

服は綺麗で、いつもと変わりなかったが、やつれていた。

「八重さん どうしました?」

僕は八重さんの体をさすった。

「亮……ちゃん……」

「八重さん、一体どうしたんですか?」

僕が事情を聞くと八重さんは、

「お腹が……空いて……力が出ない」

「……」

………つはっ

「お願い……食べ物……」

「それじゃあね。」

僕が心配して来たのにお腹が空いただけなんて、アホらしくなって去ろうとした。

「待って……行かないで……」

「ふう〜お腹いっぱい」

僕は近くのレストランで食事を奢っていた。

「全く、仕事中でもちゃんと食べてくださいよ」

八重さんは仕事になると食事を忘れるほど集中するのだ。

「ごめんね。最近下界での仕事が多くてつい……」

ちなみに八重さんは今日は休みで、この世界に来ていたのだ。

「それじゃあ僕はこれで……」

お金をテーブルに置いて去ろうとすると手を掴んで来た。

「待って亮ちゃん。買い物に付き合ってよ」

「なんでですか？」

「服を買いたいからだよ。」

「一神（ひとり）で行ってください」

僕は彼女の腕を離そうとするが、離れなかった。

「お願い！何か買ってあげるから」むにゅ

「うっ」

僕の腕が八重さんの胸に当たった。

僕は平常心を保とうとするが、八重さんが顔を近づけてきた。

「……分かりました。少しだけですよ」

「ホント！ありがとうございます」

僕は仕方なく承諾した。



僕は八重さんと町を歩いていった。八重さんは腕に抱きついて来て正直動きにくい。しかも胸が当たってまともに顔を見ることができない。

「亮ちゃん、あそこに行こ」

「あつちよつと……」

八重さんに腕を引かれてついたのはランジェリーショップだった。

「……僕、外で待ってます」

「待って一緒に入ろうよ？」

僕は店から離れようとするが、八重さんは腕を引っ張って入れ

ようとする。

「ランジェリーショップじゃないですか！僕は嫌ですよ」

「大丈夫だよ！中見たけど男の人も居たし、男物もあるから」  
そう言われ、店の中に入れられた。

男がいるだけでなく、男物も扱っているのなら少し安心し、観念して入ったが、中を見渡すと男子が誰一人いなかった。

「……八重さん、どこに男がいるんですか？それにどこに男物があるんですか？」

騙された。八重さんの言葉を疑いもしないで入ってしまったが、そこには男は僕だけで、しかも男物が何一つなかった。

さらに周りの女性から注目を浴び、僕は下を向いた。

「いいじゃない、たまに男もいるみたいだよ。……カップルだけど」

「カップルですよね！僕達はそういうのじゃ……」

その先は言えず、顔を晒した。今のこの状況はどこからどう見てもカップルに見え、デートと言われてもおかしくない。

「……こっつ、これとこれ、あとこれにしよう」

八重さんは恥ずかしいのか顔を赤くして商品の下着を手にした。  
そして着替える場所に移動した。

「……じゃあ待っててね」

「はっ、はい……」

八重さんは顔を赤くしてカーテンを閉めた。

僕はその間、他の女性から視線を向けられていた。  
今すぐにも帰りたいと思うができない。

しばらくすると、

「亮ちゃん、ちよつとこっちにきて」

カーテンから八重さんの声が聞こえた。

僕は近づくと急に八重さんの手が出てきて僕を中に入れた。  
中に入れられると下着姿の八重さんを見た。

「なっ！」



下着はピンク色で露出が多く、二つの豊かな双丘に目を奪われた。

スタイルは良く、胸の大きさでは神々の中で最も大きい。

「……どうかな？」

八重さんは顔を赤くして聞いてきた。

「……綺麗だ」

正直に答えた。

「あつ、ありがとう」

八重さんの顔がさらに真っ赤になり、顔を晒した。

下着姿の少女が目の前にいると誰だって気まづくなる。

「あと、こういうのもあるけど……似合うかな？」

八重さんは商品の下着を持って聞いてくる。一つは青色で下は紐のタイプで露出が多い。もう一つは白の下着で、しかも生地が薄い。もし着ていたら見えているだろう。

「いつ、良いと思うよ」

「ホント？じゃあこの二つにしようかな」

「うっ、うん。そうしたら。じゃあ僕はもう出るね」

このままでは平常心を保てなくなると思いい外に出ようとする  
と、バランスを崩し、前に倒れた。すると僕の顔が八重さんの胸に当たった。

「……」

「……」

数秒して僕は八重さんにビンタされた。



あれから二ヶ月後、八重さんとはなんとか会話ができるようになった。  
な

そういえば悠はもうすぐミッドガルにつくのだろうか？

原作ではもうすぐミッドガルに移動になって物語が始まる頃の筈だ。

ここはミッドガル、Dが暮らしているアスガル傘下の教育機関だ。

浜辺では悠と長い黒髪の少女、そして銀髪でシャツだけ着た女性  
性がいた。

「三年ぶりですね、兄さん」

制服を着た少女、物部深月は義兄の物部悠と再会した。

## ドラゴンズ・エデン ミッドガル

かつて、世界は36存在していた。一つの世界を管理している神のことを世界神と呼ばれる。

世界神は全員で12人いて、下には自然を司る神達があり、会社でいう部下である。世界神より上に立つのが神官、さらに上には神官王、そしてその全ての頂点に君臨する存在は絶対神ゴッドである。

絶対神ゴッドは世界を創り出すことができ、逆に全てを消すことができ想像と破壊を司る最高位の神である。

最初は神官たちが世界を管理していたが、ゴッドは人間にやらせれば面白くなると思い、死んでいった人間の中から選び出し、神として知恵と力を与え、世界を管理させた。

すると世界は大きく変わり、今まで同じ文明と同じ景色だったのが五年も立たないうちに変化したのである。

ゴッドは喜び、自分のやってきたことは正しかったと思った。

だが、ある世界の世界神は欲があった。いつかゴッドを超える神となって全ての世界を支配しようと企み、自分の管理している世界を滅ぼした。

ゴッドは事態に気づき、世界神を含め、24の世界を消してしまい、結果12の世界だけが残った。

ゴッドは自分の行いに後悔した。しかし彼は第1世界のある村を見た。彼は無邪気な少年で、人のためなら無茶をする人間であった。

ゴッドはこのような人間もいるのだと気づき、1からやり直すことにした。

それから月日は流れたある日、第12世界の世界神が引退した。ゴッドは新たな神を見つけるため、第1世界にいた。

服装を変え、町を歩いていると横からトラックがやってきた。轆かれると思い、片手で止めようとした。すると前から小学生くらい

の少年に庇われ、力を使うことなく済んだが、少年は死んでしまった。  
ゴツドは自分のせいだと後悔し、庇ってくれた少年を蘇生させようとした。

ゴツドは少年の顔を見ると驚いた。

彼は何億年も前に下界に居た少年にそっくりだった。ゴツドはあの時の人間の生まれ変わりだと気づいた。

ゴツドは自分のせいで死なせる訳にはいかないと思い、両手に気を集め、彼を蘇生させようとした。

すると頭にある考えが浮かんだ。

このまま蘇生させるより、彼には世界神としてこの世界を管理させればいいと思った。

ゴツドは彼の魂を神界に連れて行き、神として育てた。

それから神界では2000年以上経った。下界では約6年である。

ゴツドは水晶でその少年の仕事ぶりを見て、微笑んでいた。



25年前、何の前触れもなく日本上空に出現した正体不明の巨大生物。

上位元素（ダークマター）生成能力を持つ、一体目のドラゴン。

常識外の怪物は、ただ移動するだけで甚大な被害をまき散らし、現れた時と同じく唐突に姿を消した。

後に設立される竜対策専門の国際機関・アスガルは、その巨大生物が古代インドの聖典に登場する 宙を覆う者（ヴリトラ）と同種である可能性が非常に高いと発表した。

その根拠は機密事項であるという理由で公開されなかったが、以降その一体目はブラック・ドラゴン——黒のヴリトラと呼称されることになる。

そして以降、人間の中にヴリトラと同様の力——上位元素生成能力——を持つ者が生まれ始めた。D もしくはタイプ・ドラゴンと呼ばれるこの異能の子供たちは、現在一ヶ所に集められて管理・保護されている。

それが今、俺のいる場所——ミッドガル。

日本の遙か南に位置する直径数キロ程度の小さな孤島。かつては無人だった島を徹底的に改造し、作り変えた教育機関だ。

周辺には環状多重防衛機構（ミッドガルズオルム）という自動迎撃システムが設置されており、許可のない船舶・航空機は容赦なく排除される。

そんな場所に俺は招かれた。たった一枚の指令書によって。

「なあ、深月。いい加減答えてくれよ。いつたい……何がどうなっているんだ？」

俺は前を歩く深月に問いかける。

「会話は然るべき時に、然るべき場所でお願います。誰が聞いているかも分からない道端で、軽率に話をすることはできません」

だが深月は振り向きもせず、俺の要求を却下する。もう何度も話しかけているのだが、全て同じ返答だ。録音した音声を再生しているのではないかとさえ思えてくる。

俺は諦めて、然るべき場所とやらに着くのを待つことにした。

今、歩いているのは先ほどの砂浜に沿って続く海岸の道だ。周囲を見回しても人の姿はないのだが、それでも深月は壁に耳あり障子に目ありを気にしているらしい。

ちなみにイリスはいない。堤防の上に置いてあった自分の荷物を持って、逃げるように走り去ってしまった。しかも結局、俺のシャツを着たままで。よほど俺に自分が着た服を返したくなかったらしい。

おかげで俺は最初に暑くて脱いだ長袖の上着を再び着る羽目になった。坊刃性のある分厚い生地は熱気を内側に押し込め、汗がどんどん出てくる。

しばらくすると大きな建物が見えてきた。近代的でありながら、どこか中世の城を連想させるデザイン。深月はその前で足を止

め、扉の脇にあるパネルに手を翳す。するとほとんど音もなく扉が自動的に開いた。

深月に続いて中に入る。涼しい風が全身の熱気を拭い、一気に汗が引いた。

エントランスは広いホールになっており、家事全般をこなす円筒のロボ——全自動召使い（オートメイド）が隅の方で埃を集めていた。

「すごいな……ここが学園なのか？」

俺が呟くと、くすつという小さな笑い声が聞こえた。

視線を前にある深月へ向けると、彼女はコホンと咳払いして俺の方を向く。

「——違います。ここは学園じゃありません。私個人の宿舎です」

「へ？」

深月の言葉に俺は呆然とする。

「……こ、個人の宿舎？この馬鹿でかい建物が全部？」

「はい。全て私が使用しています。ですからこうして会話にも応じているんです」

つまりここが深月の言っていた然るべき場所らしい。俺は信じられずに建物の中を見回す。ホールは三階まで吹き抜けになっていて天井が高い。一体何部屋あるのか、想像も付かなかった。

「深月はどうしてこんな建物に——いや、そもそも何でミッドガルにいるんだ？今度こそ、答えてくれるよな？」

「それは私が特別なDだからです。今の私はブリュンヒルデ教室、出席番号三番。ミッドガル学園の生徒会長であり、竜伐隊の隊長。階級は中佐。兄さんよりも——偉くなっしまいましたね」

「な……」

言葉を失くした俺に深月は言葉を続ける。

「ミッドガルへの移動は私の権限で行いました。兄さんには明日から生徒として学園に通ってもらいます。部屋はこの宿舎の一室を兄さん用に改造済みです。制服も置いてあるので一度きてみてください」

さい。万が一寸法が間違っていた場合はすぐに直させますので」

「ちよ、ちよつと待ってくれ！俺が明日から学園に通う？本気で言ってるのか？異動って沿岸警備隊とかそういう部署じゃないのか？」

「もちろん本気です。生徒会長が嘘を吐いては示しが付きませんので。警備は環状多重防衛気構（ミッドガルズアルム）で間に合っていますから、特に必要ありません」

「いや……だって俺は男だぞ！」

俺は最も重要な点を指摘する。

理由は分からないがDとして生まれるのは女性のばかり。すると必然、ミッドガルにいる生徒も女性のみとなる。つまり完全な女学校だ。俺が通っていい場所ではない。

「ミッドガルで教育を受ける資格はただ一つ——Dであること。兄さんはその条件を満たしています。男とか女とか、そういったことは関係ありません」

そう、俺はたった一人の例外だった。

発見と同時に存在を秘匿された——男のD。

「そりゃあ理屈ではそうかもしれないが……俺のことを公にしてもいいのか？アスガルは俺みたいな奴がいることを隠したかったから、ニブルに送ったんじゃない……」

国境を越えて発生するドラゴン関連の諸問題に対処するため、二十年前に設立された国際機関アスガル。その傘下には現在、二つの組織がある。

一つは対ドラゴン戦を想定した武装・戦術の研究開発や、日常的に起こる竜災害への対応を行っている軍事組織ニブル。

もう一つがDたちの自治教育機関であるミッドガル。

少し前までミッドガルはニブルの管理下にあったらしいが、現在は完全に対等な立場となっていると聞く。

非常時はアスガル指示の下で合同作戦を行うことが想定されているため、深月やイリスため学園生にもニブルと共通した軍階級が与えられているのだ。

そういう組織構造であるからして、いくら深月が中佐でもアスガルの決定には逆らえないと思うのだが……。

「いいえ、兄さんの存在を隠したのはアスガルではなく——ニブル。現地で兄さんを確保したのをいいことに、アスガルへ情報を上げず、勝手に処遇を決めたんです。そのせいで……兄さんを見つけ出すのに、とても長い時間が掛かってしまいました」

悔しげに奥歯を噛み締める深月。

「深月は……俺を探してきたんだな」

「はい。私がミッドガルに来て最初に驚いたのは、兄さんの姿がないことでした。私より先に身柄を拘束された兄さんがいないのはおかしいと思い、それ以来ずっと探していたんです」

深月はそう言うが、俺は少し心配になる。

「かなり強引な手段を使っただんじやないのか？深月の立場が悪くなるんじゃない——」

「平気です。勝手なことをしたのはニブルの方ですから。何も言ってくる心配はないので兄さんは安心して学園生活を送ってください」

全く問題はないという顔をする深月だが、俺はまだ素直に頷く気持ちにはなれなかった。

「いや、状況は一応分かったし、深月の気持ちは嬉しいけど……現実問題、やっぱりいろいろまずいだろ」

不安要素が少し減っても、俺が男であるということは変わっていない。

「——はい、もちろん男性が混じることで様々な問題が生じることは想定しています。だからこそ、私が責任を持って兄さんの管理をいたします」

しかし深月は、俺の懸念など分かっているという表情で鷹揚に頷いた。

「か、管理？」

「兄さんが学園内の風紀を乱さぬよう、きちんと監視し、問題が起これぬよう努めます。先ほどのような破廉恥な真似はもう許しませ



んから」

にこりと初めて笑みを浮かべる深月。だがその笑顔は底冷えのするものだった。

「もしかして……深月、怒ってるのか？」

Tシャツ一枚のイリスと一緒だったことについて、深月は全く触れようとしなかった。最悪の場面——裸のイリスを押し倒しているところは見られなかったようなので安心してはいたが、深月の方は切り出すタイミングを計っていたらしい。

「当たり前です。兄さんの不始末は私の責任になるんです。だどいうのに着いて早々女子生徒を口説くなんて……先が思いやられま  
す」

「く、口説いてなんていないぞ！」

「本当でしょうか？会ったばかりだというのに、ずいぶん仲良く痴話喧嘩をなされていましたが」

ぶいと顔を背けた深月は、すたすた歩き始める。

「深月、どこに行くんだよ？」

「……お部屋に案内します。付いてきてください」

不機嫌なオーラを放ちながら深月は俺を一階廊下右奥の部屋へと導いた。

各扉に部屋番号などは記されていないが、その部屋にだけ丸っこい字で”兄さん”と書かれたプレートが付けられていた。

「……………」

せめて名前にして欲しいなど無言で見る。だが成長した妹は俺の意思を汲み取ってくれることなく、無愛想に鍵を差し出した。

「部屋の鍵です。これで施錠はできますが、私がマスターキーを持っていないことは予め理解しておいてください」

「いや、それって鍵を掛ける意味があるのか？」

「気分の問題だと考えていただければ。まあ私もよほどのことがなければ勝手に扉は開けませんので、無意味ではないかと思えます」

「そういうことなら、一応受け取っておくけど……」

何だかすつきりしない気持ちで俺は鍵を手取る。

「私が主に使っているのはちようど真上にある二階の角部屋です。何かあればノックを。この宿舎内での行動は自由ですが、夜八時以降は外出を禁じます。朝食、夕食は朝夜の七時にオートメイドが三階の食堂に用意してくれます。洗濯物は籠に入れて部屋の前に出しておいてください。バス、トイレは部屋にあります。以上、何か質問は？」

「えーと……今のところは特に——」

一気に言われたせいでまだ頭が把握しきれておらず、疑問を見つかる暇もなかった。

「気になることはないのですか？例えばニブルでの三年間……父さんや母さん、学校のご友人とも連絡は取れなかったのでしょうか？」

「——ああ、そっか。父さんと母さんは元気にしてるか？」

俺は顔を曖昧にしか思い出せない両親の現状を義務的に訊ねる。

「はい、元気です。時々、電話で話しています。外部への通信は許可が必要ですが、禁止されているわけではありません。今度、兄さんからも連絡してあげてください」

「……そうだな」

頷ぐが、俺は両親に連絡するつもりはなかった。話せばきつとボロが出る。

(不用意に取引だけはするな)

亮の言葉を思い出した。

三年間に俺が失ったものを——深月には悟られたくない。

「ご友人にも連絡はできますが、通話内容は記録されますのであまり余計なことは喋らないよう気をつけてください。もし電話番号が分からなければ私が調べます」

「分かった。色々ありがとう」

——友人。そんな相手がいただろうかと考えながら、俺は礼を言った。

「それでは、私はこれで」

ぺこりとお辞儀をし、立ち去ろうとする深月。そこで俺は、ど

うしても訪ねておかねばならないことがあったことを思い出した。

「あ——やっぱりあと一つだけ、聞いていいか？」

「何でしょう？」

深月は足を止め、顔だけで振り向く。俺は唾を飲み込んでから、思い切って訪ねる。

「俺が三年前にしたことは……無駄だったのか？所詮、子供の浅知恵だったのか？」

三年前、俺は戦った。そして深月をミッドガルへ送らせないために俺は全部を引き受けた。

あの巨人と戦ったのは俺だけだったということにしたのだ。

けれど今、深月はここにいる。

ならば俺の行動は無駄に終わったということ。

しかし深月はゆっくりと首を横に振った。

「いいえ、兄さんがしたことは決して無駄ではありません。三年

前の時点では、私が”D”であることは公になりませんでした。ただ

……」

「ただ？」

「あの時の私は、間違えていたんです——どうしようもないほどに」

そう言って深月は、とても悲しそうに微笑んだのだった。

## 入学

ここは時間と空間がない”虚無の世界”（ドラゴンボール超の無の会）。世界神同士が戦うことを許された世界。

そこには力の大会に出てくる武舞台があつた。時間の経過とともに中央にある柱が下がってきて、制限時間が0になると床と同じ高さになる。

そこには三神（さんにん）の世界神がいた。

第8世界の世界神 パトリック・ホワイトと第9世界の世界神  
レイチエル・スミス、そして第12世界の大島 亮。

彼らはプリンを巡ってこの場所にいる。

数分前、仕事の帰りに第4世界のスイーツを買ってきた亮は休憩室にいたパトリックとレイチエルと一緒に食べていた。

おやつを食べながら雑談をしているとプリンが一つ残っていた。残り一つは戦って決めようとパトリックが提案し、現在に至る。

虚無の世界は誰でも入れるように管理している神はいないが、武舞台は必ずボロボロになるので、最後は元通りにするのがマナーとなっている。そうしないと神官王に注意され、給料を減らされることになる。

そして今、三つ巴のバトルが始まろうとしていた。

「準備はいいですね」

柱の上には神官王がいた。本来は仕事で自分の部屋にあるが、今日は手が空いていたのでレイチエルが審判をお願いした。

「いつでも」

三神（さんにん）は戦闘態勢に入っていた。身体に神の気をまとっていた。

「はじめ!!」

神官王の合図とともに三神（さんにん）は高速で動き出した。武舞台を駆け巡ったが、まだ誰も戦ってない。

様子を見て、隙があればそこを狙うようだ。

最初に動いたのは亮とパトリックだった。亮は既に超サイヤ

人ブルーになり両者激しい激突により、武舞台の表面は破壊されている。

パトリックは気功波を繰り出し、亮も気功波で対抗する。すると横からレイチエルが走ってきた。

手には気を練り上げて作った剣を振り下ろす。

亮は高速で避け、パトリックはジャンプした。レイチエルの剣は武舞台に刺さり、気を消して手に気候波を作る。

ジャンプしたパトリックは手を円を描くように回した。手には気で練り上げ星状の気功波を作り、亮とレイチエルに向かって放った。

二神（ふたり）はパトリックの気功波を手で払い、武舞台の半分は爆風で何も見えない。

その中にレイチエルと亮は戦っていた。亮が蹴るとレイチエルは手で防御、レイチエルがジャブで攻撃すると亮は右フックで対抗。

パトリックは二神（ふたり）のいる場所に降りて、爆風を払った。

二神（ふたり）はパトリックに向かって気功波を打ち、パトリックは気を上げて弾き返した。

弾き返ってきた気功波を二神（ふたり）は避けた。

亮は身体の周りにたくさんの気功波を練り上げ、天に向かって放った。

気功波は黒い空の上で見えなくなった。数秒して降ってきた。しかもさつきより大きく、重力で速度が上がっている。

気功波が流星群のように武舞台全体に降ってきて、爆風があちこちに起こった。

レイチエルは亮に蹴りで攻撃した。すかさず両手で防御した。蹴りの威力で床に大きな穴が空いた。

すると亮の後ろからパトリックが気功波を放った。

亮は高速で移動し、レイチエルは気を練り上げ鎌を作り、気功波を真っ二つにした。

パトリックはその一瞬で左手を殴ろうとした。レイチエルも右手で殴り、そのまま高速で移動した。

三神（さんじん）は目に見えないほどの速さで激突し、武舞台はボロボロになる。

パトリックはレイチエルに気功波を放った。レイチエルは逃げたが、追ってくる。

パトリックは気功波を自在に操ることができ、大量に作っても狙った場所や相手に当たるまで操作する。

レイチエルは気を練り上げ、三叉の槍を作り突き刺した。

亮は両手に緑色の気弾を作った。両手を合わせ、気弾は何倍にも大きくなり、二神（ふたり）に向かって放った。

パトリックは手に水色の気を練り上げた。レイチエルより大きく、亮の気弾に向かって放った。

レイチエルは手に赤い気功波を作り上げ、二神（ふたり）に放った。すると気功波は三つに分かれた。

三つの気功波は激突し、武舞台の中央で爆発した。

武舞台は爆風で見えず、神官王は防壁を展開して守っていた。

爆風はすぐ消え、三神（さんじん）は武舞台の上にあった。両者互角で誰も落ちなかった。すると亮は言い出した。

「引き分けにしませんか？」

「そうだな！そうしよう」

「ええ、そうしましょう」

二神（ふたり）は納得し、武舞台の修理をして戦いは終わった。ちなみにプリンは神官王に差し上げた。

武舞台の修理は終わり、パトリックとレイチエルは下界で仕事に向かった。

亮は通信機で物部悠に連絡をするが出ない。亮はミッドガルに移動したことを思い出し、杖で様子を見ることにした。



「……であるからして、彼は男である前に”D”——つまり私たちの数少ない同胞なのです。性別で区別することなく、仲間として受け入れることこそ、我々が高い社会を持つ人類であることの証明だと——」

ここは島の中央に位置する学園の体育館。全校生徒が整列し、壁際には教職員が並んでいる。その全ての視線が向けられた壇上で、深月はマイクを通して皆に語りかけていた。

俺はその隣に立っている。身に着けてるのは学園の制服。デザインは他の生徒に近いが、俺のは当然男子用だ。サイズは気味が悪いほどぴったりだった。

「——もちろん、それでも不安に思われることは多いと思います。ですから私は皆さんの生活を守るために、全力を尽くすとお約束いたします。彼は私の兄ですが、身内であるからこそ、問題を起こした場合はより厳しい処分を——」

今行われているのは、俺のミッドガル転入に関する説明を行うための全校集会だ。

あれから一夜が明け、早朝に叩き起こされた俺はいきなりこの場合に連れてこられた（ちなみに深月はマスターキーを使って扉を開けた）。

壇上に深月と共に立った時、好奇の視線が一斉に注がれたが——今はその全てが深月の方を向いている。誰もが熱心に、深月の話を聞いていた。私語が一切ない。

——本当に、生徒会長なんだな。

俺は胸の内で感心する。皆の尊敬と信頼を勝ち得ていることが、この雰囲気だけで感じ取れた。

深月へ熱い視線を注ぐ生徒たちを見回す。数はそれほど多くない。暇なので数えてみたが、全部で六十五人だった。五人から九人の九つ。それが教室の数かもしれない。

ミッドガルでの教室分けは戦闘時の班分けを兼ねた少数制だ

と聞いたことがあった。

昨日一悶着あつた銀髪の少女、イリスは一番端——五人の列にいる。そこだけ著しく数が少ないのは深月が抜けているからだろう。確か二人ともブリュンヒルデ教室だと言つていた。

「——皆さんが彼を温かく迎えてくれることを私は期待しています。そして彼にも我々の誠意と信頼に応えることを求めていきます。ですからどうぞ彼を——兄をよろしくお願いします」

深々と頭を下げ、演説を締めくくる深月。すぐに大きな拍手が体育館の中に鳴り響いた。

「さあ、兄さん」

鳴り止まない拍手の中、深月が俺にマイクを譲る。

「えっと……物部、悠です。不束者ですが、よろしくお願いします」

我ながら一層大きくなり、「よろしくねー!」「私たちがついてるよ!」という温かい歓声が飛ぶ。

本来ならば、男が入学することに対する抵抗感はかなり大きかったはずだ。だが深月はそんな皆の意識を十分程度の演説で変えてしまった。

二人で一礼し、舞台の袖に引つ込んだ後、深月は長く息を吐いて微笑む。

「これで学園全体の雰囲気は、兄さんに好意的なものになるでしょう。でも——不束者では困りますよ?」

「あ、ああ、分かつてる。深月に迷惑は掛けないよう心掛けるよ」正直、まだ状況に頭が追いついていない。だがミッドガルへの異動は正式な指令であり、深月は俺の上官だ。拒む権限は俺にない。

どんなものであれ上の命令には従う。それはこの三年間で骨の髄まで叩き込まれた常識だった。

そんな俺の返事はどこか上の空に聞こえたのかもしれない。深月は疑わしい気に俺を上目遣いで見て、こう忠告した。

「言っておきますが、これから兄さんが配属される教室は問題児揃いです。私の言葉もどれほど届いたのか自信がありません。受け



入れてもらうには兄さん自身の努力が必要なことを———忘れない  
てください」

(ちゃんと原作通りにやってるな)

僕は杖でミッドガルの様子を見ていた。いつもなら誰かしら  
いるのだが部屋には僕一神(ひとり)だけで他は仕事で下界にいる。

(そういえば一週間後にリヴァイアサンが現れるはずだった  
な)

僕は原作の一巻を思い出していた。ブリュンヒルデ教室のイ  
リス・フレイアは白のリヴァイアサンに見染められてしまうが、悠の  
活躍によりリヴァイアサンを倒すことを知っている。

僕は下界行く準備をしてリヴァイアサンの行動を見ることに  
した。

## V S 白のリヴァイアサン 1

ここは太平洋のど真ん中。もうすぐここに白のリヴァイアサンがやってくる。

白のリヴァイアサン。二十五年前、黒のヴリトラが日本に襲来してきてから間もない時期に現れたドラゴン。

太平洋を決まったルートで周遊して、たまに外れてミッドガルの警戒区域に侵入することがある。

大体はミッドガルの第一防衛ラインに達することなく元のルートに戻るが、一週間後にブリュンヒルデ教室のイリス・フレイアを見染め、侵入してくる。

白のリヴァイアサンの能力は万有斥力（アンチグラビティ）。物質を跳ね返す斥力場を自身の周辺に発生させ、ありとあらゆる物質を跳ね返し、斥力場によって空間を湾曲させて攻撃することができ

る。しかし、攻撃は咆哮のみで広範囲に被害を及ぼすが、超サイヤ人の力ならば簡単に倒せる。

僕は奴の気を探っていた。もうすぐリヴァイアサンがこっちにくる。ここで倒すのもいいが、少し良い事を思いついた。

ここで奴を瀕死寸前に追い詰めれば悠達も少しは楽に倒れると思った。でもどうせなら一緒に戦って倒すのも良いと考えている。

そうしていると、白のリヴァイアサンがやってきた。

全身を白い外殻に覆われ、頭部からは大きな一本の角が生えている。しかも斥力場で空を浮いて移動していた。

「あれが白のリヴァイアサンか……結構大きいな……だが戦闘力は大したことはない。気もそんなに高くない」

僕はリヴァイアサンの気を分析したが、人間より数百倍は大きい力を持っているが、超サイヤ人の力なら勝てると確信した。

リヴァイアサンは僕のことには気付いてないようで、まっすぐ進んでいる。

「よし、ちよつと気を上げるか」

僕は力を込め、気を解放した。

するとリヴァイアサンは察知したのかその場で停止した。そして奴は空を見上げ、僕を見た。

『ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!!』

リヴァイアサンは吠えた。僕は何を言っているのか分からず、杖を取り出して喋れるようにした。

リヴァイアサンは青い光に包まれ、鳴き声は人間の言葉になった。

『なんだあの者は?すごい力を感じるぞ。計り知れないほどの力だ』

リヴァイアサンは僕の力に驚いていた。亮はリヴァイアサンの元に近づいた。

「やあ、リヴァイアサン。僕は大島 亮。この世界を管理している神様だ」

『なっ、なんだと!?!神だと!?!』

リヴァイアサンは更に驚いた。

『なるほど……聞いたことがあるぞ。なんでも世界神と呼ばれる存在が世界を管理していると……まさか本当にいるとは思わなかった』

リヴァイアサンは納得していた。こいつが生きていたのは何千年前で突如本物のドラゴンによって滅ぼされたので、まだ生きていた頃に存在を知っていたようだ。

「話が早くて助かるよ。どうだい?僕と戦ってみないか?」

僕は要件を言った。

『戦うだと?何故だ?我に何の得があるというのだ?』

リヴァイアサンは理由を聞いてきた。亮は本当のことをいえばその場で倒すことになると思いきや嘘を言った。

「最近戦ってなくてね……体が鈍っているんだ。それに得ならあるぞ。僕を倒せば君は神を超えた存在だということを証明できる。そして本物のドラゴンを倒すことだってできるかもしれない」

理由は嘘だが、戦いは正直好きだった。戦闘民族サイヤ人の力

を持っているため、ワクワクしてきた。ちよつと悟空の気持ちがかつてきた。

『……いいだろう、神を超えたことを証明できれば他のドラゴンも倒せるからな。その挑戦受けて立とう』

リヴァイアサンは承諾し、亮から離れた。

「嬉しいよ、受けてくれありがとう。なんだかワクワクしてきた。悟空も戦う時はこういう気持ちなんだな」

『……おかしな神だ。戦いに喜びを感じるとは……しかも悟空？訳の分からないことを言つて……まあよい、行くぞ!!』

リヴァイアサンは吼えた。咆哮の衝撃波で海は裂けた。亮は正面でまともに喰らったが平気だった。気を上げてリヴァイアサンの攻撃を防御したからだ。

『何?!』

リヴァイアサンは驚いた。攻撃をしたにもかかわらず、ビクともしないどころか平気な顔でいる。

「攻撃といつてもこの程度か……残念だな」

『なんだ?!』

リヴァイアサンは亮の言葉に腹を立てた。そしてもう一度咆哮を上げ、衝撃波を起こした。

僕は息を吹き込み、衝撃波に向かって吐いた。

リヴァイアサンの衝撃波と僕の息は激突し、最後は僕の吐いた息に負け、押し返された。

リヴァイアサンは斥力場で守った。

「厄介な能力だな。今度は僕が攻撃するよ」

僕は手に気を集中させ、気功波を放った。

白のリヴァイアサンはまた斥力場で防御した。気功波は斥力場に当たり爆発した。

『やるな……だが、我には効かんど！攻撃は通用しなくてもこつちには私の能力がある』

「これぐらい出来て当然だ、手加減してるからね」

『なっ、なんだ?!』

リヴァイアサンは怒った。

『貴様、舐めやがって……神かなんだか知らんが覚悟しろ!』

「やれやれ……野蛮だね。こんなことで怒るなんて……じゃあやる気を出すか」

『やる気だと?』

僕は全身に力を込めた。海は大きく波打ち、僕の周辺は全身から金色のオーラが漂ってくる。

『なっ、なんだ!? さっきよりパワーが上がっているぞ! 力の上限がわからない!』

リヴァイアサンはパワーが上がっていることに気づいた。そして僕は力を解放した。髪は金色になっており、オーラが身体全体を包んでいた。

超サイヤ人。サイヤ人が戦闘力を何十倍にも膨れ上がらせる変身技であり、ドラゴンボールZに出てくる全力のフリーザと互角に渡り合える力だ。

「それじゃあ行くぞー!」

僕は両手をリヴァイアサンに向け、気を集中させ、気功波を放った。

『ファイナルフラッシュ!!!』

リヴァイアサンは斥力場で防御したが、簡単に破られてしまい、ダメージを負った。

リヴァイアサンは海に倒れた。

『馬鹿な!? さっきより威力が全然違う!』

リヴァイアサンは気功波を喰らい、斥力場で再び宙を浮いた。「効いたみたいだな……次はこれだ! かくめくはくめく波ー

!!!

僕は悟空のかめはめ波を放った。リヴァイアサンは斥力場を出す暇もなくまともに喰らった。

爆風で何も見えなかった。僕はリヴァイアサンの気を感じとり、爆風の中に向かって気功波を撃ち続けた。

リヴァイアサンの体はボロボロで、外殻のほとんどはなく、筋

肉が露わになっていた。

『なんて奴だ……このままでは死ぬ……どうすれば……』

リヴァイアサンは逃げる方法を考えていた。どう足掻いても勝ち目は無い。

かといって逃げてでも追いつかれると思った。

僕は爆風を吹き飛ばし、気円斬を作り奴の角を切断した。

「どうした？この程度か？僕はまだ実力の一割しか出してないよ」

余裕を見せ、リヴァイアサンは叫んだ。

『覚えていろ!!!いつか必ずお前に復讐するからな!!!』

そう言つてリヴァイアサンは海の中に潜って行った。

僕は逃げるリヴァイアサンを見た。そして杖で進行方向を確認した。

「奴はミッドガルの方に行ったか……これで悠も簡単に倒せるはずだ。さてと歪みはどこにあるかな？」

杖でリヴァイアサンの逃げて行く方向を確認した後、杖で歪みを探した。

「韓国にあるな……キムチを食べてみるか」  
僕はその場を後にした。

リヴァイアサンは斥力場で海底を進んでいた。

『あの野郎……覚えとけよ』

リヴァイアサンは亮に復讐を誓い、ミッドガルの方に進んでいた。

すると――

『ん！何だあれは？』

リヴァイアサンの進む先に紫色の歪みがあった。それに触るとリヴァイアサンの身体に変化が訪れた。

『!!なんだこの力は!』

リヴァイアサンは紫色の歪みを取り込み、海底の中に消えて

い  
っ  
た。  
。

## ブリュンヒルデ教室

韓国のとあるビルの屋上に僕は来ている。そこには空間の歪みがあった。僕たち世界神は世界に起こる歪みを修正することが仕事の一つである。

生き物が歪みに触れると突然変異することがあり、力を手にして暴走してしまう。

そうならないように人間が見つける前に行動している。

歪みを修正する方法は、神の気を注ぎ込むだけである。そうすると自然に元に戻る。

歪みはどこで起こるか分からないので、杖で場所を確認して向かっている。

僕のように一般人に化けて行動する神が多いが、人目を気にせず堂々と仕事している奴もいる。

そのため、服は一般人の服を着ている。

神の存在は知られても構わないが、敵意を向けてくることもあるかもしれないので、隠れて行動することがあるがその時は戦うしかないと考えている。

「これでよし……後はどこにあるかな」

僕は杖で歪みの場所を確認する。そこは太平洋の海の中だった。

「海の中にあるのか。さてと行くか」

僕は破壊神の服に着替えて太平洋に向かった。



白のリヴァイアサンとの戦いから三日後、亮との戦闘はアスガルはもちろんのこと、ニブルやミッドガルにも知れ渡った。

近くにニブルのヘリがいたことで映像を撮り、アスガルに情報



を上げたことで知れ渡ったのだ。

「諸君、授業に入る前に知らせたい情報がある」

ミッドガルの司令官にしてブリュンヒルデ教室の担任、篠宮遥は教室の教壇に立っていた。

「三日前、白のリヴァイアサンが何者かによって討伐された」

「「「「「!!!」」」」」」

悠達は驚いた。

「それはどういうことですか!?篠宮先生!？」

金髪の少女 リーザ・ハイウォーカーは驚き中、皆よりも早く発言した。

彼女はブリュンヒルデ教室のリーダー的存在で誰よりもクラスメイトのことを気にかけており、家族同然に見ている（悠は部外者と思っっている）。

「言った通りのことだ。リヴァイアサンはルートから外れることなく周遊していたが突然白い光が降ってきて、その中に一人の人間が現れた。」

「白い光ですか？」

「そうだ、しかもその者は宙に浮いており、白のリヴァイアサンに攻撃をしたそうだ。手からレーザーの様な物を出し斥力場を突き破り、息を吐けば突風になりリヴァイアサンの咆哮を押しさえた」

篠宮遥は聞かされたことを話したが信じられなかった。

それは皆も同じで啞然としていた。そんなことが出来る人間は今まで聞いたことがないからだ。

「更には髪の毛が金色に変化したそうだ」

「髪がですか？」

悠の義妹、物部深月は不思議そうに言った。

「そうだ。ニブルからの情報では髪の毛が変色すると波が大きく揺れ、奴の攻撃の威力が何十倍にも上がったそうだ。」

「そ、そんなことが……」

リーザは絶句した。しかしそれはみんなも同じだ。どこの誰だか分からない者が突然ドラゴンを倒したと聞けば誰だっけ驚くも

のだ。

「その後リヴァイアサンは海に沈んでいった。ニブルでは討伐されたという事になってるが、ドラゴン是我々の常識を遥かに超える存在だ。もしかすれば生きている可能性がある」

遥は強い口調で言った。すると今度はボーイッシュな少女アリエラ・ルーが質問した。

「それでリヴァイアサンを倒した人はどうなったの？」

彼女はさっぱりとした性格の持ち主で、思ったことをそのまま口にする癖がある。

「奴はリヴァイアサンが沈んで行くのを見届けてから何やら杖を作り出してそのまま光に包まれて飛んでいったそうだ。もしかすれば物部悠の様に我々が知らない男の”D”である可能性が高い」

教室はざわめく。自分達の知らない”D”、しかもどんな奴かも分からない以上不安になるもは当然だ。

しかし一人、物部悠は思い当たる節を浮かべる。それは半年前、ドラゴン信仰者団体を捕まえる時に出会い、今でも通信している神と名乗る男。

その男の名は大島亮。この世界を管理している想像と破壊を司る神、”世界神”である。

「それにこの事例は今回が初めてではない」

「どういう事ですか？」

深月はどういふことか分からず質問をした。

「実はその者は五年前と二年前に青のヘカトンケイルを倒して三年前に紫のクラーケンを追い詰めたことがあるのだ」

「「「「「なっ!!!」」」」」

更にみんなは驚いた。

「このことはアスガルとニブル、そして教員しか知られていない情報だがもう隠す必要はない」

遥は過去のドラゴン討伐の情報を全て話した。本当は話すべき内容だが、何があるか分からないので学園長はこのことを生徒たちには隠していた。

「諸君も不安になることは分かるが今のところミッドガルに危険はない。しかし、ドラゴンを圧倒する者が突然現れるかもしれない。動きがあるまで英気を養ってくれ」

遙はそう言って授業を始める。しかし悠はポケットの中にある通信機を握る。それは亮がくれたものだった。

放課後、深月達はリーザの部屋に集まっていた。

「皆さんはどう思いますか？」

リーザは皆に問いかけるとフィリル・クレストが読んでいた本を閉じて言う。

「……私は不安かな？どんな人かも分からない。それに話を聞く限り”D”じゃないと思う」

「ん」

クラスで大人しいレン・ミヤザワも同意する。

ちなみに物部悠は義妹の深月の寮に泊まっているため、ここには居ない。

「そうだけど……話ではドラゴンだけを襲ってるみたいだし、ボクは心配ないと思うよ」

アリエラはフィリルとレンの意見に異論を唱える。

「確かにそうですが、篠宮先生の言う通り警戒はするべきでしょう。ミッドガルを襲う可能性だってあります」

深月はアリエラの意見に、難しい表情を作りながらも頷く。

「で、でもドラゴンを倒すなんて凄いいことじゃない？もしその人が全部のドラゴンを倒してくれたらあたし達は戦わなくて済むし」

「そうですねがイリスさん、わたくし達とその方ではドラゴンを倒す目的が違うのかもしれないですよ？何をするか分かったものではありませんわ」

イリスは亮を擁護するがリーザは反論する。クラスメイトのことを家族と思っており、誰よりも大切にしているために言っている。

「でも不思議だね。物部クンが”D”ってことも驚いたけどまさかドラゴンを倒す力を持つ人も現れるなんてビックリだよ」

アリエラは亮に興味を示していた。

「確かに私も生徒会長になってからそのようなことがあったのは初めて聞きました。もしかしたら私達の知らない”D”がたくさんいるかもしれません」

「そうだね……彼みたいに男の”D”がいるようにこれから増えていくかもしれない」

深月とフィリルはアリエラと同意見だった。

「わたくしは心配ですわ。モノノベ・ユウのような殿方がミッドガルに来る様なことは認めませんわ」

「ん」

リーザは反対し、レンも頷いた。リーザは物部悠を部外者と思っているようで、厳しい態度を取っている。レンも警戒しているようだ。

「あれ？リーザは彼の事が心配で気にかけてるからいつも見てるんじゃないの？」

「そつ、そんなことはありませんわ!?わたくしは彼がイリスさんのように問題を起こさないか警戒しているだけですわ」

リーザは顔を真っ赤にして反論する。

「わたくしは彼の事をまだ認めたわけではありません。ですが、同じクラスに居るので多少は気になっているのです」

「……ホント、素直じゃない」

「……」

リーザは更に顔を真っ赤にして顔を背けた。

「そつ、それよりフィリルさん新しいゲームが入ったと言ってましたがどんなゲームですか？」

「あつ、話を逸らした」

「そつ、逸らしていませんわ!?それより早くやりましょう」

「分かった。それじゃあ新しいホラーゲームを……」

「わたくしもう寝ますわ」

リーザはホラーゲームと聞くとすぐに立ってベットに向かった。

「大丈夫。今回は主人公がお化けを倒すゲームだから。それにこのゲームは四人で出来るから助け合うことができるよ」

「……仕方ありません。少し付き合うだけですわよ」

リーザは渋々承諾して座った。

「それでどうやって倒すんだい？」

アリエラはフィリルにゲームの内容を聞く。

「このゲームはダンジョンになっていて先に進むに連れてゾンビが出てくるからそれを銃で倒していくんだよ」

「それなら大丈夫ですわ。相手を倒すのならフィリルといつも対戦しますので問題ありません」

「フィリルちゃんって色んなゲームを持ってるんだね」

「まあね。後で貸してあげよっか？」

「ホント！ありがとう」

イリスは喜んでフィリルにお礼を言った。

「あっ、その前に名前つけなくちゃ」

「名前ですか？」

深月は不思議そうに聞いた。

「うん。このゲームはいつもと違ってラスボスに名前をつけることができるよ。……そうだねー。じゃあ物部くんでき」

そう言っただけでフィリルは名前入力を行う。

「って、どうして兄さんの名前が出てくるんですか！」

「だって面白そうだし」

こうして夜は更けていき、深月は自分の寮に帰っていった。



「……そうか、ミッドガルにも知られたか」

「ああ、まさか俺も亮の事だとは思ってなかったよ」

物部悠は世界神 大島亮と連絡を取っていた。

悠は亮のことが心配になり、深月が女子寮に行ってから通信機で連絡した。

「知られるのは分かっていたよ。けどリヴァイアサンはまだ生きてるよ。もしかしたらミッドガルに攻めてくるかもしれないね。そうだったらいずれ君と会う日も近いかもな」

「そうだったら深月達はお前を捕まえるかもしれないぞ」

悠は亮のことを心配する。

「大丈夫だ、僕はそう簡単に捕まったりしないさ。それに僕は神だ。どんなことがあっても対処できる」

「そうだが……アスガルやニブルも黙ってはいないし、お前を倒す兵器を作ってるかもしれない」

「言っただろ、僕は神だって。どんな兵器を使ってもどんなに兵士が襲ってきても無駄だよ。半年前に見ただろ、僕の力を」

「それは……そうだが……」

悠は不安だった。確かに亮の実力を知っているがそれはほんの一部であり、本気を隠していることも分かっている。

しかし、いつアスガルが亮を災害指定にしてくるか分からない。その内ミッドガルも亮と戦うことになるだろう。多分亮は手を出せざる終えない状況になる。

そうなって仕舞えば神の仕事もやりにくくなり、自分も戦うことになる。

「……でも、心配してくれてありがとう。君は本当に優しいね」

「そんなことはない」

「いいや、そんなことはあるよ。君と親友で良かった。君達の敵にならないように僕も気をつけるよ。それじゃあまたね」

「ああ、おやすみ」

「おう」

そう言って亮は通信を切った。悠はベットに寝転んだ。

## 接近

「八重さん、もうすぐです。それと水です」

「亮ちゃんありがとう」ぎゅー

「ちよっ、抱きつかないでください」

僕達は第7世界にある要塞に向かっていた。世界を滅ぼそうと企む科学者ドクター・チャンが機械生命体を作りだしたと聞き、向かっていった。

今回は僕と八重さんが任務に当たっている。

「八重さん……どうでもいいですが、どうして僕を誘ったんですか？」

「えっ?」

「八重さんの時飛ばしなら今回の仕事は楽勝じゃないですか。それなのに僕を誘うなんて……」

「ん〜何があるか分からないからね。亮ちゃんがいてくれれば頼りになると思って」

「そうですか……まあ、僕も暇でしたのでね。たまにはいいですよ」

「ありがとう」

八重さんは計画を立てて行動しているため、今回の仕事は最初から誰かと向かうつもりだったのかもしれない。

「……ホントは少しでもいたいからだけど」ボソツ

「何か言いました?」

「うっ、ううん、何も言っていないよ。それより着いたよ」

八重さんは顔を赤くして要塞に着いたことを教えた。

要塞には何十人の見張りがあり、レーザー砲が無数にあった。

「じゃあ亮ちゃん、行くよ」ギュツ

「分かりました……って、なんで抱きつくんですか!手を繋ぐだけでもいいじゃないですか!」

「いいじゃない別に。それとも嫌?」むにゅ

「うっ」

八重さんは僕の腕に抱きついた。八重さんの胸が当たり、心拍数が上がった。ただでさえ胸が大きくて無防備なのに抱きついてくると理性を保つことができない。

「それじゃあ行くよ」

そうやって八重さんは時飛ばしを使った。

時飛ばしは自身以外の時間を止めることが出来る。ドラゴンボール超のヒットは約0.1秒間ほど止めることが出来るが、八重さんは5秒間止めることが可能である。

さらには跳躍した時間を貯めることでその貯めた時間を使って別空間（パラレルワールド）を作ることによって自由に移動することもできる。

別空間にいる間は敵は視認できたとしても触れることが叶わず、また別空間にいる間は八重さん自身も相手に触れられない。

また、物体をすり抜けて人体にだけ影響を与える透明の気弾を使い、正拳突きのように放つ。

たとえ時飛ばしが通用しない相手でも、八重さんは僕と同等の強さのため、実力はある。

僕達は高速で移動して要塞の中に入った。

兵士達は時間を止められていたため、動いていなかった。

僕達は時飛ばしの時間が過ぎる前に誰もいない部屋に入った。

「亮ちゃん、あそこがエレベーターだから最上階にドクター・チャンがいるよ」

「分かりました。あと抱きつかないでくださいね」

「え〜いいじゃない」

「ダメです」

八重さんは頬を膨らませた。

「そんな顔してもダメです。仕事なんですからちゃんとしてください」

「……分かった」

頬を膨らませながら渋々承諾してくれた。僕達は再び時飛ばしを使ってエレベーターに乗って最上階に向かった。



エレベーターに設置された監視カメラに細工をして僕達が見えないようにした。

「亮ちゃんってホモ？」

「……いきなり何を聞くんですか？」

「だって仕事の時は義晴君といるじゃない。しかも息ピッタリじゃない。もしかしたらと思っ……」

「そんなわけ無いじゃないですか。僕は普通に女の子が好きですよ」

「ふくん、じゃあわたしは？」

「えっ？」

いきなり聞いてきて僕は戸惑った。

「……それは……その……可愛いとは思ってますよ」

好きとは言えなかった。恋愛感情はないが素直な気持ちを伝えた。

「……ありがとう」

八重さんは頬を赤くしてお礼を言う。僕も恥ずかしくなり、顔を背ける。

確かに八重さんは可愛いけど好きって程じゃない……と思うと何故か心拍数上がる。好きじゃないと思うと何故か心が痛い。

すると扉が開いた。

「あっ」

そこは12階で兵士がボタンを押してエレベーターを止めたらしい。

僕達は時飛ばしで時間を止めてその階に降りた。

幸い兵士は気づくことはなかった。

僕達は階段で向かうことにした。

「焦ったね。わたしも気を抜いてたよ」

「そうですね。ここからは慎重に行きましょう」

「わかった。あと……」

「何ですか？」

「その……できればさん付けはやめてくれるかな？わたし達同い

年だから」

「えっ?」

「そっ、その仕事の時にさんまで読んでたら時間の無駄じゃない?だから……お願い」

八重さんは上目遣いで言ってきた。

「……じゃあ、八重」

「……」

僕達は顔を赤くした。気まずくなり、八重さんが言ってきた。

「やっ、やっぱり無しにしよ。恥ずかしくなってきた」

「そっ、そうですね。いつもの呼び方がいいですね。でも……敬語はやめます。いや……やめようかな」

「それがいいよ。わたしの時だけでいいよ」

八重さんも賛成してくれた。僕も敬語はあまり得意ではなく、普通に話せる人が増えて安心した。

「じゃあ亮ちゃん。いこ……あっ」

八重さんは階段を踏み外して後ろに落ちそうになった。

「やっ、八重さん」

僕は助けようとして手を差し伸ばしたが、八重さんは舞空術を使って宙を浮いた。

僕も舞空術を使ったが間に合わず、八重さんに当たった。

むにゅつと音がした。顔には柔らかい感触が包んでいた。それは八重さんの胸だった。

「りよっ、亮ちゃん……」

八重さんは顔を真っ赤にして僕の名前を言った。

「……」

このあと、八重さんにビンタされた。ちなみに仕事は成功して、神界に戻って行ったが、一週間は話せなかった二神（ふたり）であった。



ミッドガルに来て一週間。試験が終わった日の夕食は、普段と少し違っていた。

「これは——？」

皿があらかた空になったタイミングでオートメイドが運んできた物を目にした俺は、テーブルの向こうに座る深月へ問いかける。

「見て分かりませんか？デザートですよ」

「デザート？何で今日に限って……」

焼きプリンの上にクリームを乗せ、さらにチョコチップが綺麗に散らされたデザートを眺めて呟く。

「補欠ではありませんが、テストに合格したご褒美です。努力には報奨が与えられるべきだと思いますので」

深月はこちらを見ずに淡々と声で答えた。

「いや、美味そうでありがたいけど……もしかして、深月が作ってくれたのか？」

「なっ……ななな、何でそう思ったんですか？」

フォークを取り落とし、動揺しながら問い問い返してくる深月。

「リーザが言ってたんだよ。深月の作るスイーツが美味しいってさ。だからこれも深月の手作りなのかなって」

「そっ、それは……」

「その反応だと、当たってるんだろ？」

「……………はい」

深月は体を小さくし、微かな声で認める。

「どうしてそう言わなかったんだ？俺はすごいありがたいのに」

「だって……もし兄さんの口に合わなかったら恥ずかしいですし、率直な感想も聞けなくなりますから」

視線を逸らし、頬を赤くしながら深月は言う。

「つたく……生徒会長になって度胸が付いたかと思ったら、変なところで臆病なままなんだな」

俺は苦笑し、デザートをスプーンで掬って口に運ぶ。まろやかな甘みが舌の上に広がった。

「——うん、めちやくちや美味しい」

「ほ、本当ですか？」

「ああ。っていうかもう既に全校生徒のお墨付きを貰ってるんだろ？もっと自信もつていいと思うけどな」

「目の前の人が美味しいと言ってくれなかったら、多数意見など意味はありません」

深月は真顔でそう言い切る。

「……何か、深月が生徒会長になれた理由が分かった気がしたよ」  
感嘆の息を吐いて、俺はデザートを全て腹に収めた。

「ごちそうさまでした。デザート美味かったよ。ありがとな、深月」

「はい、お粗末様でした」

その時に見せた深月の表情は、三年前を思い出させる——とでも自然で、力の抜けた笑顔だった。

食事を終え、自分の部屋へと戻った俺は、自分のノート型端末のランプが点滅していることに気が付いた。

見てみるとイリスからのメールが来ている。この端末には通話・メール機能も備わっているのだ。もっとも現在登録されているアドレスは深月とイリスの二件だけなのだが。

『砂浜で待っています』

本文にはそれだけ書かれていた。

俺は端末画面の端に表示されている時間を見る。

「七時二十七分か……外出禁止になるのは八時からだからまだ大丈夫だな」

端末を持って部屋を出る。歩きながら深月にメールを打った。

『少し外に出てくる。八時までには戻る』

宿舎の出入りは深月がチェックしているはずなので、一応連絡しておいた方がいいだろう。

宿舎を出て、砂浜沿いの道を歩く。

何となくだが、彼女がいるのは最初に会った場所のような気がする。あまり時間はないため早足で先を急ぐ。

深い藍色に染まった夜空には、数えきれない星たちが瞬いていた。

白い砂浜を撫でるように寄せては返す波が、規則的な潮騒を響かせている。

俺の勘は当たっていたようで、イリスはまさに初めて視線を交わした波打ちに立っていた。制服は着ているが、靴とストッキングは脱いで裸足になっている。

白い足を波に晒し、イリスは彼方の水平線を見つめていた。

ざっ、ざっ、と砂を踏みしめて近づいていく。その音に気付いたイリスは俺の方に顔を向けた。

「あ——モノノベ、来てくれたんだ」

「まあ、待つてるって書いてあったしな」

イリスの数メートル手前で足を止め、俺は言う。

「ごめんね、こんな時間に呼び出したりして。ミツキちゃん、怒ってなかった？」

「八時までは外に出てもいいはずなんだが……もしかしたら帰った後、怒られるかもな」

「ふる、ミツキちゃん厳しいもんね」

笑うイリスの顔に心臓が跳ねる。星の光を浴びる銀髪の少女は、普段以上に浮世離れた美しさを宿していた。

「……それで、何の用なんだ？」

多少声が上擦るのは自覚しながら問いかける。

「ああ、えつとね、まず、その……モノノベにちゃんとお礼が言いたくて」

「礼ならテストの後、数えきれないぐらい言ってもらったよ。もう十分だ。それに俺はそこまで感謝されるようなことはしてない」

「そんなことない！モノノベがいなかったら、あたし今回も落ちこぼれのままだったもん。だから——ありがとうっ！」

イリスは勢いよく頭を下げる。長い銀の髪がふわっと広がっ

た。

「ただ一緒に練習してただけなんだけどな……まあ、どういたしまして」

譲り合いをしても時間の無駄になりそうだったので、俺は素直に感謝を受け入れる。

「あ、あの、それでね……モノノベに聞きたいことがあるんだけど……いい?」

ぎこちなく顔を上げたイリスは、上目遣いで訊ねてくる。

「別に構わないが……」

俺が頷くと、イリスは俺のすぐ傍まで近づいた。

「モノノベは——どうしてあたしを助けてくれたの?」

「え?」

「あんなに親身になって、真剣に、一緒に頑張ってくれたのはモノノベが初めてだった。クラスの皆は自分にも他人にも厳しい人たちだから頼れなかったし……ミツキちゃんはよくあたしの面倒を見てくれたけど、やっぱりそれは生徒会長としてだったと思う」

イリスはさらに俺に近づく。もう体が触れそうな距離だ。

「だから、知りたいの。モノノベの気持ち」

じつと至近距離から見つめられて、心臓の鼓動が速くなる。

「そ、それは……」

「それは?」

「それは………たぶん、似てたからなんだ。昔の深月に」

理由の一つを、俺は口にする。

俺が勝手に感じている借りはとても個人的なもので、説明しようとするにニブル時代の話をしなければならなくなる。だからそこからについては語らない。

「あたしが、ミツキちゃんに?うそ、あたし全然ミツキちゃんと違うよ?」

「昔は、イリスみたいなのところもあったんだよ。そしてこれは今もだけど、イリスと同じように一生懸命だった。だから……放っておけなかったんだと思う」

俺の答えを聞いたイリスは顔を伏せて、小さな声で呟く。

「そっか……そういうことだったんだ。ちよつと、残念。でも……いいや。ここからは、あたしが頑張ればいいんだもん」

「イリス？」

よく聞き取れずに俺は声を掛けると、イリスは勢いよく顔を上げた。

「モノノベ！」

「な、何だ？」

「あのね、あたし……もつとモノノベと仲良くなりたいの。だ、だからその……もしよかった、お、オトモダチに——」

ウウ

……。

と、そこまでイリスが言った時、突如として辺りにサイレンが鳴り響いた。

『緊急警報、緊急警報——警戒レベルC、タイプ・ホワイト。繰り返す、警戒レベルC、タイプ・ホワイト！』

続いてアナウンスが警報の概要を説明する。

「ホワイトって——」白”のリヴァイアサンだよな……亮の言う通り生きていたのか……警戒レベルCってヤバいのか？」

俺はそう訊ねるが、イリスはこちらの声など聞こえていない様子だった。

「リヴァイアサン……」

表情を強張らせて、ドラゴンの名を呟くイリス。

そうだ——イリスが家族を失ったのは、リヴァイアサンによる竜災が原因だった。

『竜伐隊・ミッドガル防衛部に選抜されている生徒は各自持ち場に着いて準備戦闘待機。それ以外の生徒・職員は屋内か近場のシェルターに避難。特に沿岸部にいる方は早急な退避をお願いします』

「おい、退避しろって言ってるぞ？」

「……近くにいるんだ……あの、ドラゴンが……」

「しっかりしろ！とにかくここから離れるぞ」

呆然としているイリスの腕を掴み、防波堤の上まで引つ張って

いく。

低い音と振動が足元から伝わってきた。

沖の方を見ると、静かだった夜の海から巨大な四角い物体が次々と浮上している。そしてそれは島を取り囲むように円形に展開した。

押し上げられた海水が砂浜に大波となって押し寄せる。防波堤まで届いた波頭は、弾けて白い波しぶきとなった。

「あれはまさか……環状多重防機構（ミドガルズアルム）？」

「そうだよ。ここから見えるのはほんの一部……最終防衛ライン。第一次から三次までの防衛ラインはもつと沖合にあるの」

ようやく我に返ったのか、イリスが淡々とした声音で教えてくれる。

「イリス、平気なのか？」

「あ、うん、大丈夫。ごめんね……ぼうつとしちゃって。早く避難しなきゃいけないよね。そうじゃないと、みんなの足を引っ張っちゃう」

イリスは真剣な顔で言うと、防衛堤の上に置いておいたらしい自分の靴を履き、夜空を見上げた。

武器を持った制服の少女たちが上空を通り過ぎ、海へと飛んでいく。

あれはミッドガル防衛部に選抜された竜伐隊なのだろう。風を生み出すことで、高速で飛翔している。

「確かに、こんなところにいたら邪魔にしかないな」

「うん、すぐに宿泊へ——っ……」

駆け出そうとするイリスだったが、急に腹部を抑えて蹲った。

「なっ……どうしたんだ!？」

「きゅ、急にお腹が痛くなつて……あはは、合格祝いに食べ過ぎちゃったせいかな……あ……だんだん収まってきた……」

額に脂汗を浮かべながらもイリスは立ち上がる。

「……歩けるか？」

「平気……急ごう、モノノベ！」



腹部は一過性のものだったらしく、イリスは俺の手を引いて早足で歩き始めた。

## 元上官

学園近くにある共同宿舎へ向かうイリスとは途中で別れ、俺は深月の個人宿舎へと戻って来る。

「深月、いるかー?」

吹き抜けのエントランスで呼びかけてみるが返事はない。深月は竜伐隊の隊長らしいので、もう出勤してしまったのだろう。

状況がどうなっているのかは気になるが、メールで訊ねて仕事の邪魔になってはいけない。俺は大人しく待機しておくことにして、自室へ戻った。

落ち着かないので勉強でもしていようとノート型端末に触れた瞬間、プルルルという着信音が鳴り響く。

深月かと思ったが、画面には相手の番号が表示されていない。着信音はいくら待っても鳴り止まず、俺は躊躇いながら応答ボタンを押した。

すると画面にノイズ混じりの映像が映し出される。軍服を着た若い男が画面の中で口元を歪めた。

その笑みが、俺の心を凍りつかせる。

『———やあ、久しぶりだな。物部少尉』

「ロキ、少佐……何で———」

俺は掠れた声で彼の名を口にする。

ロキ・ヨツンハイム少佐。ついこの前まで直属の上司だった人物。

ニブルにおける暗部そのものとも言える男が何故———。

『いやあ、本来ならもう少し早く連絡を取るつもりでいたんだが……環状多重防衛機構（ミドガルズオルム）の防壁は電子的にも堅牢でね。迎撃モードに移行している今でなければ、ミッドガル側にも堅牢かれず通信することはできなかったんだ。遅れてすまなかった』

「遅れて……俺はあんたの連絡を待ってなんか———」

『あんた?物部少尉はたった一週間ほどで、かつての上官に対する口の利き方を忘れてしまったのかな?』

切れ長の目が画面の向こうから俺を射る。それだけで感覚が引き戻される。彼の部下だった長く暗い日々へと。

「……すみませんでした、ロキ少佐」

『それでいい。だがまあ緩んでしまうのも無理はない。ミッドガルはニブルに比べれば楽園のようなどころだろう。まだ未完成の君が影響を受けるのは必然だ。全く……最後まで仕上げる事ができなかったのは、本当に残念だよ。』

「用件は……何ですか」

『ああ、そうだったな。話が脱線してしまうところだった。いやね、私は君に一つ頼み事をしたいんだよ』

「頼み事？」

『私はもう君に命令できる立場ではない。だから頼み事だ。物部少尉は“D”のドラゴン化については既に知っているかな？ニブルにおいては機密事項だったが、ミッドガルでは生徒全員に周知されているはずだ』

表面上だけの笑顔を作って、ロキ少佐は問いかけてくる。

「……はい。竜紋が変色した“D”がドラゴンと接触すると、同種のドラゴンになるという現象ですよね？」

『その通りだ。何とも恐ろしい話だね。あんな化け物どもが増えると考えただけでゾツとする。何としてでも防がねばならない事態だ。君もそう思うだろうか？』

「は、はあ……それはもちろん」

何となく嫌な予感がしながらも、俺は肯定する。

『しかし、だ。肝心のミッドガルはその対応について最善を尽くしてはいない。竜紋の変色が確認された場合は地下深くのシエルターへ当人を隔離し、他の“D”でドラゴンの迎撃に当たるといった作戦を立てている』

「そのどこが……まずいんですか？」

『惚けているのかな？君にも分かっているはずだ。最も効率的な対応策は——竜紋の変色を起こした“D”の処分だと』

ロキ少佐の冷え切った眼差しは、俺の心さえも凍てつかせたく

るようだった。

「……そんなことは人道的にも、”D”の社会価値からも認められません。一人の”D”が死ぬことは、世界にとって大きな損失です」

第一、誰がそんなことを提案できるというのか。

ドラゴンの脅威に晒されながらも、世界は緩やかに発展し、一定の平和を維持してきた。それは、”D”たちがエネルギー資源を補っているからに他ならない。

『増えたドラゴンがまき散らす経済的、人的被害の方が遥かに大きいと、私は思うがね。だが君の言う通り、この方法が公に承認されないのも事実だ。世界は”D”の機嫌を損ねることを恐れているし、”D”は同胞を見捨てない。何しろ明日は我が身なのだから』

「なら——」

『ゆえに、裏で動く者が必要なのだ』

こちらの言葉を遮って、ロキ少佐は俺を見据える。

「まさか、俺にそれをやれと言うんですか？」

『やれ、ではない。やってくらないかと頼んでいるのだ。君がミッドガルへ異動になったのは全くの予定外だが、元々そちらに息の掛かった者を送り込む準備はしていた。その役割を君が担ってくれと、手間が省ける。なに、いざという時が来たら”D”を一人殺してくれるだけで構わない』

「簡単に……言わないでください」

奥歯を噛み締めて、俺はロキ少佐を睨む。

『簡単だよ。私が育て上げた物部少尉にとっては何。”D”であろうと何であろうと、相手が人間である限り君は負けない。君は我がスレイプニル最強の”悪竜（ファフニール）”なのだから』

「……………」

俺は何も言えなかった。ロキ少佐の言葉は称賛ではない。ただの呪いだっただけだ。

『まあ、今すぐ答えを出さなくても構わない。ただ、もし君の協力が得られなかった場合に、多少非効率な手段を使うことになるだろう』

う。余計な損害を出してしまうかもしれないそのことは——よく考えておくことだ。あともう一つ……』

「?。」

『もしかすれば奴も現れるかもしれないからね』

「奴? 誰ですか? それは」

俺は誰の事だか分からなかった。

『君も知っているはずだよ。ドラゴンを圧倒する存在を』

「!!!」

俺には心当たりがあつた。ドラゴンを圧倒する存在——間違ってなく亮の事だ。

『奴は五年前からヘカトンケイルやクラークン、そしてリヴァイアサンと戦っていると聞いている。私も映像を見たのが初めてだが驚いたよ。彼は間違ひなくドラゴンを凌駕する力を持っている。我々の脅威となる存在だ。』

「話は聞いています。何でも手からレーザーのようなものを放つだとか……」

『そうだ……それに何やら髪の毛を金色に輝かせることでパワーが上がるみたいだ。しかし、さっきも言ったが君は人間相手である限り君は負けない。その時は頼むよ。』

プツンと通話が途切れ、画面が消える。

俺は椅子の背もたれに体重を預け、天井を仰いだ。

サイレンは、まだ鳴り続けていた。



その頃、第11世界では、この世界の”世界神” 小早川恵と第12世界の”世界神” 大島亮が仕事で来ていた。

今回は人間の文明レベルを調査していた。

「恵さん、こっちは終わりました」

「ありがとう、わたくしもうすぐで終わりますわ」

僕達は資料をまとめていた。普段は“天井塔”で作業をする  
が、恵さんは外でやるのが捗ると言う。

そして地面には沢山の人が倒れていた。彼らはバルド人とい  
う民族で気性が荒く、敵を見つけると襲いかかる野蛮人らしく、僕が  
付いた時には全員を蹴散らしていた。

「それより亮さん、聞きましたよ。八重さんの胸を触ったらしい  
ですわね」

「なっ」

僕は頬を赤くして驚いた。何で恵さんがその事を知っている  
かの分からなかった。

「八重さん自身から相談されましたね、またやらかしたしたわね」  
「ちっ、違いますよ！あれは事故ですよ。それにまたって何です  
か？それも事故です」

僕は首をブンブン振って否定した。僕の意味でやったわけ  
はなく、本当に事故でそうなったただけだ。

「本当にですか？」

恵さんはジド目で言ってくる。普段から八重さんが僕に抱き  
ついてくるので僕が平常心を保てず、襲いかかったと思っ  
ているようだ。

「本当です。僕はそんな変態ではありません。大体、八重さんが  
大胆なのがいけないんです。あんな事されたら誰だって……」

嫌だとは言えなかった。何故かそれを言おうとすると口に出  
さなくなる。

八重さんとはただの仕事仲間で恋愛感情は抱いていないはず  
が、何故か最近はドキドキする。

「顔が真っ赤ですわ。本当は好きじゃありませんの？」

「そっ、そんな事……無いかもしれません」

「それは……抱きつくのはやめて欲しいですけど……嫌いじゃあ  
りませんよ。むしろ優しく助けてくれる時もありますし、笑顔が可  
愛くてその……何と言いますか……はっ！僕ったら一体何を言っ

……」

何故か無意識に思ってしまった事を言った。

八重さんとは本当に仕事仲間なはずなのに否定できない。  
すると恵さんの顔がニヤけていた。

「そうですか……では仕事も終わりましたので戻りますわよ」

「あっ、はい」

恵さんは資料手に杖で僕達を囲み、光となって神界に戻った。

恵さんの手にはボイスレコーダーを持っていることに気づかなかった。

その翌日、八重さんは僕を見るなり顔を赤くして走り出すことが多々あった。他の神達は「やるな」とか「少しは素直になつたな」と言われた。

## 迎撃準備

翌日、俺は宿舍からの地下通路を通って学園へと登校した。

イリスの竜紋が変色し、リヴァイアサンに見染められて今シエルターで隔離されている。そのため深月に頼んで護衛役を任された。

とは言え、緊急事態の今、もちろん授業は行われていない。誰もいない静かな廊下を抜けてエレベーターに乗り、一番下のボタンを押した。

長い下降感の後、第三演習場よりも深くに位置するシエルターに辿り着く。狭い廊下の先にある扉の前には、金髪の少女が立っていた。

「あなたがイリスさんの監視役になったというのは本当でしたね」

少女——リーザが不満げな顔で俺を見る。

「監視役じゃなくて護衛役だ。リーザは昨日からずっとイリスに付いていたのか?」

訊ねると、リーザは胸を張って頷いた。

「クラスメイトですから。困った時、力になるのは当然ですわ」

「そっか、リーザはやっぱり仲間思ってたんだな」

「や、やっぱりって何ですの!あなたにわたくしの何が分かるというんですか?」

顔を赤くしてリーザは俺を睨む。

「何度も話してれば、それなりに分かるさ。今だってイリスのことが心配だから傍にいたんだろ?」

「……親元から離れて暮らすわたくしたちにとって、同じ教室の仲間は家族同然。心配しないはずがないでしょう?」

視線を逸らし、ぼそぼそと小さな声で答えるリーザ。

「そんなに気にかけてたのなら、普段からもう少し優しくしてやればいいのに……。イリスは落ちこぼれとか言われたこと、結構気にしてたぞ」

リーザは「う……」と呻くが、気を取り直すように首をぶんぶ



んと振って俺を再び睨んだ。

「あ、姉というのは、得てして妹には厳しいものですわ。思ったことを遠慮なく伝えるのも家族ではなくて？」

そう指摘され、俺は考える。

確かに優しくするだけが愛情というわけではない。自分の欠点を容赦なく指摘する相手がいたからこそ、イリスもあれだけ頑張れたのだろう。

「……かもな。リーザは今のままでいいのかもしれない。そう考えると、なかなかできた姉だな」

「ほ、褒めたって何も出ませんわよ！」

照れているのか、声を上擦らせてリーザは言う。

「別に何か貰おうとかは思っていないさ」

俺は苦笑して首を横に振る。

「だったらいいですわ。あ、言っておきますが、あなたのことはまだクラスの一員と認めたわけではないですから、家族愛は適用されていません。そこのお忘れなきよう」

「——了解。まあとにかく、今は交代だ。昨日から寝てないんだろ？戦いに備えて、ゆっくり休んだ方がいい」

俺の言葉に、リーザはむっとした顔をする。

「言われなくてもそうしますわ。正直不安ではありませんが、一番仲のいいあなたが傍にいた方がイリスさんも落ち着くでしょう」

そう言っってリーザは扉の前から離れ、エレベーターに向かう。

だがふと思い出したことがあり、俺はリーザを呼び止めた。

「——リーザは二年前の、クラーケン戦のことは知っているのか？」

「もちろんですわ。わたくしは最前線で戦っていましたもの」

エレベーターの前で足を止めたリーザは、振り返らずに答える。

「クラーケンを倒したのは……深月なんだよな？」

「ええ、その通りですわ。深月さんは二体のクラーケンを仕留め、その功績により今の地位まで上り詰めました」

二年前、”紫”のクラーケンがミッドガルに侵攻し、生徒の一人がつかいとなって同種のドラゴンになった。それを仕留めたのが深月だ。

リーザの声が硬くなったのを俺は感じた。

「納得がいつてない口ぶりだな」

「——納得はしていますわ。あの時は、他に選択肢などありませんでしたから。けれど感情は別の問題です。わたくしは、家族を殺した深月さんを許すことはできません」

「家族……？」

「あら、そこまでは知らなかったんですね。二年前、ドラゴン化したのはブリュンヒルデ教室、出席番号四番、篠宮都。篠宮先生の妹さんですわ」

リーザは平坦な声音で言うと、エレベーターに乗り込む。こちらに表情は見せないまま。

「それではイリスさんのこと、お任せいたします」

エレベーターの扉が閉まる。俺が呆然としていると、プシュツと音を立てて背後の扉が開いた。

「モノノベ……」

ネグリジエ姿のイリスに心臓が跳ねる。

「い、イリス、聞こえたのか？」

「うん……リーザさんにお礼を言おうと思って待ってたの。昨日はすごく親切にしてくれたから。でも、出て行くタイミングがなくて

——」

苦笑いを浮かべ、イリスは頭を搔く。

「今の話、知ってたか？」

「一応、噂だけはね。あたしがミッドガルに来たのは一年前だから……その頃にはもうミツキちゃんは生徒会長だったし」

「そうなのか……ただ、それはともかく寝起きだったなら着替えてきてくれ。目のやり場に困る」

イリスのネグリジエは生地が薄く、体のラインは薄らと透けて見える。

「……少し恥ずかしいけど、モノノベならいいよ。気にしないで入って」

「気にしないって——おい、ちよっ!」

イリスは俺の腕を掴んで部屋に引っ張っり込んだ。中は思ったよりも広い。シエルターというからもっと簡素な場所を想像していたが、宿舎の部屋とそう雰囲気は変わらない。

部屋には寝心地の良さそうなベッドと、朝食のトレイが置かれた机、大きなクローゼットがあり、トイレやバスルームらしき扉もあった。

さすがに窓はないが、その代わり壁には大型のモニターが取り付けられている。画面にはミッドガル周辺の様子がいくつもの画面に分割されて表示されていた。

「ささ、モノノベ、座ってよ」

ぽすんとベッドに腰を下ろしたイリスは、自分の隣をポンポン叩く。

「……そこにか?」

「うん」

真面目な顔で頷くイリス。緊張しながら俺はイリスの隣にすわる。

するとイリスは俺の方に体重を預け、腕を絡ませてきた。

柔らかな感触を腕に感じる。

「お、お」

「——ごめん、しばらくこのままでいさせて。お昼から、また検査なの。だからそれまで……」

イリスの必死な声を聞き、俺は息を吐く。深月はイリスが取り乱さず検査に協力していると言っていたが、やはり怖いし心細いのだろう。

こんなことで少しでも支えになれるのなら、今はじっとしていよう。

邪なことを考えてしまわぬように、モニターに映し出される島の景色に意識を向ける。

衛星からと思われる画面もあり、そこには小さな島を四重に取り囲む環状多重防衛機構（ミドガルズオルム）がはつきりと映し出されていた。第一防衛ラインの外側に多数の船影が見える。あれは恐らくニブルの軍艦や空母だろう。

他の映像には、島の上空を哨戒している竜伐隊の少女たちが映っていた。その中にはフィリル、レン、アリエラの姿もある。

「あ」

ちらつと見てはいけないものを目にしてしまい、俺は声を上げる。

「フィリルちゃんのパンツ……見えたね」

俺の視線を追っていたのか、イリスは小声で呟く。

「い、いや、画面に映ったんだから仕方ないだろ。というかスカートで空飛ぶ方がおかしいって」

「男の人ってやっぱりパンツが見えると嬉しいの?」

上目遣いで問いかけてくるイリス。

「は?……そんなわけ……ないだろ」

「あつ、目を逸らした!やっぱり嬉しいんだ」

体をさらに密着させ、イリスは無理やり視線を合わせてくる。

「そういう言い方されると俺が変態みたいだろ!嬉しいとかじゃなくて、少し得した気分になるだけだ」

「それって……喜んでるよね」

「う……」

半眼で見つめられ、俺は言葉に詰まる。

イリスはそんな俺をじーっと見つめた後、消え入りそうな声で問いかけてきた。

「……ねえ、モノノベはあたしのパンツでも嬉しくなるの?」

「な、何をいきなり——」

慌てる俺に構わず、イリスは顔を赤くしながら言葉を続ける。

「モノノベが喜ぶなら、見せてあげてもいいよ?ずっと……何かお礼をしたいなって思ってたの」

イリスはそう言ってネグリジエの裾を指で摘む。

否応なく俺の視線はそこに吸い寄せられた。

(えっ・おい、ちよつと待て——。)

息を呑む。鼓動が速くなる。無意識に唾をぐくりと呑み込んだ。

裾が少しずつめくられる。露わになっていく白い肌から目が離せない。

イリスの指は微かに震えていた。真つ赤な顔で、イリスはネグリジェの裾を上げていく。

柔らかかそうな太ももが俺の理性をぐらぐらと揺らす。ネグリジェはどうとう足の付け根あたりまでめくり上げられた。

(これ以上めくると本当に見え——。)

「そんなお礼はしなくていいって!」

ギリギリで我に返った俺はイリスの手を押しとどめた。

「モノノベ……あたしのは、見たくないの?」

不満げな表情でイリスは問う。

「俺が見たいとか見たくないとか、そういう問題じゃない。軽々しくそういうことをするなって言ってるんだ。男っていうのはイリスが思ってる以上に危険な生き物なんだよ」

「……軽々しくじゃないもん。すつごく勇気を出して言ってる問題」

「だったら余計にダメだ。もっと自分を大切にしろ」

イリスは単に見せるだけのつもりかもしれないが、それにより大きな欲望を喚起してしまう。欲望に負ければ査問会議へ直行だし、我慢し続けるのも辛い苦行だ。どちらに進んでも地獄なら、回れ右して引き返すのが正解だろう。

「ううー、モノノベのイジワル」

「別に意地悪を言ってるつもりはないんだけどな……」

どうしたものかと俺は頭を掻く。現在でもかなりの自制心を投入しており、これ以上刺激に耐えられる自信はなかった。

モニターに意識を戻すが、またイケナイ物を見てしまうとまずいので、海しか映っていない画面へ視線を固定した。

「あたし、モノノベにお礼をしたいの……」

ぶつぶつと呟きながら、俺に寄りかかってくるイリス。薄い布越しにイリスの体温がより鮮明に伝わってきた。

俺は何とか会話の流れを変えようと話題を探す。

「い、イリス、あの海しか映っていない画面はいつたい何なんだ？

映像は動いているみたいだから、定点カメラじゃないんだろうけど――

――

イリスに早口で問いかけると、途端にイリスの表情が曇った。

「ああ……あれはリヴァイアサンを監視している映像みたいだよ。深いところにいるから見えないけど、海水の下には――あいつがいるの」

俺は一番良くない方に話題を逸らしてしまったことに気付く。

「……悪い、気分を暗くさせたな」

「ううん、いいよ。こうしていれば、またすぐ元気になれるから」

イリスは微笑み、俺の腕により強くしがみ付いた――。



その頃、カリブ海にあるセントマーティン島ニブル基地では基地長ホープ准将がリヴァイアサンの資料を見ていた。

ホープはミッドガルの竜伐隊とリヴァイアサンの交戦を見るため、画面にミッドガルの映像を写し出していた。

しかし、ホープは竜伐隊のことは気にしていなかった。彼が興味あるのは二年前、この近くで”紫”のクラークンを徹底まで追い詰めた存在が必ず現れると確信している。

ホープはコーヒーを飲みながら、五日前に起こった”白”のりヴァイアサンとの戦闘を見ていた。

(久しぶりに見たな……さて、どうなるものか)

ホープはコップを置いてミッドガルが映る画面を見た。

「ホープ准将、ロキ少佐から通信です」

「分かった」

アラン大尉はホープにロキから通信が入っていると伝えたと、ホープは返事をしてパソコンに通信を繋げた。

「お久しぶりです。ホープ准将」

画面には悠の元上官、ロキ・ヨツンハイム少佐が映った。

「久しぶりだなロキ少佐……一体何のようだ？」

「聞きたいことがあります」

「聞きたいこと？」

ホープは首を傾げた。何のことか彼には分からなかった。

「ドラゴンを圧倒する少年についてです。ホープ准将は実際に彼の戦う姿を見ている筈です」

「ああ、そのことか……私も驚いたよ。空中に浮いていたし、手からレーザーのようなものを出していたな。そして何より急に金色の光が出したと思えば、髪の毛が金色に変色していたよ。しかも攻撃の威力は数段に上がっていたな」

「ええ、私もびっくりしました。最初は何のことか分かりませんでした。映像を見て理解しました」

「そうだろうな。我々の常識を遥かに超えている。ドラゴン以上に脅威となりうる存在だ。何をしでかすか分からない」

「そうですか。我々も彼の捜索をしていますが足取りを全く掴めずにいます。現れるのはドラゴンとの戦闘の時だけで、その後は光となって空に向かって行くのを見る限りです」

ロキ少佐は三年間、亮の情報を調べていたが、全く掴めないでいる。目撃するのは必ずドラゴンと交戦している時だけで他は何も分からなかった。

「それより君の部下がミッドガルに異動になったのは本当か？」

「ええ。最強の悪竜（ファフニール）にするはずでしたがとても残念です」

「ファフニール計画……楽しみにしているよ」

「はい、それではまた」

ロキは通信を切って画面はプツンと消えた。

「宜しかったんですか？あの事を伝えなくても」

アランはホープに問いかけた。

「……ああ、あれか。確証が無ければ誰も信じる者はいないだろう」

「しかし、昔の資料には載っていたのでは？」

「ああ、そうだ。あの少年の服装は古代エジプト文明の壁画に描かれていたのとそっくりだ。何でも探検家の話では神と呼ばれていたそうだが、それを誰が信じる？」

「確かにそうですが……それ以外に何かあるのでしょうか？」

「確証がないのだ。たとえ本当だとしても誰が信じる？私は神など信じてはいない」

謎が深まるばかり。ホープたちは彼の正体が神であることを突き止めていた。本人たちは信じようとはしなかったが。



## ”白”のリヴァアアサン

ミッドガルから離れた無人島では、大島亮が杖の中で修行をしていた。ここは”精神と時の部屋”と似ている。

神の気が充満しており、気を高めた上で漏らさずにコントロールすることで楽に動ける異様な空間。

そこで亮は天津飯の”四身の拳”を使って四人同時で戦っていた。

亮の”四身の拳”はセルと同じで分身しても強さは変わらない。五年前までは天津飯のように強さが四分の一になっていたが、修行したことでその弱点を克服した。

「あと三時間……限界を超えるぞ！」

亮は自分の限界に挑戦していた。超サイヤ人に変身せず、重さ百キロの黒い服を着ていた。

ドラゴンボールに出てくる天界の神が作り出したものと同じで、二十キロの重さを五倍にしたのだ。

亮は自分の分身と戦い続け、杖から通信が入っていることに気づかないでいた。



ウウ……………。

サイレンの音で目を覚ますと、目の前にイリスの顔があった。昨日、イリスにお願いされて一緒に寝たが、いつの間にか朝になっていた。

「っ…………」

まさに息の掛かる距離ですーすと眠るイリスを見て、一気に意識が覚醒する。

背中を向けていたはずなのに、いつの間にか寝返りを打ってい

たらしい。

幸い、もうしがみ付かれてはいなかったので、俺はイリスから離れてベッドを降りる。

電気の消えた部屋で、モニターが明るく輝いていた。

サイレンはモニターからではなく、連絡用のスピーカーから響いている。

これはリヴァイアサンが、警戒水域に近づいたことを示すものの。

画面の中では、ついに戦いが開始されようとしていた。

環状多重防衛機構（ミドガルズオルム）よりも外側で、ニブルの軍艦がリヴァイアサンの進路を阻んでいる。海の中にゆらめく大きな影が見えた。昨日よりも浅いところを泳いでいるらしい。

その周囲でいくつかの水柱が上がった。

「魚雷か……」

とうとう攻撃が開始されたようだ。

次の瞬間、海に穴が開いた。

リヴァイアサンの能力——万有斥力（アンチグラビティ）。

あらゆるものを突き放す、拒絶の力。

押しつけられた海水が高波となって、何隻かの艦艇を沈めた。

豆粒のような船の大きさから考えて、穴の直径は十キロ近い。

そして穴から巨大な生物が浮上してくる。

「あれが……」 白 のリヴァイアサン

写真で目にしたことはあったが、こうしてリアルタイムの映像を見ると、その圧倒的な存在感に気圧される。

研究者によれば、このドラゴンはシロナガスクジラの変異体ではないかと言われている。

確かに前ビレ、背中にある噴気孔など、海洋哺乳類の特徴は備えている。しかしとても同じ生き物には見えなかった。

全身は白い外殻に覆われ、頭部からは大きな一本の角が生えている。

口に並んだ鋭い牙は肉食獣のそれだ。もはや同種と呼べるは

ずもない。

艦隊は一齐に、対空砲や対空ミサイルを撃ち始める。しかしそのどれもが空中で静止し、押し返された。

戻ってきたミサイルに直撃した艦艇が爆散する。

（深月の言っていた跳ね返されるって意味がわかったな）

俺は半壊状態になった艦隊を見ながら考える。

実弾で斥力場を突破するには、大きな慣性力をぶつけるしかない。相手の能力が分かっている以上、ニブルも可能な限りの高速弾を用いたはずだ。それなのにこの結果……。恐らくまだ、リヴァイアサンの用いる斥力場の最大出力は判明していないのだろう。

「今ので、いっぱい人が死んじゃったのかな？」

背後から震える声が響いた。振り返ると目を覚ましたイリスが、モニターを凝視している。

「……たぶん大丈夫だ。前線で攻撃を行うニブルの軍艦は、グラウドシステムで制御された無人艦がほとんどだからな」

対ドラゴン戦と戦うというのは、基本的に犠牲ありきの戦いだ。ゆえにニブルでは戦闘機、軍艦の無人化が進んでいる。人的被害は出ていないと思いたい。

その時、衛星画像を映し出していた画面に赤いマーカーが表示される。マーカーは高速でリヴァイアサンへ向かっていた。

「大陸間弾道ミサイル——」

ニブル管轄のものならば、思い当たる物がある。

対ドラゴン用ICBM・ゲイボルグ。ケルト神話の英雄外伝用いた投槍——その名が冠された最新兵器だ。先端部分にはミスリルが用いられ、どのようなドラゴンの表皮でも突き破り、内部で爆発する。

俺が開発に携わった中では、最も効果的と思える兵器だった。俺はユグドラシルとの取引で得た力を、そういった形でも活かしてきた。今、その結果が出ようとしている。

ゲイボルグは落下時に複数のブースターで加速を行い、最終速度はマッハ四十を超える。恐らくは、地球上で最速の実弾兵器。

人間が作り出した最強の槍が、上空からリヴァイアサンに到達する。

映像が一瞬歪み、凄まじい爆発で画面が白く染まった。付近を映していた画面も、わずかに遅れてホワイトアウトする。

「どうなったの……?」

イリスが不安げな声を上げた。

「分からない。当たりさえすればどんなドラゴンでも無事に済まないはずだけど——」

光が収まった後も、画面は煙に覆われて何も見えない。

だがしばらくすると煙が薄くなり——その中から白い巨体が泳ぎ出てくる

斥力場が煙を押し流し、無傷のリヴァイアサンが現れた。

「あんな爆発だったのに、何で平気なの?」

信じられないという様子でイリスは呻く。

「ミサイルも、爆発も、全部斥力場で押し返したんだろう。直後に煙が充満していたところを見ると、一時的に斥力場は狭まってる。あと少し——届かなかったんだ」

(やはり、無理なのだ。俺の力では——)

リヴァイアサンはニブルの艦隊をこえて、状多重防衛機構(ミドガルズオルム)の第一次防衛ラインに接近する。

円状に展開する高さ二十メートルほどの直方体ユニットに丸いレンズ口が開く。

数十の閃光がリヴァイアサンに放たれた。

「今度は戦術高エネルギーレーザーか」

レーザー兵器であるため、速度はゲイボルグを大きく上回る亜高速。撃った瞬間には既に命中している。だがレーザーはリヴァイアサンの前で不自然にまがり、後方へと抜けていった。

「も、モノノベ!今度は何が起こったの?」

ベッドから降りたイリスが俺の隣にしゃがみこんで問いかけてくる。

「推測だが、斥力場で空間そのものを湾曲させたんだろう。厄介な奴だ……状況によって対応を変えてる。あのレーザーは止められないと判断したんだな」

戦術高エネルギーレーザーの開発にも、俺は関わっていた。

技術開発部にはニブルで唯一の友人がいたので、訓練の合間にちよくちよく出入りしては知っていることをそれとなく伝えていたのだ。

俺がユグドラシルから得た力の情報は、ニブルの技術レベルを何段階も引き上げたと言っている。

しかし……これもドラゴンを倒すに至らない。

「ああ……第一次防衛ラインが越えられちゃうよ」

イリスは落胆の息を吐く。

「いや、越えさせるのは作戦みたいだぞ。竜伐隊が第二次防衛ラインで待機してる」

俺は別の画面を指差す。

レーザーユニットの上空でそれぞれの武器を構える少女たち。その中央にリーザの姿があった。架空武装——射抜く神槍（グングニル）を構え、リーザが何かを叫ぶ。

第一次防衛ラインと第二次防衛ラインのユニットから同時にレーザーが放たれる。

挟撃による飽和攻撃。空間を歪める回避法では全方向からの攻撃には対処できない。

レーザーの何本かが初めてリヴァイアサンに命中し、その外殻をやき、抉った。表皮に焼け焦げた筋がいくつも刻まれる。

しかし——あまりに対象が大きすぎる。痛みを感じるほどではないのか、リヴァイアサンは多少傷付くことなど構わず侵攻を続けた。

そこに、リーザを筆頭とした竜伐隊の攻撃が放たれる。

空間湾曲による防御のキャパシティを既にオーバーしていたリヴァイアサンは、攻撃をすべて捌き切ることができなかつた。リーザの放った極太の閃光が、リヴァイアサンの左ヒレを貫通する。

牙を剥き出し、初めて反応を示す白き怪物。

「つ……」

隣にいたイリスが、突然ですが脇腹を押さえた。

「おい、大丈夫か？」

「……ダメ、怒ってる……みんな、逃げて——」

ネグリジエの生地を透かして、竜紋が強く輝いているのが分かった。

リヴァイアサンの巨大な角——その周囲の景色がぐにやりと歪んだ。

巨大な口を開けるリヴァイアサン。モニター越しで音は聞こえないが、咆えたのだと俺には分かった。

海が——裂ける。

リヴァイアサンの進路上にあったものが、一直線に全て吹き飛ばされた。巨大なレーザーユニットが千切れ飛び、周囲の海に落下する。

隊列を組んでいた竜伐隊も、散り散りになってしまう。

ずうううん——と、俺たちのいるシエルターにも低い振動が伝わってきた。

衛星画像を見ると第二次防衛ラインどころか、第三次と最終防衛ラインの一部まで崩壊している。

恐らくは斥力場を前方に展開し、砲弾として放ったのだろう。

「これは……良くないな」

俺は苦々しい声で呟く。

今の一撃は、あまりに分かりやすく人間とドラゴンの力量差を示してしまった。

しかし、一週間以上前に、白い怪物を圧倒した人物を一人知っている。自らを神と称しており、五年間ドラゴンを何度も倒してきた男、大島亮のことだ。

(アイツならこの状況をどうする……)

たとえば追い詰められても諦めない。亮はそういう奴だと思っていた。

竜伐隊は集結して攻撃を再開しており、リヴァイアサンとミツドガルの距離はまだかなりある。

画面に一瞬映ったリーザの横顔には、諦めの色など微塵もない。

しかし、ここまでの戦況で結論を出してしまう者がいたら――

そう考えた時、シエルターのスピーカーから音声が響いた。

『ブリュンヒルデ教室、出席番号八番、物部悠――至急、時計塔司令室へ来てください。繰り返します――』

イリスが驚いた顔で俺を見る。

「モノノベ、呼ばれるよ」

「ああ……そうだな」

嫌な予感が確信に変わった。恐れていた事態が現実のものとなってしまうらしい。

「どうしたの？怖い顔してるけど……」

「イリス、急いで制服に着替える。俺と一緒に司令室へ行くぞ」

俺は早口で告げる。時間はたぶん、あまりない。

「え、あたしはシエルターから出たらいけないんじゃない……」

「いいから早く！ここにいたら――たぶん、殺される」



イリスが制服に着替える間に亮から貰った通信機で連絡を取ったが出なかった。たぶん用事があつて出られないのだろう。

イリスは制服に着替えてたようで扉を開けた。俺はイリスの手を取って廊下を走る。

（とにかく状況を正しく把握しなければ。あの人が敵でなければいいんだが）

「モノノベ！ちゃんと説明してよ！」

「時間が無い。いいから俺について来い！」

焦る俺が強く叫ぶと、何故かイリスは顔を赤くした。

「……はい」

敬語で頷くイリス。

急に物分かりが良くなったイリスを連れて、俺は時計塔へ辿り着く。現在は地下に格納されているので時計は見えないが、この建物の役割は他にある。

時計塔は今、竜伐隊の司令部として機能していた。

司令室前のパネルに学生証を翳す。こういつた場所に立ち入る権限はないためか、自動で扉は開かない。だが代わりに篠宮先生の声が聞こえていた。

『——物部悠か』

「はい、呼ばれたので来ました」

『私が呼んだのは君だけだ。どうして彼女も連れて来た？』

どうやら、俺がイリスをシエルターから連れ出したことはもうバレていたらしい。

「イリスを一人で残すのは危険だと思ったので」

『……………』

沈黙が返ってくる。俺の勘は当たっていたようだ。

「——話があります、篠宮先生。外へ出て来てもらえませんか？」

呼びかけてしばらく待つと、司令室の扉が開いて篠宮先生が現れた。寝てないのか、目の下に隈ができています。

「時間が無い。手短かに頼む」

篠宮先生は腕組みをして、俺と、その隣にいるイリスを見た。

「イリス、ちよつとの間だけ耳を塞いでてくれ」

「え、何で？」

きよとんとするイリスに、俺は真剣な顔で言う。

「たぶん、聞かない方がいいことだからだ」

「……分かった」

素直に両耳を手で押さえるイリス。それを確認して、俺は俺は



篠宮先生と視線を合わせた。

「率直にお訊ねします。篠宮先生は、ニブルからの要請を受け入れましたね?」

「……………何のことだ?」

一拍間を置いて、篠宮先生は問い返してきた。

「大方、最悪の事態に備えて部隊を投入すると一方的に通告されただけでしょう。篠宮先生は止められないと判断し、余計な犠牲を出さないため俺をイリスから遠ざけようとした……………違いますか?」

「……………どうやら、ごまかしても無駄なようだ」

篠宮先生は厳しい顔つきで首を振り、言葉が続ける。

「確かに……………私はニブルの行動を阻まないことにした。しかし要求を丸呑みしてはいない。最終防衛ラインを突破されるまでは手を出さず、条件を付けた。完全に突っぱねれば、奴らは強硬手段に出る。そうなれば対人訓練をしていない我々に勝ち目はない。これがギリギリの妥協点だった」

硬い声で篠宮先生は事情を語った。

「いざという時は、ニブルに手を汚させるつもりなんです」

「……………誰かがやらねばならないなら、それも選択肢の一つだ。もう……………物部深月に十字架を背負わせたくはない」

眼差しを伏せ、鬨りのある表情で頷く篠宮先生。その声音には、ひどく重い何かが含まれていた。

「十字架——先生の妹さんのことですか?」

俺は思い切って問いかける。

「……………知っていたか。ああ、クラーケン化した私の妹は物部深月によって倒された。そうするよう、私が命じた」

顔を上げて、司令官としての顔で篠宮先生は答えたように

「な……………篠宮先生が? どうして——」

「私が当時の竜伐隊の隊長であり、クラーケンを倒し得るのは、物部深月の反物質弾しかなかったからだ」

表情を変えずに篠宮先生は言う。昏い瞳の奥にある感情は読み取れない。

反物質を生成できる”D”は一人だけだと、授業で聞いたことがある。それが深月のことだったとは。

「……物部深月は何も言わず、私の命令に従ったよ。親友だったモノを自ら手で葬った。そして今回も、彼女は自分が手を下すつもりでいる。だが、これ以上の重荷に……彼女の心は耐えられまい」

親友……篠宮都と深月がそういう関係だったというのは、初耳だった。

「——篠宮先生がニブルを受け入れたのは、深月のためであり、イリスを今すぐ殺させないためだったんですね」

「決して、最善の判断だったとは思っていないがな」

苦い声音で篠宮先生は頷く。

「いえ……最悪でなければ、それで十分です。とにかく、イリスを早急に対処するつもりではないようでしたら安心しました」

「もう力を失ったとはいえ、私もかつては”D”だった。後輩たちのことは、誰一人軽率に扱うつもりはない」

篠宮先生は強い口調で言い切った。

「分かりました。なら、あとは俺に任せてください」

「何?」

俺の言葉を聞いた篠宮先生は眉を寄せる。

「余計な横槍を入れてきた軍の奴らは、俺が追いかけています。イリスを人間として死なせてやるのも、俺の引き受けた役目です。誰にも譲るつもりはありません」

「軍を追い払うだと? 馬鹿な——たった一人で何ができる?」

「人間相手なら、どんなことでも」

俺はただ事実を告げる。その時の俺がどんな顔をしていたかは、自分では分からない。しかし篠宮先生の表情には、微かに恐怖の色が過ぎった。

「っ……君は……」

「迎え撃つなら早い方がいい。篠宮先生——軍の侵入経路を教えてください」

## 兄妹喧嘩

「ふう〜終わった。少し休憩して神界に戻るか」

杖を使って異空間から出た僕はペットボトルの水を飲んで休んでいた。

「腹減ったし果物でも探しに行くか」

僕は立ち上がって森のある方に向かった。すると杖が光り出した。着信があるようで、連絡先を調べた。

「一つは義晴からだ。……なるほど、歪みが少なくなってきたのか」

第一世界の”世界神”河本義晴から着信があり、メールを打って送信した。

「もう一つは……悠から連絡が来てたのか。何の用だ？」

物部悠から連絡が来てたので彼の居るミッドガルがるの映像を見た。すると近くに一体のドラゴンと何人もの少女が戦っている姿を目にする。

「これはリヴァイアサン！この前ボロボロにしたのに何故元に戻ってるんだ！」

僕はリヴァイアサンの姿に驚いた。一週間以上前に戦い、外殻のほとんどを破壊し、肉体にも傷を負った筈が戦う前の姿になっていた。

杖で何があつたのか調べると、リヴァイアサンが空間の歪みに触れて元に戻るところを見る。

「なるほど……あの時から歪みがあつたのか。マズいな……前より凶暴になってる」

空間の歪みは十二の世界で必ず起きる現象で、神以外の生物が触れれば肉体が変化し、凶暴化する。”世界神”の仕事はその歪みを修正するのが目的だ。

リヴァイアサンを倒した後、韓国に歪みを発見してそっちに向かった時に太平洋で歪みが出てきたと知る。

「瀕死寸前の状態で触れたから戻ったのか……まさか悠は僕に知

らせるために連絡したのか」

修行している間、連絡に気付かずにはいた。僕は少し悪い事をし  
てしまった。

（あの時倒していれば今頃は何事もなく過ごしていた筈だった  
のに……）

僕は杖で悠たちの様子を見た。そこには悠とイリス、そして深  
月がいた。

悠はニブルの兵たちを追い返し、シエルターに隠れても無駄だ  
と分かり、外に出てリヴァイアサンと戦うつもりようだ。

深月の方は、リヴァイアサンを倒す手段が無いと悟ったよう  
で、一人戻ってイリスを殺すつもりだ。

それを止めるため、今彼らは喧嘩してるようだ。

「すぐに向かうか」

僕は仙豆を一粒食べて、体力と怪我を回復した。杖でミッドガ  
ルの場所を調べて向かった。

「白」のリヴァイアサン……決着を付けに行くぞー！」

僕は体の中から興奮していた。サイヤ人の血というもので、ま  
た戦えるという気持ちを抑えていた。

超サイヤ人でしか太刀打ちできない白い竜とどうやって倒す  
か考えていた。するとある事を思いつく。

（さてよ……イリスさんがリヴァイアサンのつがいになれば向  
こうは二体になって連携攻撃をしてくるかもしれない。その方が面  
白いかもしれないな）

僕はヤバイ事を思い付いた。相手が強ければ強いほど燃え、た  
とえ自分に不利な状態や、最悪の状況になっても相手が強くなると知  
ればそうなくても構わない。たとえ人数が多くても同じこと、それが  
サイヤ人だ。

ベジータもセルが完全体の姿で戦うために未来のトランクス  
を足止めしたように。

（けどそれだと悠に恨まれるな。それでも戦ってみたいな）

僕はそう考えるが、実践しようとはしない。けど、考えるだけ

なら自由だから大丈夫だと思った。



その頃、ニブルの兵を追い返し、リヴァイアサンを迎撃しようとしていた俺はイリスを守るため、義妹深月の前にいる。

「悪いな、深月。イリスにはもう先約があるんだよ」

「兄さん……私の出した条件を忘れたんですか？」

深月の眼差しが鋭くなる。

「覚えてるよ。だけど俺はイリスに直接命を託された。たとえ可愛い妹の頼みでも、この役目は譲れない」

「か、かわっ!?こ、こんな時に変なことを言わないでください!命令は絶対です!条件を呑めないのなら、イリスさんの護衛も許可しません!」

頬を染めつつも、深月は真剣な顔で俺を睨んだ。

「だったら勝手にやるまでだ。深月がイリスを殺そうとしたら俺が守る」

「聞き分けのないことを言わないでください!これは私がやるべきことなんです!私が手はもう汚れてるんですから!」

以前と同じ台詞を深月は口にする。だが今の俺は、その理由を知っていた。

「——篠宮都のことか?」

「っ…………!?!」

息を呑む深月。

「親友だったらしいな」

「……………」

深月は唇を噛み締め、何も答えない。辛そうな深月の表情に心が痛んだが、俺はさらに言葉を続ける。

「どんな思いで深月がドラゴンになった仲間を討ったのか……俺

には正直想像もつかないさ。だけど……その子を手に掛けたから、イリスのことも引き受けるなんて理屈は納得できない。篠宮都とイリスを一纏めにするな！」

俺の言葉を聞いた深月は奥歯を噛み締めるが、ついに耐え切れなくなった様子で口を開く。

「だったらしい……他の誰かにやらせばいいんですか？ 私はそれこそ納得できません。何より、兄さんにだけは絶対イリスさんを殺させるつもりはありません！」

声を震わせながらも、深月は言い返す。

「俺も、深月にだけはやらせるつもりはない」

「……私は決めたんです。兄さんにはもう何も委ねません！ 三年前のような後悔をしないために！」

俺と深月は睨み合う。

「……俺たち、同じことを言ってるな」

「そうですね……完全に平行線です」

もうこれ以上、いくら言葉を費やしても無意味だとお互いが理解する。

「久しぶりに……やるか？」

「……ええ」

架空武装——ジークフリート。

俺は手に持ったままだったネイガルを地面に投げ捨て、右手に重さのない上位元素（ダークマター）の装飾を形成する。深月も虹の弓を構えた。

深月と戦うなら、ネイガルは使えない。それはたぶん、深月の見たくない俺の姿だから。

ゆえに俺はミッドガルの物部悠として、深月の兄として、ジークフリートで立ち向かう。ジークフリートが対人戦に向いていないのは承知の上だが、やるしかない。

一触即発の雰囲気イリスが慌てる。

「モノノベもミツキちゃんも喧嘩しちやダメだよ！ 今はこんなこととしてる場合じゃ——」

「いや、今はそんな場合だ」

「いえ、今はそんな場合です」

俺と深月の声が重なる。

「この頑固な妹は、言葉じゃ止まらない」

「分からずやの兄さんは、こうしないと言うことを聞いてくれません」

俺はジークフリートの銃口を深月に向ける。

深月の弓に、黒い上位元素の矢が番えられた。

「なあ、深月」

「何ですか、兄さん？」

「ずっと言うタイミングを探してたんだが……パンツ、見えてるぞ？」

「——!？」

顔を真っ赤にして、慌ててスカートの裾を押さえる深月。

その隙を俺が見逃すはずはない。

ジークフリートをで撃てる上位元素(ダークマター)の段は、最大三発。使い切れれば架空武装は消失し、再度の攻撃にはジークフリートを再生成する必要がある。それは大きな隙となってしまうので、弾は無駄遣いできないが——。

俺はイメージを練りながら、二発分の上位元素を込めた弾丸を放つ。

「監獄弾(ケージ・ブリット)！」

黒い弾丸は深月の手前で物質変換し、小さな鉄檻を形成する。俺の生成量は少ないので格子棒は非常に細いが、何とか深月を包み込む大きさの檻を作ることができた。

鉄檻の重さが加わったことで、深月は地上へ落ちてくる。だが纏っていた風により、深月はギリギリのところまで軟着陸した。

「人の下着をじっくり眺めた拳句に不意打ちとは……ずいぶん卑怯な手を使いますね、兄さん。ですがこの程度で私は捕まえられませんよっ。」

檻の中で弓を構え、深月は鋭く告げる。

「白壊」

細く小さな矢が檻に突き立った瞬間、鉄格子に亀裂が走り、ばらばらに崩れ落ちた。

「今のは壊れるという概念物質の矢です。打ち込んだ物の状態を無理やり変化させる高等技術ですが、これもリヴァイアサンには切り離しで対処されてしまいました」

淡々と説明しながら、次の矢を番える深月。

”D”としての能力勝負では、勝ち目はない。

だが俺も、最初から鉄檻で深月を拘束できるとは思っていない。先ほどの攻撃は、深月を地上へ引き摺り下ろすためのもの。空を飛ばれては流石にどうにもならないため、二発分の上位元素を消費してでも、最初の一手はそこに費やす必要があったのだ。

狙い通り地上へ降り立った深月に向かって、俺は駆け出す。

深月が目を細め、短く告げる。

「粘縛」

放たれた矢が途中で半透明な橙色に変わり、爆発的に広がった。恐らく上位元素を粘着性のある投網に変換したのだろう。

回避は間に合わないと判断した俺は、ジークフリートを構える。これが最後の一発。

深月は、改めて架空武装を作り出す隙など与えてくれないだろう。だからこの物質変換が、勝負を分ける。

「赤刃弾（レッド・ブリット）」

トリガーを引いて、架空武装に残った上位元素（ダークマター）を全て変換、ジークフリートは消滅するが右手は代わりに硬い感触を掴み取る。

俺が変換したのはナイフ状に圧縮した空気。圧縮率を高めたした刃先は高熱となり、赤い陽炎を生んだ。

要領はテストで用いた空気の弾丸と同じだが、あの時ほどシビアな調整をする必要はなかった。粘着の物質を焼き切れるだけの熱量を得られれば、それで十分だ。



深月の綱を、高熱となった刃で切りつける。

ほとんど抵抗となく、俺を包み込もうとしていた投網はバラバラになった。

深月が表情を険しくする。

「兄さん、これ以上抵抗すると怪我しますよ。一の矢——分かる風（フオーク・ウインド）！」

俺を無傷で捕らえるのは無理だと判断したのだろう。深月の目つきが変わった。何か、とっておきの技を使うつもりらしい。

深月が矢を放つと同時に、大気の流れが変わる。空気が収束していく。風の流れから俺はその数を読み取ろうとするが、収束が多すぎて把握しきれない。

恐らく深月が放ったのは、俺と同じく空気を圧縮した攻撃。

しかしレベルがあまりに違う。凄まじいまでの変換量。

数え切れない風の矢が俺に迫る。

ただでさえ目に見えない攻撃を、全て回避することは不可能に近いく。そもそも、あまりに数が多すぎて避けられる隙間もないだろう。

だが人間には無理でも”悪竜（ファフニール）”ならば——。

（この、一瞬だけ！）

「っ！」

俺は奥歯を噛み締めて、再び己を切り替える。意識が加速し、肌を読み取った大気の流れが、視覚情報に加味させる。

今度は、分かる。

撃ち放たれた空気の矢が——見えた。

数は、およそ百。

「あああああああああああああああ——」

矢を躲し、潜り、避けきれないものは熱の刃で切り裂く。不可視の弾幕を正面から突っ切り、俺は深月に肉薄した。驚きに目を見開く深月。

俺は空気のナイフを振り下ろし、当たる寸前で霧散させ——

——深月の頭に、軽いチョップを食らわせた。

「あうっ!？」

「先に相手の頭に触った方が勝ち。俺たちのが作った喧嘩のルールだ。破ったら絶交。兄妹じゃなくなる。覚えてるよな?」

「……はい」

額をさすりながら深月は頷く。

「イリスのことは、俺に任せろ」

「……………」

しかし、今度は頷かない。兄妹喧嘩のルールを破る覚悟さえあることが、深月の瞳からは感じ取れた。

「納得できないなら、別にそれでいい。けど、今ので分かっただろ? 深月は親を止められない」

「それは……」

「どっちがイリスを殺すとか、そんな争いはもう無駄だ。それより最後の足掻きに全力を尽くさないか?」

そう問いかけた時、ポケットの中から通信機が光った。

俺は取り出して確認すると、亮からだった。

『悠? 聞こえるか?』

「ああ聞こえるぞ」

『悪いな、さつき着信に気付いた。状況は把握してるからすぐに着く』

「分かった。まだリヴァイアサンは来てないから大丈夫だ」

俺は亮と通話して、深月は誰と連絡しているのか分からず、話掛けてきた。

「兄さん? 誰と話してるんですか?」

「ああ、ちよつとな」

悠は説明しようとするやと突如光が現れた。深月とイリスは驚き、警戒した。

徐々に光は消え、そこには自らを神と名乗る少年、大島亮が現れた。

「待たせたな悠」

## V S 白のリヴァイアサン2

「待たせたな悠」

僕は悠達の前に現れた。悠の近くには義妹の深月とリヴァイアサンのつがいになった少女、イリス・フレイアがいた。

「本当にごめんな。修行に夢中で気付かなかった」

「気にするな。まだリヴァイアサンは来てない。それに俺の方こそ急に連絡をしてすまなかった」

「僕は大丈夫だよ。さてと、奴を倒すか」

僕は拳をポキポキと鳴らした。奴とまた戦えると思うとワクワクしてきた。

すると深月は俺に話掛けてきた。

「あなたは一体……」

「ああ、僕は僕は大島亮。悠の親友で世界を旅する者さ」

僕は自己紹介をした。未だに深月とイリスは驚きを隠せなかった。

すると深月は何か思い当たる節を浮かべた様子で言ってきた。

「もしかして、この五年間でヘカトンケイルやクラーケン、そして一週間以上前にリヴァイアサンと戦っている方ですか？」

「ああ、その通りだよ。ヘカトンケイルを二回倒して、クラーケんとリヴァイアサンを倒す寸前に追い詰めたのは間違いなく僕だよ」

僕は事実を言った。五年間、仕事をしながらドラゴンを四体戦っているからはずきりと覚えている。

深月は僕に質問をしてきた。

「なるほど……貴方がですか。ですが何故ここに？」

「もちろん」白〃のリヴァイアサンを倒すためだよ。これも仕事だからね」

「仕事ですか……ですがこれは私たちの問題です。余計な手出しはしないでください」

もちろんここでの件はミッドガルの問題であり、無関係な僕は手を出すべきではない。しかし、今回は少しは関わっている。

「悪いけど、関わらせてもらおうよ。今回は僕の責任でもあるからね」

「責任ですか？」

「ああ、もし僕を取り逃したらリヴァイアサンを倒したとしてもミッドガルの失態になるんじゃないか？」

「っ……」

深月は黙り込んだ。僕はアスガルにも知られた存在であり、他の団体も知っている。ここで逃げられたら、狙われる可能性がある。そうなつてはマズイと考える深月。

「もし僕をリヴァイアサン討伐に手を貸すことを許可してくれたら、ここで捕まってやらんでもないよ。どうする？」

「深月、ここは亮の力を借りるべきだ。俺たちでも倒せるか分からんぞ」

悠も僕が戦うことに賛成のようだ。

「兄さんは彼のことを知っていますのですね」

「まあな、俺もあいつの力を少しは知っている。それにあいつは悪い奴じゃないから敵になることはない」

深月を説得する悠。僕のことを知っているからここそこまで言ってくれる。

深月は少し考え、僕に言ってきた。

「分かりました。共に戦うことは許可しますが、終わった後はミッドガルの保護を受けてもらいます。よろしいですか？」

「いいだろう、交渉成立だ。さてとどうやって奴を倒そうかな」

深月に許可をもらって僕は闘志を燃やす。

「それでそっちにいるのがリヴァイアサンのつがいになった”D”か」

僕はイリスの方を見た。彼女はわたわたと戸惑っていた。

「えっと……」

「そんなに怖がらないでくれ。僕は君に対して何もしないから。それに悠の親友だから心配しなくていいよ」

「モノノベの親友？」

「ああ、半年前にあいつと会ってから親友だ。それより竜紋はどうだ？」

僕は竜紋の状態を聞いた。イリスは脇腹にある竜紋を確認した。服の上からでも光り輝いていることが分かる。

「さつきより強くなってる。もうすぐ来る」

「そうか……なら準備をしなくちやな」

僕は海の方を見て声を上げた。

「来たか」

悠と深月とイリスは僕の視線を辿る。

壊れたレーザーユニットの向こうに揺らめく水平線。そこに蜃気楼のごとく巨大な影が浮いていた。

その周囲で光が煌めき、小さな爆発が起こってる。

「リヴァイアサン……ついここまで——」

深月が険しい表情で呻く。

かなりの速度で侵攻しているのか、その姿は見る間に大きくなつた。

あまりに巨大で距離感が掴めない。真つ白だった外殻は、赤く斑に染まっている。環状多重防衛機構（ミドガルズオルム）や竜伐隊が与えた傷による出血だろう。

『ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ——！』

低く、大きな鳴き声が響き渡る。イリスが脇腹を押さえる。服の上からでも分かるほど、竜紋がさつきより強く輝いていた。

「あたしを呼んでる……あたしが欲しいって叫んでる——」

リヴァイアサンの意思と共鳴しているのか、イリスはうわ言のように呟いた。

「つがいを求めてるって話は本当だったんだな」

「うん……そうみたい」

体を震わせて頷くイリス。

「で、どうするんだ？」

「え？」

悠はイリスに問いかけた。

「男つてのは馬鹿だからな。大人しくしていると、勘違いして付けあがるぞ」

どこか上の空だったイリスの瞳に光が戻る。

「……あたしは、ドラゴンを許さない。大切な人をみんな奪っていったあいつに、あたし自身まで奪われるなんて我慢できないっ！」

イリスは叫び、右手に架空武装——双翼の杖（ケリユケイオン）を作り出す。

「ここから狙えるか？」

「かなり遠いけど、やってみる！最大生成量でぶつけてやるんだから！」

杖の先をリヴァイアサンに向け、集中しながらいつもの呪文を唱えるイリス。

「深月、念のため周囲の竜伐隊に距離を取るよう連絡してくれないか？」

悠は深月に呼びかける。ここからでは点にしか見えないが、大勢の”D”たちがリヴァイアサンの周囲を飛び回って攻撃を加えていた。下手をすれば巻き込む可能性があるかと判断したからだ。

深月は何か言いたそうな顔をしながらも頷き、首に装着していた通信機のボタンを押した。

「——こちらB3、総員A級衝爆を想定した距離を取れ。遠距離より攻撃は続行」

深月が命じると、遠方の竜伐隊は動きを変えてリヴァイアサンから離れる。

「いいぞ、イリス。やってやれ！」

「うん！聖銀よ、弾けろっ!!」

遠く離れた空を泳ぐ巨体の付近で、白銀色の爆発が起こる。

その勢いに圧されたリヴァイアサンは、わずかに体を傾けた。

「効果は？」

深月が、通信機の向こうへ問いかける。

『——対象の左側面に広範囲のダメージ。しかし深部まで傷は到達していない模様』

応答の音が漏れ聞こえてきた。

深月は息を吐き、通信を切る。

「やはり……こうなりましたか。リヴァイアサンは体の内側にも斥力場を発生させます。表皮ギリギリで爆発を起こしても、ダメージは重要臓器に届きません。あの能力は……あまりに万能過ぎます」

「だが、少しは効いてるはずだ。僕も攻撃するかな」

「待ってください。そんなことをすれば斥力場で跳ね返されるだけですよ」

「心配ないよ、僕は強いからね。あんなの突き破ることぐらい簡単さ。それに——」

僕は悠の方を見て言った。

「悠、アレは出来るか？三年前、”青”のヘカトンケイルを一撃で倒した兵器は？」

「ああ、他の”D”からも上位元素（ダークマター）を借りれば出来る」

「やはり、それが条件でしたか……三年前は私が傍にいあからあんなに巨大な物質変換ができたんですね」

「ああ、俺一人が取り出せる上位元素（ダークマター）じゃ足りないんだよ」

「悠、そのことだがちよつといいか？」

僕は悠に近づいていき、小さな声で話した。

（どうするつもりだ？ヘカトンケイルを倒した兵器は通用しない筈だ。まさか……取引をするのか？）

（そのつもりだ。前に使った兵器はリヴァイアサンに跳ね返される。だから奴に効く兵器を作り出す）

悠は”緑”のユグドラシルと取引をして、新たな兵器を使うつもりだ。しかし、これには大きな問題がある。

（そんなことをすればお前の記憶はまた失うぞ！ここは前に倒した兵器を使え。僕は奴の後方に回り込んで特大のエネルギーで攻撃する）

僕はユグドラシルとの取引に反対した。

(だが、効かないかもしれない。俺はイリスを守るためならならんだってやる)

悠は真剣な眼差しで言ってきた。原作を知っているからこいつが無茶をすることは分かっていた。こうなればやるまで主張は曲げない。

(……分かった。記憶についてはなんとも出来ないが、体にかかる負担を抑えてやる)

(悪いな)

悠は謝り、悠から僕は離れた。

「亮さんでしたね。兄さんと何を話してたんですか？」

深月は会話の内容を聞いてきた。

「ちよつとね。三年前、僕もヘカトンケイルを倒すところを見たからアレは体への負担が大きいつて話してたんだ」

悠は取引については深月には内緒にしているため、知られてもいいことを言った。

「じゃあ悠、体力を回復させるよ。上位元素(ダークマター)も補給しとくからじつとしな」

「ありがとう、そんなこともできるんだな」

「まあね、僕を誰だと思ってる？」

「……そうだな、たしかにお前なら出来るな」

「だろ？それと悠。アイツはどうだ？」

僕は悠を回復させ、イリスの方を指差した。

「同じだと思わないか？三年前と」

「確かにそうだな」

「だろ？なら、イリスさんと協力したらどうだ？これは主に彼女の戦いだからな」

悠は少し考え、返事をした。

「分かった、やってみるか」

「よし、じゃあ僕はリヴァイアサンの後方に回り込むから準備ができたら通信機で言ってくれ」

「ああ、頼む」







「奴の気が消えた。僕たちの勝利だ」

「本当か？」

「ああ、本当だ。イリスさん、竜紋はどうなってる？」

イリスさんは脇腹を見る。さつきまで輝いていた竜紋は消えていた。

「やった！あたしたち勝ったんだね」

「そうだな」

イリスは勝利に喜ぶ。

「ありがとう亮、お前のおかげだ」

「気にするな。俺とお前の仲じゃないか」

悠は僕にお礼を言ってきた。

「これで仕事は終わったな。あとは——」

僕は固まってる深月の方に行く。彼女はまだ勝利したことに驚いてたままだ。

「深月さん？」

「っ!?!りよ、亮さん」

深月は僕の声に驚いた。

「リヴァイアサンは倒したよ。これでもう安心していいよ」

「そ、そうですか……亮さん、ありがとうございます」

「いいよ。それより約束通り僕を保護するんだったよね」

僕は深月と交わした約束を口にする。

「はい、ですが少し待ってください。学園に向かう前に準備がありますので」

「分かった。じゃあ僕はここで待ってるよ」

こうしてリヴァイアサンとの戦いは幕を閉じた。

## ミッドガルの長

リヴァイアサンを撃破し、僕は深月さんとの約束で学園の時計塔へ向かっている。

ここで逃げるのは簡単だが、そんなことをしてしまうとミッドガルやニブルを敵に回すことになってしまう。神が約束を破るわけにはいかない。

それにそんなことをするつもりはない。ミッドガルの長に会って、今回の件を説明しなければならない。

そのため、こうして連れて行かれている。

エレベーターで最上階に進み、奥の部屋に着いた。

立派な木製の扉がそびえ立っており、横にあるプレートには“学園長室”と書いてあった。

「着きました。ここです」

「学園長室？ここにミッドガルの最高責任者があるのか？」

「はい、話は着いてあります。今回は私も同行します」

「了解」

僕は返事をして、深月は扉をノックをし、どうぞと女性の声が返ってきた。深月は慎重に扉を開いた。

深月が先に入り、その後に僕が入った。

部屋の中を見るとミッドガルの廊下よりも暗く、独特な香りがある。この場所は日当たりが良い時計塔の最上階なのにも関わらず、分厚いカーテンで日の光を遮っている。

室内には二人の女性が佇んでいた。立派な椅子に腰かける金髪碧眼の少女、その脇に立つメイド服を着た女性の姿があった。

「よく来てくれた」

金髪の少女が言ってきた。彼女のことは少し知っている。ミッドガルの最高責任者にして、永遠の時間を過ごす存在。

(なるほど、彼女か)

「色々と言われる話もあると思うが、まずは自己紹介といこう。

私はミッドガルの長、シャルロット・B・ロード。それでこっちは私

の専属秘書をやっている、マイカ・スチュアートだ」

「初めまして、マイカ・スチュアートです。以後お見知りおきを」

学園長のシャルロットと秘書のマイカはお辞儀をしながら同時に挨拶を交わす。

「ご丁寧にどうも」

たとえ年上でも僕は神であるため、風格を持たねばならぬと思いい、少々偉そうに挨拶した。

「ふむ、とてつもないほどの覇気を感じるのう。単刀直入に聞くが、そなたがこの五年間で数々のドラゴン共を倒しているというのは本当か？」

見た目は少女だが、大人びた感じだ。正確な歳は分からないが、それなりに人生を生きているようだ。

「ああ、間違いない。それは僕のことだ」

僕は間を入れずに答える。確かにドラゴンを倒しているのは僕だが、正確に言えば戦っているというべきだ。

「そうか……服装も資料にあつた通りの格好だな。見たことがない変わった服だな」

「まあね、これは僕にとつての正装だからね」

「なるほど……そういうことか。それでそなたは何者だ？」

シャルロットは唐突に本題を言ってきた。

「僕は大島亮。この世界を管理する存在にして、創造と破壊を司る神様だ」

僕は自己紹介をした。”世界神”は創造と破壊を司り、世界を管理する役目を持つ存在。僕は正直に答えた。

「神だと？」

「そうだよ、神様だよ」

「しかし、普通の人間にしか見えぬが？」

「そうだね、じゃあ証拠を見せるよう」

僕は後ろに組んでいた右手を前に出して、手のひらに物を作り出した。

僕が作ったのは”カッチン鋼”。ドラゴンボールに出てくる第七宇宙一の硬さを誇る物質だ。

「!!!」

シャルロットたちは驚いた。上位元素（ダークマター）を用いずに作ったのだから当然のことだ。

「これは”カッチン鋼”といって、ミスリルの何百倍もの強度を誇る物質さ」

「ミスリルより硬いとう？」

シャルロットは信じられないように聞き返してきた。

「ああ、この世界には存在しない物質さ。深月さん、それを壊してみないかい？」

「私がですか？」

「そうだよ。君がやらないと分かってももらえないからね」

「ですがここでやるのは……」

確かにここでやるのはまずい。シャルロットやマイカに怪我をさせるわけにはいかない。

するとシャルロットは言ってきた。

「わたしは構わないぞ。やってみてくれ」

「……分かりました。では——五閃の神弓（ブリューナグ）」

深月は架空武装を作り出し、地面に置いた”カッチン鋼”に向けた。

「一の矢——分かたれる風（フォーク・ウインド）！」

彼女は攻撃をした。すると矢は粉々に砕け、”カッチン鋼”は傷一つ付かなかった。

「そ、そんな……」

深月たちは驚いていた。ダイヤモンドですら砕くほどの力をもち、ミスリルでも傷が付くほどの威力を持つ力を放ったのに何一つ傷がついていない。

「これが創造の力さ」

僕は”カッチン鋼”を持った。

「そしてこれが破壊の力さ」

僕は”カッチン鋼”を上にあげた。落ちてくる”カッチン鋼”に向かって手の平を向けてある一言を言った。

「破壊」

すると”カッチン鋼”は急に空中で止まり、徐々に光の粒となつて消えていった。

深月たちはさらに驚いた。傷一つつけることができなかつた物質を消滅させたのだ。

僕は再び後ろに手を組んだ。

「これで分かったかい？僕が神様だということが」

僕は神である力を示した。

「驚いた……こんなことができる奴を見たことがない。神というのは本当かもしれない」

どうやら少しは納得したようだ。僕も安心して言葉を続けた。

「分かってもらつて嬉しいよ。それじゃあ本題に入ろうか」

「本題？」

シャルロットは聞いてきた。

「僕は神々の世界”神界”と呼ばれる場所から来たんだ。神々の中での階級は”世界神”、一つの世界を管理することを許された存在さ」

「一つの世界だど？では他の世界があるというのか？」

「そうだよ。世界はここを入れて十二存在している。ここは第十二世界と呼ばれている」

シャルロットは質問してきて、僕は答えた。

「世界に一神（ひとり）ずつに”世界神”が存在していて、それぞれ仕事をしている」

「仕事ですか？」

深月は聞き返してきた。

「そう、仕事は三つあって、一つは人間を管理してそれを資料にして上司に提出すること。会社と似たようなものだよ。二つ目は世界を脅かす存在を倒すこと。今君達が戦っているドラゴンのことさ」

僕は神の仕事を説明した。

「なるほど、仕事でドラゴンを倒しているのだな」

「まあね、君たちでは脅威の存在のようだけど、僕からすればまだまだ大したことない生き物だからね。今は暇つぶしにやってるよ」

「暇つぶしとは……そなたは随分余裕だな」

学園長は呆れていた。まあ僕がその気になればドラゴンなんて破壊できるが、それじゃ面白くないので放置している。

「そして三つ目は世界に起きる空間の歪みを直すことさ」

「空間の歪み？」

「そう、これこそが僕たち“世界神”の主な仕事さ。歪みとは、世界を崩壊させる自然現象。それを放置すれば世界は滅びるからね。人間に見られる前に歪みを直しているのさ。そしてここからが重要なことだ」

「？」

シャルロットたちは首を傾けた。

「もし生き物が歪みに触れれば、自我を失い暴走するんだ。そして気づかぬうちに周りの人間にも影響を及ぼす。リヴァイアサンのように」

「何？リヴァイアサンもその歪みとやりに触れたというのか？」

「ええ、意識はあるようでしたが本能で動いていました。幸い奴が触れた後に歪みを直したのもう大丈夫ですが、こんなことになっているとは僕も思っていないませんでした」

僕はリヴァイアサンも歪みに触れたことを説明した。隠そうと思ったが、今回は僕のせいであってしまっただけで申し訳がない。

「シャルロット・B・ロードさん、マイカ・スチュアートさん。そして物部深月さん。今回、もし僕が一週間前に“白”のリヴァイアサンを仕留めていれば、奴に触れる前に歪みを修正していれば今回のことは起きませんでした」

僕は後ろに組んでいた手を横にした。

「大変、申し訳ございません」

僕は頭を下げ、深いお辞儀をした。僕が見逃していたからこ



そ、今回のことが起きた。僕は謝罪するためにミッドガルに来たのが主な理由だ。

「いや、よい。頭を上げよ。そなたが悪いわけではない。誰にだって仕事の見落としぐらいはある。それにそれだけで奴が攻めてこない理由にならぬ」

「そうかもしれませんが、あの時倒していれば被害は出なかったと思っております。ですので僕に何か出来ることがあれば何でもいってください」

僕は頭を下げながら言った。仕事を失敗するのは今回が初めてだ。人に迷惑を掛けたのだからこれぐらいのことはするしかなかった。

シャルロットは口に手を加えて考えごとをした。するとすぐに手を机に置いた。

「分かった……ではそなたの処遇を言い渡す」

どうやら決まったようで、僕は顔を上げた。

「そなたにはこのミッドガルに学生として向かい入れよう」

「……えっ？」

言い渡された言葉に理解できず。僕は間抜けな声を漏らす。

「……いいんですか？ 隔離とかじゃなんて」

「ああ、構わん。そなたのことは既に知られているからな。隔離より、学生として迎えた方がいいと思っただけであつた。そうだとマイカ？」

「はい、シャルロットと相談して我々が決めたことです」

「ですがいいんですか？ 僕が学生としていけば、女子たちも反対するのでは？」

僕はミッドガルの問題を言った。ミッドガルは”D”保護して教育を受けさせる機関であり、僕みたいな奴が通える筈が無い。

「構いません。兄さんも通っていますので問題はありません。信頼を得るのは亮さん自身ですので頑張ってください」

深月も賛成のようだ。

「物部深月もそう言っているわけだ。アスガルには物部悠と同じ

男の”D”と報告しておく。もちろん学園でもその扱いだか良いか？」

「どうやら僕の処遇は結構前から決めていたようだ。他の組織に狙われないために考えてくれたのだろう。」

「ありがとうございます。ですが、一つお願いがございます」

「なんだ？」

「僕も仕事があります。空間の歪みは遠くでも修正できますが、書類仕事や会議があるので神界に行かなければいけない場合があります。神界との時間の流れが違いますのでそんなにかからないと思いますが、それだけ許してもらえませんかでしょうか？」

僕は神の仕事で神界に行かなければならない理由を言った。

「いいだろう、それだけは許可する。それ以外でミッドガルを出ることは許さんからな。たとえばそなたが神だとしても」

「それで構いません。ありがとうございます」

「よかったですね」

こうして僕はミッドガルの学生として居ることになり、僕は深月の宿舎で暮らすことになった。

キス

『——』ごくろうだったね、物部少尉。やはり君を信じて良かったよ。先走った者達を君が止めてくれたお陰で、中途半端に問題を先送りする事なく、“白”のリヴァイアサンを倒す事ができた。本当にありがとう』

リヴァイアサンと戦ってからだいぶ時間が経った。

ノート型端末の画面に映ったロキ・ヨツンハイム少佐が、爽やかな浮かべて言う。

場所は俺の自室。

リヴァイアサンと戦ってからだいぶ時間が経ち、ベッドで横になっていたところ、突然ロキ少佐から通信が入ったのだ。

彼に対する文句は山ほどあったのだが、最初にいきなり礼を言われて、そのタイミングを失ってしまう。

ロキ少佐はいつもこうだ。

決して相手のペースを掴ませない。

「はい……ありがとうございます」

どの口で言うのやらと思いなながらも、俺は表面上神妙な表情を作って敬礼した。

きつとロキ少佐はどちらかの場合も想定していたのだろう。

俺が余計な手出しをしなけれあ、それで良し。

邪魔をすれば、後に引けなくなった俺は必ず仕事をやり遂げる。

その確信があつたに違いない。

しかも恐らく後者の確率が高いと踏み、別の者が動くように仕向けたのだろう。

あの部隊を派遣したニブルの幹部は、ロキ少佐と利害が対立する相手かも知れない。今回の件は表沙汰にならなかったが、責任を取らされて失脚した可能性もある。

(仮に俺の想像通りなら、本物のスレイプニルが出てこなかったのも当然だな)

失敗前提の作戦に、ロキ少佐が自分の部隊を派遣するわけがない。

『私は結果が全てだと考えている。過程がどうであれ、結果が最善に近いものならば、君の取った行動は正しい。君が正しく居続ける限り、私は君を信じ、評価しよう。何か欲しいものがあるなら言いたまえ。どんなものでも用意するよ』

「いえ、……今は特に。少し、考えておきます」

『そうか、何か思いついたら教えてくれ。だが間もなく環状多重防衛機構（ミドガルズオルム）も復旧する。次に通信できる機会は、また非常時になってしまうだろうな。あと——』

「あと？」

ロキ少佐はさつきまでと違って真剣な表情を浮かべる。

『今回、あのドラゴンを圧倒する存在と出くわしたそうだね』

「……」

それは十中八九、亮のことだ。今回は亮のおかげでリヴァイアサンを倒せた。今は深月と一緒にミッドガルに居る。多分隔離されるだろう。

『まさか本当に現れるとは、実際は思ってもみなかった。彼が何者で、何をしでかすか分からん以上、彼の監視を頼む。それでは今後ともよろしく頼むよ——私の「悪竜（ファフニール）」』

要件を言って通話が切れる。

できれば二度と顔も見たくないが、そういうわけにもいかないのだろう。

亮のことは半年前から通信を取っているので監視は必要ないと思っっている。

俺は重い息を吐いてベッドに横たわろうとする。その時、扉からノックをする音が聞こえた。

「深月か？」

俺は返事をした。すると扉が開いて入ってきたが、深月ではなかった。

「よっ！大丈夫か？」

「亮!？」

入ってきたのは亮だった。”D”でもない奴がここにいるのだから驚くのは無理もない。

「お前、どうしてここにいるんだ？」

「明後日からミッドガルの学生としてここに住むことになってね。今日は挨拶に来たんだ」

「そ、そうか……俺はてっきり隔離かと思った」

「いやいや、元々僕を捕まえたら学生として保護するみたいだったよ。それに他の学生からは君と同じ男の”D”として暮らすことになるから」

「な、なるほど」

俺は納得した。たしかに亮はアスガルに知られており、いつ他の組織に狙われてもおかしくない。

「まあ、これからよろしく」

「ああ、よろしくな」

俺は亮と握手をした。こうして親友として打ち解けあった。



夕食を食べ終わった俺は部屋に戻った。すると、端末の画面にメール着信のアイコンが表示された。

「……………」

内容を確認し、俺は立ち上がる。

外へ行かなければならなくなったが、もう門限は近い。今日はちゃんと深月に直接断つてかは出かけよう。

俺は部屋を出て、二階への階段を上る。

深月が主に使っているという部屋の扉を開くと、ソファに座って本を読んでいた深月が顔をあげて、咎めるような眼差しを向ける。

「——鍵をかけていなかった私も不用心でしたが、兄さんも入

るならノックぐらいしてください」

「いいじゃないか、別に。俺たちは兄妹なんだから、そんな気を遣わなくてもいいだろ？」

「…………え？」

ひどく驚いた顔で俺を見る深月。

「ん？何か俺、おかしなことを言ったか？」

「いえ…………別に。ただ、何となくいつもの兄さんらしくないような気がして…………」

「そうか？ ずっとこんなもんだったと思うけどな。ああ、深月——俺、これから少し出かけてくるから」

「構いませんが、門限は八時ですからね？」

「分かってるよ。それじゃあ行ってくる」

「……………いつてらっしやい、兄さん」

深月が最後まで、何処か戸惑った表情をしていた。だが俺は、特に思い当たるところがなかったので首を捻る。

宿舎を出て頭上を見上げると、満天の星が夜空に広がっていた。

(何日か前の夜も、ちようどこんな時間に外出したな)

そんなことを思いながら前に向き直った時、門の辺りで動く影が目に留まる。

「何だ…………？」

眉を寄せて近づくと、言い争うような囁き声が聞こえてきた。

「…………ちよ、ちよっと押さないでくださいませんか？ ……ここにいるのがバレてしまいますわ！」

「…………別に隠れる必要、ないと思う」

そつと門の外を覗き込むと、そこには押し合いへし合いしている悠のクラスメイト達の姿があった。

リーザ、フィリル、レン、アリエラの四人だ。本日の授業は全て休講なのだが、みな制服を着ている。

「もしかして、深月に何か用か？」

学園や生徒会関係の用件かと思ひ、悠は声を掛ける。

「ち、違います！ た、単なる偶然ですわ！ 皆さんとちよつと夜の散歩をしていて、近くを通りがかっただけです！ それだけですからね！」

リーザはやけに慌てた様子で悠を睨む。

「……違う。私達、あなたの様子を見に来た。リーザが行こうって、皆を誘ったの」

フィリルが静かにリーザの言葉を訂正した。

「俺の……？」

驚いた俺は確認するようにリーザを見るが、彼女は顔を赤くしてそつぽを向いてしまう。

「ん」

レンは俺の服を引っ張って、端末の画面を突きつける。

『今日のリヴァイアサン戦について聞きたいことがある』

「聞きたいこと？」

「黒い光と青い光でリヴァイアサンを倒したのは物部クンかったことだよ」

アリエラがリヴァイアサン戦で倒した力について聞いてきた。

「あー……まあ、そうだな。黒い光は俺だが、青い光はアイツがやったぞ」

俺は質問されたので答えた。亮のことを話すのはやめようかと思つたが、リーザたちに嘘はつけないので正直に言った。

「アイツ、ですか？」

「ああ、みんなも知ってるドラゴンを圧倒する存在のことだ」

俺が正直に述べてるとアリエラが納得したように言った。

「ああ、五年前からたくさんのドラゴンを倒してる人のことか」

「そうだ。なんでもリヴァイアサンがこつちに向かっていると聞いて俺に協力してくれたんだ」

「その言い方だと、前から知ってる感じですよ」

「……半年前に知り合ってから連絡してたんだ。今は深月の宿舎に泊まっていて、そいつも”D”だから明後日から学生として学園に通うそうだ」

「なっ!?それは本当ですよ!」

「ああ」

リーザは驚いた表情で俺を睨む。

「言っておきますが、わたくしはその方を認めるわけにはいきませんわ!何処の誰かも知らない殿方を迎え入れることは許しません!ですが……」

リーザは言葉を止めると、ため息をする。

「ですが、話を聞く限り悪い人ではなさそうなようです。それにもその方も、イリスさんを守るために頑張ってくれました。それは貴方も同じことですわ、モノノベ・ユウ」

リーザはそう言って前で腕を組んだ。

「よって貴方もその方を”クラスメイト見習い”にしますわ」

リーザはそんなことを宣言した。

「見習って……」

「そう簡単にクラスメイトになれると思っただら大間違いです。せいぜい努力してくださいな。ドラゴンを倒した方にも言っておいてください」

そう言うと、リーザはフィリルたちの方に顔を向ける。

「皆さんもよろしいですわね」

「ボクも賛成かな、彼の力を見て見たいし」

「私も……」

「ん」

アリエラ、フィリル、レンも賛成のようだ。

「さあ皆さん、もう帰りますわよ。早く戻らないと寮長さんに怒られてしまいますわ」

「うん……それじゃあ、また明日」

ペこりと頭を下げるフィリル。

レンはぷいと顔を背け、アリエラは小さく手を振って歩き去った。

四人の後ろ姿を見送った後、悠は彼女達とは逆方向に歩き出した。



認められるというのは、悪い気分ではない。  
自然と心が軽くなっているのを感じながら、足を動かす。  
以前と同じ道筋を辿り、初めて彼女と会った砂浜にやってくる。

俺は呼び出した銀髪の少女は、やはり波打ち際で足を海水に浸していた。

防衛堤から少女のところまで、ずっと足跡が続いている。

「——イリス」

俺は少女——イリスよりも大きな歩幅で砂浜を歩き、声を掛ける。

「モノノベ……また、呼び出してごめんね」

「別にいいさ。今度は何の用事だ？」

「前と、同じ用事だよ」

イリスは微笑み、俺に近づいてくる。

「同じ？」

「うん……この前、最後まで言えなかったこと」

イリスは頷き、俺の目をまっすぐに見上げ——言葉を続けた。

「あのね……あたし、モノノベの友達に、なれる……かな？」

その問いに俺はぽかんと口を開ける。

「何言ってるんだ？イリスとは、もうとっくに友達だろ」

「え？嘘！あたし、いつモノノベと友達になったの？」

「いや、いつと聞かれても困るが……俺は結構前からそのつもりだったな」

俺の言葉を聞いたイリスは大きく息を吐いた。

「モノノベは……いつも、あたしが一番欲しいって思ってるものをくれるんだね。だからきつと……」

「え？」

あまりに声が小さくて、言葉の後半が上手く聞き取れない。

「ううん、何でもないよ。それより、今度こそ何かお礼をしないとね」

頬を染めたイリスはさらに俺と距離を詰め、柔らかく微笑んだ。

「……ありがとう、モノノベ」

背伸びをしたイリスが俺に顔を近づける。

その時——ほんの一瞬だけ触れ合った唇の柔らかさは、俺が人生で初めて知るものだった。

## 世界神対抗親善試合（野球編）

ここは神界にある野球場。今日は世界神同士で野球をするこ  
とになった。

奇数の数字の世界を担当するのがAチーム。偶数の数字の世  
界を担当するのがBチーム。僕はBチームだ。

チームの仲間は第二の弥生、第四のエドワード、第六のアン  
ジェリカ、第八のパトリック、第十のグラン。合計六人で、リーダ  
ーは弥生さんだ。

「さあ、みんな。勝ちましょう」

「「「「おおー!!」「」」」」

向こうのAチームは第一の義晴、第三のルドルフ、第五の八代、  
第七の八重、第九のレイチェル、そしてリーダーの第十一の恵だ。

「皆さん、勝ちますわよー!」

「「「「はい!!」「」」」」

審判は神官王、副審は神官六人、観客には“絶対神”ゴッドと  
他の神々が来ていた。

世界神対抗親善試合はたまにあり、仕事が無い時に行われる行  
事である。種目は主にスポーツだが、力の大会もある。

一回表、Aチームが攻撃で、僕たちBチームは守備に入った。

ピッチャーはパトリックで、打者は八代だ。

「プレイボール!」

神官王の声で試合が始まった。

「八代さん、いきまますよ」

「望むところです」

パトリックは全力で投げた。世界神がボールには力がありす  
ぎて、キャッチャーの弥生さんごと吹き飛ばされた。

八代はボールが早すぎて振るどころか見えなかった。

「ストライク」

「えっ!?!」

八代は後ろを見ると球場の壁が粉々になっていた。

「これがホントの消える魔球ですね」

「俺っち達にしかできないものだ」

アンジエリカとエドワードが呆れていた。

”カッチン鋼”よりもさらに硬い”カチカチン鋼”で出来ているが、パトリックが本気で投げたせいで、メチャクチャになった。

残骸の中から弥生さんがグローブにボール持って出てきた。

「パトリック君、やり過ぎよ。もう少しで消滅するところだったわ」

「すみません弥生さん。慣れなくて」

弥生はパトリックに文句を言い、本人は謝った。

「弥生さんって本当にタフですね」

八代は今更ながら弥生のタフさを知った。

神官王は指を鳴らすと破壊された球場が元に戻った。

そしてパトリックに向かって注意した。

「パトリックさん、手加減をしてください。今度球場を破壊すれば退場処分になります」

「えっ!?!そんな〜」

「ではパトリックさん、交代しましょう」

弥生さんはピッチャーの交代を宣言した。

しかし、神官王は認めなかった。

「交代は出来ません。ルールによれば、選抜ピッチャーは相手打者を一人投げ終えるまでは交代できませんよ」

「そ、そうですね……パトリックさん少し力を抑えてやってください」

弥生はパトリックに力を抑えるように言った。

「分かりました。出来るだけやってみます」

弥生とパトリックは位置について、試合を再開した。

パトリックは弥生に言われた通りに力を抑えて投げた。

投げたボールはマツハー、これなら被害を出さずに済む威力だ。

八代は投げてきたボールをバットで打った。ボールは空高く

打ち上がった。

「これで一点です」

八代は一塁に走った。するとグランはトランポリンを作り出し、空高くにジャンプした。そして、打ち上がったボールをキャッチし、降りてきた。

「アウト」

神官王はアウトと宣言した。

「ちよっ!?能力を使うのはアリですか?」

「ルールには能力を使ってボールを取ってはいけないと書いてありませんので大丈夫です」

「そ、そんな……」

八代はバットを持ってベンチに戻った。

弥生はタイムを宣言し、みんなを集めたの。

「グランさん、ナイスです。この調子でいきましょう」

「そうですね、ではピッチャーを亮に変えよう」

「僕ですか?」

「ええ、亮君でしたら安心です。頼みますよ」

そう言っ僕はピッチャーになった。

みんなは配置について、Aチームからはレイチエルがバットを構えた。

「亮君、負けないわよ」

「ではいきますよ」

僕はボールを投げた。威力はマツハ2だが、レイチエルはボールを捉えたようで、振り出した。

レイチエルは武器の達人であり、相手の動きを読むことができ

る。だから僕は人差し指と中指を上にあげた。するとボールも上に上がり、レイチエルは空振りをした。

ボールは弥生のグローブに入った。

「ストライク」

神官王はストライクと宣言した。

「なっ!？」

僕はヤムチャの狼牙風風投球拳（ろうがふうふうとうきゆうけん）を繰り出した。狼牙風風拳（ろうがふうふうけん）と繰気弾（そくきだん）を組み合わせて編み出された投球術で、第六宇宙との親善野球でボタモ相手に使った技だ。

会場は”おおく”と歓声が響いた。

「まさかあんな手があったとは……」

「やりますよ、亮ちゃんは」

Aチームのベンチでは、ルドルフと八重が狼牙風風投球拳（ろうがふうふうとうきゆうけん）について作戦を練っていた。

僕は投げ続け、レイチェルを仕留めた。

「うく、悔しいわ」

「良し！あと一人だ！」

僕は拳をグローブに叩き、ボールを受け取って投げる準備をした。

「次はわたくしですわ！勝負ですよ」

恵はバットを球場にむけ、ホームラン予告をした。

「望むところです」

僕はマツハ3の速さで投げた。恵はボールを捉えたみたいで当たる瞬間に繰気弾（そくきだん）を使った。すると、恵は避ける場所が分かったようで、ボールを当ててきた。

ボールは高く打ち上がり、場外を軽く超える高さだ。

ところが、アンジエリカは魔術で雷玉を作り出し、高く上がったボールに当てた。ボールは勢いがなくなり、そのままアンジエリカのグローブに落ちてきた。

「アウト」

「なっ!?!あんなのありですか?」

「残念ながらルールにはありませんので有りです」

アンジエリカのおかげで一回表は終わった。

次は一回裏、僕たちBチームが攻撃をする番だ。

最初の打者はグランで、相手ピッチャーは義晴だ。

義晴は勢いよくボールを投げた。しかしボールはキャッチャーの八代のグローブに入らなかった。

「ぐはっ!？」

「!!!!!!!!!!!!」

ボールはグランの脇腹に当たったのだ。

「デッドボール」

神官王はデッドボールを宣言した。

「義晴!何やってんだ!」

僕は義晴に文句を言う。

「何って、相手全員を当てればあっちのチームはいなくなるからいいだろ」

「!!!!!!!!なるほど」

みんな納得したようで、僕と八重、恵は啞然としていた。

「義晴さん、それは反則です。今度やったら危険球とみなして退場にしますよ」

「!!!!!!!!当てるのはダメなのか……」

「知らなかったのかよ」

「義晴君、ルールくらい読みなさいよ」

「全く、下品なやり方ですわ」

「めんどくさい競技だな……まあ仕方ない。次はちゃんとやるか」

グランは一塁に行き、義晴はボールを握りしめた。次の打者は僕で、バッターボックスに入った。

「いくぞー!亮!」

「!!!!」

義晴はボールを投げた。速さはマッハ10で、僕はバットに当たった。

ボールに威力があり、打ち上げることができなかった。

僕は超サイヤ人ブルーにあり、パワーアップした。

ボールは徐々に勢いを落とす。すると義晴は気を上げ、足に気功波を作った。

「くらえ！シャイニングブラスタ―!!」

義晴はバジルのシャイニングブラスタ―をボールに向かって投げた。

さらに威力が上がり、押された。

「くっそ、負けるから!!界王拳!!」

僕は超サイヤ人ブルーにさらに十倍界王拳を使った。

「何っ!?!」

僕はバットを振り、ボールは三塁に行った。グランは二塁に向かって走り出した。

しかし、バウンドする直前に八重がキャッチした。

「アウト」

僕はアウトになってしまった。グランは急いで一塁に戻って行き、八重は一塁にいるルドルフに向かって投げた。ボールはグランより速かったが、ルドルフはボールを取り損なう。

「ラッキー」

グランは再び二塁に走り出した。

「こっちだ」

義晴はボールを渡すように言った。

ルドルフはボールを取って義晴に投げた。

ボールは義晴に渡り、肘でグランの腹に当てた。

グランはそのまま二塁のベースの上に倒れた。

義晴はガッツポーズを取った。

「セーフ」

神官王はセーフと宣言した。

「えっ!?!」

「義晴さん、ボールを相手に当てなければアウトになりませんよ」

「そ、そうか……」

グランは立ち上がってそのまま二塁に留まった。

次の打者はアンジェリカ、義晴はマツハ10の速さで投げた。



アンジエリカは魔術でボールを止め、バットで打った。

ボールは高く打ち上がったが、レイチエルがキャッチした。

「レイチエルさん、グランさんに当ててください」

八重はグランに当てるように指示した。

レイチエルはグランに向かってボールを投げた。

グランの頭に当たり、三塁のベースの上に倒れた。

「セーフです」

神官王はまたセーフと宣言した。

「レイチエルさん、ボールを持ったまま当てないと意味がありませんよ」

「そっ、そんな〜」

グランはフラフラになりながら立ち上がった。

試合は進み、0対0で引き分けになった。なお、グランは一ヶ月間神界にこなかった。

僕は第十二世界に戻った。あっちの時間では夜の十一時。明日はミッドガルの学生として学園に通うため、散々な目に遭わずに済んだと安心した。

## クラスメイト見習い

朝の六時、僕は砂浜で修行をしていた。”破壊神”の服と靴に十トンの重さを追加して、気のコントロールをしていた。

毎朝必ずやっているもので、どんどん強くなる。仕事が無い時は読書か修行をしていることが多い。

本は夜に読んでいるのがほとんどで、昼間は修行をしている。

「もう少しパワーを上げるか」

僕は”カチカチン鋼”を使って、亀仙人の萬國驚天掌（ばんこくびつくりしよう）を練習している。

体内に流れる微量な電流を互いに合わせた手の平に集中させ、腕を突き出すと共に放射する。

被弾した相手は空中に浮遊させられることによって四肢の自由を奪われ、やがては感電死してしまうという、非常に危険な技だ。

原作で初めて披露したのは天下一武道会の決勝で悟空に追い詰められた時に使用した。

ドラゴン相手なら大量のエネルギーが必要で、殺す事も出来るがその隙に悠たちがダメージを与えることができるため、サポートの練習をしている。

周りに気づかれないようにシールドを何重にもかけているため、ミッドガルは僕がここで修行していることは知られてはいない。

ところが、人が近づいて来ていることに気が付いた。足音から聞いて、ミッドガルの学生のようなだが、気を少し感じると悠と同じくらい力を感じる。

どうやら相当な使い手のようだ。スポーツの得意とかそういうレベルではない。

格闘技を習っていると思われる。

僕はすぐに修行を辞め、シールドを消した。

深月さんからはまだ生徒たちと接触してはいけないと言われているので、体を透明化して、すぐに深月の宿舎に戻った。

一分して、ジャージを着ていて、ボーイッシュでさっぱりとし

た少女アリエラ・ルーがランニングをして、砂浜を見ると足を止めた。

「あれ、さっきまでここに人の気配があつたような……」

アリエラは僕の存在に気付いていた。

やはり彼女は只者ではないようだ。

「気のせいかな」

アリエラは再び走り出した。違和感はあつたようだが、彼女は気配を探れるようで、人がいないと分かるとランニングを再開した。



「おはようございます、亮さん」

「おはよう、深月さん」

僕は自分の部屋に戻ってシャワーを浴びて、昨日届いた制服に着替えて三階の食堂に向かった。

深月は僕よりはやく着いていた。

「もう少し待ってください。七時になったらオートメイドが用意してくれますので」

「了解」

深月は席に座ってパソコンをカタカタ打ち込んでいた。

どうやら僕が外で修行していたことはバレていないようだ。

彼女はミッドガルの生徒会長であるので、仕事をしていると思われる。

少し時間が経つと悠が食堂に入って来る。

「おはようございます、兄さん」

「おはよう、悠」

「おはよう、深月、亮」

僕と深月は挨拶をすると悠も返してきた。

丁度七時になり、オートメイドが食事を持ってきた。

「いただきます」

僕たちは食卓に並べられた料理に手を付ける。

「今日からだな、亮」

「ああ、学生生活を送るのは六年ぶりだよ」

「そうなんですか？神々の世界にも学校があるんですか？」

深月は僕よりさんまの塩焼きを箸でつまみながら言う。

「言っただけじゃなかった？僕は元々他の世界の人間だよ」

「えっ!？」

「なっ!?!初めて聞いたぞ!どうやって神になったんだ？」

悠は驚き、神になった経緯を聞いた。

「まあ、色々とあってね。いつか説明するよ。それは置いて、僕が暮らしたのは第一世界。ここと対（つい）になる世界だよ」

「対?どういうことですか？」

「世界には十二存在してるのは知ってるよね。対とは言わば裏と表のようなものだよ。例えば第一とこの第十二世界、第二と第十一世界のように足して十三になるのが対になっていて、双子のように同じ文化の町や人間がいるんだ」

「そっ、そうなのか」

悠と深月は驚いたまま、箸が止まっていた。

「では、亮さんがいた第一世界では兄さんや私のように似ている人もいるんですか？」

「いると思うよ。対とはそういうものだから」

僕は食事を進めていた。普通こんな訳の分からない話を信じてくれる人はいないが、悠と深月は神の存在を信じてくれている。

僕の正体を知るのは悠と深月、シャルロット学園長とマイカである。

他は皆、特殊な”D”とされている。

「不思議ですね……神様が近くにいるなんて、今でも信じられませんがこれは現実ですので受け入れるしかないありません」

「ははは、今でも信じてなかったのかよ」

こうして朝は雑談をしながら食事を続けた。

「……であるからして、彼も私たちと同じ”D”ではありますが、我々とは違って特殊な力も持っています。そんな彼に多くの疑問を抱く方もいると思います。しかし、彼はこの五年間で”青”のヘカトンケイルや”紫”のクラーケン、そして”白”のリヴァイアサンなどのドラゴンと戦っていました。今回のリヴァイアサン戦では、我々に少なからず協力してくれました。彼を受け入れる事もまた——」

ここは島の中央に位置する学園の体育館。全校生徒が整列し、壁際には教職員が並んでいる。その全ての視線が向けられた壇上で、深月はマイクを通して皆に語りかけていた。

僕はその隣で後ろに手を組んで立っている。

「——身内である兄の紹介の時と同様、不安に思われる事は多いと思います。ですので私は皆さんの生活を守るために、全力を尽くすと約束いたします。勿論兄と同様、問題を起こした場合はより厳しい処分を——」

今行われているのは、僕のミッドガル転入に関する説明を行うための全校集会だ。

食事が終わったあと、僕は深月さんと一緒に非常用階段へ登校した。集会があるまでは他の”D”と接触してはいけないという事で悠は一人でいつも通つてる道で通学した。

悠のミッドガル転入の集會を杖から見ていたが、やはり彼女には信頼と尊敬があることが雰囲気だけで分かる。

(これが深月さんの力か)

僕は深月さんが何故生徒会長になったのか改めて知った。

説明している時間は暇なので、周りを見渡した。数はそれほどではないが、気を探ると生徒は六十六人だ。

教職員の数は二十人、合計で八十六人いるということになる。

悠がいる列を見つけると数日前にリヴァイアサンのつがいになったイリスと金髪の少女、ショートカットの本を持った少女、パソコンを持った赤毛の子、茶髪のボーイッシュな少女、六人が整列していた。

僕が配属されるのはブリュンヒルデ教室だと聞いている。深月を含め、悠もブリュンヒルデ教室だと今日聞いた。

「——皆さんが彼を温かく迎えてくれる事を私は期待しています。そして彼にも我々の誠意と信頼に応えてる事を求めていきます。ですからどうぞ彼を、よろしくお願いします」

深々と頭を下げ、演説を締めくくる深月。すぐに大きな拍手が体育館中に鳴り響いた。

「さあ、亮さん。一言お願いします」

鳴り止まない拍手の中、深月が大和にマイクを譲る。

僕は普段通りの態度だが、集会なので偉そうにせず敬語で話した。

「どうも、大島亮と申します。精一杯頑張っていきますのでよろしくお願いします」

すると、拍手はより一層大きくなった。「よろしくねー!」「私たちがついてるよー!」「かっこいいー!」などの温かい歓声が飛ぶ。

やはり深月の皆を引き付ける演説と悠が来たということでは変わってきたと思う。

僕と深月は一礼し、舞台の袖に引っ込んだ。

「これで兄さんと同様、より好意的なものになるでしょう」

「そうか……それなら少しは楽になるよ」

「そうですか? 普段と変わりないと思いますが……」

「バレてたか、実は全然緊張してなかった」

正直なことを言うと言った深月さんは息を吐く。

「あなたって人は……さつきも言いましたが、問題は起こさないでください。あと——」

深月は忠告をしてきた。

「これから亮さんが配属される教室は問題児揃いです。私の言葉もどれほど届いたのか自信がありません。受け入れてもらうには亮さん自身の努力が必要ですので、くれぐれも正体を明かさなないようにお願いします」

「分かってるよ。けど、神だと言っても信じてくれないんじゃない

い？」

「貴方の力を目にすれば信じてしまいます。貴方は特殊な”D”として紹介してますので、決して軽率な言動はやめてください」

◇

僕が予想していた通り、配属されたのは深月と同じブリュンヒルデ教室だった。

狭い教室の中は机が3×3で置かれている。

原作を知ってるのでみんなのことは少し分かっているが、やはり深月の言う通り問題児のようだ。

みんな僕を興味津々に見ていたが、金髪の少女は僕を睨みつけるように見ている。

「では、改めて紹介させていただきます。彼は大島亮さんです。年齢は十六歳。出席番号は配属順ですからで九番ということになります」

「よろしく」

深月の紹介と共に僕は頭を下げる。

すると金髪の少女がさらに眼差しを鋭くして立ち上がった。

「あなたが一人でドラゴンを倒してきた方なのですか？」

僕に向かって質問してくる。

「まあね、正確に言えば戦ってきたの方が正解かな」

「そうですね……ですが、わたくしはあなたを認めただけではありませんわ」

金髪の少女は言ってきた。

確かに男がミッドガルに来ることは誰かしら不満を持つ者がいるだろう。

「貴方はなぜ、ドラゴンと戦っているのですか？」

「ん？理由か？」

金髪の少女は質問してきた。

「そうだね、修行かな？」

「修行ですか？」

「ああ、自分自身が強くなりたいからかな？」

これに関しては神の仕事にも関係しているので、本当のことは言えなかった。

「まあ、純粹に己を鍛えたいからだよ。でも、ドラゴンの進行上に街があつたから、被害を出さないように戦つたのも理由の一つだけだね」

「そうですか……」

金髪の少女は少しは納得してくれたようだ。

しかし僕は神であり、”D”ではない。僕のこととは特殊な”D”としてあるので、本当は場違いである。

「ですが、わたくしはまだ貴方を信用したわけではありません。そもそも本当に”D”なのですか？紹介では特殊な力を持っていると聞きましたが、その力しかないんじゃないのですの？」

「ん？証拠を見せろってことかい？」

僕が聞き返すと金髪の少女は首肯する。

「はい、今ここでお願ひしますわ。皆さんも興味がおありでしょう？」

金髪の少女が呼びかけると、みんなも頷く。

「深月さん、いいのか？」

「構いません。ですが、単純な物質変換をお願いします。あと、その他の力も周りに被害が出ないようにしてください」

「はいよ」

許可をもらい、僕は手に力を込めた。

上位元素（ダークマター）を作り出すのは初めてだが、僕は”世界神”、創造と破壊を司る神様だ。物質を作ることなど朝飯前だ。すると、野球ボールほどの黒い球体が手のひらに生成された。ざわつと教室内がどよめく。

僕は生成された上位元素を練り上げて日本刀を作った。



「こんなものか、初めて作るがまあまあかな」

周りを見渡すと呆然としていた。やはり、男で上位元素を生成するのは珍しいのだろうか。

「それ……剣、ですわよね？完全に物質化した剣に見えるのですか？」

「まあね、でもこんなので驚かれるとは思わなかったよ」

「おっ、驚いてなんていませんわ！まあまあですわ！」

「亮さん、このような危険物を作つていいとは許可してはいません。ですので没収します」

横から深月が僕の日本刀を取り上げた。

「失礼、じゃあ見せてあげるよ。僕の力を」

そう言つて僕は気をほんのわずかに上げ、手に力を込めた。

すると今度はサッカーボールほどの青い球体を作つた。

「！！！！」

悠以外のみんなはさらに驚いた。奇妙な球体に注目し、僕は説明した。

「人の体の中に流れるエネルギーがある。それを”気”と言う。これを操作して飛行することや、凝縮、あるいは放出して気功波として放つことができる」

「！！！！……！！！！」

皆は絶句していた。一見ひ弱に見える彼は本来人間ができる芸当ではないことをしている。

「この力は誰にでも備わっているから、修行をすればできるよ。さらに、この”気”を練り上げて武器を作ることができる。こんな風に」

僕は作り出した気弾を右腕に纏わせる。すると、”気”は長いサーベル状になった。

あまり力を見せても返つて怖がらせるだけだと思い、すぐにやめたが遅かった。

「まあ、こんなものかな？中国の山奥で修行した甲斐があった……ん？」

教室内は静まっていた。やはりさっきのでやめていればよかったと後悔した。

(しまった……やりすぎた。どうしよう……)

僕はどうしようか迷った。するとある漫画を思い出す。確か海賊の漫画で主人公の祖父がみんなが驚くことを口に出してしまい、その後と言った言葉である。

「じゃっ、じゃあ……今の、見なかったって……ことにして？」

僕は目を逸らして言ったが深月が突っ込んできた。

「出来るわけないじゃないですか？」

「いつ、いや〜やりすぎたから上位元素(ダークマター)のところまで見たってことにならないかな？」

「なりませんよ。でも、今のはともかく、これで彼が”D”であることは証明できました」

その一言でみんなも我に返ったようだ。でも、避けられるかもしれない。

それでも挫けずに頑張るしかない。

「ホームルームの残り時間も少ないですし、簡単な自己紹介に移りましょう。私は飛ばして、出席番号順にお願いします」

そう言って深月は金髪の少女を見た。彼女はまだ不服そうな表情を浮かべながらも立ち上がる。

「出席番号一番、リーザ・ハイウォーカー。十六歳ですわ。わたくし、まだ納得したわけではありませんが、あなたをクラスメイト見習いにしてもいいと思ってますわ」

「クラスメイト見習い？」

僕は聞き返す。

「あなたはわたくしたちのクラスメイトを守ってくださいました。そのことだけについては評価して差し上げますわ。ですが、簡単にクラスメイトになれるとは思わず、努力してください」

彼女はそう言って席に座る。

「ああ、ありがとう、リーザさん」

「なっ！あなたにお礼を言われることはしてませんわ」

彼女は頬を染める。なんだかいじりたくなってきた。

次に立ち上がったのは、本を持ったシヨートカットの少女。

「出席番号二番、フィリル・クレスト……十五歳。趣味は読書です。よろしく」

「あつ、こちらこそ」

ぺこりと小さくお辞儀したので僕もつられてお辞儀した。

フィリルと名乗った少女は静かに着席した。

続いてボーイツシユな少女が起立する。

「ボクはアリエラ・ルー。十五歳。出席番号は五番。よろしく」

「よろしく(ん?五番?)」

深月を飛ばしても一人ない抜けている。確か四番は篠宮都という少女だ。

原作を知っていても、読んでないと忘れるものだ。

次の生徒はパソコンを机の上に置いている赤毛の少女。

どうやら、飛び級した天才のようだ。

「ん」

彼女は小型の携帯端末を取り出し、僕に画面をみせる。

「出席番号六番。レン・ミヤザワ十三歳。年下だからって舐めるなよ……お前の十倍、頭はいいんだから……飛び級してるのか」

「ん」

レンは頷く。

「舐めてないよ。けど、調子には乗らないようにするよ」

どんだん上手くやっていける自信がなくなる。

その後に立ったのは親友の悠だ。

「物部悠だ、……と言っても知ってるか」

「ああ、よろしくな悠」

悠と同じクラスになれて安心した。同性が一人でもいると楽になる。

「彼のことを知っているのですか?」

リーザは聞いてきた。

「まあね、半年前に知り合ってたね」

僕はリーザの方を向いて答えた。すると、深月が横から入ってきた。

「亮さんは兄さんのところを知ってましたね。亮さん、不純異性交遊はやめてくださいね」

深月さんがいきなり注意してきた。

「しないよ……ていうか、そんなことする人がいるのか？」

「ええ、います」

「……なるほど、悠のことか」

「そうです」

確か悠は原作でどんどん変態化したことを思い出した。

「そ、そんなことは……無いかもしれない」

周りが静かになった。

「何かしたんだ」

「疾しいことはしてないぞ」

「いや、親友の勘で分かる。お前、か弱い少女を襲っただろ？」

「ち、違う！ たしかに押し倒してしまっただが……あ」

悠は墓穴を掘った。すると周りは悠に冷たい眼差しを向けた。

隣の銀髪の少女は頬を染めていた。僕はこのクラスにいると思ひ出した。

「大丈夫だよ。僕は聞かなかったことにするから」

「あ、ありがとう」

悠はそう言って席に座った。まだみんなからの視線はあり、彼は目を逸らした。

隣の銀髪の少女が立ち上がって自己紹介をした。

「あたしはイリス・フレイア……十六歳。出席番号は七番。リヴァイアサンの時は守ってくれてありがとう、オオシマ」

「守ったって言うか……まあ、戦ったのは事実だけど。けど、よろしく」

彼女はそう言って彼女は席に座る。

こうして僕の学園生活が始まった。

## 対バジリスク試験

午前の授業は選択式の一般教養科目で出席は任意のようで、空席がいくつもあった。

僕は初めてなので全部受けて、悠と深月と食事した。購買で買ってきてくれたパンを教室で食べたのだが、深月から説教を受けていた。

内容は僕がみんなの前で”氣”を使ったことのようなのだ。あまり驚かせないように何度も注意されたが、やってしまったのでくどくどと説教をされた。

でもいつか分かることだから早めに知ってもらうしかない。反論したが、そういうのは試験の時だけにしてほしいと返された。

神(元人間)が人間に説教されるのは初めてだ。もしかしたら、神として恥ずべきことだと思うが、どうも深月には敵わないようだ。教室にいるのは僕たち三人だけなのでこんな話が出る。

予鈴が鳴ると、生徒たちがぞろぞろと戻って来る。

やはり、僕に対しては若干引いた目をしていた。まあ、ここから努力するしかない。

みんなが席に座り、午後の授業が始まる。

午後は”D”として必要なことを学ぶ必修科目があるという話だ。

ちなみに席は、机が3×3で並べられている中で一列目の真ん中に座っている。つまり最前列だ。

待っていると、ガラツと扉が開かれた。

現れたのは二十歳前後の女性。長い髪を頭の後ろで纏め、ポニーテールにしている。

女性は教壇に立つと、切れ長の瞳で僕たちを見渡した。

「起立」

深月さんの号令と共に皆が立ち上がる。僕も少し遅れて席を立った。

「礼」

お辞儀をして、着席。皆の視線が集まるのを待ってから、女性は口を開いた。

「それでは授業を始める。が——今日は新顔がいるんだっとな。それもドラゴンを倒した功績を持つ男子生徒……大島亮」

女性の視線が僕に射る。どうやら、軍人の眼差しのようなのだ。

彼女のことは原作で知っているため、この展開になるのは予想していた。

「とりあえず自己紹介をしておこう。私は篠宮 遥。このクラス  
の担任であり、”D” 関連の授業全てを受け持っている。階級は大佐。ミッドガルの司令官だ。以後、覚えておくように」

「了解です、篠宮先生」

「よろしい。では君には折り入ってやって欲しい事がある」

普通は授業に入るのだが、篠宮先生は僕に頼み事をしてきた。

「現在確認されているドラゴンは知っているか？」

「はい、ブラック・ドラゴン——」黒のヴリトラ。それから、  
ホワイト・ドラゴン——」白のリヴァイアサン。更にブルー・ドラゴン——」青のヘカトンケイル。レッド・ドラゴン——」赤のバジリスク。イエロー・ドラゴン——」黄のフルスベルグ。  
グリーン・ドラゴン——」緑のユグドラシル。そして、紫のクラークン、でしょうか」

僕は覚えている限りのドラゴンの名前を読み上げた。

「そうだ。ちなみにヴリトラは二十五年前に姿を消して行方不明のまま、クラークンはミッドガルで討伐された。今世界で確認されているドラゴンは五体になっている」

原作を読んでいるため、そのことは知っている。

「我々は現在進行形で討伐計画を練っているドラゴンがいる。それはレッド・ドラゴン——」赤のバジリスクだ。今日は第三演習場でその訓練を行う。君には対バジリスク戦を想定したテストを受けてもらう必要がある。特に竜に対抗できる人間なら尚更な」

(なるほど、返り討ちにするだけでなく自らの手で討伐するつもりか)

「ああ勿論、それに備えるための時間を設けている。すぐには言わん。君も何かと準備がいるだろう。明日でも良いし明後日でも良い。それなりに期間がいるなら一週間後も考えてやらんことはない」

「どうやら、篠宮先生は僕のために時間を設けてくれるようだ。」

「今日でも大丈夫ですよ」

僕は今日でもいいと提案した。

「何?……し、しかし、テストは高い攻撃力が必要になる。君もそれなりの準備が必要じゃないのか?」

「僕なら大丈夫です。ドラゴンと戦う修行を毎日してますので、いつでもやれますよ」

「分かった、では全員、体操服に着替えて第三演習場へ集合!」

「」「」「はいっ!」「」「」

僕たちは全員が声を合わせて応えた。



第三演習場は学園の地下深くにある施設だった。一辺が百メートル以上ある巨大な直方体状の空間だ。天井も、壁も、地面もコンクリートで覆われており、ところどころにカメラやディスプレイなどの機器が取り付けられていた。

僕は昨日支給された体操服に着替え、テストを行うために第三演習場に来ていた。

「エレベーターでかなり降りたな……どうして地下に演習場を作ったんだ?」

僕が疑問を口にする、傍で準備運動をしていた悠がこちらを見る。

「変換する物質によっては周囲が汚染されるから、地下の閉鎖空間が必要だそうだ。その気になれば俺たちは有毒なガスとか、核物質

とかも作れるみたいだからな」

「なるほど、念のためにか。しかし、大丈夫だろ？僕はともかく、みんなは何度も練習してるから」

「まあな、でも亮。面白そうだからって、作るなよ」

「しないよ、僕がそんな奴に見えるかい？」

「はつきり言っつて見える」

悠は僕の性格を分かっているようだ。実際はしないが考えてしまう。

「……はつきり言うなよ。でっ？試験つてのはどんな内容なんだ？」

「ああ、それは……」

「兄さん、亮さん。演習を始めますので準備運動は切り上げて整列してください」

悠が説明する前に深月は入ってきた。

「ああ、分かった。内容は先生が説明する筈だ」

「そうか。じゃあ行くか」

僕たちは篠宮先生の元へ歩き始め、整列した。

「皆は既にやったが、テストの内容は百メートル離れた場所に設置したダイヤモンドの塊への攻撃だ。高い命中精度と破壊力が評価の対象となる。これはバジリスクにダメージを与えられるかのテスト。バジリスクは赤みを帯びたダイヤモンドの鱗を纏っているからな」

篠宮先生が指し示した先には直径十メートルほどのダイヤ塊が設置されていた。恐らく、「D」である深月が物質変換したものだろう。

「補足として、今回の試験には補助試験が用意してある。此方はバジリスク戦における防御隊の役割を想定し、五十メートル先にできるだけ大きな防壁を作るというものだ。これは上位元素の物質変換の制御が苦手な生徒に合わせたもので、大きさ、厚さ、硬度だけでなく、変換速度も評価の対象になる」

篠宮先生は僕たちに視線を向けながら言う。



「大島亮。君には最低どちらかのテストで基準点をクリアしてもらいたい。万が一、両方不合格の場合、バジリスクを対象とした作戦行動から除外されるため、注意するように。……最も、君は既にヘカトンケイルやクラーケン、リヴアイアサンと相対しているため心配はないと思うがね」

「分かりました」

遥が淡々と指摘した後、最後の言葉に笑みを浮かべ、僕は返事をする。これは既に何度も竜と対峙した亮の所業を評価して言ったものである。

「では、これからテストを行う前に新人に合わせた演習を行ってもらう。希望者から前に出ろ」

「どうやら希望者から演習を行うようだ。最初に前へ出たのはリーザだ。」

「最初はわたくしからやらせていただきますわ」

リーザは長い金髪をかきあげる。

「見ていなさい、オオシマ・リョウ！あなたにわたくしの力を思い知らせてあげますわ！」

何処か対抗心があるのか、リーザは亮を見て言い放つ。

「え？あ、はい」

とりあえず淀んだ返事はした。

リーザは自信満々の様子で胸を張って歩き、ダイヤを狙う位置に移動する。

「射抜く神槍（グングニル）！」

リーザの架空武装は槍のようだ。金色に輝く槍を腰だめに構えたリーザは、鋭い穂先をダイヤ塊に向けた。

「貫け、閃光っ！」

穂先が眩く輝き、一筋の閃光が迸る。その光はダイヤの塊を破壊し、後ろの壁に大きな穴を開けた。

「ほう、レーザービームか。なんて威力だ」

離れたところで見えていた僕は感心する。ダイヤは高温にそれほど強くないため、熱量で勝負するのは正しい選択だ。

しかし原作とは大分違っており、ダイヤに大きな風穴を開ける威力しか無かったと覚えているが、どうやら違ったらしい。

あの威力は手加減されているため、本気を出せば悟空のかめはめ波と同等の力を持っている筈だ。

難なく課題をクリアしたリーザは、得意げな顔で待機場所に戻ってくる。

「ふふん」

僕に挑発的な流し目を送り、壁に背を預けるリーザ。思い知ったかという顔だ。

こういう私の張り合いは結構好きだ。だんだんとワクワクしてきた。

その間に深月は再びダイヤを生成して戻ってきた。

次に臨むのは文学少女のフィリル・クレスト。彼女は何処か眠たげな眼差しで遠くのダイヤ塊を見つめ、胸の前に片手を上げた。

「来て——架空の魔書（ネクロノミコン）」

フィリルは上位元素を大きな本の形態にして持ち、まるで呪文のように告げる。

「エアロ・ブラスト・カルテット」

ガゴゴゴガンツと鈍い音が間を置かず四連続で鳴り響き、ダイヤの塊を砕いた。

極限までに圧縮した空気を砲弾と同じ場所に四発叩き込んだようだ。

（彼女もこれほどの実力を持っているのか）

今の威力も悟空たちに匹敵する程だ。

続くのはレン・ミヤザワ。彼女も補助試験ではなく、ダイヤ破壊の方に挑むらしい。

「……粉碎する灼鎚（ミョルニル）」

レンが細い手を空に掲げ、ぼそつと呟くように形成する架空武装の名を告げる。するとその手にレンの体の数倍以上はあるハンマーが現れた。

鎚はさらに巨大化し、天井まで届きそうな程になる。質量のな

い上位元素だとしても、それはバランスを欠いた異様な光景だった。尋常ではない生成量だ。彼女の物質変換は十トンどころか、その百倍に達しているかもしれない。

「ん」

レンは巨大化したハンマーを無造作に振り下ろした。落下中にもその鎚は大きくなっていき、その先端はダイヤモンド塊の上に到達した。

そこでハンマーの先端部分が赤く輝き、物質化を始めた。質量を得た鎚は重力に引かれるまま速度を増し、ダイヤモンド塊へと激突した。

ガゴオオオオオオオオン!!

その衝撃と質量を受け止められず、ダイヤモンドの塊が砕る。

リーザは砕けたダイヤモンドの近くに行き、生成した。

平然とした顔で戻ってきたレンと入れ替わりに、今度はアリエラが補助試験用の立ち位置へ向かう。

「先生、ボクはこっちで」

篠宮先生に防壁の構築に挑むことを伝えたアリエラは、右腕を肩の高さまで上げ、鋭く告げる。

「牙の盾（アイギス）」

上位元素がアリエラの右腕を包み込む。彼女の架空武装は手甲のようだ。

「防壁、展開」

右手を振るってアリエラが告げると、五十メートル先のマーカー上に球体状の上位元素が出現する。どうやら彼女は距離感を掴むのが上手いらしい。

上位元素は巨大な壁へと変換されていく。それも一枚ではなく何層もの多重構造だ。

あの硬度は“カッチン鋼”の二分の一を誇る。

やはり、原作とでは実力が違うようだ。

アリエラの次に来たのは深月。どうやら彼女はダイヤモンドを破壊するようだ。

「五閃の神弓（ブリューナグ）」

彼女の右手に弓と矢が出現し、ダイヤモンドの塊に向かって構える。

「一の矢——分かたれる風（フォーク・ウインド）！」

彼女が矢を放つとダイヤモンドの塊が砕かれた。

フィリルと同じで空気を圧縮した攻撃。

彼女もやはり、リーザたちと同様にダイヤモンドを破壊できるようだ。

「次はあたしだね」

深月の次に登場したのはイリス・フレイア。ダイヤモンドを狙う位置に立った後、上位元素の杖を生成した。

「双翼の杖（ケリユケイオン）！」

杖の先端をダイヤモンド塊へ向け、集中し始めるイリス。

彼女は何でも爆発させてしまうという特殊な才能を持っている。一見欠陥・無能なものに感じるが、悠は彼女と特訓してその見方を変えた。

空気は愚か、理論上は最も頑丈で安定した物質であるミスリルですらも爆発させてしまう事を、一種の才能と見なしたそうだ。

「来たれ、来たれ、彼方の欠片——」

黒い球体状の上位元素がダイヤモンドの周辺に複数出現し、アリエラと同じで距離感を掴むのが得意のようだ。イリスは百メートルもの距離を正確に認識していた。

「聖銀よ、弾ける！」

そして、イリスが告げると上位元素が一点に収束し、銀色に輝くミスリルに変換される。

そのまま変換途中のミスリルが膨張し、爆発——。

その破片がダイヤモンドの塊を砕き、貫き、バラバラにさせてしまった。最高の強靭さを持つミスリルだからこそこそでできるものだ。

悠いわく、イリスにしかできない才能のようだ。

これは”爆発する事を前提”とすればある程度の制御は可能で、破片を前方に集中させる事ができるようだ。

ドラゴンの立場からすれば、目の前に突然ミスリル製の手榴弾が出現するという見方もできる。

竜の脅威となるこの技術を“白”のリヴァイアサン戦で使用し、十分に奮った。

最後に登場したのは物部悠。ミッドガル始まって以来の男の”D”。

他の”D”は十トンの上位元素を生成できるが、彼は僅か十キロしかできないようで、防壁は薄い鉄板しか作れない。

なので、悠はダイヤを狙う立ち位置に着く。

「ジークフリート」

彼は右手に重さのない上位元素（ダークマター）の装飾を形成し、銃口をダイヤに向けた。

「空圧弾（エアープリッド）」

圧縮した空気の銃弾は、ダイヤの中央に大穴を開けた。

原作では、一万リットルもの体積だが、今のはその十倍以上もの空気を極限までに圧縮して放ったため、塊そのものを破壊することはできなかったが、これならバジリスクにも効くはずだ。

深月は大穴が開いたダイヤに向かって生成する。

「大島亮。君はここまで見て何か気付いた事があるか？」

篠宮先生は彼女たちの一連の行動から訊ねてくる。

「みんな武器を作り出していて、遠距離での攻撃……ファイリルさんやイリスさんを見るとまるで魔法みたいですね」

「そう、その通りだ。生徒の中には魔法を使ってイメージで物質変換を行った方がやりやすいという者もいる。女というのは想像力が働くからな。付け加えるなら上位元素の形態変化は伝説上の武器・道具を模す事を推奨している」

「なるほど、架空武装とはそういうことだったんですね」

僕は架空武装が何故そう呼ばれているのかを忘れていたため、篠宮先生の最後の言葉に納得した。

「そういう事だ。では今度は君の番だ」

「分かりました。さてと、やるか」

僕はダイヤの塊の近くへ歩き出した。

正直、彼女たちのことを侮っていた。原作でしか知らない僕は

この世界でも同じだと思っていたが、実力は全然違っていた。

僕は彼女たちの認識を改めることにした。

悠たちは僕に注目している。悠や深月、イリスは僕の力を知っているが、篠宮先生を含め、他のみんなは知らない。気になるのは当然のようだ。

しかし、ただダイヤを破壊するのは誰だって出来る。それでは僕の実力を知ってもらうのは無理がある。

そこである考えが浮かんだ。試験ではあるが、超サイヤ人で挑むしかない。

しかし、超サイヤ人で受ければダイヤは一瞬で破壊できるが、演習場はボロボロになってしまう。

だからこそ、僕は補助試験の位置についた。

すると周りは少し驚いた。悠たちはダイヤを破壊すると思っていたのだろう。しかし、僕は演習場を破壊しないように五十メートルの位置についたのだ。

「じゃあいくか」

僕は右手に上位元素（ダークマター）を生成する。”D”と違って上位元素はいくらでも生成できるが、その力で”カッチン鋼”を作ったことがないため、一度握りしめる。

握りしめた右手にあった上位元素を消し、”世界神”の力を使う。

右手をダイヤの塊に向けて、”カッチン鋼”でできた巨大な壁を作った。

アリエラと違って何層もの多重構造ではないが、厚さは同じくらいである。

アリエラが作った防壁に匹敵する物を作り出したことで、その場にいた者たちは驚く。

しかし深月は驚いていなかった。彼女は僕が”カッチン鋼”を作ったと分かったようだ。彼女の他にシャルロット学園長とマイカ・スチュアートさんにしか見せておらず、”カッチン鋼”の硬度は知っている。

本来ならこの時点で試験は合格だが、防壁を作ったのは僕の力を見せるためであるため、この方が攻撃しても演習場は無事だと思っただからだ。

超サイヤ人の状態で気功波を撃てば演習場は無事では済まないが、防壁があれば無意識にそこに集中するので初めに防壁を作ったのだ。

僕は補助試験の位置からダイヤ破壊の位置に向かった。

「まさか……防壁を展開したままダイヤを破壊するのか!？」

篠宮先生は僕がしようとしていることを察したようだ。

悠たちもダイヤ破壊をすることに驚きを隠せなかった。

普通はどちらか一方で試験に臨むが、両方を受ける人は見たことがない。

僕はダイヤ破壊の位置につき、防壁を見た。手に上位元素（ダークマター）を生成した。

やはり、気を使って攻撃しようと思ったが、それだとホームルームの様に引いてしまうと思い、一応作った。

そして、上位元素を身体に纏わせた。そのまま融合したように見せかけて消滅させ、僕は全身に力を込めた。

「ハア~~~~!!」

僕は全身を金色に輝かせ、超サイヤ人になった。

「!!!!!!」

悠たちは驚き、目を腕で隠した。

あまりに眩しすぎて見えないのだ。

僕はそのまま力を解放して少し抑えた。金髪になり、周りは金色の光に輝いたままだ。

悠たちは亮の姿にさらに驚いた。急に変わったことで恐怖を感じた者もいるだろう。

「あれが篠宮先生が言っていた金色に輝く力……」

深月はリヴァイアサンが攻めてくる数日前に、篠宮先生が亮について教えた情報を思い出していた。

どうやら、周りもそのことを思い出したようだ。

しかし、いつかは知られてしまう力であるため、僕は周りの目を気にせず、両手に気を集中させ、かめはめ波を構えた。

「かゝめゝはゝめゝ……」

両手に青い気功波を作り出し、防壁に向かって放った。

「波ー!!!」

かめはめ波は防壁に衝突し、”カッチン鋼”は大きな穴を開け、そのままダイヤを消滅させた。

防壁を作ったおかげで無意識に真ん中にだけ貫通し、リーザの比ではないほどの壁に大きなを開けた。

それでも壁には当たるので、ダイヤを破壊した後すぐに気を消した。

おかげで爆発は起こらずに済んだ。

防壁には大きな穴が空いており、ダイヤは綺麗に無くなっていた。

僕は超サイヤ人を解除し、”カッチン鋼”を破壊した。

「破壊」

周りには物質変換を解いたように見せるため、すぐに消滅させた。

その場が沈黙で包まれる。周りは驚きで声が出せなかった。

これで周りが引くのは確定したが、そうなつては困るのでその場で背を地面について倒れた。

「あくしまったー！本気を出し過ぎたー！もう動けないやー！」

僕は周りに聞こえるように言つて息を切らすように演じた。

「大島亮——合格だ」

篠宮先生は我に帰り、結果を告げたのだった。



## スカーレット・イノセント 一日の朝

六年前、僕はトラックに引かれそうになった少女を助けたが、跳ねられて死んでしまった。

しかし、助けた少女は世界の頂点に君臨する神であり、僕は一年間修行して一つの世界を管理する神となった。

世界は十二存在しており、僕は第十二世界を担当している。階級は”世界神”。

文明の調査や世界で起きる空間の歪みの修正、そして世界を脅かす存在を排除するのが仕事である。

神になってから五年が経ち、強さはドラゴンボール超の”破壊神”ビルス と同等の力を手に入れた。

いろんなことがあり、僕は書類にして神官王に提出しに来たが、要件はそれだけではない。

「そうですか……そんなことが」

「はい。ですのでここに來れる時間が……」

僕は神官王にミッドガルで暮らすことを伝えるために神界に來ている。

リヴァイアサン戦から二週間が経とうとしていた。僕は悠たちと協力して倒したが、深月との約束でミッドガルの保護を受けることになった。

僕は神様であり、”D”ではないので隔離かと思ったが、ドラゴンを倒した功績で入学という形になった。

”世界神”の正体を知るのは悠と深月、シャルロット学園長と秘書のマイカ・スチュアートである。ミッドガルの教職員や他の”D”には特殊な力を持った”D”ということになっている。

ミッドガルの学生として、島を出ることはできないが神界に行くことは許可をもらった。

神界と下界の時間帯が違うので僕は神官王にミッドガルで主

に生活を送ることを伝えた。

神官王は納得してくれて安心した。

「構いませんよ。第十二世界での仕事はすっかりやっていよう  
ですし、それに絶対神ゴッド様も納得してくれることでしょう」

「ありがとうございます」

”絶対神”ゴッド、全ての世界の頂点に君臨する最高位の神様  
で僕が助けた少女だ。世界そのものを作り出すことや、一瞬で消す事  
もできる存在である。

あの方よりも上は存在しない、全王と同じくらい偉く、無邪気  
な性格の持ち主。

「神の存在は知られても問題ありませんので、思う存分楽しんで  
ください」

「はい、それでは」

僕は部屋を出て、休憩室に戻って行った。

階段を降りると第八世界の”世界神”パトリック・ホワイトが  
上がってきた。

「亮、聞いたぞ。下界で暮らすそうだな」

「ええ、いろいろとあります」

僕は立ち止まってパトリックと話した。

「それはそうと、八重ちゃんには話したのか？」

「いいえ、まだ話してません」

下界で暮らすことは他の”世界神”にも話したが、八重だけは  
まだ話していなかった。

「そうか……今からでも話せば？」

「そうですね。八重さんが何処にいるか分かりますか？」

僕は八重の居場所を聞いた。

「仕事から帰ってきてるから多分休憩室にいると思うよ」

「ありがとうございます」

場所が分かり八重のいる休憩室に行った。

休憩室は十一階にあり、世界神専用となっている。

扉を開けると八重が左手にペットボトルの水を飲んでいた。

「亮ちゃんおつかれ」

八重は明日に座って本を片手に読んでいた。

「お疲れ様です。八重さん、お話がありました……」

僕は下界でのことを八重さんに話した。

◇

——ズキン。

左手の甲に鋭い痛みが走り、意識が眠りの淵から浮上する。

瞼を開けると、窓から差し込む朝日が容赦なく瞳へ飛び込んできて、俺は目を細めた。

虫にでも噛まれたのだろうか、俺は左手の状態を確かめる。

左手の甲には奇妙な形のアザがある。これは上位元素（ダークマター）生成能力者——通称“D”なら、必ず体のどこかに持っている竜紋だ。アザの大きさは上位元素生成量に比例しており、俺の竜紋はひどく小さい。

そんな“D”としては落ちこぼれの証明である小さな竜紋の傍に、細いミミズ腫れが出ていた。

寝ている間に、どこかで傷つけてしまったのだろう。

傷は痛痒いが、引つ搔かないように我慢して、その手で枕元を探る。

指先で目覚まし時計を探り当てると、顔の前に持ってきて時刻を確かめた。

午前六時十分。

普段は六時半にアラームをセットしているので、いつもより少し早い目覚めだ。

しかし二度寝がしたくなるほど、眠気は残っていない。

「……たまには早起きもいいか」

俺はベッドから降り、洗面所へ向かった。鏡に見慣れた自分の

顔が映る。

寝起きのせいか、普段より目つきが悪くおもえた。

仏頂面で鏡の向こうから俺を睨みつけてくる少年の名は、物部悠。年齢は十六歳。階級は少尉。

十三歳のときに”D”として身柄を拘束され、軍——ニブルに配属。

三年間、特殊部隊スレイプニルの一員として戦地を転々とした後、つい一ヶ月前にミッドガルへ転属になった。

いや——正しくは転入か。

ここミッドガルは学園だ。日本の遙か南に位置する無人島を改造して作られた、”D”たちの自治教育機関。物部悠は今、ミッドガル学園の生徒として生活している。

顔を冷たい水で洗うと、少しだけ表情が引き締まった。

俺は部屋へと戻り、学園の制服へと着替える。

——ドンツ！

ズボンのベルトを締めたとき、頭上から大きな音が響いてきた。

「何だ……?」

俺は天井を見上げて呟く。この真上は、妹の深月が使っている部屋だ。

心配になり、俺は手早く着替えを済ませて部屋を出た。吹き抜けのエントランスホールから二階へと上がり、深月の部屋の前までやってくる。

「おい深月！何かあったのか？」

「え?に、兄さん?だ、大丈夫です、だから——きやあつ!」

扉の向こうから悲鳴と共に、もう一度大きな音が鳴り響いた。

「深月!」

俺はとつさに扉を開ける。

この宿舎全体が深月の所有物であるという油断からか、深月は部屋に鍵を掛けないことが多い。

勢いよく部屋の中へ飛び込むと、そこには予想外の光景が広

がっていた。

散乱する色とりどりの下着と、それに埋もれている裸の妹。傍にはタンスの引き出しがひっくり返っている。

深月は痛そうに頭を押さえていたが、俺が部屋に入ってきたことに気が付いて顔をあげる。

「な……な——」

大量の下着と、長く艶やかな黒髪の間隙から覗く白い肌が、羞恥に赤く染まる。

小ぶりだが形のいい胸を周囲の下着をかき集めて隠し、深月は俺を睨んだ。だが頭に縞柄のショーツが載っているの、いまいち迫力がない。

俺は腕を組み、部屋の様子を改めて確認する。

「えっと……タンスの上の段から下着を取ろうとしたら、バランスを崩してひっくり返ったって感じか？しかも二回も」

「な、何を冷静に状況分析してるんですか！二回目は引き出しを元に戻そうとしたところに、兄さんが来たせいです！というか、早く出てってください!!」

学園の生徒会長である深月は、厳しい口調で命令する。だが俺はその言葉に従わず、下着に埋もれた深月に近づいた。

「悪い、深月。出て行く前に、少しでも見せてくれ」

「え……う？に、兄さん？見せるって何を——」

生まれたままの姿で俺を見上げる深月。その前に膝を突き、深月の長い黒髪を手で掻き上げる。

「あ……兄さん、ダメ、です……そんな——」

深月は顔を真っ赤にして小さく首を横に振るが、それ以上の抵抗はしない。

俺は深月の頭を抱きしめるように引き寄せ、長い黒髪を指で梳き、掻き分け、その内側を探る。

「んっ……私たち、まだ……約束が——だから兄さん、待って……」

身をよじり、熱い吐息を漏らす深月。

俺の指が探していた微かなふくらみに到達する。びくんと、深月が体を震わせた。

「——痛むか？出血はないが、少し……腫れてるな。ちよつと待ってろ、氷水を作ってきてやるから」

そう言つて俺は深月から離れる。

「……え？どういうことですか、兄さん？」

ポカンとした顔で深月は俺を見上げた。

「どういうつて、傷を確かめたんだよ。頭打つたんだろ？」

「はい……あ、ああ、そういうことだったんですね。私、てつきり

——」

恥ずかしそうに顔を伏せる深月。

「てつきり？」

俺が聞き返すと、深月は耳まで真っ赤にして首を振つた。

「な、何でもありません！」

ぷいと顔を背ける深月。

俺はその反応に首を傾げつつ、氷水を作るために台所へ向かつたのだった。



「……たまにしか来れなくなるなんて……」

僕は八重に事情を話した。すると八重は寂しいのか頬を膨らませた。

「その……なんで拗ねた顔をするんですか？」

僕は理由を聞くと、八重さんは怒つた表情でこつちを見た。正直可愛らしい。

「だって下界と神界の時間の流れは全然違うんだよ！亮ちゃんと会えないのは寂しいよ」

「す、すいません。でも、出来るだけこつちに来ますから。勘弁し

てください」

僕はなんとか納得してもらおうと思ったがそういう訳にはいかなかった。

僕は仕事で八重といることが少なく、たまに他の世界の調査と一緒にになると、満遍の笑みを浮かべる。本当に可愛らしいので、見惚れてしまう。

「まあ、仕方ないか。そうなってしまったんだから」

何とか納得してくれた八重さん。

「でも、向こうの時間帯での夜に来てよね。そうじゃないとみんなにも会えないから」

「分かりました。何とかやってみます」

「じゃあお願い、あと——」

八重さんは突然頬を赤く染めて言ってきた。

「敬語、使わないんじゃないか?」

「……あつ、そうでしたね」

そういえば、そんな約束をしたことを思い出す。

確か仕事で八重さんの担当する世界で悪の科学者”ドクター”チャンが世界を征服するため、研究所に潜入している時に約束したのだ。

「あつ、また使った。約束でしょ?」

「ご、ごめん。……そうだったね八重さん」

「そうそう、そんな感じよ。八代さんともかく、同い年の子まで使ってるからもうちよいたため口でもいいと思うよ」

「そうだね、気をつけるよ」

八重さんは僕がここに来てから構ってくれてる。最初は先輩後輩の関係だったが、正式に、世界神”になっからフレンドリーに話してくる。

「それじゃあ食堂に行こ?」

「ああ、そうしよう」

僕たちは休憩室を後にした。すると八重さんは僕の右手を自分の左手に絡ませて握った。

「ちよつとだけでもいい?」

頬を染めた八重さんは上目遣いでお願いしてきた。

「っ!? いい、いいよ」

八重さんの上目遣いに見惚れてしまい、お願いを聞き入れ、食堂に向かった。



## ドジっ娘

「よし、食堂に行くか」

神界での仕事を終えた僕は深月の宿舎に戻っていた。

神界と下界では時間の流れが違う。

下界での一分は神界では六時間である。つまり、一日で一年を過ごすことができる。ドラゴンボールの”精神と時の部屋”と同じである。

制服に着替え、洗面所で顔を洗い、三階の食堂に向かった。

時刻は午前六時四十五分。

僕がミッドガルに入学してから二週間が経とうとしていた。学園生活に徐々に慣れてきており、青春を過ごしている。

”D”ではないが、この五年間でヘカトンケイルを二回も倒し、クラークンとリヴァイアサンを追い詰め、ミッドガルでは親友の物部悠と共につがいとなったイリス・フレイアを守るためにリヴァイアサンを倒した。

戦う前に生徒会長にして、悠の妹、物部深月とこの戦いが終わればミッドガルの監視下に置くことを条件に戦った。

奴を倒したあと、深月と共に学園の時計塔に行き、学園長シヤルロット・B・ロードと秘書のマイカ・スチュアートに正体を明かした。

隔離されると思っていたが、学園側は僕をミッドガルの生徒として迎え入れてくれた。

お陰でこうして青春を謳歌している。六年ぶりに学園生活を送っているため、ワクワクしている。

クラスにも馴染んできて、みんな優しく接してくれる。そうしているうちに三階の食堂についた。

深月個人の宿舎は、朝食、夕食とそれぞれ七時、十九時にオートメイドが三階の食堂に用意してくれる。

本来なら僕は神であるため、食事しなくても生きていけるが、それでも腹が空くので食事している。

ミッドガルの校舎一階から渡り廊下で繋がる食堂棟があり、そこに雑多な購買スペースと中庭に面したカフェテリアがあるのでよく利用している。

そんな事を考えながら食堂に入ると悠と深月の姿があった。

「おはよう！悠、深月さん」

「おはよう……」

「おはようございます……亮さん」

僕が挨拶をすると二人は存在に気づいて返してきた。

しかし、二人の様子が変だった。特に深月の顔が少し赤く、不機嫌そうな表情を浮かべていた。

「なんかあったのか？」

「ああ、色々とな……」

僕が問うと悠はどこか言いたげな様子を見せる。

二人に何があったのか疑問が残るが、食事前ということもあってその事には触れなかった。



二十五年前、日本上空に突如として出現した巨大生物。

ただ移動するだけで甚大な被害を巻き起こしたその怪物は、物質を無から作り出すという異能を用い、人間側のあらゆる攻撃を無効化した。

必死に抵抗する人類を嘲笑うかのように、怪物は悠々と世界を一周し、何の前触れもなく姿を消す。

その後、人間の中に怪物と同様の力を持つ者が生まれ始めた。それが上位元素（ダークマター）生成能力者“D”、もしくはタイプ・ドラゴンと呼称される子供たち。

任意の物質を作れるという能力は、経済的価値が非常に高い。昔は“D”の奪い合いで戦争すら起こったという。

そして”D”の発生と同時期に、新たなる巨大生物が世界中に出現する。

人智を超越する力を持つその怪物たちを、世界はドラゴンと総称し、対ドラゴンの専門の国際機関アスガルを設立した。

アスガルは国連軍を再編し、超法規的に活動できる軍隊——ニブルを組織。ドラゴンが原因で発生した諸問題に、軍事力で介入、解決を図った。

さらに”D”もドラゴンによる問題の一つと位置付け、赤道に近い無人島に隔離施設を建造。それがミッドガルの雛形となる。

設立当初は収容所的な側面が強かったらしいが、”D”達が成長し、数が増えると共に発言力は増し、ついには人権と自治を得た。

そうしてミッドガルは現在の学園となるのだが……”D”として生まれる者は何故か女性ばかり。必然的にミッドガルは女学校となった。

しかし俺は、そんな秘密の花園に通っている。

それは俺にも、上位元素生成能力があるからだ。

現在のところ世界でただ一人の、男の”D”。それが俺——物部悠。

だが、その人物とはまた特殊で、表沙汰ではもう一人の男の”D”とされている異質な者が加わっていた。

”D”でもないのに上位元素生成能力を持ち、自らを神と称していて、傍から見ればただの人間にしか見えないだろう。

しかし、彼の持つ特有の能力、”気”と呼ばれるエネルギーを使いこなし、数々のドラゴンを倒し、この世界では誰も見た事がない異能の力が備わっている男——大島亮。彼もこの学園に通っている。

俺の場合は三年前にニブルで身柄を拘束された時、彼はミッドガルには送られず、ニブルで兵士として育成されることになった。

けれど一月前、悠はいきなりミッドガルへ異動となる。

それはミッドガルで大きな権力を得た、妹の深月による計らい。

以降、俺は深月の”監視下”で学園生活を送っている。それは亮とて、例外ではない。

様々な勢力による彼への狙いが無きにしも非ずだからだ。理由としては、単純に亮の異様な力の対象がある故に、亮はミッドガルに保護される形になった。

無論、他の勢力が狙いに来ようが、圧倒的な彼一人でも対処は出来るだろう。

何故なら彼は創造と破壊を司る神、”世界神”と呼ばれており、世界を管理する存在で、下手をすれば世界そのものを破壊する力を持っている。

そんな彼は自らミッドガルに保護を求めてきた。

勿論、学園側に迷惑を被つたら、相応の罰が下されるのは目に見えている。それを承知の上で、亮はミッドガルの生活を送っている。

こうして、学園で二人の男子である悠と亮が何か問題を起こさないよう、深月は一般寮から離れた自分の宿舎に二人を住ませたのだ。

そういう訳で、深月と並んで登校するのは、最早毎朝の日常になりつつある。

時折、神の仕事で神界と呼ばれる場所に行くこともあり、亮個人で登校することもある。

「最近の兄さんは、少しおかしいです」

朝食を終え、三人一緒に宿舎を出て、学園へ向かう途中——  
深月は不機嫌そうな表情で呟く。

一般寮からの道と合流するのはまだ先なので、周囲には他の生徒の姿はない。

道は海岸の防波堤に沿って緩やかなカーブを描いている。防波堤の向こうには紺碧の海と白い砂浜が広がっていた。

聞こえるのは潮騒と、ヤシの木が風にそよぐ音。それに悠と亮、深月の靴音だけ。

「俺のどこがおかしいんだ？」

自分では思い当たる部分がなかったので、俺は率直に問い掛ける。

深月は落ち着かない様子で手にした鞆を何度も持ち替え、俺の顔を見上げる。

「亮さんがいる手前、話しづらいんですが、何というか……近頃、デリカシーのない行動が目立ちます。部屋にはノックなしで入ってくるし、その……私が裸なのに平然と近づいてくるし……少し、気安すぎると思っています」

「……？ 兄妹なら気安いのが普通だろ。深月は俺によそよそしくして欲しいのか？」

深月の指摘が理解できず、俺は眉を寄せた。

「そうではないんですが……」

もどかしそうに目を伏せる深月。上手く説明が出来ないという様子だ。

——俺がおかしい、か。

だがやはり彼が自分の行動を振り返ってみても、全くそんな風には思えない。

けれど……一つだけ、深月の違和感を説明出来る要因はあった。

二週間ほど前、ミッドガルに侵攻してきたホワイト・ドラゴン——”白”のリヴァイアサンとの戦いで、俺は少々無茶をした。

事態を打開するため、自らの人格と記憶を食い荒らす”力の情報”を受け入れたのだ。

しかし今の悠にとって重要な情報——ミッドガルに来てからの出来事は、何一つ損なわれていないはずだ。妹の深月の事もちゃんと覚えている。ニブル時代の記憶も鮮明だ。

けれど自覚出来ていないだけで、彼はまた変質したのかもしれない。

三年前、深月に関する記憶以外が虫食いだらけになり、恐怖という感情が酷く薄くなった時のように、物部悠という人格から更に遠ざかってしまったのかも——。

「悠。どうかしたか？」

考え込んでいると亮が心配して聞いてくる。ちなみに亮は俺が記憶を失っていることは知っている。記憶を取り戻すことはできないらしいが、体への負担を和らげてくれるようで、助けてもらっている。

見ると、深月も不安げな表情で悠の顔を下から覗き込んでいた。

——ダメだ。深月を心配させてはいけない。深月にだけは悟られてはいけない。

俺が代償として失ったものを知れば、深月は必ず責任を感じてしまうから。

俺はは意識を切り替え、明るい口調で話題を変える。

「ん？ああ、ちよつと今朝の事を思い出してたんだよ。深月も三年間で色々と成長したんだってなーってさ」

「ほう、ちなみにどの辺りが？」

亮も思春期なのでその言葉を聞くと反応してきた。

男子トークをしていると深月は、途端に顔を赤くした。

「お、思い出さないで下さい！あと亮さんも反応しないで下さい！も、もし校内で同じ事を言ったり聞こうとしたらセクシャルハラスメント行為として処罰しますからね！反省文です！」

「う……反省文はもう懲り懲りだ。勘弁してくれ」

「わっ、分かった。もう聞かないから」

先の戦いで俺は命令違反をしてしまい、百枚近い反省文を書かされたのだ。正直あれは、ニブルの訓練より辛かった。

「でしたら、もう少し考えてから発言するように」

「……了解しました、生徒会長。けど、今朝のは深月らしくない失敗だったよな。下着とか、よく使う物はもうちよつと取りやすい場所に入れた方がいいぞ？」

深月が落とした引き出しはタンスの一番上——背伸びしてようやく届くかという高さだった。あれではひっくり返るのも無理はない。

「あれは……普段は使わない、少し特別な下着を入れてある引き出しなんです」

「特別？勝負下着ってやつか？」

俺の問いに亮が呆れた顔で見る。

「悠、それセクハラになってるぞ。あと僕もいるんだからもう少し周りを見て発言してくれよ」

「わっ、悪い」

「はあ、全く兄さんは……素直に頷くのは抵抗がありますが、ニユアンスとしては近いかもしれませんね。ある意味、戦闘用ですから」

「戦闘って、何と戦うんだ？」

不思議に思っただけだと訊ねると、深月は少し真面目な表情になって答えた。

「一般生徒への連絡はまだですが、今日、臨時の健康診断が行われるんです。それで服を脱いだ時に生徒会長としての威厳を損ねぬよう、下着にも気を使っていたわけですよ」

深月の密かな努力を知り、俺は息を吐く。

「……生徒会長も大変だな。でも、抜き打ちで健康診断なんて……ミッドガルじゃあ、よくあることなのか？」

まだミッドガルの常識を把握していない俺は、深月に質問した。

「いえ、今回が初めてですよ」

「じゃあ、何か理由が？」

重ねて問うと、深月は頷く。

「——ありますが、今はまだ言えません」

生徒会長の顔で言い切られると、それ以上追及するのは難しい。

俺は理由を聞き出すのは諦め、視線を前に向けた。

生い茂る木々の向こうに、学園のシンボルである時計塔の先端が少しだけ見える。

何かが起こりそうな予感を覚えながら、三人は並んで“D”たちの学び舎への道を進んでいった——。



学園に着くと深月さんは職員室に用があると言って、時計塔の方へ行ってしまった。時計塔はミッドガル全体の中枢部で、職員室だけでなく作戦司令部などの重要設備が集まっている。

恐らく臨時の健康診断に関して、教師たちと何か打ち合わせがあるのだろう。

僕と悠は自分たちの教室がある校舎へと足を向けた。

ミッドガルにいる”D”たちは、年齢や知識レベルに応じて、九つある教室のどこかへ割り振られる。僕たちが配属になったのは、深月さんと同じブリュンヒルデ教室。授業中も、常に深月の目は光っているという訳だ。

ブリュンヒルデ教室のあるフロアは物置や空き教室ばかりで、人気はない。そもそもこの学園は、その規模に比べて生徒が少なすぎる。全校生徒数は七十人に満たないというのに敷地内には三階建ての校舎が四つもある。

今後増えていくかもしれない”D”たちのため、余裕を持たせて作ったのだろう。今のところは一フロアに教室を一つしか入れなくても、校舎が丸々一つ余ってしまう状態だ。

そのため、一般寮から通う女生徒たちで溢れる通学路は賑やかだが、校舎に入った途端に辺りは静かになる。

人の気配を探るが少なくとも周りに女生徒がいないと分かり、悠に取引のことを聞いた。

「悠、記憶の方はどうだ？」

「ああ、なんとか大丈夫だ。お前のおかげで体への負担もない」

どうやら大丈夫のようだ。マルドゥークを使うことで体力の消耗が激しいので、リヴァイアサン戦では体力を回復させた。

記憶はなんとも出来ないが体への負担を和らげることがはでき



る。

「なるべく取引は避けて、今使える能力を使って戦ってくれ」

「いつも悪いな……ん？」

どこか病棟を連想させる静寂の中を歩いていると、二人はブリュンヒルデ教室の前でうろうろしている少女を見つけた。何故かスカートの裾をぐつと引つ張り、もじもじした様子で教室に入るのをためらってる。

窓からの朝日を浴びてキラキラと輝く銀髪。透けるように白い肌。じつとしていれば、芸術作品のように美しい彼女の事を、悠はよく知っていた。

——イリス・フレイア。

教室では悠の左隣に座る、クラスメイト。

原作通り、上手く能力を使えず落ちこぼれ扱いだった彼女と、ミッドガルにおける能力運用法の素人だった悠は、共にテストへ向けて放課後居残り練習をしたり、リヴァイアサン侵攻時には力を合わせて戦ったりした。

悠の妹である深月を除けば、学園で大和と同じくらい親しい間柄と言えるのだが——。

悠を見るとどこか緊張した様子で彼女を見ていた。確か二人は一卷の最後でキスをした。

悠は一度深呼吸してから、まだこちらに気付いていないらしいイリスさんに声を掛けた。

「イリス、おはよう」

「はわあ!？」

「うおっ!？」

イリスさんが驚きのあまりぴょんと飛び上がり、その拍子に悠までびつくりした。

ふわっと膨らんだスカートの下から眩しい太ももが覗く。それに気付いたイリスさんは、顔を真っ赤にしてスカートの裾を押さええた。

「い、イリスさん、おはよう」

「お、おはよう。モノノベ、オオシマ」

イリスさんは真つ赤にした顔をこちらに向ける。

「ふ、二人共……見た？」

声を震わせて問いかけてくるイリスさん。

「み、見てない。だろ？悠？」

「あ、ああ、つていうか見えなかった」

僕と悠はイリスさんの視線に圧されて、正直に答える。

「ホント？ホントにホントに、何にも見てない？」

「僕は見てないぞ。悠は？」

僕は見てないと言ったが、悠は目を合わせる事ができないように、視線を外すと、イリスさんは悠に詰め寄ってきた。

「あ、モノノベ何か嘘っぽい反応！やっぱり見たんでしょ！」

「い、いや、今のは違う！本当に見てないんだって！」

後退しながら弁明する悠だが、すぐに背中が廊下の壁に突き当たる。追い詰められた悠をイリスさんは至近距離から涙目で睨む。

「モノノベ、正直に言つてよ。そうじゃないと、あたし、困る……」

すがり付くような体勢で囁かれ、悠の顔が赤くなる。

「だから嘘なんか吐いてないって！何も見てない！下着は見えないから！」

悠が焦りながら答えると、イリスさんはどうしてかさらに狼狽した。

「な………や、やっぱり見たんじゃない！」

「ん？イリスさん、悠は見てないって言ってるよ。その辺で許してやったら？」

僕はイリスさんの反応が理解できずに問いかける。けれどイリスさんは半ベそで首を振った。

「ううっ……よ、よりによつてモノノベに………あつ、あたし変態じゃないよ？変態じゃないからね？」

「変態？」

全く会話が噛み合わず、悠は困惑する。

しかし僕はこの状況をどこかで聞いたことがあった。

イリスさんはスカートの裾を太ももで狭み、絶対に捲れ上からなようにしているので見て原作二巻を思い出す。どうやら悠も察したようだ。

「——まさか、イリスさん、穿いてないのか？」

びくつとイリスさんが肩を震わせる。

「え、あ、ち、違うよ？いつもじゃないんだよ？今日はたまたま穿き忘れただけなんだよ？」

「……やつぱり、穿いてないんだな」

相変わらずのドジっ娘ぶりに、悠と僕は溜息を吐く。

「え……？その言い方だと、さっきは本当に見えてなかったの？」

「ああ、何度も言ったように俺は何も見えてない」

「よかつたあ……って、やつぱりよくないよ！モノノベとオオシマにパンツ穿いてないのバレちゃったじゃない！」

両手で顔を覆って、しゃがみこむイリスさん。喜んだり落ち込んだり、ずいぶんと忙しそうだ。

「いや、まあ、そんなに落ち込むなよ」

「そうだよ。人生一度くらいはやらかすこともあるからさ」  
「気まずい思いをしながら、悠と僕はイリスさんを慰める。」

「これ、もう何回目か分からないよお……」

救いようがなかった。

「……………これまでは、どうやって乗り切ったんだ？」

「体操服で……何とか。でも今日は能力実習も体育もないし……ブルマ持ってきてなくて……寮に一度戻ろうか迷ってたの」

それでようやく、イリスさんがうろろろしていた理由を知る。今から戻ると、遅刻になる可能性が高い。遅刻の危機を冒すか、今日一日ノーパンがバレないように過ごすかで順々していたのだろう。

だが、確か今日は——。

「イリス、たとえ遅刻するとしても、今日だけは戻った方がいい」  
「僕もそれをオススメするよ」

悠と僕はイリスの肩に手を置いて、真剣な口調で言う。

「ど、どうして？」

「深月から聞いたんだが、臨時の健康診断があるらしい」  
サアーツとイリスさんの顔から血の気が引いた。

「モノノベ！オオシマー！あたし、パンツ穿いてくるっ!!」

イリスさんは廊下に反響する大声で叫ぶと、勢いよく立ち上がる。  
そしてスカートの端を手で押さえながら、廊下を走っていった。

た。

「……………」

僕たちは無言でその後ろ姿を見送る。

イリスさんはまたも大事なことを忘れていた。ここは——  
教室のすぐ前なのだ。

「やばいな……チャイムギリギリで入るか。それじゃ」

僕はその場を後にしようとするが、悠は僕の肩を握ってきた。

「まで、お前だけ逃げるのは許さんぞ」

どうやらこのまま逃げてくれないようだ。

僕は悠を倒してでも逃げようとした。悠は僕の両手を捕まえた。

「離せ！僕は知らない！何も見てないし何も聞いてない！この状況を作ったのは物部悠、お前だ！お前が悪い！」

悠は足でガラツと扉を開けて僕を引きずり込んだ。

「ふ、ふぎけるな！俺をこのままにするつもりか！」

「必要な犠牲だ！僕が無事で済むなら喜んでお前を見捨てる！」

僕はみんなから冷たい視線を見られることと、変態だと誤解されることを恐れ、逃げようと抵抗する。

前列の席に座る金髪の少女、リーザ・ハイウオーカーと他のクラスメイトは僕たちの争いを見て唾然としていた。

「僕は何も悪くない！僕はさつき付いたばかりだ。イリスさんは僕の名前を言っていたが、ついでに言っただけに過ぎん！お前が事の元凶だ！」

「この期に及んで俺だけのせいにするのか？」

「もちろん！この場合は逃げるが勝ちだ！」

僕は悠の激しい攻防に耐えていた。すると見兼ねたリーザさんは口を挟んできた。

「あなた方、双方の責任ですわよ。いい加減、責任の擦り合いは見苦しいですわ。モノノベ・ユウ、オオシマ・リョウ！」

僕たちはリーザさんの方を見た。

「あんな恥ずかしい台詞をイリスさんに叫ばせるなんて……監督不行き届きですわよ、モノノベ・ユウ！」

「え、さっきのは俺のせいなのか？」

まさか矛先が自分に向くとは思っていなかったようで悠は慌てる。

「そうだぞ、観念しろ」

「あなたもですわ、オオシマ・リョウ！さつきから自分が悪くないような言い方をしますが、最初から聞こえてましたわ」

「うっ!？」

どうやらイリスさんとのやり取りを最初から聞いていたようだ。

リーザさんは他のクラスメイトたちに呼びかけた。教室にはもう深月さんとイリスさん以外の全員が揃っている。

「というわけでみなさん、先ほど聞こえていた恥ずかしい声を含め、聞かなかったことに。口止め料として、彼らが今日のランチをご馳走してくれるそうです」

その呼びかけに、クラスメイトたちがそれぞれ応じる。

「……わかった」

小さな声で答えたのは、暇があれば常に本を読んでいる文学少女、フィリル・クレスト。

「ん」

頷きと一音のみで返事をするのは、小柄な赤毛の少女、レン・ミヤザワ。

「物部クンと大島クンの奢りかー。ボク、楽しみだな」

屈託なく笑うボーイッシュな少女は、アリエラ・ルー。

「ま、待ってくれ」

「何を勝手に——」

僕と悠は慌てて口を挟もうとするが、リーザさんに言葉を遮られる。

「あら、何か問題がありました?」

「え?あ……」

冷静になってみると、さほど問題はなかった。僕も悠も含めたミッドガルの”D”たちには毎日生活費として十分以上の金額が振り込まれており、ランチを奢った程度で生活が苦しくなることはない。

この条件を?めば、イリスさんは恥ずかしい思いをしなくて済むし、僕と悠も皆と一緒に食事ができる。まだリーザさんたちと食卓を囲んだことがない僕たちにとって、これはクラスメイトと親睦を深める大きなチャンスだった。

(悠、これはかなり遠回しな食事のお誘いじゃないか?)

亮は小声で言ってきた。

(だな。こちらとしてもデメリットはないな。受けるか)

(そうだな。あと、さっきはすまなかった)

(気にするな。俺の方こそ悪かった)

僕たちは小声で仲直りをした。よく考えれば、お金に困っていないのはリーザたちも同じだ。だから奢られるメリットも、ほとんどない。

「……了解した。今日のランチは奢るよ」

「ああ、だからイリスの恥ずかしい叫びについては、触れないでやってくれ」

僕と悠はリーザさんの厚意を受け取ることにして、頷いた。

「分かりましたわ。いい心がけですわね」

満足そうに微笑むリーザさん。僕たちはその耳元に顔を寄せ、小さな声で礼を言っておく。

「——ありがとうな、リーザ」

「恩にきるよ、リーザさん」

「な、何の話をですの？…というか顔が近いですわよ！」

リーザさんは頬を染めて、僕たちの体を押しやる。

この教室で一番面倒見が良く、クラスメイトを家族として大切にしているが、このリーザ・ハイウオーカーという少女だ。

性格はややキツイが、たぶん誰よりも優しい彼女は、不機嫌そうにツンと顔を逸らす。

僕たちは苦笑いを浮かべながら、自分の席に向かった。

黒板の上に設置された時計の針は進み、始業三分前には深月と担任の篠宮先生が教室に入ってきた。

キーンコーンカーンコーン。

そして始業のベルが鳴り響く。やはりダメだったかと息を吐くが、ベルが鳴り終わる直前に、教室のドアが勢いよく開かれる。

「ま、間に合ったあ……」

息を切らしたイリスさんがふらふらと悠の隣に着席した。

そして僕や悠の視線に気付くと、イリスさんはグツと親指を立てる。

「やったよ、モノノベっ、オオシマっ」

「……ああ、ご苦労さん」

「……よかったな」

リーザさんたちが生暖かい眼差しを向けていることに気づかない振りしながら、悠と僕はイリスさんを労ったのだった。

## 健康診断

「――本日、一・二時限目は授業予定を変更し、臨時の健康診断を実施する。検査はクラスごとに行う。順番が回ってくるまでは、教室で自習をしているように。あと、物部悠と大島亮は別で受けてもらうため、その場で待機しておいてくれ」

深月が言っていた通り、ホームルームで篠宮先生は僕たちにそう伝達し、早足で教室を出て行った。何だか慌ただしい雰囲気だ。

リーザさんたちクラスメイトは、何事かと顔を見合わせている。悠は事情を知っているらしい妹に視線を向けるが、深月は素知らぬ顔で自習を始めてしまう。やはりまだ説明するつもりはないらしい。

ちなみに僕は原作を知っているため、今回の健康診断の目的を分かっている。

しばらくして、篠宮先生が教室に戻ってきて「順番だ、保健室へ向かうように」と告げた。

僕と悠以外は席を立ち、教室を出る。篠宮はそのまま教室に残り、僕たちに指示を出した。

「待たせたな、男子はこっちだ」

僕たちは篠宮先生と共に違う場所へと連れて行かれる。

渡り廊下を通り、時計塔のエレベーターに乗り込むと、篠宮先生は最上階のボタンを押した。段数を示す表示が、凄く速さで上昇していく。かすかな耳鳴りを感じた。

チーン。

エレベーターが止まり、ドアが開く。すると先には、大きく立派な木製の扉が聳えていた。

「えっと……ここは？」

「ここは学園長室だ」

僕は扉の横にあるプレートを指差した。そこに「学園長室」と書かれている。

「学園長？ミッドガルにそんな役職の人がいたんですか……てっ



きり篠宮先生が、ミッドガルで一番偉いのかと思っていました」

僕と悠が転入した際に行われた全校集会でも、学園長は現れなかった。だから悠は今の今まで、その存在すら知らなかったのだろう。

「私はあくまで非常時の戦闘司令官だ。ミッドガルの最高責任者は、この中にいる彼女だよ」

篠宮先生はそう言って分厚そうな扉を視線で示す。

「で……俺たち、どうしてこんなところに連れてこられたんですか？健康診断をするはずじゃあ……？」

「ああ、もちろん健康診断が目的だ。君たちの検査は学園長自らが行う」

平然とした顔で答える篠宮先生。

「学園長が？ いったいどうして？」

「さあな、彼女の気まぐれだろう。普段は仕事もろくにせず、引き籠もっているのだが、時々こうやって無茶を言うのだ。まあ医師免許は持っているという話だから、死にはすまい」

さらつと不吉なことを口にする篠宮先生に、悠は慌てる。

「ちよっ……学園長ってそんなに危ない人なんですか？」

「それは自分で確かめるといい。彼女と会話するのは疲れるので、私はここで失礼させてもらう。検査が終わったら、真っ直ぐ教室へ戻るように」

篠宮先生はそう言って僕たちの背を押し、エレベーターの方へ戻っていく。

「……え？俺たちで行けと？」

「ああ、健闘を祈る」

真面目な顔で敬礼をして、篠宮先生は本当にエレベーターで階下へ降りていった。

「心配するな。僕も会ったことがあるが、死ぬことはないよ」

「そ、そうか」

取り残された僕たちは扉をノックする。

「——どうぞ」

女性の声が返ってきて、僕は扉を開けた。

部屋の中は相変わらず廊下よりも暗く、独特な匂いがした。やはり何か香を焚いているのかもしれない。

時計塔の最上階という日当たりのいい場所なのに、奥の窓は分厚い遮光カーテンに閉ざされている。

室内に居るのは二人。

立派な椅子に深々と腰かけている金髪碧眼の少女と、その脇に立つメイド服を着た女性。

少女は小柄で、一見すると悠や大和よりも年下に見える。が、悠は戦場で磨かれた彼の勘がそれを否定した。

余裕ある表情と、値踏みするような視線、リラックスした体——彼女は間違いなく自分よりも経験値が上のベテランだと分かったようだ。

「学園長、久しぶりだな。とりあえず冷蔵庫漁るぞ」

「りよ、亮!？」

僕はそう言つて壁に設置された冷蔵庫を開ける。

「ジュースがあつた。あとハムとチーズ、それに牛乳……」

「亮、そんなことしていいのか!？」

悠は慌てて僕が冷蔵庫を漁るのを止めようとする。

「構わん。それぐらいのことで私は怒りません」

学園長は僕の性格を知っているのでこれぐらいのことは気にもしない。

「なかなか良い目しているな。初見で侮らぬ者は久しぶりだ」

愉快そうに学園長は笑う。悠は先ほど応えたのは、隣にいるメイドの方だと知る。僕はチーズと牛乳を冷蔵庫から取り出す。

「しかし学園長、相変わらず部屋が暗いな。僕たちが来るんだからもうちよつと明るくしてくれよ」

「ふん、そなたたちのために何故私が気遣わなければならないのだ?」

「相変わらず口も悪いな」

「お互いにな。だが、僅かに凄みを利かせたが物怖じすらしない

とは……流石はそなただな」

僕と学園長は対等喋れる中であるので、先生やクラスメイト（悠以外）がいない時はこうしてタメ口で喋れる。

「紹介するよ。こいつが物部悠。僕の正体を知る数少ない親友だ」

「物部悠です。よろしくお願いします……」

僕が紹介すると悠は学園長とメイドの女性、マイカさんに挨拶をする。

「そうか、そなたも奴の正体を知っているのだな。紹介が遅れた。私がミッドガルの長、シャルロット・B・ロード。それでこっちがマイカ・スチュアート。私の専属秘書をやっている」

女性——シャルロット学園長に示されたメイドさんが頭を下げる。

「初めまして、マイカ・スチュアートです。以後、お見知りおきを」シャルロット学園長と秘書のマイカさんは悠に挨拶を返した。

僕はチーズを食べながら聞いていた。

「亮、いくらなんでもその態度はまずいだろう」

「別にいいだろう？学園長も許可してるんだから」

悠は止めるように言うが、僕は気にしていない。

「許可した覚えがないが……まあいい」

「……それで、どうして俺たちの検査を学園長がわざわざするんですか？」

「ミッドガルにいるのは職員も含めて女ばかりだ。男の体を見て、うっかり発情されてしまうと困る。ここは清らかな乙女が集う、私の楽園（ハーレム）なのだから！」

シャルロットは両手を広げ、高らかに告げた。

「は、はあ……」

悠は反応に困り、頬を掻く。どうやら学園長は、ちょっと変わった人物のようだと感じ、篠宮先生が会うのを避けた理由が、少しだけ垣間見えた気がしたようだ。

やはり原作通りの人物だ。

「ゆえに仕方なく、私が自らそなたらの診断してやる事にしたのだ」

そう言うのとシャルロットは椅子から立ち上がり、二人に近づいてくる。

「えつと、学園長やマイカさんも女性だと思うんですが……」

「ふん、私やマイカを初心な乙女たちと一緒にするでない。第一、私は男に興味などないからな」

さらりと衝撃の事実をカミングアウトした学園長は、悠を間近から見上げる。そんな中、悠が彼女の外見を見る。身長が悠や大和の胸辺りまでしかなく、白い肌は瑞々しい。だが先程の発言から生徒達より年上である事は間違いないと悠は感じた。

「……学園長の年齢を聞いてもいいでしょうか？」

「気になるか？ 教えてやっても良いが、そなたらはもう二度とこの部屋から出られなくなるぞ？」

目を細めてシャルロットは嫌らしく笑う。

「やっぱり、遠慮しておきます……」

「ふむ、それが賢明だな」

シャルロットは口の端を歪め、悠の左手を掴んだ。

「何を——」

「これが、そなたの竜紋か？」

驚く悠に構わず、シャルロットは彼の左手の甲にある小さな痣を見ながら問いかけた。

「は、はい……」

他の”D”に比べれば遥かに小さい悠の竜紋を、よく見つけられたなと感心する。

「近くに傷があるな。これはいつからだ？」

竜紋の横にあるミミズ腫れを指差し、訪ねてくる学園長。

「あ、それは今朝起きたら、いつの間にか……たぶんどこかで引っ掛けたんだと思います」

「そうか……」

学園長は傷をじつと見つめると、おもむろに顔を寄せ、柔らか

な唇を悠の手の甲に押し当てた。

「な……」

温かく、湿った感触が傷をなぞる。金髪の少女が、赤く小さな舌を這わせていく光景に、悠は背筋が震える。傷口が染み込み、快感を伴う痛みには悠は声が出てしまいそうになる。

——ちゅぱっ。

学園長は唇を離し、唾液で濡れた傷口を、冷静な眼差しで観察する。

僕はその光景を牛乳を飲みながら見ていた。

「が、学園長？」

状況が分からず、悠は声を掛ける。

「黙っておれ、じっとしている」

けれど学園長に強い口調で命令され、口を噤む。

そして数分が経過した頃、学園長はようやく悠の左手を解放した。

「——だいたい分かった。もうよいぞ。これで検査は終わりだ」

「え……？」

悠はポカンと口を開ける。

「何を呆けておる。超絶美少女であるこの私に、全身をくまなく調べて欲しかったか？」

(ぶっ、……超絶美少女)

僕は吹きそうになるが我慢する。

「だが男相手にサービスしてやる義理はない。今回の健康診断は、生徒の竜紋チェックを行う方便だからな」

学園長は皮肉げに笑い、肩を竦めた。

「やはりな……と言うことはドラゴンに動きがあつたんだな？」

「ああ、だが状況は健康診断が終わればすぐに明かされよう。それより——」

学園長は悠の腕を引っ張り、僕も来るように手を振ってくる。僕が寄ってくるのと学園長は悪戯っぽい笑みを浮かべ、小さな声

で囁いた。

「そなたら……検査が早く終わって暇であろう？　これから共に、冒険に赴かぬか？」

「冒険？」

僕と悠は眉を寄せて首を傾げる。

「ああ、現在学園では女子の健康診断が行われている。清らかな乙女達が下着姿を晒しているのだ。覗きに行かぬ手はあるまい」

「あんた……学園長だよな？」

あまりの発言に、悠はタメ口でツッコんだ。

「何だ、ノリが悪いのお。男であるそなたたちなら、この抑えきれぬ衝動を理解してくれると思ったのだが。もしやそなたら、女に興味がないのか？」

「いや、人並みにはありますが……」

「同じく」

「それでは構わぬではないか！　私は男を愛でる趣味などないが、ずっと同じ嗜好を持つ友は欲していたのだ！　今日は私の発見した絶好のスポットを——」

目を輝かせた学園長をマイカさんが片手で頭を掴み、空中へ吊り上げている。

「シャルロット様、あなたはご自分のお立場を理解しているのですか？　生徒を悪の道へ引き摺りこむのは止めてください」

近くで見ると、やはりマイカさんは色々な意味で迫力がある人だった。胸は服がはち切れてしまいそうなほど大きく、身長も女性にしては高めで僕と悠とはあまり変わらない。

「は、離せマイカ！　私は、私は、友たちと行かねばならんのだ！」

じたばたともがく学園長を意に介さず、マイカさんは僕たちに微笑む。

「もう戻っていいですよ。シャルロット様については、生徒さんたちに粗相をしないよう、私がしっかり見張っておきます」

「は、はい、分かりました」

「では、失礼します」

表情は優しいが、圧力を感じる。さきほどは近づいてくる気配を感じ取れたが、悠は気配を全く察知できなかったようだ。

体の重心から見て武装は確実にしている。人間レベルでは只者ではない。

僕たちは回れ右をして扉へ向かう。

「物部悠」

だが部屋を出る直前、学園長が悠に声を掛けた。

振り返ると、彼女はマイカさんに吊るし下げられたまま口を開く。

「そなたの傷は——消えぬ勲章だ。誇るがよい」

悠は左手を見つめながら、学園長は告げる。

どういう意味かと悠は視線で問いかけるが、学園長は口元に笑みを浮かべるだけで、それ以上語ろうとしなかった。

そして学園長は宙ぶらりんのまま、マイカさんに部屋の奥へと連れて行かれてしまう。

「いったい何だったんだ？」

「知らない。だが、学園長もマイカさんも人間レベルでは只者じゃないな」

僕は消えぬ勲章について知っている。しかしそれをそれを知るのは先になるだろう。

僕たちは扉を閉じ、教室へと戻ったのだった。

◇

”D”の自治教育機関であるミッドガルには、公にされていないもう一つの役割がある。

島を中心にして展開する環状多重防衛機構（ミッドガルズオルム）は、ドラゴンからミッドガルを守る防衛線。

この改造島は、対ドラゴン戦を想定した迎撃要塞でもある。

授業ではドラゴンと戦うための能力運用方法を学び、優秀な生徒は竜伐隊として選抜される。

そうまでして戦いに備えなければならないのは、ドラゴンはいずれミッドガルへ侵攻してくる事が現実視されるためだ。

ドラゴンは自らに適合する”D”を”つがい”として選ぶ。見初められた”D”の竜紋は変色し、ドラゴンが接触すると同種のドラゴンへと変貌する。

にわかには信じ難い話だが、二年前——”紫”のクラーケン戦において、この現象が確認されたという。

そしてつい二週間前にはイリスさんの竜紋が変色し、”白”のリヴァイアサンがミッドガルへと進撃してきた。

「——今回、臨時で健康診断を行ったのには理由がある」  
健康診断が終わった後の三時限目、教室には二週間前と似た緊張感が漂っていた。

教壇の上に立った遙は、僕たちを見回して言葉を続ける。  
「我々が着々と討伐計画を進めていたドラゴン——”赤”のバジリスクが、テリトリーとしていたサハラ砂漠から移動を開始した」  
教室がざわめく。僕と深月以外のクラスメイトは驚きを現わにしていた。

事前に学園長から健康診断の目的を聞いていた悠は、やはりそうなのかと納得する。

僕は原作を知っているため、バジリスクが動き出したことには全く驚かない。

皆の動揺が収まるのを待ってから、遙は口を開く。

「出現してからの約二十年間、砂漠を出ることがなかったバジリスクのイレギュラーな行動は、つがいを見出したがゆえと私たちは推測した。そして急遽、混乱を招かぬように健康診断という名目で、竜紋のチェックを行わせてもらったのだ。その結果——」

空気が張り詰める。検査の結果は深月さんもまだ知らないように、真剣な顔つきで遙を見つめていた。

「——ミッドガルにいる学生の中で、竜紋が変色している者は



いなかった」

その言葉に、ほう……と悠の隣にいるイリスが安堵の息を吐く。

しかし遥は険しい表情を崩さず、首を横に振った。

「安心してもらっては困る。これは非常に良くない結果なのだ。もしもバジリスクの移動目的が私達の推測通りであれば、狙われているのはまだ未発見の『D』という事になる」

それを聞いて事態を把握したイリスは、慌てた様子で言う。

「じゃ、じゃあその子を守ってあげないと！」

「ああ、その通りだ。我々は同胞を見捨てない。既にニブルがバジリスクの進行方向上にある町を捜索中だ。発見次第、ミッドガルへと移送する手筈になっている」

遥は力強い言葉で告げる。すると今度は、リーザさんが手を挙げて発言した。

「わたくしたちが協力できることはないんですの？リヴァイアサンと戦ったときのように、足止めぐらいなら——」

「ダメだ。バジリスクは、最も防御に特化したリヴァイアサンとは正反対のタイプ——ドラゴンの中で最強の攻撃力を持つ個体。戦いになれば、やるかやられるかの二択しかない」

「でしたら、この機会にやってしまえばいいと思いますわ」

リーザは強気に言い返す。実力と自信がある故の台詞なのだろうが、遥は渋い表情を浮かべた。

「そうしたいところではあるが……まだ、準備が整っていない。不十分な状態で戦い、大きな損失を出す訳にはいかないのだ。分かってくれ」

「むう……」

不満そうではあったが、リーザは口をつぐむ。

篠宮先生は他に質問がないのを確かめ、少しだけ口調を柔らかくして言う。

「……と、不安を煽るような事ばかり言ってしまったが、今のところミッドガルに直接の危険はない。事態に動きがあるまで、皆は普段

通りの生活を送り、英気を養っていてくれ。以上だ」

そうして深月たちは遠い場所にある危機を知りながら、いつもの日常に戻る。

ただ、悠は微かな胸騒ぎを覚えていた。

未発見の”D”

その単語が彼の頭の中で反響する。

彼はニブル時代に一度だけ、発見した”D”を見逃したことがあった。とても幼い少女で、両親と引き離すのが酷に思えたからだ。

それに当時の悠は”D”がドラゴンに狙われている事など知らなかった。

だが、そうした行動は、今回のような事態の原因になってしま  
う。

彼女が今も家族と幸せに生きている事を祈りつつ、窓の外に見える遠い空を眺めていた。

しかし、僕は知っていた。今度来る”D”が悠が過去に見逃した少女だと。

## 竜人

「……なんか、緊張するな」

健康診断が終わり、昼休みになった。僕と悠は約束通りリーザさん達と同じテーブルに着く。事情を知らない深月とイリスも一緒だ。

場所は食堂棟一階のカフェテリア。ブリュンヒルデ教室の全員が勢ぞろいしたテーブルは、明らかに注目を集めていた。

生徒会長である深月さんや、男である僕と悠が目立つのは仕方がないが、リーザさんたちに対しても熱い視線を送っている者は多い。けれど雰囲気には慣れているのか、深月さんやリーザさんは気にした風もなく寛いでいる。

悠は緊張して周りを気にしているが僕は全く気にしていない。既にテーブルには料理が並んでいた。

流れて深月さんとイリスさんの分まで奢る事になってしまった僕と悠。しかし、僕は深月さんの宿舍で生活しているので借りがあ。悠も二人には色々と借りがあるようで文句はない。

「モノノベ、オオシマ、ご飯奢ってくれてありがとね。でも、今日に限ってどうしたの？」

イリスさんが礼を言いながらも、不思議そうに問いかけてくる。

まさかイリスさんの恥ずかしい発言から始まったのが原因だとは言えなかった。なので、僕たちは視線を逸らして答える。

「いや、まあ皆には何だかんだと迷惑かけてるからな。そのお礼だよ。そうだよな悠？」

「あ、ああ、今朝もみんなに迷惑かけたからな二人で話したんだ」  
これは本当の理由ではないが、嘘でもない。男である悠を、とりあえずはクラスメイトとして許容してくれたリーザさんたちには感謝している。深月さんに至っては毎日のように世話をかけっぱなしだ。

「え？あたしは何度も二人には助けてもらってる方だよ。モノノ

べには入学してから演習を手伝ってもらったし、オオシマもリヴァイアサン戦でモノノベと戦ってくれたし、お礼をするなら、あたしの方だと思うけど……」

「たしかに僕はリヴァイアサン戦と一緒に戦ったけど、主に活躍したのは悠だぞ。大したことはしてないよ」

「そんなことはないぞ。亮がいなかったらリヴァイアサンを倒せたか分からなかったぞ。それにイリスからはお礼を貰い過ぎた気がしてさ……」

悠は照れ臭さを我慢しながら言う。

「貰い過ぎ？何のこと？」

だがイリスさんは、きよとんと首を傾げた。どうやら浜辺でキスしたことはお礼以上のものではなかったのだろう。

「えーと、ほら、あれだよ。二週間前の……」

仕方なく悠は他の面々には分からぬよう、小声で曖昧に説明する。

リヴァイアサン戦の後でキスしたことを触れるのは今日が初めてだった。

「二週間前？それって——」

するといきなりイリスさんの顔が沸騰した。湯気が出そうなほど真っ赤になったイリスさんは、顔を俯けてしまう。

「え？お、おい、イリス？」

予想外の反応に悠は驚く。オーバーヒートしたイリスさんは全く返事をしない。

「ちよつと兄さん、何を言ったんですか？セクハラ発言なら許しませんよ？」

悠の右隣で聞き耳を立てていた深月さんは彼を睨んでいた。

「モノノベ・ユウ、またしてもイリスさんを辱めたのなら、わたくしが成敗しますわよ？」

リーザさんも鋭い眼差しを向け、悠を追及する。

そこで我に返ったイリスさんがひどく慌てながら手を振った。

「あ、ち、違うの！何でもないよ！モノノベは何もしてないから

！」

「……じゃあ、どうしてそんなに、顔が赤いの？」

けれどフィリルさんの冷静な指摘に、イリスさんは狼狽する。

「ええっ!? あたし、そんなに赤い？」

「ん」

レンちゃんがこくりと頷く。イリスさんは両手を自分の母に当て、おろおろとした様子で悠を見る。

「わ、やだ、顔熱い……ど、どうしよ、モノノベ？」

「お、俺に聞かれても困るって」

イリスさんの反応を見ていると悠は恥ずかしくなっていた。

僕は原作通りで笑いを堪えていた。笑ってしまえば二人に何が起こったのかを正直に話してしまう。

そうなってしまえば二人は辱めを受けることになるため、こうして笑いを堪えている。

「おや、物部クンまで顔が赤くないかい？ 怪しいな」

アリエラさんが身を乗り出し、悠の顔を覗き込む。

「き、気のせいだ。それより料理はもう揃ってるんだし、早く食べ始めようぜ？ 昼休みの時間は限られているんだからさ」

悠は必死に話題を逸らそうとする。イリスさんも悠に便乗した。

「そうだよ、ご飯冷めちゃったら美味しくないよ？ あ、あたし、お腹が空いてもう我慢ができないな」

棒読みに近い台詞であったが、イリスさんが話の追及を拒む姿勢を見せたことで、皆はわずかに氣勢を弱めた。

「……イリスさんがそう言ってるみたいだし、この場で悠を問い詰めるのは止めたらどうだ？ ずいぶん人目を引いてしまったみたいだし」

僕は様子を窺っている周囲の生徒を見回し、フォークを手にする。僕の昼食は和風パスタ。

「それじゃあ、いただきますっ」

イリスさんは恥ずかしさをごまかすためか、スプーンを持って

野菜カレーを勢いよく食べ始めた。

まだ顔が火照っているイリスさんを横目で見ながら、悠はサンドイツチを口に運ぶ。

つまり、普段通りに振る舞おうと頑張っていたのは悠だけではなかったようだ。

「それでは、わたくしたちも頂かせてもらいますわよ?」

リーザさんは僕と悠に向かって声を掛ける。

「あ、ああ、どうぞ」

「ん」

僕と悠が頷くと、他の皆も食事を始めた。

カチャカチャと、しばらくはナイフやフォークが皿に触れる音だけが響く。だがしばらくすると自然に会話が始まった。

話題は当然ながら、バジリスクに関するものだ。

「——バジリスクが移動を始めたという事ですが、皆さんは本当に”D”が目的だと思いますか?」

深月が真面目な口調で皆に問いかけると、リーザさんは眉を寄せて言う。

「わたくしは、早すぎるような気がしますわ。」紫のクラークと”白”のリヴァイアサン侵攻の間隔は二年もあつたというのに……今回はまだ二週間ですわよ?」

するとアリエラさんがパンを千切って食べていた手を止め、異論を唱える。

「んー……ボクはやっぱり、竜紋変色者が何処かに現れたんじゃないかって思うな。何しろバジリスクが砂漠を出たのは、二十一年間で初めての事なんだろう?」

リーザさんはアリエラさんの意見に、難しい表情を作りながらも頷く。

「確かに……他のドラゴンと関連付けるのではなく、バジリスクだけを見て判断するという考え方もありますわね。ただ、もしも外部の”D”が狙われているとなると、いろいろな問題が発生しそうです……」

それを聞いたフィリルさんが目を伏せ、小さな声で呟く。

「……そうだね。ミッドガルの外にいる人は、まだ家族じゃない。本当に、守るべき人なのかも分からない」

その言葉が意味するところは、僕は察し、悠にも何となく理解できた。

今回の事案は、対象の“D”がどんな人物かで、状況が大きく変わってしまう。

「どういう事？ ”D”は皆、仲間なんじゃないの？」

だがイリスさんはきよとんとした表情で首を傾げる。いまいちフィリルさんの言う事が呑み込めていないらしい。

リーザさんたちは困った様子で顔を見合わせる。これはかなりデリケートな問題なので、言葉に迷っているのだろう。

なので悠が説明する事にした。

「イリス、俺たち”D”も人間だ。当然、良い奴も悪い奴もいる。

それは分かるよな？」

「う、うん……」

イリスさんが頷くのを見て、悠は話を続ける。

”D”の能力がマフィアやテロリストに利用されるのは珍しくないが、稀に”D”本人が率先して悪事を働く場合があるんだ。そういう”D”は災害認定され、殲滅対象になる」

「災害認定？」

どうやらイリスさんは初耳らしい。これは”D”たちにとって、見ないふりをしたいはずの問題だ。授業では敢えて教えていないのかもしれない。

だがリーザさん達は知っているようなので、噂としては聞こえてくるのだろう。

確か悠がニブル時代に所属していたスレイプニルは、災害指定された”D”との戦いを想定した部隊だった。在隊中に災害指定者と会うことはなかったと思うが、その辺りの事情は恐らくだがリーザさん達より詳しい筈だ。

原作では、ドラゴン信仰者団体を立ち上げ、竜災にあつた国々

に入り込み、テロ行為をしているのそうだ。

「つまりドラゴンと同じ扱ってことだ。もう人間と見なされない。もし今回狙われているのがそんな奴だったら、状況は複雑になるだろうな」

「そうなんだ……自分から災害（ドラゴン）になろうとする子も、いるんだね」

悲しそうに呟くイリスさん。

彼女はリヴァイアサンに見初められたとき、自分がドラゴンになつて皆を傷付けるぐらいなら、死を望むと言つた。だからこそ、自らである事を放棄する”D”に、複雑な思いを抱いているのさう。

「まあ、そんな奴は本当にごく一部だ。ミッドガルに来れば人権は保障されるし、資源依頼を引き受けて、一生不自由しないだけの金を合法的に稼ぐこともできる。まともな損得勘定ができるなら、自分から人類の敵になつたりはしないさ」

「……うん、そうだね。もしバジリスクの目的がホントに”D”なのなら、悪い子じゃないといいなあ」

イリスさんは祈るように呟いた。

悠も全く同感だつた。もし見初められたのが災害指定者なら、逃亡した挙げ句にバジリスクとの接触を許してしまうかもしれない。

だが……篠宮先生も言つた通り僕たちにできることはない。

僕は原作を知っているため、先のことを知っているが、教えるわけにはいかない。

たとえ教えたとしても悠や深月さんは信じてくれてもリーザさんたちは信じてはくれないだろう。

「亮さんは今回のことをどう思います？」

深月さんが一言も喋らないで黙々と食事をしていた僕に聞いてきた。

「そうだね、ドラゴンもいろんなのがいるから正直よく分からないよ。でもバジリスクの進行方向上にある街は確実に被害があるね。竜災に巻き込まれないといいんだけど」



僕はミッドガルに来る”D”のことより、バジリスクが向かう街の心配をした。神でも元は人間であるから心配になってしまう。

「それに僕もいろんな国に行つて情報を集めたけど、”D”本人がテロ行為を起こすのは初めて聞いたよ」

僕は嘘を吐いた。あまり知り過ぎても混乱を招くと思つたらだ。

「えっ、亮さんでも知らなかったんですか？」

深月さんが驚いた様子で聞いてきた。

「そうだけど、それがどうした？」

「いえ、ただ亮さんでも知らないことがあると思ひまして……」

深月さんは僕のことを思っているようで、ムカついてきた。本当は知っているけど、そんなことを言われると神として未熟者だと思つてしまう。

僕は顔に出してしまうので感情を抑えた。

「その言い方されると癪に障るからやめてくれない。破壊しちやうよ」

顔はぎこちなく笑つて覇気を込めて言った。周りは背筋をぞつとした。

「亮、落ち着け。世間では”D”の人権に関わってくるから知らないのは仕方ないさ。」

悠が宥めてくれた。

「……悪い」

僕は謝り、会食は続いた。



結論から言えば、悠たちが危惧した最悪——バジリスクが増えるという事態はニブルの働きにより、バジリスクが増えるという自体は回避された。

しかし、僕は分かっていたが、悠たちの前に示されたのは――  
――誰一人として予想し得なかった結果だった。

「――この度、私たちにまた新しい仲間ができました。バジリスク進行方向上の町を風潰しに搜索していたニブルが、二人の”D”を発見・保護したのです」

健康診断の日からちょうど一週間が経った金曜日。学校の体育館で、全校集会が開かれていた。

壇上に立つのは深月さん。悠や亮が転入してきた際に思い出させる光景でもある。

恐らく新入りが来る度に、全校生徒に対して紹介の場を設けているのだろう。

二人のうち一人には竜紋の変色が確認され、バジリスクの目的が”D”との接触にある事は、ほぼ間違いない状況となりました」

深月さんの発言に生徒たちが少しだけざわめく。しかし彼らの視線は深月に向いていない。その後ろに立つ新入りの”D”だけに注がれていた。

「ですが、慌てる必要はありません。バジリスクは水中を移動するのに適した体の構造をしておらず、海を渡るのは困難だと考えられています。仮にバジリスクが海を陸と同じように進めても、その移動速度は非常に遅く、ミッドガルに到達するのは一ヶ月以上先になるでしょう」

皆の様子には気づいているはずだが、深月さんは淡々と状況説明を続ける。

バジリスクは海を渡れないから大丈夫などと樂觀する気にはなれないが、ミッドガルは安全圏となる可能性もあるらしい。

「私達には十分な準備期間があります。なおかつ、バジリスクは以前から討伐計画を練っていた対象です。一人一人が最善を尽くせば、必ずや勝利を掴み取る事ができるでしょう！」

深月さんの演説は相変わらず達者だった。けれど今日だけは皆の心に届いていると言ひ難かったと悠は感じていた。

男である悠や僕が転入する際、大きな注目を浴びた。特に僕に

至っては悠を越していた程。ドラゴンを倒すという功績をもつていたからであるが、しかし今回は更にそれ以上だ。

壇上に立つ、新入りの”D”。その一人は、あまりにも異質だった。

「――それでは転入生を紹介しましょう。二人とも、前へ」

指示通りに前へ出てくる二人の転校生。

一人は眼鏡を掛けた真面目そうな印象の少女。年は僕たちと同程度で、長い黒髪を三つ編みのおさげにして纏めている。

彼女は至って普通の女の子だった。問題はもう一人。

全校生徒の視線を一身に集めているのは、まだ幼い少女だ。恐らくはレンちゃんよりも年下で、日本でなら小学校に通っているような年齢に見える。

光の加減で淡い桃色にも見える、色素の薄い髪。肌は白く、顔立ちも整っており、その部分だけならば、誰もが愛らしい少女だと言うだろう。

しかし彼女は、人間が持ち得ないパーツを有していた。

頭の左右から生えた、二本の小さな角。

角は深い紅色で、ドラゴンを連想させる形状をしており、頭上からの照明を受けて鈍く輝いている。

その角を頭に頂く少女は、赤みを帯びた瞳で彼らを睥睨（へいげい）している。

（やはり来たか）

僕は予想通りと思った。彼女のことを知っている。

竜人、とでも表現するしかない容姿の少女に、皆は好奇心と恐怖がない交ぜになった視線を向けている。

あの角は一体何なのか。悠を含む体育館に集まった生徒達が待っているのは、彼女の姿についての説明だった。

しかし深月さんはまず、竜人の少女ではなく、眼鏡を掛けた黒髪の子を身振りで示した。

「彼女は、立川穂乃花さん。”D”の能力にはまだ目覚めたばかりだそうなので、皆さんが色々と教えてあげて下さい」

「立川穂乃花です。よろしくお願いします」

眼鏡の子——立川穂乃花は深々と頭を下げる。僕は彼女のことも知っている。彼女の正体、彼女がなぜここに来たのかも。

パチパチと拍手が鳴り、穂乃花はホツとした様子で笑みを零したが、僕は拍手をする気分ではなかった。

そしてついに深月が角を生やした少女へと視線を向けていた。周りの空気が張り詰める。誰かが唾を呑む音が、やけに大きく聞こえた。

「次に——この子は、ティア・ライトニングさん。バジリスクに狙われている少女です」

大きなどよめきが起こる。彼女が竜紋変色者らしい。

見初められた”D”は竜紋が変色し、ドラゴンが接触すると、その同種へと変貌する。彼女——ティアの姿は、そういった現象と何か関係があるのだろうか。

この疑問は、恐らく多くの生徒達が抱いているだろう。深月もそれを分かっている様子で、ざわめきが収まると説明を続けた。

「余計な憶測と誤解を招かぬため、まず言っておきます。竜紋の変色とティアさんの角には、何の因果関係もありません。入念な聞き取りと検査の結果、この角は竜紋変色以前に上位元素（ダークマター）生成能力で作りに出された、後天的な追加部位だと判明しました。DNAの異常も見つかっていないそうです」

先ほど以上に生徒達は色めき立つ。

肉体と接合した新たな部位を作り出す——口で言うのは簡単だ。

上位元素はどんな物質にも変換できるのだから、理論上は生体変換も行えるだろう。

しかし、実践するとなれば話は別。

生き物の体はあまりにも複雑で、とてもイメージだけで再現できるものではない。

”世界神”ならできるが、人間が作り出すのは至難の業である。

周囲の生徒たちは信じられないという眼差しをティアに向けている。だが正体不明のモノに対する恐れは、ずいぶんと薄れているように感じられた。

深月さんの説明が功を奏したのだろう。

人間は未知の存在を恐れるが、逆に言うところ——理解できるものならば、無闇に警戒したりはしない。

あと一歩で、ティアは学園に受け入れられるはず。悠はそう思っている筈だが、僕はここからだと思い、少し神経を研ぎ澄ませた。

深月さんは、そのための言葉を紡ぐ。

「ティアさんは稀有な才能を持っているだけで、私達と何も変わらぬ”人間”です。ですから——」

「違うの」

深月の声は途中で遮られた。

声の主は——ティア。鈴を鳴らしたかのような、高く澄んだ声音だった。

体育館にいる全員の眼差しが、彼女へと向けられる。

「えっと……ティアさん。私、何か間違えましたか？」

深月さんは戸惑った様子で問いかけると、ティアはこくと頷いた。

「うん、ティアは、人間じゃないの」

少し片言な日本語で答えるティア。

低いどよめきが生徒の間を駆け抜ける。

「そ、そんな事はありません。ティアさんは人間です！」

「ううん、違うの。ティアは——ドラゴン」

「なっ……」

絶句する深月さんを見て、ティアは不思議そうに首を傾げる。

「どうして驚くの？ あなたも、”D”なのに。”D”は、ドラゴンのなのに」

「”D”がドラゴン……？ いいえ、それは違います。ティアさん、私達は人間です」

深月は諭すように言うが、ティアは表情を固くする。

「……ドラゴンなの。ティアは、ドラゴンなの！」

苛立った様子で深月を睨むティア。その周囲に、あぶくのような小さい上位元素の粒が無数に湧き上がる。

在野の“D”は架空武装など使わない。かつての悠がそうだったように、上位元素をダイレクトに物質変換するのが普通だ。だから、あれはもう完全な戦闘態勢。

ティアの上位元素は電気へと変換されているのか、火花がバチバチと散っている。

感情が高ぶったことで無意識に攻撃的な物質変換を行っているのかもしれない。

だがそんな危険な状況だというのに、深月や他の生徒達は棒立ちのままだ。

ミッドガルでは対人戦の訓練など行わない。だからどう対応すればいいのか分からないのだろう。

「亮！」

「ああ、分かってる」

悠もこの状況を不味いと思ったのか、二人同時に列を抜ける。

「モノノベ、それにオオシマ……？」

イリスさんが声を上げるが、答えている暇はない。悠は深月の元へと走り、僕は壇上の手前まで高速で移動して生徒たちがいる先頭よりも前に立つ。

杖を瞬時に取り出し、生徒と教職員全体を覆い尽くすほどのシールドを作り出す。さらに立川穂乃花にもバリアーの球状で包み、みんなを守った。

僕の行動に生徒たちは驚きを交えた。そうしている間に悠は走る勢いのまま壇上へと跳び上がり、深月さんとティアの間に割り込んだ。

「やめろ！ 落ち着け！」

深月を背中に庇い、悠はティアに叫ぶ。

「あ……」

するとティアの表情から急に怒りが抜け落ちた。目を丸くし

て、悠の顔をじつと見つめたまま動かなくなる。湧き立つように生成されていた上位元素も、全て虚空に消えた。

僕もティアの行動が止まるのを見ると、警戒を解いたようでバリヤーを解除した。

「ん……？　おい、どうしたんだ？」

刺激してはいけないので、悠は慎重に問い掛ける。

「あ——うそ……また、会えるなんて……あ、あの、あなたも……あなたも、”D”だったの？　”D”にも、男の人がいたの？」  
呆けていたティアが我に返り、震える声で問い掛けてきた。何だか妙な言い回し。僕は彼女と悠が面識があることを知っている。

「ああ、俺も”D”だ。俺だけじゃない、あいつもだ」

悠は僕を視線で示す。ティアは悠の視線の先にある僕を見る。

悠は僕の正体がバレないように”D”と嘘を吐いてくれた。

「あの人も……”D”なの？」

ティアは悠と同じような目で僕を見る。まるで珍しい物を見るかのように。

「ああ、俺たちは”D”だ」

悠は落ち着いて答えた。

その途端、ティアは花が咲くように満面の笑みを浮かべた。

「やったの……やつと会えたの……あなただった……あなただったんだ！　ねえ！　名前！　あなたの名前は？」

「も、物部悠だけど……」

「モノノベ、ユウ……ユウ……いい名前。ねえ……ユウ、聞いて欲しい事があるの」

目を輝かせて悠を見つめてくるティア。

事態がよく分からない方向に流れているのを感じつつ、悠は問い返す。

「何を……聞いて欲しいんだ？」

「あのね、ティアはね、ドラゴンのお嫁さんになるために生まれてきたの！」

「ど、ドラゴンのお嫁さん？」

あまりに突拍子もない発言に、悠は困惑してしまう。

僕は上位元素で耳栓を作り、耳を塞ぐ。

「だからね、ユウはこれから、ティアの旦那さま！」

「……は？」

(やつぱり原作通りだな)

呆気にとられる悠をこの事を知っていた僕はティアを見た。

そんな悠に、ティアは勢いよく抱きついてきた。

「そして、ティアはユウのお嫁さん！ もう、絶対に離れないの！」

女子生徒達が、歓声か悲鳴か判別のつかない甲高い声を上げ、一斉に騒ぎ始める。

悠は余りの事態に理解が追いつかず、ぎゅつと腰にしがみ付く少女の華奢な肩と小さな角を、ただ呆然と見下ろしていた。

(耳栓しててよかった……しまった、端末を忘れた。写真撮れば面白いことになったのに)



## 同じクラス

「――ティア・ライトニングが物部悠と引き離されることを強く拒んだため、彼女はこのブリュンヒルデ教室で引き受けることとなった。皆、仲良くするように」

全校集会が終わった後のホームルームで、篠宮先生は事務的にそう告げる。

悠はティアと一緒に教壇の上に立っていた。ティアがどうしても悠から離れようとしなかったためだ。今もティアは悠の腕にしがみ付いて、幸せそうに目を細めている。

（やっぱりこうなったか）

ティアは二年前、ある組織に攫われ、宝石を作り続けていたとき、ロキ少佐率いる特殊部隊“スレイプニル”が彼女とその家族を救い出した。

その時にティアを助けたのが“スレイプニル”の隊長、悠だった。

それ以降、ティアは悠に好意を抱いている。

しかし悠は昔助けた“D”なのか確かめたいが今はできない。

もし皆の前で問いかければ、過去に“D”を見逃したことが公になれば、悠だけではなく、深月さんの立場まで悪くなってしまう。

「ちよ、ちよっと待ってください！ティアさんは初等教育を受ける年齢ではないんですの？わたくしたちの授業について来れるとは思いませんわ」

リーザさんが困惑した様子で篠宮先生に問いかける。

「そうではあるのだが……彼女の発言と容姿、攻撃的な態度に、生徒の多くが怯えてしまった。無理に同年代の“D”と一緒にしても上手くはいかないだろう。それならば唯一心を開いている物部悠に任せの方が確実だ。」

どうやらティアの指導は悠に任せるつもりだろう。

「物部悠、彼女の教育は君に任せる。基本的な勉強と常識、ミッドガルで生活するためのルールを、君が教えてやってくれ」

「な……お、俺がですか？まだ俺、ミッドガルに来て一ヶ月くらいしか経っていないんですよ？」

焦って抗弁するが、篠宮先生は有無を言わせぬ口調で言う。

「困ったことがあるば、他の者に聞け。これは対バジリスク戦に関連した任務の一つだと考えてもらって構わない。もしも彼女がミッドガルで大きな問題を起こせば、ニブルに引き渡すしかなくなる。その意味が……君なら分かるはずだ」

”D”はミッドガルに所属し、適切な管理を受け入れることで、正式に人権を認められている。そのミッドガルから追放されるということは、災害指定とほぼ同義だ。ニブルは彼女を容赦なく処分して、今回の事態を收拾するだろう。

リヴァイアサン侵攻の際、竜紋が変色したイリスさんを殺そうとしたように。

「……………分かりました。自信はないですが、できるだけのことはやってみます」

新人の悠には責任が大きすぎる任務だ。

けれど、幼いティアを見殺しにはできない。

彼女は、悠に強い好意を向けているからだ。そんな子をどうでもいいと思えるほど、奴の心は冷え切っていない。

「んー？お話、終わったの？」

ティアが悠に向かって上目遣いで問いかけてくる。自分に関する話だというのに、ほとんど聞いていなかったらしい。

「ああ、今日からティアは俺たちのクラスメイトだ」

「そうなの？じゃあここでもずっと一緒にいられるんだ！ねえ、ユウの席はどこ？」

「え？一番後ろの列の真ん中だけだ——」

悠は3×3で並べられている席の後列——深月さんとイリスさんに挟まれた席を指差した。

というか先ほどから二人の視線は悠を向いていた。深月さんは咎めるような眼差しで、イリスさんは不満げに頬をふくらませて、悠を睨んでいる。

「じゃあティアも、そこにするのっ」

そう言うとティアは悠の腕を引っ張る。

「そこって……どうしても後ろがよければ、俺が変わるが」

「違うの、ユウもここでもいいの。ほら、座って」

「……？」

ティアに促され、悠は自分の席に腰を下ろす。

「ふふ、それじゃあティアも着席っ」

ほふんと、ティアが悠の膝に座る。

「お、おい」

「いい座り心地なのー」

戸惑う悠に構わず、ティアは背中を預けてくる。

そこでついに堪忍袋の緒が切れたのだろう。イリスが勢いよく席から立ち上がり、ティアに向かって言う。

「ちよつとティアちゃん！そんなところに座ったらモノノベの邪魔になるじゃない。ちゃんと空いてる席に座らなきゃダメだよ！」

「む……お姉ちゃん、誰？」

「あたしはイリス・フレイア。モノノベの……友達だよ！」

イリスは少し誇らしげにそう名乗る。だがティアは怯んだ様子もなく、言い返す。

「友達なら、そっちこそエンリョして欲しいの。夫婦の問題に口を出すのは、ヤボなんだよ？」

「ふ、夫婦って……ティアちゃんとモノノベはさつき会ったばかりじゃない！あたしの方がずっとモノノベと仲がいいんだから！」

「違うの。ティアとユウは、ずっと前から、運命の赤い糸で結ばれてるの。誰もティアたちを引き離せないの」

そう言うと、ティアは体勢を変えて悠の首に手を回し、ぎゅつと強く抱き付く。

（悠をからかうネタが増えたな。どうやってイジリ倒そうかな）

僕の心がゲスに染まり始めていた。こうなったのも他の”世界神”たちのせいである。

「テイ、ティア、ちよつ……苦しいって」

それまでは子供相手だからと鷹揚に構えていた悠だが、あそこまで密着されるとさすがに動揺するだろう。華奢で小さな体の軽さと、肌の柔らかさを感じているだろう。この年でも既に女の子であることを意識しているはずだ。

「——ティアさん、自分の席で授業を受けるとするのは学園のルールです。従ってください」

そこに深月さんは不機嫌に頬を膨らませ、ティアは深月さんに視線を向ける。

「また……ティアにイジワル言うの？」

どうやらティアは、全校集会での一件を根に持っているらしい。

「意地悪ではありません。そういう決まりだと言ってるんです。兄さんのことを、あまり困らせないでください」

「兄さん？もしかしてあなたは、ユウの家族なの？」

びつくりした顔でティアは目をぱちくりさせる。

「ええ、私は物部深月。兄さんの妹です」

「そっか……だったら、仲良くしないとだね。旦那さまの妹なら、ティアの妹なの」

ティアは氣勢を弱め、深月さんに微笑みかける。

「……私は、自分より年下の姉を持った覚えはありません」

「んー、じゃあお姉さんでもいいの。それともお姑さんになる？」

「おままごとじゃないんですから、配役を適当に変えないでください。まったく……先生からも、何か言ってもらえませんか？」

深月さんは呆れた顔で溜息を吐き、篠宮先生に助けを求めた。

正直、このやり取りは原作通りで笑いが込み上げてきており、堪えるのに必死だ。

「そうだな……君の言う通り、決まりは守らなければならない。しかし、現時点で彼女にそれを理解させるのは難しい。ゆえに、今は

授業の邪魔をしないという条件付きで、彼女の行動を容認しよう」

「そんな……」

深月さんとイリスさんは啞然とした表情を浮かべるが、ティアは両手を挙げて喜ぶ。

「やったっ！じゃあティア、静かにしてるね。いいお嫁さんは、旦那さまに迷惑をかけないの」

今ので吹きそうになった。竜伐隊の实力は原作と違うが、話す内容は同じみたいで体をふるふる震えながらも手で口を押さえた。

「亮さんも何か言ってください」

深月さんは今度は僕に助けを求めてきた。

「いいんじゃない篠宮先生も許可してるんだし。それに悠も満更でもないみたいだし」

「そっ!?!そんなこと……」

悠は慌てて否定しそうになるが、ここで言えばティアを傷つけてしまうことになるので口を濁らす。

「兄さん?」

深月さんは悠を睨んだ。

「待ってくれ深月。そんな目で見るなよ。……ってかイリスもそんなに睨むなよ」

イリスさんも羨ましいのか悠を睨んでいる。

「物部悠、言っておくが彼女の特別扱いは今日だけだ。この件は、君が明日までに解決するように」

篠宮先生は、悠に鋭い視線を向けていった。

「ええっ!?!」

つまり、今日中にティアを学園のルールに従うよう教育しろということだ。

「えへへー」

楽しそうに表情を緩ませ、両足をぱたぱたさせているティア。こうして悠はティアの指導係となった。



それからティアは、片時も俺から離れようとしなかった。ホームルームではリーザたちも自己紹介を行ったのだが、ティアは興味なさげに俺の顔ばかり見上げていた。

「も、モノノベ・ユウ……わたくし、負けませんわよ!」

おかげでリーザには対抗心を抱かれ――。

「……ロリコン?」

フィリルからは不名誉な疑惑を掛けられてしまう。

「物部くんばかり、ずるいな」

「ん」

アリエラとレンには不満そうな視線を向けられた。特に年の近いレンは、授業が始まってからもチラチラとティアを気にしていた。

「奥さんができてよかったな」

亮は俺をからかってくる。

「ティア、皆と少し話してみたらどうだ?」

俺はそう促すが、ティアは首を横に振る。

「いい。お話しするなら、ユウがいいの」

彼女の赤い瞳には、今のところ俺しか映っていないようだった。とりあえずティア自身のことを知らなければ、どのように説得すればいいのかも分からない。なので特別扱いされている今日だけは、ティアの好きなようにさせてみることにした。

「ふわあ……」

授業中のティアは言われた通り、俺の膝の上で大人しくしていた。退屈そうに何度も欠伸をし、四時限目にはぐっすり眠ってしまったが、決して聞き分けのない子ではないらしい。

昼休みには、クラス全員でカフェテリアに行き、以前と同じように一つのテーブルを囲んだ。

「はい、旦那さま。あーん」

しかし――教室と同じく俺の膝に座り、スプーンで掬った野菜カレーを差し出されたのには困った。クラスメイトだけでなく、周

囲にいる女子生徒たちからも居心地の悪い視線を向けられてしまう。

「……ユウ？」

ティアが不安そうな表情を浮かべたため、俺は仕方なく野菜カレーを頬張る。すると今度は、ひそひそとした囁き声が辺りから聞こえてきた。周りの視線が気になって、カレーの辛さもほとんど分からない。

「ふふ、ティアたち、新婚さんだね」

ティアは嬉しそうに微笑み、自分も野菜カレーを口に運ぶ。

この分だと、明日にはロリコンのレッテルを貼られているかもしれない。

亮を見ると口を押さえて笑いを堪えていた。

（あいつ、面白がつてるな）

亮はこの状況を面白がつており、笑いを堪えていたために目には涙が一粒付いていた。

俺としては、単に子供のおままごとにつき合ってるような気分だった。

本人は嫁だと主張しているが、ひどく甘えん坊な妹と言った方がしっくり来る。

「ほら、ティア。口元が汚れてるぞ」

そう考えると変に意識をしなくて済むようになってきて、俺は自然にティアの口元を紙ナプキンで拭った。

「あう……ありがと」

少し恥ずかしそうに礼を言うティアも、兄目線で見ると素直に可愛いと思えた。

もしこうやって膝に乗り、甘えてくる相手がイリスだったなら、とても平静ではいられなかっただろう。

そんなことを考えて正面に視線を向けると、膨れっ面のイリスが俺を睨んでいた。

「ティアちゃんだけ……ずるい」

トマトソースの Pasta に突き立てたフォークを握りしめ、低い声で呟くイリス。

「ず、ずるいって、何がだ？」

「あたし、モノノベの友達なのに……ティアちゃんより仲良しのはずなのに……あーん、なんてしたことない。だから、あたしもやる！」

そう言うときイリスはパスタを巻き付けたフォークを、俺の前に差し出す。

「あ、あーん……」

イリスは頬を染め、震える声で言う。

心臓が跳ね、鼓動が速くなるのを自覚する。

「お、おい、イリス……」

「……モノノベ、早く。恥ずかしいよお」

涙目で訴えられ、俺は躊躇いつつも口を開く。だが――。

キーンと金属音が響き、イリスのフォークがティアのスプーンによって弾き上げられた。

「ユウはティアの旦那さまなんだから、そういうこと、しちやダメ」

「していいもん。モノノベはあたしの友達なんだもん！」

イリスは視線を鋭くし、まるでフェンシングでもするかのように、パスタ付きフォークを構えた。

「ちよつ、何する気だ？」

危険を感じた俺は声を上げるが、イリスはそのままフォークを突き出す。

「てやつー！」

「させないのー！」

ティアが再びスプーンで防ごうとするが、イリスの初撃はフェイントだった。途中でフォークを止めてティアのタイミングを外したイリスは、スプーンのガードをすり抜けて俺の口へパスタをねじ込む。

「むぐっ」

トマトソースの味が広がり、フォークが引き抜かれると同時に、パスタが口内で解放された。



「やったあっ！」

歓声を上げ、ガッツポーズを取るイリス。

「あーっ旦那さまが浮気したあ！」

ティアは愕然とした表情で叫ぶ。その声はカフェテリア全体に響き渡り、そこにいた全ての生徒が俺たちに視線を向けた。

「……お二人とも、いい加減にしてください。公共の場ではお静かに」

深月が怒りを滲ませた声で告げる。

びくつとイリスが体を竦ませ、申し訳なさそうに頭を掻く。

「あ、ご、ごめんねミツキちゃん……少し熱くなっちゃった」

「ティアは悪くないのに……」

ぶつぶつと不満を漏らしつつも、ティアも大人しくなる。俺の妹だということで、深月の評価には気を使っているのだろう。

「亮さんも、この状況のどこが面白いのですか？」

深月は笑いを堪え続けている亮にも言った。

「わ、悪い……このやり取りを見てると……どうも笑いが……込み上げてきて……ぷっ」

「面白いわけではないでしょう、亮も兄さんと同じでティアさんの教育係ですからね」

深月は当然のこのように言った。

「ちよっ!?なんで?僕そういうのは苦手なんだけど?」

「兄さんのサポートをしていただいて構いませんのでお願いします」

「そんな……」

亮は落ち込んで、再び料理に手をつけた。

「ふう……深月、助かつ——」

俺は礼を言おうとするが、深月の最大級に不機嫌そうな表情を見て、台詞が途中で途切れる。

「——兄さんの、バカ」

ぼそりと小さな声で呟くと、深月はそっぽを向いてしまう。リーザたちも呆れた顔をしており、結局ランチタイムは微妙な

空気のまま終了した。

そしてその後もトラブルは頻発。

昼休みの残り時間で学園を案内したのだが、時計塔で俺がちよつとトイレに行こうとしたとき、ティアが一緒についてこようとして揉めに揉めたのだ。

深月が何とか説得し、ティアは俺の手を放したくれたのだが、外からずっと「ユウ、いるの?」と何度も呼びかけられ、落ち着かない気分で用を足す羽目になった。

——ちなみにミッドガル内で俺と亮が使えるトイレは、二ヶ所だけ。ミッドガルの中枢分である時計塔には外部の人間も時たま訪れるため、ゲスト用の男性トイレが設置されている。あとは宿舎の自室に備えて付けのトイレだ。

さらに午後の授業中、今度ティアがトイレに行きたいと訴え、俺を女子トイレまで引つ張って行こうとした。

その時も何とか根気強く言い聞かせ、外で呼びかけに応え続けるという形に落ち着いた。

こうして、普段の何倍も長く感じた一日の授業が終わる。

だが俺の任務は、ここからが本番だ。

「——物部悠、ティア・ライトニングは君と同じく、物部深月の宿舎で生活させる。きちんと面倒を見るように」

帰りのホームルームで篠宮先生はそう言った。俺はティアの教育係として、放課後に勉強を見る必要がある。それにティアは俺から離れようとしないので、妥当な処置だろう。

深月は不服そうな表情をしていたが、渋々といった感じでした。承

亮は神界で会議があるらしく、神界に行ってしまった。急に召集がかかったようで七時までは帰ってこないようだ。

「では兄さん、私は生徒会の仕事があるので、先に帰っててください。ティアさんとしばらく二人きりになりますが……くれぐれも風紀を乱すような行動は慎むように」

「……分かってるよ。もうちよつと自分の兄貴を信用しろ」

俺は苦笑交じりに頷き、ティアと一緒に教室を出た。

## 改名

「僕……」絶対神”ゴッドから、全王に改名するね」

沈黙が一分間続いた。突然”絶対神”ゴッド様は全王に改名すると言い出した。

「……ぜつ、”絶対神”ゴッド様。改名するとは、どういう事ですか？」

第三世界の”世界神”、ルドルフさんが理由を訊ねた。

「理由？だって呼びにくいでしょ？」絶対神”ゴッドって。だから全王の方が短いからいいと思って」

”絶対神”ゴッドは当然かのように理由を述べた。

さらに周りは沈黙に包まれた。

「「「「「「ええええー！！！！！！！！！！」」」」」」

沈黙が続いたあと、僕を含めてみんなは驚いた。

”絶対神”ゴッド様が改名!？」

「そんな！急に！」

「いいのかしら!？」

「師匠！改名なんて出来るんですか!？」

「わっ、わたくしも知りませんわ!？」

「どっ、どうなってしまうんだ?」

「ワシにも分からん!?!しかし、改名なんて……」

”世界神”たちは信じられない様子で周りと相談していた。

本来、神が改名するのは上の神に昇格するときで、こう言ったことは初めてである。

「ごめんね、急にこんなことを言い出して。でも、大丈夫だよ。改名しても地位が変わることはないから」

”絶対神”ゴッド様は付け加えてきた。

それを聞いて僕たちは安心した。

「なっ、なんだ。神をやめるかと思ったよ」

エドワードさんが安心して息を吐いた。

「ん？エドワード君？僕が神をやめるって?」

”絶対神”ゴッド様は低い声でエドワードさんに言った。

「!?、いえ、決してそんなことは……」

エドワードさんは慌てて否定した。

「エドワード君?そんな態度だと、消しちゃうよ?」

「もっ!?申し訳ありません!」

エドワードさんは土下座をし、”絶対神”ゴッド様に謝った。

「ふふ、冗談だよ。だから顔を上げて」

”絶対神”ゴッド様は笑顔で冗談を言った。あの神(ひと)の冗談は笑えないのだ。

「理由はそれもあるんだけど、本当は別なの。そのことをこれから話すね」

”絶対神”ゴッド様は真剣な表情になり、神々は教壇に注目する。

「みんなの頑張りを見ていると僕もこのまま頂点に立つ存在として、示しを付けるために変わろうと思ったの」

この五年間、神々の実力も上がってきており、”絶対神”ゴッドは自分も変わらなきゃいけないと思ったようで、改名することを伝えるために僕たちを召集したようだ。

「だから僕も特訓をしてね、今まで一つの世界を一瞬で作り出すことしかできなかつたけど、十個の世界を一度に作れるようになったのね」

”絶対神”ゴッド様はさらっと凄いことを言った。

「改名する理由はさつき説明したけど、みんなみたいに実力を上げようとするのは本心だから、明日から”全王”だからね。これからよろしくね。じゃ、解散。キュッ!!」

”絶対神”ゴッド様は手を広げると握りしめた。すると部屋から消えてしまった。瞬間移動をしたのだろう。

神々は緊張が解け、一気に息を吐いた。

「焦ったよ。まさか本当に改名するなんて」

「ああ、でも”絶対神”ゴッド様が決めたことだ。仕方ない」  
こうして緊急召集は終わった。



ティアは俺の左手を小さな右手でぎゅっと握っている。

歩幅をティアに合わせて、ゆっくりと昇降口へ向かう。だが一階エントランスに来た時、校内見取り図の前で立ち尽くしている女子生徒が目にと留まる。

長い黒髪を三つ編みのおさげにし、眼鏡を掛けた大人しそうな雰囲気の子だ。

（あれ？ あの子は確か……ティアと一緒に転入してきた――

――

「ユウ？」

足を止めた俺に、ティアが怪訝な視線を向ける。

「悪い、ティア。ちょっとだけ付き合ってくれ」

俺はティアの手を引いて彼女に近づく。

何か困っているのであれば、力を貸すべきだろう。ミッドガルというのは、そういう精神で成り立っているのだと、俺はリヴァイアサン戦でリーザたちから学んでいた。

「――どうしたんだ？」

俺は彼女の後ろから声を掛ける。

「……え？あ――」

振り返った彼女は、こちらを見て目を丸くした。俺が男だったので驚いたのかもしれない。

無用な警戒をされぬよう、俺は笑顔を作って話しかける。

「君、確か今日転入してきた子だろ？名前は、立川……だったっけ？」

実を言うと、ティアのインパクトが大きかったため、彼女のことはあまり印象に残っていない。名前もうろ覚えだ。

「えっと――はい。私、立川穂乃花です。あなたは……物部悠

さんですよね？」

彼女は頷き、確認するような口調で訊ねてくる。

「俺のこと、知ってるのか？」

「学園で数少ない男性ですから、噂はすぐに聞こえてきます。それに朝の全校集会でも、二人の顔はお見かけしました」

そういうえば、今朝は激昂したティアを止めるために俺は壇上へ躍り出したのだ。亮はその間にみんなを守るために防壁を作っていた。

あれだけ派手なことをした以上、今日はどこも俺や亮、ティアの話で持ちきりだったに違いない。そうなれば嫌でも俺たちの名前は耳に届く。

「……じゃあ俺たちの自己紹介はいらないな。ティアの場合は、もう知っているだろうし」

何故か俺の腰にぎゅつとしがみ付き、無言で彼女を睨んでいるティアを視線で示す。

「はい、お会いしたのは全校集会が初めてで、まだ挨拶もしていませんが……生徒会長さんのご紹介は聞いていました」

そう言うとな彼女はぺこりと頭を下げる。

「悠さん、ティアさん、よろしくお願いします」

「ああ、こちらこそよろしく」

俺は笑顔で応じるが、ティアは仏頂面で返事をしない。

「悪い、ティアは何ていうか……俺以外には大体こんな感じで」

慌ててフォローを入れると、彼女は優しい表情で笑った。

「大丈夫です、気にしていません」

「ありがとう、助かるよ——立川」

「呼び方は穂乃花でいいですよ。私も名前で呼びます」

彼女は気安い感じで言う。

「あ、ああ……分かった、穂乃花」

多少、緊張しながら言い直す。外見からは内向的な雰囲気に見えたが、意外と気さくな性格なのかもしれない。

「ところで、大島亮さんは一緒ではないのですね」

穂乃花は亮がいなことに聞いてきた。

「あいつは用事があるって言ってたから宿舎にいますと思うぞ」

亮は神としての仕事があるようで”神界”に戻ったが、俺は嘘を言った。

「そうですか。いつも一緒だと皆さんが噂してましたので」

「いつもって訳じゃないが、大抵は一緒に行動している」

そういえば亮が学園に転入してからほとんどを俺と行動していたことを思い出す。ミッドガルは俺と亮以外女子のため、同じ同性としてつるんでいる。

「そうですか。大島亮さんにもよろしくとお伝えください」

「分かった、伝えておくよ。……それで穂乃花は、ここで何をしていたんだ？どこか行きたい場所があるなら案内するけど」

俺は、先ほどまで穂乃花がじっと見つめていた見取り図に目をやる。

「いえ、大丈夫です。これからここで生活するので、どこに何があるかを頭に入れておこうとしていただけですから」

「そっか、迷っていたわけじゃなかったんだ。それなら別にいいんだ。邪魔して悪かった」

要らないお節介を焼いてしまったなど、俺は頭を搔く。

「そんなことはありません。声を掛けてくれて嬉しかったです。

親切な方がいると分かっただけでも、これからの励みになります」

礼を言う穂乃花だったが、その台詞には少し引かかる部分を感じた。よく考えれば、学園案内などクラスメイトが率先してやることだ。彼女が配属された教室には、あまり親切な人間がいいるのかもしれない。

「……何か困ったことがあれば、いつでも声を掛けてくれ。俺のアドレス、教えておくから」

「あ……ありがとうございます」

表情を綻ばせる穂乃花。アドレスを交換してから俺たちは別れ、昇降口から校舎を出る。

その間、ティアはずっと不機嫌そうな顔で、俺の手を強く握り



しめていた。

「転入生同士なんだから、もうちよつと仲良くしてみてもいいんじゃないか？きつと友達になれると思うぞ？」

校門に向かいながら声を掛けると、ティアはぶんぶんと首を横に振った。

「や。あの子、なんか近づきたくないの」

「近づきたくないって……」

リーザたちの時よりも明確に拒絶を示すティアに、俺は戸惑う。

◇

「亮、終わったぞ」

「ありがとう、義晴。こつちも終わりそうだ」

デスクで仕事をしながら僕は義晴の返事に答えた。

河本義晴、第一世界の”世界神”で同期である。蹴りの達人で、ONE PIECEの六式、覇気、ドラゴンボール超の”蹴り”のバジルと同じ技を使う。

第一世界は僕が生まれた世界で、第十二世界と対となる世界だ。

「そういえば、八重はどうした？一緒じゃないのか？」

「自分の世界に行ってるよ。もうすぐ帰ってくると思うけど

……よし、終わった」

書類仕事を終わらせ、帰る準備をする。

「じゃあ居酒屋に行くか」

「そうだな、みんなは先に行ってるぞ」

「了解」

今日は”世界神”全員で飲む約束をしていた。第五世界の八代さんが席を予約してくれたので、早く切り上げて向かう。

「そっちの世界はどうだい？」

義晴が僕が担当している世界について聞いてきた。

「まあまあかな。前より資源は増えたみたいだけど、戦争は減らないね」

「どの世界でも戦争は起こるもんさ。今更言つてもしようがない」

「そうだな。……そういえば、父さんと母さんはどうだい？」

僕は両親のことを聞いた。突然死んでしまったからどうしているか気になっていた。

「大丈夫だ。一ヶ月は悲しんでたが、お前の妹がしっかりしてたから今は元気にやってるよ」

「そっか……冬美には感謝しなくちやな」

僕の妹、大島冬美はしっかり者で、家事を毎日して、いつも助かっていた。あれから六年が経ち、今は中学三年生になったようだ。

「願いが叶うなら、冬美の料理を食べたいな」

「行けばいいじゃないか。僕たちの存在は知られても問題ないからたまにはいいんじゃないか？」

僕たち神は人間に存在を知られても特に問題はない。

「やめとく。死んだのに元の世界にいたら大変なことになるから」

「それもそうだな。でも、杖で家の状況を見ればいいじゃないか？」

「いや、恋しくなるからやめとくよ。それよりもうすぐ着くぞ」

「はいはい、分かったよ」

僕たちは居酒屋に着き、中に入っていった。

## ドラゴン信奉者団体

た。  
宿舎へ帰り着くと、俺は早速ティアの授業を始めることにし

取っている。俺はティアを部屋に通し、教科書とノートを机に広げた。

初等教育過程では手で書くということ覚えさせるため、紙の教材を使っているらしい。普段ノート型の端末一つで授業を受けている俺には、紙と鉛筆の感触が懐かしかった。

「……で、やっぱりティアはここに座るんだな」

当然のように膝へと座ったティアを見て、俺は溜息を吐く。

「うんっ、だってティアはお嫁さんだから」

ティアは身を捻って俺を見上げ、笑顔で頷いた。

「……たとえば夫婦でも、こんな四六時中くっついてはいないぞ、普通」

「ヨソはヨソ、ウチはウチなの。それにティアたちは新婚さんだし」

「いや、そもそも結婚した覚えはないんだが」

俺は根本的な部分を指摘する。

「え——？」

するとティアは呆気に取られた表情を浮かべる。

軽はずみな発言だったかと俺は焦るが、彼女はすぐに笑顔を見せた。

「そういうえば、まだティアたち……結婚式を挙げてなかったの！  
ねえ、いつにする？」

「い、いつって……第一、ティアも俺もまだ結婚できる歳じゃない  
だろ？」

「人間の決まりなんて関係ないの。ティアたちはドラゴンだから」

思わぬ台詞で反論され、言葉を失う。

ダメだ。ティアには人間の理屈が通じない。自分を人間ではなく、ドラゴンと思い混んでいるため、何を言っても効かない。

明日はきちんと授業を受けさせなければならぬのだが、いったいどうすればいいのだろう。

「……………ティア、この問題については、また後で話し合おう。今は勉強の時間だ。ほら、教科書開いて」

しばらく考えたが、結局問題を先送りすることしかできなかつた。

「えー……………約束だよ？ちゃんと結婚式の日取り、決めようね？」

「できれば、もう少し前の段階から議論をしたいんだが……………」

説得するどころか、俺の方がどんどん追い詰められている気がする。

何とか逆転の秘策はないものかと考えながら、俺はティアの授業を開始した。

一度勉強に集中すると、ティアは優秀な生徒だった。テキストを読み、分からないところがあれば質問し、あつという間に知識を吸収していく。

語学に関しては日本語を含む三ヶ国語を、日常会話レベルで高いこなせるようだった。

(誰か、良い教師がいたんだろうか)

ティアの姿から考えて、普通の学校に行っていたとは考えにくい。だがティアは同年代の子に負けない教養を備えていた。

日本語での喋り方が子供っぽいので内面も幼いのだろうと考えていたが、むしろ逆なのかもしれない。

授業はとてもスムーズに進み、夕食前には今日のノルマを終えてしまった。

七時になると帰宅した深月が俺たちを呼びに来た。亮も”神界”の仕事を終わらせて戻ってきており、一緒に食堂で夕食を食べる。

「……………ティアさんの教育は、不調なようですね」

俺の膝を指定席にしてしまつてきけるティアを見た深月は、落胆

した様子で言う。

「でも、勉強に関しては順調のようだぞ。テキストを見たけどほとんど正解してるし」

亮はティアが解き終わった問題集を見て言った。

「そうだけど……ルールを教えるのは難しくくて」

頭を掻きながら答えると、深月は溜息を吐いた。

「分かりました。では、ルール教育に関しては私が引き受けましょう。生徒会長として、ティアさんの勝手気ままな行動を放っておけませんから」

そうして夕食後は、俺の部屋で深月による教育が始まった。

だが――。

「……ですから、ティアさん。規律に従ってミッドガルで生活することにより、私たちは世界から存在を認められ――」

「そんなの人間が勝手に決めたことなの。ティアはドラゴンだし関係ないの」

「……………」

もう何度目かも分からないティアのドラゴン理論の前に、深月はがっくりと肩を落とした。

「兄さんの苦勞が、よく分かりました」

深月はティアの椅子となっっている俺に、疲れた顔を向ける。

「だろ？いくらルールを納得させようとしても無理なんだよ」

ようやく仲間を得られた気分で、俺は苦笑を返した。

「少し休憩したらどうだい？アイス作ってきたから食べなよ。」

ティアちゃんはイチゴとチョコとバナナ、何にする？」

亮は扉を開け、アイスを四つ持ってきた。

「ティアはイチゴがいいの」

ティアは鉛筆を机に置いて、アイスに興味を示した。

「はいよ。悠と深月さんも休憩にしたら」

亮はティアにアイスを差し出すと俺たちに顔を向けて言った。

「……そうですね。少し休憩しましょう。亮さん、チョコ味をお願いします」

「はいよ、悠はバナナでいいか？」

「ああ、ありがとな」

亮からアイスを受け取り、食べながら休憩した。

「美味しいです。亮さん、料理もできるんですか？」

「趣味で作ってるだけだよ。材料は前から買ってあったからすぐにできたよ」

亮は頭を掻いて照れていた。

「ホントに美味しいな。深月と同じくらいだ」

「うん、美味しいの。リョウ、ありがとうなの」

ティアの口にも合っていたようで、亮に礼を言う。どうやら亮には心を開いてくれたようだ。

「どういたしまして……いつの間にか九時過ぎてるな。そろそろ風呂に入るか」

亮はアイスを食べ終え、自分の部屋に向かおうと立った。だがその直後にティアが口にした言葉を聞いて、動きを止めた。

「じゃあティア、ユウと一緒に風呂に入るの！」

「やっぱりそう来ましたか……」

深月は自分の額に手を当て、低い声で呟く。

「ティア、頼むから風呂は一人で入ってくれないか？トイレのときみたいに、ちゃんと外で待ってるからさ」

俺はできるだけ優しい口調で頼んでみるが、ティアはぶんぶんと首を横に振る。

「や！ユウと入るの！旦那さまはいつも一緒じゃないとダメなの！」

「……どうしてティアは、俺と離れることをそんなに嫌がるんだ？俺は別にいなくなったりしないぞ？」

思い切って、踏み込んだ質問を試してみる。するとティアは表情を曇らせた。

「ダメなの……ティアが傍にいないと、きつと、消えちゃうの」

「消える？」

「……………」

俺は言葉の意味がよく分からずに問い返すが、ティアは口を引き結んで答えてくれない。

無言で俺の服をぎゅっと掴み、テコでも動かぬ姿勢だ。

「分かりました。仕方ありませんね……」

深月が漏らした言葉を聞いて、俺は驚く。

「え？まさか、許可するのか？」

生徒会長である深月が、混浴を認めるなど信じられない。以前、イリスに背中を流してもらったことが露見した際は、大量の反省文を書かされたのだ。

「はい、ただし条件付きですが。こうなることは半ば予想していました。なので、対策は用意してあります。少し待っていてください」

そう言つて深月は部屋を出て行き、すぐに荷物を抱えて戻ってきました。

「それは……？」

俺は深月が持つてきた物を指差して訊ねる。

「水着とパジャマです」

真剣で答える深月。今まで黙っていた亮が口を開く。

「……………水着なら、いいのか？」

深月にしては面白いぶんな譲歩だと思い、確認してみる。

「水着は学園指定のものです。温水プールに入るのだと思えば、風紀上の問題はないと思います。た、ただし、監視役として私も同行しますが」

頬を赤くし、深月はさらに予想外のことを告げた。

「な……深月も入るのか？」

「——何か問題が？兄さんはティアさんと二人つきりで、いちやいちゃとお風呂を満喫したいのですか？」

「そ、そんなわけないだろ」

慌てて否定する。ただ——深月と風呂に入るのだと考えた時、何故だかとても落ち着かない気分になったのだ。深月は妹で、意識する必要もないはずなのに。

「だったら構いませんよね？私も兄さんと入ります」

(……兄さんど?)

話の中心はティアのはずだったので、言い回しに少し違和感を覚える。だが深月の眼光に気圧され、俺はそれを指摘することなく頷いた。

「わ、分かった……」

「よろしい、では——お風呂タイムです」

声を弾ませ、そう宣言する深月。何だか、妙に楽しそうだ。

子供の頃を思い出しているのかもしれない。

(あれ、でも……俺は深月と、風呂に入ったことがあったか?)  
兄弟ならば、幼い頃は一緒に入るのが普通だろう。

だがいくら考えてみても、そんな記憶はどこにも見つからなかった——。



「さすがに、三人で入ると狭いですね……」

スクール水着に着替えた深月が、バスルームを見回して言う。  
白い肌に貼りつく紺色の水着は、深月のスレンダーな体型をぴっちり  
と際立たせていた。

「これがミズギ……?なんかピチピチで変な感じなの」

ティアはこれまで水着を着たことがないらしく、物珍しげに肩  
ひもを手で伸ばしている。

目を引くのは、ティアの太ももに浮かび上がる赤い竜紋だ。

(バジリスクに見初められると、赤く変色するの?)

イリスのときは白だった。ドラゴンによって”D”の反応も  
異なるらしい。

「……兄さん、視線が怪しいですよ」

じつとティアの竜紋を見ていると、深月に耳を引っ張られてし



まった。

俺も当然ながら男子用の水着を身に着けている。こうして水着で風呂場にいると、何だか妙に場違いな感じがした。女の子が二人もいるせいかな、空気はどことなく甘い香りがする。

ここは一人部屋のバスルームなので、当然ながら多人数で入ることは想定されていない。三人も入ると、体を洗うスペースはなくなってしまふ。深月も同じことを思ったらしく、困った顔で窮屈な洗い場を眺める。

「三人同時に洗うのは難しそうですね。兄さんは先に湯船へ浸かっていてください。途中で交代しましょう」

「分かった」

俺はお湯を体に掛けて軽く汗を流してから、湯船へと足を入れる。そのまま肩まで体を沈めると、お湯が縁ギリギリまで迫り上がった。

「あ、ティアも入るの!」

だがせつかくスペースを作ったというのに、ティアが湯船へ飛び込んでくる。水しぶきが高く上がり、お湯が大きく零れ落ちた。

「ちよつとティアさん、何をやってるんですか!まずは私と体を洗いましょう」

深月が咎めると、ティアは頬を膨らませる。

「や。ティアは、ユウと一緒になの」

そう言うと、ティアは湯船の中で俺に体を寄せてくる。

「ティ、ティア——そんなにくつつかないでくれ」

水着越しに伝わる柔肌の感触に動揺する。

取り残された深月は、しばらく立ち尽くした後、意を決した様子で口を開いた。

「だったら……私も入ります」

「へ?お、おい?」

強引に湯船の中へと入ってくる深月。もちろんこちらも三人用ではないため、非常に窮屈な状況になる。全員の体が密着し、ザアーツとお湯が流れ出た。

肘に柔らかな感触が触れ、俺は慌てて体勢を変えようとするが、今度は膝が深月の内腿に入り込む。

「やつ……に、兄さん……そこは、いけません」

「わ、悪い」

体をねじると、肌と水着が擦れ合う。

「ん……」

熱っぽい吐息を漏らす深月。

「えへへー、旦那さまー」

ティアはむしろ嬉しそうに、ぴとりと体をくつつけてきた。身動きが取れなくなった俺は、二人に訴える。

「やっぱ三人は無理だつて。どっちか外へ出てくれないか？」

「や。ティアはユウから離れないの」

細い両腕を俺の体に絡めるティア。

「……ティアさんが出ないのなら、私も動きません。監視役ですから。というか二人とも密着しすぎです」

深月はそんなティアと俺の間へと割り込むように、ぐいぐいと体を寄せてくる。

水着が少しずれ、小さいが形がいい胸の谷間が覗く。

「もうっ、邪魔しないで欲しいの」

ティアは抵抗し、より強くしがみ付いてくる。狭い湯船の中は、まるでおしくらまんじゅうをしているかのような様相を呈してき

た。

「ふ、二人が出ないなら、俺が出る」

俺にとつてまだ子供にしか見えないティアと、妹の深月。

この二人ならばイリスのときのように、妙な意識はしないで済むと思っていたのだが……もう耐えられそうにない。まだお湯に浸かって間もないのに、顔がどうしようもなく熱くなってきた。

「ダメーっ！旦那さまがお嫁さんを置いていったらいけないのっ」

しかしティアが覆いかぶさるようにして、俺を逃すまいとする。

「ティアさんは兄さんについていくんですから、外へ出て同じです。湯船が出るのは、もう少し温まってからにしましょう。兄さんたちに風邪を引かれては、管理責任を問われてしまいます」

深月もそう言っつて、俺の手を掴んで引き留める。

既に体は十分熱いのだが、深月の言葉と眼差しには抗い難い力があり、俺はしばしば湯船の底に腰を落とす。

そしてそれから約十分——はしゃいでいたティアがのぼせかけるまで、俺は変なことを考えてしまわぬよう、頭を空っぽにして耐え続けたのだった。



「気持ちよさそうに眠っていますね」

俺のベッドで寝息を立てているパジャマ姿のティアを眺め、深月が頬を緩める。

「……これでやっと解放される」

大きく息を吐いた俺は、勉強机の椅子に深々と腰をかけた。

「二人とも、お疲れ様」

亮は苦笑を浮かべながら俺たちを労う。風呂から上がった後、俺たちはそれぞれ寝間着に着替え、冷たい飲み物でのどを潤していたのだが……気が付くとティアはうつらうつらと舟を漕いでいた。

それでとりあえず俺のベッドに寝かせたところ、あつという間に眠ってしまったのだ。

「けど、任務は失敗だ。結局、今日中にティアを説得できなかった」

恐らく明日もティアは、俺の膝で授業を受けようとするはずだ。

「ティアさんにルールを教えられなかったのは、私も同じです。明日は私からも篠宮先生に説明して、期限を延ばしてもらいます」

「ありがとう深月、助かる。ただ……ティアの”自分はドラゴン”だつて思い込みを何とかしないことには、いくら時間を掛けて言い聞かせても無駄だろうな」

ドラゴンには人間が決めたルールなんて関係ない——その一言であらゆる説得が無意味になつてしまふ。

「……正直、こんなにも頑固な子だつたのは予想外でした。彼女はニブルに保護されたときも、ミッドガルへ移送されて検査を受けたときも、全く抵抗しなかつたと聞いていましたから。ずっと無表情で、大人しく言うことに従つていたそうです」

「今とは、ずいぶん印象が違うな」

ころころと目まぐるしく表情を変えるティアに振り回された直後の俺は、すぐには信じられない。

「はい、全校集会の前に会つたときとは、まるで別人です。最初は、無口で従順な子に思えたのですが……」

「つまり性格が豹変して見えるほど、”D”が人間だつて発言は、ティアにとつて聞き逃せないものだつたわけか。なあ、ティアがどんな環境で生活していたのかは分からないのか？」

俺がそう訊ねると、深月はちらりとティアの様子を窺う。

「——下校前に、篠宮先生からできるだけ詳しく教えてもらいました。ティアさんは、よく眠っているようですし、今なら話しても大丈夫でしょう。彼女には、あまり聞かせたくない話ですから」

その言葉に俺は眉を寄せる。

「まさか、ティアはひどい目に遭つていたのか？」

ティアの思想は、”D”の排斥団体と似通っている部分があった。まさかそういった組織に捕らえられていたのかと心配になる。

だが深月は、ゆっくりと首を横に振つた。

「——いいえ、その逆です。ティアさんは崇められていました」  
「崇められていた？」

「ニブルの部隊がティアさんを発見したのは、ドラゴン信奉者団体”ムスペルの子ら”の武装車両内だつたそうです」

その名を聞いた俺は息を呑む。

「ムスペルの子ら」……世界最悪のテロ組織じゃないか」

ドラゴン信奉者団体というのは、”D”の排斥団体とは全く考え方が逆の人々だ。人智を超えた怪物であるドラゴンを神と崇め、敬う。ドラゴンの脅威に晒された世界で、そういった新興宗教が生まれたのは、ある意味必然だった。

崇めるというのは、絶対的な恐怖なら逃れる方法の一つ。自分はドラゴンの使徒だと信じることで、心の安定を保つのだ。

そんなドラゴン信奉者団体の中でも、”ムスペルの子ら”は非常に過激な思想を有している最大派閥。ドラゴンを倒そうとしている国や組織にテロを仕掛け、活動を妨害し続けている。当然ながらアスガルやニブルもその対象だ。

「あいつらは竜災にあった国に入り込んで信徒を増やそうとする」と聞いているよ。確かリーダーが災害指定された”D”だったな」

それまで黙っていた亮が口を開く。やはり神というだけあって詳しい。

「え……？リーダーが”D”？」

深月が目を丸くするのを見て、俺は説明する。

「公にはなっていないが、”ムスペルの子ら”のリーダーの名はキーリ・スルト・ムスペルヘイム——ニブルでは”ドラゴンよりも多くの人間を殺した魔女”として恐れられていたよ。俺は結局、出くわすことがなかったけどな」

もしも出会っていたら、それまで殺すか殺されるかの状況になっただろう。俺が手を汚さずにいられたのは、彼女と巡り合わなかったからでもある。

「そんな……”D”がテロ組織を率いているだなんて」

深月はショックを受けた様子で声を震わせた。

「表沙汰になれば”D”の社会的地位は、一気に危うくなるだろうな。だから、ミッドガルやその恩恵を受けている国々が情報統制しているのさ。深月が知らなかったのも当然だ」

「もしかしたら、奴らは”D”のドラゴン化は知っているのかもしれない。武装車両にティアちゃんを乗せてバジリスクに捧げれば

ドラゴンが増えると思ったのだろうか」

「もしそうでしたら理解不能です」

「テロリストの考えなんて分からんさ。でもキーリはそれを知っているとすれば、ヤバイな。ミッドガルも危なくなってくるだろう」

亮は言葉を続けた後、グラスにある飲み物を飲むと机に置く。

「ドラゴン信奉者たちがドラゴンを増やすためにティアちゃんにそう言い聞かせていれば辻褄が合うな。だが、ティアちゃんが言われたことを疑問もなく受け入れる子には思えないな」

亮の言う通り、今日、勉強を見ていて分かったが、ティアは頭のいい子だ。分からない部分はきちんと質問し、理解しようと試みる。知識に根拠を求めるティアが、ドラゴン信奉者たちの出鱈目な教義を素直に信じ込むだろうか。

「そうですね……ティアさんは自分をドラゴンだと心から信じているのではなく、無理やり自身に言い聞かせているような印象を受けます」

(言い聞かせている、か)

確かに、指摘されてムキになるのは、揺らぎがある証拠だ。

人間は時に恐怖から逃れるため、ドラゴンのような怪物すら神と崇める。有り得ないものを信じようとする。もしティアが心の安定を保つために、自分をドラゴンだと信じているのなら……それは何かから“逃れるため”なのだろう。

「なあ——ティアを保護したとき、傍に両親はいなかったのか？」

「分かりません。少なくとも、私の聞いた限りではティアさんの両親に関する情報はあまりありませんでした」

「そっか……これに関しては直接聞くしかないか」

すやすやと眠るティアの寝顔を見ながら呟く。

「今日は眠ってしまったから、明日聞くしかないな。僕も寝るね」

そう言うと亮は立ち上がり、部屋を出ようとした。

「ああ、おやすみ」

「はい、おやすみなさい」

「おやすみ」

亮は返答に応じて部屋を出た。

「私たちもそろそろ寝ましよう」

「そうだな」

俺たちはグラスを片付けてから眠りについた。

## 馴染み方

ティアに振り回された一日は、まだ終わってはいなかった。  
深夜、俺は大きな叫び声で目を覚ます。

「どこっ!? ユウはどこなのっ!？」

「落ち着いて!落ち着いてください、ティアさん!」

バチバチと部屋には閃光が瞬いている。慌てて飛び起きると、ベッドの上で取り乱すティアの姿が目映る。あぶくのような上位元素(ダークマター)が湧き上がり、電気へと変換され、火花の子が散っていた。

「ティア!」

「あ——」

俺が名前を呼ぶと、ティアはぴたりと動きを止める。

上位元素の流出が途絶えると共に、激しい電光も収まった。俺は立ち上がって部屋の明かりを付ける。

「ユウっ!」

ベッドの上から俺に飛び付いてくるティア。俺はその小さな体を受け止めた。

「よかった!よかったのっ!ユウまで……消えちゃったかと思っただの」

ティアは俺の胸に額を押し付け、震える声で言う。

「ふう……どうなることかと思いました」

気が抜けたのか、深月はベッドの上で座り込み、大きく息を吐く。

「なんかあったのか?」

亮が扉を開けて入ってきた。騒ぎを聞いて飛び出してきたよ  
うだ。

「大丈夫だ。今落ち着いた」

「そうか……ならいいんだが」

俺は状況を話すと、亮は納得してくれた。

「ティア、俺はここにいるから。だから大丈夫だ」



二本の角が生えた頭を優しく撫でて、落ち着かせる。

目が覚めて、ほんのちよつと俺が視界に入らなかつただけで、これほどまで錯乱するとは思っていなかった。寝ている間に移動させなかつたのは正解のようだが、この反応はあまりに過敏だ。

「ユウ……ユウ……ユウっ」

俺の名を何度も呼ぶティアの肩に手を置き、ゆつくりと話しかける。

「ティアは、何がそんなに怖いんだ？俺が消えると思うから、離れたくないのか？」

「……………」

顔を上げるティア。だが口を強く引き結び、何も言おうとはしない。

「答えてくれ。俺は、ティアが心配なんだ」

真っ直ぐにティアの目を見つめ、訴える。赤い瞳の奥が揺らぎ、ティアは唇を震わせた。

「……そう、ユウが消えちゃイヤだから……ティアが守るの」

「守る？ティアは、俺を守ろうといてくれたのか？」

思いがけない台詞に、俺は驚きながら問いかける。

こくん、と小さく頷くティア。

「大事なものは、ちゃんと自分で、守らないといけないの。消えちゃったら……もう、手遅れ。どうやっても、取り戻せないの」

消えれば取り戻せない。全ては手遅れ。

ティアの言葉は、俺の心を揺らす。失った深月との約束。その空隙を、胸の内に意識した。

（この子は、何か大切なものを失っている。俺と同じように）

「そっか……やつとティアのことを、少しだけ理解できた。守ろうとしてくれて、ありがとうな。けど、いくつか勘違いしているぞ？」

「勘違い……？」

きよとんとした顔でティアは首を傾げる。

説得を試みるなら今だ。ティアの行動理由が分かつたのなら、その対策も立てられる。

「ああ、俺はティアに守ってもらわなきゃいけないほど、弱くない。自分の身ぐらいいは、自分で守れる」

「でも……ユウがどれだけ強くても、もっと強い人はいるかもしれない。だからティアも守ったほうが、もっともつと安全なの」

「それはそうだが……」

ティアの言うことは正論だった。深月が何をやっているんですかという眼差しで、俺を見ている。

俺が弱くないことを証明すれば安心してくれるかと思ったのだが、少し話の方向性を変える必要があるそうだった。

「……でもな、ティア。そもそも、このミッドガルに俺を襲ってくるような奴はいないんだ。だから、頑張つて俺を守ろうとしなくてもいいんだよ」

俺に命を狙われる理由はない。むしろ、狙われるとしたらティアの方が。宿舎に戻る途中、海岸で殺気を感じたことを思い出しながら、おはティアの説得を続けた。

「そんなの、分からないの。良い子の振りして、悪いことを考える子がいるかもしれないの」

またしても正論で返されるが、今度は食い下がる。

「確かに、悪い奴がいけないと言いつれれない。だけど、深月やイリスたちは違う。クラスメイトのことだけでも、信じてくれないか？」

「無理なの。ミツキは、大丈夫かもだけど……他の子は、何を考えているのか、分からないの」

硬い表情でティアは首を横に振った。

「亮は悪い奴だったか？」

「……………」

亮のことを聞くと、ティアは首を横に振って否定した。

「無理に信じようとはしなくていい。分かるようになるまで仲良くなつたらいい。皆を信じられるようになれば、教室と宿舎では安心できるはずだ」

「仲良く……？」

「ああ、だから明日はもつと、皆と話してみないか？」

俺の提案を聞いたティアは、不安そうに聞き返してくる。

「……ユウは、みんなを信じてるの?」

「信じてるさ。イリスはバカが付くほど正直で素直だし、亮は変わってるけど、頼りになる。リーザたちだって仲間のために体を張って戦える奴らさ。少なくとも俺は、あいつらを警戒したりしない」

イリスがリヴァイアサンに狙われたとき、リーザたちは当然のように彼女を守るために戦った。亮も同じだ。同じ教室の仲間が家族だと言って、心から気遣っていた。

戦場では、人の本性が浮き彫りになる。だからこそ、そこで目にしたものを俺は疑わない。

「ユウは、ティアがみんなと仲良くしたら、嬉しい?」

「ああ、すごく嬉しい」

「……分かったの。ユウが……旦那さまがいうなら、そうしてみるの。ティア……ユウに嬉しくなって欲しいから」

小さな声で答えるティア。

俺は思わず、深月と顔を合わせる。

「ようやく、一歩前進ですね」

ほっとした様子で深月が言う。

「そうだな……なあ深月、明日って実習授業はあったか?」

「はい、三・四時限目が通常の実習で、午後はバジリスク戦に備えた特別合同演習があります。それがどうかしましたか?」

「いや、座学と違って実習なら皆に関わる機会が多いと思ってさ。だからそれだけ実習授業があるのなら、ちようどいい。ティア——きつと明日は、楽しくなるぞ」

俺はそう言ってティアに笑いかける。

「楽しく……」

ティアはピンと来ない表情で首を傾げ、ふわあと欠伸をした。また眠くなってきたのだろう。

「僕もここで寝るよ。寝袋を持ってくる」

「ああ、すまない」

亮は寝袋を取りに自分の部屋に戻っていった。

それから俺たちは電気を消し、再び就寝する。ただし、ティアがまだ取り乱すといけないので、今度は俺もベッドの上だ。

俺は窮屈なベッドの端で背を向け、深月とティアの呼吸を近くに感じながら、瞼を閉じた。



翌朝——俺たちは亮を入れた四人で登校し、教室の扉を開ける。

「お、おはよう……なの」

俺がポンと背中を押すと、ティアは囁くような声で挨拶した。教室にいたフィリルとアリエラが、ティアに視線を向ける。他の皆はまだ登校してないようだ。

「……………おはよう」

フィリルは手にした文庫本を閉じ、少し驚いた顔で挨拶を返す。

「おはよう、いい朝だね。キミから挨拶してくれて嬉しいよ」

アリエラはさわやかな笑顔を浮かべて応じる。

二人に見つめられたティアはアタフタし、俺の背中に隠れてしまった。

まあ最初にしては上出来だろう。俺と深月と亮もフィリルたちに挨拶して、自分の席へと向かう。俺が着席すると、ティアはちよこんと膝に乗る。

「ユウ……ティア、頑張った？」

「ああ、頑張った。えらいぞ」

俺はティアを労い、頭を撫でた。

「えへへ……」

嬉しそうに目を細めるティア。皆と打ち解けるまでは、この状態は続きそうだ。

鞆からノート型端末を取り出しながら、篠宮先生への言い訳を考えるべきその時、最前列の席に座るフィリルが、何やら机の中をこそごそ漁っている様子が目に留まった。

どうしたのだろうかと眺めていると、フィリルは机の奥から一冊の本を引っ張り出して、俺たちの方へやってきた。

「……あの」

フィリルは俺でなくティアに視線を向け、小さな声で話しかける。

「な、何？」

ティアが緊張した面持ちで問い返すと、フィリルは手にした本を差し出した。表紙には線の細いタッチで綺麗な女の子が描かれている。どうやら日本の少女漫画らしい。いつも難しそうな小説を読んでいる印象だったが、フィリルは漫画も守備範囲のようだ。

「これ……貸してあげる。授業中……暇だと思うから」

「いいの？」

「うん……この漫画、面白いから……ティアさんにも読んで欲しい」

ティアはフィリルの額と漫画を交互に見た後、恐る恐る本を受け取る。

「……じゃ」

本を渡したフィリルはあっさりと自分の席へ戻っていく。

ティアは戸惑った様子で、漫画の表紙を見下ろしていた。

ティアの特別待遇延長に関しては、深月が口添えしてくれたおかげで、篠宮先生はあっさり了承してくれた。もしかしたら篠宮先生も一日では難しいと分かった上で、発破をかけていたのかもしれない。

ただ、イリスだけは不満げな顔で隣の席から俺を睨んでいたが。

「……モノノベは、あたしの友達なんだよね？一番の仲良しなん

だよね?」

頬を膨らませてイリスが問いかけてくる。

「まあ……そうだな」

頬を搔きながら、俺は同意する。

妹の深月と亮を例外とすれば、イリスが一番仲のいい友人であることは間違いない。

「だったら、あたしもモノノベの膝に座らせて欲しいなあ」

「それは——ダメだ」

胸の内に浮かんだ甘い妄想が少しだけ返事を躊躇させたが、俺は首を横に振る。

「ええーっ! どうして?」

「イリスは、子供じゃないだろ」

「……モノノベの、ケチ」

拗ねたイリスは窓の方を向いてしまう。怒りを精一杯に表現しているのだろうが、むくれてた横顔は可愛らしい。こんな子を膝に乗せて、理性を保つ自信はなかった。イリスにはもう少し、自分の魅力というものを自覚して欲しいと思う。

昨日ならティアが文句を言いそうな会話だったのだが、彼女は黙々とフィリルに借りた漫画を読んでいる。

後ろから覗き込んだ感じでは、ギャグも入り混じった軽い恋愛物のようだった。

授業が始まってからも、ティアは漫画に没頭していた。時々、笑いを堪えるように体を震わせる他はずっと大人しかったが、読み終わると途端にそわそわし始める。

そして一時限目が終わると同時に、ティアは俺の手を引っ張ってフィリルの席へ向かった。

「これ、ありがとう」

おずおずと貸してもらった漫画を差し出すティア。

「……どうだった?」

漫画を受け取ったフィリルに訊ねられると、ティアは頬を紅潮させて答える。

「すっごく面白かったの！こんな本、読んだの初めて！」

「……そう、よかった」

フィリルは表情を微かに緩ませた。

「でも、途中で終わっちゃったのが残念だったの……」

「……終わってないよ。続きも、読む？」

ティアがその言葉を聞いて、顔を輝かせる。

「ホント!? 続きがあるの? すっごく読みたいの!」

フィリルは机の中から同じ漫画の二巻目を取り出し、ティアに手渡す。

「……はい、二巻。三巻以降は寮の部屋にあるから……また明日持ってくるね」

「ありがとうっ！ えつと……フィリル？」

「……うん、どういたしまして」

初めて名前を呼ばれたフィリルは、柔らかく微笑んで頷いた。そこに、ティアたちの会話を聞き付けた他のクラスメイトたちが集まってくる。

「ああ、キミもその漫画読んだんだ。ボクもフィリルから貸してもらったけど、結構面白いよね。特にこの先、主人公が——むっっ」

「んっ!!」

アリエラがネタバレしそうになるのを、レンが口を塞いで止める。

「まったく……アリエラさんはもう少し、空気を読むことを覚えていただきたいですわね」

呆れた顔でリーザが言う。

そこからはティアを囲み、漫画という共通の話題で盛り上がる。最初は少し気後れした様子だったティアも、次第に熱を入れて語り始めた。

俺は蚊帳の外だが、不満はない。ティアが皆と言葉を交わしているのを見ているだけで、満足だった。

(拒絶するのを止めるだけで、こころも変わるなんてな)

ティアはまだ、積極的な行動は起こしていない。だが男である

俺が転入したときとは違い、リーザたちは進んでティアを受け入れようとしてくれている。

この分なら、すぐに皆と打ち解けられそうだ。

（というか、これを見ると俺や亮がどれだけ警戒されていたかってのが分かるな）

仕方ない事ではあるが、待遇の差に少し落ち込む。

そうして二時限目もティアは漫画を読んで過ごし、三時限目は体操服に着替え、演習場での実習授業となる。以前バジリスク戦のテストを行った広大な地下空間だ。

それぞれ得意分野が違うので、基本的に個人練習を行う時間なのだが、ティアはまず基礎的な訓練から始める必要があった。

「ティアさんの指導を、転入してまだ間もないモノノベ・ユウに任せてはおけません。ですから、わたくしが直々に教えて差し上げますわ」

他の皆が演習場に散らばって練習を始める中、リーザだけは俺たちに近づいてきて、自ら教師役を買って出してくれる。

「あ、ありがとうなの……リーザ」

漫画の件で少し言葉を交わしたおかげか、ティアはきちんと名前を口にして礼を言う。

「リーザ、よろしく頼む」

ティアから離れられない俺も、当然ながら一緒に授業を受けることになる。

「……あなたのことまで世話を焼くつもりはないのですが、仕方ありませんわね。まずは架空武装を作るコツから教えて差し上げますわ」

「かくうぶそう?」

きよとんとティアが首を傾げる。

「物質変換をより精密に、効率的に行うため、上位元素（ダークマター）で武器を象るのですわ。わたくしの架空武装は——この、”射抜く神槍”（グングニル）」

リーザが手を翳すと、金色の槍が虚空から出現する。上位元素



を生成してから形態を変えるのではなく、直接槍の形で上位元素を生成し出したらしい。よほど熟練していないと出来ない芸当だ。

「上位元素は、人の意志に強く影響を受けますわ。いわばこの槍は、わたくしが戦うときの心持ちそのもの。どのような敵であろうとも貫き屠る究極の槍——そこから放たれる攻撃も、当然最強！そうしたイメージの連鎖が、攻撃の威力をも増幅させるのですわ」

リーザは槍をぐっと構えてみせながら言う。

（戦うときの心持ち、か）

その説明はとてもしつくりきた。これから架空武装を作る際の参考になりそうだ。

「ただ、これは戦う前段階にすぎません。上位元素の形を変えることに拘ると、その時点で物質変換を起こしてしまいます。ですから丁寧に、上位元素ではなく、心の輪郭を象るイメージで、戦う自分自身を作り上げるのですわ」

「戦う自分自身……でも、ティアは槍とか剣とか、使ったことないので。だから何を武器にしたらいいのか、分からないの」

自分の掌を見つめながらティアは呟く。

「別に武術の経験など必要ありませんわ。ただ、今よりも強い自分を思い描けばいいんです。まず、上位元素を生成しながら、最強の力を手にした自分の姿をイメージしてみてください。そうすれば上位元素は自然と形態を変化させるはずですよ」

リーザは促され、ティアは頷く。

「うん……やってみるの！」

目を閉じ、集中を始めるティア。その周囲に、泡状の上位元素が無数に生成される。

だが俺は——この時点で気付くべきだったのだ。ティアが”どういふ少女”なのかということを引きちんと考えていれば、次に起こる事態は予測できたはずだった。

ティアの生成する（ダークマター）の一つ一つが寄り集まり、大きな塊になっていく。

「その調子ですわ。ゆっくり、慎重に、焦らなくてもいいですよ」

リーザはテイアの様子を見ながら声を掛けた。だが肥大化した上位元素の塊がテイアの体へと集まっていくのを見て、訝しげに眉を寄せた。

——俺は、全てが上手く行き始めていると思っていた。皆と打ち解け、そのうち教室や宿舎でなら俺と離れても大丈夫になるだろう樂觀していた。

しかし根本的な問題は何も解決してはいないのだ。

俺たちとテイアの決定的な差異は、まだ埋められていない。

テイアは自分を人間ではなく、”ドラゴン”だと思い込んでいる。

それが架空武装の生成において、どんな結果をもたらすのかを俺たちは考えていなかった。

真つ黒な上位元素の泡は、ついにはテイアの全身を包み込んだ。

「なっ……テイ、テイアさん？」

さらに大きくなる上位元素の塊を見て、リーザは一步後退する。俺は何が起こっているのか分からず、呆然とその光景を眺めていた。

テイアを中心にして風が吹き荒れ、巨大化を続ける上位元素が宙に浮く。

黒い球形だった上位元素の輪郭が歪み、形を変えていく。

頭上を覆うかのように広がる翼。長く伸びる尾。

数十メートルはある演習場の天井に届きそうなほどの体軀。

その姿は——まさしく竜。

肉体がドラゴン化してしまっただけではないらしく、輪郭は蜃気楼のように揺らめいている。

だが体の表面は僅かに物質変換を起こしており、竜の全身は紅に煌めいていた。

これがテイアこ架空武装なのだ、俺はそのときになってようやく悟る。

テイアがイメージした強い自分。最強の姿。

「……ティアア？」

上位元素を風に変換し、空中に浮かぶ紅の竜に俺は呼びかける。

竜の視線がこちらへ向く。

ルオオオオオオオン——！

甲高い鳴き声が演習場に響き渡り、その直後——周囲を薙ぎ払う電撃の嵐が巻き起こった。

## 暴走

少女は呆然と、白い灰の前に座り込んでいた。泣き声を上げず、涙をぼたぼたと零していた。

少女が幸せに暮らしていた家は完全に炭化し、床には溶けて丸く固まった窓ガラスの欠片が転がっている。

もうすぐ収穫の時期を迎えるはずだった畑は、燻って黒い煙は吐き出していた。

（やつと手に入れた幸せが……あの人がくれた幸せが、全部消えちゃった）

少女はそれがどうしようもなく悲しくて、ただ涙を流し続けた。

「悲しむ必要はないわ。だって”それ”は本物ではないんだもの」

そんな少女に、全ての元凶である炎の魔女が告げる。白い灰を冷たい瞳で見下ろし、煤けた外套を靡かせて、絶望する少女へと歩み寄る。

「本物じゃ……ない？」

意味が分からず、掠れた声で問い返す少女。辺りに満ちた熱気で、喉はからからに乾いていた。

「ええ、だってあなたは人間じゃないんだから。古びた偽物は全部捨て去って、本当の自分になりなさい。そうだ——私が新しい名前をあげる」

そう言っつて、魔女は少女の頭に手を乗せる。びくりと少女は体を竦ませた。

「あなたは今から、ティア。”ティアマト”のティア。かつてマルドウークに討たれた、銀竜の名よ。あなたには資質がある。きつと、その名前にふさわしい存在になれるわ」

人間ではないと言われ、ティアという名を授けられた少女は、

震えながら魔女に問う。

「……わたしは、なあに？」

「ティア、あなたは——」ドラゴン」よ」

少女の質問に、魔女は強い口調で答える。

「ドラゴン……」

「そう、そして私たちの母は、黒のヴリトラ。あなたは、まだ何も失っていないの。お母様は、今もずっと私たちを見守ってくれている」

少女は目を見開く。

「……ママが？」

「ええ、」ドラゴン」のティアは一人じゃない。お母様と、多くの姉妹がいるのだから。さあ、私と行きましょう」

埋めようのない孤独を抱えた少女は、魔女の囁きに縋り付くしかない。

たとえそれが、間違いだと分かっているも——。



”ドラゴン型の架空武装”を展開させたティアは、広大な地下演習場が狭い檻に見えてしまうほどの巨軀で宙に浮かび、破壊の嵐を周囲に撒き起こす。

無数の電撃は演習場の内壁を抉り、荒れ狂う風は俺たちの動きを封じる。

強風に煽られてバランスを崩したリーザの元に、雷が迸った。

「リーザっ！」

近くにいた俺は体ごとリーザにぶつかって、電撃から回避させる。顔面を柔らかな感触が包み込んだ。息が詰まって頭を動かすと、甘い香りが鼻腔を満たし、艶っぽい声が耳に届く。

「んっ……やっ……も、モノノベ・ユウ！ど、どど、どこを触って

いますの!？」

「あ……わ、悪い！」

リーザのふくよかな胸部に顔を埋めていたことに気づき、俺は慌てて離れる。

「ふ、普段なら容赦なく制裁していると場所ですわよ?けれども……今回は危ないところを救われたようですし、不問にしてさしあげます……ありがとうございます、ですわ」

顔を赤くして、ぼそつと小さな声で礼を言うリーザ。

「リーザから感謝されるなんて、今日は雨が降るかもな。つて……もう既に大嵐か」

俺は強風に飛ばされないうような体勢を低くしながら、台風の間目となつているティアを見上げた。

「……いったい、何が起こっていますの?あのドラゴンは、ティアさん……なんですわよね?」

「ああ、あれはきつとティアの架空武装だ。ティアが”心の輪郭”を象るようにして架空武装を作ったのなら……あいつは今、自分自身を完全にドラゴンだと思い込んでいるのかもしれない」

いきなり暴れ出した理由は、そう考えると説明が付く。

「で、でしたら早く正気に戻さないと!」

「そうだな——けど、どうやって近づくか……」

辺りには風と雷が吹き荒れ、ティアは数十メートル上空に浮いていた。

「モノノベ!」

ティアに接近する方法を考えていると、イリスの声が耳に届いた。同時に俺たちに吹き付けていた風が突然止む。

振り返ると、イリスとフィリル、そして亮の姿があった。三人は比較的近くで練習していたので、援護に来てくれたらしい。

フィリルは自分の上位元素(ダークマター)で形作った架空の書物(ネクロノミコン)を構えている。恐らく空気への物質変換を行い、風の結界を作り出しているのだろう。

暴風の圧力がなくなったことで周囲を見回す余裕ができる。

深月、レン、アリエラは、篠宮先生を囲んで遠くの壁際に集まっていた。見たところ、フィリルと同様に空気の生成で風を相殺しているのだろう。ここから離れすぎているため、連携は取れそうにない。

「……大丈夫？」

フィリルが俺たちに声を掛ける。

「ああ、平気だ。ただ……ティアがちよつと大変なことになったる」

「自分をドラゴンだと思い込んでいるのか。しかし、初めて架空武装を作る割にはかなり出来ているな」

亮はティアを見上げて感心している。

「感心してる場合ではありませんわ。何とかしてティアさんを……」

「分かっている。……っで？どうするっ？」

亮は俺に指示を聞いてきた。

「フィリルは、このままでできるだけ広範囲に風の結界を広げてくれ。イリスと亮は爆発を起こしてティアの注意を引いて欲しい」

「分かった、やってみる！」

「はいよ」

そう言っつてイリスは自分の架空武装——双翼の杖（ケリュケイオン）を生成し、亮は手のひらに気功波を作り出した。

「——モノノベ・ユウ。では、わたくしはティアさんのところに行きますわ」

リーザも射抜く神槍（グングニル）を構え、頭上のティアに目を向ける。

「いや、待ってくれ。ティアのところには俺が行った方がいい」

「それはそうかもしれませんが……あなた、空は飛べますの？」

不安そうな眼差しを向けるリーザ。風による飛行法は大量の空気を物質変換で作りに出す必要がある。

俺の上位元素生成量は皆と比べて著しく少ないため、その方法は使えない。だが——。

「あの高さに届けばいいだけなら、やりようはある。リーザは周

囲に避雷針を作って、電撃を誘導してくれ」

「……仕方ありませんわね。なら、任せましたわよ——  
聳えろ、鉄塔！」

リーザは射抜く神槍の穂先から、上位元素の塊を四つ撃ち放った。それらは空中で鉄針へと物質変換され、ティアのいる場所を囲むように地面へと突き刺さる。

出鱈目に放たれていた電撃が、四つの避雷針へと収束していく。

「オオシマ、あたしたちもっ！」

「ああ」

イリスは双翼の杖（ケリユケイオン）の先端をティアの方へ向け、集中を始めた。

「来たれ、来たれ、彼方の欠片……」

複数の黒い上位元素が、ティアを囲むように生成させる。

亮も無数の気功波をティアの周りに放つ。気功波はティアを囲むように宙に浮く。

「亮、ティアに怪我はさせるなよ」

「分かっている——くらえ！」

亮は宙に浮いている気功波を一斉に爆発させる。

「雨玉よ、散れ!!」

水の塊へと変換された上位元素が、一斉に弾け飛んだ。

イリスは”何を作っても爆発させてしまう”という特異な才能を持っている。空間認識力も高く、狙いは外さない。二人の起こす爆発は、ティアを直接傷つけることはなかった。

ルオオオオオオオオオオンツ!

ティアは爆発に驚き、上位元素で形作った太い竜の手足で、立ち込める水蒸気と気功波に攻撃する。だが、水蒸気と気功波に触れた手足の方が、逆に挟まれて消滅した。

削られた手足はすぐに復元するが、やはりあれは見せかけだけのドラゴンなのだ、俺は確認する。物質変換前の上位元素は、生成者以外に触れると消滅する脆いモノ。ならば内側にいるはずのティ



アに到達するのは、それほど難しくはない。

「フィリル、できる限りでいい……道を拓いてくれ！」

俺はそう言うと、ティアに向かって駆け出した。

「了解——エアールロード」

背後からフィリルの声が聞こえ、追い風が俺の背中を押す。フィリルの風は俺を追い越し、ティアから吹き付ける風を阻んでくれた。爆発に気を取られているティアは、俺の接近に気付いていない。走りながら俺は意識を集中し、自分の架空武装を生成する。

「ジークフリート」

右手の中に現れるのは、大口径の装飾銃を象った上位元素の塊。

この架空武装から上位元素を弾丸として放つことにより、俺は最大で三回だけ協力的な物質変換を行える。三回分を使い切れば架空武装は消え、もう一度生成するには大きな隙が生じてしまう。だから――。

(三発で、決める)

俺は足を止めぬまま上空のティアに銃口を向け、細かい狙いは付けずに引き金を引いた。

「白煙弾 (スモーク・ブリッド)」

放たれた弾丸が空中で細かな塵と空気に変換される。押し寄せる煙に包まれる紅のドラゴン。無数の塵が上位元素を削り、一瞬だけティアから竜の衣を剥ぎ取った。

(見えた！)

煙が暴風に吹き散らされると、再び上位元素の竜は復活してしまう。しかし俺の目はティアの位置を明確に捉えていた。

左胸……心臓の位置！

ティアの真下まで辿り着いた俺は足を止めると、今度は精密に狙いを付け、地面に向かって銃を撃つ。

「空圧弾 (エアールブリッド)」

大量の空気へと変換された上位元素は、地面に当たって弾け、俺の体を空へと吹き飛ばした。

そしてそのまま、ドラゴンの中へと突っ込む。視界が紅色に染まるが、感触や抵抗は全くない。存在しないに等しい変換前の上位元素は、俺を阻むことができないのだ。

「ティアっ！」

俺は声を上げながら、空いた左手を伸ばす。狙いは外していない。あとは高度さえ足りていれば、この手は届くはず――。

指先に微かな感触を覚えた直後、目の前にティアの姿が現れる。その瞳は虚ろで、何も映していなかった。やはり正気を失っている。

俺たちは……自分をドラゴンだと思い込むティアを、本物のドラゴンにする後押しをってしまったのかもしれない。

「しっかりしろ！ティアっ!!」

大声で叫びながら、俺は左腕でティアの体を抱き留める。

「……………え？ ユウ……………」

瞳に光が戻り、ティアは俺の名を呼んだ。

俺はティアを抱えたままドラゴンの体を突き抜け、落下へと転じる。

近づく地面を睨み、ジークフリートを下方へと向ける。これが、最後の一発。

「――空圧弾っ！」

空気の爆発で落下の衝撃を相殺する。ふわっと地面に降り立った俺は、すぐにティアの様子を確かめた。

「大丈夫か、ティア？」

「……………」

だが、先ほど我に返ったように見えたティアは返事をしない。脱力した体を俺に預け、気を失っている。

あれだけ巨大な架空武装を生成し、大規模な物質変換を続けたせいで、心身共に疲弊したのだろう。

「モノノベー！」

イリスやリーザが、こちらに駆け寄ってくる。遠くにいた深月たちも、俺たちの方に急いで近づいてきていた。

クラスメイトたちは皆、心配そうな表情を浮かべている。だがその中で篠宮先生だけは厳しい眼差しを俺たちに向けていた。

篠宮先生の顔つきを見て、もう猶予がないことを悟る。

俺はぐったりとした様子で眠るティアに視線を移し——彼女の心を侵している怪物（ドラゴン）と相対する決意を固めたのだ。た。

◇

ティアが暴れたことで演習場はボロボロになってしまったが、幸い怪我をした者はいなかった。

加えて亮や深月が必死に取り成したことで、ティアへのペナルティは一先ず保留された。

ただし篠宮先生には、次はないぞと釘を刺されてしまったが。

（演習場、補修しないと使えそうにないもんな）

俺はティアを背負って保健室へお向かいながら、床から天井まで電撃で損壊した演習場の様子を思い出す。

亮ならすぐに直せると言っていたが、もしみんなの前で力を使えば神であることがバレてしまう。俺はなんとか説得してやめるように頼んだ。

設備に大きな損害が出たせいで、今回の顛末はミッドガルの上層組織であるアスガルへ伝えざるを得ないだろう。もしこれ以上の被害を出せば、アスガルはティアに何らかの処分を下すに違いない。

（起きたら、ちゃんと話をしないとな）

ティアがミッドガルの一員に————本当の意味でクラスの仲間になるために、この子を”人間”にする必要がある。

静かな廊下を歩き、保健室の前までやって来る。ティアを運んでいると、転入したときのことを思い出す。

午後の実践演習でイリスが物質変換に失敗して、俺が保健室に

運んだのだ。

「失礼しまーす」

俺はガラガラと横開き扉を開くが、室内でさにいたのは何度かお世話になってる養護教諭ではなかった。

「……え？」

ポカンとした顔でこちらを見たのは、昨日言葉を交わした女子生徒——立川穂乃花。体操服の少女は椅子に座って上着を捲り上げ、脇腹の擦り傷を自分で消毒している。

「きゃっ?！」

穂乃花は捲っていた上着を元に戻し、俺に背を向けた。驚きのあまり棒立ちになっていた俺は、その悲鳴で我に返る。

「あ……その、悪かった！少し外で待ってるから」

俺はティアを背負ったまま扉を閉めようとするが、穂乃花は慌てた様子で声を上げた。

「ま、待ってください！背中ofティアさん、具合が悪いんでしょう？わ、私なら気にしませんから……どうぞ、中へ」

「……いいのか？じゃあ……お邪魔するぞ？」

他人の部屋に招かれた気分になりながら、俺は保健室に足を踏み入れる。まずは奥のベッドへ真っ直ぐ向かい、眠るティアを背中から降ろした。ベッドに優しく寝かせ、布団を被せてから、俺は穂乃花の方に向き直る。

「えっと、他に誰もいないみたいだけど……先生はどこに行っただ？」

「あ、先生なら医務室の方です。私より大きな怪我をした子がいて、その治療をしています」

「大きな怪我？何か、事故でもあったのか？」

穂乃花の腕や足には、いくつか絆創膏が貼られていた。俺が保健室に来る前、自分で処置をしたのだろう。

「……実は、実習中に私が物質変換を失敗してしまいました。それで、クラスメイトの方にも怪我をさせてしまいました」

それが医務室で手当てを受けているという生徒のことなのだ

ろう。

穂乃花たちのクラスは、俺たちとは別の演習場で実習授業を受けていたらしい。

「そっか、失敗は誰にでもあることだけど……人に怪我をさせたのは、しんどいな」

「はい……後で、きちんと謝ります。許してもらえるかは分かりませんが」

「そうだな。結果がどうなるにしても、それが一番だと思う」  
俺がそう言うと、穂乃花は苦笑を浮かべた。

「……悠さんは、下手な気休めは言わない方なんですな」

「悪い——励ますべきだっていうのは分かってるんだが」

「いえ、無責任なことを言う人よりも好感が持てますよ」

そんなことを言われると照れ臭くなってしまう。

俺がポリポリと頬を掻きながら、視線を逸らした。

「あの……ちよつと届かない箇所がありますので……もしよければ……手伝ってもらえませんか？」

「え？お、俺が？」

穂乃花の思いがけない言葉に、俺は目を丸くする。

「はい、背中……この部分だけで構わないので」

そうやって穂乃花は体操服の上着を少しだけ捲り上げた。

白い肌に目が惹き付けられる。

「まあ……君が気にしないのなら」

俺は戸惑いながらも彼女に近づく。応急処置に関してはニブルで一通り習っている。これぐらいの手当てなら気後れすることもない。

「じゃあ、消毒するぞ。本当にいいんだな？」

消毒液とガーゼを受け取り、彼女に念を入れる。後でセクハラ扱いになっては敵わない。

「お願いします。優しく……してくださいね」

「あ、ああ……分かった」

ごくんと唾を呑み込んで頷く。

俺は椅子に座る穂乃花の後ろにしゃがんで、手当てを始める。

「……っ、あん……」

沁みるのか、妙に色っぽい声を出す穂乃花。俺はできるだけ自分の気を逸らそうと、彼女に話かける。

「そういえば穂乃花は、バジリスクの進行方向上にある町で保護されたんだよな？ どう見ても日本人なのに、何でそんな場所にいたんだ？」

全校集会の時に感じた疑問を投げかけると、穂乃花は沁みるのを堪えながら答える。

「母が……んっ……世界を飛び回っている人で……あっ……私は母と一緒に、各地を転々としていたんです」

「すごいお母さんなんだな……いきなり引き離されて、寂しくないか？」

「いえ……私たち、結構ドライな関係でしたし。私には父や親戚がいないので……んっ……仕方なく一緒にいた面もあるんですよ。だからむしろ、自立できてホッとしています」

穂乃花の答えは淡々としていた。強がっているわけではないらしい。

「……しっかりしてるな。よし、終わったぞ」

丁寧に消毒した傷口に絆創膏を貼り、手当てを終える。

「ありがとうございます、悠さん」

上着を元に戻し、穂乃花は礼を言う。

「別に大したことはしてないさ。まあ……ちよつと照れ臭かったが、これからも友達を頼るのに、遠慮なんていらなからな」

「は、はい。よろしく……お願いします。で、では……私、クラスメイトの方の様子を見に医務室へ行ってみようと思います」

ぺこりと頭を下げ、少し慌てた様子で保健室の出口へ向かう穂乃花。

「ああ、それじゃあな」

俺が片手を上げて応じると、穂乃花は目を細めて微笑む。

「はい——また、お話できると嬉しいです。それでは……」

扉が閉まり、部屋が急に静まりかえる。

(また、か)

偶然顔を合わせるのを待つより、こちらからメールなどを  
すべきかもしれない。

ベッドの方に視線を向けると、ティアはまだすやすやと眠つて  
いた。

プルルルルルル——！

だがその時、保健室の内線モニターから電子音が鳴り響き、  
コールサインが点灯する。

「……出た方が、いいのか？」

迷いながら保健室の扉に目をやる。まだ養護教諭は戻ってき  
そうにない。

(俺に用事って可能性もあるか)

ティアを保健室に連れて行くことは、篠宮先生に伝えてある。  
もしかしたら俺に何か連絡事項があるのかもと思い、躊躇いつつもモ  
ニターの応答ボタンを押した。

軽い電子音が鳴り、画面が切り替わる。

だが、モニターに現れた顔は全く想定していなかった人物のも  
のだった。

『やあ、久しぶりだな。物部少尉』

「……ロキ少佐？」

ニブルにいた頃、直属の上官だった男の名前を口にする。

ロキ少佐は画面の向こうから切れ長の目で俺を見つめ、柔らか  
な笑みを浮かべた。

『先ほどまで、篠宮大佐と打ち合わせをしていてね。そのついで  
に、君のいるところへ回線を繋いで貰ったのさ。君が異動する際に  
は、言葉を交わす暇もなかったからな。ずっと話したいと思ってい  
んだ』

「え……？…話なら、この前も——」

『何を言っている？…なんだい、物部少尉。私が君と話すのは、ミッドガ  
ルに異動してから初めてだろうか？…』

それを聞いて俺は、これが公の回線であ？ことを思い出す。

リヴアイアサン侵攻の際、迎撃態勢に移った環状多重防衛機構（ミッドガルズオルム）の隙を突いて、ロキ少佐は俺の個人端末へ密かに連絡を入れてきた。それはミッドガル側に聞かれてはいけない話をするため。竜紋が変色した”D”の殺害を、俺に依頼するものだった。

「そう……でしたね。ロキ少佐の元で戦っていたのが、まだつい最近のことに思えて、勘違いしていました」

俺は仕方なく話を合わせる。下手な発言をして問題が発生すれば、それは俺を監督する深月の責任になってしまう。

『はは、私もだよ。もう部下ではないというのに、君のことが心配になってしまったね。少し、耳に入れておきたいことがあるんだ。聞いてくれるかな？』

「はい……何でしょうか？」

嘘臭いロキ少佐の笑顔を見ながら、俺は頷く。公の回線で言えることならば、以前ほど不穏な内容ではないはずだ。

『ドラゴン信奉者団体”ムスペルの子ら”が、ティア・ライトニングの奪回を画策しているらしい。ミッドガル側にも注意を促したが、君も気を付けてくれたまえ』

”ムスペルの子ら”……それはティアを事実上の軟禁状態に置いていた組織の名だ。彼らが”D”のドラゴン化について知っているのなら、ティアを取り返そうとするのも理解できる。しかし――

「奪回……このミッドガルからですか？近づいた瞬間、環状多重防衛機構に排除されると思いますが……」

『そうだな、ミッドガルの守りは堅牢だ。けれど物資や人員の行き来はある。厳重な検査があるとは言え、絶対ではない。それに今回は……間違いなくキーリも動く』

ロキ少佐はそこで初めて笑みを消す。

「あのキーリが……」

キーリ・スルト・ムスペル Heim。 ”ムスペルの子ら”のリー



ダー。災害指定された”D”……。環状多重防衛機構を突破できるとは思えないが、確かに大きな脅威ではある。

『キーリは強いぞ、物部少尉。今回”ムスペルの子ら”の施設に”D”がいるとの情報を得て、ニブルは可能な限りの戦力を投入したが——キーリ一人に大半が制圧されてしまったのだからな』

「な……」

初めて聞く情報に、俺は息を呑む。

『善戦したのは、私の部隊——スレイプニルだけだ。彼らがキーリを引きつけている間に、施設の裏手から脱出した武装車両を別働隊が確保した。運転手はバジリスクの元へティア・ライトニングを連れて行くよう命令されていたそうだ』

「じゃあ”ムスペルの子ら”は、”D”のドラゴン化について知った上で……」

『捕らえた団体員は詳細を聞いていなかったようだが、少なくともキーリは知っていると見るべきだな。ティア・ライトニングは他の施設から移送されたばかりだったらしい。バジリスクの来訪を待たず、自らの手でつがいを差し出すつもりだったのだろう』

つもりティアは、”生贄”として送られる途中だったというところか。昨日亮が言っていたのは本当のことだと知る。ほんの少しニブルの動きが遅ければ、既に二匹目のバジリスクが誕生していたに違いない。

「そこまでしてドラゴンを増やそうとしているのなら……確かに、このまま諦めるとは考えにくいですね」

『ああ、キーリは必ず何らかの行動に出るはずだ。もしもミッドガルに侵入を許した場合は、甚大な被害が予想される。くれぐれも気を抜かないでくれたまえ。スレイプニルで仕留め損なったことを考えると、彼女は恐らく今の君よりも強いだろうからな』

「っ……」

息を呑む。俺を誰よりも強い怪物に育てようとしたロキ少佐の言葉だからこそ、キーリという”D”がどれだけ異常な存在なのか伝わってきた。

『できればそちらにスレイプニルを送りたいところだが、ミッドガルはそう簡単にニブルの干渉を許してくれなくてね。ゆえに、万が一の時は物部少尉——君に期待する他はない』

「キーリは俺より強いのに……ですか?」

『ああ、それでも彼女を”殺せる”可能性があるのは君だけだ。もしも、君の傍に守りたいものがあるのなら——下らない拘りは捨てたまえ。それが私からの忠告だよ』

全てを見透かしたような眼差しを向け、ロキ少佐は言う。

「……憶えて、おきます」

心臓を鷲掴みにされた心地で、俺は声を絞り出した。

『そうしてくれると助かる。まあ、あくまで念のためではあるが、現在までの蓄積されたキーリのデータは、君の端末に全て送っておく。時間のあるときにでも目を通しておいてくれ』

「はい、色々と……ありがとうございます」

『気にするな、好きでやっていることさ。それと、バジリスクは未だアフリカ大陸を横断中だ。リヴアイアサンの時は急な事態にニブルも混乱していたが、今回は余裕がある。だから余計な心配はしなくて構わない』

ロキ少佐は含みを込めた口調で告げる。この前はイリスを殺すためにニブルから部隊が送られたが、今回はまだそういった動きがないことを示唆しているのだろう。

「……分かりました」

『あと、アスガルから聞いているよ。ドラゴンを圧倒する少年……大島亮というそうだね』

「っ!？」

ロキ少佐は亮の名前を出す。

『彼も脅威だ。もしかしたらキーリと繋がっている可能性もあると私は考えている』

「そんなことはありません。亮は俺たちの仲間です」

俺はロキ少佐の考えを否定する。あいつは神であるため、キーリと手を組むことはない。

『そうか……そこまで彼を信用している訳だね。しかし、用心に越したことはない。彼の監視を頼むよ。それでは、そろそろ失礼しよう。また、話せる機会があることを願っているよ——物部少尉』

口元を皮肉げに歪めて笑うロキ少佐。そして通信はプツンと途切れ、モニターはブラックアウトした。

「……………」

俺はブラックアウトしたモニターを眺めていた。亮の正体を知らせるわけにはいかない。たとえ知られても信じてはもらえないが、あいつの力を見れば、間違いなくニブルは亮を殺そうとする。

そうなれば亮は容赦なくニブルを壊滅させるだろう。創造と破壊を司る神。”世界神”。アスガルやニブル、ミッドガルでは特別な力を持った”D”となっている。

「ユウ……？」

何も映っていない画面を見ながら物思いに耽っていると、背後から声が聞こえた。

「ティア、起きたのか」

ロキ少佐と通信していた声で目覚めたのかもしれない。ティアはベッドの上で上半身を起こし、戸惑った顔で俺を見つめていた。

「どうして……ティアはこんなところにいるの？さつきまで、ユウたちと練習してたはずなのに……」

「——憶えていないんだな。そのことも含めて、これから少し話そう。ここじゃ何だし、砂浜に行かないか？」

俺がそう提案すると、ティアの表情が輝く。

「うんっ、またユウと一緒に海が見たい！」

その笑顔が曇ることを考えると心が痛んだが、俺は駆け寄ってきたティアの手を取った。

ドラゴンのお嫁さんと旦那さま。

きつともうすぐ——このチグハグなおままごとは終わるのだ。

## 選択

ティアちゃんが演習場を破壊してから少し時間が経ち、僕たちはその後始末をしていた。

今は保健室で休んでいるため、目覚めるまで時間がかかる。目を覚ました後は悠がティアちゃんを説得するだろう。人間として生きるか、ドラゴンとして生きるか。

僕は原作を知っているため、心配はしていない。必ずティアちゃんは人間として生きることを選ぶはずだ。

僕は杖で瓦礫を宙に浮かせ、一箇所に集めた。他のみんなも空気変換をして瓦礫を集めている。

「オオシマ、もうすぐ終わるね」

僕の近くにイリスさんが空気変換で瓦礫を集めている。

「そうだな。あとは演習場を元通りにするだけだけど、上位元素（ダークマター）を使うのか？」

「そうだね。時間はかかるけどこれが一番早い方法だからね」

”D”は上位元素を使って物資変換を行えるので、こういったことには便利だ。

僕なら杖で元に戻せるが、そんなことをすればみんなに怪しまれるため、力を隠しているが、これだとやりづらい。

やはり正体を明かすのが良いと思うが、それだと混乱を招くため、やめておく。

「ティアアちゃん、大丈夫かな？」

イリスさんがティアアちゃんのことを心配している。

この先、悠を巡って彼女と低レベルな争いをすることは知っている。そう考えると悠をからかうネタが増えるだろう。

ちなみにこんなことを考えてしまうようになったのは全て一部の”世界神”のせいである。

ブリュンヒルデ教室のクラスメイト以上に濃い性格のため、感染ってしまった。

「大丈夫だ。悠なら何とかしてくれる」

僕は悠を信じている。あいつのことはよく知っているので、信頼はある。

「そうだね、モノノベなら心配ないね」

イリスさんも悠のことを信頼している。いや、恋をしている。彼女は悠が学園に転入してから徐々に好意を抱いている。この後も彼女は悠を意識してしまうだろう。

「これで最後だな。じゃあ運ぶか」

「そうだね」

最後に残った瓦礫を浮かせ、僕たちは隅に集めた瓦礫のあるところに向かう。

そこには深月さんもいた。どうやら彼女も瓦礫を集め終わったようだ。

「亮さん、イリスさん、ありがとうございます。もうすぐ終わりますね」

深月さんは僕たちにお礼を言った。

「ああ、後は演習場を修復するだけだな」

僕は宙に浮かせた瓦礫を静かに置いた。みんなも瓦礫を浮かせて集まってきた。

「これで最後ですわ」

「そうだね……」

リーザさんとフィリルさんが一箇所に集めた瓦礫を置いた。

「ふう〜、何とか早く集まったね」

「ん」

アリエラさんとレンちゃんも集めた瓦礫を地面に置き、空気変換を解除した。

「皆さん、お疲れ様です。後は演習場を修復するだけです」

深月さんの言う通り、演習場を元通りにしないと明後日の授業には使えない。他の演習場を使うことはできるが、他のクラスも使うため、そのままにはできない。

「上位元素（ダークマター）で壁や床を修復すればいいだけだな」

「はい、では亮さん。後はお願いします」

「え？」

深月さんは演習場の修復を僕に頼んできた。

「深月さん？何で僕だけなの？」

僕は深月さんに聞いてみた。彼女は僕の正体を知っているため、他の生徒には隠している。もしここで力を使えば神であることがバレてしまう。

「亮さんなら一瞬で修復できますからお願いをしています」

深月さんは当然のように言ってきた。たしかに僕なら杖を使えば一瞬で修復できるが、そんなことをすれば怪しまれる。

「たしかにこれを使えば一瞬で修復できるけど、上位元素と体力の消費は激しいんだけど……」

僕は嘘を吐いた。上位元素と体力は一切使わないが、それでも言わないとみんなに怪しまれるため、出鱈目なことを言う。

「あなたなら大丈夫です。皆さんにこれ以上手を煩わせるわけにはいきません」

「そのみんなの中に僕も含んでるんだけど……」

僕は深月さんにつっこんだ。

「亮さん？私はあなたの弱みを握っているんですよ？」

「弱みだと？」

深月さんは僕の弱みを握っていると言うが、まさか神であることをみんなに言いふらすとか言い出すかもしれない。

「あなたの正体を皆さんにバラしますよ？」

やっぱりそうだったか。しかし、よく考えると、バレても問題は無いと思う。バレたとしても、生活に支障は無い。みんなは驚くだろうが、ドラゴンを倒して信頼を得れば心配はない。

「別にいいよ？僕はバレても問題は無いから」

僕は堂々として深月に言った。

「本当にいいんですか？」

「ああ、構わないよ」

深月さんはもう一度聞いてきたが、僕は余裕に返事をした。

「……仕方ありません」

深月さんは僕の態度を見て、ポケットから紙を取り出した。

「ん？何その紙は？」

僕は深月さんが取り出した紙について聞く。

「実は今朝、全王さんという方から連絡がありました」

「え!？」

僕は深月の言葉から全王様の名前を聞いて驚いた。

「ぜぜぜぜ全王様から!？」

僕は焦って聞き返した。

「え、ええ、お知り合いのようですね。亮さんのことが心配で連絡してきたそうです」

深月さんは少し驚いた様子だった。たぶん全王様が世界一偉い神様であることを知らないだろうが、名前を知っているということ  
は本当に今朝、深月さんと連絡を取ったのだろう。

深月さんから、全王様の名前が出るとは思っていなかった。顔から大量の汗が出ていることに気付いていなかった。

「ぜんおうさま？何それ？」

「わたくしも初めて聞く名前ですわ」

「私も。だけど……」

「あの大島クンがあんなに怯えてるなんて……」

「ん」

イリスさんたちは僕が動揺している姿に状況を呆然と立ち尽くしていた。

「何故全王様があんたに？」

僕は驚きながら聞いた。

「ですから、亮さんが心配で連絡してきたそうです。もし言うことを聞かない時はあなたの弱みを言えば大丈夫だとおっしゃっていました。それでも言うことを聞かないならその方に報告すればいいとのことですよ」

「そっ………そんな、ぜっ………全王様が………」

僕は動揺した。まさか全王様がそんなことを言ってくるとは思いませんでした。もし全王様のご機嫌を損ねれば、十二の世界全て

を消すだろう。

それにあの紙は僕の弱みが書かれているのだろう。字を見ると神の言語で書かれているため、深月さんも内容は知らない筈だ。

しかしよく見ると、神の言語には出鱈目な文章のため、もしかしたら自分の名前を出せば、僕が言うことを聞くと考えたのだろう。

「わっ、分かった！演習場はすぐに修復するから。頼むから全王様にだけは報告しないでくれ！この通りだ！」

僕は頭を下げてお願いした。全王様が関わっていれば、動揺するのもし方ない。……ビルスとシャンパの気持ちがよく分かる。

「で、ではすぐにお願ひします」

深月さんはこんなに動揺するとは思っていなかったような表情で僕に指示を出した。

「りよ、理解！」

僕は杖の先端を演習場に向け、青く小さい光を大量に撒き散らした。

すると演習場は一瞬で元通りになった。抉られた部分も何事もなく修復していた。

「「「「「おおく」」」」」

みんなは僕の力を見て驚いた。一瞬で元通りにしたのだから、驚くのは無理もない。

「ふう〜終わった……。これで大丈夫だ」

僕は杖をしまい、一気に力が抜ける。

「お疲れ様です。瓦礫はこちらでなんとかします。それで、全王さんとはいっ。」

深月さんは全王様のことを聞いてきた。

「全王さんではない。全王様だ」

僕は様付けをするように警告する。

「いいか？全王様には絶対に粗相がないように。あの方の機嫌を損ねればまずいことが起きる。たとえアスガルやニブルを敵に回すことがあっても、全王様だけは絶対に刃向かうなよ」

「わっ、分かりました」



僕は深月に詰め寄り忠告すると、深月さんもたじろいた。イリスさんたちも僕の焦った状態を見て呆然としていた。

「……いろんな意味で疲れたよ。もう授業はないんだっけ？」

「はい、もう解散しても大丈夫だそうです」

ティアちゃんが暴走して、午後の授業が無くなったのでこれで宿舎に帰れる。今日はすぐに帰って寝ようと思った。

プルルルルルル——！

すると深月さんのポケットから個人端末が鳴り出した。

「兄さんですか？……はい……え？……分かりました。伝えておきます。では」

深月さんは通信を切った。どうやら悠から連絡があったようだ。多分原作でのあのことだろう。

「皆さん、ティアさんが目を覚ましました」



俺とティアは一旦教室に戻り、制服に着替えてから、鞆を持って学園を出る。

他の皆はまだ演習場の後始末に追われているのか、教室に姿は見えなかった。

午後の実習も演習場の破損で中止になったため、今日の授業はもうない。俺たちは昨日と同じように宿舎への道を歩き、砂浜へと降りて靴を脱ぐ。

「わぁー、昨日より海の中がよく見える気がするの！」

波打ち際でティアは海を覗き込み、笑みを浮かべてはしゃぐ。昨日訪れたのは夕方だったので、昼の海とはまた印象が違うのだから。

白い飛沫を上げて寄せるさざ波が、俺たちの足首を撫でていく。

足の裏で波を叩くティアを見ながら、俺は静かに問いかけた。

「なあ、ティア。昨日よりも、リーザたちのことは好きになれたか？」

「う……うん、いい人たちだったというのは、分かったかも」

少し照れ臭そうに答えるティア。フィリルの漫画がきつかりなり、皆と言葉を交わしたことで、昨日までであった警戒心は多少薄れているようだ。

「でもな、さつきティアは……リーザに怪我をさせてしまうところだったんだぞ？」

「……え？」

ティアは目を丸くし、驚きの表情を浮かべた。

「架空武装を作ろうとしたティアは、ドラゴンの姿になって暴れ回ったんだ。暴風と雷撃で演習場は滅茶苦茶になった」

「そ、そんな……ティア、そんなこと——」

震える声で首を横に振るティア。

「わざとじゃないのは分かってる。あの時のティアは、正気を失くしていた。でも、リーザたちを危ない目に遭わせた事実が変わらない。だからティアには皆に謝って、もう二度と同じことはしないと約束して欲しいんだ」

俺は身を屈め、ティアと視線を合わせて言う。

「わ、分かった！ティア、謝るの！早くみんなのところに行こつ！」

焦った様子で、ティアは俺の腕を引っ張る。先ほど、保健室で会った穂乃花と同じように、ティアは失敗を悔やんでいるようだ。た。

「……やっぱり、ティアは良い子だな。でも、今のままだとティアはその約束を守れない。たぶん同じ失敗をまた繰り返す。自分を——ドラゴンだと思いついてる限り」

「え……思い込むって、何？ティアは、本当にドラゴンなの。ユウたちも、ドラゴンなんだよ？」

きよとんとした顔で問い返すが、その瞳はわずかに揺れている。

た。

「いや、俺たちは人間だ」

「どうして……ユウまでそんな意地悪を言うの？ ティアたちはドラゴンなの！ こんな力を持っているのが、証拠なのっ！」

ティアの周囲に上位元素が生成され、電気へと変換される。バチツと目の前で火花が散った。しかし俺は怯まず、ティアの瞳を正面から見つめる。

「確かに、そういう見方もあるかもしれない。だったら言い方を変えよう。少なくともミッドガルで暮らす”D”たちは皆、人間として生きているんだ」

「人間……として？」

「ああ、だからティアが”ドラゴン”として生きる限り、共存はできない」

ティアの目が大きく見開かれる。

「それって……一緒に、いられないってこと？」

「そうだ。だから俺はティアに……人間になつて欲しい」

俺はティアがブリュンヒルデ教室の家族となるために必要な、唯一の条件を口にする。

「無理なの……だつてティア、ドラゴンなの……こんな角だつて、あるんだもん。絶対に、もう、人間じゃないの……」

赤い角に手をやり、俺の言葉を拒絶するティア。

「角があつても関係ない。俺にとって、ティアは可愛い女の子だ。たぶんリーザたちにとつても、同じだと思っぞ」

「でも、でもっ……」

優しく語りかけるが、ティアは何度もかぶりを振る。

「ティアはどうしてそんなに、ドラゴンでいたいんだ？ あの戦場で別れてから、何があつたのか教えてくれ。一緒にいた両親はどこへ行つたんだ？」

「パパとママは、いないの。あの人たちは……偽物だつたの」

ティアは表情を固くして俯く。

「だったら、偽物のパパとママのことを聞かせて欲しい」

俺はティアの頬に手を当て、ゆつくりと上を向かせた。至近距離で視線が交わる。

しばらく沈黙が続き、波の音だけが規則的に響く。

ティアの赤い瞳が潤み、頬に朱が差す。

「……ユウは、そんなにティアのこと、知りたいの？」

「ああ、これからも一緒にいたいから、知りたいんだ」

俺がそう答えると、ティアはごくりと唾を呑み込み、ぽつりぽつりと話し始めた。

「……ユウに助けられた後、ティアはあの人たちと一緒に、別の国で暮らしてたの」

あの人たちというのは、両親のことなのだろう。決してパパとママとは呼ばずに、ティアは瞳に涙を浮かべながら言葉を続ける。

「あの人たちは前より優しくなって、ティアが力を使わなくても笑ってくれるようになったの。外で畑仕事をするのはしんどかったけど、ちよつとだけ楽しかった。だけど全部……家も、畑も、あの人たちも……ある日突然、燃えて消えちゃったの」

「燃えてって……火事に遭ったのか？」

「ううん、違うの。ティアが会ったのは——キーリ」

「……っ」

その名を聞いて表情が強張る。

(ここでも、キーリの名を聞くなんて)

ティアは“ムスペルの子ら”に囚われていた。組織のリーダーであるキーリと接点があってもおかしくないが、まさかティアから家と両親を奪った相手だったとは。

「キーリは、ティアに言ったの。あの人たちは本物じゃない。だからは何も失くしてないんだって。ティアはドラゴンで、本当のママ——”黒”のヴリトラがいて、世界中にたくさん”D”が……姉妹がいるんだって教えてくれたの」

それを聞き、俺はやつとティアが“何から逃げているのか”を理解した。

ティアは両親の死から目を背けるため、キーリの言葉にすがつ

てしまったのだろう。

自分を人間だと認めれば、両親を失った現実を受け入れなければならぬ。そんな状況のティアに、普通の説得が通じるはずがない。理屈で諭せるわけもない。もしかしたら最初から自分はドラゴンだと疑問に思っていたのかもしれない。

「聞かせてくれてありがとう、ティア」

俺は礼を言って、ティアの頭を撫でる。

「ユウはティアのこと……分かってくれた？」

「ああ……よく分かったよ。ティアの考えが間違っているとは、もう言わない」

「よかったの……」

ほっとした顔をするティアだが、俺はさらに言葉を続けた。

「でも、キーリが口にした言葉は訂正させてくれ。ティアがドラゴンとして生きる限り、人間として生きる”D”とは姉妹になれない。俺やリーザたちと家族にはなれないんだ」

「え——？」

涙を拭こうとしていたティアの表情が一瞬で凍りつく。

「ズルい言い方かもしれないけど、今のままじゃ手に入らないものがあることを、分かってくれ。俺は、ティアに人間であることを選んで欲しいんだよ」

ティアの考えを否定することはできない。無理に現実を突き付けても、受け入れる覚悟がなければ心は壊れてしまう。だから得る物、失う物を提示した上でティア自身に選んでもらうしかなかった。

「選ぶ……？ユウの言っていること……よく、分からないの」

「……そうだな、確かに言葉だけじゃ上手く伝えられないな。だったら、見せてやる。ティアが人間になれることで、手に入れるものを」

俺はそう言うと、鞆から個人端末を取り出す。

「何するの？」

不安そうに問いかけてくるティアに、俺は笑みを返した。

「まだ日も高いからな。もう授業もないし、これから皆で遊ぼう。たぶんティアのためだって言えば、クラスメイト全員集まってくれただろ」

「どうして……？ティア、みんなにひどいことしたんじゃないの？リーザ、怒ってないの？」

「たえ怒っていたとしても、来てくれるさ。皆、ティアと家族になりたがってるからな」

俺の返事を聞いたティアは、微かに目を見開いき、しばらく呆然と立ち尽くしていた。

## ビーチ

イリスと深月にメールをして他の皆へ言伝を頼んだ後、俺たちは宿舎へ戻り、水着に着替えた。深月から来た返信によると、皆あと一時間ぐらいしたら来るらしい。

宿舎の物置部屋に海水浴用アイテム一式があると聞き、俺とティアは手分けしてビーチパラソルやシートを運び出す。

「ティア、みんなに迷惑かけちゃったみたいだし、頑張るの」  
スクール水着姿のティアは、丸めた大きめのシートをふらつきながらも一所懸命に運んでいた。

一通り準備が終わり、浅瀬でティアに軽く泳ぎを教えていると、早速一人目のクラスメイトが現れた。

「モノノベっ！」

手を振りながら砂浜を走ってくるのはイリス。彼女は白いビキニを身に着けており、形のいい胸が一步ごとにポヨンポヨンと弾んでいる。

「おお……」

紐で留めてある水着が外れてしまわないか、ハラハラする。

イリスは俺たちの前までやってきて、くるんと一回転してみせた。長い銀髪が翻る。太陽の光を浴びた白い肌が、とても眩しい。

「どう？　前のは失くしちゃったから、新しく買ったんだっ」

「……すごく似合ってる。そういえばイリスと初めて会った時、水着を流されたって言ってたな」

イリスとの出会いを思い出しながら言う。そのおかげ——じゃないなくて、そのせいで俺はイリスの裸を見て攻撃される羽目になったのだ。

「うん、結局見つからなくて——つて、あ、あの時のことはあんまり思い出さないですよ。恥ずかしい……」

頬を染め、腕で胸を隠すイリス。だが、そんなポーズをされると余計に意識してしまう。俺は白い水着姿のイリスにしばし見惚れ、ぽつりと呟く。

「——やっぱりイリスは、本当に綺麗だな」

あの時も今も、そんなことを自然に言えてしまうぐらい、イリスは美しかった。

「な……なななななっ……いい、いきなりそんなこと言われたら、あたし……」

首筋まで赤くして、イリスはぺたりと砂浜に座り込んだ。

「お、おい、大丈夫か?」

心配して手を伸ばすが、それを阻むようにティアが俺の前へ回り込んでくる。

「ユウ、ティアは? ティアはどう?」

「ん? ああ、ティアは可愛いよ」

俺は正直に答えるが、何故かティアは頬を膨らませ、悔しげな表情でイリスを睨む。

「やっと……分かったの。あなたは——イリスは、ティアのライバルなのっ!」

びしっと指を突きつけられたイリスは、きよとんと首を傾げた。

「ライバル? あたしとティアちゃんか?」

「そうなの、ティア……あなただけは負けないの!」

「よく分からないけど、ティアちゃんは何か勝負がしたいの? じゃあ……そうだ、棒倒ししよっか?」

イリスは笑顔になると、砂を集めて小さな山を作り始める。

「棒倒し?」

「うん、こうやって砂で山を作って……上に棒を刺して、順番に山を崩していくんだ。それで先に棒を倒しちゃった方が負けてゲーム」

波打ち際に落ちていた小枝を砂山の天辺に突き刺し、イリスはルールを説明する。

「わ、分かったの。この決闘……受けて立つの」

真剣な表情で頷き、イリスと棒倒しを始めるティア。

何となく根本的ところで話がズレているように思えたが、俺



は口を挟まず二人のゲームを見守る。

そこにリーザ、フィリル、アリエラ、レンの四人もやってきた。「あなたに水着姿を見せるのは不本意ですが、来てあげましたわよ」

大人っぽい黒い水着を着たリーザは、金色の髪をかき上げて俺に言う。

「……それにしても、気合いを入れて水着を選んだような気がするけど」

そんなリーザにフィリルがぼそっとツツコむ。彼女は青いセパレートタイプの水着を身に着けている。

「ひ、日焼け対策が面倒であまり海には行きませんかから、どの水着を着るか迷っていただけですわ！ 別に……モノノベ・ユウやオシマ・リヨウの目を気にしていたわけではないですよ？」

リーザは慌ててフィリルに詰め寄る。

二人ともイリス以上に胸が豊かで、双丘の谷間が水着から覗いている。普段は制服の下に隠されている圧倒的な質量が、俺の脳髓をぐらぐらと揺らす。

「はは——相変わらずリーザは素直じゃないね。男性の目があるんだから、誰だつて多少は意識するものだと思うよ」

苦笑しながら言うのは、トロピカルな柄の水着を着たアリエラだ。その後ろにはフリル付きのワンピース水着を着たレンが隠れている。

「……ん」

まるで小動物のように俺へ警戒の眼差しを向けるレン。ここまで意識されると、さすがに居心地が悪い。

「えっと……皆、水着似合ってると思うぞ」

微妙に緊張した空気を緩めるため、俺は感想を述べる。嘘ではない。ブリュンヒルデ教室の女子生徒たちは、客観的に見てとても魅力的なのだ……目のやり場に困るほどに。

「と、当然ですわ！ そんなこと、あなたに言われなくても分かっています」

リーザは顔をツンと逸らして答える。

「……ありがとう」

フィリルは表情を変えぬまま礼を言う。

「ぼ、ボクにはその……お世辞はいらないよ」

普段は冷静で論理的なのに、褒められると余裕を失くすアリエラは、そわそわと視線を彷徨わせる。

「……………んう」

恥ずかしがり屋のレンは、顔を赤くして完全にアリエラの後ろへ姿を隠してしまった。

「——兄さん、今のはセクハラぎりぎりですよ」

リーザたちの方から姿を現した深月が、俺をジド目で睨む。

一度宿舎に戻っていたらしく、手には膨らませたビーチボールを持っていた。

「なっ!? 今のがセクハラになるのか? 感想を言ったただけぞ?」

「場合によりけりです。レンさんがこんなに恥ずかしがっているのですから、セクハラと言われても文句は言えません」

「じゃあ……深月の水着については、何も触れない方がいいんだな?」

俺は、妹の水着を眺め回しながら言う。ワンピースタイプではあるが、背中部分が大胆に開いていて、後ろから見ると結構際どい。「……………いえ、私は別に兄さんの言葉で羞恥心を覚えたりはしませんし、お好きにしてもらって構いませんよ」

深月は不自然な魔を置いてから、ぶつきら棒に答える。

「そうか? だったら言うけど——よく似合ってる。あと、背中がちよつとエロいな」

「……………」

深月は眼差しを鋭くし、無言で俺の耳を引っ張った。

「ちよつ……………痛い! 痛いぞー!」

「……………兄さん、たとえば妹相手でも、もう少し言葉を選ぶべきだと思います」

「いや、好きにしていって言っただろ!？」

「……いくらなんでもそれはないだろ」

俺は文句を言うと、最後に姿を現した亮が不機嫌そうな表情でやってきた。

右胸にはイリスたちと同じ大きさの竜紋があった。おそらく”D”と証明するために作ったのだろう。

「悠、妹相手に背中がエロいなって言うのはどうかと思うぞ？」

「あ、ああ、それもそうだな。……ところで亮、なんでそんなに不機嫌なんだ？」

俺は理由が分からないので聞いてみた。

「さっき演習場の後始末でちよつとあったんだよ」

「何があつたんだ？」

「それを聞かないでくれ」

そう言つて亮はさらに不機嫌になり、顔を逸らした。

「大島クン、動揺してたもんね」

アリエラは面白そうに言った。

「……たしかに彼のあの表情は初めて見たよ」

「ん」

「頼む、それ以上はやめてくれ」

フィリルとレンの言葉に反応した亮はやめるように言う。

「たしか全王さんって名前に動揺してましたね」

「っ!？」

すると亮は深月の言葉に反応して、顔を青ざめた。

「全王？」

俺は全王と言う言葉を呟いた。全王って何のことだ？

「ななな、何でもない！　　気にするな！」

亮は慌てた様子で俺に言ってきた。

「わ、分かった」

亮がこれほどまでに動揺する姿を初めてみた。普段は堂々としている彼だが、全王という名前を聞いただけでこんな状態だ。もしかしたら、神々の中ではかなり偉いかもしれない。

そう思っていると、突然ティアの大声が響いた。

「ああーっ！ た、倒れちゃダメなの！」

驚いてティアたちの方へ目をやると、不安定な形になった砂山が棒と共に崩れていくのが見えた。

「ふふんっ、あたしの勝ちっ！」

ガッツポーズをするイリス。ティアががつくり肩を落とすが、すぐに顔を上げて再挑戦を申し込む。

「もう一回！ もう一回なの！」

「いいよ、何度だって挑戦は受けてあげる。でも皆も来たから、今度は別の遊びで勝負しようよ」

そう言っつてイリスはリーザたちを視線で示す。

「あ……」

そこで初めてティアは皆が集まっていたことに気付いたようだった。

膝に付いた砂を払って立ち上がり、緊張した面持ちでリーザの表情を窺うティア。

「どうしましたの？ わたくしの顔に、何か付いていますか？」

リーザは不思議そうに問いかける。ティアに対する怒りなど全く感じられない。

それを見たティアは目尻に涙を浮かべ、勢いよく頭を下げた。

「ご、ごめんなさいなの！ ティア……リーザに、ひどいことしたってユウから聞いて……だ、だから……ごめんなさい!!」

「ああ、先ほどのことを気にしていたんですね」

特心がいった様子でリーザは頷き、ティアに歩み寄る。

「……リーザ？」

ティアは少し怯えた表情を浮かべ、リーザの顔を見上げた。

「分かりましたわ。では、お仕置きしてさしあげます」

そう言うところリーザはおもむろに腕を持ち上げ、ティアの頭をコ

ツンと叩いた。

「はうつ」

頭を押さえて蹲るティア。

「お、おいリーザ、何もそこまで……実は怒っていたのか？」

俺が慌てて声を掛けると、リーザは首を横に振る。

「いいえ、全く怒ってなどいませんわ。ですが……償いを求めている方には罰が必要なのです。罪の意識に潰されてしまう前に、清算してあげなければ」

リーザは何故か深月に一瞬だけ視線を向け、落ち着いた声音で答える。

「痛い……………」

ティアは拳骨を落とされた場所を手でさすりながら、涙目でリーザを見上げた。

「当然ですわね、罰は痛いものです。けれど、これでティアさんは罪を償いました。もう先ほどのことを気に病む必要はありませんわ。わたくしも、皆も、気にしません。そうですわよね？」

皆にリーザが同意すると、全員が頷く。

「…………と、いうわけです」

リーザは優しく微笑んで、ティアを胸元へ抱き寄せる。

「むぎゅつ……………」

「加減したつもりだったのですが、まだ痛みますか？少し強すぎたかもしれませんわね」

ティアの頭を撫でて、心配するリーザ。

「…………ううん。もう、大丈夫なの。リーザ……ありがとう」

豊かな双丘に顔を埋めたティアは、小声で礼を言った。

「それじゃ、仲直りも終わったみたいだし、皆でビーチバレーしようよー」

状況が一段落したのを見て、イリスが元気よく声をあげる。

「別に喧嘩をしていたわけではないのですが……まあ、いいですわ」

リーザは溜息を吐きながらも頷き、抱きしめていたティアを解

放した。

「……何だか、ママみたいだったの」

どこかぼうつとした顔でティアは呟く。

「それでは輪になってトスを上げましょうか。あ、兄さんと亮さんは自分の名前が呼ばれたら、どんなところにボールが上がっても取りに行ってくださいね。落としたら罰ゲームです」

ビーチボールを持っている深月が、さらつととんでもないルールを付け足す。

「お、おい、どうして俺たちだけそんな縛りがあるんだよ!」

「兄さんはニブルで厳しい訓練を積んでいますし、亮さんも運動神経はいいので、これぐらいのハンデがないと緊張感が出ないでしょう?」

恐らくまだ、水着の感想を根に持っているのだろう。深月は尖った口調で言う。

「別に緊張感とかいらさないんだけど……分かったよ、それでやってやる」

「仕方ないな」

正直言うとうと自信はあったので、あえて挑発に乗り、俺たちはそのルールを受け入れる。

だがその見込みが甘かったことを、俺はすぐに思い知るのだった。



「ああ……一番星だ」

俺は砂に埋まりながら、赤く染まる空を見上げる。太陽は西の水平線に近づき、東の空は夜の紺色が広がり始めていた。

体がひどく重い。

ビーチバレーでは皆が面白がって俺と亮を散々走り回らせた

ので、さすがに体力は限界だった。その上、リーザやフィリルの胸がボール以上に弾むものだから、なかなか集中もできず、亮は余裕だったが、俺は結局最後の最後でボールを落としてしまった。その罰ゲームとして俺は砂に埋められ、身動きできないまま皆の声を遠くに聞いている。

「そうそう、上手いですわ。ずいぶん泳げるようになりましたわね」

「ホント？ ティア、泳げてる？」

リーザとティアの会話が耳に届く。あの二人はずいぶんと仲良くなったようだ。

「あれっ!? あたしの水着……水着どこっ!?」

またもや水着を失くしたのか、イリスの慌てた声が聞こえてくる。しかし体を起こさないの、その様子は見られない。

「……イリスさん、しっかりしてください。これですよね？」

深月の呆れた声が聞こえた。どうやらイリスの水着は深月が見つけたらしい。

近くからパラパラとページをめくる音が響く。

フィリルがパラソルの下で本を読んでいるのだ。

その近くには亮が寝ている。

「——それじゃあ、次はレンの番だね」  
「ん」

そしてアリエラとレンは、俺の上に作った砂山で棒倒しをした。いた。

徐々に砂が軽くなっていくのは、助かるが、何となく間接的に体を撫でられているようでムズムズしてしまう。

そうして平和で穏やかな時間が過ぎ、空が星でいっぱいになった頃——俺は三人分の足音が近づいてくることに気が付いた。二ブルにいた頃の癖で、足音から相手の体格を推測する。

（大人が二人、子供が一人……何か重い荷物を持つてるな）

顔だけを動かし、足音の主が視界に入るのを待つ。

現れたのは、三人とも知っている人物だった。一人は篠宮先生

で、あと二人はなんと……シャルロット・B・ロード学園長と秘書のマイカ・スチュアートさんだ。

子供だと思ったのは学園長の足音だったらしい。白いワンピース姿の学園長は、ミッドガルの生徒だと言われても全く違和感がない年齢不詳ぶりだった。

「ずいぶん楽しそうなことをしているではないか。私も混ぜろ」  
俺の傍までやってきた学園長は、砂に埋まった俺を見下ろしている。恐らく深月は、ここへ来る前に篠宮先生へ事情を説明していたのだろう。それが学園長たちの耳にも入ったに違いない。

「……学園長も、埋まりたいんですか？」

「違うわっ！ 私も水着姿の清らかな乙女たちと、キャツキヤツウフフしたいのだ」

「何だかその表現に、年代の差を感じます」

思ったことそのまま述べると、学園長はサンダルを脱いで俺の頭をつま先でぐりくりする。

「黙れ、踏むぞ」

「もう踏んでますって！」

俺は学園長の素足から逃れるように顔を動かしながら叫ぶ。

そんな俺たちのやり取りを、近くにいたレンとアリエラは呆然と眺めていた。

次第に深月たちも何事かと思いついてくる。

突然学園長が現れて戸惑っているのだろう。

「ふん、まあタダで混ぜろとは言わん。土産なら持ってきた。マイカ、ハルカ、準備を始めろ」

「はい、分かりました」

相変わらずメイド服姿のマイカさんは、手早く両腕に抱えているものを組み立て始める。

「……私は、あなたの召し使いではないんですがね」

篠宮先生も溜息を吐きながら持っていた袋をシートの上に置き、中から肉や野菜を取り出した。

「学園長……いったい何を？」



俺が問いかけると、学園長はにやりと笑う。

「見て分からねか？　　夜の海と言えば、バーベキューに決まっておろう！」

「バーベキュー!?　　やったーっ!!」

イリスが歓声を上げる。

「いいぞ、流石だ。やはりあんたはただの変人のおばさんじゃー

——」  
「くらえっ!!」

亮が言い終わる前に学園長は蹴りを入れた。

「……あんた、よくもやったな」

亮は怒った表示で学園長を睨む。

「これ以上歳のことを言ったら許さんぞ?」

学園長も亮を睨む。

「ほう、僕とやるつもりか?　　この場で破壊するぞ?」

「やれるものならやってみろ!」

亮と学園長のやり取りに俺たちは呆然と眺めていた。

ようやく砂の縛めから解放された俺は、皆と網を囲む。

「ぐふふ……」

学園長は肉だけを運びながら、水着姿の少女たちを邪な眼差し

で眺めていた。

「学園長、その表情で食べるのをやめてくれます?」

亮は学園長の表情を見て嫌そうに言うと、学園長は真剣な顔で

亮に答えた。

「私がどんな顔で食べようと私の勝手だ。そなたに言われる筋合いはない」

そう言って学園長は再びいやらしい目つきで深月たちを見た。

「まさか学園長は、本当に皆の水着を見るのが目的だったんですか?」

俺は呆れながら問いかける。

「もちろんそうだが、何か問題でも？」

「……いや、色々問題はあると思いますが」

堂々と頷く学園長を見て、溜息を吐く。

「ふん、まあ一番の目的は水着鑑賞なのは確かだが……あれの様子を見るためという理由もあるさ」

学園長は網を挟んで向かいにいるティアに視線を向け、小声で言った。

「ティアは……たぶん、大丈夫です。きっと、人間であることを選んでくれるはずですよ」

「ああ、いつかそうなるさ」

俺と亮も囁くように答える。

「ちよつとティアさん、野菜も食べないといけませんわよ？」

「あーっ、ピーマン載せちゃダメなの！」

リーザにピーマンを取り皿へ載せられて、慌てふためくティア。その様子を見てみると、大丈夫だと思えてくる。

「選ぶ……か。そうだな、あれがたとえ本物のドラゴンでも、人間として生きるのなら人間になれよう。生き方とは……在り様よりも尊いものだと、私は信じている」

学園長は目を細め、まるで祈るように呟いた。

「……学園長？」

「ふふ、柄にもないことを口にしてしまったな。それより、例の傷はどうなった？」

「傷？　あ、左手のやつですか……いや、もう治ってはいるんですが、まだ痕が消えなくて……」

以前、傷口を舐められた光景が脳裏を過ぎり、少し緊張しながら答える。

左手の甲にできたみみず腫れは痕が残り、まるで竜紋が一画増えたような感じになってしまっていた。

「なるほど……やはりそうだったか」

納得した顔で頷く学園長。そういえばこの傷を見せた時に、そ

れは消えないとかどうとか言われた気がする。

「消えぬ勲章だったな」

「傷を見ただけで、痕が残るっていうのは分かるものなんですか？」

「まあ、きちんと検査すればな」

学園長はそう言うのと、唇の周りに付いた肉の脂を舌で舐めたる。それが妙に艶めかしくて、俺はごくりと唾を呑んだ。

「——シャルロット様、あまり生徒さんをかからかってはいけませんよ」

するとそこにマイカさんが現れ、箸で持っていたピーマンを学園長の口へ押し込む。

「も、もごっつ、や、やめんかマイカ！わ、私もピーマンは苦手なのだ！」

「生徒さんの前で好き嫌いをしてはいけません。学園長がそんなことでは、示しが付かないですから」

ずっと肉ばかりを食べてきたツケと言わんばかりに、野菜を強引に食べさせられる学園長。

その様子を見て、皆が笑う。

「あははははっ!!」

ティアも、とても楽しそうに笑い声を上げていた。

その声を聞きながら、俺は視線を防波堤の方へ向ける。

実はバーベキューを始めると聞いた時に、穂乃花へ誘いのメールを送ってみたのだ。

ブリュンヒルデ教室の面々しかいない場にいきなり来るのは、穂乃花も気後れするだろう。だが、学園長たちも混じった今ならハードルは低い。

（もし来てくれたら、皆に紹介しようと思っただけだな）  
けれど、穂乃花が現れる様子はない。

実習中に起こしたという事故のことで忙しいのだろうか。もしくは、クラスメイトに怪我をさせた後で、賑やかな場に出るのは抵抗があるのかもしれない。

(変に困らせていたら悪いし、後でもう一度メールしておこう。)

俺は胸の内ですう決めた後、笑い声が満ちる輪の中に意識を戻したのだった――。

◇

バーベキューが終わった後、先生たちは荷物を片付けて帰り、ブリュンヒルデ教室の面々は深月の宿舎へと移動した。

リーザたちは、深月の宿舎で外泊する許可を篠宮先生から特別に貰ったようだ。

今夜は深月の部屋でパジャマパーティーをするつもりらしいが、男の俺や亮はさすがに混ざるわけにもいかない。シャワーを浴びてジャージに着替え、一人で自室のベッドに寝転がる。

部屋にはティアもない。皆と一緒に深月の部屋だ。たぶん今日一日の出来事で、ブリュンヒルデ教室のクラスメイトのことは信用してくれたのだろう。

……というか、リーザのおかげかもな。

俺と別れるときは不安げな顔をしていたが、リーザに手を引かれるとティアは大人しく付いていった。その光景はどこか母娘おやこのようにも見えて、つい頬が緩んだのを覚えている。

横になっていると瞼が重くなってきた。

このまま寝てしまおうかと考えていると――

ズウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ……

!!

大きく低い地響きに、俺は目を開けた。グラグラと部屋が揺れている。勉強机の上から電気スタンドが落ち、ガシャンと甲高い音を

立てた。

「何だ……!?!」

驚いて体を起こす。だがすぐに揺れは収まった。枕元の目覚まし時計は、深夜十二時を示している。いつの間にか眠ってしまったらしい。

(地震じゃない。大きな音がした……今のは何かの衝撃による揺れだ)

すぐにそう判断できたのは、以前全く同じ音と揺れを経験したことがあったから。

だけど、あの時と同じわけがない。あいつがこんな場所にいるはずがない。

「……………」

しかし手のひらは汗ばんでいた。口の中には唾液が溜まり、俺はそれをごくりと呑み込む。

俺はベッドから飛び降りて窓際に駆け寄り、カーテンを勢いよく開け放った。

宿舎の裏手にある森の向こう、夜を彩る満天の星空。その一部が不自然に切り取られている

夜の紺碧が——何か、大きな黒い影に塗り潰されていた。

その影は、青く、淡く、燐光を放ち、あまりにも巨大な体躯を揺らす。

俺は今日にしているものが何なのかを……よく知っていた。

「ブルー・ドラゴン—— ”青” のヘカトンケイルっ……」

ただ呆然と、掠れた声で夜に君臨する者の名を呟く。かつて、俺と深月が住む町を踏み潰そうとした怪物がそこにいた。

ヘカトンケイルの全身は青い鱗に覆われ、動くたびに幾何学模様が明滅する。目も鼻も口もない頭部からは、大きな角だけが天を衝くように聳えていた。

ウウウウウウウウウウウ——!

ようやく時計塔からサイレンが鳴り響く。

それはミッドガルも、今初めて事態を認識したことを意味して

いた。

「いったいどうして……誰も気付かなかったんだ？」

環状多重防衛機構ミッドガルズオルムに守られたミッドガルへ、どうやって察知されることなく入り込んだのか。考えてもその理由は全く見当が付かない。

だが俺たちの前に、バジリスクでもキーンリでもない、予想外の危機が現れたのは紛れもない事実だった。

サイレンを鳴らしながら時計塔は地下へと格納されていく。

だがヘカトンケイルはゆつくりと身を屈め、その長い右腕を伸ばした。

巨大な手のひらが学園の上空にまで届き、真横へ薙ぎ払われる。

ドオオンツ!!

激しい破碎音が鳴り響く。

下降途中だった時計塔の上半分が千切れ飛び、残った下半分も崩壊しながら傾いた。

サイレンの音が途切れ、衝撃で歪んだ時計塔の下部も動きが止まる。

「あ——」

呆気にとられた声で自分の喉から漏れるのを、他人事のように聞く。

あの時計塔にはミッドガルの重要設備が集まっている。非常時の司令室もあるし、今吹き飛んだ上階には学園室も……。

ついさつき別れたばかりの、学園長とマイカさんの顔が脳裏を過ぎる、

「っ……」

俺は奥歯を噛み締め、部屋を飛び出した——。

## ヘカトンケイル襲来

深夜十二時前、僕は杖でキーリの情報を見ていた。

映像には浅黒い肌と長い黒髪。顔立ちは整っているが、目つきは鋭い。煤けたマントを羽織っていて、人の目からは剣呑な雰囲気を感じさせていると思うだろう。

キーリ・スルト・ムスベルヘイム。三年前よりドラゴン信奉者団体“ムスベルの子ら”のリーダーで、手も触れず人や物を燃やす渦炎界という炎を生成する技を使う。

ニブルでは、“ドラゴンより多くの人間を殺した魔女”とされており、諜報機関が全力で調べても確定情報はとても少ない。

テロ事件を起こした数は三百件を超えており、推定殺害人数は十万人とニブルは調べているが、杖で調べるとそれ以上の数が出た。

身長約160センチ、年齢不明、体重不明……国籍や家族構成も不明。不明なのは仕方ない。なぜなら僕は彼女の正体を知っているからだ。

彼女は主に“青”のヘカトンケイルが被害を出した国に入り込み、活動をしている。僕はキーリとヘカトンケイルのことを原作で知っている。

ヘカトンケイルの正体も知っているので、二人の関係は大きく関わっている。

そして、深夜の二時にティアちゃんを奪回するために、ヘカトンケイルをミッドガルに送り込むつもりだ。

そのため、僕はキーリが動くのを待っていた。最初はミッドガル全体にバリアーを展開しようかと思ったが、どうやって連れ込んだのか思い出せないで、まだ何もしていないで待っている。

原作では、ヘカトンケイルは学園に現れ、時計塔を破壊するが、篠宮先生とシャルロット学園長、マイカさん、そして教職員たちは死ぬことはないで、バリアーを展開する必要はない。

けれども、キーリはティアちゃんを連れ去るために深月さんの宿舎に現れる。

リーザさんは攻めてきたキーリと戦うが、相当な怪我を負うため、”力の大会”で悟空がジレンと戦う最中に使用した気の地雷を使うことにした。それはヘカトンケイルが攻めてきてから、悠たちが宿舎を離れた時に使う。

キーリの映像を消し、僕は学園の制服に着替えた。まだ時間はあるが胸騒ぎがする。

僕は杖を仕舞い、窓の外を見る。

綺麗な星が無数にあり、とても静かだ。こんな日にやってきて欲しくないが仕方ない。

僕はカーテンを閉め、瞑想を始めた。落ち着くにはこれが一番だ。暇なときは修行をするか、本を読むか、瞑想のどちらかをしている。

瞑想をすると、張り巡らされた気の壁を自然に作りだすことができるので、誰も邪魔しない。

そういえば、今日は”神界”に行っていないことを思い出す。八重さんには必ず夜には来ると約束したのだが、色々あつて忘れていた。

僕は瞑想をやめ、八重さんに連絡を取ろうと杖を取り出した。すると――。

「っ!？」

禍々しい気を感じた。僕はカーテンを開け、時計塔の方を見た。すると上空から、ヘカトンケイルがやってきた。

ズウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ

!!

大きく低い地響き渡り、僕は驚いた。

「バカな……まだ時間はあるはずなのにどうして」

原作では、深夜の二時にヘカトンケイルがやってくることを知っていた。しかし、時間は深夜十二時。原作より、二時間も早い。

僕は驚いたが、すぐにその理由が分かった。



この世界と原作では少し違っていることを思い出した。

原作での深月さんたちの実力は、ダイヤに穴を開けるしかできない実力だが、この世界では、ダイヤの塊を完全に破壊する力を持っている。

多少原作通りではないため、ヘカトンケイルが早くやつてくるのも合点がいく。

ウウウウウウウウウウウ——！

時計塔の方からサイレンが鳴り出す。

ヘカトンケイルは巨大な手のひらで時計塔を破壊した。僕は篠宮先生たちの気を探ると、先生たちは無事だった。

シャルロット学園長とマイカさんも無事のようにだ。二人はすぐに森に隠れたようで、マイカさんは気配を少し消すのを感じた。

僕は杖を取り出し、静かに部屋を出た。



「深月っ！」

俺が宿舍二階にある深月の部屋へ駆け込むと、既に亮以外全員が制服に着替えて窓際へ集まっていた。

「しーっ！」

イリスが口元に指を当てて、静かにしろと伝えてくる。見れば深月が端末を手に、早口でどこかへ呼びかけているところだった。

「——至急応答してください！ 司令室！ 篠宮先生

！ 応答してください！」

深月は必死に呼びかけるが返事はない。見切りを付けた深月は通信を切り、俺たちに顔を向けた。

「皆さん——見ての通り非常事態です。司令部は崩壊し、後方支援は期待できません。ですから私たちが中心になって対処します。いいですね？」

「もちろんですわ！　　深月さん、早く指示を」

深月の言葉に応じるリーザ。他の皆も表情を引き締めて頷く。正式な竜伐隊である面々は、小型の通信機を頭に装着していた。

「待ってください。亮さんがまだ——」

「悪い、遅れた」

深月が言い終わる前に亮が部屋に入ってきた。手には杖を持っており、準備万端のようだ。

「遅いですわよ、オオシマ・リョウ」

「悪かったよ。……で？　　どうするんだ？」

リーザが睨むと亮は謝り、深月の方を向いて指示を求めた。

「ではアリエラさんは女子寮へ向かい、現場の指揮をお願いします。竜紋変色者がいないかを確認した上で、竜伐隊に集合を掛け、一般生徒は地下に避難させてください。竜紋変色者を発見した場合は、すぐさまシエルターへ隔離し、私に連絡を」

「分かった、今すぐ向かうよ」

アリエラは架空武装を生成し、風を纏って夜空へと飛び出していく。

「フィリルさんとレンさんは、ヘカトンケイル上空で待機。私の指示で攻撃をお願いします」

「……了解」

「ん」

フィリルとレンも架空武装を生み出し、窓から飛び立った。

「兄さんとイリスさん、そして亮さんは、私と一緒に来てください。地上からヘカトンケイルへ接近します」

「了解だ」

「うん、分かった！」

「ああ」

俺とイリスと亮は頷く。しかし名前を呼ばれなかったティアとリーザが声を上げる。

「ユウ……行っちゃおうの？」

「ちよつと深月さん！ わたくしのことを忘れていませんか？」

ティアは不安そうな顔で俺を見つめ、リーザは深月に詰め寄った。

「リーザさんは、ティアさんの護衛です。ヘカトンケイル迎撃にはどうしても兄さんと亮さんの力が必要となります。しかし前線にティアさんを連れて行くわけにはいきません。ですからティアさんに信頼されているリーザさんが傍に付いて欲しいんです」

「で、ですけど……」

「ティアさんを狙っているのはバジリスクのはずですが、ヘカトンケイルの目的もティアさんである可能性は否定できません。いざという時、臨機応変に対処できる人が必要なんです。お願いします、リーザさん」

躊躇うリーザに深月は頭を下げる。それを見て、リーザは溜息を吐いた。

「……分かりましたわ。お引き受けします。ティアさん、わたくしとお留守番していきましょうね」

ティアの前に屈みこんで、リーザは優しく話しかける。

「で、でも、ユウが……」

「彼なら大丈夫ですわ。どう見ても、しぶとそうですもの。殿方を信じて送り出すのも、女の甲斐性ですわよ？」

「おんなのかいしょう？」

言葉の意味が分からなかったらしく、ティアは首を傾げた。

「良き妻、と言い換えてもいいかもしれませんがね。心配いりません。あなたは一人にはなりませんから」

リーザに手を握られると、ティアの表情から少しだけ力が抜ける。たぶんティアは、両親を失ったときのようになりきりになるのが怖いのだろう。だから最初は俺と離れるのをあんなに嫌がった。けれど今は、俺以外にも傍にいてくれる人がいる。

「リーザは……ティアと一緒に？」

「ええ、一緒ですわ」

頷くりーザを見て、ティアは俺の方へ視線を向けた。

「……………分かったの。ティア、いいお嫁さんだから旦那さまを待つ。ユウ……………絶対に、帰ってきてね？」

ティアは俺に真剣な眼差し向けて言う。

俺はティアの髪をくしやりと撫でて請け負った。

「……………では行きましょう、兄さん、イリスさん、亮さん」

深月は俺たちを促す。

こうしてドラゴンの奇襲というミッドガル始まって以来の危機に対処するため、島内防衛戦が開始されたのだった。



僕は、杖でキーリが攻めてくる場所を確認し、そこに気の地雷を仕掛けてから悠たちと学園に向かった。

深月さんの宿舎があるのは島の南西で、ヘカトンケイルがいるのは東端付近。距離は大分あるというのに、そのシルエツトは視界に収まりきれない。何しろ屈んで手を伸ばせば、島の中央にある学園まで届くほどのだ。あまりにスケールが違う。

「時計塔を壊してから、動かないね。どうしたんだろ？」

イリスさんが走りながら疑問を漏らす。

確かに、あれからヘカトンケイルは同じ場所で立ち尽くしている。

歩こうとも、壊そうともしていない。

「ドラゴンの行動について考えるのは無駄です。何故、世界中を歩き回るのかすら不明なのですから、動かない理由も分かるわけがありません」

深月は苦々しい口調で答えた。

しかし、僕はその理由を知っている。そして、ヘカトンケイルが動かない理由も。

今話すのはやめておこう。まだ知るには早すぎる。

「けど、動きを止めてるのなら好都合だ。今のうちに何とかしてしまおう。俺や亮を連れて来たってことは、前と同じように撃退するつもりなんだろう？」

「はい、兄さんが三年前に使った対竜兵装、そして亮がヘカトンケイルを二度も倒した力を貸してください」

悠の問いかけに、深月さんは頷く。

三年前、悠は大きな代償を払って得た力で、ヘカトンケイルを一時的に消滅させた。それは僕も同じである。五年前、イタリア付近で倒し、一年前、アマゾンでも倒した。

殺し切ることとはできないが、同じようにすればこの危機も乗り越える公算は高い。

「ただ……ここで撃つとなるとミッドガルにも大きな被害が出るぞ？　下手をすれば島全体が吹き飛ぶ」

「分かっています。ですからまず、ヘカトンケイルを海へと押し出すつもりです」

深月さんの方針は妥当なものだった。五年前、僕も同じやり方でヘカトンケイルを倒したのだ。しかし、一つ、問題がある。

「押し出せるのか……？　あいつを——」

悠は東の空を覆うヘカトンケイルのシルエットを見て呟く。

ヘカトンケイルは体格の割にはかなり軽い。地上を二足歩行していること自体が異常だ。

それに、ヘカトンケイルの特性は不死不滅アンデッドの能力。どんなに傷をつけても、あいつはすぐに復元してしまう。

「大丈夫です。私たちには、心強い仲間がいますから」

けれど深月さんは自信に満ちた声で僕とイリスさんを見た。

「え？　あ、あたしたち？」

「はい、それに今、上空ではフィリルさんとレンさんも待機中です。じきにアリエラさんも竜伐隊を連れて来てくれるでしょう。それだけの人数がいるのなら、きつと成し遂げられます」

きつぱりと言い切る深月さん。イリスさんは頬を紅潮させて

頷く。

「う、うん……そうだね。あたし頑張る！」

僕たちを先導して駆ける深月さんは、女子寮から続く道との合流地点で足を止めた。

ちようど学園を挟んでヘカトンケイルを見上げる形になる。

「この方向から攻撃すれば、ヘカトンケイルを東の海岸へ押し出せるでしょう。イリスさん、準備はいいですか？」

「うんっ——ケリュケイオン 双翼の杖！」

イリスさんは架空武装を生成し、彼方の巨人を見据えた。

「兄さんと亮さんは状況が整うまで待機を。フィリルさん、レンさん、聞こえていますか？」

頭に付けた小型通信機のスイッチを押し、深月さんは上空にいるはずの二人へ呼びかける。

『……聞こえてる』

『ん』

応答を確認すると、深月さんは鋭い声で指示を飛ばす。

「お二人は私たちとタイミングを合わせ、西側からヘカトンケイルを攻撃。カウント9！」

深月さんはカウントダウンを開始しながら、左手に架空武装の

弓——ブリュナグ五閃の神弓を生成し、右手でダークマター上位元素の矢を番えた。

「8、7、6、5、4、3、2、1——！」

0となるタイミングで深月たちは同時に攻撃を放つ。

「二の矢——ナイト・ブレイズ夜を焦がす灼光！」

「聖銀よ、弾けろ！」

『……フレア・バースト・クアンテット』

『んっ！』

四人の攻撃が重なり、ヘカトンケイルの正面で大きな爆発が起こる。白と赤が入り混じった閃光が夜の帳を一時的に振り払い、辺りは真昼のような明るさとなった。

数秒遅れて爆風が僕たちのところまで押し寄せる。熱を含んだ突風に吹き飛ばされないように、悠たちは踏ん張る。

僕はこの程度の攻撃でびくともしないので、攻撃の成果を確かめる。

光が収まった後に現れたのは、体のあちこちが大きく抉り取られたヘカトンケイル。右腕は肩口から全て消失している。以前戦ったりヴァイアサンとは、比べ物にならない脆弱さだ。しかし――。

「えっ……っ？」

イリスさんが驚きの声を上げる。初めて目にするのなら、息を呑むのも当然だ。

まるで時間が巻き戻っていくかのように、ヘカトンケイルの傷がみるみる治っていく。再生というよりも、むしろ復元。やはり出鱈目な能力のようだ。

数秒足らずで元の姿を取り戻したヘカトンケイルは、何事もなかったかのように星空の下に君臨する。一步も後退してはいない。

「……想定以上に体が脆くて、衝撃が受け流されていますね。次はもつと威力を抑えましょう」

厳しい表情で皆に呼びかける深月さん。だがイリスさんは戸惑った表情を浮かべる。

「ミツキちゃん、あんなに攻撃が効いてるなら、もつと強い攻撃で一気に吹き飛ばした方がいいんじゃないの？」

「それでも結果は同じです。ニブルによる燃料気化爆弾や核の攻撃で、全身の同時消滅に成功した事例はありますが……その後すぐにヘカトンケイルは復活しました。例外は兄さんの対竜兵装と亮さんの力だけです」

きつぱりと深月さんは言い切り、再び矢を番えた。

そうして攻撃が再開される。僕と悠は深月さんとイリスさんの後ろで、自分の出番を待つ。

だが攻撃が強すぎると先ほどの二の舞で、弱すぎれば巨体のヘカトンケイルはびくともしない。

救いはヘカトンケイルが全く動かないことだ。

すると、宿舎の方から禍々しい気を感じる。どうやら、キーリが宿舎に向かっているようだ。殺気や気配は消せても、気は隠せない

ようだ。

杖で確認すると、僕が気の地雷を仕掛けた方向に向かっている。これで悠が行くまでの時間は稼げる。

原作では、リーザがキーリとの戦いで怪我をするので、悠と協力して戦わせるために罠を仕掛けた。

「次は全員、最大量で空気を生成！ 風でヘカトンケイルを押し出します！」

近くで深月さんは号令をかけて、皆が突風を発生させる。

ヘカトンケイルの上半身が揺らぐが、力不足のようで、ヘカトンケイルはその場に留まったままだ。

「っ……これでは、応援が必要かもしれませんね」

悔しげに呟く深月さん。すると悠はヘカトンケイルの正体に少し分かったようで、声を上げた。

「そうだ、あの時と似てるんだ……」

「え？」

イリスさんは悠が漏らした声に反応して、こちらを見る。

「ドラゴンの姿になって、暴走したティアに似てるんだよ。架空武装の体は、挟れてもすぐに元通りになっていた。その光景と、復元するヘカトンケイルが妙にダブるんだ」

やはり悠は頭の回転が速い。原作通りにそのことに気付いたようだ。

「モノノベは……あのヘカトンケイルが誰かの架空武装だって言うの？」

「それは……」

イリスさんに指摘されて、悠はどれだけ突拍子もないことを言っているのか自覚しているようだが、悠の言っていることは正解だ。

そこに深月さんは口を挟んだ。

「有り得ません。あれほどまでに巨大な架空武装を作るのは不可能です。現在、最も生成量が多いとされるレンさんでも、ヘカトンケイル形成の必要量には、全く届かないでしょう」



「……そうだな。現実味がないことは分かってる」

悠は納得しているが、彼の言っていることは間違いない。ヘカトンケイルはあのドラゴンの架空武装だ。

悠も深月さんたち”D”が知っているドラゴン。その存在が操っているのだ。

そして、この事態の犯人もそのドラゴンと関わっている。

「っ!？」

そこで悠はキーンを思い出したようで、宿舎のある方向へ顔を向ける。

視線の先で無数の爆発が起こったのは——その直後だった。

## V S キーリ

駆ける。ただ全力で大地を蹴る。

呼吸も忘れて、宿舎への道を駆け戻る。星空に吐き出される黒煙を視界に収めながら、必死に足を動かす。

走りだした直後に深月の制止する声が聞こえたが、構っている暇はなかった。

たった一秒の遅れが、誰かの生死を分ける。

戦場で磨かれた直感が、今はそういう状況なのだと言えかけていた。

ヘカトンケイルへの切り札である自分が持ち場を離れるリスクも分かっている。あの巨人が架空武装である確証もない。

しかし、俺は己の勤に従う。今戦うべきなのは、ヘカトンケイルではない。最も危険に晒されているのは、恐らくティアとリーザだ。

深月の宿舎が見えてくる。煙は裏手から上がっているようだった。

俺は宿舎の裏手へと回り込む。角を曲がった瞬間——爆風が飛ぶ。

「っ!?! なんだ今のは!」

危険を感じた俺は足を止め、素早く周囲の状況を確認する。

濛々と煙を上げているのは、敷地内だ。大きな爆発があったようで、宿舎の壁には焼け焦げていた。

芝生が広がる裏庭には、あちらこちらから火の手が上がり、無数のクレーターがあった。

そこにいるのは三人の少女。

一人は射抜く<sup>グングニル</sup>神槍を構えたリーザ。服は焼け焦げているが、怪我はない。リーザは後ろにティアを庇い、空気による防壁を展開しているようだった。周囲にごうごうと風が渦巻いている。

ティアは震える体を自分の両腕で抱き締め、リーザが対峙する少女を見つめていた。

少女は、射抜く神槍の穂先を向けながらも薄く微笑んでいた。結われた長い黒髪が熱風に揺れ、眼鏡のレンズには燃え盛る炎が映り込んでいた。

服装はミッドガルの制服を着ているが、ボロボロになっており、本人も血を流していた。

俺は彼女を知っている。

たちかわほのか  
立川穂乃花。

ティアと共にミッドガルへ転入してきた少女。何度か話す機会があつて仲良くなつたが、どうして穂乃花がこんなところに――

疑問が頭の中で渦巻くが、兵士としての自分は冷静に状況を分析し、結論を下していた。

(理由を考える必要などない。あれは、敵だ)

敵……穂乃花が？ いや待て、その判断は早すぎる。だつ

て彼女は、もう俺にとって友人で、できれば力になりたいと思つていた相手で――。

穂乃花はチラリと俺に視線を向けると、口の端を歪めた。

「ふふ、手間取つたせいで彼が来てしまったわ。本気を出すしかないよね」

まるで別人のような口調で呟くと、穂乃果は手のひらをリーザに翳す。

ぞわりと、嫌な予感が背筋を駆け上がった。

(動け！ リーザがやられるぞ！)

本能が絶叫し、俺は迷いを捨てる。

対人兵装――AT・ネルガル！

俺は対人制圧用の射出式スタンガンを物質変換で作り出し、穂乃花に向けて引き金を引く。

ボンッ！

と穂乃花の前で小さな爆発が起こつた。放つた弾丸が蒸発したのだと、遅れて認識すると同時に、ネルガルを持つ右手に熱を感じた。

「つつ……!?」

慌ててネルガルを手放し、後ろへ飛び退く。

ぐにやりと飴のように歪んだネルガルは赤熱し、中の火薬に引火して爆発した。

(何だ？ 何をされた？)

軽い火傷を負った右手を意識しながら、穂乃花を見据える。

「いきなり撃つなんてヒドイじゃない。けど、正しい判断よ。ほんの少し反応が遅かったら、彼女の綺麗な顔が台無しになってしまっていたかもしれないから」

くすくすとおかしそうに笑う穂乃花。そしてリーザに近づくと一歩前に出ると、次の瞬間、地面が突然爆発した。

それに釣られてキーリの周りからも爆発し、俺たちは驚いた。

「今のうちだ！ 深月たちのところに行け！」

「分かりましたわ。ティアさん、行きましょう」

「う、うん」

爆風でキーリは見えないが、すぐにリーザとティアに逃げるように言うと、リーザはティアを背負って宿舎を出た。

視界からリーザたちの姿が消えると爆風が急に消えた。そこには制服がボロボロになってになった穂乃花がいた。

「……まだ爆弾を仕掛けてたなんて、やるじゃない。あなたの仕業だったのね」

「っ!? 何の話だ。そんなことはしてない」

穂乃花は地面に爆弾を仕掛けたのが俺だと確信したようだが否定した。

「そう、だったら誰の仕業かしら？」

穂乃花は爆弾を仕掛けた犯人を考えている。実際俺もそんなことをした奴が誰なのかは分からない。

しかしそこで、俺は思い当たる節を浮かべた。

宿舎を出る前に亮は杖を取り出して、何かをしていたことを思い出す。もしかしたら亮は、こうなると予想して罫を仕掛けたのだろう。

「まあ、そんなことはいいわ。それより、やっと落ち着いて話がで

きるわね——悠さん？」

皮肉っぽい口調で俺の名を呼ぶ穂乃花。

俺は熱気で乾いた口内を唾で湿らせ、固い声で言う。

「穂乃花……何でこんなことを。狙いは、ティアか？」

「ええ、そうよ。ティアは、私がバジリスクの元へ連れて行く」

その返事を聞いて奥歯を噛み締め、彼女の正体を確信した。

「穂乃花……いや、キーリ・スルト・ムスペルヘイムだな？」

ロキ少佐から送られたデータをまだ見てはいないが、今の言葉で正体が分かった。

「正解。まあそれも適当に付けた名前だけだね。だから別に、穂乃花って呼んでくれても構わないわよ？」

「遠慮させてもらう。お前を、友人の名では呼ばない」

「そう……残念。穂乃花という名前、私は気に入っていたんだけど」

穂乃花——いや、キーリはどこか寂しげに笑って、かけていた眼鏡を投げ捨てる。

「まさか、転入生として潜り込むなんてな。いったいどんな手を使ったんだ？」

ニブルだって、お前の生体データぐらいは入手しているはず……いくら変装しても、検査されれば正体は露見するだろう？」

キーリは俺の言葉を聞くと、おかしそうに鼻で笑う。

「はっ、検査なんていくらでも誤魔化せるわよ。血液だろうが、DNAだろうが、データダミーを上位元素で作ればいいだけだしね」

「な……そんな複雑な変換ができるわけ——」

「できるわよ。だってティアに、角をプレゼントしたのは私なんだから」

あつさりと言い放つキーリ。それはつまり——。

「……ティアは、自分であの姿になったんじゃないの？」

じわりと、心の奥に怒りの感情が滲む。

「もちろんよ。ティアにはできっこないわ。そもそも人間の脳のスペックじゃ、生体変換に必要な膨大な情報を処理し切れないのよ」

「はは……まるで、自分は人間じゃないみたいなき草だ」

俺は皮肉を込めて呟くと、キーリは真顔で頷く。

「そうよ、私はドラゴンだもの。人の姿なんて仮初。生体変換を使えば、容姿なんていくらでも変えられる。ニブルに奪われたティアを見つげ出すには、別人に成りすましてミッドガルへ移送されるのが手っ取り早いと思ったの」

「……ドラゴン、か」

奥歯をぐつと噛み締める。こいつがティアを歪めた元凶であることは、今の一言ではつきりと分かった。

恐らくキーリは何度も容姿を変えながら活動していたのだろう。道理でニブルも情報を掴めないわけだ。

「もう、そんなに怖い顔をしないで欲しいわね。私はただ、ティアを連れ戻そうとしただけなのよ。……でも」

「c。」

突然キーリは悲しい表情になり、リーザたちが逃げた方向を向いた。

「ティアに戻ってくるように言ったけど、本人は断ったわ。あなたのお嫁さんになる。ティアは人間の女の子だってね」

「っ!？」

どうやらティアは人間として生きることを選んだようだ。

「たった二日で、ここまで変わるなんて思わなかった。ほんのちよつと前までは、私の言うことをよく聞いてくれる良い生徒だったのに」

「お前がティアに教育を……」

苦々しく呟く。勉強を教えたとき、俺はティアに良い教師がいたのではないかと考えたが、全くの間違いだった。こいつがティアに施していたのは、ドラゴンになるための最悪な教育だ。

「ええ、まあね。目論見通りティアはミッドガルで見つけられたし、あの子も容姿を変えた先生には気付かなかったから、欲を出して内部を探っていたんだけど……失敗だったわ。時間を掛けるべきじゃなかった」

俺は、穂乃花が転入初日に校内見取り図を眺めていたことを思い出す。あの時、キーリは敵地の情報を頭に叩き込んでいたのだろう。

そういえばティアは穂乃花に対して「近づきたくない」と言っていた。正体は分からずとも、本能的に恐れを抱いていたのかもしれない。

「それに——クラスメイトもうっかり殺しかけちゃったし、色々と上手くいかないわね」

俺に視線を戻し、肩を竦めてみせるキーリ。

「殺しかけたって……まさか、保健室で言っていた変換失敗の事故は——」

「ああ、ティアのことを悪く言っていた子がいて、ついイラッと来たのよ。ティアは普通の”D”よりずっと価値の高い——バジリスクとつがいになれる逸材だっていうのに……身の程を弁えて欲しいものだわ」

冷え切った表情でキーリは語る。

「——あの後悔も、全部嘘だったってことか。お前みたいな奴に……ティアは絶対渡さない。ティアを本物のドラゴンなんかに、させて堪るか」

「ふふ、ティアにずいぶんご執心みたいね。金髪の彼女も必死にあの子を守ろうとしてたし」

そう言っただけでキーリは再びリーザたちが逃げた方向に視線を向ける。

「リーザたちの元へは行かせない」

「いいわ。殺してみなさい。殺されたら、止まってあげる」

キーリは俺の方に視線を戻し、戦闘態勢に入る。

「本当はあなたと戦うつもりはなかったのだけど……仕方ないわね」

「分かった。お前を殺してでも……止める」

（架空武装、ジークフリート）

俺は上位元素で形作った装飾銃を手に、銃口をキーリに向け

る。

次の瞬間、俺は周囲の気温が一気に上昇するのを感じ取った。

「っ!？」

右に飛び退くと同時に、爆発が起こる。炎を伴った衝撃波が全身を叩き、俺は受け身を取りながら焦げた草むらを転がる。

恐らく、何らかの燃焼物を物質変換で作り出しているのだろう。

ニブルに所属してた頃、噂でキーリは炎による攻撃を用いると聞いた。現状を見る限り、その噂は正しい。

だが物質変換を行っているのなら、直前に上位元素を生成しなければならぬ。それが見えないのは、非常に不可解だ。

「威勢のいいことを言った割には、無様な姿ね」

追撃の気配を感じ、俺はジークフリートを足元に向けて撃ち放つ。

「ニトロ・ブリッド窒素弾！」

俺は大量の窒素を生成し、風を起こした。キーリが作り出しているはずの炎の素を、引火する心配のない窒素で吹き飛ばそうとしたのだが――。

ジュウツと猛烈な熱さと痛みが右肩を襲う。肉が焼ける感触に俺は慌ててその場から逃れた。

とっさの回避だったので、燃える草むらの風下へ踏み入ってしまう。立ち昇る黒煙に包まれた俺は、左手で口元を覆った。煙に触れて架空武装が消耗してしまわぬよう、体を盾にする。

（違う。キーリが作り出しているのは燃焼物じゃない）

俺は自分の予想が外れていたことを悟った。

爆発が起こっていないのに火傷を負ったことを考えると、攻撃の正体は形のない熱そのもの。

恐らくは、上位元素をダイレクトに熱エネルギーへと変換しているのだろう。高等技術ではあるが、生体変換ほど常識離れた芸当ではない。

あの爆発は、生み出された熱に酸素が反応したものだたと考



えられる。

だが謎が一つ解けても——最大の問題は残っていた。

キーリの上位元素が見えない以上、どこから攻撃が来るのかは予測不能。この絡繰りが分からなければ、キーリに近づくことすら叶わない。

俺は煙の中で思考を巡らせる。だがその間、キーリは何故か攻撃して来ようとしなない。

「私を殺すんじゃないの？ さあ、かかってきなさいよ」

俺へ挑発の言葉を投げるものの、さらなる追撃はなかった。

(どうしたんだ?)

煙の中では微粒子に干渉され、上位元素の消耗速度は速まる。だが最初から多めに生成しておけば、攻撃は可能だ。もつとも、その上位元素が未だに一度も見えないのだが。

いや、待て……本当に、ただ単純に、見えていないだけだとしたら——。

一つの可能性が頭の中に浮かび上がる。

(試してみる価値は、ある！)

俺は煙の中から飛び出すと同時に、ジークフリートに残った上位元素を全てつぎ込んで弾丸を放つ。

スモーク・フリット  
「白煙弾！」

真っ白い煙が辺りを包み込んだ。手から架空武装が消失する。どのみち、煙幕の中では維持できないので関係ない。

俺は白く煙った世界を駆ける。真っ直ぐ、キーリに向かって。熱変換による迎撃は来ない。

やはり俺の予想は当たってきた。

キーリは目に見えないほど微細な上位元素を、辺り一帯に展開していたのだろう。範囲がどれぐらいかは知らないが、それはまさにキーリの支配圏。その内側にいる限り、俺はキーリの掌中だ。あの余裕も領ける。

しかし、上位元素が微細であるがゆえに弱点もある。こうして薄い煙に覆われてしまうだけで、小さな上位元素は消滅してしまう。

「私の渦炎界を見破ったのね——さすがだわ。じゃあ、これならどうかしら」

薄煙の向こうで、キーリが笑う気配を感じた。

悪寒が走る。ここは死地だと直感が告げ、踵で地面を抉り急制動をかけた。

白い煙の中に、黒い粒がいくつも浮かび上がる。

それはまるで——地上から空へと落ちる黒い雪。

キーリは白煙で覆われると同時に、今度は煙で掻き消されない大きさの上位元素を周囲に展開していたのだ。

俺は黒雪が舞う世界に、足を踏み入れてしまった。ここはもう、見えていても逃れられない領域。

対爆装甲——ウルク73E！

俺はとつさに地面へ倒れ込み、自分を覆うように防壁を形成する。これが俺の少ない生成量で、全方位からの攻撃に対処する唯一の方法だった。

けれど——赤い光が防壁に亀裂を生む。

「っ……!?」

響き渡る轟音。全身を叩く熱さと衝撃。何が起こったのか理解できないまま、ごろごろと地面を転がる。口の中に血と土の味を感じ、遅れて激痛が脳を揺らした。

全身が熱くて痛くて、どこを負傷したのかも分からない。だが、まだ生きてはいる。

（生きているのなら動け！ 止まれば死ぬぞ！）

自分を叱咤して身を起こし、状況を確認する。爆発で大きく吹き飛ばされたらしく、キーリとの距離は開いていた。キーリの周囲を包む上位元素の粒は、俺のところまでは届いていない。

上位元素の生成量はどんな“D”でも限りがある。一つ一つの粒を大きくした分、彼女の言う渦炎界を展開できる範囲は狭くなったのだろう。

戦闘態勢を取ろうとして、左腕が動かないことに気付く。見れば防壁の破片が深々と肩に突き刺さっていた。ぽたぽたと左腕を伝

わった血が地面に落ちる。

キーリは勝利を確信した表情で、何かを言っている。だが、爆発で耳がおかしくなっていて上手く聞き取れない。だが、聞く必要はない。

(これから、殺してしまうのだから)

「はあっ……はあっ……はあっ……」

自分の荒い呼吸音だけが耳の奥で反響し、くぐもった感じて聞こえてくる。

左肩を中心とする激痛で、頭が上手く動かない。

だが何も考えられなくなるほどに、俺の中で空白が広がるほどに、領土を広げるモノがいる。

「はあっ……はあっ……はあっ……はっ……はっ……はっ……」

徐々に呼吸の間隔を長くしていく。呼吸を鋭く、吸気を静かに。

俺の自意識が薄れた隙を見逃さず、無意識の怪物が俺の体を支配していく。指先から、心臓の鼓動までも銃制し、俺を別のモノへと書き換える。

「……………」

最後に深く息を吸い、止める。

その時、俺はもう、俺ではなかった。

キーリに向かって、ゆっくりと歩き始める。徐々に速度を上げていく。つま先で地面を蹴るたびに、少しずつ加速する。

怪訝な表情を浮かべるキーリ。

黒雪に包まれた領域へ足を踏み入れれば、先ほどと同じ結果になるのは目に見えていた。

だが、俺ではないモノは無造作に、真正面から獲物に迫る。

左手が熱い。怪我を負った肩ではなく、手の甲が焼けるように熱かった。

理由は分からない。考えられない。

だが、俺の力を掌握した”悪竜”<sup>フェアニール</sup>は、全てを理解しているはずだ。

その上で、キーリを殺す最も簡単な方法を選択し、実行しているに違いない。

(走り出す)

最大速度で、キーリの渦炎界へ侵入する。

表情を険しくしたキーリが何かを叫んだ。視界が赤い炎で覆われる。上位元素から変換された熱エネルギーが、大気を焼く。

だが……止まらない。

”悪竜”は爆炎を突き破って、地を駆ける。

痛みはない。熱さも感じない。

感覚が麻痺しているのか、それとも俺は爆発をものともしない怪物になってしまったのか。今の俺には分からない。

時折、小さな白い光が視界の中で瞬くが、その意味も理解できない。

キーリの表情が驚愕に歪んだ。

「なん、で——っ!?!」

距離が近づいたことで、初めて声が聞こえた。

応じるように、”悪竜”が咆える。

「があああああああああああああつ!」

言葉など、もはや無意識。必要なのは、獲物を狩る鋭い牙だけ。咆哮を上げながら、右手で左肩に刺さった防壁の破片を引き抜

く。傷口から溢れた血が、辺りに飛び散る。

「渦炎剣っ!」

キーリが手を翳し、赤い閃光を放った。

恐らく、俺の対爆装甲を破った攻撃だろう。

しかし”悪竜”は回避動作を取らず、無造作に右腕を振るった。

またしても白い煌めきが垣間見え、一瞬だけ景色が捻じれる。すると赤い光は奇妙に軌跡を歪めて、明後日の方向へ飛んで行ってしまった。

「その力、まさか”白”の——」

呆然とするキーリの壊へ、牙を剥いた”悪竜”が潜り込む。

そして、血が塗れた鋭い破片を振り下ろし――。

……穂乃花……！

――俺はその切っ先を、キーリの体に深々と突き立てた。  
右手に、肉を抉る感触が伝わってくる。

「こほっ……」

キーリが血を吐き、その飛沫が俺の頬に掛かった。生々しい生命の熱と血の香りに”悪童”から自分を取り戻した俺は、ざらついた不快感を覚える。

「がはっ、こほっ……けふっ……ふ……ふふっ……嘔吐き」

口元から血を垂らしながら、キーリが笑った。

「……………」

俺は何も答えない。キーリの腹部から流れ出る血の温度を感じながら、自分の甘さを呪う。

「殺すつて言ったのに……直前で急所を避けたわね……どうして？」

「……手元が狂ったんだよ。それに急所じゃなくても、かなりの深手だ。すぐに処置をしないと出血多量で死ぬ。だから――投降しろ」

キーリはここで殺すべき相手だと、俺の直感が告げている。

それでもギリギリで”悪童”を止めてしまったのは……穂乃花の微笑みを思い出してしまったからだ。嘘だったと分かっているも、その時に抱いた感情までは消し切れない。

「ふふっ……優しいのね。でも、その優しさは無意識よ。たとえばあなたが心臓を貫いていても、結果は同じだったんだから」

キーリは俺の耳元でそう囁くと、トンツと手で俺を突き放す。そして腹部に突き刺さった防壁の破片に手を伸ばした。

「待てー！ 抜くと出血が――」

俺は制止するが、キーリは構わず破片を抜き取る。傷口から血が溢れ出て、ボタボタと地面に赤黒い染みを作った。

だが傷口の周辺に黒い<sup>ダークマター</sup>上位元素の塊が湧き上がった途端、出血が止まる。キーリが血を拭くと、そこにはもう傷はなく、白い肌が覗いていた。

「そんな……」

呆気に取られる俺を見て、キーリは肩を竦める。

「どう？」

生体変換ができるっていうのは、こういうことなの。私を殺したいなら、ここを狙わないと」

トントンと指先で自分の頭を叩いて、薄く笑うキーリ。

「くそっ」

仕切り直しかと、俺はふらつく足で後退する。

「そんなに焦らなくていいわよ。できれば私がティアを穩便に連れて行きたかったけど、そろそろ時間切れみたいだし」

だがキーリは、戦闘態勢に移行する俺を見て苦笑を浮かべた。

「ここまで滅茶苦茶しておいて……穩便に、なんてよく言えるな。

それに……時間切れだど？」

「いったい何のことだ？」

どういう意味か分からず、俺は構えを崩さぬまま問いかける。

「私はね……これでも”D”の損害を最小限に抑えようとしていたの。けれどあなたたちが邪魔したせいで、彼女は痺れを切らしたみたい」

ズウウウウウウウウウウ……！

キーリがそう言った直後、大地が揺れる。視線を上げると、ずっと動きを止めていたヘカトンケイルが、こちらへと体の向きを変えようとしていた。

「っ……ヘカトン、ケイル——」

「ティアは私が確保するからと、彼女には持つてもらっていたの。けれど、もう自分で動くことにしたらしいわね。覚悟しなさい——彼女は私みたいに優しくないわよ？」

彼女？ 待つてもらっていた……だど？」

「……お前とヘカトンケイルは、どういう関係なんだ？」

あ

れは……お前の架空武装じゃないのか？」

俺は青い燐光を放つ巨人を見ながら、キーリに問いかける。

俺はヘカトンケイルが誰かの架空武装かもしれないと考え、敵の狙いがティアだと推測した。だが先ほどの言い方だと、ヘカトンケイルは少なくともキーリの制御下にはないように聞こえる。

「ふふっ——まさか、さすがの私でもあんな巨大な架空武装は作れないわ。というか……あなたにはもう、彼女のことを色々教え、あげたはずなんだけど？」

「もう……教えた？」

「分からない？　察しが悪いわね」

皮肉げに笑うキーリ。

はぐらかされているのか、真実を口にしていいのか、判断ができない。

だがこの様子では、ヘカトンケイルはやはりドラゴンと見なした方がいいのだろう。

ズウウウウウウウウウン！

そして、またしてもミッドガルが鳴動する。ヘカトンケイルが足を踏み出したのだ。俺たちのいる方へと向かって——。

その光景は三年前を否応なく思い出させる。俺たちの町へと向かってきたヘカトンケイル。無慈悲に響く破滅の足音。あの巨体が近づくほどに、夜空は狭まっていく。

……結局、あいつを倒さなきゃいけないわけか。

俺がヘカトンケイルの方に気を取られていると、キーリは近づく。

「バジリスクを上陸を許せば、こんなものでは済まないわ。全ては塵に還り、誰一人生き残れない。だから私は多くの”D”が損耗してしまいう前に、ティアを連れて行くつもりだったのよ。彼女よりも優しい方法で」

真面目な口調でキーリは語り、ヘカトンケイルをちらりと見上げた。俺たちのことを心配している風にも聞こえるが、やはり”D”を資源としてしか見ていないのが伝わってる。

「余計なお世話だ。俺たちはバジリスクを倒して、ティアを守る」  
「だったらまず、彼女を何とかしないとね。私は巻き添えで潰さ

れてしまう前に、退散させてもらおうわ。中枢を破壊されて一時的にダウンした環状多重防衛機構も、そろそろ別ルートで再起動する頃でしょうし」

キーリはそう言うのと、炎を纏って空へと舞い上がる。空気ではなく、燃焼噴射を物質変換で作りに出して飛んでいるのだろう。

上空から俺を見下ろしながら、キーリは言葉が続ける。

「一つ忠告しておくわ。彼女は——お母様は優しくないからお母様……？」

そう言えば穂乃花は、母と一緒に世界中を回っていたのだと言っていた。それはまさか、ヘカトンケイルのことを指していたのだろうか。

徐々に高度を上げていくキーリに、俺は問いかける。

「キーリ……お前はいつたい、何者なんだ？」

人間の脳では処理しきれないという、生体変換を使いこなし、さらにヘカトンケイルを母と呼ぶ少女——とても普通の”D”とは思えない。

「さあ、私は誰なのかしら。もしよかったら、あなたが決めてくれない？」

「……答えるつもりはないってことか」

「別にはぐらかしているつもりはないんだけど……まあいいわ、じゃあね——もしも三年前と同じことが起きたら、またどこかで会いましょう」

そう言っつてキーリは、赤い軌後を描いて星空へと昇っていった。

キーリは俺が三年前にヘカトンケイルと戦ったことを知っているのか？

多くの疑問が渦巻く。



## V S 青のヘカトンケイル2

ドオオオオオオオオオオオン——…っ！

先ほどより近づいた大きな足音に意識が引き戻された。

ヘカトンケイルはその巨体を揺らしながら、一歩ずつ迫ってくる。その周囲では眩い爆発が連続して起こっているが、ヘカトンケイルの歩みは鈍らない。恐らく集結した竜伐隊が海へ押し返そうとしているのだろう。

キーリの言うことが本当であれば、ヘカトンケイルの目的もティアの捕獲。

本来はヘカトンケイルが中枢を破壊して皆の目を引きつけ、その間にキーリが環状多重防衛機構の麻痺してミッドガルからティアを連れ去る手筈だったに違いない。

しかし、亮の罠にハマリ、リーザと俺に邪魔されたことで、ヘカトンケイルは自ら動き始めた。

だが…あの巨体でどうやって、指先よりも小さなティアを捕らえるというのか。

「ユウー」

ティアの声が聞こえて、視線をそちらへ向ける。

宿舎の横手から現れたのはティアとリーザ、深月とイリス、そして亮がやって来た。

「すみません、合流した竜伐隊に指示を出していて、来るのが遅れてしまいました。ご無事ですか？」

「…俺はまあ、何とかな。心配かけてすまない」

ボロボロになった服の袖を千切り、端を歯で噛んで傷口に巻きつけた。傷は深いが、とりあえず止血さえできれば十分だ。

「ユウ、無事で良かったの」

ティアは涙目で俺に寄ってくる。

「悪かったティア。怪我は無いか？」

「うん、ユウとリーザのおかげで大丈夫なの」

ティアは涙を手で拭いて俺の目を見て言った。

「そうか、……リーザは大丈夫か？」

「ええ、あなたのお陰で無事ですわ。それよりあなたこそ大丈夫ですの？」

リーザは心配して聞いてきた。

「大丈夫だ。それより今はあれを何とかしないと……」

俺は立ちあがり、迫り来るヘカトンケイルを見上げた。

「既に竜伐隊は、全員持ち場についています。ヘカトンケイルが急に移動を始めたことで、少し足並みが乱れていますが……上手くタイミングを合わせれば今度こそ押し返せるはずです。皆さん、力を貸してください」

深月が俺たちに呼びかける。

「ああ、もちろんだ」

「うんっ！ 何でも言つて、ミツキちゃん！」

俺とイリスは頷き、応じる。

「わたくしもやれますわ」

「待ちくたびれたぞ」

リーザは再び架空武装を生成し、亮は強気に笑った。

「ティアも……戦う」

そこにティアの声が響き、亮以外は驚いた顔でそちらを見る。

「大丈夫なんですか？ また暴走するようなことがあれば、手伝うどころか皆の足を引っ張ることになりますわ」

リーザは遠慮なく皆が抱いているであろう不安を口にした。

「——うん、大丈夫。ティアは角があつて、もう人間じゃないかもしれないけど、それでも……ユウやリーザと一緒にいたい。おんなじように、生きたいの！」

はつきりと言い切るティア。

自分の在り方は変えられない。それでも生き方は選択できる。

ティアは自分の意思で、俺たちと一緒に歩くことを選んでくれたのだ。

「分かりましたわ。では仲間として——共に戦いましょう」  
表情を和らげてリーザは手を差し出す。ティアは満面の笑みを浮かべると、ぎゅつとリーザの手を握り返した。

その様子を確かめた深月は通信機に手を当て、皆に指示を出す。

「——それでは皆さん、タイミングを合わせて、全員で最大規模の空気変換をお願いします。重心である腹部に狙いを定めてください！  
カウント9!!」

深月の号令と共に、イリスとリーザが架空武装を構える。

ティアも周囲に上位元素を生成し、自分の架空武装を形作っていく。

以前と同じく現れた上位元素はティアの体へと集まるが、象られる輪郭は違う。

具現するのは、紅に煌めく大きな翼。

人の姿のまま、竜の翼を背に生やしたティアは、どこか神々しくさえあった。

力を求めた場合、姿がドラゴンに近づくのは、ティアにとって必然なのだろう。だがそれを誰も咎めたりはしない。何故ならティアは、それでも俺たちと同じように——人間として生きると言ってくれたのだから。

「<sup>セブン</sup>7、<sup>シックス</sup>6、<sup>ファイブ</sup>5——」

カウントが進む。俺と亮は自分の出番に備えて意識を集中する。

急に攻撃が止んだことで異変を察知したのか、ヘカトンケイルがその巨大な右腕を持ち上げた。

だが大丈夫だ。まだ距離に余裕はある。俺たちのいる場所までは届かない。

その、はずだったのに——。

空が暗くなる。星が見えなくなる。黒い何かに——塗り潰されて。

「え——？」

巨大な掌が、いつの間にか頭上にあつた。

遠近法の狂った絵画のように、ヘカトンケイルの腕は不自然に伸びていた。

いや——伸ばしたのか!?

今まで、ヘカトンケイルが体を変形させた事例など皆無。だが元々未知の存在であるドラゴンに、未確認の能力があつても不思議はない。

全体の質量は一定なのか、伸ばした分、腕は細くなっていた。それでも掌は逃れようがないほど大きく、大気を押し潰すように落ちてくる。

「おい——ここにはティアもいるんだぞ!？」

掌を仰ぎながら、俺は叫ぶ。けれど、俺の言葉が通じるはずもない。

それにもし、ヘカトンケイルがティアを掴まむだけの繊細さを持っていたとしても、周囲にいる俺たちは潰されてしまう。

「目標、対象の右腕に変更！ カウント繰り上げ！ 放

てっ!!」

カウントは間を合わないと判断した深月が、早口で叫ぶ。

「烈風よ、轟けっ!」

イリスが圧縮した空気を破裂させる。

「奔れ、風槍っ!」

リーザが束ねた風を撃ち放つ。

「飛んじやえっ!!」

ティアが、紅の翼を広げて暴風を巻き起こす。

島全体が大きくざわめく。皆の生み出した大量の空気が、突風となつてヘカトンケイルの右腕を上方へ弾き返した。

しかしヘカトンケイルは、間髪なく左腕を伸ばしてくる。

再び空が、青い掌で閉ざされた。

皆、全力で攻撃を放つた直後のため、次弾を放つ余裕がある者は少ない。

即座に二撃目を放つことができたのは、深月とリーザだけだつ

た。

「リーザさん、左腕は消し飛ばして対処します。最大威力で攻撃を！」

「了解ですわー！」

深月は虹色の弓に上位元素の矢を番え、リーザは金色の槍を空へと向ける。

「終の矢——空へ落ちる星！」

「射抜け、神槍っ!!」

深月とリーザの放った攻撃が空を白く染め、ヘカトンケイルの左腕を蒸発させる。その破壊力は凄まじく、膨れ上がった光はヘカトンケイル本体までも呑み込んだ。

爆風と閃光が収まった時、残っていたヘカトンケイルのパーツは、空中にある右腕と遠くに見える下半身だけ。

だが下半身の輪郭は突如として崩れ、あぶくのように弾けて消える。

その直後——残された右腕が膨れ上がり、ヘカトンケイルが復元した。

ズウウウウウンン——……。

大地を揺らし、俺たちのすぐ傍に降り立つヘカトンケイル。

「フンッ」

隣で亮は杖の先端をヘカトンケイルに向けると、竜伐隊を覆い尽くすほどの防壁を展開した。

「どうやら、激しい衝撃と風圧が来ないように守ってくれたのだ。」

「亮さん、助かりました」

「オオシマ、ありがとう」

深月とイリスは亮にお礼を言う。

「気にするな。それより早く奴を何とかしなくちゃな」

亮は防壁を解除して杖を地面に刺し、両手をヘカトンケイルに向ける。

「くらえっ！」

「ギヤリツク砲!!」

亮の両手から気功波が放たれ、ヘカトンケイルの右膝に当たった。

右足は破壊され、ヘカトンケイルは後ろに倒れた。

「すごい……」

ティアは亮の実力を見て驚く。そういえばティアは亮の力を見るのは初めてだったと思い出す。

亮は時間を立て直すためにヘカトンケイルの足元を狙ったのだろう。

しかし、どんなに攻撃して海へ押し出そうとしても効かない。

俺は胸の内で奴を押し出す方法を考える。

すると……。

——ノイン、起動要求——

その時、頭の中に無機質な声が響いた。

ユグドラシル……か？

声の主は”緑”のユグドラシル——三年前、俺がヘカトンケイルを倒すために取引をした相手。ユグドラシルは感情の見えない機械的な声音で、一方的に言葉を流し込んでくる。

——フィーア・リヴァイアサンせんめつじ殲滅時に、権利は継承済み。

起動要求、コード・フィーア。起動要求、万有斥力アシチケラビティ——

「アンチ、グラビティ？」

それは、リヴァイアサンが持っていた斥力場を発生させる能力——。

俺がその言葉を口にした瞬間、左手の竜紋が熱くなり、純白の光を放った。その輝きは、”悪竜ファフニール”に体を預け、キーンと戦っていた時にも目にした光と同じもの。

——ビシッ！

左手の前に生成してあった黒い上位元素の塊に、白い亀裂が走る。パリンと殻が割れるように黒から白へと反転する上位元素。

その途端、全身が浮遊感に包まれる。

「きゃあっ!？」

イリスの悲鳴が聞こえて目を向けると、周りにいた皆が宙に浮

いていた。地に落ちていた木の葉も水中にあるかのようにふわふわと漂っている。

そして信じられないことに、倒れていたヘカトンケイルもわずかに浮かび上がっていた。

「リヴァアイアサンの万有斥力だな」  
アンチグラビティ

亮は当然のように俺を見て声を出した。

「どうやら俺はリヴァアイアサンの能力を使えるようになった。

なぜ使えるのか疑問に思ったが、今大事なのは、この好機を逃さないこと。」

上位元素から生まれた白い球体は、徐々に小さくなっていく。これが消えた時に今の現象が終わるのなら、急がなければならない。

「深月！今のうちにもう一撃だ！」

「っ——分かりました。総員、次撃用意！」

目標、対象の胸

部中央！

カウント 5！」  
ファイブ

すぐさま竜伐隊長の顔に戻った深月は、全員に指示を下す。

皆、ふわふわと体勢の定まらぬ架空武装を再生成し、宙に浮かび上がったヘカトンケイルに照準を合わせた。

「4、3、2、1——放てっ！」  
フォー スリー ツー ワン

島のあちこちから放たれた風が束ねられ、ヘカトンケイルの胸部に直撃する。無重力状態にあったヘカトンケイルは衝撃に大きく上半身を仰け反らせ、その巨体が高く宙に舞った。

そこでどうとう白い球体は消失し、辺りに重力が戻る。

「きゃんっ!?!」

イリスたちは尻餅をつく中、俺と亮は地面に降り立ち、空を睨む。

「よし、決めるか！」

亮は全身に力を込めると金色の光を放った。髪の毛は逆立ち、金色に輝いていた。どうやらヘカトンケイルを倒すために大技を出すつもりようだ。

ヘカトンケイルを見ると信じられないほどの高さまで吹き飛んでいた。このまま行けば狙い通り海へと落下するだろうが、その衝

撃は計り知れない。高波でミッドガルに大きな被害が出るのは確かだ。ならば――。

「ティア、俺に力を貸してくれ。あいつを、空中で消滅させる」  
俺はそう言っつてティアに左手を差し出す。

「手……握ればいいの？」

「ああ、頼む」

俺が頷くと、ティアは小さな指を絡ませ、俺の手をぎゅっと握った。

「ティアはユウのお嫁さん……だから、旦那さまと頑張るの」

「ありがとう――ティア。じゃあ、一緒にあいつをブツ飛ばすぞ！」

俺は右手を真横に翳し、脳内の設計図を生成した上位元素に流し込む。

ティアの架空武装である紅い翼が細かな粒子となり、俺の上位元素と混じり合う。

「対竜兵装――マルドゥーク！」

構築される砲塔は、かつて存在した前文明の遺失兵器。

だがこれは、マルドゥークという巨大な兵器の一部でしかない。リヴァイアサン戦で決定打を与えたのは、マルドゥークの主砲。そして、今から作り出すのは三年前にも奴を屠った殲滅兵器。追加データを得た今なら、その名も分かる――。

「――特殊火砲、境界を焼く蒼炎!!」

巨大な砲身が物資変換によって具現する。外観はどこか奇妙に幾何学的で、他文明の異質な雰囲気が漂っていた。あくまでも巨大な兵器の一部であるため、その機構は不完全。

あちこちパイプや回路が剥き出しで、一発撃てば自壊する。だけど、一発で十分だ。

俺は星空に浮かぶヘカトンケイルを見据える。精神と連動した砲塔は自動で動き、ゆっくりと落下に転じた巨人へ照準を合わせた。

横では亮が両手をヘカトンケイルに向けていた。手のひらに



は黄色い球体があり、ヘカトンケイルに向かつて放つつもりだ。

「行くぞ——」

「うんっ！」

俺の掛け声に、ティアが応じる。強く繋がった手から流れ込む上位元素を、砲弾のエネルギーへと変え——。

「——ファイア発射っ!!」

「ファイナルフラッシュ!!」

俺は境界を焼く蒼炎を放ち、亮も気功波を打つ。

蒼く輝く砲弾と黄色く光を放つ気功波が、真っ直ぐにヘカトンケイルへと吸い込まれ……二つの力が混じり、緑色の砲撃が巨人の体をも呑み込む大爆発が巻き起こる。

それは夜空に突如、緑の太陽が出現したかのような光景だった。

あまりの眩さに空からは星が失せ、大地には濃い影が刻まれる。

そして緑の光が薄れ、夜の世界に闇が戻ってきた時——空を覆う巨人の姿は完全に消え去っていた。

「どうだ……?」

俺は空をしばらく見つめ、周囲を見渡し、様子を窺う。

ヘカトンケイルは不死の怪物だ。すぐには気を抜けない。

だがいくら待っても青い巨人が再び現れることはなかった。

「ヘカトンケイル……やっつけたの?」

ティアが、俺を見上げて問いかけた。

「そうだな……やった、みたいだな」

躊躇いがちに俺が言うと、深月も頷く。

「通常であれば、とうに復活している時間が経ちました。五年前と三年前の例を考えると、倒し切れた可能性は低いですが、とりあえずミッドガルからの撃退には成功したようです」

「やったーっ! あたしたち、勝ったんだ!」

歓声を上げるイリス。そこでようやく張りつめていた空気が緩んだ。

「全く……手ごずらせてくれましたね」

リーザは俺に駆け寄ってきた。

「大丈夫ですか？ 相当顔が悪いですわよ」

俺の顔を見上げ、苦笑を浮かべるリーザ。

そういえば何だか視界が揺れる。左肩に触れてみると、傷口に巻いた布がぐつしよりと濡れていた。少々、血を流し過ぎたのかもしれない。

俺の様子を見た深月が、通信機でどこかへ呼びかける。

「——第二司令室、応答願います。誰かいませんか？ 応

答を——あ——篠宮先生、ご無事だったんですね。こちら物部深月。負傷者一名——至急、医療班をお願いします」

よかつた……篠宮先生は無事だったのか。

通信を聞いた俺は、安堵の息を吐く。時計塔が破壊されたので、心配していたのだ。

しかし時計塔の上部にあった学園長室は、ヘカトンケイルに薙ぎ払われてどこかへ飛んで行ってしまった。もしあの場所に学園長やマイカさんがいたのなら——。

胸に暗い気持ち満ちる。だがその時、近くの茂みがガサガサと揺れ、ぴよこんと金色の頭が覗いた。

「くそっ、ひどい目に遭ったわ！ ああ……私の、私の部屋が

……秘蔵のコレクションたちが……許さぬ、許さぬぞ、あの青い木偶め！」

腹立たしげな口調で呟きながら現れたのは、年齢不詳の学園長。全身泥だらけで服はボロボロになってだが、どこも怪我をしていない様子はない。

「シャルロット様が、わざわざあんな場所に私室を作るからですよ。何やらと煙は高いところが好きとは、よく言ったものですね」

学園長の後ろから、さらにメイド服の女性——マイカさんが姿を見せた。こちらも服はあちこち破けているが、ぴんぴんしている。

二人は俺たちに気付くと、こちらへ歩いてきた。

「おお、そなたら無事であったか。よかった、心配したぞ」

「いや、それはこっちの台詞なんですが……よく無事でしたね？  
学園長室にはいなかったんですか？」

俺は呆気に取られながら問いかける。

「ふん、私がああの程度で——もごっつ」

胸を張って頷く学園長だったが、その口を後ろからマイカさんが押さえる。

「そうです。ちょうどシャルロット様と二人で、夜の散歩に出かけようとしていたところだったんですよ。本当に、危機一髪でした」  
にこやかに微笑んで答えるマイカさん。

「は、はあ……そうだったんですか。よかったです」

先ほど学園とは反対方向の茂みから出て来た気がしたが、俺はマイカさんの迫力に圧されて頷く。

まあ、吹き飛ばされていたのなら無事でいられるわけがない。  
恐らく森の中へ逃げ込んで道に迷ってしまったのだろう。

そういうえば、亮の姿が何処にもいない。

「あれ……」

亮を探して顔を動かそうとすると、一気に力が抜けて、急に強い眩暈が襲ってくる。

「ちよ、ちよつと何をされるんですの!?!」

俺は立っていられず、リーザに寄りかかってしまった。ぼすんと、顔が大きくて柔らかいものに包まれる。

「あつ、ユウ！　　浮気しちやダメー！」

ティアの声が響くが、もう体に力が入らない。

「全く……今だけ、特別ですわよ」

耳元でリーザの囁きが聞こえ、頭が優しく撫でられる。

心地よい感触に抱かれながら、俺は深い眠りに落ちていった――



ミッドガルから数十キロ離れた空の上で、キーリ・スルト・ムスペルヘイムは彼方に瞬く緑色の光を目にした。

「何だ——やられちゃったのね、お母様」

キーリは口元に手を当て、おかしそうに笑う。

「あの炎は、またしても境界を越えた……三年前のことは、やはり奇跡ではなかったんだわ。お母様はきつと、向こう側で苦しんでいるでしょう。あーあ、いい気味」

気分が高揚したのか、夜空をくるくると舞い、キーリは笑い声を響かせた。

「勝手に横槍を入れるからこうなるのよ。余計なことをしなれば、私が隙を見てティアを連れ出したのに……よほど焦っているのかしら」

軽やかに空を飛びながら呟くキーリ。もう水平線の向こうに沈んで見えなくなってしまったミッドガルの方を振り返り、目を細める。

「けれど——これで私もお母様も、手詰まり。彼らとバジリスク、どちらが勝っても当初の計画は破綻する。そうなったらもう、さすがに隠れ続けてはいられないわよ？そろそろ、彼らも、ヘカトンケイルの正体に気付くかもしれないし」

「……結果がどうあれ、たぶんお母様は大きな損失だと嘆くでしょう。でも私は、彼が勝てばつり合いは取れると思うのよ。だって彼は——」

キーリはそう言いながら、自分の腹部に手を当てた。

「——私のつがいに対応しい、ドラゴンなのかもしれないんだから」

彼が牙を突き立てた場所を愛おしそうに撫で、キーリは微笑む。

「……つまり悠がノインということだな」

「っ!？」

僕の言葉に驚いたキーリは振り返り、距離を置く。

「まさか……気配を感じ取らせずに近づくなんて……」

キーリは自分の背後に回られたことが信じられないようだ。

「立川穂乃花——いや、キーリ・スルト・ムスペルヘイムだな」

僕は彼女の名前を呼んで微笑んだ。

「制服がボロボロのようだが、やはり地雷を仕掛けておいて良かった」

「っ!? あれはあなたの仕業だったのね」

キーリは宿舎で謎の爆発に巻き込まれ、制服がボロボロになっていた。

「ああ、君がティアちゃんを連れ去るために潜り込んでいることは全校集会で分かっていたからね」

僕は原作を読んで知っているため、立川穂乃花の正体を知っていた。

「……あなたが大島亮ね。噂は聞いているわ。ドラゴンを倒した経歴と不思議な力を持つ男の”D”。噂以上だわ。まさか気付いたなんて……」

キーリは微笑んでいるが、上位元素を周りに生成している。警戒している証拠だ。

「無駄だ。ムスペルヘイム渦炎界を使っても僕には意味がない。ヴリトラヴリトラから生まれた存在よ」

「っ!? 何でそのことを!?!」

キーリは更に驚いた。僕は続けて言葉を発した。

「それだけじゃない。ヘカトンケイルの正体が”黒”のヴリトラの架空武装だつても、悠がノインだつても、ティアちゃんの角が”緑”のユグドラシルの中枢を乗っ取るために作り出したことも……悠たちはまだ知らないが僕は知っている」

「……………」

キーリは驚きのあまり、言葉が出ないようだ。ちなみにこのことも、原作で得た知識だ。

「”緑”のユグドラシル……僕たちはいずれ戦う時がくる。その

時は共闘できるかもな」

「……なるほど、全部知っているんだ。私の想像を遥かに超えているわ」

「そりやどうも……それで？　　ここで僕と戦うつもりかい？」

僕はキーリに戦闘の意思があるか聞いてみた。するとキーリは上位元素を解除した。

「いいえ、やめとくわ。彼でも殺されかけたのに、あなたと戦えば確実に死ぬわ。このまま帰らせてもらおうわ」

「賢明な判断だな。」黒のヴリトラに伝えてくれ。いつか会う日が来るかもなって」

僕はキーリに伝言を伝えた。

「ええ、伝えておくわ。ふふつ……大島亮、また会いましょう」

「ああ、一ヶ月後にな」

「？」

キーリは首を傾げながら飛び去った。僕はキーリが視界から消えてから、ミッドガルに戻る。

## 石頭

目を開けると、真っ白な天井が瞳に映った。鼻孔を消毒液の香りが撫でる。

(……は?)

体を起こそうとするが、左肩に激痛が走って動きを止めた。いったん痛みを意識すると左肩だけでなく、右の手のひらや右肩からも鈍痛が伝わってくる。

痛みを感じる箇所には包帯が巻かれているらしく、力を入れると抵抗を感じた。近くから、すーすーという寝息が聞こえる。

顔だけを動かして周囲を見回す。

どうやらここは病室で、俺はベッドに寝かされているらしい。ベッドの両脇にはイリスとティアの姿があった。パイプ椅子に座る二人は、ベッドのシーツに顔を伏せて眠っている。すると病室の扉が開かれる音がした。

「よう、目覚めたか」

顔だけを動かして入り口を見ると、亮が入ってきた。

「ああ、ついさっきな」

俺は答えると、亮は杖を取り出して先端の丸い球体を見た。

「……なるほど、全治二週間くらいかな。完全に治るまでそのくらいかかるそうだな」

亮は杖を使って俺の容態を調べてくれた。

「そうか……ありがとな」

「なあに、気にするな」

亮の持っている杖は神様専用の道具のようで、「世界神」だけが使うことを許された”神器”と本人は言う。

機能はなんでもできるようで、映像を写し出すだけではないよ。うだ。

「なんなら僕が直してあげようか？」

数秒あれば完全に治る

ぞ?」

「いや、遠慮しておく。そんなことをすればお前の正体がバレる

ぞ」

亮は俺を治そうとしてくれたが、そうすれば周りから怪しまれると思ひ、断った。

「それもそうだな。二人はまだ目覚めてないから大丈夫みたいだ」

亮はイリスとティアの方を向いて様子を見た。

すると、ティアがびくりと肩を揺らし、目を擦りながら起き上がった。

「ユウっ！　起きたの!?!」

ティアは俺に覆いかぶさるようにベッドの上へ身を乗り出す。

「あ、ああ、少し前にな」

俺が多少面食らいながら答えると、ティアの瞳に涙が浮かぶ。

「よかったあ……ユウがもし起きなかったら、どうしようって思ったの……」

「ティアちゃん、イリスさんと一緒に看病してたみたいだぞ？ 悠が目覚めるまでここで待つて言つてたもんな？」

ティアは亮の言葉をこくりと頷き、俺は苦笑しながら浮かべる。

本当は涙を拭つてやりたかったが、両腕とも包帯を巻かれてるので、そんな細かな動きはできない。

「ユウ………ありがとうなの」

すると何故か、ティアに礼を言われてしまう。

「え？　なんだ、いきなり?」

話の流れが分からず、戸惑いながら俺は問いかける。

「だって、ティアのために戦つてくれたから。リーザたちには、もう言つたの。他の人にも、ミツキの通信機を借りて、ありがとうって伝えたの。だけど、ユウには……まだ言えてなかったの」

「……そういうことか。でも礼を言うのは少し早いぞ?　こ

れから、バジリスクとの戦いがあるかもしれないんだからな」

バジリスクが海を越えられないと楽観する見方もあるが、そう上手くは行かないだろう。キーリも”D”とバジリスクの戦いを避



けるために、ティアを連れて行こうとしていた。たとえ海に阻まれようと、バジリスクはミッドガルへ向かってくるに違いない。

「うん……でも、だから余計にお礼を言わなくちゃって思うの」  
俺たちと同じ生き方を選んだからこそ、ティアはどれだけの人々が尽力してくれたかを理解し、彼らの仲間として感謝を伝えられたのだろう。

俺はごそごそと身じろぎをする。左腕は無理そうだが、右腕なら何とか動かすことはできそうだ。

「——ティアは、いい子だな」

俺は包帯が巻かれた右手で、ぎこちなくティアの頭を撫でる。右手に負ったのは軽い火傷だったので、ティアに触れてもそれほど痛みはない。

「あははっ、くすぐったいの」

「んう……ユウの手、おっきい……」

まるで猫のように喉を鳴らして甘えた後、ティアは俺に顔を寄せてくる。

「ねえ、ユウ……ティア、ユウのこと大好き。だから、ティアとケツコンしよ?」

突然のプロポーズに俺は慌てる。

「いきなりじゃないの。ティアはずっと、ユウのお嫁さんになるって言ったの。あれはドラゴンとしてだったけど……今度は人間として、ケツコンしたいの。ユウは、嫌?」

「い、嫌とか、そういう問題じゃなくて——」

動揺する俺にそれまで黙って見ていた亮が口を開ける。

「ティアちゃん、結婚の条件は国によって違うけど、基本的にはまだ無理だよ」

亮はティアに説得をする。ティアの国籍が分からないので、結婚する年齢は国によって違う。さらに亮は言葉を続けた。

「だから今は婚約者でいいと思うよ?」

「え?」

俺は亮の言葉に固まった。

「そっか！　　コンヤクがあつたの！」

ティアは納得すると俺の頬にちゅっ、と柔らかな唇が吸い付き、すぐに離れる。

「これでユウとティアはコンヤクシヤなの」

嬉しそうに表情を緩ませる。

俺は呆然と頬に手を当てる。

突然のことに驚いただけではない。どうしてだろうか……俺は婚約者という響きに、懐かしさのようなものを感じ、深月の顔を思い出す。

硬直したまま、どう返事をしようか考えるが……ふとベッドからガタガタと振動していることに気が付いた。

嫌な予感を覚えつつベッドの反対側に顔を向けると、引きつった笑みを浮かべているイリスと目が合った。いつの間にか、目を覚ましていたららしい。

「ちよっ、ちよっとティアちゃん、い、今、何したの!？」

裏返った声でイリスが問う。

「何って、コンヤクのキスなの。コンヤクだから、ほっぺ。それで、いつかケツコンしたら、お口にするの」

「な、ななななななっ——そ、そんなのダメ！」

顔を真っ赤にして叫ぶイリス。

「ダメじゃないの。キスしちゃったから、もう手遅れなの」

「き、キスなら、あたしだってしたもん！」

「ええっ!？」

イリスの言葉にティアは愕然とした表情を浮かべる。突然の宣言に俺も焦り、二人の会話に口を挟んだ。

「お、おい、イリス！それはこんなところで言うことじゃ——」

「だって……言わないとモノノベがティアちゃんの婚約者になっちゃうじゃない」

涙目で睨まれて、俺は慌てる。

「いや、ティアはまだ婚約とか結婚とか、よく分かってないだけだつて。つていうか、その……ど、どうしてそんなに張り合うんだ？」

落ち着かない気分で、躊躇いがちに問いかける。

「え？　　そ、それはその……………」

イリスは頬を染め、もじもじしながら顔を伏せた。気恥ずかしい空気が俺とイリスの間に満ちる。

「むうーっ！　　ユウ、こっち向いて！」

だがティアに顔を掴まれ、ぐいっとティアの方を向かれる。

「あつ、無理やりモノノベを動かしちやダメだよ！　　怪我人

なんだから！」

そう言つてイリスは、俺の頭を元の位置に戻す。

「ちよつ、く、苦しいって！」

イリスの柔らかな胸が顔に近く、視線がそつちに行つてしま  
う。

「悠、モテモテだな」

亮は笑いながら面白がってきた。

「亮、なんとかしてくれ」

「無理言ふなよ。僕にそんなことできるわけないだろ？」

助けを求めたが、断られた。

ティアとイリスは俺の頭を掴んだまま、ベッドを挟んで睨み合  
う。

「イリスがティアより早くユウとコンヤクしてたつて、ティアは  
絶対負けないの！」

「ええっ？　　あたしも婚約してることになったの？」

そ、その…………あたし、まだ心の準備が…………」

イリスはティアの言葉にどぎまぎし、俺にチラチラと窺うよう  
な視線を向けてくる。事態は次第に收拾がつかなくなってくるが、そ  
の時——病室の扉からリーザが入ってきた。

「何を騒いでいるんですの？　　他の病室には患者さんがいる

のですから、もう少し静かにしてください」

ぴしやりと厳しい一声に、ティアとイリスは口を噤む。

リーザの後ろには深月、ファイリル、レン、アリエラの姿も見え  
る。

「あ、リーザ……ごめんなさい、なの」

急にしおらしくなったティアは、俺から離れてリーザに謝る。

「あたしも、ごめんね」

申し訳なきようにイリスも頭を下げた。

「分かればいいんですわ。まあ彼が目覚めたからだろうと、予想は付いていましたが。で——調子はどうですか、モノノベ・ユウ」  
リーザは金色の髪を掻き上げ、ぶっきら棒な口調で俺に問いかける。

「……左腕はしばらく動かさそうにないが、あとはまあ、たぶん大丈夫だ」

「そうですね……では不都合なことも多いでしょう。今後、何か困ったことがあればいつでも言うといいですわ。できるだけ力になりますから」

「え……？」

俺はリーザのあまりに優しい言葉を聞いて、思わず間の抜けた声を上げてしまう。

「何ですか？ わたくし、何か変なことを言いましたか？」

「いや……別に。その、ありがとう」

「構いませんわ。仲間が困っている時は助け合うのが当然ですから」

そうか、リーザは単にこういう奴だった。仲間のためには体を張るし、怪我人や困っている人には世話を焼く。それが当たり前のようにできる人間なのだろう。

「本当に、助かる。リーザはやっぱり”いい女”だよ」

「なっ……そ、それはどういう意味ですか？ セクハラでしたら許しませんわよ？」

頬を赤くし、怒った顔でリーザは俺を睨みつける。

「ん、ああ、単純に人間性を褒めたつもりだったんだが……尊敬できるって意味でさ。けど……まあ、美人って意味でも、いい女だとは思うぞ？」

性格だけを褒めるのも失礼かと思ひ、俺は正直な感想を付け足

した。

「くくくつ!?!」

リーザの顔にみるみる血が昇っていく。怒鳴られるかと思っただが、リーザはそのままくるんと背を向けて早足に病室を出て行ってしまった。

「……ナイス」

何故かフィリルは俺にぐっと親指を立ててから、リーザを追いかけていく。

「物部クン……自分の発言には責任を取りなよ?」

「んっ!」

呆れた顔でアリエラは言い、その隣でコクコクとレンも頷く。

二人もフィリルに続いて部屋を出て行った。

「……じゃあ僕も帰るか。それじゃ」

それまで黙って状況を見ていた亮はそう言っただけで病室を後にすると、深月、イリス、ティアの三人が残された。

「モノノベは……リーザちゃんみたいなタイプが好きなんだ……」

「うう……リーザにはきつと勝てないの」

イリスとティアはどうしてか落ち込んだ様子で、ぶつぶつと独り言を口にしていた。深月はジド目で俺を見つめていたが、こぼんと咳払いをしてイリスとティアの二人に言う。

「——申し訳ありませんが、私はこれから兄さんと重要なお話があります。軍機に触れる内容もありますので、お二人はしばらく席を外していただだけませんか?」

「はあい……」

「分かったの……」

イリスとティアは元気のない声で答え、素直に病室を出て行く。二人きりになると、深月はイリスの座っていた椅子に腰を下ろし、じつと俺の顔を覗き込んだ。

「……兄さん?」

先ほどの発言はやはりセクハラですよ?」

「う……リーザには後で謝るから、反省文は勘弁してくれないか

？」

「——仕方ありませんね。今日は大目に見てあげます」

なんとか許してもらい、深月は真剣な表情にある。

「基本的には事後報告と簡単な聴取です。まず、ヘカトンケイルですが、ミッドガルに現れた時刻にらそれまで位置を捕捉していたシベリアから姿を消していたことが確認されました」

澀みない口調で説明する深月に、俺は訊ねる。

「それって、シベリアからここにワープしたってことか？」

「……分かりません。そんな能力があるとは、今まで一度も報告されてないですから。まだヘカトンケイルの復活も確認されていませんし、これは調査待ちですね。それより問題は——兄さんのことです」

深月は俺を見つめ、真面目な顔で言う。

「俺のこと？」

「ええ————一時的に重力を打ち消した……まるでリヴァイアサンみたいな力は何だったんですか？ 私には、兄さんが反重力物質を作り出したかのように見えましたが……」

深月が聴取したかったのは、俺がヘカトンケイルを重力干渉させたことについてだったのだろう。だが正直、何故俺にもあんなことができたのかは分からない。ユグドラシルに促されるまま、アシチケラヒティ万有斥力と呟いただけなのだ。

「いや、何となく……できるかなって思ったら、ホントに作れただけ……」

だから曖昧に答えるしかない。

「あんなもの、何となくで作れたら困ります。……さすがに、隠し事が多すぎませんか？」

深月は語気を荒くして俺に詰め寄る。

「……悪い、深月。確かに隠していることはあるけど、反重力物質のことはよく分からないんだ」

「そうですね……あくまでも、秘密にするんですね」

怒った表情で深月は俺を至近距離から睨みつける。

「いや、だからホントに——」

「だったら、次の質問には絶対に答えてください！」

「え？」

深月は今まで以上に真剣な光を瞳に宿し、口を開く。

「兄さん……イリスさんとキスをしたというのは、本当ですか？」

「なっ、き、聞いていたのか？」

思わず声の上擦った。

「……私、扉の外にずっといましたよ」

「じゃ、じゃあ……まさか、リーザたちも？」

「いえ、リーザさんたちがやってきたのは、私が中に入るタイミン  
グを失くして外に立ち尽くしていた時だったので……キスのくだり  
を聞いていたのは私だけです」

その返事に少しだけ安堵するが、深月に聞かれていたという最  
悪の状況は変わらない。

（あれ、俺はどうしてこんなに動揺してるんだ？）

反省文が嫌だというものもあるが、それだけでは説明が付かな  
いほど俺は焦っていた。

「いや、あれはその……リヴァイアサンと戦った時のお礼とい  
うか、そんな感じで……」

「つまり、本当にしたんですね？」

「う……は、はい」

観念して俺は頷く。すると深月はふうつと息を吐いた。

「……そうですか」

怒ることもなく、深月は俺から顔を離す。どこか疲れた様子で  
椅子に背を預ける深月は、普段以上に小さく見えた。

「深月？」

俺は心配になつて声を掛ける。すると深月はどこか無理をし  
ているような笑みを見せて言った。

「ティアさんには頬に婚約のキスを貰っていたようですが、そ  
ちらは子供のしたことですから不問にします。けれど、イリスさんのキ  
スに関しては誠実に対応してくださいね？そうでないと、不純だと見

なして反省文です」

口調は明るい、声は微かに揺れている。

「ああ……分かった」

戸惑いながらも俺は頷く。

「けど——私も、謝らなくてははいけませんね。兄さんと、イリスさんに」

けれど深月が自嘲じちようを込めた声音で呟くのを聞き、俺は眉を寄せた。

「どうしてだ？」

「だって……きつとイリスさんは初めてだったのに、兄さんの初めては——私と……だったんですから」

「え——」

その言葉を聞いて、頭の中が真っ白になった。俺の中に、そんな思い出などなかったから。恐らくユグドラシルとの取引——兵器のデータのダウンロードによる影響で消えてしまったのだろう。胸が軋きしむ……心の空隙くうげきを強く意識する。

「……ティアさんと同じく、所詮子供のしたことです。あの時のキスも、いつかの約束も、全部なかったことにしてくれると助かります。もう、忘れてください」

寂しそうな顔でそう言われても、その記憶自体が既に存在しない。だが——。

無意識のうちに、俺は右手を伸ばして深月の腕を強く掴んだ。

「兄さん……？」

「……忘れない」

「戸惑う深月を胸元に引き寄せ、喉から声を絞り出す。

「っ……」

「忘れないから」

既に失われた記憶だが——だからこそ、この事実を忘れない。忘れたことを忘れない。

深月に悲しい顔をさせないためなら、俺はどんなことだってする。



ないものだって、あると言い張る。

「思い出をなかつたことにしろだなんて、嘘でも言うな」

俺は右腕で深月の体を抱き締め、強い口調で言葉を続けた。

「俺は深月のおかげでこうしてミッドガルに来れたんだ。だから深月も我儘を言ってくれていいんだぞ？」

「……いいえ、私は生徒会長であり、竜伐隊の隊長です。我儘なんて……」

そう言つて深月は顔を上げた。瞳は潤んでいたが、涙は零れていない。俺と深月は、息が掛かる距離で見つめ合う。

「それに私の立場は、償いのような罪を犯して得た力。決して誇れるものではありません」

償いのような罪——それはたぶん、二年前のクラーケン戦でドラゴン化した親友を討つたことを指しているのだろう。

「……無理に誇れとは言わないが、悔やむ必要はないんだ」

「兄さんは……いつだって優しいんですね。けれど、私はそこまですぐに甘くなれません」

深月は俺の胸をそつと押して、体を離れた。

「私は自分の罪を贖うため、戦い続けます。これ以上、満たされることは望みませぬ。幼い頃の願いなんて……叶わなくてもいいんです」

感情を抑えた口調で深月は言い、悲しげに笑う。

それを見て、心の底から激しい衝動が湧き上がった。

「——いいわけ、ないだろ」

「え？」

きよとんとする深月。俺は衝動に従つて、無理やり体を起こす。左肩を中心に激痛が走つたが、奥歯を噛み締めて悲鳴を堪えた。

「に、兄さん!? まだ起きてはダメです！」

慌てて深月を押し留めようとする。けれど俺は逆に深月の肩を掴み、自分の想いを絞り出す。

「深月が戦いに身を置くことですか、自分を許せないっていうのなら……俺はその戦いを終わらせるために、全てを懸ける」

「兄、さん……？」

「いいか、深月。俺は絶対に——お前の幸せを諦めてやらないからな」

深月と目を合わせ、俺は断言した。小さく息を呑んだ深月の目に涙が滲む。しかし<sup>まぶた</sup>瞼から<sup>こぼ</sup>零れ落ちる前に、深月は手で涙を拭いた。

「全く……もう、ホントに——」

深月はぼやきながら俺に顔を寄せ、額同士をコツンと触れ合わせる。

そして淡く微笑み、優しい声で言葉を続けた。

「——兄さんは、石頭なんですから」

## クリムゾン・カタストロフ

### 二年前

神界とは神々が住む世界。下界との時間の流れが違い、神界の六時間は下界では一分で、ドラゴンボールに出てくる『精神と時の部屋』と同じである。

神々は老化することはない。自分の意思で若さを操作することができ、外見は若い。歳は人間の何十倍も上である。

しかし、時間の流れや歳は違えど、年は下界と同じである。どんなに長生きしようとも、神界では365年で一年とされている。

これは二年前（神界では約720年前）の出来事。

ここは第十世界。十二の世界で一番緑が生い茂っている。文明レベルは最下位だが、森やジャングル、草原と自然レベルでは一位である。

この世界を管理しているのは“世界神” グラン・ロック。性格はだらしなく、会議や緊急時以外はシャツとパンツで仕事している。仕事のノルマはこなすだけであとは為体に暮らしている。

しかし、“世界神”としての実力があり、物体や物質などを創り出す早さは神々も認めるほどで、後始末や非常事態では活躍している。

グランは二神ふたりの神といた。

「グラン！何度言ったら分かる？だらしないぞ！ちゃんと服を着なさい」

「いいじゃないか、別に……ホントうるさいな」

一神ひとりは第五世界の“世界神” 生駒八代。グランとは正反対の性格で、生真面目あり、いつもスーツを着ている。グランとは同期でいつも叱っている。防御力は世界神最強である。

「良くありません！貴方も立派な神なのですよ。しっかりしなさい」

い

「ええ、亮くコイツになんとか言ってくれよ」

「そう言われなくても……」

グランは亮にの神に助けを求めたが、亮は苦笑いをして言った。

大島亮。第十二世界の”世界神”で、神になったばかりの新神である。”世界神”で超サイヤ人に変身ができる。

「全く貴方という神は……それより仕事に掛かりますよ」

「そうですね。行きましょう」

「ハア、面倒くせ」

八代たちはジャングルの中に入って言った。

実は最近、この世界に住む生き物が、歪みに触れてしまい、凶暴になったと知らせを聞き、歪みの修復と触れた生物を正気に戻すのが今回の仕事であり、何があるかわからないということで神官王は三神の”世界神”を派遣したのだ。

八代たちはジャングルの奥に進むにつれ、歪みの力が強くなることが分かる。

「もうすぐ岩場に付きますよ」

「それにしても人の気配がしないな」

「そうですね……気味が悪いですね……」

歪みはもうすぐ付くはずが、凶暴になった生物は見当たらない。本来、歪みを守るため、近づくものを排除するよう行動するが、誰一人も見かけなかった。

すると――

「!!!!」

三神は急に止まった。気配を感じたのだ。しかし、姿は見えない。

い。周りを見渡すと、

「何!!」

八代は急に吹き飛ばされた。すぐに気で空中に止まり、倒れずに済んだ。

「どうした、何があった?」

グランは八代に聞くと、

「それが、背中から蹴られたんだ」

「!!」

二神ふたりは驚いたが、すぐに三神さんじんは背中を合わせ、小声で話した。

（大丈夫か？）

（大丈夫ですが……敵は見えませんでした）

（見えなかっただど!?気は感じられるのか？）

（ええ、まるで透明人間に背後を襲われたかなように……）

姿が見えない敵、すると亮は気を感じ取り、こつちに近づくことに気づく。亮はすかさず気候波で攻撃するが、当たらない。しかもまだ敵はいる。しかも一人だけではない。何十人の気を感じる。

（囲まれましたね。姿が見えない敵、しかも攻撃が通用しないなんて……）

（心配なさらないください。今からシールドを張ります）

八代はそう言ってバリアを張った。すると外側から多数の衝撃が起きる。

敵の姿は見え、足音も聞こえない。亮たちは見えない敵に防戦一方だった。するとグランは地面を見ていた。

（どうしましたグランさん）

（いや、ガサガサ音がしたから気になって見たんだが……下からも衝撃がきてるみただ）

（下からですか？）

亮は下を見ると攻撃されていることに気づく。

（一体どうなってるんだ？しかも何処かで見たとような……）

亮は敵の正体を思い出せなかった。

「……なるほど……もしかしたら」

八代は何かに気づいた。

「何か分かったのか？」

グランは八代に聞いた。

「ええ、分かりましたよ。亮さん、超サイヤ人になってください」「分かりました。ハア〜」

亮は八代に言われたとおりに超サイヤ人になり、八代はシールドを消した。

気の圧力でジャングルの木は揺れた。すると八代は枝の周りにシールドを張り、亮たちに見せた。すると枝には虫がいた。

「攻撃の正体はこの虫人間だ」

見ると小さな虫だった。そして亮は思い出した。ドラゴンボール超に出てくる第四宇宙の”虫人間”ダモンにそっくりだった。

「なるほど……コイツらが攻撃してたのか。確かに姿は小さすぎて見えなかったな。おまけに素早しつこいから全然当たらないわけか」

グランは攻撃が全く通用しないことに納得していた。

ドラゴンボール超の力の大会ではピッコロを場外に落とし17号を吹き飛ばすほどの攻撃力を持っていた。しかし、対策はある。

「八代さん、グランさん。虫人間たちが近づいてきます。僕が気で奴らを舞い上げます。羽はないみたいなので飛ぶことはないでしょう」

「なるほど、機動力を奪った時に奴らを攻撃するわけだな」

「分かりました。私はその隙に歪みを修正させます。グランは奴らを蹴散らしてください」

「よし分かった。亮、さっきのを頼む」

「分かりました！では……」

今度は超サイヤ2になり、力を解放した。八代はその隙に歪みのある方に行った。気で暴風を生み出し、虫人間達を浮かせた。そしてグランは気候波を周りに打ち込んだ。虫人間達は飛ばされ、三神さんじんの気が感じ無くなった。

「やったな！これで当分は来ないぞ」

「そうですね、早く八代さんのところに行きましょう」

亮と八代は歪みのある方に向かった。八代は歪みを修正し、仕事はクリアし、神界に戻った。

それから翌日、グランはジャングルに行くと虫人間達は何事もなく暮らしていた。



海が蹂躪されている。

無数の触手が青い海を銀色に染め変えていく。その中には二本の足は何かに斬られた傷があり、先端がなかった。

放射状に広がる触手の中心には、巨大な紫色の眼球がのぞいていた。

それはあまりに異質で、強大な生物の姿。

ドラゴンと総称される怪物の一体。

パープル・ドラゴン——紫のクラークン。

蛇腹状に連結され、鞭のようになる触手は、ミスリルと呼ばれる理論上最硬の合金製で、紫色の眼球から放つ反物質弾はあらゆるものを消滅させる。

最強の矛と盾を同時に用いるその能力は、絶対矛盾（アブソリュート）と呼ばれていた。

「あの時と……同じ」

十四歳の物部深月は、ミッドガルへと侵攻してくるクラークンを遠くの空から見下ろし、小さな声で呟く。

以前見た青のヘカトンケイルは、大地を砕き、隣町を踏み潰していた。ドラゴンというのは、ただ存在するだけで世界を壊すものなのだろうか。

銀色の触手に侵食されていく海面を眺めながら、深月はそう考える。

「ぼーっとしてちやダメだよ、深月」

すると横から声が響く。その途端、架空武装からの空気変換で宙に浮いていた深月はバランスを崩した。

「ちよ、ちよつと都、あまり近づかないで！風が干渉し合って落ちちやうじやない！」

深月は慌てて体勢を立て直し、傍に寄ってきた少女に文句を言った。

「あ、ごめんごめん。深月はまだ、あんまり飛ぶの上手くなかったよね」

頭を搔いて謝る少女は深月とほぼ同時期にミッドガルへ転入した篠宮都。深月と寝食を共にするルームメイトであり、彼女が唯一敬語を使わずに話す親友だ。

艶やかな黒髪を肩の辺りできつちりと切り揃えている都は、大和撫子という表現がしっくりくる少女だった。彼女の架空武装が薙刀の形をしていることも、その印象をより強めている。

何でも器用にこなす都は空気変換による飛行法も深月よりずっと上手い。深月はそんな親友のことを少し嫉妬しながらも、尊敬していた。

「そこ、無駄口を叩くな！敵はもう目の前だぞ！」

私語を交わす深月と都を、部隊の隊長である篠宮 遥が叱る。

「……お姉ちゃんに怒られちゃった」

悪戯っぽく舌を出し、都は笑う。彼女は遥の妹だ。生真面目な遥と、常にふざける余裕を忘れない都の性格は真逆と言ってもよかったが、容姿はとても似ている。特に顔立ちは瓜二つだ。

「都、ありがとう」

深月は小声で礼を言う。クラーケンの威容に呑み込まれていた深月の緊張を、都は解こうとしてくれたに違いないのだから。

「んー？何のことかなあ？」

ごまかすように都は笑い、ダークマター上位元素で形作られた薙刀——  
夜裂く刃の切っ先を、彼方のクラーケンに向けた。

「……頑張ろうね、深月。ミッドガルを——私たちの居場所を、守るために」

深月に微笑みながらも、真剣な声で言う都。

「——うん」

表情を引き締め、深月は頷く。

十六歳になった今でも、深月はこのとき見た都の笑顔をはつき



りと覚えている。

その表情は瞼の裏に焼き付いていて、目を閉じるといつでも思  
い出せる。

だってそれは——深月が最後に見た、親友の微笑みだったの  
だから。

## 侵攻

午前六時、朝は”虚無の世界”で修行をするが、今日は外の空気を感じたいため、重りをつけてランニングをしている。

両腕の付けているリストバンドと服と靴に重力を重くすると、さすがに動きが鈍くなる。

ミッドガルに転入してから一ヶ月が経ち、学生生活を謳歌している。

ここでの生活は楽しく、まさに楽園だ。

つつい怠けたくなるが、神としての仕事が山のようにあるので放課後には”神界”に戻って作業をしている。

最近の仕事も少なくなってきたので、”神界”にいる時間が少なくなっている。

そうしていると八重さんから怒られるので出来るだけ居るようになっている。

ミッドガルの周りを三周目に差し掛かっていたとき、前の方から強い”気”を感じた。

その”気”は僕がミッドガルに転入してきた時にも感じた気だ。

確か向こうは女子寮があるので、誰かが出てきたのだろう。

僕は強い気を持つ人を確認するために速度を上げた。

一分もしないうちに後ろ姿が見えた。

茶髪に緑のリボンを付けている少女、クラスメイトのアリエラ・ルーだ。

やはり彼女は只者ではない。動きに無駄がなく、フォームも綺麗だ。

それに今までの訓練での動きを見ると、軍人の動きにそっくりだ。

彼女のことは原作で知っているため、彼女が何故そんなことができるのか分かっていった。

しかし、改めて彼女の強さを知る。ただのスポーツが得意な少

女とは比べ物にならない。

素手での勝負なら実力は悠と互角に渡り合えるほどの強さだが、武器を持てば凌駕するだろう。

そう思うと、一緒に走りたくなってきたので僕は彼女の隣にまで早く走り、追いついた。

「アリエラさん、おはよう」

「おはよう。 やっぱり後ろにいたのは君だったんだね」

僕が挨拶をすると、アリエラさんが返してきた。しかも僕の存在に気づいてたようだ。

「気づいてたんだ。 足音を同じテンポにしてなのに」

「まあね、気配が少しあったからね」

アリエラさんは走りながら答えてくれた。

「最初は物部クンだと思ってたけど、気配を殺して近づいてくるからもしかしたらと思ってね」

アリエラさんはやはり只者ではない。気配だけで気付くとは思わなかった。

「転入初日から思ってたけど、本当にすごいな」

「えっ？　ボクのことをそう思ってたのかい？」

「まあね、外で修行していると強い気配を感じたから隠れてたんだけど、まさか僕に気付くなんて……」

僕は転入初日の朝に浜辺で修行してたことを口にする。

「やっぱり君だったんだ。でもどうして隠れてたんだい？」

「深月さんからまだ他の生徒と接触を禁止してたからね。もしバレたら反省文を書かせるって言われた」

「なるほど、たしかに深月の反省文はキツイね」

アリエラさんは納得したようで、苦笑を浮かべる。もしかしたら反省文を書いたことがあるかもしれない。

「どうだい？　ボクと勝負しない？」

「勝負？」

アリエラさんは僕に勝負を吹っかけてきた。

「女子寮の前までをゴールにして、どちらかが速く付くかで決め

ようよ

「いいよ、受けて立つ」

こうして朝はアリエラさんと勝負して、楽しい特訓を過ごした。

◇

二十五年前、日本上空に出現した最初のドラゴン——黒のヴリトラ。

それ以降、人間の中に生まれ始めたヴリトラと同じ力を持つ子供——上位元素生成能力者“D”が集められた南海の孤島。そこそがこのミッドガルだ。

設立当初は隔離施設の側面が強かったミッドガルだが、現在は自治組織として世界に大きな影響力を持つようになった。

任意の物質を上位元素からの変換で作りに出せるという能力は、経済的な価値がとて高い。希少な資源の生産依頼を引き受けることで、“D”は社会に貢献している。

だが、ミッドガルには公になっていない、もう一つの役割があった。それは、つがいを求めて襲ってくるドラゴンを迎撃し、倒すこと。

ドラゴンに見初められた“D”は、接触されることで同種のドラゴンに変貌してしまう。そして今まさに狙われているのが、俺の膝に腰かけているティア・ライトニングだ。

彼女を見初めたのはレッド・ドラゴン——赤のバジリスク。現在もティアを求めてアフリカ大陸を横断しているらしい。だが大陸とミッドガルの間には大海が横たわっているので、泳ぐのに適さない肉体構造を持つというバジリスクが、海を越えて来るかはまだ分か

らなかった。

「はい、あーん」

ちよこんと膝——正確には太ももの上に横向きで座ったティアは、手にしたサンドイッチを俺に差し出してくる。無邪気で、無垢な笑顔を浮かべながら。

まるで悩みなどなさそうな風に見えるが、五日前までは自分のことをドラゴンだと言い、他の”D”たちとの間に大きな壁を作っていた。

しかしクラスメイトたちの優しさに触れ、俺たちと一緒にいることを——人間として生きることを選択し、ティアを迎えに来たドラゴン信奉者団体『ムスペルの子ら』のリーダー、キーリの手を自らの意志で振り払い、ティアは今ここにいる。

場所は食堂棟一階にあるカフェテリア。当然他人の目もあり、こんなことをするのは恥ずかしい。だが下手に遠慮した場合、またティアとイリスが言い争いをし始める可能性がある。

「モノノベ、次はあたしだよっ」

右隣に座るイリスが体を寄せて俺にサンドイッチを近づける。ちなみにティアに食べさせてもらったのはタマゴサンドで、イリスが持っているのはツナサンドだ。

右腕は普通に使えるので、食事まで手伝ってもらうのは心苦しかったのだが、それを言うといリスに「そんなこと関係ないよ」と返されてしまった。

もしここに亮が居たとしたら間違いなく面白がってくるだろう。

あいつは”D”ではないが、この世界の神である。想像と破壊を司っているようで、その気になれば世界を作ること破滅させることもできる。

訳あってミッドガルの学生として生活をしているが、他の生徒は特別な力を持った”D”とされているので、正体を隠している。

「……………いただきます」

俺は周囲の視線を意識の外に置き、イリスのサンドイッチを頬

張る。

「えへへー」

嬉しそうに表情を緩ませるイリス。何だか目を合わせていられなくて、俺は口をもぐもぐと動かしながら視線を彷徨わせる。

「早く早くっ、ティアのも食べて」

それを見ていたティアは待ちきれないといった様子で、再び自分のサンドイツチを差し出してきた。

俺は二人に急かされながら、順番に一口ずつ頬張る。サンドイツチばかり食べていると、さすがに喉が渴いてきた。

けれど中断なく、交互にサンドイツチが口元に向けられるので、それを言い出すタイミングがなかなか掴めない。

「——ティアさん、イリスさん、それはお世話をしているとは言いませんわよ？」

するとそこに呆れ混じりの声が響く。

声の聞こえた方に顔を向けると、透き通った青い瞳と視線が交わる。

「つく……リーザ、おはよう」

俺は口の中にあつたサンドイツチを急いで呑み込み、クラスメイトの少女、リーザ・ハイウオーカーに挨拶した。リーザは長い金髪をふあさつと手で払い、仏頂面で返事をする。

「おはようございます。朝から女の子を侍らせて、いい御身分ですわね」

リーザの皮肉気な口調に俺は慌てる。

「いや、これは侍らせてるとかじゃなくて、二人は怪我してる俺を手伝おうと——」

「ふうん、そうなんです。ですが本当にあなたは、手伝いを必要としているのですか？」

「それは……」

食事ぐらいなら二人の手を借りなくても可能なので、俺は言葉に詰まる。

「必要ないことをさせているのでしたら、それは侍らせているの

と同じ意味ですわ。そしてティアさん、イリスさん——あなたたちもダメダメです」

「ひゃわっ!？」

「……リーザ、怖いの」

厳しい言葉にイリスとティアは肩を竦める。

「必要以上に世話を焼くのは、相手に負担を掛ける場合もあるんですよ?ちゃんと彼の身になって考えて、必要なことだけ手助けすればいいんです」

リーザはそう言うと、テーブルに置かれていた水の入ったグラスを俺に差し出す。

「……喉、渴いてるんでしよう?」

「あ、ああ、ありがとう」

俺は礼を言つて、右手でグラスを受け取り、水を飲み干した。

「モノノベ・ユウ、助けを求める時は自分で選びなさい。本当に必要なことでしたら、わたくしも全力で助けてさしあげますから」

リーザはツンと顔を逸らしながらも、そんなことを言つてくれる。

そんなリーザをイリスとティアは呆然と見上げていた。

「リーザちゃん、かっこいい……」

イリスは目をきらきらさせながら呟く。

「リーザはすごい……」

ティアも尊敬の眼差しをむけていた。

「わ、わたくしは当然のことを言っただけですわ」

照れくさそうに謙遜するリーザを見て、俺も口を開く。

「やっぱリーザはいい女だな」

よく考えれば、まだ早朝にリーザがいるのは不自然だ。もしかするとリーザも学園生活に復帰する俺を助けるため、早くに登校してくれたのかもしれない。

「ま、またそんなことを言つて! わたくしをからかって楽しいんですの?!」

途端に顔を赤くして、リーザは俺を睨んだ。

「いや、別にからかってないって。他に言い方が思いつかないんだよ」

「だったらもつと勉強して、語彙を増やして欲しいものですわね」腕を組み、不機嫌そうに言うリーザ。だが頬はまだ赤いままだ。

そんなリーザの反応はどこか微笑ましく見えて、今度は本当にからかってみたくなってしまふ。

けれど俺がリーザをからかう一言を口にする直前、自販機の設置されているラウンジの方から低いどよめきが聞こえてきた。そこに含まれていたただならぬ気配に、皆動きを止める。

「どうしたんだろ?」

イリスが不思議そうに呟く。

俺たちと同じようにカフェテリアで朝食を摂っていた職員も、何事かとラウンジの方を見ていた。ラウンジからは「ねえ、ちよつと来たよ」「どうなってるの、これ……」という声が漏れ聞こえてくる。

「ユウ……何だか、ヤな感じなの」

ティアが不安げな顔で俺の制服をぎゅつと掴んだ。

そういえばラウンジには自販機の他に、衛星放送を流すテレビも設置されていたことを思い出す。

「何があったのか、確かめに行きますわよ」

リーザはそう言って、俺を促した。四人でラウンジに向かうと、そこではたくさん職員の職員が食い入るようにテレビを見つめていた。画面にはどこかの海岸線らしき風景が上空から映し出されている。

「な……」

俺はそれを見て、言葉を失くした。

世界のどの国であろうと、共通して、最優先に報道されるニュースがある。

それは国境など関係なく、好き勝手に移動するドラゴンたちが発生させる竜災と、その被害予想に関する話題だ。

現在流れている映像も、竜災関連のもの。



だがこんな竜巻など、俺はこれまで見たことがなかった。

海が——真っ白に染まっていた。画面の右端に表示された地図によると、現場はアフリカ大陸の赤道近くで、海が凍るはずはない場所だ。

そして実際、画面のテロップも、ニュースキャスターも、海が凍ったとは言っていない。

ニュースはこう伝えていた。

アフリカ大陸を移動し、海岸線に到達したバジリスクが、周辺の海を塩に変えてしまったのだと——。

## 口論

「――既にメディアアを通じてご存じの方も多いかとは思いますが、バジリスクがついに海を渡り始めました」

朝礼台に立つて重々しく告げるのは、悠の妹でありミッドガル学園の生徒会長でもある物部ものべみつき深月。体は小柄だが頼りない雰囲気は一切なく、きりりと引き締められた表情からは威厳が感じられる。

「肉体構造的に泳ぐことは困難だと考えられていたバジリスクは海を塩化させ、ユーラシア大陸を経由せずに最短距離でミッドガルへの進撃を続けています。インド洋を横断し、インドネシア諸島を抜け、この場所に到達するのはおよそ一ヶ月後になるでしょう」

微かなざわめきが、深月さんの話を聞く生徒たちの間から漏れる。

悠の学園復帰一日目は、授業予定が変更されて臨時の全校集会が開かれていた。しかも場所はいつもの体育館ではなく、グラウンドだ。

五日前、ヘカトンケイルによって時計塔が破壊された時、その瓦礫がれきが体育館の屋根に直撃したらしい。それでしばらく体育館は使用禁止になった。

「けれどもこうした事態も想定済みです。ミッドガルとニブルはそれぞれバジリスクに決定打を与えうる作戦を立案し、準備を整えてきました。十分に勝算はあります」

深月さんは皆を鼓舞するためか、そうはつきりと言いつつ、生徒たちの何人かは、決然とした表情で頷き返す。

バジリスク戦を前提とした訓練は授業でも行っているのだから、ある程度の覚悟と自信を持っているが、僕は不安だ。

バジリスクの能力は原作で知っているため、ニブルの作戦と竜伐隊の実力では討伐は無理だ。

それに奴には奥の手がある。どんな物でも破壊する力を持っているため、全滅もあり得る。

しかし、僕の破壊のエネルギーがあれば話は変わる。

ドラゴンボール超に出てくる”破壊神”だけが持つ力で存在そのものを破壊できる。奴の能力も消滅させられる。

それに原作ではニブルが使用したあの兵器も役に立つ。バジリスクの攻撃にも耐えることができる。

つまりこの戦いにはミッドガルとニブルの両方の力が必要なのだ。

「詳細な説明は今作戦における竜伐隊りゅうばつたいの選考を行った後、対象者を集めて行う予定です。各自、心構えをしておくように」

簡潔に、必要なことだけを述べ、深月さんは台から降りる。

続いて登壇した教師がいくつか連絡事項を述べた後、全校集会は解散となる。

「ミツキちゃんが言うのと、本当に大丈夫って気がしてくるね」

イリスさんが悠のと並んで歩きながら言う。

「ミツキはカッコいいの。さすがユウの妹なの」

悠を挟んで反対側にいたティアちゃんも深月さんを褒める。

「……そうだな」

悠は頷くが、どこか不安そうだ。先ほど皆に心構えを促していたが、深月さんは心構えし過ぎていると気付いたのだろう。

彼女はこの戦いにおいて余裕がないのだ。

二年前、深月さんはドラゴン化した親友を自らの手で討っている。

出席番号四番、篠宮 都。 篠宮先生の妹である。彼女は”紫

”のクラーケンのつがいとなり、ドラゴン化したのだ。

深月さんはその手で二体のドラゴンを討伐し、罪を背負っている。

ゆえに悠は、原作と同じで戦いを終わらせるために全てを懸けると誓っていた。

多分悠は深月さんが無茶をしたら自分が止めないといけないと思っっている。

そう思いながら僕たちのクラス——ブリュンヒルデ教室へと戻る。僕が座るのは3×3に並んだ席の一番前の、リーザさんと

フィリルさんに挟まれた真ん中の席だ。

後ろではレンちゃんとアリエラさんがティアちゃんを囲んで自然に雑談を始めていた。

ティアちゃんもブリュンヒルデ教室の一員として、馴染んでいるようだ。

教室の扉が開き、担任の篠宮先生と深月さんが一緒に入ってくる。

「——皆さん、お静かに。まだホームルームの時間は残っていませんから、少しお話をさせてください」

教壇に立った深月さんは、僕たちを回して言う。皆、雑談を止めて深月を向けた。

篠宮先生は教壇の横にある椅子に腰掛け、手にした出席簿で顔を煽<sup>あお</sup>いでいる。

「今作戦の竜伐隊は、このブリュンヒルデ教室が中心になる予定です。ほぼ全員が選抜されることでしょう。なので一足早く、作戦の概要を説明しておきます」

ほぼ全員……。ということは悠はミッドガルに残るといことだ。悠はヘカトンケイル戦の最中にティアちゃんを連れ去ろうとしたキーリと戦い、両腕を負傷した。右腕は火傷なのでもう大丈夫だが、左腕はまだ治っていない。そんな状況で連れていくのは足を引く張ると考えたのだろう。

深月さんはそのまま話を続けた。

「バジリスクは瞳から放つ赤い閃光で、見つめた対象を石や塵<sup>ちり</sup>、塩へと変えてしまいます。射程は五千メートル近くあり、直接相対することなどできません。視線を遮るものが必要です。けれど海上で遮蔽物は皆無。なのでミッドガルはバジリスクを近海の無人島に誘導し、その島ごとバジリスクを吹き飛ばす作戦が有効と判断しました」

そこまで聞いたところで、アリエラさんが手を挙げて質問する。

「バジリスクを誘導するって、どうやるんだい？」

「ティアアさんをその島へ一時的に移送します。バジリスクはティ

アさんを狙っていますから、確実に向かってきてくれるでしょう。もちろんバジリスクが到達する前に、ティアさんは退避させます」

「ふうん、それなら何とかなりそうだね」

アリエラさんは納得した様子で手を下ろす。続いてフィリルさんが挙手し、深月さんに問いかけた。

「……島がバジリスクの視界に入った時点で、消し飛ばされる可能性はないの？」

「これまでのデータによると、バジリスクは進撃の邪魔になる木々を塵にすることはあっても、地形を変えたりはしていません。というより、赤い閃光を浴びても大地はあまり変化しなかつたと表現すべきかもしれません」

「……それは、不思議。バジリスクの赤い閃光って、単純な高火力の攻撃じゃないんだね」

フィリルさんの言葉に深月さんは真面目な顔で頷く。

「はい。バジリスクの能力はこれまで諸説ありましたが、今回多くのデータが得られたことで大分方向性が絞れてきています。作戦実行までには、確度の高い仮説を提示できるはず」

やはりバジリスクの能力を完全に解明されていないようだ。出現してから約二十年間、砂漠に引き籠こもっていたというので、データが少ないのは仕方ない。

しかし、深月の言うことには一つだけ間違いがある。

僕は原作でこのバジリスクのこととも知っている。確かにバジリスクの瞳から放つ赤い閃光は地形を変えるほどの力はないが、奥の手を使えば別だ。

バジリスクは砂漠に籠こもっていたため、知らないのも無理はないが、奥の手は瞳から放つよりも数十倍の威力を秘めている。これを放てば地球の形は変わる。

ここで言ってもいいが、信じてはもらえない。だから僕は黙って話を聞いている。

「——他に、何か質問はありますか？」

僕たちを回し、深月さんが問う。

「はい」

後ろから悠が手を挙げたようで、深月さんは視線を向ける。

「どうぞ、兄さん」

「さっき深月はブリュンヒルデ教室のほぼ全員が竜伐隊に選抜されるって言ってたけど、ほぼってことは誰か外れる奴がいるのか？」

「どうやら悠もそこが気になっていたようだ。多分だがミッドガルに残る人予想できる。」

「そうですね、まだ確定ではありませんが……兄さんにはミッドガルに残ってもらおうつもりでいます」

「なっ……俺が？　　どうしてだ？」

やはりそう言ってくると思ったが、悠は驚いて問い返す。

「当然でしょう？　　兄さんは怪我人なんですから」

「いや、待ってくれ。バジリスクと戦うのはまだ一ヶ月近く先なんだろ？　　それまでにはたぶん傷も治る。作戦に参加しても問題ないはずだ」

悠が慌てて抗弁すると、深月さんは呆れた表情で溜息を吐いた。

「無理に参加してどうするんですか？　　今作戦に必要とされるのは高い攻撃力です。兄さんには対竜兵装がありますけど、あれは

足場が安定しない船上や空中では使えないと言っていましたよね？」

「それは……そうだが」

痛い所を突かれ、悠は言葉を濁す。

悠の架空武装である対竜兵装は、マルドゥークという遺失兵器ロストウェポンの一部である。ゆえに色々な機能が不完全で、足場が悪い所では上手うまく狙いをつけられないし、反動で足場が耐えられない。

「島ごとバジリスクを吹き飛ばす時、攻撃発射地点は当然船上となります。兄さんの出る幕はありません。ティアさんの世話役も、リーザさんが十分に務めてくれます」

「ぐ……」

深月さんの言うことは正論だ。しかし悠は素直に受け入れることはできないだろう。もしも深月さんが無茶をした時、それを止め

るには傍そばにいる必要があつた。

それにバジリスクとの決戦を含め、悠の力は必要だ。どうかして深月さんを説得するしかなかった。

すると悠は何か思い付いたらしく、表情が変わった。

「——いや、深月。俺を連れて行く価値はあると思うぞ」

「え……う？」

「深月も見ただろう？　俺はヘカトンケイル戦で、反重力物

質を生成した。この力はいざという時の切り札になるかもしれない」

どうやらリヴァイアサンの万有斥力アンチグラビティが使えることを思い出したようだ。

対竜兵装が使えなくても、その拒絶の力があればバジリスクの攻撃を跳ね返せる。

本人はどうして使えるのかは分かっていないが、いずれ知ることになるだろう。今はなんと少しでも悠を連れていく必要がある。

「深月さん、悠を竜伐隊リゅうばつたいに加えてやっってはくれないか？」

「亮さん？」

「確かに悠の対竜兵装は使えないかもしれないが、あいつの反重力物質はバジリスクの攻撃を跳ね返せるかもしれない。そう思わないか？」

「亮……」

僕はそう訴えるが、深月さんは険しい表情で眉を寄せる。

「そうかもしれませんが、その力はデータ不足です。よく分からない力を頼ることはできません。それに亮さん、兄さんの反重力物質について何か知ってますね」

「まあね。……だが、そんなことは今はどうでもいい。いざという時に悠は役に立つ。僕は良いと思うぞ？」

「あなたの言葉には私情が混じっているように聞こえますが……」

少しばかり頑かたくなになっている様子の深月さん。けれどそこに篠宮先生が口を挟んだ。

「少し落ち着け、物部深月。データ不足なら、これからそれを得れ

ばいいだけだろう。元々、彼の回復を待ち、検査を受けてもらうつもりだったのだしな」

「検査？」

悠が疑問の声を上げると、篠宮先生は悠の方に顔を向ける。

「ああ、物部悠——君が生成に成功したという反重力物質については上層部も興味を抱いている。だからぜひ詳しく、その新物質の調査と測定をさせて欲しい」

篠宮先生の言葉聞いた後、悠は口を開く。

「検査の結果、反重力物質が有用だと分かれば……竜伐隊に加えてもらえますか？」

「我々として勝率は一パーセントでも上げたい。大島亮の言う通り、バジリスク戦で役に立つのであれば、自然とそういうことになるだろう」

その言葉を聞いた深月さんは、珍しく篠宮先生に非難の声を上げる。

「篠宮先生！」

「これは合理的な判断だ。私情で最善手を選択せずに失敗した時、後悔して苦しむのは君自身だぞ」

篠宮先生は静かな口調で深月を諭す。

「……………分かりました」

数秒の沈黙を挟み、深月さんは渋々と頷く。それから僕や悠を睨むが、その表情は怒っているというよりも、何かを恐れているようだった。

◇

反重力物質の検査はその日の放課後、地下の特別演習場で行われている。

僕は学園長に呼ばれ、時計塔一階にある第二会議室に来てい



た。

「どうやらリヴァイアサンの能力について聞きたいことがあるようだ。」

部屋は暗く、変な匂いがする。どうやら学園長が自分の部屋のようにしているようだ。正直ここに居たくないが話があるから仕方がない。

部屋には椅子に腰掛けているシャルロット学園長と隣に立っている秘書のマイカさん、そして僕がいる。

「さて……そなたを呼び出したのは他でもない。物部悠がリヴァイアサンの能力を手に行っていることについてだ」

学園長は堂々と聞いてきた。顔は微笑んでおり、見方によれば不気味だ。

「どうして僕に聞くんですか？ 何も知りませんよ」

「とぼけるな……物部悠がヘカトンケイルに反重力物質を使ったとき、そなたは驚きもせずに当然のように万有斥力アンチグラビティと口にしてただろう」

「……聞いてたんですね」

「どうやら僕が悠の前でリヴァイアサンの能力を言ったことを聞いていたらしい。」

「そなたは何か知っているのでしょうか。たとえ神だとしても驚かないのは不自然だ」

やはりシャルロット学園長は察しがいい。しかし、正直に答えるにはまだ早い。嘘を言っても疑ってしまうので、隠し通すことにした。

「知っているが、まだ言えない。だが、いつか言う約束する」

「そうか……それなら仕方ない。だが、当初の目的通りリヴァイアサンの能力については教えてもらおう」

やはり万有斥力アンチグラビティについては聞きたいようだ。仕方なく僕はそのことだけを説明した。

「なるほど……そなたの予想では斥力場を発生させる範囲は半径約三十メートル。時間はおよそ十秒。全力を出せば半径百メートル

で三十秒か」

「ええ、反重力物質の密度を高めた場合はより強力になるが、範囲や持続時間は十分の一以下になる」

原作で知ったことを教え、学園長は納得してくれた。実際そんなことが可能なのかを確かめるために杖の先端にある球体にシミュレーション映像を映し出した。結果、原作と全く同じ能力だった。

「しかし、ドラゴンを倒せばその能力を手にすることができると。深月さんのように」

「やはり知っていたのか……」

僕は原作で深月さんが”紫”のクラーケンを倒し、能力である絶対矛盾アブソリュートを手にしたことを知っている。

「クラーケンの能力は反物質弾とミスリルの触手。深月さんが使えるようになった後、他の”D”も出来るようになったようだな」

「ああ、物部深月がクラーケンを討伐した後にミスリルの変換や反物質を生成するものは次々と現れた」

やはり原作通りだ。しかし、僕は学園長の言っていることが一つ間違っていることを指摘しなかった。

言おうと思ったが、それだと本物のドラゴンドラゴンを知ることになる。それだけは避けたい。

「まあ、バジリスクを倒せばその能力を使える”D”も現れるだろう。期待してて待っていてくれ」

僕がそう言うと、学園長の顔が緩んだ。

「そなたが言うのと、なんだか安心できる。全員が無事に帰って行くことを信じているぞ」

「ああ、じゃあ僕は仕事があるからこれで」

そう言って僕は第二会議室を後にした。船出の準備をする前に何週間分の仕事を終わらせるために”神界”に向かった。

## 船旅

悠が検査を受けた二日後、正式に今作戦に参加するメンバーが発表された。

総数は二十名。うち九名はブリュンヒルデ教室の生徒だ。幸いその中には僕や悠の名前もあった。

作戦の規模を考えると、思ったよりも人数は少ない。恐らく最悪の事態に備え、リスクをできるだけ減らした結果なのだろう。

発表された日のうちに正式なブリーフィングが行われ、今後の予定が伝えられた。

バジリスクを誘導するため、ブリュンヒルデ教室のメンバーは、先行して無人島へと向かうらしい。

あらかじめ準備を済ませた翌日——僕たちは船上にいた。

「さてと……船の中を見とくか」

僕は船の構造を知るため、杖を使って中を見ていた。ちなみに僕は自分の部屋に居る。

輸送船の甲板はとても広くて、コンテナなどを運ぶためのクレーンが六つも設置されていた。

クレーンの近くで作業を行っている女性の船員を見つめる。恐らくミッドガルの職員同様、この船を動かす船員も女性で統一しているのだろう。

船内を見回すと、廊下は道なりになっており、その先には広いラウンジがあった。乗組員用の休憩スペースで、壁紙には自動販売機が並んでいた。今は閉まっているが、セルフサービス形式の食堂もある。

もう少し確認したら修行しようと思い、画面を拡大してみた。すると、ラウンジの隅っこに、机を突っ伏しているクラスメイと二人の姿があった。

フィリルさんとレンちゃんだ。

フィリルさんは文庫本を片手にぐったりしており、レンちゃんはノートパソコンに手を伸ばした格好で体を震わせていた。

(思い出した。あの二人はそうだった)

僕はそう思い、部屋を出てラウンジに向かった。あの二人は船酔いしている。原作でもそうだった。

数分してラウンジに着くとさつきと全く変わっていないなかった。僕は偶然を装って二人に近づいた。

「……どうしたんだ？」

僕の言葉にぴくりと反応したフィリルさんが蒼白あおしろい顔でこちらを向けた。

「……気持ち悪い」

そして一言、苦しげに現状を述べる。

「……ん」

その様子を見て、僕は察したように答えた。

「……船酔いか？」

それを聞いたフィリルさんとレンちゃんは顔を僕の方に向けてたままだ。

「本を読んでたら、何だか目の前がクラクラしてきて……」

「んう……」

二人は苦しげな表情で言ってきたので呆れながら見下ろす。

「船に慣れてないのにいきなり本を読んだり、パソコンをいじったりするからだよ？」　しかも出発してからまだ十分も経ってないし」

二人の自業自得だが、まさかこんなに早く船酔いするとは思わ

なかった。

「でも……読みたいの」

「……ん」

フィリルさんとレンちゃんは今でも続きを始めようとしていた。このままでは病気になるってしまうため、杖を使うことにした。

「……二人とも、みんなには内緒だぞ？」

「？」

僕が口に指を当てると、二人は首を傾げた。

杖を取り出し、先端を二人に向けると、白い光が彼女たちを包

んだ。

二人は驚いたが、すぐに白い光は消え、二人の顔色が良くなつた。

「あれ、苦しくない」

「ん」

フィリルさんとレンちゃんは元気なり、訳が分からずに僕の方を向いた。

「君たちの状態を回復させたんだよ。結構僕の体力を使うけど、無理に止めさせるつもりはないからしばらくは大丈夫のはずだ」

気分が悪い人が一人でもいると、こっちも気になるので、みんなには知られないように能力を使った。

「ありがとう」

「ん」

フィリルはお礼を言ってきて、僕は杖を壁に傾けた。

「気にしなくてもいいよ。でも、体調を回復させただけだからちゃんと休憩してくれ。あとさつきも言ったけど、みんなには内緒ね」

「分かった」

「ん」

僕がお願いすると、二人はこくりと首を上下に振った。

「フィリルさんは大丈夫だと思うけど、レンちゃんはちゃんと休憩も入れるんだぞ？」

そう言っつて僕はレンちゃんの頭を撫でた。すると、レンちゃんは頬を染め、こくりと頷いた。

「ん」

こうしているとアンジェリカさんを思い出す。第六世界の”世界神”で最年少である。第六世界では最強の魔術師と崇められており、神々の中では可愛がられてる。ミッドガルに来る前はレンちゃんのように頭を撫でたりしていた。

レンちゃんは小動物のように大人しいが、アンジェリカは子供扱いされたくないらしく、ムキになつたりしていた。

なんだか懐かしくなってきた。そう思っていると、レンちゃん  
が服を引っ張ってきて、端末の画面を見せてきた。

「いつまでやってるんだ……あ、悪い。もうしないよ」

僕は手を離し、壁を傾けた杖を手にそのままラウンジを後にし  
た。

そのまま部屋に戻り、修行をするために杖の中に入った。



「見てモノノベ、ミッドガルがもうあんなに小さいよ！」

遠ざかる島影を指差し、イリスが弾んだ声で言う。

「……あの島を外から見るとっていうのは、何だか妙な気分だな」

俺たち”D”の世界は、あんなに小さいんだなと感慨を抱く。

果てを越えて広がる空と海。その狭間にぽつんと浮かんでい  
るのが、俺たちが先ほどまでいたミッドガル。

竜伐隊に選ばれた二十名のうち、九名であるブリュンヒルデ教  
室の生徒たちは、本日正午に船へ乗り込み、バジリスクを誘導する無  
人島へと出航した。この船はミッドガルが物資の運搬などに使っ  
ている輸送船で、武装は特にならない。

ニブルに依頼すればもっと足の速い軍艦を借りることもでき  
ただろうが、それはこちらの作戦に介入される口実を与えかねない。  
今作戦の指揮官である篠宮先生は、ニブルの横槍をかなり警戒してい  
るようだ。

リヴァイアサン侵攻時、ニブルがミッドガルに部隊を送り込ん  
だことは、両者の間に大きな溝を生んでいたらしい。連携が取れない  
のは少々不安だが、足を引っ張り合いになるよりはマシだとも思え  
る。

(今回は人間同士で争うことにならなきやいな)

水平線の向こうへ消えていくミッドガルをぼうつと眺めなが

ら、そう思う。俺はドラゴンより人間と戦う方が得意だが、それを好んでいるわけではない。

「あつ、モノノベ！ あれ、イルカじゃない？」

そんな俺の肩を揺すって、イリスが船の斜め後方を指差す。そこには船を追いかけるようにして泳ぐイルカの群れがいた。背びれで水を切り、時折スピードに乗った見事なジャンプを見せる。綺麗なアーチだ。

けれど俺の目はイルカよりも、はしやぐイリスの横顔に惹き付けられてしまう。

「……あたしの顔に、何かついてる？」

俺の視線に気付いたイリスが、不思議そうに首を傾げた。

「ああ、いや——その、楽しそうだなって思ってたさ」

「うん、楽しいよ！ 何だかみんな旅行するみたいで、ワクワクしてるの」

にこにここと心からそう思っているという表情で、イリスは答える。

「これからバジリスクと戦うのに緊張とかしてないのか？」

イリスの楽しそうな表情を見ると、大丈夫じゃないかと心配する。

「大丈夫だよ！ モノノベやミツキちゃん、リーザちゃんや

オオシマが付いているから緊張はしてないよ。むしろティアちゃんを守るために何ができるか考えてるところだよ」

当然のように言われて俺は呆気あっけに取られる。

「イリスはいつも、俺の想像を軽々と越えてくたな」

苦笑を浮かべ、俺は呟く。イリスはドジで、よく失敗するし、自分のことを弱いと嘆いたこともあったが、根っこの部分では俺なんかよりずっと強いのだと思う。

「ふふん、あたしは常識じゃ測れない女の子なんだよ」

自慢げに胸を張るイリス。

「そうだな、何を生成しても爆発させるとか、あまりに謎すぎるかな」

「そ、それはいいじゃない！ 謎のままでも、役に立つ方法を見つけたんだし。こうして竜伐隊りゅうばつたいにだって選抜されたんだもん」

「まあな。けど——いつかはその謎も解いてみたい。俺は、イリスのことをもっと知りたいんだ」

何気なく口にしてしまつてから、はつと気付く。まるでこれは口説き文句だ。

イリスは最初驚いた表情を見せていたが、その顔が次第に赤くなつていく。

「あ、あの、あたしも……」

イリスは勇気を振り絞るように俺の目を見つめた。

桃色の唇を震わせながらも、上擦つた声でイリスは言葉を続ける。

「……モノノベになら、その……知つて欲しい、かも」

最後の方は、ほとんど囁くささやくような音量だった。

「な——」

思わぬ展開に、思考がフリーズした。ここからどう会話を繋つなげばいいのか分からなくなつてしまふ。

硬直した俺を見て、イリスは少し不安そうに小首を傾げた。

「モノノベ……？ もしかして、聞こえなかった……かな？」

「い、いや、ちゃんと聞こえたけど——」

俺がそう答えると、イリスはほつとした様子で息を吐く。

「じゃあ、えつと……今から、教えればいい？」

途切れ途切れに、小さな声で訊ねてくるイリス。

「お、教えるつて……何を？」

「それはその……色々だよ。モノノベの知りたいことなら、何でも」

イリスは恥ずかしそうに、もじもじと答える。

「な、何でもつて言われると逆に困るな……」

俺が頭を掻きながら言うと、イリスは上目遣いで躊躇ためらいがちに問いかけてくる。

「すぐに思い付かないなら、とりあえず……あたしの船室に、来る



？　　ここだと秘密の話とかは、できないし……」

頬を染めて提案するイリスがとても魅力的で、俺はごくりと唾を呑み込んだ。

「まあ、イリスが構わないのなら——」

雰囲気の流れられるようにして俺は頷きかけるが、こちらへ近づいてくる軽い足音に気付いて言葉を切った。

「ユウー！　　甲板を一周してきたの！」

見ればティアが息を弾ませて駆け寄ってくる。ティアは輸送船に乗りこんだ時から興奮していて、ずっと辺りを走り回っていたのだ。

ミッドガルに移送される際も船には乗ったはずだが、恐らくその時は辺りを見て回る自由はなかったのだろう。

「ねえ、ユウ。次は一緒に船の中を探検しよう？」

「ティア、ちょっと待ってくれ。今はイリスと——」

右腕をティアに引っ張られながら、俺はイリスに「どうする？」という視線を向けた。

「あ、いいよ、ティアちゃんと探検してきて。あたしの用事はその……今じゃなくてもいいから」

はにかみながら俺とティアを送り出すイリス。それはつまり、後で船室に来てくれという意味だろうか。不純異性交遊が厳禁である以上、決して邪なことをする気はないのだが、それでも鼓動が速まっているのを自覚する。

「ユウ、こっちに行ってみるの！」

ティアは俺の右手をぎゅっと掴んで、足早に歩いて行く。途中、ファイリルとレンが本を読んだりパソコンをいじったりしてラウンジでぐったりしていた。

話を聞けば、二人は出航してから休憩をせずに作業してたので船酔いしていた。

俺は二人に休むように言ってファイリルの本を取り上げた。レンは抵抗したが、部屋で休んでくれることで承諾してくれた。

ファイリルとレンに挨拶し、船内探検を再開する。

一階下は居住用の船室が並ぶフロアだ。乗船して荷物を運びこんだ際に、一度降りている。VIPが乗船することも考慮されているのか、客船でないにも拘らず、俺たちへあてがわれた部屋は立派なものだった。女子の部屋は船首側、俺と亮の部屋は船尾側の端っこで、同じフロアでありながらかなりの距離がある。

さらに下層へ降りれば、貨物室や機関室があるはずだ。

上の方へはまだ行っていないが恐らく階段を上って行けば艦橋に辿り着くだろう。

「どっちへ行く?」

俺がそう訊ねると、ティアはしばらく考えた後、上の方を指差した。

「上がいいの」

「了解」

艦橋まで立ち入ることはできないかもしれないが、行けるところまでティアのぼうけに付き合おう。

俺とティアは白く塗装された鉄製の階段を上っていく。すると——上方から微かな声が聞こえてきた、段を上るたびに、その声は大きくなる。

内容は聞き取れないが、声の調子からして何かを言い争っているらしい。しかもその声は聞き覚えのあるものだった。

「……リーザと、ミツキの声なの」

ティアが足を速め、俺の手を強く引っ張る。いったい何事かと、俺も足早に階段を上った。

二つ階を上ると、声ははっきり聞こえるようになる。踊り場の壁に設置されたプレートによると、ここは会議室などがあるフロアのようなのだ。

「——そんなことだから、わたくしはいっつまで経っても、あなたを許せないんです!」

「許さなくて構いません。私は、それだけのことをしたんですから!」

リーザと深月の声が角の向こうから耳に届く。そして角には

廊下の様子を覗き見ているアリエラの姿があった。

アリエラは俺たちに気付くと、困ったような表情を浮かべる。

「あー、キミたちか。えっと、今は聞いての通り、取り込み中だ。ミツキたちに用事なら、後にした方がいい」

「リーザとミツキ、喧嘩してるの？　止めないの？」

ティアが少し責めるような口調でアリエラに言う。

「止めたいのは山々なんだけどさ。どうやらボクには口出しができない問題みたいなんだ」

溜息を吐き、途方に暮れた様子で肩を竦めるアリエラ。

俺とティアはどういうことか分からず、喧嘩の声に耳を澄ませた。

「——深月さんはあくまで、都さんを手に掛けた罪も、その贖い<sup>あがな</sup>も、自分だけのものだと言い張るつもりなんですか？」

「もちろんそのつもりです。自分の責任を他人に押し付ける気はありません！」

「ふん、言葉だけは立派ですわね。けれど、覚悟を独り占めしている限り、誰もあなたを理解できないし、ついて行くこともできません。もう少し、色々なものに向き合ったらどうですの？」

「わ、私はちゃんと向き合って——」

「わたくしに許されようとも思っていないくせに、軽々しくそのようなことを言わないでください！」

「っ」

リーザの一喝に、深月は続く言葉を呑み込んだ。

そつと角から様子を見てみる。リーザが腕を組んで仁王立ちし、深月はその前で俯き、肩を震わせた。

「リーザ……すっごく怒ってるの」

俺の下から同じく顔を出したティアが、小声で呟く。

ティアの言う通り、リーザはこれまで見たこともないほどの怒気を放っていた。俺もリーザには何度も怒られたことがあるが、今はその比ではない。

喧嘩の原因は、篠宮都のことらしい。アリエラが口を挟まなかったことも分かる。事情をよく知らない者が出て行っても、話をややこしくなるだけだ。

俺が知っていることも少ない。

深月はドラゴン化した親友の都をその手で討った。そしてリーザはそのことを今でも許していない。仕方のないことだったとは分かっているが、納得はできてないのだと、以前リーザは言っていた。

深月もその罪を背負っている。そのため一人で無理をしている。

(何とかしたいな)

俺はそう思い、二人を眺めていた。

## 真実

ドラゴン信奉者団体”ムスペルの子ら”。ドラゴンを神と崇め、ニブルの活動を阻む彼らは、テロ組織として国際手配されている。それでも勢力が衰えず、拡大を続けているのは、ドラゴンがそれだけ恐ろしい存在だからだろう。人々はドラゴンの恐怖から逃れるため、崇めることを選択する。それで現実が何か変わるわけでもないというのに。

ドラゴンの力を有する人間——”D”も、彼らにとっては崇拜の対象だ。けれど好き好んでテロ組織に身を置く”D”などいない。何か特別な理由がない限りは。その特別な理由を持つ少女、キーリ・スルト・ムスペルヘイムは、”ムスペルの子ら”の指導者として活動していた。

現在、キーリが潜伏しているのは団体の息が掛かったホテルの一室。湯気で白く煙るバスルームだ。

キーリはお湯を張ったバスタブに身を沈め、ミッドガル潜入時に入手した情報を眺めていた。手にしているのは防水のコンピュータ端末。その画面には次々とミッドガルの機密情報が映し出される。

「ふうん……反物質を生成できるのは物部深月だけ、か……つまり彼女が第六権能コード・ゼクスの断承者なのね」

生徒のパーソナルデータを閲覧し、キーリは面白そうに呟く。

「彼の、義理の妹……そういえば、三年前にも会ったような……偶然って不思議ね」

キーリの独り言がバスルームに反響する。とは言え、キーリは一人で喋っているつもりはない。自分がいつも”彼女”に見られていることを、キーリは知っている。

”彼女”の目と耳になって情報を集め、手足として意志を代行するのが、キーリの役割。そして——作られた意味。

「あれ……でも確か、反物質弾でクラーケンを討伐したのは物部深月なのよね。そうなる……おかしいわ、辻褄つじつまが合わない。クラーケンを倒さないと、反物質は生成できないはず……どうなって

るの?」

キーリは眉を寄せ、他のデータを探る。

「例外はあるけれど……物部深月は条件に該当しない。当てはまるとしたら……そうか、彼女なら……それに二体のクラーケン……矛盾の答えはその辺りにありそうね」

ぶつぶつと呟きながらデータを漁るキーリだが、やがて根負けした様子で天井を仰いだ。

「あー、もう、報告書にはちゃんと正確な情報を載せておきなさいよね! 答え合わせできないじゃない!」

ぱしやぱしやと不満げに足でお湯を叩き、キーリは端末の画面に展開していた報告書のデータファイルを閉じた。

「——まあいいわ。過去なんて重要じゃないし。大事なのはこれからよ」

そしてキーリは再び生徒のパーソナルデータを開き、その中にある物部悠の顔写真を表示させる。

「悠……あなたはきつと、私とも、他の”D”とも違う。お母様はただのエラーだと考えているみたいだけれど、私は信じる。あなたが、九番目だって」

キーリは祈るように、微かな希望に縋るように、物部悠の顔を見つめた。

「バジリスクなんかより、器の大きいところを見せてよね」

小さく囁き、画面に映る物部悠の顔にキスをするキーリ。

そして生徒のパーソナルデータを開き、大島亮の顔写真を表示させる。

「それにしても謎だわ。お母様でも彼のことが分からないもの」

キーリは今までになく真剣な表情で見ている。

”D”には無い特別な力を持っていて、時々金色の光を輝かせてドラゴンを倒しているみたいだけれど、何なのかしら?」

大島亮のことについてほとんど不明と書かれていた。

「ドラゴンのことだけじゃなくて、私やティアのことも知ってるみたいだし……注意が必要ね」



夕方、僕は外に出て空が若干暗くなっていた。

潮の香りが漂い、風が吹いて気持ちいい。もうすぐミーティングが始まるが、時間になるまでここにいることにした。

この時期になるとあの事を思い出す。僕は一度、罪を犯してしまった。全王様は仕方のないことだと許してもらい、罰もなかったが、今でも辛くなる。

あの時はそうするしかなかったが、やはり心が痛い。深月さんと似た過去を抱えているからだ。

空を眺めていると、後ろから気を感じた。アリエラさんほど大きくはないが、穏やかで心地よい感じだ。僕はその気の持ち主を知っている。

「二人でどうしたんですの？」

声がして振り返ると、リーザさんがいた。彼女は若干疲れている表情だ。もしかしたら、深月さんと口論したのだろう。

確か第三巻で、深月さんとリーザさんにあつた溝は塞がれるが、それはバジリスクを倒した後だ。今はまだ喧嘩中のままだ。

「あ、ああ、ちょっと外の空気を吸いたくて……」

「そうですね……もうすぐミーティングが始まりますわ」

やはりリーザさんは僕を呼びに来てくれたようだ。もしかしたら、深月さんと喧嘩したあと、僕を探しに船内を回ってくれたのかもしれない。

「ああ、ありがとう」

僕はお礼を言い、再び空を見上げた。二人は何時間も前に会議室で口論をしていたことは原作を読んでいるので知っている。内容は篠宮都だろう。

二年前、深月さんはドラゴン化した篠宮都を討伐し、その罪を

背負っている。

なんだか六年前を思い出す。あの時、僕は同期の一人を殺してしまった。深月さんと同じだな。

「どうしたんですの？　　悲しそうな顔をして」

リーザさんは僕の隣に来て、心配してきた。六年前のことを思い出したのか、僕は悲しい表情になっているのだろう。

「え？　　ああ、ちよつとね」

「悩み事なら言ってください。いつでも聞いてあげますわよ」

リーザさんはやっぱいい人だ。仲間のためなら自分の力を貸すいい女だ。

「……六年前のことでちよつとね」

「六年前？」

僕はリーザさんに罪を犯した内容を話すことにした。

「僕が”D”に目覚めた時の頃かな？　　その時にはもう気を

操れたからそんな”D”になったことに実感はなかったよ」

嘘を交えながら話をした。僕が神であることは悠と深月さん、シャルロット学園長と秘書のマイカさんだけだ。ミッドガルの教職員や生徒たちからは特別な力を持つていとされている。

「まあ、中国の山奥で修行してただけと、気の力を操れたのは僕を入れて十三人だったんだ」

「ええっ!?!　　十三人！　　そんなにいるんですの!」

リーザさんは驚いた。この話は誰にもしていないから当然だ。僕はそのまま話を続けた。

「僕は道場で新入りだったけど、特に優しかった友人がいたんだ。その友人は気の制御が凄くて、目標だったんだ」

目標というのは嘘だか、友人は本当である。もし世界神の席を争うことになっていたら負けていたのかもしれない。

「そんなにすごい人でしたの。それで、その方は？」

リーザさんが相槌を打つと、僕は悲しい表情になるのがわかった。

「……僕が殺してしまったんだ」



「え？」

僕は正直に答える。彼女に嘘は吐かないが、このことを隠すのは良くないと思った。

僕だって元は人間だ。人を殺すのは気分が悪いが、仲間や知り合いを殺めるのはそれ以上だ。

「いろいろあってね。ホントはやりたくなかったけど、そうするしか方法がなくて……それで……」

僕の言葉が徐々に小さくなっていく。あまり彼女たちには聞かせたくない内容だ。特にリーザさんは篠宮都の件で深月さんと対立しているので、話したくなかった。

「その後はどうしたんですの？」

リーザさんの表情は僕より辛そうだった。やはり、二年前の事と重ねているのだろう。

「その日の夜は眠れなくてね、罪の意識で押し潰されそうになったよ……けど——」

「けど？」

僕は出来るだけ表情を変えようとして、空を見上げた。

「自分だけで背負うのはあまりにも身勝手だと思ったから、みんなに許してもらおうと色々と頑張ったよ」

それを聞いたリーザさんは表情が少し柔らかくなっていった。

「半年は掛かったけど、みんなからは許してもらったよ。今でも少し辛くなるけど、前よりは楽になったよ」

僕は無意識に笑顔になっていた。本心で言っている証拠だろう。するとリーザさんは微笑んだ。

「あなたの認識を改める必要がありますわ。深月さんと違って自分だけで背負おうとしないことに、わたくしは良いと思いますわ」

リーザはそう言っ僕の右手を添えてきた。

「っ!？」

一瞬ドキツとしたが、平常心を保つため、なんとか堪えた。

「い、いや、そんなことは……」

「いいえ、あなたは間違っていますわ。過去は変えられません

が、仲間に頼ることはそれだけ信頼している証拠ですわ」

否定するが、リーザさんは少し詰め寄ってきて反論してきた。深月さんもそうだが、リーザさんにも敵わない。

「ありがとう、リーザさんに話して良かったよ」

「ええ、次からはいつでも言ってください。自分勝手なことでしたらその時は成敗して差し上げますので」

リーザは手を離し、真剣な表情で言った。

「ああ、そうするよ。それに今ので分かったよ」

「何ですか?」

「深月さんのこと……本当は恨んでないでしょ?」

「なっ!」

僕がそう言うと、リーザさんは顔を真っ赤にして驚いた。実は既に知っていたのだ。あれはティアちゃんとビーチで遊んだ時のことだ。リーザさんは罪の意識に押し潰されそうになったティアちゃんに罰を与え、罪を償わせた。

その時にリーザさんは罪の意識に押し潰される前に清算するとか言って一瞬深月さんを見ていた。ということはリーザさんは恨んでやっているのではなく、許すきっかけを作り、自分で向き合わせるためにそんなことを言ったのだろう。

「僕はこう思う。もしかしたらバジリスクとの戦いで深月さんは罪を償うかもしれないね」

「有り得ませんわ。彼女はあなたと違って頑固ですよ。そう簡単には……」

リーザさんがそう言うのも仕方ない。事実、今でも深月さんは自分だけの責任だと思っている。しかし、彼女は義理とは言え、親友の妹。もしかしたら間接的に関わってくるだろう。

「そう言うが、もしかしたら許す方法を聞いてくるかもしれないぞ? その時はどうするつもりだ?」

僕が聞くと、リーザさんは口を手を当てて考えた。

「そうですね……まあ、難しい条件を出しますわ。有り得ないことではありますわが」

「……あんたも頑固だな。まあ、近いうちにそうなるよ」

僕は苦笑して空を見上げた。太陽は水平線に沈みかかっており、星が輝いていた。

「そうなることを期待しますわ。さあ、もう行きますわよ」

「そうだね」

そう言っただけで僕たちは船内に戻った。明日には深月さんはリリーザに罪を使う方法を聞いてくるだろう。この件は悠だけでなく、フィリルさんも関わっているのだから。

## 罪との向き合い方

「兄さん、起きてください。兄さん」

翌朝、俺は深月に肩を揺らされて眠りから覚めた。

「ん……？」

目を擦りながら身を起こした俺の腕を、深月はぐいぐいと引つ張る。

「ほら、来てください。着きましたよ」

「着いたってどこに……」

寝ぼけている俺は、何故深月が部屋にいるかも、ここがどこなのかもすぐには思い出せない。

だが深月に窓の傍まで連れて来られ、ガラス窓の向こうに広がる景色を目にし、一気に眠気は吹き飛んだ。

「おお……」

昨日は海だけしかなかった風景の中に、島が出現していた。見たところ火山島らしく、綺麗な三角形をした山の頂いただきからは白い煙が上がっている。島にはほとんど植物が見あたらず、山脈は溶岩が固まったと思われる黒い岩に覆われていた。

窓の外を見ているとだんだんと昨日のことを思い出してきた。昨日、フィリルからリーザが深月に対して全く恨んでないことを知り、俺は深月に篠宮都のことを聞いた。

そういえば、フィリルは去り際に「王子様になる覚悟が無いなら惚れちゃダメ」と言っていた。

彼女は本をよく読んでいるだけあって、白馬の王子様を待ち望むタイプなのだろうかと思う。

今はそれより深月のことだ。

話によれば、深月がミッドガルに来て二週間後に転入してきたようで、女子寮ではルームメイトだった。

いつも深月にべったりで、上位元素ダークマターの制御は深月を追い抜くほどだと聞いた。

深月は親友だけでなく、ライバルとしての関係であった。篠宮

都も同じようだったが、本人は深月に強い好意を向けていたらしく、時々判断を見誤ることがあったようだ。

そして二年前、”紫”のクラーケン戦にも深月を優先して行動した結果、ドラゴン化してしまった。

深月は二体のクラーケンを討伐し、今の地位に着いたようで、今でも罪の意識を一人で抱えている。そんな深月をリーザが押し潰されないように強く当たっていたのだ。

俺は話を聞き、深月にリーザの気持ちを考えるように言った。最初は拒否したが、なんとか説得したおかげで罪と向き合うようになった。

それから深月は俺の部屋で寝て、現在に至る。

「作戦立案時に調査隊を送った際、簡易的な港を作っております。輸送船はバジリスクが接近するまで、そこに停泊する予定です」

船の行く手を見ながら説明する深月。

「ここですばらく生活するんだな……島には降りられるのか？」

「上陸に関しては自由です。ただし火口付近を含め、立ち入り禁止の場所があります。詳しいことは今日のミーティングでお話しますね」

深月はそう言うのと窓から離れ、ベッドに戻って自分の枕を手取る。

「部屋に戻るのか？」

「はい。朝食まで時間はありますが、その前にシャワーを浴びておこうと。その……もし兄さんの匂いが残っていると、妙な勘ぐりをされてしまうかもしれないので」

少し恥ずかしそうに深月は目を逸らす。

「そ、そうか。じゃあ俺もシャワーを浴びた方がいいかな」

俺は深月に抱きしめられていた右腕の匂いが気になり、鼻を寄せようとする。

「……ちよつ、や、止めてください！　セクハラですよ！」

深月は顔を真っ赤にして、慌てて俺を制止した。

「わ、悪い」

「そのままバスルームに直行してください！　匂いは嗅い  
じやダメです。そんなことをする人は変態なんですから！」

「——了解、すぐにシャワーを浴びるよ。約束する」  
妹に変態扱いされたくはないので、即座に頷く。

「……絶対の絶対ですよ？」

頬を染めながら念を押す深月。

「ああ——それより深月の方こそ、昨日の約束は憶おぼえてるだろ  
うな？」

リーザにどうすれば許してもらえるかを訊たずねる——そのこ  
とを忘れていないかと、俺は深月に確認した。

「もちろんです。そんなに忘れっぽかったら、生徒会長なんて務  
まりません」

不機嫌そうな声で深月は答え、足早に部屋の出口へ向かう。だ  
がドアノブに手を掛けたところで動きを止め、小さく呟つぶやいた。

「……ただ、きつとリーザさんは許してくれないと思いますけど」  
「もしそれでも、リーザの気持ちを勝手に決めつけている状況か  
らは前に進めるだろ」

「確かに——そうですね」

深月は苦笑を浮かべると、静かに部屋を出て行く。

そして俺も深月との約束を守るべく、バスルームへ向かったの  
だった。



「……で？　何してたの？」

「……………」

僕は”神界”の会議室で正座させられていた。

部屋にいるのは僕と、正座をさせた八重さんだけだ。しかし、  
扉の向こうには他の”世界神”たちがこちらの様子を面白がって見

ていた。

八重さんは気付いていない様子だが、僕は扉の前で正座をしているので、先輩たちの様子がドアの隙間から見えている。

「えっと……学園生活が楽しくて……っい」

「ついで忘れたんだ？ 私との約束を憶えているよね？」

必ず夜には帰ってきてくれるって」

リヴァイアサン討伐から二週間後に八重さんとそんな約束をしていた。もうすぐ一ヶ月が経とうとしていたが、僕はここ一週間以上も帰ってきていなかった。

さつきも言ったとおり、学園生活が楽しすぎて忘れていた。八重さんは破ったことに怒っているのだろう。

気が高まつていて、言い訳をしようとしても、覇気で圧倒される。ここまで怒る必要があるのだろうか？

「亮ちゃん？ 聞いているの？」

「は、はい、聞いております。一週間以上も帰って来なくて申し訳ございませんでした」

僕は頭を下げ、なんとか許してもらおうとした。

「そんなことはどうでもいいの！」

「ええっ!？」

いきなり八重は大きな声で怒鳴った。しかもどうでもいいって……。

「では、何で怒っているのですか？」

僕は刺激しないように敬語で聞いた。すると八重さんは杖を取り出し、映像を流した。そこには船上で僕とリーザさんが映っていた。バジリスク討伐任務で火山島に向かっている最中の出来事だ。

「亮ちゃん、不純異性交遊をしたのね」

「っ!?! なんてそうなるの？」

どうやら八重さんは僕がリーザさんと只ならぬ関係だと勘違いしているようだ。僕は誤解を解くために焦りながらも弁解した。

「ちがうよ！ リーザさんとはクラスメイトだけで、八重

さんが思っているような関係じゃないよ！」

「へえ、これでも?」

八重さんは映像を拡大すると、僕の手の上にリーザが手を添えているところが映った。

「ち、ちがう! あれは相談してただけなんだ!」

僕は必死に誤解を解こうとするが、八重さんの気がさらに上がり、鬼のように怖い。

「本当なんだ! リーザさんに六年前のことを話してただけなんだ!」

「六年前?」

「ああ……八重さんの友達の彩芽さんだよ」

「え?」

僕は本当のことを言うと、八重の気は一気に下がった。

「彩芽のこと?」

「ああ、そうだよ」

僕は昨日リーザさんに話したことを伝え、この深月さんとの事も話した。

「そうだったんだ……私たちと似たような過去を持つてたんだ」

八重は納得してくれたようで、息を吐く。

「まあね、本人たちももうすぐ仲直りはすると思うけど」

「そうだったんだ……あつ!! ご、ごめんね亮ちゃん。早とちりしてしまつて」

八重さんは勘違いに気付き、僕に謝った。

「気にしないで、そういうこともあるから。……それより、誰から僕が不純異性交遊してるって言つてたの?」

八重さんがこんな勘違いする筈がないことは分かっていた。だから僕は嘘を吹き込んだ犯人を聞いた。

「パトリックさん」

やっぱりそうだった。パトリックさんはよくからかうの、さうだとは少しは思った。ちなみに盗み見ている中にパトリックさんはいない。

「あの人は……まあいいや。あとでボコるとして、誤解が解けて



よかったよ」

「ごめんね、パトリックさんが慌てて報告してきたから私もびつくりして……」

「もういいよ、気にしてないから」

八重さんは再び謝ったが、僕は気にしなくていいと言った。

八重さんは杖を仕舞うと、悲しい表情をした。

「彼女たち、仲直りできるといいね」

彼女たちとはリーザさんと深月さんのことだろう。似たような過去を持つ僕たちにとって他人事ではない。

六年前、八重さんの友達にして、友人の彩芽さんを僕は殺してしまった。僕は許してもらうのに半年は掛かったが、彼女たちならすぐに仲直りするだろう。

「大丈夫だよ。もうすぐ解決するから」

「そっか……それなら良かった。あと亮ちゃん、六年前のことを気悩む必要はないからね。あれは私も悪いから」

八重さんはそう言つて僕の頬を右手で添えてきた。

「……ありがとう、やっぱり八重さんは優しいんだね」

「っ!? そんなことは……ないよ」

その言葉を聞き、もじもじしながら否定するが、どんどん声が小さくなっていく。本当に可愛い。

「ごめんね、最近帰ってこなくて」

僕は一週間も帰ってこなかったことを謝る。

「ううん、気にしてないよ。でも偶たまには帰ってきてね。心配になるから」

「ああ、そうするよ。お詫びに何かするよ」

僕がそう言うと、八重さんの顔が真っ赤になった。

「……楽しみにしてるから、待ってるね」

上目遣いでそう言つてきて、僕はドキツとした。やっぱり八重さんは魅力的で、顔が赤くなるのがわかる。

「分かった、それじゃあ僕はこれで……」

「う、うん……あっ!」

僕は立ち上がり、八重さんと会議室を出ようとする、彼女はバランスを崩し、倒れそうになった。

「あっ」

僕は助けようと右手を伸ばし、八重さんを支えたが、ぷにゅんつと柔らかな感触がする。

「なっ!？」

僕は八重さんの柔らかい双丘を手にしていた。

「~~~~~!」

八重さんの顔が耳まで真っ赤に染まり、時飛ばしを連続で発動させ、体中に正拳突きを撃ち込まれた。最後には人体にだけ影響を与える透明の気弾を喰らい、殺されかけた。

◇

朝食の前にラウンジに向かうと亮が椅子に座って本を読んでいたが、顔は殴られた跡があり、頭には包帯が巻かれていた。

心配になって聞いてみると、そのことには触れないでほしいと言われた。

何があったのかは知らないが、亮はこの世界と神々のいる世界を歩き来しているため、何か事情があるのだろう。

俺は亮を食堂に連れていき、食事を取った。皆も目を丸くしていたが、本人は気にせず食べていた。

朝食後のミーティングでは、火山島マップや注意事項の記載された小冊子が配布された。

何となく遠足のしおりみたいだと思いつながら中を見てみると、妙に可愛らしいイラストを用いて島のスポットなどが紹介されていた。

(マジで遠足気分かよっ!)

俺は胸の内でツツコむ。

奥付を見ると編集したのは篠宮先生らしい。完璧の名にふさわしく絵心もあるようだが、多少これまでのイメージが崩れた。意外とお茶目な人のようだ。

地図の所々に記されたドクロマークは有毒な火山ガスが出ている場所で、そこ付近には立ち入らないようにと注意書きがされていた。

やがて戦場となる島の俯瞰図ふかんずを隅々まで眺めていると、温泉マークを発見する。

目玉スポットとして、温泉のことは別ページに特集が作られていた。成分、効能まで詳細に説明されている。太字で強調されているのは美肌効果という部分だ。病気や怪我などの回復にも効き目があるらしい。

（作戦開始までに、一度ぐらいは行ってみるか）

そんなことを考えながら視線を前に向ける。会議室のホワイトボード前で、深月が冊子の内容を口頭で説明していた。

深月が変わった様子はない。だが俺の斜め前に座るリーザは、形容しがたい表情で深月を見つめてた。色々な感情がない交ぜになり、混乱しているという感じだ。

もしかしたら深月は、既にリーザと話をしたのかもしれない。やるべきことは後回しにしない性格の深月なら、有り得ることだ。結果がどうなったのかは、二人を見ていると予想が付かなかった。

まあ、後で深月に訊ねてみればいいだろう。俺はそう考えていたのだが、意外と早く答えを知る機会は訪れた。

会議が終わり、部屋を出ようとしたところ、後ろからリーザに腕を掴まれたのだ。

「待ちなさい、モノノベ・ユウ。少し話があります」

怒ったような表情でリーザは言い、会議室の扉を閉める。二人きりになった部屋の中、リーザは眦まなじりを吊り上げて俺に詰め寄ってきた。

「あなた、深月さんに何か余計なことを言いましたわね？」

「ん——その様子だと、深月とはもう話したのか」

俺がそう呟くの聞いたリーザは、さらに剣幕を強める。

「やはりあなたのせいだったんですのね！　深月さんがいき

なり、どうしたら許してくれるかなんて聞いてくるはずありませんもの！」

「……俺は深月に、リーザのことも考えてやれって言っただけだよ」

俺は自分のしたことを正直に告白する。特に隠す理由はない。

「なっ……ど、どうしてそこで、わたくしのことが出てくるんですか？」

「いや、だってリーザは——深月のことを全く恨んでないんだろ？」

俺はフィリルから聞いた真実を口にする。

「そ、それは——な、何であなたにそんなことが分かるんですの？」

「俺には分からないよ。でも、信頼できる情報だと思ってる」

「……さては、フィリルさんですわね。あの子まで噛かんでいるなんて——」

リーザは苛いらだ立たしげに髪を掻かき上げた。

「つまり、凶星なんだな。リーザは深月自身が罰せられることを望んでいるから、許ゆるしていない振りふりを続けてきたわけか」

「う……」

言葉に詰まるリーザ。俺の推測は当たっていたらしい。

「けど、それじゃリーザが辛いだろ。本当に大切おもに想おもっている深月のことを責め続けるなんて——」

「あなたに心配される筋合いはありませんわ。わたくしは家族のために、必要なことをしているだけ。深月さんの罪悪感やわを和やわらげるためなら、わたくしは彼女にとっての”罰”で在り続けます」

腰に手を当て、きつぱりと言い切るリーザ。やはりリーザはすごい。その優しさと、心意気には頭あたまが下がる。けれど今回は、彼女の強さが裏目に出ているように感じた。

「——そうだな、確かに最初は必要なことだったんだろう。リーザのおかげで、たぶん深月はかなり救われたんだと思うが、二年経った今でもそれを続けるのは、さすがに過保護じゃないか？」

「か、過保護!？」

予想外のことを言われたという顔で、リーザは目を丸くする。

「ああ、深月はもう罪との向き合い方を決めている。ドラゴンと戦い続けることが、自分の責任だと考えてるんだ。深月への”罰”は、今はそれ一つで十分だろ」

「……………」

リーザは俺の言葉を聞くと、ふうつとため息を吐いた。

「まったく……………まさかオオシマ・リヨウの言ったことが現実になるなんて……………」

リーザは亮の名前を出したので、聞いてみた。

「なんでそこに亮の名前が出るんだ？」

「昨日、彼から言われましたの。近いうちに深月さんの方から、償う方法を聞きに来ると」

「っ!？」

俺は予想外のことには驚いた。まさか亮も関わっているとは思わなかった。

「彼に言われて考えていますが、まだ何にするか決めていませんので、深月さんには保留と言っておきました。とんでもなく難しい条件を出すつもりですわ。深月さんが困っても、あなたと彼のせいですからね!」

リーザがそう言うお俺を突き離し、足早に会議室を出て行った。

「うーん、ちよつと焚<sup>た</sup>き付け過ぎたか？」

まさか亮も一枚噛

んでいたなんて……………」

少し心配になりながら廊下に出る。すると近くにある柱の陰から、フィリルがひよこつと顔を覗かせた。

「……………物部くん、お疲れ様」

「もしかして俺たちの話、聞いてたのか？」

俺は問いかけると、フィリルはこくと頷く。

「……うん、聞き耳立ててた。それで、リーザが出て来たから隠れたの」

恐らくフィリルはリーザと顔を合わせ辛<sup>づら</sup>かったのだろうと、俺は申し訳ない気持ちになった。

「あー、その……フィリルがアドバイスしてくれたこと、リーザに悟られるような言い方をして悪かった」

「……それはいい。気にしてない。私としては、十分な結果だったから」

「え？　でもまだ何も解決してないぞ？」

フィリルの言葉に聞き、俺は驚く。リーザはまだ深月を許す条件を考えている段階だ。

「解決はまだでも、ちゃんと前に進み始めたから、それに、大島くんもリーザに何か言ってくれたみたいから……そのうち、たぶん何とかなる。二人には何かお礼しなきゃね」

「いいや、別にいいって。俺は大したことしてないし。お礼なら亮にしてくれ」

「……遠慮はいらない。物部くんと大島くんが喜ぶお礼、きちんと準備する。期待してて」

しかしフィリルは俺の言葉に構わず、そう宣言した。

俺は「……ふふふ」と意味ありげに笑うフィリルを見ながら、どうか厄介なことにならないようにと、胸の内**で**強く祈った。

そういえば、フィリルが俺や亮の名前を呼ぶのは初めてだった。これまではずっと“あなた”や“彼”だった。

## お礼

火山島での生活は、始まってみればミッドガルでの日常ときほど変わらなかった。

朝起きて朝食を食べ、ミーティングがある日は会議室へ行き、ない日は座学の授業を受ける。昼食後は島に降りての実習かバジリスク戦に関する現状報告。その後は勉強したり、“神界”に戻って仕事をし、夕食を食べて寝る毎日。

これまでと違うところといえば、女子たちと生活の距離が近いことだ。同じ船の中で生活しているので、食事は一緒に摂るのが普通になっている。

悠が何か言ってくれたようで、深月さんとリーザさんはどこか前向きな気がした。原作通りなら、まだ解決はしてないが、もうすぐだろう。

昨日、フィリルさんからお礼を言われ、僕は無意識に身構えてしまった。原作を知っているのでこの後お礼をしてくれるが、その日が来たら逃げようと思う。

お礼の内容は刺激が強いので、正直関わりたくない。

そういえば、フィリルさんから“大島くん”と呼ばれるようになった。確か悠のことも“物部くん”と呼んでいた。

たぶんリーザさんたちの件だろうと思う。今までは“あなた”や“彼”と呼ばれていたのが正直嬉しい。

バジリスクが侵攻してくるのは二週間ぐらい先なので、僕は誰もいないところで修行をしている。

そんな日常が五日ほど続いた頃のこと。

僕はその日、フィリルさんを避けていた。確か今日がお礼をしてくれる日なのだが、彼女はややズレた感覚を持っているため、ここ最近乗組員の手伝いをしている。

食事は休み時間の間に摂っているので昼は食堂には行かなかった。

杖で彼女の行動を見ていると、悠と接触する場面を見た。

『……物部くん、お礼の準備、できたよ』

『お、お礼って……何だ？』

悠は反射的に身構えてごくりと唾を呑み込み、問いかける。

『はい、これ』

『……え？』

けれどフィリルさんが差し出した小さな紙切れを見て、悠は眉を寄せた。ノートを切り取ったもので、薄い罫線けいせんの上に手書きで文字が記されていた。

「やっぱり……」

僕はその様子を見て予想していた通りになってしまった。

『一日温泉チケット……有効期限は本日限り？』

俺がその文字を読み上げると、フィリルさんはこくんと頷く。

『……うん、この島に温泉があるのは知ってる？』

『ああ、冊子に書いてあったな』

悠は戸惑いながら答える。

『私はもう行つたけど、すごくいいところ。でもたぶん物部くんは、まだ行けてないよね？』

『まあな。この船にいるのは俺と亮以外ほとんど女性だし、もし温泉で出くわすことになったらマズイだろ』

そうなってしまうので、僕も行かないようにしていた。正直行きたかったが。

『そう……だからこそ、一日チケット。今日は、遠慮なく温泉に行つたらいい』

『それって、俺の貸切って意味なのか？』

『まあ……そんな感じ。大島くんにも伝えるから楽しんできて』  
やっぱり僕にもお礼をしてくれるようだ。

フィリルさんはそう言うのと悠の手にチケットを握らせた。

『お、おう……ありがとな。こんな気の利いたお礼を貰えるなんて思ってたかった』

悠はとんでもないお礼を貰ってしまったようだ。

『……ふふ、お礼を言うのは、ちゃんと温泉を堪能たんのうしてからでいい



よ』

フィリルさんは口元に手を当て、おかしそうに笑った。  
やはり原作通りのお礼をするつもりのようなようだ。避けててよ  
かった。

『ああ、そうするよ。亮にも会ったら伝えておく』

『うん、私も会ったらチケットを渡しておくね』

どうやら悠からも避けなければならなくなった。

(あの野郎……余計なことを)

僕は二人から全力で逃げるため、乗組員の仕事を手伝いに行  
き、なんとか会わずに済んだ。



その日の夕食後、俺は早速タオルを持って部屋を出た。そうい  
えば今日は亮を見かけなかった。朝食や授業の時には居たが、昼食や  
夕食、休み時間にはどこか行っていた。

俺は夕食前にも探したが、見つからなかった。諦めた俺はお礼  
の件をフィリルに任せて温泉に向かった。

船のタラップを降りて火山島に上陸すると、ほんの少しだけ足  
元がぐらつく。ずっと微かに揺れる船上で生活しているため、動かな  
い地面がむしろ不安定に感じてしまうのだろう。

けれどそんな平衡感覚の狂いはすぐに収まる。俺は固い岩を  
踏みしめ、温泉に向けて歩き出した。

夜の火山島は暗く、星空を背景に円錐形の山影が黒々と聳えて  
見える。けれど港の周辺と、温泉までのルートには照明が設置されて  
いた。恐らく、夜に温泉へ入ろうとする人が多いからだろう。明かり  
に従って歩けば、地図も必要ない。

港から温泉までは、五分足らずだ。等間隔に並ぶ照明を追って  
進んで行くと、岩場に囲まれた岸边へ辿り着く。一見するとただの入

り江だが、奥の方からは白い湯気が立ち昇っていた。

冊子の説明によると、温泉は入り江の奥から湧き出ているらしい。入り江は海と繋がっているので外周付近は海水だが、奥は岩によって区切られており、塩気はないのだと書かれていた。

近くと硫黄が混じったような、温泉特有の香りが鼻を衝く。お湯は乳白色に濁っていて底は見えないが、そんなに深くはないだろう。

念のため周囲を確認する。しかし、俺の他に誰かがいる様子はない。

温泉の傍には簡易な脱衣所まで設置されている。俺は慎重にその中を窺うが、やはり誰の姿もなかった。脱衣所にあるのは服を入れる籠と、湯浴み用の桶だけだ。

俺は、ほっとして息を吐く。

フィリルが言った通り、本当に今日は俺と亮の貸切らしい。

俺は脱衣所で手早く服を脱ぎ、タオルと桶を手に温泉へ。桶でお湯を掬い、温度を確かめた後、軽く汗を流してお湯に浸かる。水深は膝よりも少し上という程度だ。

「ふうー……」

思わず息が漏れた。左肩の傷がピリツとしたものの、痛くはない。それどころが、傷の辺りからじんわりと温かさが染み込み、まだわずかに残る鈍痛を押し流していく。

「いい湯だ……」

入り江の外——岩場の向こうには、凧だ海原が広がっている。雲一つない空には無数の星がまばたき、夜の世界を彩っていた。申し分のない景色だ。

これほどまでに心安らぐ時間は、もう何年もなかったように思う。

(ホント、フィリルには感謝しなくちやな)

お湯に肩まで浸かり、じつくりと幸せを噛み締める。

けれどその時、俺はこちらへと近づいてくる気配を感じた。亮が来たのかと思っただが、複数の声が聞こえてくる。

「……え？」

ぼうつと緩んでいた意識が、冷や水を浴びせられたかのように覚醒する。

「皆でお風呂に入るって、何かいいよね！」

あれはイリスの声だ。

「わたくしは正直、ちよつと恥ずかしいですが……」

「ボクも最初は抵抗あったけど、慣れると楽しいよ。こういうの、裸の付き合いつて言うんだっけ？」

リーザとアリエラの声まで聞こえてくる。

「はい、日本ではそう言いますね」

「ん」

同意するのは深月とレン。

「ティアはユウも一緒によかったの」

さらにティアの声まで聞こえてくる。

「……ふふ、物部くんと大島くんもいたら全員集合だったのにな」  
(つて、フィリルもいるのかよ！)

俺は心の中で叫ぶ。いったいこれはどういうことなのか。

俺が混乱して動けないでいる間に、女子たちは脱衣所へと入ってしまふ。

声を掛けるタイミングを逸した俺は焦るが、よく考えれば脱衣所には俺の脱いだ服がある。それを見つければ、皆は俺の存在に気付くだろう。

けれど、脱衣所からは楽しげな声が響いてくるだけで、俺の服を見つけた驚きは伝わってこない。

……変だな。

やはりこちらから存在を報しらせた方がよさそうだと、俺は脱衣所の方へ呼びかけようとする。だが――。

「一番乗リーっ！」

素っ裸で脱衣所から出て来たイリスが、ぎぶんと温泉に飛び込んだ。

(っ!?)

俺は慌てて近くの岩陰に身を隠す。天然の温泉だけあって、幸いにも死角になる場所は多い。

「イリスさん、飛び込むなんて行儀が悪いですわよ」

続いてリーザまで現れたらしく、呆れた声でイリスに注意をしている。

こうなってはもう、身動きが取れない。この状況で出て行けば、裸のイリスたちと鉢合わせになってしまう。

(判断の遅れは死に繋がるぞ)

かつての上官であるロキ少佐の声が脳裏を過ぎった。今ではあの人の言葉を信じられる。

「他に誰もいないんだし、固いことはなしにしようよ。実はボクも、飛び込んでみたかったんだ」

アリエラの声と大きな水音が響く。

「んっー」

さらにぎぶんという音が続いた。どうやらレンも飛び込んだらしい。

「珍しくレンさんがはしゃいでますね」

「ティアはオトナだから、普通に入るの」

深月とティアも温泉に入ったようだ。

「……あえて私は、まだ子供だと主張して飛び込んでみる」

最後にバシヤンと激しい音を立てて入浴したのはフィリルだろう。これで全員。亮は当然いない。

皆が温泉に入っている隙に、何とか離脱できないだろうか。

俺はそつと岩陰から顔を出し、周囲の様子を確認してみる。

湯煙の向こうに、白い裸身を晒すクラスメイトたちの姿が見えた。ごくりと唾を呑み込み、慌てて目を逸らす。

(ダメだ。温泉から出ようとしたら絶対に見つかる)

潜って海の方へ行こうとしても、途中で岩場を越える必要があるのだ。そうなれば確実に誰かの目に留まってしまう。

ここに隠れてやり過ぎす以外、無事に生還する方法はなさそうだった。

イリスとリーザのあられもない会話が聞こえて来る。

「んー」

「レンさん、気持ちは分かりますがお風呂で泳ぐのはちよつと……」

続いて耳に届くのは、深月がレンを注意している声。

バシャバシャとレンが泳いでいるらしき水音が聞こえて来た。

「あつ、ティアも泳ぐー!」

「も、もう、ティアさんは大人だと言っていたじゃないですか」

「これだけ広いんだから、別にいいんじゃない?　ボクも参

加させてもらおうかな」

「アリエラさんまで!」

ティアとアリエラも泳ぎ始めたらしく、深月が途方に暮れている。

賑やかで、皆楽しそうだ。だが、そういえばフィリルの声が聞こえない。

「——あ、こんなところにいた」

「っ!」

俺が隠れていた岩ご向こうから、いきなりそのフィリルが顔を覗かせた。危うく大声をあげそうになった俺は、自分で自分の口を塞ぐ。

「……物部くん、楽しんでる?」

フィリルは岩陰に入ってくると、俺の顔を下から覗き込む。当然ながらフィリルは裸だ。白く大きな双丘がお湯に浮いている。温泉が乳白色なので水面下より下は見えないが、十分に刺激的な光景だった。

「ど、どういうことだよフィリル!　話が違うぞ。何で皆が

いるんだ?　今日は俺と亮の貸切じゃなかったのか?」

できるだけ声を抑えつつ、俺はフィリルに詰問する。

「……そうだよ、今日は物部くんとか大島くん、そして私たちの貸切。あなたのために、私が用意した時間」

「用意したって、まさかイリスたちも俺がいることを知っている

のか？」

「ううん、皆は知らない。脱衣所の服も、気付かれる前に私の服で隠したから大丈夫。でも、ここに来る前に大島くんを探したけど、見つからなかった」

ファイリルは少し残念そうな表情をする。

「俺も探したが、見つからなかった。夕食も俺たちが来る前に済ませたって先生が言ってたからな」

「そっか……残念だけど、大島くんにはまたの機会にしよう。それで物部くん、これでこっそり、女の子の裸が見られるよ。嬉しい？」  
首を傾げ、問いかけてくるファイリル。たわわな胸の谷間にお湯が溜まっているのが、妙に扇情的だ。

「う、嬉しいわけではないだろ。こんなことされて困るだけだ」

「……ホント？ 男の子は、女の子の裸を見ると嬉しくなるんじゃないの？ ほら、今もドキドキしてる」

ファイリルは俺の左胸に手を当てながら言う。

「それは……当たり前だろ。もし見つかったらタダじゃ済まないんだし、平常心でいられるか」

一番の理由は目の前に裸のファイリルがいることなのだが、さすがにそれをはつきり言うことはできなかった。

「……そうなの？ 私、間違ってた？ そんなに、迷惑？」

するとファイリルは表情を翳<sup>かげ</sup>らせ、しよんぼりした様子でお湯に深く体を沈めた。

「あ……いや、俺は——」

少し言い過ぎたかと、申し訳ない気持ちになる。これはファイリルなりに、一生懸命俺を喜ばせようとしてくれた結果なのかもしれないのだ。

俺は落ち込むファイリルに声を掛けようとするが——その時、お湯の中から突然、何かが飛び出した。

「ふはっー」

大きく息を吸い、体を振るって水滴を跳ね飛ばすのは、全裸の

ティア。

「へ……?」

驚きのあまり、間違の抜けた声が喉から漏れる。

パチパチ瞬きをまばたをするティアと視線が交わった。どうやらお湯の中を潜って遊んでいたらしい。

「あ、ユウとフィリルだー。あれ? でもどうしてここにユウがいるの?」

自分の体を隠そうとせず、不思議そうに訊ねてくるティア。目が瑞々みずみずしい白い肌に惹き付けられる。

まだ幼い肢体は起伏に乏しいが、微かに膨らんだ胸は女性としての萌芽ほっがを感じさせ、不覚にも心拍数が上昇してしまう。

「……静かに。他の皆に気付かれたら、物部くんがすごく困ることになる」

答えられない俺に代わり、フィリルがティアの口をそつと押しえた。

「そうなの? 分かったの。ティアは旦那さまを困らせないの」

ティアは声を潜めて答えると、硬直していた俺に身を寄せてくる。

「……ティ、ティア?」

「ねえ、ユウ——静かにするから、いい子にしてるから、一緒にいていい?」

ぴとりと体をくつつけるティアに俺は慌てる。

「ま、待て。これはマズイ。こ、こういうことはしちやダメだ」  
「どうして?」

ティアは何か、ユウの嫌なことしてる?」  
俺は小さな声で諫めるが、ティアは構わず密着してくる。直接触れる柔肌の感触に、頭がクラクラした。

「い、嫌って訳じゃなくてだな……」

下手に否定すれば、一緒にいたくないという意味になってしまう。ティアを傷つけずに説得する言葉が思い付かず、俺は途方に暮れる。

「……物部くん、そういうのは、嫌じゃないんだ」

だが俺の発言は、さらなる誤解を生んでいた。俺たちの様子を眺めていたフィリルは、ポンと手を叩く。

「うん、やっぱり、ちゃんと喜んでくれることをしないと」

そう呟き、フィリルは俺の後ろに回り込んだ。

「え……？　お、おい？」

「……えい」

何をする気かと身構えた俺の背中に、ふにゆんとフィリルの大きな胸が押し付けられる。

有り得ないほど柔らかく、こわくてき 蠱惑的な感触に、頭の中が真っ白になった。

「な——」

もはや、何も言えない。

「……いーち、にーい、きーん、はい——おしまい」

フィリルは三秒を数えると、俺から体を離す。少しのぼせたのか、フィリルの顔は赤くなっていた。

「……私の心臓、すごくドキドキしてる。好きじゃなくてもこうなるって、知っててよかった」

自分の左胸を押さえ、ほうと熱い吐息を漏らすフィリル。

「そうじゃないと私、勘違いしてたかも」

上気した顔でフィリルは呟き、俺に問いかける。

「……物部くん、嬉しかった？」

「いや、それは……まあ、どちらかと言えば、そりゃ嬉しいが……」  
しどろもどろになりながら頷くと、フィリルは安堵あんどした様子で微笑んだ。

「……よかった」

その表情にしばし見惚みほれていると、ティアが痛いほど強く俺の体を抱きしめる。

「旦那さまは、やっぱり胸が大きい方がいいの？」

頬を膨らませ、ティアは俺を上目遣いで睨む。

「別にそんなことは——っていうか、一旦ティアも離れてくれ



ないか？　そうじゃないと落ち着いて話もできない」

「や。さつき、ユウはティアがいること忘れてたの。だから、もう忘れられないようにぎゅーってしてるの！」

話しているうちに自然と声が大きくなる。だが、気付いた時にはもう手遅れだった。

「ティアさん？　そこにいるんですか？」

岩の向こうから深月の声が響く。

俺とティアは、同時にびくりと肩を震わせた。

「あら、いつの間にかフィリルさんもいませんわね」

リーザもフィリルの不在に気付き、声を上げる。

「……しーっ」

フィリルは口元に指を当て、ジェスチャーで静かにしろと伝え、岩陰からゆつくりと出て行った。

「私なら、ここ。ティアさんと少し話してた」

「うん、ティアもいるの！」

ティアは名残惜しそうな表情をしながら俺から離れ、岩の向こうにいる深月に顔を見せる。

「そうですね……何となく兄さんの声も聞こえた気がしたんですけど」

深月の言葉に冷や汗が頬を伝う。

「……物部くんの声？　空耳じゃない？」

フィリルは惚とぼけてみせるが、それが余計に深月の疑いを深めたらしい。

「怪しいですね。念のため確認してみましようか」

バシャバシャと音を立てて近づいてくる深月。

——プルルルルルル。

しかし、脱衣所の方から電子音が聞こえて来て、深月の足音は止まった。

「緊急の呼び出しみたいです」

深月はそう呟くと、脱衣所へと向かっていく。

(た、助かった……)

安堵の息を吐く俺に、戻ってきたティアが目を伏せて謝る。

「ごめんね、ユウ。約束破って、うるさくしちゃった」

「いや、俺の声も聞こえてたみたいだし、ティアのせいじゃない  
さ」

角の生えたティアの頭を撫<sup>な</sup>で、俺は小声で答えた。

しかしいったい何の連絡だったのだろう。それが気になって  
聞き耳を立てていると、脱衣所から深月が戻って来る気配がした。

「——皆さん、重要なお知らせです」

深月はそう前置きして、言葉を続ける。

「ニブルが明朝、独自に準備を進めてきた作戦を執行するよう  
です。その詳細はまだ分かりませんが、ニブルの示した成功予測確率は  
約九十パーセント。ほぼ確実に——バジリスクを仕留められると  
のことでした」

## ミストルティン

シャワーを浴び、僕は制服に着替えてから会議室に向かった。今日はフィリルさんがお礼をしてくれるが、ずっと避けていた。

フィリルさんのお礼は刺激が強すぎて平常心を保つのは無理なため、みんなが船を降りるのを確認してからシャワーを浴びていた。

そして今日はニブルがバジリスク討伐を独自に進めていた作戦が伝えられてくるので、端末は肌には離さず持っていた。

連絡が届き、内容を見てから部屋を出る。しばらくして会議室に着き、端末をいじりながら時間を潰していた。

しばらくして入ってきたのは僕が今日、避け続けていたフィリルさんだ。

顔が火照<sup>ほ</sup>っており、妙に色つぽい。やはり行かなくてよかった。

「あ、大島くん、どこ行ってたの？」

フィリルさんは頬を膨らませて睨んできた。やっぱり原作以上に可愛い。

「悪い、仕事が山のようにあつたから色々船内を周ってたんだ」  
僕は頭を掻<sup>か</sup>きながら嘘を吐いた。当人を避けてたなんて言えないからな。

「……そうなんだ。でも、お礼は別の機会にするね」

「ああ、いつでもいいよ。……ところで、お礼ってどんなことしてくれるつもりだったの？」

分かってはいたが、一応知らないふりをして聞いてみた。

「……今日の温泉を、物部くんと大島くんの貸切にすること」

やっぱりそんなお礼か。聞き様によつては有り難いが、フィリルさんはとある国の王女様であるため、ややズレた感覚を持っている。

「そっかー、損しちゃったよ。行けばよかった」

僕はわざとらしくないように悔しがる素振りを見せる。

「大丈夫、ニブルが独自に、作戦を進めてたみたいだし、もしバジリスクを倒せたら、また温泉に、入れてあげるね」

正直勘弁してほしい。ニブルが失敗してほしいと本心で思った。

「そうなるといいね」

僕が返事を返すと、無数の気を感じた。深月さんたちが来るのだろう。扉が開く音がして、悠以外のみんなが入ってきた。

「亮さん、早いですね」

深月さんが先頭にいて、僕に声を掛けてきた。

「まあね、船内に居たから連絡に早く気付いたんだ」

「そうでしたか、ではもうすぐ篠宮先生が来るので席に着いてください」

深月さんに言われ、僕は席に着いた。

十分くらい経つと、悠も入ってきた。顔は深月さんたちより、顔が火照っていた。

「兄さん、遅かったですね」

深月は悠に声を掛けた。

「ああ、まあ……ちよつとな」

「その様子だと、兄さんもお風呂上がりですか？」

じつと悠の顔を見つめ、問いかけてくる深月さん。

悠はみんなが温泉から出た後に自分も脱衣所に向かって着替えたのだろう。

「そ、そう、ちょうどシャワー浴びててさ、連絡に気付くのが遅れたんだよ」

悠は誤魔化すため、動揺を隠しながら、言い繕う。深月さんはそんな悠を疑わしそうに半眼で睨んでいたが、篠宮先生が部屋に入ってきたのを見て溜息を吐いた。

「ふう——まあ、そういうことにしてあげます。篠宮先生も来たので、席に着きましょう」

深月さんに促され、悠は着席する。

篠宮先生は全員が席に着いたのを確認すると、ホワイトボード

の前に立って話し始めた。

「——先ほど、ニブルから連絡があつた。明朝六時にかねてより準備していた作戦を実行に移すらしい。あちらさんは、これでほぼ確実にケリが付くと考えている。もし本当にそうなれば、我々の出番はなくなるわけだ」

それを聞いたリーザが手を挙げ、発言する。

「わたくしたちとしては、ニブルがバジリスクを倒してくれるのなら御の字ですけれど……そんなに上手く行くのでしょうか？」

「まあ、それなりの根拠はあるようだな。作戦内容の詳細と共に、ニブルが収集・分析した最新データも提供された。今から皆にも見せよう」

篠宮先生カリモコンを操作すると、天井からスクリーンが降りてきた。さらに電気が消え、スクリーンにニブルから提供されたらしい資料が映し出される。

「これによると、ニブルはバジリスクの能力を特定した上、様々な方法で測定も行っている。このデータに基づいて立てられた作戦であれば、信用性は高いだろう」

「……バジリスクの能力、特定できたんだ」

フィリルさんの眩きが耳に届く。篠宮先生は頷き、スクリーン上のデータをポインタで指し示した。

「バジリスクが放つ赤い閃光、それによって引き起こされる現象の正体は——風化であることが分かった」

篠宮先生の言葉を聞き、会議室にどよめきが起こる。だが悠の前に座っていたティアは、振り向き、小さな声で訊ねてくる。

「ユウ、風化ってなあに？」

「えっと……例えば、大きな岩でも風雨や日光に晒さらされ続けたら、砕けて細くなって、どんどん小さくなるだろう？　　そういう、時間による変化のことだな」

悠たちの会話を聞いていた篠宮先生は、大きく頷いて言葉を続けた。

「——そう、風化の原因となるのは時間だ。つまりバジリスク

の攻撃は時間を吹き飛ばすものだと言える」

原作通りだ。バジリスクは瞳から赤い閃光を放つため、触れた物は風化される。そして奴には奥の手がある。それを知るのはニブルが作戦を決行するときを知るだろう。

「ニブルは半減期の異なる複数の放射線物質を使って測定したところ、赤い閃光を浴びた物質は数百年から数万年の時間経過が観測されたらしい。かなり差があるが、これは被照射時間の違いによるものだ」と分析されている。それを考慮すると、一秒間の照射でおよそ二千年が吹き飛ばすようだ」

「に、二千年ですか……」

深月さんも、声を上擦らせる。

「ああ、人間など一瞬で骨か塵だ。生物にとっては最強最悪の攻撃だな。この能力は“終末時間”と呼称することになった。学者たちはタキオン粒子がどうこうといった仮説を立てているようだが、根本の原理は未だ不明。けれど起きている現象が風化だと分かれば、対応策を立てることも可能だ」

篠宮先生はポインタを移動させ、ニブルが実行しようとしている作戦の説明に移る。

「時間は万物に例外なく影響を与えるが、それでも変化しにくい物質はある。そういった物質なら、バジリスクの閃光にある程度耐えられるだろう。そこで立案されたのが、ミスリルでコーティングした爆弾を、目標の上空から垂直投下する計画だ」

ポインタで示されたのは、爆弾の外観写真。逆さになった円錐形で横に幅広く、独楽の形をしている。

「知つての通り、ミスリルは最も硬く、安定した合金。防壁としては最適と言える。そのミスリルを用い、厳密に耐久力を計算し、バジリスクまで到達するように設計された兵器——それがこの対バジリスク用大型爆弾、ミストルテインらしい」

ミストルテイン……北欧あたりの神話に登場する宿り木の槍だったと思う。

ニブルはどうやらこれで倒せると思っっているが、僕は全く思っ

てない。

「篠宮先生自身は、どのくらいの成功率だと考えていますか？」

悠は手を挙げ、篠宮先生に訊ねた。

「——五割だな。ドラゴンは未知数の存在だ。それまで得たデータが正しいとは限らない。もはやこれ以外に打つ手のないニブルは作戦の成功を信じているようだが、私はそこまで楽観的になれんよ」

肩を竦め、重い口調で答える篠宮先生。

確かにその通りだが、ミストルティンはバジリスクを倒すまでとはいかないが、追い詰めることはできる。新たなデータを得る機会となるだろう。

「打つ手がないって……これだけ能力が分析できたんだから、他の方法もあるんじゃない？」

「分析したからこと、と言えるな。爆弾を垂直投下するのは、弾道軌道のミサイルだと、閃光を浴びた瞬間に運動エネルギーを“風化”させられてしまうからだ。その点、重力なら時間を吹き飛ばされても影響が持続する。実弾であるのも、ニブルが所持する光学兵器では、ダイヤモンドの鱗に散乱させられて通用しなかったためだ」

そう解説されると、確かに他の方法が思いつかない。けれど深月さんは違ったのか、挙手して篠宮先生に問いかけた。

「地雷はダメなんですか？」

これまでの事例で、地面が赤い

閃光の影響をあまり受けていなかったのは、大地は数千年を掛けても変化が小さいものだからと考えられます。それなら地面の下に爆弾を仕掛けておれば……」

「その方法も試されている。けれどバジリスクはあらかじめ自分の進行方向を掃除するので、地雷は影響を受けない地中深くに設置しなければならぬ。しかしそれでは、爆発が地表に届く前に察知され、爆発そのものを閃光で吹き飛ばされてしまうんだ」

「爆発そのものを……では、私たちの計画も、見直さなければなりませんね」

難しい顔で考え込む深月さん。しかし、篠宮先生は察知と言う

が、実際は違う。

爆発が地表に届くにしても数秒は掛かるため、バジリスクの鈍い動作ではダメージを負う。しかし、それでも効果がないということ、察知以上の何かがある。僕は知っているが、バジリスク討伐前に知るだろう。

「幸い、こちらにはまだ時間がある。今回提供されたデータを元に、作戦は最考しよう。とは言え、ニブルがバジリスクを倒してくれば、私たちが頭を悩ませる必要もなくなるのだがな」

篠宮先生は苦笑しながら言う、部屋を明るくしてスクリーンを仕舞う。

「明日は朝五時半に艦橋へ集合すること。ニブルが作戦映像をリアルタイムでこちらに回してくれるらしい。よほど私たちに自分たちの力を誇示したいようだ」

「あ、朝五時半……」

露骨に嫌そうな声を上げたのはフィリルさんだ。そういえば彼女は朝起きるのは苦手だったと思ひ出す。

「寝坊はするなよ？　時間までに現れなかったら、私が叩き起こしにいくからな」

僕たちに釘を刺し、篠宮先生は会議室を出て行く。何か相談があるのか、深月さんは急ぎ足で篠宮先生を追いかけて行った。他のクラスメイトたちは、雑談をしながら席を立つ。

悠はティアちゃんに近づいて何かを話している。多分ティアちゃんはさっきの話を聞いて不安になったのだろう。それを見た悠は不安を和らげるためだろう。

僕は仕事があるので、扉を開けて廊下の曲がり角で杖を取り出し、”神界”へ向かった。





八時間後、僕たちブリュンヒルデ教室の面々は時間通りに艦橋へと集合した。

輸送船は停泊中のため、クルーの姿は少ない。太陽はまだ昇っておらず、艦橋から見える景色は、星空をバックにした火山の影と黒い海。

艦橋には大きなモニターがあり、そこには複数の映像が分割して映し出されている。その一つはノイズ混じりの暗い景色。もう一つは軍服を着た強面の男たちが居る並ぶ会議室の映像。

『篠宮大佐——よく見ておくといい、我々ニブルがバジリスクを討つ瞬間を』

「はい、楽しみにしております、デイラン少将」

篠宮先生は額に傷のある初老の男——デイラン少将と会話をしている。後ろに整列して会議室にいる面々は、今回の作戦に携わるニブルのお偉い方のようだ。

『クラークン、リヴァイアサンを討伐し、ヘカトンケイルを撃破した君たちの力はもちろん評価しているが、我々とていつまでも“D”に頼ってはおれん。人の力でドラゴンを倒すことが、今こそ必要なのだ！』

デイラン少将は声高々に叫ぶ。どうやらニブルはドラゴンを倒したという実績が欲しいようで、竜災りゅうさいと後始末役というイメージを払拭したいようだ。

すると、デイラン少将は僕の方を見た。ニブルのお偉い方も僕を見てざわざわと話し声が聞こえてくる。

『彼が例の——』『ああ、間違いない』『よく見ると普通の男に見えるが……』

どうやらニブルは僕を直接見るのは初めてのようだ。僕はミッドガルの生徒ではあるが、それ以前に神様であるため、堂々としている。

『君が……ドラゴンを圧倒する存在か』

「ああ、大島亮だ。よろしく」

僕は少し偉そうに微笑む。するとデイラン少将たちは感じ

取ったようでしたじろぐ。

『まあ、今回のことで君も知ることになろう。我々の力を』

テイラン少将は落ち着きを取り戻したようで僕に力を知らしめたいようだ。

「ああ、楽しみにしています」

僕は返事を返して目を閉じた。多分みんなは唾然としているだろう。強面で貫禄がある人たちに対して堂々としているからだ。はつきり言っつて人間と神では格が違うので敬語で話すものの、偉そうに話すことにしている。

「んう……」

威圧的に話すニブルの軍人を見て、レンちゃんはアリエラさんの後ろに身を隠した。

「レン、どうしたんだ？」

悠が気になって問いかけると、アリエラさんが苦笑を浮かべて代わりに答える。

「ああ、レンは大人の男が少し苦手なんだよ。……でも、物部クンと大島クンは大丈夫だよ。二人ともお兄ちゃんみたいな感じってレンも言っつたし」

「——!? んっ! ん〜!」

するとレンちゃんは顔を赤くして、アリエラの背中をポカポカ叩く。

「あ。これは秘密だったっけ? ごめんごめん」

頭を搔かいて謝るアリエラ。それを見ていたテイラン少将は毒気を抜かれた様子で息を吐く。

『……君の部下たちは、ずいぶんとマイペースなのだな』

「申し訳ありません、何分問題児ばかりなもので……」

篠宮先生は苦笑を浮かべて答える。

「あの……」

そこにティアちゃんの小さな声が響く。ティアちゃんはおずおずとモニターの前に歩み出ると、画面の向こうにいる男たちを見つめる。

『その角……君は今回の竜紋変色者だな』

ティアちゃんのことも知っているようで、デイラン少将は硬い声で言う。ドラゴンを連想させるティアちゃんの角は忌々しいものに見えるのかもしれない。

「あの、ティア、応援するの！」

けれど男たちの様子に構わず、ティアちゃんは一生懸命に声を上げる。

『お、応援？』

画面の向こうに微かな戸惑いが広がった。

「うん——おじさんたち、ティアを守ってくれて、ありがとうなの！ ティア、応援してるから、頑張つて!!」

強面の男たちが明らかに動揺する。

『な、何ていい子だ』『うちの娘にもあんな時期が——』『角もよく見ればキュートではないか……』

ひそひそと囁き合う声が漏れ聞こえてきた。

デイラン少将はしばらく絶句していたが、こほんと咳払いをしてティアちゃんを告げる。

『君の気持ちは受け取った。おじさんに任せておけ』

デイラン少将は孫に弱いおじいちゃんのように。自分でおじさんつて……。

画面の向こうからは『おい——今すぐミストルテインの輸送班と繋げ。私が直接気合を入れてやる』というデイラン少将の勇ましい声が聞こえてくる。

そうしたニブル側とのちよつとした交流もありつつ、ついに作戦開始時刻が間近に迫った。

『——ミストルテインは、四機の大型輸送機で牽引できる限界重力までミスリル防壁を厚くしてある。バジリスクの攻撃射程は約五千メートルのため、高度八千メートル付近から投下する予定だ』

デイラン少将はこれから行う作戦の内容を僕たちに説明する。

『バジリスクの射程に入るまでは燃料噴射で細かく位置を調整する。そして一度赤い閃光の中に突入すれば、もう風化による影響は受

けない。余計なエネルギーは全て”風化”され、ミストルティンはただ重力に引かれて真っ直ぐに落ちるのみだ』

疑問をぶつける篠宮先生に、デイラン少将は余裕を持って答えた。

「バジリスクがミストルティンを迎撃せず、回避に徹する可能性は？」

『これまでのデータでは、自分に接近する何かを感知した場合、バジリスクは必ず足を止めてそれを迎撃している。最初から逃げに徹する確率は低いだろう。直前で回避に切り替えられても、ある程度は追尾できる。バジリスクの鈍足では逃げ切れんよ』

デイラン少将は自信ありげに言うが、僕は失敗に終わることを知っている。しかし、この作戦でバジリスクの奥の手を知ることになる。

『では……間もなく時間だ。ミストルティンの行方を共に見守ろう』

会議室の映像が小さくなり、代わりにノイズ混じりの画面が大きく表示される。先ほどより画面は明るくなっており、それが超遠距離の高空からバジリスクを移し出している映像だと皆は気付いた。

白んだ水平線に小さな黒い影が浮かび上がっている。豆粒程度の大きさにしか見えないが、あれがバジリスクのシルエット。

画面の左上に表示されていた時計が、作戦開始時間を示す。

映像に変化はないが、八千メートルの高さからミストルティンが投下されたはずだ。

皆、息を呑んでモニターを見つめる。

チカツと赤い光が瞬いたのは、誰かが唾を呑む音を響かせたのと同時に、地上から空へと、真っ直ぐに赤い閃光が伸びていく。ミストルティンがバジリスクの射程である高度五千メートルに到達したのだろう。

だが時間を剥奪する閃光は、天頂までは届かずに途中で途切れた。そして次第に、地上へと押し戻されていく。

どうやら落下するミストルティンが、赤い閃光を受け止めている。

るのだ。ニブルの示したデータの通り、ミストルティンは赤い閃光の”風化”に耐えている。

しかし異変は唐突に起こった。

赤く細い光の柱が、急激に膨張する。何倍もの太さになった赤い閃光が、夜明け前の空を裂く。

そして数秒後——押し戻されていたかに見えた閃光は、一気に天を衝いた。それは閃光を遮っていた障害物が消えた証。どうやらバジリスクは奥の手を使ったようだ。

『——おいっ！　　いつたいどうなつとる！』

モニターの向こうからデイラン少将の怒号が響き、画面に部下らしき人物が映り込んだ。

『高度約二千メートルにて、ミストルティンの消滅を確認。作戦は失敗です』

『何だと!?　　ミストルティンには攻撃に十分耐えうる量のミスリルを用いたのではないのか?』

『風化速度が想定以上だったとしか言いようがありません。観測分析班からは、バジリスクの背中が割れて巨大な眼球が出現したとの報告が届いています』

『新たな眼だと?　　それが”終末時間”<sup>カタストロフ</sup>の出力が増大した理由か……』

デイラン少将は険しい表情で呟き、俺たちの方へと視線を向けた。

『——聞いている通りだ。我々の力は、またしてもドラゴンに通用しなかったらしい』

「いえ……決してそんなことは。バジリスクが新たな眼を開いたのは、それだけ追い詰められた証拠です」

篠宮先生はそう言うが、デイラン少将は苦笑いを見せて首を横に振る。

『それでも、倒せなければ意味はない。バジリスクの新たな眼——今後は第三の眼<sup>サードアイ</sup>とも呼ぼうか——それに関するデータは後程送らせる。そちらの作戦を成功させるために役立ててくれ』

「感謝します」

頭を下げる篠宮先生。デイラン少将は頷き、次にティアちゃんの方を見る。

「おじさん……」

『応援してくれたのに、すまないな。力が足りなかった』

「ううん、いいの。おじさん、ありがとう！」

ティアちゃんが礼を言うと、デイラン少将は薄く微笑む。

『……君たちの幸運を祈る』

その言葉と共に通信は切れ、モニターは真っ黒になった。代わりに窓の外が明るくなった。陽が昇ったのだろう。

僕は悠たちの気が上がっていることが見なくても分かる。次は自分たちが戦う番だと、全員が理解しているようだ。

僕も奴と戦うのが楽しみのもので、心の底からワクワクしてきた。

## 決戦に向けて

ニブルの作戦が失敗に終わった日から、バカンス気分は綺麗さっぱり消え去った。

刻一刻と迫るのは、ティアちゃんを守る命懸けの戦い。

デイラン少将からの情報を元に新たな作戦が立案され、その予行演習が毎日行われた。もはや通常授業はほとんどない。

バジリスクの体長はおよそ五十メートル。外観を一言で表現するならば、巨大なトカゲというべきだろう。しかしその生物は、ただ大きいだけの爬虫類はちゆうるいではない。

体は赤みを帯びたダイヤモンドの鱗うろこに覆われており、瞳から赤い閃光を放ち、その周辺を”風化”させる。

一秒間におよそ二千年は吹き飛ぶ威力である。そして奴には奥の手がある。

ミストルティンを貫いた第三サードアイの眼。ニブルから送られた情報によれば、背中せなかの眼を開いた時の射程は、およそ一万メートル。照射された数秒だけで億年単位の時間が飛んだらしい。

そんな状況で篠宮先生と深月さんが考え出したのは、至極単純な作戦だった。

バジリスクの射程外かつ死角から、反応できない速度で、ダイヤモンドの鱗を貫く威力の攻撃を加える——それが、新たな作戦の内容。

ニブルの有する光学兵器では火力が足りないが、ミッドガルには条件を満たす”D”がいる。

港から十分ほど歩いたところにある広い荒地で、今日も彼女たちは練習を繰り返していた。

「ではレンさん、行きますわよー」

「ん」

リーザさんが作り出した架空武装、射抜グングニルく神槍ニルにレンちゃんが手を添えた。

するとリーザさんの架空武装は凄まじい速度で巨大化し、長さ

が何十メートルもありそうな巨槍きよそうになる、もはや抱えることすらできない大きさだが、リーザさんたちは触れるだけで架空武装を支えていた。

架空武装は上位元素が形態ダークマターを変えたもので、イメージでの操作が可能だ。そしてもう一つ、上位元素は他の”D”に受け渡せるという特性を持つ。

今、リーザさんはレンちゃんの上位元素を借りて、自身の架空武装を巨大化させたのだ。

しかし――。

「あっ!？」

リーザさんが慌てた声を上げた。

突如として槍の輪郭が歪み、宙に溶けるがごとく架空武装は消失する。

借りた上位元素は、あくまで他人のものなので制御が難しい。だから少しでも気を抜くと、ああやってすぐに崩壊してしまう。ゆえに二人以上から上位元素を借りるのは不可能だと言われていた。

しかし、僕は”世界神”であり、創造と破壊を司る神。上位元素を他人から借りても簡単に扱える。逆に、相手の使いやすいように調整できるため、問題はない。

悠も対竜兵装を作る時は深月さんたちから上位元素を借りているが、変換の際はユグドラシルから送られたマルドゥークの設計図を元に作りだす。だから他人の上位元素が持っている癖は気にしないわけだ。

けれどリーザさんたちの場合は、繊細なコントロールが要求される。

「もう一度、行きますわよー!」

「んっ」

リーザさんの声に頷くレンちゃん。再び巨大な架空武装の槍が形成された。

上位元素ダークマターの受け渡しに関する訓練は、学園のカリキュラムに組み込まれている。だが日常的に訓練していても、決して安定はしない



技法だ。悠のような例外を除いて、実戦で使われることはまずない。僕の場合、実戦では気を使って戦うので、尚更そういうことはない。

しかし今回の作戦で必要とされる攻撃を行うには、どうしてもこの技法に頼るしかないという。

(さて、僕もそろそろやるか)

僕は彼女たちから視線を外し、自分の特訓に戻る。

今回の作戦はリーザさんとレンちゃん二人で最初に攻撃をする。深月さんとフィリルさん、アリエラさんは、リーザさんたちの初撃が失敗した場合のサポート役だ。二人を守り、なおかつ第二次攻撃へ移ること。

悠とイリスさんは役割を与えられていない。

悠の対竜兵装で攻撃するとしても、射出型武器の”境界を焼く蒼炎”は着弾前に迎撃されてしまう。超重力の空間断層を生み出す”天を閉ざす塔”ではバジリスクの射程外から撃つても届かない。

アイツにできるのは、反重力物質でいざという時に行動の選択肢を増やすこと。そのため、少し離れたところでその制御訓練を行っている。

イリスさんは悠の少し近くで狙撃の訓練をしている。

彼女のミスリル零距离爆破は、バジリスクに通用する攻撃。もしもバジリスクが射程外から狙うことがあれば、致命打を与える可能性が高い。

とは言え、狙いを付けるには、どうしても目標を視認する必要がある。それはバジリスクの視界にも入るということだ。たとえ射程外であっても、そんなリスクのある作戦は許可されない。

なので、二人は船で待機することになる。

しかし、僕は少し気になることがある。彼女は何を作っても爆発させてしまう。その性質を攻撃に向けると、イリスさんは他にはない強みを手にしている。

もしかしたら、彼女の本質はもっと別の何かではないかと思

う。

例えば正常な機械が壊れた時、原因は不適切な使い方にあることが多い。だからイリスさんの能力も、不適切な使い方をしてからエラーが起きて爆発するのではないかと推測している。

もし、正しい使い方をすれば、とんでもないものを生み出してしまふかもしれない。

原作では悠も同じことを思っていたが、今はリヴァイアサンの能力を制御しているので、まだそうは思っていないようだ。

それに、イリスさんを見ているとそんなことは一生ないと思う。

そんなことは置いといて、悠とイリスさんは船で待機して、深月さんたちがバジリスクと戦うところを見ることだ。

ちなみに僕は深月さんたちの攻撃でバジリスクが隙を突いたところを攻撃するのが役割である。つまり、僕がバジリスクにとどめを刺すということだ。

しかし、僕も何かあればサポートに回らなければならないので、カタストロフ“魔封波”で攻撃対象を逸らしたり、金縛りでバジリスクの動きを完全に封じる特訓をしている。

金縛りは問題ないが、“魔封波”はカタストロフ終末時間で風化させられてしまうので、超サイヤ人でやらなければならない。

攻撃も超サイヤ人で迎え撃つが、それでも第三の眼サードアイに通用するかは分からない。もしかしたら、超サイヤ人2や、破壊のエネルギーを使うかもしれない。

破壊のエネルギーは風化と違って、存在するものを消すことであるので、時間に影響されない。

体に身に纏えば、たとえ食らっても骨になることはない。しかし、その場合はみんなにどう説明するかで今後に関わる。

破壊のエネルギーは最後の手段にして、僕は超サイヤ人でバジリスクを倒す特訓を続ける。

「みんなーっ！　もうすぐお昼ご飯なのーっ！」

するとそこに、架空武装の翼を生やしたティアちゃんが空を飛

んで現れた。空気への変換を巧みに制御して地面に降り立ち、悠の方に駆け寄ってくるティアちゃん。

「ユウ、今日のお昼ご飯はティアも手伝ったの！」

「そりゃ楽しみだ。期待してる」

「うんっ！」

悠とティアちゃんの話し声が耳に届く。

僕たちが練習を行っている間、ティアちゃんは別の時間割で座学の授業を受け、時には乗組員の手伝いを行っていた。

バジリスクに狙われているティアちゃんは前線には立てないため、今できることを頑張っているみたいだ。

みんなバジリスクを倒すために誰一人として時間を無駄に使ってはいない。

しかし僕は昼食を食べた後に”神界”に行って仕事をしなければならぬ。

僕はみんなに見られないように昼食を早く食べ終わるようにした。



”虚無の世界”。ドラゴンボール超に出てくる”無の界”と同じで、時間も空間もない。僕がミッドガルに来る前は毎日ここで修行をしていた。

今は週に三回来ており、他の”世界神”と組手をしている。

ここには僕と弥生さんとルドルフさんが居る。

第二世界の”世界神”飯島弥生さんは神々の中で、一番の怪力の持ち主。お淑やかな女性で、みんなのお姉さんの存在です。

第三世界のルドルフさんは神々で一番の音量の持ち主である。

雄叫びを聞いたものは一時的に運動神経を麻痺させ、”世界神”でも立っていられるのがやつとな程だ。

ドラゴンボール超の漫画に出てくる第十宇宙の破壊神ラムーシと同じ能力を持っている。

数時間前に僕たちは三神さんじんでバトルロイヤルをしており、今は休憩している。

”カチカチン鋼”でできている武舞台を修復し終え、今は観客席に座って雑談をしていた。

「そういえば、いつ頃神々の合同サミットがあるんすか？」

ルドルフさんは弥生さんに聞いてきた。

「たしか下界時間では五年後ですよ。忘れましたか？」

弥生さんが答えると、ルドルフさんは「そうだった」と納得した。

本当はルドルフさんが何十万倍も年上だが、”世界神”は変わり者が多く、まともなのは弥生さんしかいないのだ。

「神々合同サミットは百年に一度だから忘れるのも仕方ありませんが、ルドルフさんは恵さんの次に長く仕事しているんですからいい加減覚えてください」

弥生さんは少し怒った表情でルドルフさんを睨んだ。

「悪いな。ワシは忘れっぽいんだよ。しかし、最近は歪みが少なくなっただけ」

「そうですね。僕の方でも歪みがほとんど発生しないんです」

最近、世界に起きる空間の歪みが少なくなってきたおり、自然を司る神々はその原因を調べているが、全く分かっていない。

空間の歪みは世界で発生する超自然現象で、世界を滅ぼしかねない。それを僕たち”世界神”が神の気を注ぎ込み、正常に戻すのが主な仕事である。

しかし、歪みが発生するということは世界のバランスが保たれている証拠であるが、それが無いということは、何か嫌な事が起こるかもしれない。

僕たちはどんな状況でも対処できるが、何があるか分からない。だからこうして修行して身と心を鍛えている。

「亮くん？ どうしたの？」

僕が歪みについて考えていると、弥生さんが心配して声を掛けてきた。

「ああ、すみません。歪みがないので何だか嫌な予感がしてきました……」

「そのことか、心配することはない。ワシたちがいるんだ。それにおぬしだって強いんだ。その何があっても大丈夫だ」

ルドルフさんは僕の背中をポンポン叩いて言った。そう言われると照れてしまう。

「あ、ありがとうございます」

僕はお礼を言ってお茶を飲んだ。弥生さんが入れてくれたお茶は温かくて美味しい。ルドルフさんが用意してくれたクッキーやせんべいにも相性が良い。

「亮、そういや八重ちゃんの胸を揉んだって？」

「ぶっー」

ルドルフさんの一言に僕は飲んでいたお茶を吹き飛ばしてしまった。お菓子には掛からなかったが、椅子は汚してしまった。僕はタオルで吹きこぼしてお茶を拭いた。

「なっ、なんでそれを……」

たしかルドルフさんと弥生さんはその頃、自分の担当する世界で仕事をしていたので、会議室のことは知らない筈だ。すると横から弥生さんが言ってきた。

「エドワードくんが言ってきたのよ。亮くんって八重ちゃんとはそういうことが時々あるよね」

弥生さんはニヤニヤしながらこちらを見た。ルドルフさんも微笑みながら僕を見ている。ホント”世界神”は変わり者が多くて疲れるよ。

「あれは事故です。まあ反省はしていますが……」

僕は頬を染めて顔を逸らした。事実、あれは事故であり、僕が襲ったわけではない。何故か八重さんと関わってくると、こういうことが多々ある。

「ふっん、そうなんだ……で？」

今は八重ちゃんとはどうな

んだ?」

「何がですか?」

ルドルフさんが何を言っているか分からず、聞き返した。

「だから、八重ちゃんとは恋人になったのか?」

「えっ!?!」

今度はお茶を飲んでいなかったが、急に変なことを聞いてきたので、僕はルドルフさんの方を向いた。

「だって……好きなんでしょ?」

「なっ……そ、それは……その……」

僕はその言葉に否定できない。何故だか分からないが、否定しようとする心が苦しい。逆に認めようとしても恥ずかし過ぎて答えられない。

「好き……なのかもかもしれません」

僕は答えるが、徐々に声が小さくなる。するとルドルフさんにはやけた表情で僕に寄ってきた。

「ん?　　なんて?　　聞こえなかった、もう一回言つて?」

ルドルフさんは笑いながら聞いてきた。この人、本当に面白がってる。

すると、杖が出てきて、球体が青白く光っていた。どうやら連絡が来ているようだ。球体は映像になるので、顔を近づけると深月さんの姿があった。

『亮さん、午後九時に召集があるので会議室に来てください』

深月さんはそれを報告するために連絡してくれたようだ。いいタイミングできたので助かった。

「分かった。もうすぐ戻るから」

『はい、待ってます』

そう言つて僕は通信を切り、船に戻る準備をした。

「どうした?　　もう戻るのか?」

「え、ええ。もうすぐ夕食の時間です」

そう言つて僕はすぐに飛び去り、“虚無の世界”を出た。

途中、弥生さんがルドルフに「からかいすぎですよ」と注意し

ている声が聞こえた。

## 二人の時間

バジリスクがついに火山島から二千キロの地点に迫った時のこと。早ければ三日後に接敵するため、作戦参加メンバーは夕食後に召集が掛けられたのだ。

けれど特に役割のない俺とイリス、それにティアはミーティングから除外された。

俺はイリスとの約束を思い出して、船首側にあるイリスの部屋へ向かう。

ミッドガルを出てから俺はイリスの部屋に行く約束していたが、なかなかそんな機会が無かった。

このタイミングを逃す手はない。俺はシャワーを早く浴びてから部屋を出た。

女子たちが使っていると思われる部屋の扉には、部屋番号の他に出席番号が表示されていた。B7——ブリュンヒルデ教室七番を意味するプレートを見て、ここがイリスの部屋だろうと判断する。できるだけ静かにノックをすると、扉が内側から開いた。制服姿のイリスが顔を出す。

「……え？　モノノベ、どうしたの？」

「いや——その、前に部屋へ来ないかって誘ってくれただろ。だから……」

俺は頬を掻きながら言う。深月以外の女子部屋に入るのは初めてだったので入る前から緊張していた。

「あ、憶おぼえててくれたんだ！　もう忘れちゃったかと思ってたよ」

イリスは顔を輝かせ、俺を部屋の中に招き入れた。この船で生活し始めて、もう一ヶ月近い。そのためイリスの部屋は結構な生活感に満ちていた。具体的に言うと——散らかっていた。

「あ……」

散乱した物の中にくつつもの下着を見つけ、動きを止める。

「どうしたの——って、ああっ！　　す、少し待ってね。すぐ



に片付けるから！」

赤面したイリスは、あたふたとしながら部屋を走り回った。落ちていたものを一ヶ所に集めてスペースを作り、下着はちゃんと見えない場所に仕舞い、イリスは俺の部屋の奥に通す。

「な、何かごめんね。さき、座ってよ」

イリスは恥ずかしそうに頭を掻き、俺をベッドに座らせた。

「まあ、また一つイリスのことが分かったから、別にいいけどな」

「わ、分かったって何が？」

俺の隣に座ったイリスが、動揺しながら問いかけてくる。

「整理整頓、苦手なんだろう？」

「ううっ、い、言わないで……リーザちゃんにもよく怒られてるの」

がつくりと肩を落とすイリス。部屋を片付けろと説教するリーザの姿はすぐに想像できる。

「そういえば、俺が転入した頃に比べて、イリスはリーザと仲良くなった気がするな」

「……うん、リヴァイアサンのことがあってから、リーザちゃんだけじゃなくてみんなも色々と構ってくれるようになったんだ。時々怖いけどね」

イリスは苦笑を浮かべて言うと、ふと何かを思い出した様子で問いかけてくる。

「あ、そうだ……あたし全然気づかなかったんだけど、リーザちゃんとミツキちゃんって、喧嘩してたの？ 何かそのことでモノノベとオオシマが頑張ったって、フィリルちゃんから聞いたよ？」

「まあ、深月には俺が言ったけど、リーザには亮が何か言ってくれたようだ。でも、亮はともかく、俺は頑張ったっていわれるほどのことは……」

「まだ解決してないの？」

表情を曇らせるイリスを見て、俺は慌てて言う。

「ああ、でも心配はいらないからな？」

今はバジリスクのことで余裕がないけど、きつとそのうち解決する」

リーザは今作戦の中心を担っている。深月に出す”許す条件”を考えている暇はないに違いない。

(バジリスク討伐した後、二人は仲直りすると僕は思うぞ) ふと、亮の言葉を思い出す。火山島に着いたころ、亮が俺にそんなことを言っていた。でも今はそんな状況にはならないと俺は思う。だが、あいつが言うど何故かそうなるかもしれないと期待してしまふ。

「そっか……よかった」

イリスは安堵あんどの息を吐き、俺の左肩にそつと触れてきた。

「……イリス？」

どきりとして、イリスの名を呼ぶ。

「モノノベ、包帯は取れたみたいだけど……もう傷は痛くない？」

「大丈夫、ほとんど治ったよ。今はちゃんと動かせる」

俺はそう言っ、肩に置かれたイリスの手に自分の左手を重ねてみせた。

「あ——」

頬を染めるイリス。その反応を見て、俺の心拍数も急上昇した。

視線が絡まり、どこか甘くもどかしい沈黙が続くよ。しかし、いつまでも口を閉ざしているわけにもいかない。

「えっと、イリスはさ、俺に何を教えてくれるつもりだったんだ？」

「そ、それは……何でも、だよ。モノノベは何が知りたい？」

「な、何って言われてもな……」

聞き返されて、言葉に詰まる。

「せつかく部屋で二人きりなんだから……今しか確かめられないことが、いいんじゃない？」

イリスは俺を上目遣いで見つめ、提案した。

「今しか……」

「うん……」

頷くイリス。目を合わせていると、その瞳に吸い込まれてしま

いそんな錯覚を抱く。思わず視線を少し外すが、顔も、体も、手も、足も、全てが魅力的で鼓動が静まらない。一瞬、二つの双丘に引きつけられたが、平常心を保って目線を逸らした。

「……イリスの髪、綺麗だよな」

最終的に髪へ視線を移した俺は、ただ思ったままの感想を述べる。

「ありがと……じゃあ、触ってみてよ」

イリスに促され、俺は銀髪の髪をそつと触れた。

「サラサラしてて、いい手触りだ」

「ふふっ、嬉しいな。モノノベに頭撫でてもらえた。いっつもティアちゃんやレンちゃんばかりで、羨ましかったんだよ？」

少し恨めしそうに言うイリス。

「いや、ティアやレンは妹みたいな感じだからさ、つい無意識に……でもイリスの髪は、そんな気軽に触れないだろ？」

「どうして？」

「どうしてって……緊張するからだ」

俺の返事を聞いたイリスは意外そうな表情で首を傾げた。

「だったら、今も緊張してるの？」

「そりゃ、な……」

イリスの髪を指で梳きながら頷く。実際、行こうと思っていた頃から緊張していたからだ。

そこで脳裏に深月の顔が過ぎった。俺が入院した時、二人きりになった病室で言われたことを思い出す。

(イリスさんのキスに関しては、誠実に対応してくださいね?)  
数ヶ月前、”白”のリヴァイアサンがミッドガルに侵攻してきた時に俺はイリスの護衛をし、深月と亮の協力によって倒した。

その夜にイリスから浜辺に呼び出され、お礼としてキスをされた。俺が病室に居た時に深月に知られてしまった。

そのことに触れるなら、それこそ今しかない。

「……イリス、俺は本当にあんなお礼を貰ってよかったのか？」

「あんなお礼?」

何のこと？」

イリスは俺の言っていることが分からず、首を傾げる。

「……そこは察してくれよ。あ、あの時のキスに決まってるだろう」  
声の上擦るのを自覚しつつ、説明する。

「え？　あ——」

イリスの顔が赤くなっていく。

「そんな反応をするってことは、あのキスはイリスにとって特別なものだったんじゃないか？」

最初はあまりにイリスがいつも通りだったので、お礼以上の意図はないと思っていた。けれどイリスも意識をしていたことを知り、それ以来ずつと落ち着かない気持ちを抱いている。

「……うん、家族で挨拶のキスをすることはあったけど、それはほっぺだったし……く、唇にしたのは、モノノベが初めて……だよ」  
イリスは耳まで赤くしてそう答えた。

「初めてが俺なんかで……いいのかよ？」

問いかけると、イリスは顔を俯うつむいてコクンと頷く。

「モノノベになら、二度目だつて……あげてもいい」  
その言葉に心臓が跳ねる。艶つややかなピンク色の唇から目が離せなくなってしまう。

これは、やはりそういうことなのだろうか。俺の自意識過剰とかではなく、イリスは俺のことを——。

鼓動が早まり、手のひらが汗ばむ。

ならば、真剣に答えるしかない。イリスがここまで言ってくれたのだ。俺も自分の気持ちを口にしよう。

唾を呑み込み、いつの間にかカラカラに渴かわいていた喉を湿らせる。

息を吸って、吐く。

そしてもう一度、大きく空気を吸い込んだ後、俺は吐く息に言葉に乗せた。

「イリス、俺は——」

意を決して言葉を紡紡ごうとする。だがイリスははっと顔を上げて、俺の口に両手で塞いだ。

「だ、ダメっ！　今はまだ言わないで！」

「……………」

どうしてだと目で訴える。するとイリスは俺の口から手を離し、苦笑いを浮かべた。

「だって…………もし悲しくなること言われたら、あたしすごく落ち込んじゃうから。もうすぐ作戦が始まるのに、そんな状態だったら…………いざという時も動けなくなっちゃうよ」

イリスは少しずつ口を塞いだ両手を離す。

「いや、でも——」

「返事が嬉しいものでも、今はダメ。モノノベはこれから、ティアちゃんのために戦わなきゃいけないんだから！」

真剣な眼差しで見つめ、イリスは訴える。

正直、先延ばしにするのは気が進まなかったが、イリスの迫力にお圧されて俺は頷いた。

「…………分かったよ。続きは、バジリスクのことを片付いてからにする」

「ありがとう、モノノベ」

ほっとした顔で礼を言うイリス。

「ただ、こういう台詞、戦場じゃ不吉なんだよな…………」

「あ、それ知ってる！　俺、この戦いが終わったら結婚するんだ…………っていうやつだよな？」

どこで聞きかじったのか、イリスは俺の呟きに乗ってきた。

「ああ、ただ戦場で色んなヤツを見てきた俺からすると、単に運の問題でもないんだけどな」

「どういうこと？」

「生きて帰る理由があって、真面目な奴ほど、それを言い訳に使いたがらない。そのせいで他の奴より無理をして、生き急ぐ。早死にするのは当然だ」

俺が説明すると、イリスは途端に焦り始める。

「も、モノノベは死んじゃダメだよ？　　し、死にそうになった

らさっきの約束取り消していいからね！」

「そこまで心配する必要はないさ。俺たちは船で待機だし、一番安全だ」

そう、俺とイリスは見ていることしかできない。想定外のこと  
が起これば出番もあるかもしれないが、そんな事態にならないことが  
作戦成功の条件だろう。

それに、最前線には亮がいる。神であるアイツならなんとかし  
てくれると俺は思う。

「そ、そうだね……うん、だったらあたし、モノノベの返事をちや  
んと待つから」

「ああ」

はつきりと頷き返す。

負けられない理由が増えていく。だがそれは、決して足を<sup>すく</sup>竦ま  
せるものではなかった。

## ”赤”のバジリスク

とうとう決戦の時がやってきた。

時刻は午前十一時二十分。空の高い場所まで昇った太陽が、容赦のない日差しで辺りを照らしていた。

既に全員、持ち場についている。輸送船は火山島がギリギリ水平線に見える位置まで後退し、リーザさんとレンちゃんは火山島で攻撃準備中。僕と深月さん、フィリルさん、アリエラさんは、火山島と輸送船の間でそれぞれ一定距離を保って待機している。もしリーザさんたちに何かあれば、即座にサポートするための布陣。

僕もサポート役の一員だが、本来の役割はリーザさんたちがバジリスクを引き付ける間に高い攻撃力で奴を倒すこと。つまり、最初の攻撃に失敗した時の保険ということだ。

悠とイリスさんとティアちゃんは篠宮先生の指揮を艦橋から見守っている。

ティアちゃんが船に残ったのは、当初の予定と異なる。けれど、自分がいけばバジリスクは船への攻撃を躊躇ためらうかもしれない——というティアちゃんの主張で、作戦は変更となった。

言わばバジリスクに対する人質だが、本当にその役割を果たせるかどうかは分からない。実験することも不可能だ。もし試した結果、ティアちゃんが命を落とせば何の意味もなくなってしまう。

それでもティアちゃんの要望が通ったのは、もしティアちゃんが巻き添えになった場合でも、バジリスクが増えるという最悪の事態だけは避けられるからだろう。

ミッドガルの後発隊もやってきていたが、彼女たちは火山島から数十キロ離れた場所で待機している。作戦の性質上、大人数で前線に立つのはリスクを無駄に高めるだけだと、篠宮先生たちが判断したそうだ。

バジリスクは現在、火山島から十二キロメートルの地点にいる。火山の上部なら、もう見えていてもおかしくない距離だ。

知っての通り、地球は丸い。ゆえにある程度距離を取ると、地

上にあるものは水平線の下に隠れて見えなくなってしまう。人間が海岸に立った場合の視界は約五キロメートル。バジリスクの大きさだと、十キロメートルといったところだ。火山の山頂付近からなら、二、三十キロ沖まで見通せる。

つまりこちらが利用する天然の障壁は、火山島と水平線の二つということだ。

周辺の海には、多数の観測機器がばら撒かれており、その映像が船にあるモニターに映し出されている。バジリスクは進路上の海を塩化させてしまうが、赤い閃光の直撃を免れた観測機器は生き残っており、データを送信し続けているらしい。

今頃、ティアちゃんの竜紋が濃くなってきたであろう。見染められた”D”はドラゴンとの距離が近くにつれ、どんどん色が熱くなる。

もし僕たちの作戦が失敗し、ティアちゃんを改めて見染めれば、彼女は同種のドラゴンに変貌する。そうならないよう、みんなはこの今作戦でバジリスクを倒そうとしている。

しかし、僕はできないと思う。皆はまだ、バジリスクの隠された本当の力に気付いていない。

本来なら僕一人でも倒せるが、そうしてしまえば神の存在を知られてしまう可能性がある。たとえ討伐出来ても、今後のことで支障が出る。だから僕はこの作戦が失敗しても、奴に深手を負わせるようにする。僕はいつでも動けるように準備をする。

リーザさんたちがやろうとしているのは、火山を目隠しにしての超長距離狙撃。

レンちゃんのを借りた高出力の陽電子砲で山を貫き、バジリスクを攻撃するのだ。

リーザさんは、観測機器からのデータで照準計算を行うゴーグルを身に着けることにより、山を挟んでいても狙撃が可能だ。直前までバジリスクには見えないはずなので、迎撃は間に合わないと考えられている。

ただそれでも万一ということがあるため、狙撃はバジリスクの



射程外から行うことになっていた。第三の眼サードアイが開いていた場合は一万メートル以上、閉じていた場合は五千メートル以上の距離が必要だ。当然遠くなるほどに難易度は上がるため、第三の眼が開いていないことはこちらの有利に働く。

『B1、B6、作戦はプランAにて実行。対象が距離六千に達すると同時に攻撃を開始せよ』

リーザさんたレンちゃんちゃんの通信機から篠宮先生が指令を出す。

『了解ですわ』

『ん』

二人は篠宮先生に返事を返す。

(さてと、少し気を上げるか)

僕はいつでも超サイヤ人になれるように気を上げ、準備を終わらせようとした。

そして準備を終えると、その時が訪れた。

『目標、六千メートル地点に到達！』

オペレーターを務めるクルーがそう報告した。

『作戦開始！』

篠宮先生は間髪容れずに通信機を通して告げる。

リーザさんとレンさんは何度も練習していた通りに、協力して架空武装の槍を作り上げた。

その穂先まげゆが眩い光を放ち始める。現代兵器を凌駕りょうがする陽電子の光槍こうそうが生み出されようとする。その威力は悟空が超サイヤ人の状態で放つ”かめはめ波”と同等だ。

けれど、その直前にオペレーターが叫んだ。

『バジリスク移動停止！』

背面部開口！

第三の眼サードアイが迫

り出していきます！』

やはり使ってきたか。バジリスクの隠された能力を。

「そんな、気付かれるなんて……」

深月さんも驚きを隠せないようだ。

「でも、どうして分かったんだ？」

アリエラさんが驚きながら疑問を抱いた。

今頃悠たちもバジリスクの行動に驚いているだろう。原作では、多分大きなエネルギーの発生を感じたかと思っっているだろうがそうではない。それ以上に厄介な能力を持っている。

バジリスクの気を探ると、莫大な力を感じ取る。

『まずい——攻撃中止！』

焦った声で僕たちに叫ぶ篠宮先生。

しかし、発射直前のレーザーさんたちの攻撃はすぐには止まらない。巨大な架空武装の穂先から、陽電子砲が放たれる。

眩い金色の光が火山に正面にある山を突き刺した。しかし同時に、バジリスクの第三の眼からの終末時間カタストロフが放たれるのを感じた。

火山を挟んでぶつかる金と赤の輝き。だがこのままでは、山を貫通した瞬間に陽電子砲は掻き消され、レーザーさんとレンちゃんが赤い光に吞まれてしまう。

『二人とも至急回避行動に移れ！』  
作戦はプランBに移行

篠宮先生が早口でレーザーさんたちに告げる。

その直後——第三の眼から放たれた攻撃により、火山の上部が塵ちりと化し、赤色の光が空を駆け抜けた。この威力では超サイヤ人の大技でも風化させられる威力だ。山であろうと、莫大な年月の経過には逆らえないようだ。

気配を探るとレーザーさんとレンちゃんの気を感じ取れる。どうやら、第三の眼から放たれた終末時間カタストロフを回避したようだ。

数秒後、光が途切れた後に残ったのは、不自然な形に挟えぐれた雲と、上半分が消失した火山の姿。

奴の放つ攻撃は凄まじかった。その気になれば地球の形を変えられるほどの威力かもしれない。

しばらくして、溶岩が吹き出し、噴煙が空へと上がる。

『レーザーとレンは？！』

通信機から悠の声が聞こえる。

『無事ですわ。ギリギリで回避しました。もうすぐ深月さんと合流します』

リーザさんは返事に答えた。通信機からイリスさんとティアちゃんの安心する声が聞こえた。目の前にはリーザさんとレンちゃんがこつちに向かってくる。

篠宮先生は気を緩めることなく、僕たちに指示を飛ばした。

『全員、速やかに船へ帰還せよ。高度は可能な限り低く保て！』  
空気変換による飛行法は、編隊を組むことでより速い移動が可能となる。リーザさんたちと合流して、高度を上げながら戻ろうとした。

「申し訳ありません、まさか攻撃してくるなんて……」

「ん」

リーザさんとレンちゃんは僕たちに謝り、深月さんは返事を返した。

「いえ、作戦はまだ失敗していません。早く戻りましょう」

気を探ると、火山の上部を吹き飛ばしたバジリスクは、火山島の先にいるティアちゃんの元へと進撃を再開したようだ。

すると、バジリスクから力を感じた。第三の眼からの攻撃よりは小さいが、通常の終末時間カタストロフを撃ってくるようだ。

しかし、それは僕たちに対してではなかった。

バジリスクは行く手にあるマグマと噴煙を邪魔に感じたのか、島の手前で赤い閃光を両目から放つ。すると煙は一瞬で消え去り、マグマは噴き上がった形のまま石化した。

不自然に固まった溶岩は前衛芸術のように奇妙で、終末時間カタストロフの凄まじさを改めて思い知る。そして僕は同時に確信した。

(やっぱりそうか、貯めの時間が必要か)

未だに第三の眼は開いたままだ。原作通り、第三の眼を放つには膨大な力を使うようだ。そして再び攻撃するには時間がかかる。多分悠はそのことに気付いているだろう。

「もうすぐ着きます。皆さん、頑張ってください」

深月さんは僕たちに呼びかけた。船との距離が少しずつ縮まり、あと数十秒で着く。

船は島から遠ざかるように移動しており、悠たちは船尾側の甲

板に居た。

「おかえり！」

イリスさんが手を振って僕たちを出迎えた。とりあえず全員無事だったことが嬉しいらしい。

「気持ちよく、ただいまと言えればよかったですけどね。すみません、失敗してしまいましたわ」

リーザさんは悔しそうに呟く。レンちゃんも「ん……」と顔を伏せた。

「バジリスクの感知能力が想定以上だっただけです。リーザさんたちの責任ではありません。次は——私と亮さんの番です」

落ち込む二人を深月さんは励まし、火山島の方を鋭く見据える。

辛うじて固まった溶岩の一部が見えているだけで、島自体は水平線の向こうに隠れてしまっている。

「水平線に身を隠しつつ、特大の反物質弾を撃ち込みます。私の矢は放物線軌道を取りますから、他の皆さんより低い高度からの攻撃が可能です。亮さんも最大エネルギー量で攻撃してください」

「了解」

僕は返事をする、深月さんはレンちゃんを見た。

「レンさん……今度は私に力を貸してください」

「んっ」

レンちゃんはこくと頷き、深月さんこ傍に寄る。

「はあっ！」

僕は超サイヤ人になり、奴を消滅させる程の気を貯めつつ舞空術で空を飛ぶ。

「五閃の神弓」

深月さんは弓の架空武装を生み出し、空気変換を行い、レンちゃんと共に宙へと浮かび上がる。

ある程度の高さまで上昇した僕たちは狙いを付け、バジリスクがギリギリ水平線下に収まる位置で攻撃を行う。

「ん」

レンちゃんが五閃の神弓フリュウイナグに手を触れると、リーザさんの時と同様に架空武装は一気に巨大化した。

身長の数十倍もある虹色に輝く大弓を構える深月さん。そして弓の大きさにふさわしい、長大な上位元素ダークマターの矢を番えられる。

どうやらレンちゃんから移譲された上位元素を制御しているようだ。

僕も奴を消滅させる程の気を貯め終え、両手の指を合わせて照準を作る。

深月さんは矢を引き絞り、僕と同じタイミングで攻撃する。

「終の矢——空へ落ちる星！」

「気功砲！」

放たれる反物質の矢と大規模に撃った気功波はバジリスクに向かつていく。

しかし、二つの攻撃を、逆巻く赤い閃光の奔流が呑み込んだ。

「なっ……」

僕は言葉を失くす。

光の規模、射程から考えて、間違いなく第三の眼サードアイによる迎撃。

超サイヤ人の状態でパワーを最大限に上げた気功砲に加え、深月さんの反物質の矢でさえも第三の眼には敵わなかった。

やはり奴は僕たちの攻撃を分かっていたようだ。

バジリスクがいるのは火山の向こう側。上部が吹き飛ばされたとは言え、山は末だにバジリスクの視界を制御していた。どんなに死角からの攻撃でも通用しないようだ。

赤い閃光は僕たちの頭上を通り過ぎ、彼方かなたへと抜けていくが、光は落ちてくる。

雲を貫いていた閃光が、今度は僕たちの頭上へと迫る。そしてそのまま僕たちの方に向かつてくる。

このままでは深月さんたちが危ない。破壊のエネルギーを生み出し、巨大な赤い閃光に向けた。

その時、赤い閃光が不自然な方向に曲がり、海をあっという間に真っ白な塩と化す。どうやら悠が斥力場を発生させ、終末時間カタストロフの軌

道を捻じ曲げたようだ。

「——兄さん、ありがとうございます。危うく私たちが巻き込まれてしまうところでした」

齒を噛み締め、悔しげな表情を見せる深月。

「後悔するのは後ですわ！ 次はどうするんですの!？」

今の攻撃を続けられたら、逃げ切れることもできなくなりそうですわよ！」

リーザさんが切羽詰まった声で、深月さんの判断を求める。

「……イリスさん、お願いがあります」

数秒沈黙した後、深月さんはイリスさんの名を呼んだ。

「な、何？ 何でも言って！」

「島の上空辺りで爆発を起こし、ミスリルの雨を降らせてください。狙いは適当で構いません。恐らく全て迎撃されるでしょうが、時間稼ぎにはなるはずです」

「わ、分かったよ——ケリュケイオン 双翼の杖！」

イリスさんは架空武装を手に、船尾の端に立つ。

「せいぎん 聖銀よ、降れっ!!」

白銀の杖を翳し、イリスさんは叫ぶ。すると彼方の空で銀色の爆発が起こり、数えきれないミスリルの破片が地上へと降り注ぐ。

その範囲内にはバジリスクもいたようで、赤く細い閃光が複雑に空を駆け巡った。深月さんの言う通り、たぶん一つ残らず撃ち落とされているのだろう。こういう飽和攻撃が有効であるならば、ニブルもそれを選択していただろう。

イリスさんは繰り返し爆発を起こし、その間に船はバジリスクから遠ざかる。白く塩化した歪な水平線も、次第に見えなくなっていく。

これは——敗走だ。

僕たちの作戦は全て失敗に終わり、敵に背を向けて逃げるしかない。

「っ……」

深月さんは唇を噛み、拳を強く握り、小さく肩を震わせていた。

悔しいのだろう。力が及ばず、仲間を危険に晒した自分が許せないのだと思う。

リーザさんはそんな深月さんを。歯がゆそうな面持ちで眺めている。

連続で大規模な爆発を起こし続けたイリスさんは、疲れ果てた様子で甲板に座りこんだ。僕は超サイヤ人を解除して水平線を見た。

重い空気から満ちていて、誰も口を開かない。

悠は何も言わず、静かにその場を離れた。どうやら何か思い付いたようで、原作通りに元上官と連絡を取るつもりらしい。

僕は気持ちを切り替え、その場を後にした。自分に出来ることをするために、”虚無の世界”に向かった。

## 可能性

『——君の方から私に連絡してくるとは思わなかったよ、物部少尉。もしや私の隊に戻りたくなつたのかな?』

艦橋のモニターに映し出された男が、切れ長の目を細めて言う。彼はニブル在籍時に俺の上官だったロキ・ヨツンハイム少佐。俺を最強の”人殺し”に仕立て上げようとした人物だ。

「まさか。俺はミッドガルの生活に満足してますよ」

作戦が失敗し、イリスの足止めのおかげでバジリスクから逃げる事ができた。

俺はこの作戦であることを思い付いた。もしかすれば、バジリスクを倒せるかもしれないと考えてロキ少佐に連絡した。

『ふむ、では何の用だね? 私も暇ではないのだが』

視線で早くしろと促すロキ少佐。

「以前——報酬をくれると約束してくれましたよね。いつのことだったかは、はつきりと思い出せませんが」

俺は含みを持たせた言葉を投げる。ロキ少佐は微かに眉を動かした。

あれは——リヴァイアサンの一件が片付いた後のこと。ロキ少佐は事態を上手く収めた俺を<sup>ねぎら</sup>労い、好きな報酬を与えようと言つたのだ。

もちろん思い出せないというのは嘘。けれど、この会話をした時の通信はミッドガルが関知しないものだったので、篠宮先生たちがいる艦橋で口にするわけにはいかない。

『……そういえば、そんな約束をしていたな。何だ? よう

やく欲しい物が決まったのか?』

ロキ少佐の問いに俺は頷く。

「はい——俺に、ミストルティンをください」

俺の要求を聞き、ロキ少佐は面白そうに口の端を歪めた。

『ほう……それは、バジリスク討伐用にニブルが開発した兵器のことか?』



「そうです。量産型の兵器ではないと思いますが、試作用のものは作られているはずです。それがまだ使える形で残っていたなら、俺に譲ってくれませんか？」

『ミストルテインはバジリスクに通じなかったはずだが、そんなものを何故欲しがらる？』

ロキ少佐は画面の向こうから俺をじっと見つめ、問いかけてくる。

「俺はミストルテインの設計思想が間違っていたとは思いません。あれをこちらで運用すれば、活路が開けるかもしれないと考えています」

『何か考えがあるようだな。しかしあれが欲しいのならば、ミストルテイン作戦の責任者に直接話を持ちかけた方がいいのではないかね』

「その場合は、ミッドガル側がニブルに協力を依頼したという形になってしまいます。それはこちらへの過干渉を招く事態になりかねません。だから俺はロキ少佐へ、個人的に頼んでいるんです」

俺はロキ少佐と視線を合わせ、そう告げる。

『はは——用心深いことだ。まあ前例を考えれば分からなくもない。つまり私は、ニブル側からミストルテインをそちらへ提供するよう働きかければいいのか？』

「はい、可能でしょうか？」

『報酬はどんなものでも用意すると言った以上、やれるだけのことはやってみよう。ただし上手くいくかは保証しない』

「それで十分です。ありがとうございます」

俺は礼を言って、頭を下げた。

そもそもミストルテインの試作品があるかどうかも分からない。過剰な期待はしていなかった。もし手に入れば多少は有利になるという程度。

本当なら、亮に頼めばすぐに作ってもらえるが、そんなことをすれば、みんなにどう説明すればいいのか困る。最悪、亮が神であることがバレてしまうかもしれない。

『ずいぶんと必死だな、物部少尉。そんなにも守りたいものがあるのか？』

「……………」

皮肉交じりの問いには、沈黙を返す。この質問に答えるのは、何故だか非常に危険な気がしたのだ。

『——まあいい、事が順調に運べば今日中にもニブルから反応があるだろう。動きがなかった場合は諦めることだ。これではな』

ロキ少佐は最後に薄く笑い、通信が途切れる。

傍そばで話を聞いていた篠宮先生は、俺に怪訝けげんな眼差しを向けた。

「物部悠、君はいつたい——」

「勝手なことをしてしまい、すみません。篠宮先生、できれば皆を集めてくれませんか？　そこで説明をしようと思います」

俺は篠宮先生に謝り、そう頼んだ。

ミストルテインが入るかは分からないが、俺には皆へ伝えておくことがある。

バジリスクには恐らく”隙”がある。

それは今回の失敗から見出したみいだ——唯一の活路だった。



「俺は——ニブルの取った作戦が、最もバジリスクに有効だと考えている」

篠宮先生から会議室に集まるように連絡きたので、修行を切り上げて船に戻った。どうやら原作と同じ作戦を立案するつもりだ。

皆も集まり、悠は話を切り出す。

「ミストルテインに足りなかったのは、”終末時間”カタストロフに耐え切る量のミスリル防壁だ。逆に言えば、それさえ補えればバジリスクを倒しうる武器になる」

やっぱりそうきたか。悠が強い口調で言うと、リーザさんが口

を挟んだ。

「待ちなさい、モノノベ・ユウ。確かに理屈ではそうでしょうが、第三の眼を開いたバジリスクはミスリルさえも一瞬で風化させますわ。どれだけミスリルがあっても足りないかと判断したからこそ、ニブルも諦めたのではなくて?」

リーザさんの言う通り、単にミスリルの量を増やせばいいだけならば、ニブルはミストルテインを量産し、連続投下する作戦へ移行したはずだ。それをしないということは、必要とされるミスリルが現実的な量ではないということ。

「そうだな、バジリスクが第三の眼から閃光を放ち続けたら、どれだけ厚いミスリルの防壁を作っても簡単に消し飛ばされるだろう。だけど俺はバジリスクにも限界があると思っっている」

「どうやら悠もそのことに気付いたようだ。」

「……どういうことですか?」

リーザさんは何を言っているのか分からないようだ。

「バジリスクはニブルの作戦時も含め、第三の眼からこれまで三回閃光を放った。会議前に調べてもらったんだが、照射時間は共通して約五秒。さらに今作戦中の二回においては、連射した方が有利な状況に拘らず、それをしなかった」

悠の言葉を聞き、僕は今気付いたという演技をする。普段通りに話せば最初から分かっていたと知られてしまうためだ。

「そうか……僕たちが一度に生成可能な上位元素は限りがあるように、バジリスクの第三の眼にも一度に放てるエネルギーにも限度があるということか」

「そうだ」

僕の言葉に悠は頷いた。やはりあいつは頭の回転が速いな。皆もそのことに驚いているようで、深月さんも納得したようだ。

「……可能性はありますね。そう考えると、連射できない理由は説明できます。照射時間が一定であるのは、加減ができないから……かもしれない」

「ああ、第三の眼はたぶん細かな調整が利かないんだろう。あ

りっただけの量を放射して、五秒間でガス欠になる。そんな切り札なんじゃないかと俺は思う」

そこまでの説明を聞き、イリスさんが悠に問いかけてくる。

「じゃあ第三の眼からの攻撃した直後なら、バジリスクは無防備になるの？ その時なら簡単に倒せちゃったりするのかな？」

「——そうなれば楽なんだけどな。俺が言ったのはあくまで第三の眼だけの話だ。残り二つの眼から、バジリスクは普通に攻撃してくると考えた方がいい。実際、イリスが降らせたミスリル片の雨を、バジリスクは迎撃してただろ？」

「あ、そっか……じゃあ、どうするの？」

首を傾げて訊ねてくるイリス。

「だからこそ、ミストルテインだ。あれは”カタストロフ終末時間”の通常照射には耐えられるよう設計されてる。そこに第三の眼からの照射を五秒間凌げるミスリル防壁を追加すれば、計算上はバジリスクに届くだろう」

悠は自分の思い描いた可能性を説明する。確かにそうすれば有利にはなるが、それだけでは奴を倒せない。悠や皆はまだ、奴の隠された能力に気付いてないようだ。

「……兄さんの言いたいことは大体分かりました。つまり足りないミスリルを”D”の物質変換で補うわけですね」

悠に確認するように深月さんが問いかける。

「そういうことだ。俺はこれが、一番現実的な作戦だと思う」

「現実的、というにはまだ詰めが甘いです。バジリスクが今回見せた異常な察知能力も考慮されていませんし。た、検討する価値は十分にあると思います」

深月さんはそう言うと、篠宮先生へと視線を向ける。

「——私も同意見だ。ニブルからミストルテインが譲渡されるかどうかで多少状況は変わるが、この方向で新たな作戦を考えてみよう」

篠宮先生の言葉に深月さんは頷き、僕たちへと告げた。

「では、一時解散します。作戦の通達があるまで、体を休めてくだ

さい」

そう言う深月さん自身は休むつもりはないようで、篠宮先生と相談を始める。

しかし、その表情は先ほどより明るくなっている。それならばジリスクよ察知能力を解明してくれるだろう。

そしてこの作戦が二年前の罪を償う条件になると知っている。

◇

古傷を額に刻んだ初老の男——デイラン少将が、画面の向こうから柔和な笑顔をティアちゃんに向ける。

『これはおじさんからのプレゼントだ。受け取ってくれたまえ』  
その日の夕方——ミストルティンの譲渡は、意外なほどあっさりと成立した。

デイラン少将が積極的に動いてくれたらしく、高空まで運搬可能な輸送機付きという話だ。

「おじさん、ありがとうなの！」  
満面の笑みを浮かべて礼を言うティアちゃん。それを聞いたデイラン少将はさらに相好そうじょうを崩すが、隣にいる僕と悠の視線に気付いて咳払いをする。

『こほん——ミストルティンにもう予備はない。これが最後の一発だ。上手く役立てて欲しい。ニブルの兵器がバジリスク討伐に貢献したとなれば、少しは我々の面目も立つからな』

デイラン少将は真面目な顔に戻って言い、通信は切れた。

悠の元上官、ロキ少佐がどんな風に働きかけたかは分からないが、デイラン少将はこちらがミストルティンを欲しがっていると分かった上で、無条件に引き渡してくれたようだと思う。

たぶんそれは、ティアちゃんのおかげなのだろう。

「助かったよ、ティア」

悠はティアちゃんにお礼を言う。

「え？　ティアは何もしてないの」

きよとんとするティアちゃんだが、頭を撫なでると気持ちよさそうに目を細める。

「あとは深月が作戦を立ててくれれば奴を倒せるな」

「そうだな、……あと悠」

「どうした？」

僕は悠に近づいて小声でお礼を言う。

「ありがとな、ニブルに頼んでくれて」

「いや、俺はミストルティンに予備があると思ったから頼んだんだ」

「だとしても、本当は僕に作らせるつもりだったんじゃないの？」

僕がそう言うと、悠は「うっ」と呻うめいた。どうやら凶星のようだ。

「僕の正体を知られないためにわざわざ手間を掛けてくれたんだろ？　感謝する」

「……気にするな。もうすぐ作戦会議だから行くぞ」  
「了解」

僕たちは会議室に向かったが、予想していたことが起きた。

## 作戦決行

「今の言葉、本気ですの?」

会議室に怒気を孕はらんだリーザさんの声が響く。様々なデータを表示したスクリーンの前には深月さんが立ち、リーザさんの視線を真正面から受け止める。

「はい、もちろんです。私が——ミストルティンと共に降下します」

僕はそう言つてくると予想していたが、悠にとつては信じがたい言葉だった。皆は呆然ぼうぜんと深月さんを見つめている。

彼女はこの状況でも自分だけで背負おうとしている。原作でもそうだった。

「どうしてそうなるんですの? 無茶苦茶ですわ!」

バンツと机を叩いて立ち上がるリーザさん。

「分からなかつたのなら、もう一度説明しましょう。計算上、第三の眼サードアイからの閃光せんこうを五秒間耐える補強は可能でしたが弾頭が巨大になり過ぎて、本来の落下制御システムが役に立たなくなります。ですから誰かがミストルティンと降下して、軌道修正を行う必要があります」

深月さんの言う通り、ミストルティンに新たにミスリルを物質変換で補強すれば、制御システムが使えなくなる可能性がある。その為には誰かがミストルティンと共に降下してバジリスクを倒さなければならぬが、問題は誰がやるかだ。

「わたくしが問題にしているのは、そこではありません!」

どうして深月さんが一人でそんな役目を担うのかと聞いているんです!

たぶんさっきの作戦で皆を危ない目に遭わせてしまったことに責任を感じてこのことを言っているのだろう。

「これは確証のない仮説に基づいた作戦です。こちらの予測が間違っている可能性は十分あります。そして失敗すれば、確実に命を落とすでしょう。そんな危険な任務を、他の誰かへ押し付けるわけには

いきません」

「っ……」

リーザさんが奥歯を噛み締め、つかつかと深月さんへ早足で近づく。

パン——と乾いた音が鳴った。深月さんの頬をリーザさんが叩いたのだ。

「あなたは どうして、いつもいつも……わたくしは認めませんわよ！」

「……認めていただかなくても結構です。竜伐隊りゆうばつたいの隊長は私ですから」

叩かれた頬を赤くしながらも、深月さんはリーザさんを正面から睨み返す。まったくこの人は本当に頑固だと改めて思う。

「待って」

けれどそこに、フィリルさんの声が割り込んだ。

「……誰かがやらなきゃいけないなら、私がやる」

「な——だ、ダメです！　これは私がすべきことです！」

「……ううん、失敗した時のことを考えるなら、深月より私が適任。深月は生徒会長で竜伐隊りゆうばつたいの隊長だけど、私はただの一生徒だし」

フィリルさんは首を横に振り、深月さんの言葉を否定する。

「そういうことなら——ボクでも構わないわけだよね？」

ゆっくりアリエラさんも立ち上がり、深月に悪戯いたずらっぽい笑みを向けた。

「んっ！」

自分もだと言うように、レンちゃんも席を立つ。

「あ、あたしもっ！」

そんなクラスメイトたちを見回し、イリスさんまで慌ただしく起立した。

「空を飛べないイリスさんには、ミストルテインの制御なんてできないじゃないですか！」

深月さんは慌てた様子で指摘するが、イリスさんは真剣な表情で言い返す。



「確かにそうだけど、誰かを一人で行かせるわけにはいかないよ！  
あたしは、誰が行くことになっても付いていくから。何か力になれることがあるかもしれないもん！」

イリスさんは元々芯の強い少女だ。悠が好意を抱く理由も分かる。

完全に前提条件を無視しているが、イリスさんの言葉はある意味で正しかった。

「俺も降下メンバーに志願する」

悠が席を立つて深月さんに言う。

「兄さんまで……」

深月さんは驚いて兄の悠を見た。僕もすかさず席を立ち、深月さんに意見した。

「悠とイリスさんはミストルテインの制御はできないが、二人ならいざという時役に立つぞ。あらゆる状況を想定して対処法を練るべきだが、僕も立候補しよう」

「……………」

黙り込む深月さん。先の作戦では、悠とイリスさんの力もあつて窮地を脱することができたのだ。ゆえに否定の言葉を口にできないのだろう。

「たまには良いことを言いますのね、オオシマ・リヨウ」

ブリュンヒルデ教室のメンバーが全員席を立ったのを見て、リーザさんが口元に笑みを浮かべた。

「深月さん、わたくし——決めましたわ」

「決めたって……何をですか？ 作戦の決定権は、リーザさんにはありませんよ？」

警戒の眼差しを向ける深月さんに、リーザさんは苦笑を返す。どうやら、原作通りの状況になったようだ。

「違いますわよ。わたくしが決めるのは、二年前の罪をあなたが清算する方法です」

「な——どうして今、そんなことを……」

完全に予想外の言葉だったようで、深月さんは意表を突かれた

様子でたじろいた。

「もちろん、今の状況に関係あることだからですわ。わたくしは深月さんに要求します——」

びしつとリーザさんは深月さんの眼前に指を突きつけ、鋭く告げる。

「わたくしを含め、今作戦に志願した全員の力を最大限に生かし、想定外の事態にも対応しうる完璧な作戦を考えなさい！　そして、全員を生還させるのですわ！　それを成し遂げれば、わたくしは深月さんを許しましょう」

「そんな……全員だなんてあまりにリスクが——」

「無理とは言わせません。新たな作戦が思いつかなければ、深月さん以外の誰かがミストルテインと降下することになりますわ。そうですね、篠宮先生？」

篠宮先生はずっと難しい顔で腕を組んでいたが、リーザさんに問いかけて重々しく頷く。

「……他に志願者が現れた以上、司令官としてはそう判断せざるを得ないな。隊長には他にもやるべきことがある。ただし、より優れた他案がなければ、複数人を降下させることも許可できない」

篠宮先生の答えは至極真つ当なものだった。深月さんも反論することはできないらしく、唇を噛んで目を伏せる。

「分かりましたか？　深月さん、仲間を一人きりで死地へ向かわせたくないのなら——今度こそ家族を守り抜きたいのなら、死にもぐるいで考えなさい。皆で生きて帰れる……道筋を」

リーザさんの要求はとても難しい。仲間の命を背負うぐらいなら、自分一人でバジリスクに立ち向かう方がずっと気楽なはずだ。とんでもなく難しい条件を考えると言っていたが、これほど深月さんにとつてきつい要求もないだろう。

しかし、深月さんなら達成できる。原作を読んでだことがある僕なら知っている。彼女はどんな条件でも必ず応えてくれる。

深月さんは拳を握りしめ、震える声で答える。

「……やってみます。少し、時間をください」

そう言うと、深月さんは早足に会議室を出て行く。その華奢なきやしや後ろ姿を、リーザさんはじっと、祈るように見つめていた――。



僕たちを乗せた輸送船は、ミッドガル第一防衛線の内側まで退避し、そこでミストルテインを運んでいたニブルの大型輸送艦と合流した。

僕は深月さんからの再召集が掛かるまで自分の部屋で瞑想めいそうをしていた。ドラゴンボール超に出てくるジレンもこうして精神を落ち着かせていた。

深月さんなら大丈夫だと信じている。リーザさんと仲直りし、全員で生還することを知っているからだ。

すると、廊下の方から気を感じた。それは悠に似ている気で、扉をコンコンとノックしてきた。

「どうぞ〜」

僕が入るように言うと、扉が開く。そこに立っていたのは、少し疲れた表情を浮かべている深月さんだった。

「亮さん——少し、お話いいですか?」

「ん? いいぞ」

頷き、深月さんは僕の部屋に入ってきた。

深月さんは奥のベッドに腰掛け、深々と溜息を吐いた。

「ふう……なかなか上手いききませんね」

「新しい作戦を考えるのにか?」

深月さんと向かい合うように手前のベッドに座った僕は問いかけてみた。

「いえ、既に新たな作戦立案は終わっています。ただ、私はその上で、皆さんに志願を取り下げてくださいないかと、頼んで回っていたんです」

「もう作戦はできているのか……さすが深月さんだ。でも今さら誰も取り下げたりしないだろ。もちろん僕もだけど」

本当にこの人は優秀だと感じる。

「ええ……フィリルさんたちの部屋を回ってきましたが、誰も領いてはくれませんでした。やはり亮さんもそう答えますか」

「まあね、僕たち仲間だろ？ それに僕を誰だと思っている

？ 僕は創造と破壊を司る”世界神”だぞ？ バジリスク程度の相手にやられたりしないさ」

そう断言すると、深月さんは呆れた顔で息を吐いた。

「全く、貴方って人は……まあ、亮さんはそういう方でしたね」

「ああ、僕は偉いんだ」

僕は胸を張って偉そうにする。

「仕方ありません。兄さんのところが最後ですので行ってきます」

「悠が最後か……けど断られるぞ？」

「分かっています。念のためです」

深月さんは扉の方に向かい、部屋を出ようとしたが、途中で止まった。

「亮さん、一つだけいいですか？」

「ん？ どうした？」

深月さんは僕の方を向いて言ってきた。

「……無理をしないでください」

深月さんは僕のことを心配してくれてるようだ。僕も悠みたくに無茶をすることがあるので、そう言ってくれているのだろう。

「……アンタがそんなこと言えるのか？」

僕が皮肉交じりに言うと、深月さんは「うっ」と呻く。

「なんてね、心配してくれてありがとう。出来る限りやってみるよ」

微笑んでそう言うと、深月さんはどこか安心した表情を浮かべる。

「はい、それでは」

そう言つて深月さんは部屋を後にした。深月さんの気が遠くに行くのを確認してから、再び瞑想を始めた。

バジリスクの第三の眼サードアイに通用するのは超サイヤ人2だが、まだ使わない。原作を読んでいるため、作戦は頭に入っている。

僕は召集が掛かるまで、瞑想を続けた。



翌朝、午前七時——僕たちは高度一万五千メートルの天空にいた。

地球が丸いことを理解できる高さで、雲を見下ろせる世界だ。

足場になっているのは、巨大な銀色の兵器。対バジリスク用に開発された、ミスリル製の大型爆弾——ミストルティン。

周囲には後発隊として合流した竜りゅうぼつたい伐隊の少女たちが、忙せわしく飛び交っている。

彼女たちは空気変換による風の制御でミストルティンを浮遊させ、さらに下部のミスリル装甲を厚くする作業を行っていた。

この高度まではニブルの輸送機けんいんに牽引けんいんしてもらったが、彼らは”D”の役割を引き継いで撤退している。ミストルティンは既に輸送機では支えきれない重力になっているからだ。

投下メンバーであるブリュンヒルデ教室の面々は、力を温存するためにミストルティン上で待機し、準備が整うまで待っている。

普通なら呼吸もままならない零下の高度ではあるが、辺りを包む風は温かく、十分な酸素も含んでいるため、息苦しさや寒さは感じない。

風の生成役にはティアちゃんも加わっていた。少しでも力になりたいからと、半ば強引に付いてきたのだ。

ただ、共に投下することはできないため、準備が終わればティアちゃんは他の竜伐隊と一緒に撤退する予定だ。

翼の形をした架空武装を紅に輝かせ、空気を生成し続けるテイアちゃん。僕たちの周囲はほぼ無風状態なのは、彼女がちゃんと風を制御している証拠だ。

「——では、作戦の最終確認を行います」

深月さんは僕たちを見回して言う。額にずらしたゴーグルと、小型の通信機を身に着けた姿は、竜伐隊の隊長に相応しい貫禄かんろくがあった。

「ミストルテインの投下制御は、私とフィリルさんで行います。  
”カタストロフ終末時間”の迎撃を受けた時点で、以降の軌道調整は難しくなるでしょう。観測機器から送られたデータに従い、常にバジリスクの直上を保たなければなりません」

深月さんはフィリルさんに視線を向ける。フィリルさんも深月さんと同じゴーグルを身に着けている。これはリーザさんがバジリスクを狙撃しようとした時と同じく、視認することができない相手の位置を捕捉するためのものだ。

「……うん、大丈夫。細かな制御は得意だし」

フィリルさんは力強く頷き、大きな胸の前でぐつと拳を握りしめる。

「作戦が順調に進んだ場合、バジリスクが回避行動に移ることを想定し、着弾直前までミストルテインの落下制御を行います。離脱は着弾五秒前。けれどこれは、爆発から逃れるにはかなり際どいタイミングです。ですからアリエラさんに、多重物理防壁の展開をお願いします」

「任せておいて。ボクは皆の盾だから」

自分の胸を叩いて請け負うアリエラさん。

「リーザさんとレンさんは、私とフィリルさんと共に全力で空気防壁を生成してください。これで確実に爆発は防げるでしょう。そしてお二人には、イレギュラーな事態への対処もお任せします」

深月さんは真剣な眼差しをリーザさんとレンちゃんに向け、言葉を続ける。

「それは——サードアイ第三の眼からの照射が五秒を超えた場合です。継

続いて五秒をオーバーした場合プランA、第二射を放たれたケースはプランBにて対応してください」

これは全員の命運を左右する、最も重要な役割だ。対応を誤れば、全てが水泡に帰すだろう。

「ん」

レンちゃんはこくと頷き返す。

「——了解ですわ。深月さんの作戦がわたくしの期待に応えるものであることを、願っています」

リーザさんは深月さんの瞳を見つめ返す、どこか挑戦的に応える。

「はい、私を信じてください」

深月さんは気圧けおされることなく、強い意志が宿った声で応じる。その表情を見て、リーザさんは口元に笑みを浮かべた。

「最後に、兄さんとイリスさん、そして亮さんですが——三人の役割は状況によって大きく変わります。全部のパターンをきちんと言えていますか?」

「ああ、大丈夫だ」

僕はそう答えたが、イリスさんは上擦った声で言う。

「う、うんっ! たぶん、ばっちりだよ!」

その言葉に深月さんは不安そうな表情になる。

「たぶん、が付いた時点で、ばっちりではないと思いますが……」

「うっ……そ、それは……」

焦るイリスさんを見ると、悠は助け舟を出す。

「大丈夫だ。俺とイリス、亮の役割はセットだ。ちゃんと俺がリードするよ」

「モノノベ……」

感激の眼差しを悠に向けるイリスさん。

「……では兄さん、相方のイリスさんをよろしくお願いします。亮も二人に何かあったら援護してください」

「了解」

何となく、少し不機嫌そうな声で深月さんは言う。どうやらや

きもちをやいているようだ。

そこで深月さんの通信機に報告が入った。漏れ出た声が、微かに耳に届く。

『こちらA班。作業、全て完了しました』

『B班も終了です』

「——ご苦労さまです。では次の工程に進んでください」

深月さんは指示を送り、僕たちの顔を見回して告げた。

「ミストルティンこ補強が完了しました。間もなく作戦開始となります」

表情を引き締めて頷く僕たちの元に、ティアちゃんがやってくる。補強作業を終えたメンバーに持ち場を代わってもらったのだろう。

「ユウ、みんな！」

ティアちゃんはミストルティンの上に降り立つと、心配そうな表情で僕たちを見上げた。

「それじゃあ、そろそろ行ってくるな」

悠はティアちゃんの頭を撫でて言う。

「ユウたち……ちゃんと、帰ってくる？」

「ああ、約束する。絶対に全員で、生きて戻る」

悠がそう答えると、僕は言葉を付け足して言った。

「もちろんバジリスクを倒した上でな。安心して待っていないな」

「……うん、分かった。ティア、応援してるの！ すっごく、

すっごく応援してるの！ だから——頑張っつー！」

瞳を潤ませながらティアちゃんは大きな声で叫ぶ。

彼女を守るため、短い時間の間に僕は強くなっている。超サイヤ人では第三の眼の攻撃には通用しなかったが、今では大技を出しても互角だろう。

僕は気を集中させ、いつでも攻撃できるようにする。



## V S 赤のバジリスク

深月さんとフィリルさんにミストルテインの制御を引き継ぎ、投下作戦に加わらない竜伐隊りゆうばつたいのメンバーは空域を離脱していく。ティアちゃんもその中に混じり、僕たちに手を振りながら遠ざかっていく。

そして——投下が始まる。一万五千メートル下にいるバジリスクへと。

悠たちは高層ビルのエレベーターに乗った時のような、内臓が浮き上がる浮遊感が襲ってくると思うが、僕は高速で空を飛ぶことができるので何も感じない。深月さんたちが作り出した空気が周囲を包み込んでいるので、気圧の変化による耳鳴りも感じない。

「——現在、一万四千メートル。バジリスクはティアさんたちが退避したミッドガル方面へ移動中。ミストルテインの軌道を修正します」

ゴーグルを掛けた深月さんは、架空武装の弓を手に現状を報告する。

バジリスクの射程は通常時で五千メートル、第三の眼サードアイを開くと一万メートルに達する。高度が一万メートルを切れば、いつ攻撃されてもおかしくない。

「……一万二千メートル地点を通過。バジリスク移動停止。ミストルテインの迎撃態勢に入った模様」

フィリルさんも本の形をした架空武装を手に、ゴーグルへ転送されてくる情報を平坦へいたんな声で読み上げる。

リーザさんとアリエラさんが架空武装を生成し、状況の変化に備える。レンちゃんはリーザさんの傍そばに寄り、イリスさんは無言で悠の手を握っていた。

僕は杖を取り出し、バジリスクの状況を確認する。バジリスクは足を止めて第三の眼を開いていた。もうすぐ打ってくるだろう。

「間もなく一万メートル。ここからもう、バジリスクの射程圏内で——」

深月さんが台詞を言い始めた時にバジリスクは第三の眼から攻撃を始め、突如にして落下速度が落ち、ミストルテインの周囲から赤い粒子が立ち昇る。

「第三の眼からの攻撃です！ ミストルテインから少し距離を取ります！」

深月さんが早口で告げると同時に、体がふわりと浮き上がる。深月さんとフィリルさんの作り出す風が、皆を浮遊させた。

飛行技術を習得しているリーザさんたちは平然としているが、イリスさんはバランスを崩さないように悠の手を握っていた。

赤い閃光はミストルテインが盾になっているため、僕たちのところへは届かない。

だが、五秒以上照射が続けば話は別だ。

「……3、4、5——」

ほぼ五秒ジャストで、ミストルテインの周囲から溢れていた赤い閃光は消失した。運動エネルギーのリセットがなくなったことで、落下速度はまた上がり始める。深月さんとフィリルさんは風で再びミストルテインの動きを掌握し、軌道の調整を行った。

「よかった……計算通りだったみたいだね」

アリエラさんが安堵の息を吐く。

「いえ——最初から第三の眼で迎撃されるのは、計算通りとは言えません。理想としては前回のよう五千メートルを切つてから撃つて欲しかったところです。リーザさん、第三の眼の二射目を警戒してください」

深月さんが難しい顔で首を横に振る。

「了解ですわ。最初に第三の眼を使ったのは、二射目までのチャージ時間を稼ぐためかもしれませんものね。レンさん、プランB——スタンバイですわ」

「ん」

リーザさんが下方へ向けて構えた射抜く神槍グングニルに手を添えるレンちゃん。すると以前の作戦時と同様に、リーザさんの架空武装が巨大化する。

僕は杖を見続けると、バジリスクの両目から赤い光が浮かび上がっていた。どうやら通常の攻撃をするつもりのようなようだ。

「——もうすぐ五千メートル地点となります。バジリスクは両目から放つ通常の”終末時間”で迎撃してくるはずですよ！」

深月さんが注意を促す。杖に映るバジリスクは両目から攻撃を放った。ミストルテインの速度がまだガクンと落ちる。深月さんは相対速度を合わせ、ミストルテインとの距離を保った。

ミストルテインは十分に耐えており、このまま行けばバジリスクに直撃するだろう。リヴァイアサンのように絶対的な防御力を持たないバジリスクなら、当たれば倒せるはずだ。

しかし樂觀できない要素がある。前回、バジリスクが見せた異常な察知能力。僕は原作でその能力を知っており、昨日の会議で深月さんも確信したようで、そのことを説明していた。

あれは察知ではなく、予知であると。バジリスクの能力は時間に干渉する能力。視界にあるものを風化させるということは、未来を視ているということだ。

ニブルが地雷などの罠が通じなかったことも領ける。けれど、そんな力を有しても、付け込む隙はある。

未来は絶対的なものではない。行動によって容易く変質するものだ。バジリスク自身も行動によつて危機を回避していた。

それに前回の様子から見て、僕やリーザさん、深月さんの攻撃を察知したのは、こちらが行動に移った後だ。

「高度二千メートル！ バジリスクが回避行動を取る様子はなし！ もしも未来を視た上での行動であれば、第三の眼から二射目が来ると考えられます！ バジリスクは次撃で私たちを消し飛ばせると予知している可能性が高いですよ！」

深月さんが早口で告げる。杖を見ると彼女の言う通り、バジリスクは第三の眼から赤い光が漏れている。

しかし、深月さんはこの状況を想定した上で作戦を立てたのだ。

第三の眼が来れば、ミストルテインは耐えられない。しかしそ

れが、バジリスクへの罠だ。

「高度千メートル——っ！　　二射目来ました！　　アリ

エラさん、多重防壁を展開！　　リーザさん、プランBを開始！」

「了解！」

「分かりましたわ！」

一気に膨れ上がった赤い光を見下ろし、アリエラさんとリーザさんが応じる。

「防壁、五重展開っ！」

アリエラさんは手甲型の架空武装・牙の盾アイギスを振るい、ミストルテインと僕たちの間に巨大な壁を五重も生成した。

「成れ、聖銀の槍せいぎんやり!!」

リーザさんはレンちゃんのを借り、巨大化した射抜くグングニル神槍の穂先をミスリルへと物質変換する。

この瞬間、バジリスクの視る未来は変わる。まさかバジリスクも僕たちがミストルテインと共に降下していることは予想していなはずだ。

この時点でバジリスクは命の危機を察知したと思う。

相対距離は千メートルを切っており、いくら未来が見えようと、選択できる行動は限られている。

「——ミストルテイン消滅！　　アリエラさんの防壁も突破

されます！　　リーザさん、耐えてくださいっ！」

「この程度、余裕ですわ！」

ミスリルの穂先が赤い閃光を受け止める。そして宣言通り、残り一秒足らずの極大化した光線をしの凌ぎ切った時、深月さんは叫ぶ。

「第三の眼、沈黙！　　バジリスク、回避行動に移りました！」

己が貫かれる未来を視たのか、バジリスクは”終末時間カタストロフ”による迎撃を止め、移動を始めたようだ。

「……今さら、遅い。逃がさない」

ファイリルさんが強い口調で呟く。

「リーザさん、槍やりを放ってください！　　軌道は私たちが修正します！」

深月さんの言葉にリーザさんは頷くと、柄までミスリルに変換した巨槍きよそうを投げ放った。

「——貫きなさいっ！」

加速しながら落ちていく槍を追いかけ、僕たちも降下する。

「イリスらそろそろ出番だ。何をするかは分かっているか？」

悠はイリスさんへ話しかける。

「うん、大丈夫。分かってる！」

そういつてイリスさんは架空武装の杖を生成する。

僕は杖を仕舞い、攻撃準備をする。

悠も右手のジークフリートを持ち、タイミングを計っている。

アイツがしくじれば、全てが台無しになってしまう。失敗は許されない。

「目標まであと三秒——着弾っ！」

深月さんの声と同時に、巨大な銀の槍が塩化した白い海原に突き刺さる。

大気を揺るがす轟音ごうおんが響き渡り、塩塵えんじんが高々と舞い上がる。ニブルのミストルテインとは違い、リーザさんの槍には爆薬が仕込まれていない。なので爆発はせず、避けられてしまうと当然ながら致命傷は与えられない。

しかし、槍は第三の眼を貫いていた。原作ではギリギリで避けられてしまうが、リーザさんの攻撃をくらい、第三の眼に致命傷を与えた。バジリスクは悲鳴を上げ、こちらを向いていた。

赤い光が輝く。両目から、僕たちの時間を奪い尽くす輝きが放たれる。

けれど悠はバジリスクが”終末時間カタストロフ”を放とうとすると同時に、弾丸を撃った。

「斥力弾アンチ・グラビティ！」

白い輝きが局地的な斥力場を発生させ、赤い閃光の軌道を逸らす。

バジリスクまでの距離は、およそ二百メートル。

イリスさんはバジリスクを視認し、お得意の

絶対に狙いを外さない間合いの攻撃をする。

「聖銀よ、弾けろっ！」

双翼の杖を翳し、イリスさんは告げる。

バジリスクの眼前で、銀色の爆発が巻き起こる。

甲高い金属質な爆発音が耳を打つ。

零距离での爆発を避ける術はない。予知したところで、既に手遅れ、爆散したミスリルがバジリスクの全身に突き刺さる。

ギイイイイイイイイ——！

バジリスクの悲鳴だろう。ざわついた耳障りな音が、辺りに響き渡る。

「聖銀よ——弾けろっ！——弾けろっ！——弾けろっ！！」

イリスさんは手を休めず、容赦なく追撃を行う。

この時点でバジリスクの両目は血のようなものを流しており、”終末時間”による攻撃はもうできない。

バジリスクはアルマジロのように体を丸め、爆発に耐えようとしているが、強靱なミスリルの破片はダイヤモンドの鱗を突き破る。しかし、僕は知っている。これは防御ではなく、攻撃だと。

丸まったバジリスクの体がわずかに収縮し、体表から石柱状に突き出ていたダイヤモンドが四方八方に勢い良く飛び散る。

「っ——まだこんな奥の手を!？」

散弾のように襲い来る鋭利なダイヤモンド塊を見た深月さんは、驚きの声を上げる。

バジリスクはどうやっても倒せないと判断したようで、ダイヤモンドの外殻を僕たちに放ち、その間に逃げるようだ。

「大丈夫！——ボクに任せて！」

飛来したダイヤモンドは、アリエラさんが生成した防壁が弾き返す。対バジリスク演習の時に見せたものより強度は上がっている。訓練によって成長したようだ。

ダイヤモンドの外殻を捨てたバジリスクは、素早い動作で塩の砂漠へと潜り始める。

「逃がさん——ジャステイスフラッシュ！」

僕は右手をバジリスクの方に向け、五本の指から気弾を放った。この技は第十一宇宙のトツポが使う技だ。

「貫け、閃光っ！」

「プラスマ・ブリッド雷球弾！」

それと同時にリーザさんの陽電子砲と悠のプラスマ化した圧縮空気の攻撃を放つ。悠の攻撃はバジリスクの頭を貫き、僕とリーザさんの閃光はバジリスクの体中心に大穴を開ける。

二人の威力も前より上がっている。この日のために特訓してきたのだから当然成長している。

ぐらり、とバジリスクはバランスを崩し、自らが掘って積み上げた塩の山へ倒れ込んだ。

僕たちはバジリスクから十分な距離を取りつつ、塩化した海面に降り立つ。

「接敵陣形！ とどめを刺します！」

深月さんの指示通りに、僕たちは作戦会議で決めた陣形の一つを取る。

防御役のアリエラさん、フィリルさん、リーザさんが周囲に展開し、その中央に僕と悠、そして深月さんが並ぶ。さらに悠の横にはイリスさん、深月さんの隣にはレンちゃんがついた。

これは相手の攻撃に備えながら、こちらの最大攻撃で殲滅するフォーメーション。

「ハアッ!!」

僕は超サイヤ人に変身した。しかし、ただの変身ではない。未来から来たトランクスが完全体のセルを倒すために使った第三形態となる。

あの形態はパワーを重視した形態だが、筋肉が盛り上がることでスピードが落ちるのだ。

しかし、バジリスクはもう動ける状態ではないため、この形態で攻撃しても避けることはできない。

「——イリス」

「うんっ」

悠はイリスさんに左手を差し出し、イリスさんは右手でぎゅつと握る。

「対竜兵装マルドゥーク！」

悠はイリスさんから借りた上位元素ダークマターで旧文明の兵器を構築した。

「レンさん、お願いします」

「ん」

続いて深月さんもレンちゃんから上位元素を借りて、自らの架空武装を巨大化させた。

バジリスクは体を貫かれながらも、まだぎこちなく手足を動かすし、もがき、塩の中へと逃れようとする。頭を貫かれ、体に大穴を開けられたにもかかわらず生命力は凄い。しかし、それでもダメージを負っているので動きは鈍い。

「深月さん、あなたは今度こそ……全てを守り抜くんです！」

リーザさんは前を、向いたまま叫ぶ。

「——はいっ」

深月さんは力強く頷き、五閃フリュウナグの神弓に、上位元素の矢を番つかえる。

そして僕たちは、赤き暴竜へと最後の一撃を放つ。

「ファイナルフラッシュ!!」

「特殊火砲、境界メを焼く蒼炎ド——発射ファイアっ!!」

「終ついの矢——空ラストへ落ちる星クオークっ!!」

僕が放つ気功波と悠こ砲塔から撃ち出される蒼い光弾、そして深月さんが射うった反物質の矢が、バジリスクの体に、突き刺さった。

緑の閃光と、眩く白い対消滅の輝きが、世界の色を一時的に染め変える。

バジリスクの巨体を光が呑み込み、無へと帰す。

爆風が塩塵えんじんと共に押し寄せてくるが、リーザさんたちの張った空気防壁により、白い波は僕たちを避けるようにして通り過ぎて行く。

後に残ったのは——塩の平原にぽっかり開いた大穴。さらに爆発は塩の層を貫通していたようで、次第に内側から海水が満ちて



きて、綺麗な真円状の水たまりになった。

バジリスクの気を探ったが、どこにも無かった。僕たちの大勝利だ。

しばらくは、誰も口を開かなかつた。

深月さんは海水で満たされた大穴をじっと見つめ、やがて静かに息を吐く。

「ふう……」

架空武装の弓を手放し、澄んだ青空を見上げる深月さん。

リーザさんがゆつくりと深月さんに歩み寄り、隣へ並んだ。

「綺麗さっぱり、跡形もないですわね」

「はい……」

気の抜けた声で深月さんは相槌あいづちを打つ。

「それに、全員生き残っています。誰一人、欠けてはいません。これで——条件はクリアですわ」

「……私は、許してもらえるんでしょうか？」

「もちろんです。わたくしに二言はありません」

リーザさんは晴れ晴れとした顔で保証するが、深月さんは遠くを見ながら問ひ返す。

「そんな簡単に、割り切れるものですか？　もし無理をして

るのなら——」

「無理なんてしてませんわよ。全く、深月さんは相変わらずですわね」

腰に手を当てたリーザさんは呆れた様子で溜息を吐く。

「でも……」

しかし深月さんはまだ納得のいかない顔で目を伏せた。

「ああもう、まどろっこしいですわね……」

リーザさんはもどかしそうに頭を掻き、深月さんを強引に抱き寄せる。

「むぐ」

大きなリーザさんの胸に顔を押し付けられた深月さんは苦しそうに呻うめいた。

「深月さんはもう十分以上に頑張りましたわ。わたくしは、そんなあなたを心から尊敬します。友人として誇りに思い、家族として……とても愛おしく感じています」

ぎゅつと、強く深月さんの体を抱きしめるリーザさん。

深月さんは偽すがままになりながら、声を震わせて呟く。

「ありがとうございます。リーザさん……」

そして少し躊躇いながらも、リーザさんの背に腕を回した。

これで二人のわだかまりが消え去った。

(二人とも、よかったよ)

原作を読んでいる僕でもホツとしている。ミッドガルに来てから彼女たちに情が移ったようだ。

「亮、前に言ってたよな。      バジリスクを倒した後に仲直りするって……」

悠は僕に近づいて、火山島に着いた時に言ったことを確認してきた。

「ああ、言ったな」

「まさか……こうなることを分かってたのか？」

悠はこの結果を予想していたのかと思っているようだ。実際その通りだ。

「……想像にお任せするよ」

僕は意味深な笑みを浮かべて言う。

「お前って奴は……」

悠は呆れた表情で僕を見た。

「……物部くん、大島くん。私たちも行こ」

少し離れたところから僕と悠の背中を、フィリルさんが押す。

「まさか、おい——」

「え？      行くってどこへ——」

「てやー」

フィリルさんは僕たちを深月さんとリーザの元へ勢いよく押していき、そのまま二人にぶつけた。

「きゃあっ!？」

も、モノノベ・ユウ、オオシマ・リョウ？

い、いったい何ですか?」

「兄さん、亮さん!?!」

「い、いや」

「これはファイリルが無理やり——」

「……勝利は、皆で喜ぶもの」

二人に抱き付くような形になった僕たちの後ろから、さらにファイリルさんが飛び付いてきた。柔らかで大きな胸の感触が背中に押し付けられる。

「あ、待ってよモノノベ、オオシマ!」

「——レン、ボクらも行くのか」

「ん」

イリスさん、アリエラさん、レンちゃんまで加わってきて、おしくらまんじゅう状態となってしまう。

「お、オオシマ・リョウ! か、顔が近いですわよ!」

「兄さん! ど、どこを触ってるんですか!」

リーザさんと深月さんが文句を言うが、離れられる隙間もない。

「……バジリスク討伐、おめでとー」

ファイリルさんが相変わらずのローテンションな声で勝鬨からどせきを上げた。

「おめでとーっ! やったね、勝ったねっ!」

明るい声でイリスさんが応じる。

「やったぞーっ!」

「おー」

アリエラさんは腕を上げて叫び、レンちゃんも頬を紅潮させて珍しく大きな声を出していた。

(仕方ない、開き直るか)

「深月、リーザ、次は俺たちの番だ。亮、頼む」

「はいよ」

悠は深月さん、僕はリーザさんの腕を掴み、天へと突き出す。  
「よっしやああああああつ!?!」

「勝ったぞおおおおおっ!?!」

腹から声を絞り出し、僕と悠は全力で叫んだ。

傍そばで大声を張り上げられた二人はポカンとした表情を浮かべていたが、やがて同時にくすりと微笑む。

「……リーザさん、私たちも叫んでおきますか?」

「そうですね……せっかくですから」

深月さんの問いかけにリーザさんは頷き、短く咳払いをする。

そして二人は声を合わせ——真っ青な空へと喜びの声を響かせたのだった。

## 祝勝会

「そう——また偉大なる神の一柱ひとししらが討たれましたか……残念です。報告、ありがとう」

ドラゴン信奉者団体“ムスペルの子ら”の息が掛かったホテルの一室で、キーリはニブルに潜入している諜報員からの報告を受けていた。その表情と声には、団体の指導者たる“神子みこ”に相応しい、厳かさがある。

だが電話を切った途端、神々しい雰囲気は一気に消し飛んだ。ソファに深々と体を預け、キーリは心底嬉しそうに表情を綻ほころばせる。

「やるじゃない——さすがはあの二人ね。まあ予想はしてたけどね」

喜びを抑えきれない様子で、足をパタパタと動かすキーリ。「それにしても、大島亮……やっぱり分からないわ。彼の情報を調べてもドラゴンと戦った情報しかないわ。いったい何者かしら？」

キーリはコンピュータ端末を取り出して大島亮の情報を見た。「そういえば昨日、お母様は彼に似ている人と会ったことがあるって言ってたわね。けど大昔のことだからほとんど覚えていないみたいけど……本当に謎だわ」

彼女はこの一ヶ月間、大島亮の情報を調べていたが何も分からずにいた。

「不思議な力には“氣”と書かれているけど、いったい何かしら？ ドラゴンの権能と何か関係があるのかしら……まっ、彼に直接聞くしかないわね」

そう言ってコンピュータ端末を仕舞い、天井を見た。

「第五権能コイド・フユンフの行方も気になるけど、今はそれよりお母様の動向が第一だわ。当初の目論見もくろみはこれで破綻した。はてさて、この先どうするつもりやら——」

他人の不幸を喜ぶような口調で呟くキーリだったが、突然顔を顰しかめる。

「痛っ……!?!」

キーリは自分の右手の甲に視線を向けた。そこには彼女の竜紋りゆうもんがある。普段は薄らうつつとしか見えないその紋章が、黒い光を放っていた。

「お母様?」

訝いぶかしげにキーリは眉を寄せた時、黒く変色した竜紋から上位元素ダークマターが泡のように湧き上がる。そして溢あふれ出した上位元素は、瞬く間にキーリの右手を包み込んだ。

「いったい何を——くっ!?!」

右手を襲う激痛に体を仰のけ反ぞらせ、苦鳴を上げるキーリ。彼女は上位元素を振り払おうとするが、後から後から湧き出てくるのできりがない。

「この、感じ……生体、変換……?」

キーリは右腕を押さえ、奥歯を噛み締めて痛みを耐える。

そして数分後、竜紋からの上位元素流出は唐突に途絶えた。力尽きた様子で、キーリは床に倒れる。

「——はあ、はあ、はあ……ああ、そういうこと……」

荒い息を吐きながら、口の端を歪ゆがめるキーリ。

「……私を使い捨てるつもりなのね、お母様」

皮肉げに呟いたキーリは、ゆっくりと身を起こし、右手の竜紋を見つめる。

「もう選択肢がほとんどないとは言え……さすがに娘を改造するのは酷くないかしら」

キーリの竜紋は、淡く黄色い光を放っていた。

「まあでも、別に恨まないわ。作り変えられたおかげで、ようやく私は——自由になれたみたいだから」

変色した竜紋に手を当て、キーリは笑う。

「けど、このままだとすぐにゲームオーバーね。どうしようかしら……」

口元に手を当てて思案するキーリだったが、リビングのテーブルに置かれていた新聞の一面を見て、目を細める。

「エルリア公国の現王アルバート・クレストが逝去——確かここ、”D”の人権擁護に一番熱心な国よね。王族の中に”D”が現れたとかで……」

キーリはぶつぶつと呟いた後、妖しく瞳を輝かせた。

「ふふ——ちようどいいわ。この国を利用してもらいましよう。そうと決まれば早く出発しないと」

てきぱきと旅支度を始めながら、キーリは愉快そうに呟く。

「もうすぐ再会できそうね。楽しみだわ——悠、亮」

◇

ミッドガルへ向け帰還する輸送船。空には月と星が輝き、暗い夜の海を煌びやかに彩っている。

船内では祝勝パーティーが開かれている。ミッドガルの職員も参加しており、会場である食堂は人でいっぱいになっている。とても楽しい催しではあるのだが——僕と悠以外は皆女性

のため、酔っぱらったお姉さん方にやたら絡まれてしまい、外へ避難していた。

僕はグラスを片手に杖で空間の歪みを修正していた。場所はブラジルのリオデジャネイロに発生しており、久しぶりに歪みが出た。器を満たしているのは、リンゴジュース。椅子にはお菓子の

入った小皿を置いている。

仕事を終わらせ、もうちよつとしたらすぐ戻ろうと思うが、まだやることがある。

今夜、悠はイリスさんに全てを打ち明けるのだ。ユグドラシルとの取引や自分の記憶が失われていること、そして好意を向けている相手も。

ユグドラシルとの取引で、深月さんが義理の妹であると知り、

将来を誓った仲であることを思い知ったのだ。

今まで整理していた気持ちに追い討ちをかけられている。

その後の結果は分かっているが、どうしてもハラハラしている。原作を読んでいるので、ほとんどは知っているのだが、男女の恋愛やこれからのことを考えしまうとどうしても気になってしまう。

原作とこの世界では若干違うようで、深月さんたちの実力やミッドガルにヘカトンケイルがやって来る時間も変わっている。

もしかすれば原作にはないことが起きる可能性がある。本当は盗み見はしたくないが、気になってしまっているので見ようとしてしまう。

杖の先端にある丸い球体を近づけて、悠とイリスさんの様子を見ていた。

悠はイリスさんを抱きしめ、自分の全てを打ち明けている。

悠は心苦しいように話し、イリスさんは戸惑っている。けれど、話を聞いた後、イリスさんは悠の記憶を取り戻すことを決意している。

やはりイリスさんは芯の強い女性だ。原作通りに進んでいる。一年以上も前、記憶を取り戻すことは神でもできないと悠には話している。いくら”世界神”でも杖で記憶を映し出すことはできても、取り戻すことはできない。

しかし、方法がないわけではない。ユグドラシルの権能を乗っ取ることで悠の記憶を戻すことができる。それにはティアちゃんや角とキーリの協力が必要不可欠だ。

今はできないが、一ヶ月以上先のことだ。だが、問題は記憶を取り戻したその先のこと。深くは触れないでおこうと思う。

僕は悠とイリスの会話を聞いた後、杖を仕舞ってグラスの中にあるリンゴジュースを飲み干す。

(二ヶ月後にな)

ヘカトンケイルを討伐した後、キーリと会話をしたことを思い出す。

彼女とはもうすぐ会う日が来る。その時は”黒”のヴリトラ



から自由になっている頃だろう。監視下にあっても無くても僕は気にはしないが、色々面倒なことになるので少し安心はする。

ヘカトンケイルがミッドガルを襲来した時には色々であったが、キーリはこれから先、共に戦う仲間になると知っている。

しかし、協力してくれるのは一ヶ月以上先の話になる。先のこととも考えて行動する必要はあるが、まだ時間があるので今はみんなと学園生活を楽しもうと思う。

夜空を見上げながらチョコレートを一口にしてると少し寒くなってきたので食堂に戻る。

リビングには悠とティアちゃん、さらに深月さんとイリスさんを覗いたブリュンヒルデ教室のメンバーと後発隊として合流した竜伐隊ぼったい、そして教職員がまだ騒いでいた。

悠とイリスさんは船尾側で話しており、深月さんは途中で眠くなったティアちゃんを抱えて部屋に運んでいる。

篠宮先生も含めて教職員はまだ酔っていて、竜伐隊の皆に絡んでいる。

本当は部屋に戻って休もうと思ったが、せつかくの祝勝パーティーなので今日ぐらいは楽しもうと思ってここに来た。

リーザさんは竜伐隊の女性たちと会話しており、フィリルさんは教職員たちに絡まれている。アリエラさんとレンちゃんは食事に夢中だ。

「亮様、おめでとうございます」

テーブルに置いてあるジュースの缶をグラスに注いでいると、横から竜伐隊の女性がグラスを持って話しかけてきた。背はレンちゃんと同じくらいで、多分同い年だと思う。

しかも、僕や悠は他クラスの間では亮様や悠様と呼ばれている。悠は少し戸惑っていたが、僕より下の神々からもそう呼ばれているので違和感はない。

「ああ、ありがとう」

僕は彼女の持っているグラスの端にカツンと合わせた。するとその女性は嬉しかったようでお礼を言って奥へ行ってしまった。

「大島クン、戻ってきたんだ」

さつきまでレンちゃんと食事をしていたアリエラさんが僕に近づいてきた。

「まあ、寒くなってきたからね。それより気配を消して来ないでくれよ。びつくりするじゃないか」

アリエラさんが近づいてくることは分かっていたが、気配を消していたので常人ならびつくりする。

「ごめんごめん、ちょっと驚かせようと思ってね」

アリエラさんは舌を少し出して謝る。

「あれ？　　レンちゃんは？　　さつきまで一緒じゃなかったのか？」

「ああ、レンならあそこだよ」

アリエラさんが指差した方を見ると、竜伐隊の女性たちと輪になって携帯端末を使って話している。

「それよりこのケーキ、美味しいよ」

アリエラさんは手に持ったイチゴのショートケーキを僕に渡してきた。

「ありがとう、いただくよ」

僕はそう言ってケーキを受け取り、テーブルに置いてあったフォークを取って一口食べる。

「お、美味しい」

お店に売ってあるケーキより甘くて美味しい。

「でしょ？　　大島クン、ケーキとかプリンを食べてなかったから取っておいたよ」

「え？　　僕のために？　　ありがとう」

アリエラさんってよく周りを見ていると思いなからお礼を言う。

僕はグラスに口をつけてジュースを飲んでいると、後ろから教員の女性が抱きついてきた。

「大島く〜ん、あっちで飲もうよ〜」

さつきより酔いが回っているようで、口の中からお酒の匂いが

して少し臭い。さらに体には大きな双丘の感触が伝わってきて、理性が保たない。

「ちよつ、先生……さつき飲んだじゃないですか」

「良いのよ、ヒック。何度でも飲みたいの、ヒック」

やっぱり部屋に戻って休めば良かったと後悔している。そして数日後、八重さんにこのことが知られてしまい、誤解を解くのに丸一日も掛かった。

## スピリット・ハウリング 決意

俺——物部悠には、秘密があった。

三年前、故郷の町を“青”のヘカトンケイルから守るため、“緑”のユグドラシルと取引を行ったこと。

ユグドラシルから送られてくる力の情報——旧文明の兵器データはあまりに膨大で、ダウンロードを行うたびに記憶が失われてしまうこと。

このことを知っているのはこの世界の神、大島亮だ。あいつは創造と破壊を司る“世界神”と呼ばれる存在で、何でもできる。しかし、記憶を取り戻すことは神でもできないと言う。

何でも人間の脳は複雑で、むやみに手を加えれば後遺症が残ったり、もつとひどい状態になるとのこと。

さらに亮はユグドラシルからダウンロードを行うたびに記憶を失うだけでなく、体への負担も掛かってくることを教えてもらい、“白”のリヴァイアサン戦では精神と体力を回復してくれた。

しかも、記憶は元に戻せなくてもあいつの持っている杖を使って過去の映像を映し出せるようで、見たい時はいつでもいいと言われている。

だが俺は一度も頼んだことはない。もし過去を見ても、自分がどれだけのもの失ってしまったのかを思い知らせてしまう。正直知ろうとすると怖くなる。

もしそのことを知れば妹の深月はきつと傷つく。だから亮以外の人には隠してきた。深月が苦しむ顔は、見たくなかったから——。

けれど、もう手遅れだったのだ。

俺は——深月が本当の妹でないことすら、忘れてしまっていた。彼女への大切な想おもいすら……失っていた。

俺が俺であること。ただ、それだけで深月を傷つけてしまう。

俺はいつの間にかそんなモノに成り果てていた。

そのことを自覚したのは、ほんのついさつき。

俺はこれまで亮以外には誰にも言わず、胸の内に留めて来た秘密を告白する。

今の俺にとって一番大切なはずの少女、イリス・フレイアに、抱えきれなくなつた重荷を無理やり背負わせてしまう。

微かに揺れる輸送船の中——俺にあてがわれた船室の前で、絶るようにイリスを抱きしめ、全てを語る。

胸を軋ませながら絞り出すのは、懺悔にも似た言葉。

イリスは俺の話を黙って聞いてくれた。

「悪い。いきなりこんな話を聞かせて……」

話を終えた後、俺は罪悪感を覚えながら謝る。

（俺は、何をやってるんだ）

自分弱さに呆れ、強い後悔が湧き上がるが……もう時間は戻せない。

「うん……色んなことをいつぺんに言われて、頭の中がグルグルかも」

苦笑交じりの声でイリスは答えた後、俺の背中に手を回した。

悔恨に塗れた心が、ドクンと脈打つ。

「でも——モノノベがあたしを頼ってくれたことだけは、ちゃんと分かったよ。だから大丈夫！」

イリスは俺から身を離し、正面から瞳を覗き込んでくる。

「今度は、あたしがモノノベを助けるから」

はつきりと決意の表情を浮かべて、イリスはそう宣言した。

その眼差しには一切の迷いがない。ただ——俺だけを見つめている。

「イリス……」

「これ、オオシマ以外の皆には秘密のことなんだよね？」

だったら続きは部屋で聞かせて。もっとちゃんとモノノベの話を聞いて、どうすればいいか考えたいの」

そうして俺たちは船室に入り、ベッドに二人並んで腰掛けて話

を続ける。

具体的にどんな記憶を失ったのか。何故秘密にしなければならなかったのか。

真剣な顔で問いかけるイリスに、俺は全て正直に答えた。しかし、亮が神であることをうっかりバラさないようにあいつのことも話した。

やがて質問も途切れ、部屋には静寂が満ちる。

イリスは無言で天井をしばらく見上げた後、ぽつりと言葉を零した。

「モノノベは、あたしを好きになっちゃったことが……一番しんどいんだね」

「いや、それは——」

とつさに否定の声を上げるが、それは尻ずぼみになって消えてしまう。

イリスの言葉は核心を突いていた。俺は過去の自分を——深月との約束を裏切ってしまったことが、何より辛いのだ。

（たとえば兄妹になっても、深月のことをいつまでも、誰よりも好きでいる。大人になったら結婚する）

幼い頃の俺は、深月にそう誓ったらしい。

そんな大切な約束を忘れ、イリスに心を奪われた俺は、もはや深月が知る物部悠とは別人。

ゆえに耐えられなかった。これ以上、物部悠の振りを続けることに強い罪の意識を覚え、全てを吐き出してしまったのだ。

「無理しないでいいよ、モノノベ。あたしは、それでも嬉しいから」

「嬉しい……?」

イリスの言葉に理解できず、俺は問い返す。するとイリスは体を寄せ、俺の肩に頭を預けた。

「うん、だってあたしがこうしたいのは今のモノノベで……今のモノノベはあたしを好きで——これって、両思いつてことだしよ？」

「まあ、そういうことになるが……」

「ならいいの。あたしはそれが分かっただけで、すつごく幸せ」

頬を染めて微笑んだイリスは、上目遣いでい見上げる。

俺は罪悪感に満たされた胸の内が、微かに温かくなるのを感じた。

「モノノベ、今は悩んだり迷ったりするんじゃないよ、これからのことを一緒に考えようよ」

「これからのこと？」

「そう、何とかしてモノノベの記憶を取り戻す方法を見つけなきゃ」

それを聞いた俺は、ポカンと口を開ける。

理解できない。本当に分からない。どうしてイリスはそんなことを平然と口にできるのか。亮でさえも無理だと言われたことを口にするイリスを見る。

「本気で、言ってるのか？」

「え？ うん、もちろん本気だよ。モノノベは、やっぱり難しいと思う？」

「いや、難しいとか簡単とか、そういう話じゃなくて……それがどういう意味か、分かっているのか？ もし万が一、俺が記憶を取り戻せたとしたら——」

それは、あまりに残酷な事実。だから最後まで言葉にすることは出来なかった。

けれどイリスは、俺の言いたいことを察したらしく、少し寂しげに笑う。

「モノノベは——今のモノノベじゃなくなっちゃうね。分かっている……でも、いいの。あたしはモノノベを助けるって、決めたから」  
はつきりとイリスは告げる。

今の幸せが失われるかもしれないけど、それで構わないのだと。

どうしてそこまで強くなれるのか。

思えば出会った時からそうだった。俺はイリスのことを、一度

たりとも理解できたことはない。いつも彼女は、俺の予想を良い意味でも悪い意味でも裏切ってみせた。

たぶんこんなにも理解不能だからこと……彼女に惹かれてしまふのだろう。

呆然とイリスの顔を見つめていると、彼女は少し照れた様子で視線を逸らす。

「えっと……偉そうなことを言ったけど、具体的な方法はまだ何も思い浮かんでないの。ごめんね」

「謝らないでくれ。ありがとう、気持ちだけで十分だ」

記憶を戻す方法など存在するとも思えないが、俺は心から礼を言う。

「あ、でも一つだけ気になったことはあるよ。モノノベはあまり気にしていないみたいだったから、すごく意外だったんだけど……」

「何がそんなに気になったんだ？」

「モノノベはユグドラシルと契約したせいで、記憶を失くしちゃったんだよね」

「あ、ああ。けどそれは仕方ない代償で——」

俺はダウンロードされるデータがそれほど膨大であることを伝えようとする。身体や精神的にも負担が掛かるため、亮が和らげてくれることを伝えようとする。だがイリスは俺の言葉を途中で遮り、強い懸念を込めた口調でこう言った。

「本当に？」

あたしはそんな風に思えないよ。どうしてモノノベは、ユグドラシルのことを全然警戒してないの？

あれは人間の敵……ドラゴンなんだよ？」



## お姫様

宿舎から学園に続く道を歩きながら僕たちは雑談をしていた。

「あく気分がいい。こんな日は国の一つを滅ぼしたくなるな」

「ちよっ!? やめてください! 本当にあなたは神様なんですか!」

僕が冗談という名の本職のことを口にするると、深月さんが焦った声で言ってきた。

「神様だよ。創造と破壊を司ってるから、国を消滅させることも”世界神”の仕事なんだよ? 分かってる?」

「亮、お前ならやりかねないからそれだけはやめてくれ」

「ええ〜」

僕はわざと不満そうな表情をする。実際僕はそんなことをするつもりはない。ミッドガルに迷惑をかけてしまうからだ。

「まっ、冗談だからそんなことしないけどね」

ノート型の端末を入れた鞆かばんを手に、気楽な声で応じる。

「全く、あなたって人は……いえ、人ではなく神でしたね。なんだか暴力好きの破壊神みたいですよ」

深月さんは呆れながら溜息を吐き、嫌味を言ってきた。

「いや〜褒めるなよ、照れるじゃないか」

「褒めてませんよ……」

バジリスク討伐作戦が終了し、輸送船でミッドガルから帰港してから数日が経った。いつもの学園生活に戻ったが、悠の様子がおかしくなっている。

深月さんが本当の妹でないこと、さらに将来を誓った仲であることを聞いてからどうしても彼女のことを意識しているのだろう。

悠には悪いが、今はこのままでいいしかない。

ユグドラシルが動き出すのは一ヶ月以上先になるため、僕は見守るしかない。

ミッドガルに帰った後、イリスさんからユグドラシルとの契約を知ったことを話してくれた。やっぱり彼女は本気で悠の記憶を取

り戻すつもりのようなだ。

しかし、僕の力では難しいと言っているが、記憶を取り戻す方法は何かしらあると二人には話しているため、安心させている。

事実、その方法はキーリの力が必要になる。そしてもうすぐ、僕たちはキーリと会う。

そのため、帰って来た翌日からまた旅の準備をしている。

キーリはたぶん僕の正体を知ってしまったと考えた方がいいだろう。警戒は必要だ。

しかし、もうすぐチャイムが鳴るため、そのことは後回しだ。島のどこからでも見える高い時計塔は始業時間の二十分前を指していた。

(完全に元通りだな。まっ、一ヶ月もあれば十分だったな)

上半分を吹き飛ばされて、痛々しい姿を晒していた以前の時計塔を思い出す。

およそ一ヶ月前、キーリとヘカトンケイルによってミッドガルは大きな被害を受けたが、僕たちがバジリスク討伐へ赴いている間に、大体の復旧作業は終わっていた。

ミッドガルはドラゴンと戦う”D”の砦とりでであるだけに、全速力で修復を急いだのだろう。

瓦礫がれきで天井が壊れた体育館も同様に修復済みである。ちなみに僕たちの住んでいる宿舎は無事である。僕が対キーリ戦のために”力の大会”で悟空がジレンに使用した”気”の地雷を仕掛けたため、壊されずに済んだのだ。

まだ残っている爪痕は、ヘカトンケイルによって踏み潰された木々ぐらいのものだ。

IDカードを翳かきして学園のゲートを抜け、僕たちのクラス——ブリュンヒルデ教室へと向かう。

その途中、校舎に入ったところで後ろから悠の名前を呼ぶ声が聞こえた。

「ユウーっ!」

振り向くと、頭に小さな角を生やした幼い少女——ティア・

ライトニングは、光の加減でピンク色にも見える色素の薄い髪を弾ませ、悠の方へ駆け寄ってくる。

「おはようなのー!」

走ってきた勢いのままジャンプし、悠の首にぶら下がるティアちゃん。

「つと——お、おはよう、ティア」

悠は彼女の軽い体を受け止めつつ、挨拶を返す。

「ティアちゃん、おはよう」

「リヨウもおはようなのー!」

僕も挨拶をすると、ティアちゃんは答えてくれた。

「えへへー、今日もユウに会えて嬉しいの」

表情を綻<sup>ほころ</sup>ばせ、ティアちゃんはぎゅつと悠にしがみ付く。

「ティアさん、公共の場での過剰なスキンシップは謹んでください」

生徒会長としての顔でティアちゃんを注意する深月さん。だがティアちゃん是不満げに頬を膨らませた。

「カジョウじゃないの。これはティアにとってのフツウだもん」

「集団生活では、個人の価値観より全体の常識が重視されます。その基準から見ると、ティアさんの行動は過剰です」

「む……ミツキは厳しいの」

渋々といった様子でティアちゃんは悠から離れ、上目遣いで見上げる。

「ねえ、ユウ。ちよつとでもいいから、ドキドキしてくれた?」

「え?　いきなり抱き付かれたら……そりやまあ、少し」

悠は正直な気持ちを述べているようで、ティアちゃんは嬉しそうに目を細めた。

「だったらよかったの。ティア、これからいっぱいユウをドキドキさせるから、そしてティアのこと、一番好きになってもらおうの」

「う——」

曇りのない真っ直ぐな好意を向けられ、悠はたじろぐ。

ミッドガルに帰ってきてから、ティアちゃんはずっとこんな調

子だ。子供っぽく結婚をせがまれていた頃よりも、女の子としてアップローチしてくる今の方が悠にとって対応に困っているだろう。しかも、悠も満更でもなさそうだ。

「兄さん、何を狼狽うろたえているんですか。ほら、教室へ行きますよ」  
深月さんは少し不機嫌そうな声で言い、悠の手を掴んで引っ張る。

そういえば深月さんもここ数日、僕のいる時でも悠と手を繋いでいるところを見かける。

「あーっ！ ミツキだけズルいの。それはカジョウじゃないの？」

「……………これぐらいなら別に普通です。家族ですから」

視線を逸らしつつ、深月さんは答える。バジリスクを討伐してから、悠のことを諦めないと言ったようだ。

「だったらティアもユウと手を繋ぐの！ 同じ教室の仲間は家族同然だって、リーザが言ってたし」

「それとこれとは意味が……………まあ、違うとは言いませんが」  
齒切れの悪い口調で深月さんは言葉を零こぼした。

僕は三人のやり取りを見ながら一緒に教室へ向かった。

結局、悠は左右の手を深月さんとティアちゃんに引かれていた。

「そういえば、ティアは一人で登校してきたのか？ リーザはどうしたんだ？」

転校した当初から離れようとしなかったティアちゃんだが、今はクラスメイトたちにも心を開き、リーザ・ハイウオーカーと同室で生活している。

だが廊下にはリーザさんの姿はない。ここで僕は原作を思い出す。

「リーザはフィリルと話があるって言ったの。だから今日はティア、一人で来たの」

「フィリルと？ 何があったのか？」

悠は気になってティアに追いかける。

「分かんないけど……フィリル、ちよつと変な感じだったの」  
「変？」

「何だか、ぼーつとしてて……あ、それと今日は本を持ってなかったの」

ティアちゃんの言葉に僕はあのことを思い出した。

（そうか、たしか今日は……）

読者好きのフィリルさんは、いつも何かしらの本を持ち歩いている。休み時間だけでなく、歩きながらも本を読んでおり、よくリーザさんにも危ないと注意されている。

しかし、彼女が本を持っていないことは滅多にない。しかも、そのことがあるとしたらたぶんあのことだろう。

キーリと再会する理由として、フィリルさんも少なからず関わっているからだ。

「それは確かに変だな……」

悠は眉を寄せて頷く。

深月さんは教室に入る直前で悠の手を放し、扉を開ける。教室には既に三人の生徒の姿があった。

「やあ、おはよう」

軽い感じで挨拶をしてきたのは、ボーイッシュな雰囲気少女  
——アリエラ・ルー。

「……ん」

続いて小さく身振りだけで挨拶する赤毛の少女、レン・ミヤザワ。

「おはよう」

「おはようございます」

「おはようなのー！」

僕と深月さん、ティアちゃんが挨拶をしつつ教室の中に入る。

「おはよう、アリエラ、レン」

悠も二人に挨拶を返し、教室にいるもう一人の少女に視線を向けた。

「お、おはよう」

ぎこちなく挨拶を口にするのは——イリス・フレイア。

「おはよう、イリス」

悠は笑みを浮かべて返事をするが、イリスさんはちらりと深月さんの方を見て、悠から顔を逸らした。

これまではイリスさんの方から頻繁に話しかけてくるのが普通だが、やはり深月さんに遠慮しているようだ。

「……イリスさんと喧嘩でもしたのですか?」

悠たちの様子を見た深月さんが問いかける。

「いや、そういうわけじゃないんだが……」

むしろ記憶のことを打ち明けてから親密な関係になっている。しかし、深月さんが積極的ななってきてから、イリスさんはティアちゃんと張り合っていた時のようなスキンシップをしなくなつた。特に深月さんのいる前では。

何故ならイリスさんが選択をしたのは——”今の悠”を諦めることなのだ。

悠は不甲斐なく感じていると思うが、どうすればいいのかは僕にも分からない。

僕は自分の机に座り、ホームルールの準備をしていると、始業のベルが鳴る。そしてベルが鳴り終わる直前に、リーザさんとフィリルさんが教室に入ってきた。

ティアちゃんが言った通り、フィリルさんは本を持っておらず、何処か思いつめたような表情を浮かべる。やはり、あのことだと察する。

「大丈夫です、フィリルさん。わたくしが何とかしてあげますから」

「リーザ……でも——」

「いいから任せてください」

二人は深刻な雰囲気では話をしながら席に着き、その直後に担任の篠宮先生もやって来た。

「それでは出欠を取る」

僕の所属するブリュンヒルデ教室は自分を含めて九名。一目

で出欠が確認できる少人数クラスであるが、篠宮先生は名簿を開き一人ずつ名前を呼ぶ。

「リーザ・ハイウオーカー」

出席番号一番のリーザさんが呼ばれた。

「……………」

けれどリーザさんはすぐに返事をしない。じっと、フィリルさんの方に視線を向けている。

フィリルさんの表情は迷いと躊躇ためらいの色を浮かべ、リーザさんの眼差しを受け止めていた。

「リーザ・ハイウオーカー、聞こえなかったのか？」

繰り返し名前を呼ぶ篠宮先生。するとリーザさんは決意をした表情でフィリルさんから視線を外し、ガタンと席から立ち上がる。

「篠宮先生、お願いしたいことがあります」

「……………今はホームルームの時間だぞ？　話があるなら後にしろ」

「申し訳ありませんが、事は一刻を争います。後回しにはできません。可能な限り早く——フィリルさんに、ミッドガルから出る許可をいただけないでしょうか？」

リーザさんは真剣な口調で篠宮先生に問いかける。

(やっぱりそうか……………)

本来、上位ダークマター元素生成能力者——”D”はミッドガルから出ることは出来ない。

”D”は大人になるまで、学園で過ごさなければならぬ。それが、この世界が作ったルールだからだ。

様々な悪意から遠ざけるために、また普通の人々を”D”から守るために存在している。

僕は彼女のことを原作で知っているが、たとえばフィリルさんに事情があっても出るとは許されない。

「突然何を……………君も知っているはずだ。”D”は二十歳前後を迎え、能力が自然消滅するまで、基本的にミッドガルを出ることはできない」

篠宮先生はミッドガルのルールを口にする。

「もちろん承知していますわ。けれど、あえてそこを曲げていただけませんか？」

「無茶を言うな。そもそもいったい何のために——いや、そうか……あの方が亡くなったのだったな」

篠宮先生も思い出したようで、ファイリルさんに視線を向けて咳く。

「はい、ですからファイリルさんを葬儀に出席させてあげたいのです」

リーザさんはファイリルさんのために無理を承知の上で篠宮先生にお願いする。

「気持ちには分かるが……彼女だけを特別扱いすることはできない」

篠宮先生の返答は予想通りだ。これまで同じような状況になった者も少なからずいるだろう。しかしそれで一時外出が許されるほど、ミッドガルのルールは甘くない。

リーザさんも分かっているが、それでもファイリルのために食い下がる。

「篠宮先生、それは前提が間違っていますわ。ファイリルさんは特別な存在です。何しろ彼女はミッドガルの自治権獲得に多大な貢献をし、今も巨額の寄付を行なっているエルリア公国の——」

「たとえミッドガルの外でどのような立場であろうと、ここでは単なる一生徒だ。そのような理屈は通らない」

篠宮先生はリーザさんの言葉を遮り、はっきりと告げる。

「ですがっ——」

「……リーザ、もういいよ。ありがと……十分だから」

さらに反論しようとするリーザさんをファイリルさんが止める。

「ファイリルさん……」

「やっぱり、ルールは守らなきゃ。我儘わがままを言って、すみません」

ファイリルさんは篠宮先生に頭を下げて謝った。

「いや——親族の葬儀に出席したいというのは当然の要望だ。



私の方こそ応えてやれなくて、すまない」

篠宮先生もフィリルさんに謝り、リーザさんは渋々といった様子で席に着き、少し重い雰囲気のままホームルームが始まる。

リーザさんが言っていたエルリア公国は、西ヨーロッパの内陸部に位置する小国である。希少資源の輸出で、近年目覚ましい経済成長を遂げている。

その国は民主制だが、王族は国の象徴で今でも存在している。その国王の名がアルバート・クレスト。”D”の人権回復運動の旗頭にいた人で、フィリルさんの祖父にあたる。



昼休み、ブリュンヒルデ教室の面々は揃って食堂棟へ向かっていた。

前をリーザさんと並んで歩くフィリルさんは、今も手ぶらだ。やはり本を読む気分ではないのだろう。

僕の隣で悠はフィリルさんを心配して眺めている。すると、フィリルさんが歩く速度を落として悠の横に並ぶ。

「さっきから、何？」

「へ？　な、何でもありません」

悠は少し驚いて敬語で応える。

「どうして敬語？」

「あ——俺、ついさっきフィリルがお姫様だって知ってさ。それでつい……」

苦笑を浮かべて応えるが、やっぱり知らなかったのかと呆れる。

授業でもエルリアのことは出てたが、まさか気付いてなかったとは少しは予想していたが、本当だと思わなかった。

「そう、二人ともお姫様が珍しくてじろじろ見てたんだ」

少し尖<sup>とが</sup>った口調で呟くフィリルさん。

「……ちよつとまで、僕はそんな目で見てないぞ？」

悠はい

やらしい視線で見てたけど」

「ち、違う。邪な視線を向けてたんじやない。心配だったんだ。フィリルが本を手にしてないから、相当参ってる証拠だろ？」

「あ……」

フィリルさんは驚いた様子で自分の手を見つめる。

「もしかして、今気付いた？」

「……うん」

僕が聞くと、フィリルは暗い表情で頷く。

「お祖父さんが——亡くなったんだよな？」

「……………そう、死んじやった。私、何も返せなかった」

フィリルさんは首を縦に振り、小さな声で呟く。

「返せなかった？」

彼女の表情には悲しみ以上に、悔しさが滲<sup>にじ</sup>み出していた。

「お祖父様は私のために、すごく頑張ってくれた。私が”D”

だって分かった時、孫娘を収容所のような場所に入れられるかって、

アスガルの職員を追い返したの」

「それは、すごいお祖父さんだな」

アスガルはミッドガルやニブルを従える、対ドラゴン専門の国際機関。その要請を跳ね除けるのは、世界全体に対して異議を唱えることと同じだ。

「ただ、やっぱルールを完全には無視できないから……その後にはミッドガルを私に相応しい場所にする方針へ切り替えて、世界を巻き込んだ”D”の人権回復運動の先頭に立ってくれた……あの頃から、あまり体調は良くなかったのに」

「今のミッドガルがあるのはフィリルのお祖父さんが尽力してくれたおかげなんだな……」

資源輸出には、竜災と経済不況に困ったヨーロッパ諸国へも多額の援助を行っている。恐らくはそのような繋がりで広い影響力を發揮したのだろう。

「うん……それなのに、私は何も返せてない。せめて最後に――  
――ありがとうって言いたかった」

フィリルさんも本当は葬儀に出たかった気持ちが伝わってくる。そういえば父さんと母さん、妹の冬美は元気でやっているのかと今でも心配している。

「――大丈夫」

すると傍<sup>そば</sup>で話を聞いていたアリエラさんが突然会話に入ってきた。

「アリエラ？」

悠が名前を呼んで問いかけると、彼女は透き通った笑みを浮かべて言う。

「どこにしようよ、フィリルの想い<sup>おも</sup>はきつと届くよ。お祖父さんの魂<sup>たま</sup>にね」

「……魂<sup>たま</sup>ってホントにあるのかな」

フィリルさんは複雑な表情で呟く。そういえばアリエラさんはあのドラゴンと会ったことがあると思ひ出す。

「あるよ、だってボクはそれを――この目で見たことがあるから」

アリエラさんは躊躇<sup>ためら</sup>いなく首肯<sup>しゅけん</sup>する。

## 保護

食堂に入っただけで、僕は雰囲気は普段と違うことに気が付いた。

「何か、あったのでしょうか……」

深月さんも僕と同様に違和感を覚えたようで、辺りを見回す。空気が張りつめており、妙に静かだ。

「ラウンジの方に、人がいっぱい集まってるよ」

イリスさんが大型テレビが設置されているラウンジを指差す。原作を読んでいるので、人が集まっている理由を知っている。

「あまりいい予感がありませんが……行ってみましょう」

歩き出したリーザさんの後に、僕たちも続く。そして彼女の言う通りのことが起きていた。

ラウンジを囲む女性たちに近づくと、テレビの音声は聞こえてきた。

『「これについてどう思われますか？」』

『そうですね……根本的な問題として、ニブルの強引な活動がこういった事態に繋がったのは間違いないでしょう』

ニブルという単語が入っていることから考えて、僕たちにとって無関係の話題ではなさそうだ。

少し背伸びをしてテレビを視界に収まると、画面にはニュースキャスターとコメンテーターたちが映っており、議論を交わしていた。

僕の横にはティアちゃんを肩車している悠。背の低いティアちゃんのためにしたのだろう。

テレビの方に向き直すと、コメンテーター同士による議論は一段落していた。

『それではもう一度、会見の様子をご覧くださいませよう』

画面が切り替わり、一人の少女が映し出された。

「え——」

ティアちゃんは上擦った声を漏らす。そう、テレビに映ってい

るのは僕だけでなく、悠やティアちゃんの知っている人物がいた。

『大変な時期だというのに、私を受け入れてくださったこの国には、心から感謝しています』

長い黒髪と整った顔立ちの少女。彼女は画面の向こうから  
れいり 恰愴な眼差しを向けていた。

「キーリ……」

ティアちゃんが震える声で彼女の名前を呼ぶ。

そう、彼女はキーリ・スルト・ムスペルヘイム。ドラゴン信奉者団体”ムスペルの子ら”のリーダー。災害指定を受け、ニブルに命を狙われている”D”だ。

およそ一ヶ月前、キーリは立川穂乃花と身分を偽ってミッドガルへ潜入し、ティアちゃんを連れ去ろうとした。

その後、姿をくらましていたキーリが、堂々とテレビに映っている。理由は知っている。

”黒”のヴリトラから自由になり、今は危険に晒されているからだ。そして助かる方法として、ミッドガルに保護を求めた。すなわち、僕たちを来させるためにテレビに映っているのだ。

テロ行為を行うような団体のリーダーが”D”であることは公表されていない。もしそんなことが世界中に知れ渡れば、”D”全体の信用を失うことになるからだ。

ゆえに彼女が犯罪者として報道されているのではなく、一人の”D”としてミッドガルに保護を求めているのだ。

『私、キーリは<sup>ダークマター</sup>上位元素生成能力者——皆さんが”D”と呼ぶ存在。本来は”D”の自治教育機関であるミッドガルに赴かなければならない立場です。けれど私は今、とある事情でそれを躡躑<sup>ちゅうちゅう</sup>している状況にあります』

そう発言したキーリに『その事情とは？』と記者が訊ねた。

『ニブルが、ミッドガルへの移送に介入してくる可能性が高いからです。ニブルはミッドガルの独立に最後まで反対し、”D”の人権が回復された現在でも私たちのことを化け物扱いしている組織。とても信用できません。皆さんは——彼らが密かにミッドガルへ送

る”D”を選別しているという噂……ご存じですか？』

キーリを囲む記者たちにどよめきが走り、フラッシュが連続して焚かれる。

『もちろん本当かどうかは分かりません。けれど消息不明になった”D”がいるという話は、噂の真偽を調べ始めてから何度も聞きました。そのような組織に、私は一時たりとも身を委ねたくありません』

テレビを囲んでいるミッドガルの生徒たちは、ひそひそと囁き合っていた。

どこかから「やつぱり……」という声が漏れ聞こえてくる。

『けれど環状多重防衛機構強固な守りによって、外界と隔絶されているミッドガルへ直接赴く手段はなく、一般人の立場では、連絡を取ることにすらかなわれない状況です。頼れるのはこの国しかありませんでした』

重い声で画面の向こうからキーリが言う。

『かつてアスガルやニブルの要請を撥ね除け、”D”として覚醒した姫君を匿ったエルリア公国なら——私がこういった主張をしても、身の安全を守ってくれると信じたのです』

「やつぱりか……」

こうなることを予想していた。僕はフィリルさんの方へ視線を向けると、彼女は呆然と食いつくように映像を見ていた。

『私はアスガルやニブルを介さず、エルリア公国からミッドガルへの直接移送を求めます。直接”D”の方々が迎えに来ていただければ、私は安心してこの身を委ねるつもりです。どうか——私を助けてください』

キーリは深々と頭を下げ、そこで映像は切り替わる。

スタジオのコメントーターたちは、再び議論を始めるが、悠は訳が分からない様子だ。

キーリの実力はニブルの兵士たちを圧倒する強さを持っているが、僕はある存在を思い出す。今回の件に奴も来るだろう。

その存在はキーリを殺しかけるほどの手練れだ。危なくなっ

たキーリは当初の目的通りにエルリア公国に保護を求め、僕たちを来させるために報道したのだろう。

だとすると、フィリルさんの両親が危ないと思うが、彼女の目的はあくまで僕たちであるため、心配する必要はない。

たぶん深月さんは教職員たちと会議を始め、明日の朝に対応を決めるだろう。

僕はラウンジを後にして、教室へ戻った。



午後のチャイムが鳴っても深月さんは会議室にいる。五、六時間目の授業には篠宮先生の代理としてシャルロット・B・ロード学園長が現れた。

あの人は若い女性が好みであるため、入ってきた時から楽しそうに教鞭きょうべんを執っている。

「——ドラゴンに見染められた者のは竜紋りゅうもんが変色し、そのドラゴンと接触することで、同種のドラゴンに変貌する。これはそなたらも既に知っていることだろう。だが最新の研究報告では、”D”のドラゴン化には”D”自身が生成する上位元素ダークマターが用いられている可能性が指摘された」

今は歴史の授業中なはずなのだが、少し大きめの白衣を羽織った少女は、”D”に関する最新のデータを得々と語り続けていた。黒板の上部に投影された箇所を指し示すのに、ぴよんぴよん飛び跳ねている。

原作通り、学園長は医師免許を持っているが、本業は研究者のようだ。

「つまり”D”は自らの上位元素で生体変換を行い、ドラゴンへと変貌しているのではないかという仮説だ。しかしここで問題になるのは、人間の脳には生体変換を制御し、処理できるだけのスペック

がないこと——」

神である僕は話の内容を聞いていても納得する。科学者の視点と神が推測する視点は大きく違うのでとても為になる。

今でも会議は行われているが、それは学園長の仕事ではなく、篠宮先生の仕事のようだ。つまり、立場的には学園長が上でも、ミッドガルを指揮するのは篠宮先生の役目である。

「足りないものは補うしかない。恐らく、”D”は竜化の際にドラゴンの脳と強くリンクし、膨大な処理能力を得ているのだろう。竜紋の変色時にドラゴンの意思を感じ取れたという証言も、この仮説を裏付けている」

シャルロット学園長はそう言って、イリスさんとティアちゃんに視線を向けた。彼女たちはそれぞれドラゴンに見初められ、その意思を感じ取っている。

「あの……」

そこでリーザさんが手を挙げた。

「うむ、どうした？　何か質問か？」

声を弾ませ、リーザさんに問いかける学園長。

「はい、その仮説にはとても説得力があると思いますが……そうなるキーリ・スルト・ムスペルヘイムは、どうして生体変換を使用できるのでしょう？」

リーザさんの疑問は当然だ。彼女が生体変換であつという間に傷を治すところを、悠たちは目に見している。

先ほどキーリの姿を見たことで、リーザさんはそのことを思い出したのだろう。

「そうだな——可能性は二つある」

学園長は指を二本立てて言う。

「二つ、ですか？」

「ああ、一つは彼奴も処理能力を何かで補っているという可能性。もう一つは——そもそも彼奴が人間ではないという可能性だ」

どうやら学園長はキーリの正体に一步近づいたようだ。前者は違うが、後者は合っている。



「人間ではない……？」　それは彼女が”D”ですらない可能性があるということですか？」

驚きの声を上げるリーザさんだが、シャルロット学園長は平然とした顔で頷く。

「何の補助もなく、そなたら”D”には不可能なことができるのなら——それは同じ生き物ではないということだろう。彼奴は己のことをドラゴンだと言っていたそうだが、私はそれが事実でも驚かぬよ」

淡々とした口調で学園長は告げる。

みんなは言葉を失ったようで、静まり返った。そんなことを聞けば誰でも驚くが、僕は彼女の正体を知っているため、学園長と同じで驚きもしない。

すると、授業の終わりを告げるチャイムが鳴り響く。

「おお、もう刻限か。やはり美しい乙女たちの視線を一身に浴びて授業するのは、とても楽しいものだ。時があつという間に過ぎてしまふ」

やはり楽しい理由はそれだったようで、今は残念そうに呟く学園長。

「——名残惜しいが、今日の授業はこれで終わりだ。号令を」

「は、はい——起立」

深月さんがいないため、リーザさんが号令をかける。

「礼」

「ではな」

靴音を響かせて学園長は教室を出ようとするが、扉を開ける直前に動きを止め、僕たちの方を向く。

「物部悠、大島亮、少し用がある。こちらへ来い」

「え？」

「はい、分かりました……」

学園長に呼ばれて僕たちは廊下へ出る。

「物部悠、竜紋を見せてみる」

そう問われた悠は右手の甲を見せる。

「——特に異常はないですよ」

学園長の目的はドラゴンの能力を受け継いだかどうかだろう。ドラゴンを討伐することで、その能力を手にすることができると。

二年前、深月さんは「紫」のクラーケンを討伐して反物質とミスリルを生成できるようになっている。二ヶ月以上前に「白」のリヴァイアサンを倒したことで、悠は反重力物質を生成することができる。

バジリスク討伐から一週間は経っているのでブリュンヒルデ教室の生徒たちの誰かに受け継がれているかもしれない。

そのため学園長は最初に僕たちを呼び出したのかもしれない。

「ふむ……そのようだな。大島亮はどうだ？」

学園長は僕に聞いてきた。

「僕は創造と破壊を司る神ですよ。その気になれば反重力物質やバジリスクの能力くらいできますよ。それに能力の干渉ができないようにしてるんで僕は大丈夫ですよ」

「……そうだったな。悪かった」

学園長は僕が神であることを忘れていたようで、僕に謝った。

「けど、もしかしたら深月さんたちの誰かが使えるようになってるかもしれないな」

僕はバジリスクの権能を受け継いでいる生徒を知っている。本人は気づいていない。僕はあえて教えなかった。

「そうか……その可能性もあるな。まあ、いずれ分かることだ。

二人共、十分に注意してくれ」

「分かりました」

「はいよ」

悠と僕は学園長に返事をした。力の暴走や事故を招く可能性があるため、些細な異常も見逃さないようにしよう。

「よし、では最後に——少し腰を落とせ」

目的は分からないが、僕と悠はしゃがんで姿勢を低くする。

すると学園長は僕たちの頭にポンと手を置いた。

「物部悠、大島亮、よくやった。一人も犠牲を出さずにバジリスク

を討てたのは、そなたらの働きあつてのことだ」

小さな手で撫でられ、何だか恥ずかしくなってくる。

「ちよっ!?! 学園長いきなりなんすか?」

「ん? そなたらを褒めているのだが……これでは不満か?」

「い、いや、それはその……」

「まあ、不満ではないですが……」

「ならばありがたく受け取っておけ。私が男を<sup>ねぎら</sup>勞うなど、滅多にないことなのだからな」

学園長は僕と悠の頭をわしゃわしゃと掻き回した後、笑いながら去って行った。

「いったい何だったんだ?」

「僕までされるなんて……ミッドガルでは生徒でも、立場は神だぞ?」

僕たちは教室に戻ると、帰りの支度をしていた皆が目を丸くする。

「物部さんと大島くん、髪ばさばさ。ふふっ……変なの」

今日一日ずっと暗い顔をしていたフィリルさんがくすりと笑う。

僕はそれを見て、少しだけ学園長に感謝する。



時計塔一階の第一会議室に僕たちブリュンヒルデ教室の面々が集まっていた。

女子寮から少し離れた深月さんの宿舎で悠と食事をしていると、学園から支給された携帯端末から連絡があり、ここに来るように書かれていた。

悠と共に第一会議室へ行くと、もう既にリーザさんたちが勢揃

いしており、そこには深月さんや篠宮先生の姿も居た。

深月さんの宿舎は女子寮より遠いたため、僕たちが皆を待たせてしまった。

今回召集が掛かったのはたぶんキーリのことだろう。

皆が揃うと篠宮先生が口を開いた。

「――全員集まったようなので、話を始める。レン・ミヤザワ、そろそろ起きろ」

「ん……」

レンちゃんは目を擦りながら、顔を上げた。

「このような時間に呼び出しをかけてすまない。急な話になるが

――明朝六時、君たちにはエルリア公国へ出立してもらいたい」

やはり原作通りに事が進んでいる。皆、呆気に取られた表情で篠宮先生を見つめている。

「現在エルリア公国に滞在中のキーリ・スルト・ムスペルヘイムは、ミッドガルの保護を求めている。それも”D”による迎えをだ。そのメンバーとして私は君たちを選んだ」

篠宮先生はそう言って、僕たち一同を順番に見つめた。

「彼女との交戦経験がある物部悠とリーザ・ハイウオーカー、さらに奴が来ることを想定して罫を仕掛けた大島亮。縁の深いティア・ライトニング。竜伐隊りゆうばつたいの隊長である物部深月。そしてエルリア公国の姫であるフィリル・クレスト。これだけの人員が揃っている以上、このブリュンヒルデ教室が最も今回の任務に適していると私は考えている」

「ちよ、ちよつと待ってください！ 篠宮先生は彼女を再び

ミッドガルに招き入れると仰おつしやるんですか!？」

リーザさんが信じられないという様子で声を上げる。

たしかに当然だ。キーリはミッドガルに莫大な被害をもたらした。そんな人物を迎えに行くなど、自殺行為に等しい。

「言いたいことは分かる。だが、あれだけ大々的に彼女のメツセージが世界に発信されてしまった以上、ミッドガルは人道的な対応をせざるを得ないのだ」

「けれど、彼女はテロリストなんですよ!？」

「彼女をテロリストだと暴けば、D”全体の信用失墜を招く。二ブルもこれまでの行いを隠匿するため、災害指定者の存在は公表しないのだろう。つまり——私たちは彼女を犯罪者として扱うことができないのだよ」

「だ、だとしても……この対応が正解だと思えません!」

必死に食い下がるリーザさん。誰よりも仲間を——家族を大切にするリーザさんだからこそ、危険分子を内側に入れることが許容できないのだろう。

「そうだな——確かに正解ではない。しかし表向きは、こう動くしかないのだ。ゆえに調整は後で行う」

「後……?」

「ああ、エルリア公国から彼女を連れ出した後だ。ミッドガルで生活するのならば、多くの自由を制限させてもらうことを告げ、それが受け入れられなければ、——災害指定に関する情報を口外しないことを条件に解放する」

「自由の制限は妥当ですが……交渉が決裂した時、解放してしまつていいのですか?」

眉を寄せリーザさんは訊ねる。確かに解放することには心配になるだろう。

「ミッドガルは”D”を守るための組織だ。たとえ災害指定者であろうと、私たちは彼女を討つ理由も、義務もない。何より君たちに人殺しはさせられん」

篠宮先生の返答を聞いたリーザさんは口を噤む。

人殺し——その言葉は、それだけで重い。

「他に質問がなければ、話を続けるぞ。”D”がミッドガルの領海外に出ることは禁じられているが、今回は特例として五日間の越境許可が得られた。その間に私たちはエルリア公国に赴き、キーリ・スルト・ムスペルヘイムと接触をする」

五日ということは、たぶん葬儀でもあるのだろう。僕たちも出席するに違いない。

「エルリア公国は明後日から三日間、アルバート王の葬儀が大々的に行われていることになっていてな。彼女は最終的に献花に参加することを、メディアに公言している。だから彼女を移送するのは、葬儀が終わってからだ。君たちはそれまで彼女の護衛を務めて欲しい」

「護衛……ですか？」

これまで黙って聞いていた深月さんが問いかてきた。

「ニブルは恐らく彼女を狙っている。けれどエルリア公国にいる間の彼女は、あくまで助けを求めている一人の”D”だ。少なくとも彼女と交渉を行うまで、殺させるわけにはいかない」

キーリが簡単に殺されることはないだろうが、僕は悠の上官が送り込む刺客が来ることを知っている。

篠宮先生は万が一の事が起きることを想定しているのだろう。

「明日に備えて急いで準備をしなければいけませんね……兄さん、荷造りを手伝って貰えますか？」

「ああ、いいぞ」

深月さんは悠に頼んできた。元々こうなることを知っていたので、準備は万端だ。

(二ヶ月後にな)

キーリがミッドガルから去る前に言ったことを思い出していた。

こうして会議は終わり、深月さんの宿舎へ戻った。

## 出発

翌朝六時——僕たちブリュンヒルデ教室一同は、篠宮先生に引率されてミッドガルを出発した。

まずは大型の高速ヘリで数時間掛けてどこかの空港に運ばれ、そこから貸切のジェット機に乗り換える。

暇なので読書をしていると、機内からアナウンスが聞こえてくる。

『お知らせします——あと十分ほどで当機は目的地に到着する予定です』

ミッドガルから七、八時間の時差があり、二十時間近く移動を費やしているが、窓を見ると夕方だ。

隣で寝ていた悠は機内のアナウンスで目を覚ましていた。

「もうすぐ着くみたいだな」

「ああ、ヨーロッパに来るのは三ヶ月以来だ」

僕たちは窓の外を見ながら雑談をしていた。

飛行機はまだ高空にあるようで、遥か下に見える大地の茜色あかねいろに染まった雲が断片的に覆っている。雲から突き出しているのは、頂に雪が積もった高い連峰だ。

「山ばかりだな」

「……まあ、それがエルリア公国の特徴みたいなものだから」

悠が外を眺めながら呟くと、前の座席からフィリルさんがぴよこりと顔を出す。

「うおっ!?!」

意表を突かれた悠は、小さく驚きを上げる。僕たちの会話を聞こえていたらしい。

「あのね、エルリア公国は高い山に囲まれているせいで、”陸の島国”って呼ばれるほど、外と交通手段が限られてるの」

「飛行機でしかまともに行き来できないって話は聞いたことがあるが……そこまでののか」

悠はフィリルさんの言葉を聞いて呟く。

「うん、陸路は基本的に山越えだしね。一応山間やまあいを通る河川もあるけど、流れが速いから国の外へ出るだけの一方通行。空港ができるまでは周囲から完全に取り残された国だったんだ」

フィリルさんは窓の外に見える大地を示しながら言葉を続ける。

「とうるか……第二次大戦後のゴタゴタで独立するまでは、大国の一領地で——国ですらなかったんだけどね。ひいお爺様じいさまより前は王様じゃなくて、大公様だったんだよ」

「ああ。だから王国じゃなくて、公国なんだな」  
悠は納得して呟く。

「そういうこと。クレスト家は何百年もこの辺りを統治はしていたけど、本当の意味で王政が敷かれていた時期はとても短いんだ」

故郷が間近に迫ったからか、フィリルさんのテンションがやけに高く、饒舌じょうせつだ。

「そうなのか。今はたしか民主制だったよな？」  
それまで黙って聞いていた僕は口を開いた。

「お爺様が即位した時に、自分から権力を手放したの。希少な資源が採掘できる国有地を民間に解放して……国をすごく豊かにした。お爺様は、本当に凄い人」

「その上、”D”の人権回復やミッドガルの独立にも関わったんだろ？」  
何ていうか……国と世界を変えちまった人なんだな」

悠はフィリルさんの祖父が偽なした功績に感嘆しながら言う。

原作でしか知らないが、そこまでできる人間は初めて聞くかもしれない。

「うん。みんな、お爺様のことを尊敬してた」

「じゃあ、エルリア公国の人達は、凄く悲しんでるんだろうな……」

どうやら悠はエルリアの葬儀を知らないようだ。僕は原作で知っているため、エルリア式の葬儀がどんなものか分かっている。フィリルさんも悠の言葉を聞いて、おかしそうに笑う。

「まあ、悲しんでると思うけど……物部くんが考えている感じ



じゃないよ、きつと」

「どういうことだ？」

「それは、見てのお楽しみ」

悪戯いたずらつぽく微笑むフィリルさん。

『——間もなく着陸態勢に入ります。シートベルトをご着用ください』

そこに機内のアナウンスが響いた。

「着いたら、色々と案内するね」

フィリルさんは顔を引つ込めて自分の席に座り直す。

フィリルさんの様子を見て、この時から悠のことが気になっていたので知る。

◇

飛行機の外へ出た途端、冷たい風が吹き付けて来た。

「うわっ……さ、寒いね……」

「んう……」

アリエラさんとレンちゃんが身を縮め、剥むき出しの腕をさする。

「もう少し厚着をしておくべきでしたわ……」

ティアちゃんを背負って機内から出て来たリーザさんは、眉を寄せて呟く。

リーザさんの背中でティアちゃんはすやすやと眠っている。熟睡しているようで、どうやっても起きなかつたらしい。

タラップを降りながら周囲を見渡すと、フィリルさんの言った通り、遠く霞かすむ連峰が四方をぐるりと囲んでいた。この場所でも標高はそれなりにあるようで、空気が冷たい。

この五年間、いろんな国に行ったことはあるが、エルリア公国に来たのは初めてだ。

「大島クン、寒くないのかい？」

僕は気を少し上げているので暑く感じる。制服の袖をまくっており、アリエラさんが心配してきた。

「ああ、大丈夫だよ。寒いのは慣れてるからね」

僕は心配ないと答える。二人は寒そうに手を擦っていたので、ポケットに手を入れて、カイロを作る。温度を少し高くしてアリエラさんとレンちゃんに差し出す。

「使うか？」

「あ、ありがとう」

「ん」

アリエラさんレンちゃんは差し出したカイロを受け取り、両手でカイロを持つ。

タラップを降りたところには、やたら車体の長い黒塗りの高級車——恐らくリムジンと思われる乗り物が止まっていた。滑走路まで迎えが来ており厚手のコートを着た女性が立っていた。

「あっ！」

彼女を見た途端、フィリルさんはタラップを駆け下りていく。

「フィ、フィリル様——危ないですよ！」

「へレン！」

制止の声も聞かず、勢いよく彼女に抱き付くフィリルさん。

僕たちがタラップを降りると、フィリルさんがこちらを向き直し、彼女を紹介する。

「——彼女は私の侍女のへレン。小さい頃は、乳母も務めてくれた人」

「へレン・ブラウンと申します。皆様、その服装ではお寒いでしょう。早くお車へ。王宮に着いた後、暖かいお召し物をご用意させていただきます」

「ありがとうございます。よろしくお願いします」

深月さんが前に出て、一礼する。

僕たちはへレンさんに促され、車に乗り込んだ。暖房が効いており、高めた気を解除した。車内はとても広々としていて対面の座席

がある。全員が余裕を持って座席に着くと、車は滑るように発進した。運転手はヘレンさんだ。

「——それでは簡単に今後のスケジュールを確認する。ああ、その前に時計を合わせておけ。現在、この国は十八時二十三分だ」

篠宮先生は自分の電子時計を示して言う。僕たちが個人端末や腕時計の時間を合わせたのを確認し、話を続ける。

「この後、我々は国賓として王宮に招かれる。王宮では各々に部屋が用意されるという話だ。その部屋で準備を整え、二十時から晩餐会ばんさんかいに出席する。フィリル・クレストの両親——次期国王と王妃、それにキーリ・スルト・ムスペルヘイムとはそこで顔を合わせることになるだろう」

誰かがごくりと唾を呑んだ。

皆はキーリの目的が分からない。もしもキーリが誰かに危害を加えるものなら、僕と悠が黙ってない。

しかし、彼女の目的を知っている僕は警戒する必要は無い。

「明日以降のスケジュールは、彼女と話した上で調整する。何か質問は？」

篠宮先生はそう言って僕たちを見回す。

「あの……」

寝息を立てるティアちゃんに膝枕をしていたリーザさんが躊躇ためらいがちに手を挙げる。

「何だ？」

「わたくしたちは、穂乃花ほのかさん——いえ、キーリとどう接したらいいのでしょうか」

「仲良くしろとは言わん。彼女の目的を探る意味でも、可能なコミュニケーションは図ってくれ。もちろん平和的に、かつ穏便にな。ただ、警戒は決して怠らないで欲しい。いざという時は自分の安全を第一に考え、行動するように」

「……分かりましたわ」

不安そうな表情を浮かべながらも、リーザさんは頷く。

会話が途切れ、僕は目を瞑る。

本当は瞑想をしたかったが、車内でするのは迷惑が掛かると思  
い、外の”気”を探る。

今回の任務はニブルも動いている。奴らはキーリを暗殺する  
ため、もう既にこの国に潜り込んでいる。

今のところ奴らの気が無いので近くには居ないようだ。

「やけに——賑やかだな」

外の景色を見ているようで、悠が戸惑いながら呟く。

「うん、だって明日からお祭りだから」

そんな悠を見て、向かいに座るフィリルさんが笑ったような口  
調で言う。

「え？　明日から始まるのは国王の葬儀だろ？」

「この国では、葬儀とお祭りは同じものなの。死者は賑やかに天  
国へ送り出してあげるっていうのが私たちの習慣」

言わば魂送祭こんそうさいのようなものだ。日本にもそんな風習があると  
聞いたことがある。

「そうなのか……だからさつき、見てのお楽しみって言ったんだ  
な」

「明日からはきつと、もっと、楽しめると思う。あの人が妙なこと  
さえしなければ、だけど」

あの人とはキーリのことだろう。この中で一番不安なのは  
フィリルさんで間違いない。何しろ両親が、知らずに危険なテロリス  
トを匿かくまっているからだ。

「大丈夫だ——俺がいる限り、キーリに勝手はさせない」

悠はフィリルさんを安心させるために言う。事実、今の悠は  
悪竜ファフニールの力を使わなくても勝てるだろう。一ヶ月前よりも強くなって  
いる。

「物部くん、たまに頼もしいね」

「たまに、は余計だ」

「ふふっ」

悠が言い返すと、フィリルさんが楽しげに笑う。

しかし、悠の右側に座る深月さんとイリスさんが半眼で見えてい

るようで、目を瞑つても”気”で感じる。

「な、何だよ」

悠も感じたようで、深月さんたちの方を向いて言う。

「いえ、別に」

妙に棘とげのある口調で答える深月さん。

「モノノベ……いつの間にか、ファイリルちゃんと結構仲良くなつてるね」

イリスさんが少し拗すねた声こゝろ音で言う。

「い、いや、そんなことは——」

「……ないの?」

ファイリルさんの言葉を悠は詰まる。

「ないことも……ないかもしれないが……」

悠が深月さんとリーザさんの確執を解消しようとした際、ファイリルさんと色々関わる機会があり、以前よりも打ち解けている。

ちなみに僕もその件に関わっているので、バジリスク討伐後からは少し話す仲になつている。

「……そうだね。あんなことをしたんだしね」

ファイリルさんが身を乗り出し、悠の顔を近づいて小声で囁ささやく。

火山島でお風呂に入ったことだろう。僕も入らされそうになつたので避けていたが、悠はファイリルさんと密着して入ったことを思い出す。

実際には見てないが、原作を読んでいたのでそうなつたに違いない。

「兄さん、顔が赤いですよ?」

「モノノベ……ファイリルちゃんと何があつたの?」

深月さんとイリスさんが悠に追求する。

「な、何でもないと! ほら、それより見てみるよ。あの家の装飾、すごく綺麗で——」

悠が強引に話題を変えようとするが、僕は外に禍々しい”気”

を感じ、悠も察知したようで途中で言葉が途切れる。

悠は気になつたようで窓の外を見つめる。僕は近づいてみる

なに聞こえないように小声で話す。

「悠、ニブルが既にこの国に潜り込んでいるようだ」

「っ!？」

悠は少し驚いたが、そのまま話を続ける。

「奴らはキーリを暗殺するために来たのかもしれない。アイツらは災害指定を野放しにする訳がないからな。注意してくれ」

「わ、分かった」

僕は悠から離れ、再び目を瞑る。さっき感じた”気”はもしかすれば悠に係のある奴かもしれない。



一時間もしない内に王宮に着き、車を降りると暖かい空気が僕たちを包み込む。

近代的な改装が為なされているようで、暖房がしっかりと効いている。本来は使用人が使う廊下なのか、見栄えのいい調度品の類は飾られていない。

だが階段を上り、三階に上がると、急に雰囲気が変わった。天井の電灯は複雑な意匠の施されたものとなり、床にはふかふかの絨毯じゅうたんが敷かれている。

ヘレンさんはいくつもの扉が等間隔に並んだ場所へ僕たちを案内し、服のポケットから手帳を取り出す。

「篠宮遥さまは、こちらのお部屋をお使いください」

手帳の中を見ながらすぐ傍そばにある部屋を示し、扉を開けるヘレンさん。どうやら部屋割りには既に決まっているようだ。

「お部屋にはお召し物をご用意させていただきます。お好きな物をご着用ください。サイズは事前に教えていただいたものを取りそろえましたが、お気に召すものがなかった時は、代わりのものをご用意いたします」

澱みない口調でヘレンさんは説明し、僕たちを順番に部屋を案内する。

基本的に部屋は出席番号順のようだ。

ただリーザさんとティアちゃんは同室で、フィリルさんの名前は飛ばされた。

「では、フィリル様はこちらに」

フィリルさんはヘレンさんと一緒に廊下の向こうへ歩いて行った。

僕は割り振られた部屋に入る。

「ほう……」

扉同士の間隔が大きく開いていたので予想はしていたが、想像以上に広くて豪華な部屋だ。

天井にはシャンデリアが吊り下がり、奥のベッドもやたらでかい。壁際にあるクローゼットを開いてみると、生地も仕立てのいい男性用の衣装が大量に用意されていた。

僕はその中で一番無難そうなスーツを選び、手早く身支度を整える。

神々の世界でも何度もパーティーがあるので、着慣れている。さらに社交ダンスの経験もある。

僕は杖を取り出し、あるドラゴンを探す。

ヨーロッパ周辺の上空に映し出されたのはイエロー・ドラゴン、”黄”のフレスベルグだ。

このドラゴンはアスガルの中で討伐不可能とされている。理由としてはどんな兵器を使っても通用しなかったようで、原作と同じで奴に傷一つ付けるとできなかつたらしい。

奴の能力は霊頭粒子エーテルウインド。魂を具体化することができる。生き物の魂を食い、さらに自身のエネルギーを体に纏まとうことができる。つまり僕と同じ”氣”に使えると言うことだ。

アリエラは数年前、フレスベルグに遭遇して具現化した魂を食うのを目の前で見ていた。ミッドガルで言っていたのはそういうことだ。

ニブルの攻撃が通用しなかったのも、エーテルウインド霊顕粒子を身に纏うことで攻撃を防御しているようだ。

しかし、対策はある。同じ”気”を干渉させることで無効化にすることができる。その間、奴は無防備になるのでそこに皆の攻撃で奴を倒すことができる。

それに奴は身に纏うだけで攻撃は一切できない。超サイヤ人で太刀打ちできるのでリヴァイアサンやバジリスクよりは楽に倒せる。

厄介なのはエーテルウインド霊顕粒子だけで、僕がいれば無効化することができる。

そのドラゴンは近いうちにエルリア公国にやって来る。奴を討伐するため、こうして事前に調べている。

調べ終わった僕は杖を仕舞い、廊下に出た。



## 晩餐会

「……そうですか、ニブルが既に来ていましたか」

亮の言う通り、ニブルはエルリア公国に潜入していた。ヘレンさんに案内された部屋に入り着替えをしていると、かつての上官であるロキ・ヨツンハイム少佐から連絡が来た。

ロキ少佐はキーリを殺すため、俺に協力を依頼してきた。しかし、ミッドガルの生徒として断った。するとロキ少佐は自分たちで動くと言い出し、通信を切った。

そういえばロキ少佐は今回、俺を仕上げると言っていた。もしかしたら”悪竜”のことだろう。

しかし今は深月にそのことを伝えるため、こうして妹の部屋にきている。

「ですが、ニブルがこういう動きを見せるのは想定内です。ただ、一つ気になるのは——そもそも、ニブルにキーリさんをどうにかする力があるのかということですね」

深月はドレスが皺しわにならないよう気を付けながら、鏡台前の椅子に腰掛け、自分の見解を述べた。

言いたいことは分かる。ニブルはこれまで彼女の命を狙い続けていたにも拘かかわらず、仕留めることができなかったのだから。だが——。

「ティアを”ムスペルの子ら”の施設から保護した際、ロキ少佐の部隊——スレイプニルはキーリに善戦したらしい。ロキ少佐は、以前そう言っていた。だからキーリにとって、決して楽な相手ではないと思う」

「……分かりました。彼女にもこのことを伝えた上で、今後の予定や護衛態勢などを相談しましょう」

深月は竜りゅう伐隊隊長としての表情で頷く。

ニブルはキーリを殺すためにどんな手を使っても動いてくるが、俺や亮がいる限り奴の好きにはさせない。

しかし、一番予想が付かないのは、キーリがどのような行動を

取るかだ。彼女の意思と目的を見極めなければ、俺たちはいいように利用されてしまうかもしれない。

（キーリは今、宮殿のどこかにいるんだよな）

俺は何となく天井に視線を向けながら考える。

晩餐会ばんさんかいまで、もう少し。手のひらよみがえに甦るのは、鋭い切っ先を彼女の腹部に突き立てた時の感触。仲間を守るためとは言え、俺は殺すつもりでキーリと戦った。

亮が罫を仕掛けてくれなければ、俺はもっと重い怪我を負っていたかもしれない。

寸前のところで俺は急所をあえて外し、キーリは上位元素ダークマターの生体変換で傷を瞬時に治してしまったが——それまで頑かたくなに守ってきた一線を越えてしまったことは事実。

決して、なかったことにはならない。

彼女との再会は、また俺の何かを変えてしまうのではないかと俺は落ち着かない気分でその時を待った。



晩餐会の直前になると、ヘレンさんが俺たちを迎えにやって来た。

部屋から続々と出て来た女子たちは皆、それぞれに似合った雰囲気まどのドレスを纏まとっている。

「うー、何だか変な感じだな」

黄緑色のドレスを着たアリエラは、ひらひらしたスカートスカートの生地を触りながら言う。

「んう……」

レンもそわそわしながら、赤毛に合わせた深紅のドレスを何度も確認していた。

「大丈夫です、お二人とも似合っていますわよ」

薄い黄色の上品なドレスを着たリーザが、二人を褒める。

だが——似合っているというのなら、リーザが一番だった。何だか、とても着慣れている感じがする。むしろ普段の制服姿より、違和感がなかった。

「何を見ているんですか、モノノベ・ユウ」

俺の視線に気付いたリーザが、不機嫌そうな声こわね音で問う。

「え？　ああ——リーザはすごく自然だなんて思ってたよ。」

ドレスを着こなしてて、すごく素敵だよ」

「な……」

俺の言葉を聞いた途端にリーザの顔が赤くなり、睨んでくる。

「べ、別にあなたに褒められても嬉しくなんてありませんわ！

いくら褒めても、何も出ませんから」

「別に何も要らないさ。そのドレス姿を見られただけで十分だ」

「……っ!?　あ、あなた、わたくしをからかって遊んでいませ

んか!？」

何故か怒り出したリーザを見て、俺は慌てた。また何かまずいことを言ってしまったのだろうか。

「あ、遊んでないって!　　というか、ティアはどうしたんだ?」

俺は弁解しつつ、話題を逸そらす。リーザと同室になったはずのティアは、廊下に出て来ていない。

「……ティアさんなら、部屋で熟睡中です。キーリにいきなり合わせるの心配ですし、無理に起こさないようにしました」

リーザは不機嫌そうな表情を浮かべつつ、俺の問いに答える。すると後ろから扉が開き、中からスーツ姿の亮が現れる。

「オオシマ・リヨウ、遅いですわよ」

「悪い、ちよつと知り合いと連絡を取って遅くなった」

リーザが睨むと亮は後ろに手を組んで近づく。その姿は俺より着慣れており、髪をオールバックにしていた。

「亮、意外と似合うな」

俺は着慣れた亮に眩くと亮が俺を見た。

「まあ、何度もこんな機会があったあらね。慣れてるだけさ」  
亮は堂々と答える。たぶん神々の世界でも晩餐会や社交界で着ることがあるのだろう。

「イリス・フレイア、準備はまだか？」

「イリスさん、みんな待ってますよ！」

大人っぽい藍色のドレスを着た篠宮先生と、紫のドレス姿の深月が、イリスの部屋を覗き込んで中に呼びかける。

「——わ、ご、ごめんね！　今行くから！」

慌ただしく、バタバタと部屋からイリスが出て来た。

新雪のように真っ白なドレスの裾が、ふわりと翻る。

着飾ったイリスは、本当にお伽とぎの国から抜け出した妖精のよう  
で——その浮世離れた美しさに目を奪われた。

じつと見つめていると、視線が合う。

「も、モノノベ……どう？」

「——綺麗だ」

それ以外の感想は出てこない。イリスは安堵あんどした様子で息を吐く。

「よかった……」

そのやり取りを見ていたリーザが、どこか不機嫌な表情で俺を睨む。

「わたくしの時よりも、ずいぶんと率直な感想に思えますわ」

深月も不満げな眼差しを俺に向けた。

「兄さん、私には似合ってるとしか言ってくれなかったのに……。  
あれは、お世辞だったんですね」

「い、いや、そういうつもりじゃないって！」

俺は慌てて弁解する。

篠宮先生はそんな俺たちの様子を見て小さく苦笑し、ヘレンさんに視線を向ける。

「——手間取ってしまって申し訳ない。案内をお願いします」

「かしこまりました。どうぞこちらへ」

ヘレンさんは頷き、俺たちを誘導していく。

最初に通つたのとは違う階段から一階へ降り、大きなホールを抜け、両開きの扉まで来ると、いい匂いが漂ってきた。

ヘレンさんが扉を開け、俺たちは部屋の中に入る。

そこには料理の並べられた長く広い食卓があり、既に四人が席に着いていた。何となく立食パーティーのようなものを想像していたが、普通に座って食事をするようだ。

一番奥の上座に腰を下ろしている男性は、恐らくフィリルの父——次期国王だろう。妃きさいと思われる女性とフィリルは、その左右の席に向かい合わせで座っていた。

フィリルは青を基調としたドレスを着ており、首には大きな青い宝石が嵌はまったネックレスを着けていた。まさに姫ひめと言うにふさわしい出いで立たちだ。

そして——妃の隣に、漆黒の衣装を纏った少女、キーリ・スルト・ムスペルヘイムが座っている。

キーリは俺たちの方を——いや、俺を真っ直ぐに見つめ、薄く微笑んだ。

その表情からは、何を考えているのか読み取れない。奥に座っていた男性は、椅子から立ち上がって小さく会釈をした。

「ようこそ。私はフィリルの父、アルフレッド・クレストだ。戴冠式は父上の葬儀が終わってからになるため、まだ王子という立場ではあるが——この国を代表して、あなたたちの来訪を歓迎する。どうぞお好きな席へ」

アルフレッドさんは俺たちに着席を促す。

俺は皆が動く前に、最も危険と思われるキーリの隣に腰を下ろした。それに続いて亮は俺の隣に座る。亮もこんな場所に深月たちを座らせるわけにはいかならぬと思ったのだろう。

「——あなたが来てくれると思ってた。また会えて嬉しいわ、悠」

キーリは俺だけに聞こえる程度の声で囁ささやき、熱の籠こもった眼差しを向けける。

「俺は……正直もう会いたくなかったよ」

アルフレッドさんたちに聞こえないよう、俺も抑えた声で返す。

「あら、つれないわね。私はあなたを、一時も忘れたことがなかったのに」

自分の腹部に手を当て、微笑むキーリ。

そこは俺が金属片を突き立てた場所。俺がああ感触を忘れられないように、彼女ははつきりと覚えているのだ、傷つけられた痛みを。

「……………」

何と答えていいのか分からず、俺は苦しい想いを噛み締める。するとキーリは亮に視線を移す。

亮を見ると、深々と座って目を閉じていた。どうやらキーリは亮にも気になるようだ。

全員が席に着くのを確認すると、アルフレッドさんも再び着席する。それを待っていたように、今度は妃と思われる女性が口を開いた。

「遠方からようこそお出でくださいました。私はフアリエル・クレスト。アルフレッドの妃であり、フィリルの母です。本当はフィリルの姉たちも来る予定だったのですが、式典の準備に掛かりきりとなっております……」

「いえ、お気になさらず。こちらこそご無理を言っつてしまい申し訳ありません。急な来訪をお許しいただいたこと、心より感謝いたします」

篠宮先生はお礼を述べ、深々と頭を下げる。リーザや深月たちもそれに続いたのを見て、俺も慌ててお辞儀をする。

そんな俺たちを見回して、今度はキーリが言葉を発する。

「皆さま、今日は私——キーリの求めに応じていただき、ありがとうございます。D”の同胞がミッドガルから迎えに来てくださったことに、私は深い感動を覚えております」

空々しい台詞にリーザや深月はあからさまに顔を顰めるが、

キーリの正体をここで暴くわけにもいかない。

俺は一人ずつ、初対面を装って自己紹介を行った。フィリルの隣に座ったリーザから順番が回ってきたため、俺は最後になる。

「――僕は、僕は大島亮と申します。以後、お見知りおきを」  
亮が挨拶をした後に続いて一礼する。

「――俺は、物部悠と言います。よろしくお願いします」  
座ったまま挨拶すると、アルフレッドさんが興味深そうな眼差しで俺と亮に向ける。

「ミッドガルへの出資を行っている関係で噂は聞いていたが……本当に男性の”D”もいたのだな。しかもドラゴンを倒した経歴を持つ者まで……」

「あなた、じろじろ眺めるのは失礼ですよ。挨拶はこれぐらいにして食事を始めましょう。料理が冷めてしまいます」

「――ああ、それもそうだな」

フィリエルさんに窘められ、アルフレッドさんは頷く。  
こうして一見なごやかな晩餐会が始まった。もちろん実際は、  
団欒だんらんどころではない。皆、食事をしながらキーリに注意を向ける。

しかし亮は美味しそうに料理を口にしており、キーリを全く警戒していない。

「君たちは、フィリルと仲がいいのかい？」

「クラスメイトですから……それなりに」

「僕は少し話す程度です」

そんな中、アルフレッドさんは何故かやけに俺と亮に話しかけてきた。

「女性ばかりの中に男性が君たちだけというのは、大変ではないかね？」

「確かに転入した当初は色々戸惑いましたが……今は楽しく過ごしています」

「僕は悠の後にミッドガルに来ましたので、何の問題もありません」

「ほう、だがそういった環境ではトラブルも起こるだろう。何と

言うか、その——だ、男女関係の纏れもつなどはないのかい？」

「え……？ いや、それは——」

「っ!? まあ、何と申しましょう……」

いきなり突っ込んだ質問をされ、俺と亮は戸惑う。

「あなた、下世話な質問はおよしになつてください」

「……お父様、物部くんと大島くんが困つてる。私、怒るよ?」

だがフアリエルさんとフィリルに睨まれ、アルフレッドさんは体を小さくする。

「——あ、そ、そうだな。すまない。失礼なことを訊たずねてしまつたようだ」

申し訳なさそうに謝るアルフレッドさん。

恐らくフィリルが生活する場に、俺と亮が加わつたことを不安に感じているのだろう。

「いえ、お気になさらないください。不安に思うのは当然のことですから」

亮は普段と違つて敬語で言う。たとえ神でも今の立場はミツドガルの生徒として話しているのだろう。

ニブルの時とは違い、クラスメイトの両親の前ではかしこまっている。

「そ、そうですよ。アルフレッドさんが心配しているようなことはありませんから」

亮に続いて俺もそうフォローしておくが、フィリルが悪戯いたづらっぽく笑つて首を傾げた。

「……あれ、物部くん、そうだった?」

「フィ、フィリル!」

俺はフィリルの発言に慌てる。

「何? やはり何かあるのかね?」

アルフレッドさんは俺に鋭い視線を向けた。

「お父様、心配しないで。いざとなつたら……物部くんが責任を取つて王子様になつてもらうから」

澄ました顔でとんでもない台詞を口にするフィリル。



「なっ……ま、まさか君とフィリルはそのような関係なのか!？」

「ち、違います!」

俺はいきなり立つアルフレッドさんを宥める<sup>なだ</sup>。

「モノノベ、やっぱりフィリルちゃんとかあったの?」

「兄さん、詳しく話を聞かせてもらえませんか?」

イリスと深月まで俺を睨み、低い声で追求してくる。

「頼むから、落ち着いてくれ!」

俺はイリスと深月を宥めるが、隣で亮はとんでもないことを口にする。

「悠、確か一週間前にフィリルさんと抱き合ってたな」

「なっ!?! 抱き合ってただと!?!」

アルフレッドさんはさらに驚き、俺を睨んでくる。

「あっ、そうだったね。そんなこともしたね」

フィリルさんが亮の悪戯に乗ってきた。

「兄さん……? それは本当のことですか?」

「いや、これは——」

俺は必死に否定しようとするが、アルフレッドさんがこちらに近づいてきて、俺の両肩に手を置いてきた。

「物部くんと言ったね。このあと私の部屋で話さないか?」

大丈夫、時間はたっぷりとあるから朝までには終わると思うよ」

アルフレッドさんの表情には微笑んでいるが、逆に怖い。

「ご、誤解です! とにかく落ち着いてください!」

そんな風に晚餐会は進行し、アルフレッドさんはみんなが食べ終わるまで俺を睨み続けた。キーリが妙なことをする様子もなかった。

「——我々は彼女と明日以降の打ち合わせをしたいので、もう少しこの場所を使わせてもらってもいいでしょうか?」

晚餐会が終了し、席を立ったアルフレッドさんに篠宮先生が言う。

「ああ、構わんよ。後で飲み物を運ばせよう」

頷き、アルフレッドさんとフェアエルさんは部屋を出て行く

た。先ほどもまでの笑いが響いていた室内が沈黙が満ちる。

両親の前でいつもより口数が多かったフィリルも表情を固く引き締め、キーリに視線を向けていた。当のキーリは皆の視線を浴びながらも、余裕を感じさせる微笑を浮かべる。

しばらくして飲み物を運んできたヘレンさんが退室したところで、ようやく篠宮先生がキーリに向かって話しかけた。

「それで、君の目的は何だ？」

「……いきなり不躰ね。私がミッドガルに保護を求めたら、あなたたちは来てくれたんじゃない」

アルフレッドさんたちがいた時とは、がらりと口調を変えて答えるキーリ。

「その通りだ。しかし理由が分からない」

「理由もテレビで言ったはずだけど？ 私、命を狙われているの」

「それは、昨日今日に始まったことではないのだろう」

キーリはずっと「ムスペルの子ら」のリーダーとして活動していた。今さらミッドガルに保護を求めるのは、あまりに不自然だ。

「確かにね。でも、私は今、かつてないほど追い詰められているのよ。だから——助けて欲しいの」

キーリは最後の一言を口にした時だけ、篠宮先生ではなく、俺と亮に視線を向ける。

「……お前が、命の危機を感じるほどののか？」

彼女と目を合わせたまま、俺は問いかける。

「まあね」

「いったい、何をそこまで警戒しているんだ？ スレイプニ

ルか？」

「スレイプニル？」

初めて聞く単語だというように、キーリは眉を寄せる。

「以前ティアの確保にニブルが動いた時、お前を足止めした部隊だよ。覚えてないか？」

「ああ——あの妙に手強かった部隊のことね。彼らも脅威の一

つではあるわ」

「その言い方からすると、他にもあるんだよな？」

「ええ、もちろん。ただ、一つ一つ挙げていくとキリがないわよ。私には敵が多いの。その全てから逃れ、安全を手にするためには、あなたたちの助けを借りる以外に方法がなかったというわけ」

キーリは俺たち全員を見回してから、篠宮先生に視線を戻した。

「ならば、まず知っていることを全て話して欲しい。特に君とヘカトンケイルの関係を確かめんことには、ミッドガルへ招き入れることなどできるはずもない」

篠宮先生は強い口調で言う。

およそ一ヶ月前、キーリはティアを奪還するためにミッドガルへ潜入した。そしてまるで彼女が招きよせたかのように、突如としてヘカトンケイルがミッドガルに出現したのだ。

キーリはヘカトンケイルを見て”お母様”と言っていた。それが言葉通りの意味とは思えないが、何か深い関係があることは間違いない。

「それについては——この国を出てから話すわ」

「では今すぐにも発ちたいものだ。先ほど得た情報では、既にニブルの部隊が君を狙って動き出しているらしい。安全を求めるといふのなら、早々にこの国を離れるのが得策だ」

「そうね———そうしたいところではあるけれど、アルバート王の葬儀に参加するって約束をしちやってるのよ。最終日にはスピーチをする予定だし」

肩を竦めて答えるキーリ。

「追い詰められている割に……ずいぶん悠長だな」

「かくま匿つてもらった恩もあるのに、迎えが来たらすぐサヨナラなんて薄情でしょう？　それに今さら私がボイコットしたら、”D”に対するイメージが下がっちゃうわよ？」

「……あくまで本当の目的を明かすつもりはないわけか」

篠宮先生は深々と息を吐く。

「疑い深い人ね。私は本当のことしか言っていないのに」  
薄く微笑んでキーリは嘆息する。

「仕方ない——では予定通り葬儀が終わるまで君を援護し、国外へ出た後に改めて話し合いの場を持つことにしよう。その時には約束通り、ヘカトンケイルとの関係を含めた全てを話して欲しいものだ」

「ええ、約束するわ」

本心の読み取れない笑みを浮かべつつ、キーリは頷く。

「——期待させてもらおう。それでは明日のスケジュールだが……」

「私、しばらくこの宮殿に缶詰だったから、外に行きたいわ。この国の観光スポットとか、色々案内してくれない?」

篠宮先生の言葉を遮り、キーリがフィリルにフィリルに向かって言う。

「……あなた、話を聞いてたの? 狙われてるんだよ?」

困惑した表情でフィリルは訊ねた。

「狙われているからこそ、よ。部隊が動いたなら、どこにいたっていつかは攻撃される。だったら、戦いやすい場所を選んだ方がいいでしょう? 私、私の戦い方は、屋内向きじゃないのよ」

「でも……」

「まあ、宮殿内で周囲の被害を考えずに戦ってもいいのなら——じつとしていても構わないわ。けどその場合、あなたの大切な人が巻き添えになっちゃうかもしれないわね」

「……………」

キーリに畳み掛けられて、フィリルは黙ってしまふ。

「話は纏まったわね。じゃあ明日、朝食後に出発ってことで」

勝手に予定を決め、キーリは椅子から立ち上がった。

軽い足取りで部屋を出て行く彼女を誰も止められず、ぱたんと扉が閉まる音が響く。

「——いいように利用されている気がしますわ」

リーザが苦々しく呟き、席を立った。

「そうだね。彼女、明らかに何かを隠してるよ」

「ん」

アリエラとレンが同意し、他の皆も頷く。

皆で部屋を出て、三階まで階段を上がったところでフィリルと別れた。彼女の部屋は四階にあるらしい。

「どうして何も喋らなかつたんだ？」

移動しながら亮に聞いた。あいつはキーリと予定を決める時、一言も喋らずただじっとキーリを見ていた。

「ん？　ああ、ちよつとな……」

亮は頭を掻く。何か気になることがあったのだろう。

「まあ、明日に向けて早く寝なくちやな」

「そうだな」

俺たちはそれぞれの部屋へと入る。

とりあえずシャワーでも浴びるか、ネクタイを緩めつつバスルームに向かう俺だったが、そこでノックの音が響いてきた。

深月が何か連絡事項を忘れたのだろうか。そんな予想をしつつ扉を開けるが――。

「……な」

部屋の前に立っていたのは、黒いドレス姿のキーリだった。

「どうしてここに……」

「こつそりと後を付けて来たのよ。あなたに話があったから」

キーリは妖しく微笑み、するつと室内へ入ってくる。そして後ろ手に扉を閉め、俺を上目遣いに見た。

「……話？」

「あなたが言っていたニブルの部隊――スレイプニルは、たぶんもう国に来ているわ。実は少し前に外出した時、襲撃を受けたの。その相手がそうだったと思う」

俺はキーリの言葉を聞いてやっぱりと思う。亮の言う通り、既にこの国に潜入していたようだ。

「ただ、問題はその後。彼らの仲間なのか……それとも別口かは分からないけど、顔をフードで隠した大男が乱入して来て――私は

そいつに殺されかけた」

「お前が……本当に？」

すぐに信じられず、俺はキーリに問い返す。

「本当よ。そいつは何だかあなたに似ている気がしたわ。私に鋼を突き立てた時のあなたに——ね」

どくん、と心臓が大きく跳ねた。手足が、無意識のうちに震える。

ロキ少佐はやはり、”彼”もこの作戦に投入していたのか——

「その様子を見ると、心当たりがあるのかしら？」

「いや、それは——」

軽々しく話せるようなことではないため、俺は言葉を濁した。

「まあ、いいわ。私はあなたを……信じるだけ」

キーリは微かな笑みを浮かべ、右手で俺の頬に触れる。思いの外ひんやりとした感触に少し驚き、同時にキーリの右手に布が巻かれていることに気が付いた。

それは手の甲から手首の少し上までを覆う白い包帯。指先には巻かれておらず、さらに袖の長い服を着ていたため、今まで見落としていたのだろう。

もしかしたら、亮がキーリと明日の予定を決める際、一言も喋らなかったのは、右手の包帯に気付いたからかもしれない。

「右手……怪我しているのか？」

俺はキーリに問いかける。キーリなら生体変換で傷を一瞬で治してしまえるはずだ。

「ああ——これは、そういうのじゃないの」

キーリは苦笑を浮かべると、俺から離れて右腕を体の後ろに隠す。

「じゃあね、悠。あなたならきつと、私を守れるわ。たとえば……どんな敵が相手でも」

そんな言葉を残して、キーリは俺の部屋から出て行った。

彼女の目的が何なのかは、未だに読めない。けれど俺へ向ける

眼差しの中には、藁をも掴もうとする必死さが垣間見えた。たぶん彼女が助けを求めているのは、確かなのだろう。

「けど、買い被りすぎだ」

俺は小さく呟く。キーリを殺しかけたという大男。もしそいつが俺の予想通りの人物だったとしたら——俺は決して彼には勝てない。

いや、より正確に言うと——勝つてはいけないのだ。

## エルリア公国

”神界”から帰ってきた僕は、杖の先端にある丸い球体に映し出されるいろんな国の風景を見ていた。

一ヶ月分先の仕事を終わらせた僕は、エルリア公国には行かずに自分の家に泊まろうと思ったが、第四世界の”世界神”エドワードさんの家が騒がしかった。

エドワードの奥さんとまた喧嘩しているようで、当分は続きそうだったので家には帰らずそのままエルリアの宮殿に戻ってきた。

今は空間の歪みが発生してないかを調べている最中だ。ここ二週間で歪みが起きたのは一回だけ。いつもは一週間に十回以上は必ずある現象だが、ほとんどないのはおかしい。

(……何かあったのか?)  
たまにこの現象が減ることはあるが、ほとんどないことは絶対がない。

僕はいろんな国のあらゆる場所を映し出し、歪みが発生しているか探している。

どんなに探しても見つからず、杖を壁に傾けて椅子に腰掛ける。

この件は既に神官様たちが調べているが、原因は未だに分かっていない。天井を見上げて息を吐く。

すると、近くから人の”気”を感じた。悠や深月さんの”気”ではなく、知っている奴の力だった。

携帯端末で時間を見ると、午前六時ちょうどだ。悠たちは時差の関係でまだ眠っている。ということはあの女性で間違いない。

僕は椅子に座ったまま、扉の方を向いた。勝手に入ってくると予想していると、ドアノブがガチャツと音を鳴らし、扉が開く。

扉が開く音が部屋中に響き渡り、入ってきたのは今回の任務の発端となった”D”キーリ・スルト・ムスペルヘイムだ。

「あら、起きてたのね」

キーリは僕が椅子に腰掛けているのを見ると微笑んだ。



「ああ、部屋に来ることは分かっていたからな」

「あら、そうなの？」

「……どこでもいいからとりあえず座ったらどうだ？」

紅茶

とコーヒー、どっちを飲む？」

「いいの？　じゃあ、お言葉に甘えて紅茶をお願いするわ」

そう言つてキーリは僕の近くまで来て、ベッドに座つてきた。

「はいよ、熱いからな」

僕は杖を手にして紅茶の入ったコップを作り、キーリに差し出した。流石のキーリもそれには驚いた。

「びっくりした、上位ダイクマター元素を使わないで作り出すなんて……」

キーリはそう言つて僕を珍しい物を見るかのような眼差しを向けている。僕は気にせず自分の分の紅茶とコップを作り、一口飲む。

「やつぱり只者ではないようね。」D「じゃないみたいだし、何者なの？」

「どうやらキーリは僕の正体に気付いてないようだ。」黒「のヴリトラから聞いてないのだろうか。」

「そんなに気になるのか？」

「当然よ、こんなことができる人間なんて見たことがないわ。逆に気にならない方がおかしいわ」

キーリは当然のことを言ってきた。確かにその通りだ。気にしない方がおかしいが、この世界の人間は”D”だと勘違いするだろう。しかしキーリは僕が上位元素を使用せずに物質を作り出したことに、僕が”D”ではないことを確信する。

「そうだろうな。正体を明かすことは今はできないが、言えることは話すでしょうか」

僕はコップをテーブルに置き、僕の力を話した。神であることをバラすといろいろと面倒なことになるので”気”のことだけを話した。

キーリは僕の話に興味深々に聞き、実際にその力を見たいと行ってきたので、”気”を具現化して見せると、さらに興味を持った

ようで質問してきた。

人間が発するエネルギーである”気”をいろいろと教えたと、キーリも自分の能力を明かしてきた。

話は盛り上がり、あつという間に時間が過ぎてしまった。

「なかなか面白かったわ。人の流れる力をあなたは”気”と言うのね。もっと知りたくなったわ」

「そう言ってもらえると嬉しくなるよ。この話はミッドガルに戻ってからにしよう」

キーリはアスガルやニブルでは災害指定された”D”ではあるが、割といい奴だ。原作を読んでいるので知ってはいたが、実際に話すといろいろと盛り上がる。

「お代わりはいるか？」

僕は杖を手にしてキーリの持っているコップに近づける。

「やめておくわ、もうすぐ朝食だもの。お腹いっぱいになってしまおうわ」

キーリは手にしていたコップを僕に返してきた。

「それもそうだな」

コップを受け取り、テーブルに置いてある僕の分も一緒に先端にある球体の中に入れた。

「じゃあ本題に入るのか？」

「そうね、悠も起きてくるからそろそろ聞こうかしら」

そう言ってキーリは真剣な表情で僕の方に目を向けた。

「……どうしてお母様のことを知ってるのかしら？　そのこ

とは絶対に知られてないはずよ」

お母様。つまり”黒”のヴリトラのことである。キーリはヴリトラの上位元素によって作られた存在であり、”青”のヘカトンケイルも奴が作り出したのだ。

そのことは本人たちでしか知らないことだが、僕は原作を読んでいる。知識は豊富なため、キーリやヴリトラのことはなんでも知っている。

「どうしてだろうな……ノーコメントだ」

僕はいやらしい笑みを浮かべてキーリを見つめた。キーリは僕の表情を見ると、ハアッツと息を吐いた。

「そう、言えないのね」

「いつか言うよ。でも今は時期が早い。深月さんたちもいずれ知るだろうな。まあ、悠に至ってはすぐに知るかもしれないけど」

「悠が？」

キーリは不思議そうに首を傾けた。僕は手にしていた杖を壁に傾け、再びキーリの方を向いた。

「ああ、それに君は回りくどい言い方をするけど自分の正体を明かすだろ？」

「……そうね、彼になら知ってもらいたいと思うわ」

キーリはほんの僅かに頬を染める。やっぱりこの頃からだろう。本人はこれが感情だと気付いてないみたいだ。

「つまり恋だな」

「えっ!？」

僕の言葉を聞いたキーリは驚き、さらに顔を赤くする。

「だってそうだろ？ 異性の相手に自分のことを知ってもら

いたいなんて恋以外ないだろ？」

「それは……」

キーリは視線を逸らしながら黙り込む。悠をからかうのは楽しいが、異性をからかうのはヤバイと思ってきた。

このことを第七世界の”世界神”八重さんに知られたら間違いなく説教を受けることになる。

からかうのはその辺にして、杖を仕舞った。

「まあ、そんなことは置いといて、りゅうもん竜紋はどうだ？ 変化は

あるのか？」

キーリの竜紋が”黒”のヴリトラによって改造されたことは知っていたので話を切り出すと、キーリはそのことも知っているのかと言う顔で僕を見た。

「何でも知ってる訳じゃないけど、ある程度は知ってるからな」

「そう、じゃあ悠と一緒に守ってくれるかしら？」

竜紋が変化したことで何が起きるのかは知っている。キーリは僕に問いかけてきた。

「まあ、仲間なら構わず助けるがな。でも必要ならいつでも言ってくれ。悠も必死になって君を守るだろう」

僕はそう断言すると、キーリは安心した表情をする。

「嬉しいわ、その時はお願いね」

それからいろいろと話しながら、僕たちは部屋を出て食堂に向かった。



朝食後、僕たちは予定通り観光に向かった。

リムジンでの移動はさすがに目立ちすぎるため、ヘレンさんに手配してもらった大型のバンで王宮を出る。

運転手は篠宮先生で、道案内のためにフィリルさんは助手席に座った。

バン後部の広いスペースには、キーリを含めた九人が対面で腰を下ろしている。深月さんたちは昨日のようなドレス姿ではなく、制服の上に防寒着を羽織った格好だ。

ちなみに僕は制服のままだ。”氣”を纏まとうことで体温を上げることができるのだ。ヘレンさんから防寒着を貰ったが、大丈夫だと言って断った。

車内の空気はお世辞にも和やかとは言えない。その原因はやはりキーリだ。

襲撃者と、キーリ自身を警戒しなければならなかったため、皆の表情は固い。その中でも特に緊張しているのがティアちゃんで、彼女は悠とリーザさんの間に座って、二人の手をぎゅっと握りしめていた。

僕も立場としてキーリを警戒する側ではあるのだが、朝はいろんな話で盛り上がり、正直仲良くなった。

本当は朝みたいに話したいが、空気を読んで目を閉じている。

「——この国一番の観光スポットはエルリア城だけど、そこは後の式典で行くことになるし、他のところから案内するね」

助手席のフィリルさんが後ろを振り返って言う。

車は湖に掛かる橋を渡り、町の方へと向かっていた。

「まずはどこに連れて行ってくれるんだ？」

張りつめた空気を少しでも緩和させようと、悠が明るい声で問いかけた。

「……エルリアの大瀑布<sup>だいぼくふ</sup>。結構すごい」

ぐつと親指を立てて答えるフィリルさん。自信ありげな様子だ。

橋を渡りきった車は、湖を沿う大通りを走って行く。町は昨日よりも活気に満ちており、歩道はたくさんの人達で溢<sup>あふ</sup>れていた。

「——ずいぶん賑わっているわね。あなたたちも怖い顔しないで、もつと楽しみましょう」

窓から景色を眺めていたキーリが、車内に視線を戻して話しかけてくる。

「それはなかなか、難しい注文ですわ。あなた、自分がしたことを忘れたんですの？」

だが、リーザさんは刺々<sup>とげとげ</sup>しい声で答える。

「そういえば……ティアを連れて行くこうとした時に、あなたとは戦ったわね。殺すつもりはなかったけれど、怪我をさせてしまったこととは謝るわ」

キーリはリーザさんの方を向いて、申し訳ないように謝る。

「あんな怪我、大したことはありません。謝罪するくらいなら、今度こそわたくしたちを裏切らないと誓ってください。わたくしが一番恐れているのは、仲間の誰かが傷つけられることです」

「いいわよ、約束してあげる。今の私に、あなたたちに危害を加える理由はないもの。でも……こう言ったところで、あなたは安心できる？」

皮肉を交えた言葉でキーリは答える。

「もつと真剣に応じてくれるのであれば、少しは安心できるかもしれないませんが……今は無理ですわね」

「そう、残念。私はこれでも真剣なつもりなんですけど、伝わらないものね」

「当然だ、あんなだけの事をしたんだ。表面上に誠意を見せても伝わるはずがない」

僕はキーリの言葉に続けて言う。

「あら、あなたも信用してないの？」

「いや、そんなことはない。だが馬鹿な真似はするなよ。僕が黙ってないからな」

「分かっているわ。あなたには信じてもらえてるみたいだし」

キーリは肩を竦め、身を固くしているティアちゃんに視線を向ける。

「ねえ、ティアも信じてくれるかしら？ 私は今まで、あな

たのことだけは一度も傷つかなかったでしょう？」

「そうだけど……ティアの大事な人には、いっぱいひどいことをしたの」

その返事を聞いたキーリは、僕たち全員を見回し、呆れ混じりの笑みを零す。

「——あなたたちは皆、自分のことより他人の心配をしているのね」

「他人ではなく、家族ですわ。家族ですから、心配するんです」

リーザさんがキーリの言葉を訂正した。

「仲間意識が強いよね。羨ましいわ。私も頼めば、その輪に加えてくれるのかしら」

「……あなたが本当に、心からそれを望んでいるのなら、考えてあげますわ」

キーリを睨みつけながらも、リーザさんは条件付きで肯定の返事をする。

「お人好しなこと。せつかくだからその言葉に甘えたいところだけど、私には無理でしょうね。私はあまりに、あなたたちとは違うも

の。大事に育てていたティアですら、私から離れていった」

僕はキーリの正体を知っているの、その言葉に対して何かを言おうとすると、キーリは溜息を吐きながら、再びティアちゃんへ視線を向けた。

「実を言うと、結構シヨックだったのよ？　ずっと私のこと

を信じて、従ってくれていたあなたが、たった数日で心変わりするなんて思ってたわ

「あ……」

ティアちゃんは何かに気付いた様子で目を見開く。

「ティア……キーリのこと、傷つけたの？」

「ふふ——そうね、それなりに寂しかったわね。今思えば……あなたに角を与えたのは、少しでも私に近い存在が欲しいと思ったからかもしれない」

自嘲気味に笑って、キーリは肩を竦める。その言葉は本音だ。ティアちゃんに角を与えた本当の理由は違うが、自分に近い存在が欲しいというのは無意識に思っていたはずだ。

「あ、あの……」

するとそれまで黙っていたイリスさんが、声を上げる。

「あなたは確か——イリスさんだったわね。何かしら？」

「さっきの言い方だと……キーリちゃんも、昔のティアちゃんみたいに自分のことをドラゴンだって思ってるの？」

「キーリちゃん!？」

イリスさんからの呼称に戸惑いを浮かべるキーリだったが、すぐに感情を押し隠して、言葉を続ける。

「……ミッドガルの保護を求めている以上、さすがに自分をドラゴンだとは言わないわ。けど、あなたたちと違うのも事実。私が何者なのかは、彼に聞いてくれない？」

キーリはそう言って悠を示す。

「モノノベに？　何で？」

きよとんとした顔で、イリスさんは首を傾げる。

「ミッドガルを去る時、彼にお願いしたのよ。」私が何者か、決め

てくれない”——つて」

そういえば原作でもそんなことを言っていたと思ひ出す。

「キーリ、お前は……」

「その様子だと、まだ答えは貰えないみたいね。まあいいわ——  
—私はいつまでも、待つてるから」

キーリは残念そうに呟き、肩を竦める。

「……どういうこと？」

煙けむに巻かれたような表情で、イリスさんは悠とキーリを交互に見つめた。

「あくまで彼女は、本当のことを話すつもりがないのでしょうか」

リーザさんが苛いらだ立たしげに言う。

しかし、キーリは回りくどい言い方をしているだけで、本当のことは言っている。

「そうだ、あなたは私をどう思う？」

すると、キーリは僕の方に視線を向けて話しかけてきた。

「……想像にお任せする」

「あら、つれないわね」

ここで僕が人間だと言っても、彼女はそれを認めようとはしない。ならば好意を抱いている悠が直接言うことで自分が何者かを向き合おうとするだろう。

あと少しで目的地に着くようで、たくさんの人間の”気”を感じていた。



お兄ちゃん

ゴオオオオオオオオオオオオオオオ——……。……。

凄まじい轟音が辺りに満ちている。それは湖の水が数十メートル下の川に流れ落ちる音。

「エルリアの大瀑布か。初めてみるが、すごいな」

僕の呟きは轟音に掻き消されて、誰にも届かない。

原作のイラストには描かれていないため、この目で見るのは初めてだ。杖を使って見るより迫力が違う。

ここは大瀑布を一望できる展望台で、イリスさんとティアちゃんは興奮して柵の傍ではしゃいでいる。アリエラさんとレンちゃんは個人端末に内蔵されたカメラで、記念撮影をしている。

しばらく宮殿に缶詰だったというキーリは気持ち良さそうに深呼吸をされており、深月さんとリーザさんはそんな彼女を油断なく監視している。

篠宮先生は少し離れた場所で、どこかに電話をしている。

僕の隣では悠とフィリルさんが話している。彼女はももこした帽子を目深にかぶり、マフラード口元を隠している。正体がばれないように変装しているのだろう。

僕は大瀑布を見上げながらニブルの“気”を探る。近くには祭りに集まった住民の“気”しか感じなかった。

しかし、宮殿のある方角に無数の気を感じ取った。恐らくニブルの奴らだろう。悠やアリエラさんと同じくらいの“気”を放っている。

悠がニブルに所属していた部隊、スレイプニルだ。そしてもうすぐ悠を慕っていた狙撃手が来るはずだ。

その兵士は既にこの近くにいるが、住民の気が多すぎて何処にいるのかが分からない。

目を瞑り、“気”の質を探るとエルリア大瀑布の反対方向から少し高めを感じる。

悠ほどではないが、恐らく“気”を抑えているのだろう。キー

りを殺すために無断で行動しているからだ。

すると探った方向から殺気を感じた。僕は振り向くと悠とキーリ、そしてアリエラさんも同じ方向を向いていた。

(僕の出る幕はないな)

この三人がいれば大丈夫だ。原作でも協力して戦ったのだから同じ結果になるだろう。

僕はエルリア大瀑布の方を再び振り向き、自然が作り出す音を堪能した。

大瀑布を見学した後、僕たちは祭りで賑わう町中へ向かった。細い街路は歩行者天国となっており、所狭しと露店が並んでいる。どこかからパンパンと、花火や爆竹らしき音も響いていた。

篠宮先生は「今回の任務における手当の一部だ」と言っただけで……」

神々のお土産に買おうと思ひ、いろいろな屋台を回っている。

「これは全王様と神官王様で、こつちが恵さんとレイチエルさんで……」

”神界”に住む神々のためにお土産を買う。神々の世界でも給料として、金を貰っているのです、ここに戻ってくる前にエルリア公国で使える紙幣に変えたのだ。

足りない分は僕のお金で払うことにした。買ひすぎたことがばれないように杖の中にくっつか収納した。

全員分のお土産を買い終え、精緻な細工が施された髪留めやブローチが売ってある店にいた。

花の形をしたピンク色の髪留めを見つけた。

(これは八重さんに似合うな)

「これをお願いします」

僕は髪留めを買い、杖に仕舞う。八重さんにはいろいろと迷惑を掛けているのでこれぐらいのことはしようと思っていた。

八重さんの髪留めしている姿を想像すると、ドクンと心臓の音

が速くなるのが分かる。何故そうなるのかは分からないが、胸がドキドキする。

僕は店を後にすると、近くにはアリエラさんとレンちゃんがいるた。

「大島クン、顔が赤いよ?」

アリエラさんが首を傾げて話しかけてきた。

「えっ、そ、そうか?」

「ん」

僕が問い返すとレンちゃんが返事をする。

「き、気のせいじゃないかな。それより二人はお土産を買ったのか?」

話題を変えると二人は手に持った袋を見せる。

「寮の皆にあげる分は買ったよ。レンは少ないね」

「ん」

レンちゃんの荷物は少なく、片手には携帯端末を持っている。建物や風景を撮影しながら回っていたのだろう。

「そういえば、アリエラさんも顔が赤いね。何かあったの?」

「えっ!?! お、大島クンの勘違いじゃないかな」

僕が少し嫌らしい笑みを浮かべて問いかけると、アリエラさんはさらに赤くして動揺する。

照れてるアリエラさんも可愛い。原作でも悠に褒められたりすると照れるので、からか揶揄いたくなる。

すると遠くから力を感じ、振り返ると小さな爆発音が聞こえ、白い煙が上がっていた。悠もそれに気づき、僕と同じ方向を向いていた。

その先にはキーリがおり、何事もと驚いた通行人たちがこちらに押し寄せて来た。僕たちと分断するつもりで仕掛けてきたのだろう。悠はニブルと戦うためにキーリの居る場所に向かった。

「大島クン、レンをお願い」

「分かった。レンちゃん、あそこで待とうか」

「ん!」

レンちゃんは頷き、アリエラさんは悠の後を追いかけた。僕はレンちゃんの手を握り、人混みを避けた。

僕たちは階段に座り込み、レンちゃんはアリエラさんが向かった方を向いていた。

「大丈夫、あの先には悠も居るからそんなに心配しなくてもいいよ」

「ん」

レンちゃんは安心した表情で頷き、僕たちは買ったお土産を見せ合いっこしてアリエラさんの帰りを待っていた。



キーリと合流し、ニブルの兵士と戦ったが、相手はスレイプニルに所属していた頃に俺を慕っていた狙撃手——ジャン・オルテンシアだった。

ジャンは常人以上に優れた視力で、キーリの渦炎界ムスベルヘイムをすり抜け、俺たちを追い詰めた。

しかし、アリエラのお陰でジャンを捕まえることができた。

彼女は小さいころから武道の経験があるようで、本人は「ちよつと」やっていたと言うが、そんなレベルではなかった。

アリエラはジャンを拘束し、俺は彼に近づいた。

「ジャン、久しぶりだな」

「……隊長、お久しぶりです」

ジャンは頭を微かに持ち上げ、むすつとした声で答える。

「もう俺はスレイプニルの一員じゃないんだから、隊長つていうのはおかしくないか？」

「いえ、隊長は隊長ですから」

苦笑する俺に、ジャンは頑かたくなに「隊長」と繰り返した。

「まあ、そこまで言うなら好きにすればいい。それより、他のスレ

イプニルはどうした？ どうしてジャン一人だけで仕掛けてきたんだ？」

俺は一番気になっていることを問いかけた。本気でキーリを仕留めるつもりなら、隊員全員で攻撃するだろうが、ジャン一人で仕掛けてきた。

「他の者は、いません。これはオレの独断専行……命令違反の行動ですので」

「命令違反？ どういうことだ？ ジャンたちはキーリの暗殺を命じられているんじゃないのか？」

昨日、ロキ少佐から連絡があり、「こちらで対処する」と言ってきた。それはスレイプニルを動かすという意味ではなかったのだろうか。

「昨日まではそうでしたが——急に命令が変わったんです。スレイプニルは監視と、問題が発生した場合の事後処理のみに徹しろ……と」

どうやら今回、作戦実行を担当する奴が他にいるようだ。

「……オレは、奴と隊長を戦わせたくなかった。だから、その前にオレがキーリを始末しようと思ったんです。一応、勝てる見込みはありました。……なのに、どうして邪魔するんですか！ その女は、人類の敵に等しいテロリストなんですよ！」

アリエラに拘束されながらも、ジャンは緑色の瞳でキーリを睨む。

「ミッドガルがキーリを保護すると決めた——理由はそれだけだ。というか、何で俺とそいつを、命令違反を犯してまで戦わせたくなかったんだ？」

「……殺されると、思ったからです」

ジャンは俺から目を逸らし、躊躇ためらいがちに答えた。

「……誰が？」

「——隊長が」

それは俺にとって、衝撃的な言葉だった。

スレイプニルのメンバーは誰よりも俺の実力を知っている。

知っているからこそ、俺を隊長と認めてくれたのだ。

「他の者はどうか知りませんが、オレは今でも隊長を尊敬しています。こんなところで死んで欲しくありません。だから——」

そんなジャンが、俺の身を案じている。そいつの方が俺より強いと言っている。

やはり……彼なのか。

キーリは殺されかけたという、俺に似た雰囲気の大男。

「そいつの特徴は？」

乾いた声で問いかける。

「全身を装甲服で包んだ、得体の知れない男です。この国へ向かう時にロキ少佐がいきなり連れて来て——一緒にキーリを襲撃したのですが、ロキ少佐の命令しか聞かない彼とは現場で連携が取れず、彼女を取り逃がす結果となりました」

忌々しそうにキーリを見ながら答えるジャン。

「そいつの、名前は？」

俺は唾を呑み込み、最後の確認を取った。

「——フレイズマル。ロキ少佐は、奴のことをそう呼んでいました」

ジャンは奴の名前を言い、アリエラに拘束を解くように頼んだ。

ジャンは最後まで俺の手でキーリを殺すように言って、暗い路地へと消えて行った。

それから俺たちは深月たちの元へ戻った。その途中、アリエラは今度会ったらジャンの本当の名前を聞くように言われた。



「レンちゃん、あそこに猫のグッズが売ってあるぞ。見に行こうとか」

「んー」

僕たちはアリエラさんが戻ってくるまで、近くの屋台を回っていた。

エルリア名物の饅頭まんじゅうを買って食べたり、髪飾りやアクセサリーを見たりして楽しんでた。

最初はレンちゃんも不安がっていたが、今では僕の手を握って楽しんでる。

猫のグッズがいっぱい売っている屋台に行くと、レンちゃんが目を輝かせていた。

原作通り、レンちゃんは招き猫を集めるのが趣味で、どれを買うおうか迷っている。

彼女は僕や悠を少し警戒していて、携帯端末でしか会話をしたことがないので、これを機会に親睦を深めようと思っていた。

屋台の中には射的があり、お菓子を数個当ててレンちゃんにあげると嬉しそうに微笑んだ。

とりあえず普段から話しやすい感じを出すのは成功したが、携帯端末を使って意思表示をしているので、ここからは普通に会話できるようにもつと仲良くするしかない。

するとレンちゃんは僕の袖を引っ張り、猫の絵柄があるグラスを指差した。

「あれが欲しいのかい？」

「ん」

レンちゃんは頷き、僕はポケットにある紙幣を取り出し、店員に渡した。

「すみません、これをお願いします」

店員からグラスを受け取り、レンちゃんに渡した。するとレンちゃんは満遍の笑みを浮かべる。

よつぽど猫が好きなようだ。屋台を後にして元の場所へ歩いていると、レンちゃんが僕の手を引っ張った。

「ん？ どうしたの？」

僕は少し腰を下ろすと、レンちゃんが近づいてきて、僕の小さ

な声で呟いた。

「あ、ありがとう……亮……お兄ちゃん」

僕は驚きそうになった。原作では彼女の心を開くのには悠が苦勞していたが、こうも簡単に話しかけてくれるとは思わなかった。

もしかすれば、レンちゃんの中で徐々に心を開いてくれたのかもしれない。こういうところは原作とは違ってくるのかもしれない。

「……………どういたしまして」

笑顔で応じると、レンちゃんは微笑んでこくと頷いた。

それからアリエラさんも戻ってきて、僕たちは深月さんたちと合流した。

移動中、アリエラさんからどうやって仲良くなったのか聞かれ、これまでのことを話した。彼女は納得し、レンちゃんがお兄ちゃんが欲しかったことを教えてくれた。

それから僕はレンちゃんのお兄ちゃんとなり、少し話す仲間になった。

レンちゃんを見ていると、妹の冬美を思い出す。あいつには何もしてやれなかった。そんな後悔が残るが、一緒に遊んだことや喧嘩したことを思い出していた。



## 魂送祭

襲撃を受けた僕たちはとりあえず現場を離れ、王宮に戻った。予定よりは少し早い、夜からエルリア城で”魂送祭”の開催式典に出席するため、夕方までには帰ってくる予定だったのだ。

町はもう大賑わいだっただが、葬儀としての”魂送祭”が実際に始まるのは、陽が沈んでからのようだ。

僕たちはしばし部屋で体を休めた後、式典の場に相応しい服装へ着替え、エルリア城に向かった。今回はリムジンでの移動だ。

皆、昨夜の晩餐会と同様に煌びやかなドレス姿で、車内はとても華やいで見えた。

既に大勢の人達が列を成している城壁の正門を通り過ぎ、リムジンは関係者専用と思しき西門から城の敷地へと入った。

「わあ……」

テイアちゃんが窓に貼りつき、感嘆の声を漏らす。

城の尖塔は美しくライトアップされ、荘厳で幻想的な雰囲気にも包まれていた。

王宮も立派だったが、ここは本当に別世界という感じがする。ファンタジーの世界に迷いこんでしまったみたいだ。

パーティーにはいろんな世界で何十回も出席したことがあり、あまり感動や緊張はしていない。

それより僕はパーティーを邪魔する者が現れることを気にしている。悠も警戒しているようだ。

悠の元上官であるロキ・ヨツンハイム少佐が送り込んだ刺客、フレイズマルがパーティーの最中に現れる。

フレイズマルについては悠とキーリに任せるが、問題はそれ以上の敵だ。

今回は原作通りにするつもりはない。何だか嫌な予感がし、奴を仕留めるつもりでいる。

「皆様、こちらへ。特別席にご案内いたしますので」

ヘレンさんに導かれ、僕たちは城内へと入る。石造りの城内

は、はつきり言つて寒い。

だが階段を上り、大きな扉の中に通されると、少し空気が暖かくなった。

人のざわめきが聞こえてくる。そこは一階の広いホールを見下ろすことができる観覧用のテラスだった。

ホールの一番奥には巨大な肖像画が揚げられ、その下には花に包まれた棺ひつぎが安置されている。

「お爺様……」

フィリルさんが肖像画と棺を見ながら、小さく呟いた。

あれがアルバート王か……。

白い口髭くちひげを蓄え、鋭い眼光を絵の中から向けてくる老人は、いかにも意志が強そうに思える。この人が”D”の人権運動を起こし、世界を変えた人間だ。

ホールが一杯になると、フィリルさんの父であるアルフレッドさんが登場し、挨拶を述べる。

式典は原作通りに、厳かな雰囲気が始まった。まず長い黙祷もくとうが捧げられ、ざわついた城内が、しんと静まり返る。

フィリルさんも真剣な表情で目を閉じていた。きっと心の中で祖父への想いおもを念じているのだろう。魂は存在し、天国や地獄でも下界の様子が見れるので、伝わるはずだ。

僕も黙祷を捧げ、アルバート王に感謝する。

(悠たちに居場所を作ってくれて、ありがとう)

黙祷が終わると、少し控えめだったホールの照明が明るくなり、脇に控えていた楽団が和やかな音楽を奏で始める。

ホールは見る間にパーティー会場へ様変わりし、ダンスを行う人々も現れる。

城内には他の会場もあるらしく、案内に従って密集していた人々は散って行った。

切り替えの早く、これがこの国なりの死者への手向けであることは、既に知っている。

王の棺を前にして舞い踊る人々の姿は、どこか切なくもあつ

た。

「——見ていただけじゃ、つまらないわね。ねえ、私たちも踊りに行かない？」

テラスからホールを眺めていたキーリが僕たちに言う。

「あまり目立つことは避けるべきかと思いますが……あなたは狙われているんですよ？」

けれど深月さんは難しい表情を浮かべた。

「大丈夫よ。王族もいる城内は警戒厳重で、なおかつ人目も多い。こんなところで襲ってくるほど、敵も馬鹿じやないでしょ」

キーリは樂觀的にそう言うのと、悠の手を掴む。

「さ、私と踊りましょう」

「お、おい!？」

悠は引つ張つて観覧席を出ようとするキーリ。

「あーっ！ モノノベを連れて行かないですよ！」

「ティアもユウと踊るの！」

イリスさんとティアちゃんが悠とキーリを追って行く。

「……仕方ありません。リーザさん、私たちも行きましょう」

「彼女から目を離すわけにはいきませんからね」

深月さんとリーザさんも溜息ためいきを吐いて、歩き出した。

「レン、ボクたちも行こっか。美味しい料理もたくさんありそうだし」

「ん、亮お兄ちゃんも一緒」

「ああ、行こうか」

レンちゃんに手を引かれ、アリエラさんと後に続く。

「……私はここで見てるね」

だがファイリルさんは篠宮先生やヘレンさんと共に、観覧席に残った。

ファイリルさんがエルリア公国の姫であり、「D」でもあることを知る者は、この会場に少なからずいるだろう。彼女がパーティーに出で騒ぎになれば、ミッドガルが迎えとして「D」を派遣したことも公おおやけになってしまう。それを考えた上での行動に違いない。

一階のホールに足を踏み入れ、料理が並ぶテーブルの方へ歩いた。

どれも美味しく、僕たちは楽しんでた。悠はキーリと踊り、イリスさんと深月さん、ティアちゃんは不機嫌そうに眺めていた。

悠はキーリに夢中で嫉妬しているようだ。

食事をしながら三人の様子を見ていたが、僕は会場にいる人達に目を向ける。

実は会場内にこの世界の神がおり、神として仕事の他にこの世界で会社を経営しており、さつきから”神の気”を感じていた。

僕は食事を終わらせ、近くにいた二人の大男に近づいた。

一人は口髭を生やし、茶髪をポニーテールにしている。もう一人は黒髪をオールバックにしている。

間違いない。自然の神々だ。

「やあ、久しぶりだな」

「っ!? 亮様!?!」

僕が声を掛けると、二人は驚いて僕の方を振り向いく。

ポニーテールにしている大男は第十二世界の”森の神”

ジャック・ローランド。この世界でも五本の指に入る財団の会長でもある。

オールバックに髪を整えている大男は同じくこの世界の”海の神” 香坂源次。この世界では石油王と呼ばれている。

「何故亮様がここに?」

源次が僕に問いかけてくる。

「ちよつと事情があつてね。僕たち”世界神”が忙しそうにしてるのに、自然の神々は随分と楽をしているようだね」

嫌らしく笑うと二人はびくつとする。

「い、いや、これは……その……」

「なんてね、冗談だよ。……で? 最近仕事はどうだ?」

僕がそう言うと、二人は安心した表情で息を吐く。二人は僕が怖いのだろうか……。

「まあ、ぼちぼちです。源次先輩はどうですか?」

「オレも同じだ。そういえば最近、空間の歪みが少なくなったと聞きますが、本当なんですか？」

源次は僕に問いかけ、それに答えた。

「ああ、神官様が原因を調べているみたいだけど、まだ分かってないようだ」

「そうですか……嫌な予感がしますね」

「僕もそんな気がするんだ。まあ、今は楽しもうか」

そう言いつて僕たちは食事をしながら雑談をした。そうしていると、他の神々も近づいてきた。

「亮様、お久しぶりです」

赤いドレスを着た女性は“空の神”セレナ・デフスキー。ヨーロッパの貿易会社で社長をしている神である。

「亮様が来てるとは思っても見なかったっす」

少しチャライ神は“陸の神”ボリス・ユキムラ。日本人とロシア人のハーフで、アジアを拠点に企業を立ち上げた代表取締役の社長である。

まだ会場には一杯人がいるのでそこまで目立ってはいないようだ。

雑談をしていると、二つの“氣”が王宮に向かって来るのを感じた。

一人はニブルのフレイズマルだろう。もう一つの“氣”は人間ではない。

自然の神々も察知したようで、僕たちは警戒しながら会場に目を向ける。



イリスたちと踊り終えた後、キーリを見つけ、誰もいない庭園へ向かい、再びキーリと踊る。

俺はキーリにフレイズマルについて話し、彼女も自分の正体を明かした。

自分が”黒”のヴリトラから作られた存在であること、そのことを亮が知っていることも話してくれた。

俺はキーリを人間と決めた。フレイズマルから受け継いだ能力でキーリを殺しかけたからだ。

これ以上聞き出すのは無理だと判断した俺は、冷たい風が吹く庭園からホールに戻ろうと、彼女を促す。

しかし、何かが近づいてくるのを俺たちは感じる。冴え冴えとした月の光が降り注ぐ庭園に現れる、大柄なシルエット。

「こんな場所で襲ってくる馬鹿はいないと言ったけど、あれは間違いだつたみたいだわ」

キーリが苦笑を浮かべて呟く。

闇に紛れる黒いフード付きのコートを纏まとった男が、花壇を踏み潰し、距離を詰めてくる。フードの下からは装甲服の硬質な輝きが見えていた。間違いない、こいつは――。

「――フレイズマル」

俺はそいつを呼び表す名を呟く。

返答はない。俺の言葉が聞こえたのかすら、分からない。

「キーリ、下がったろ。俺がお前を殺せるなら、きつと奴もお前を殺せる。だからどんな状況になっても、戦おうとはするな」

「分かったわ。援護も要らないのね？」

「ああ、俺を助けようとする行動が致命的な隙になる。自分の身だけ守ってくれ」

俺はキーリの問いに答えると、前へと足を踏み出した。

対甲兵器――エンリル。

俺は右手に上位元素ダークマターを生成し、彼と戦うための武器に変換する。

ネイガルに比べて銃身が長く、銃口部分が不自然なほど大きい。これは放つ銃弾に特殊な振動を付加する遺失兵器ロストウェポン。ニブルに技術供与したものの、機構が複雑すぎて量産化は断念された代物だ。

エンリルから放たれた振動弾は、相手がどんな強固な装甲に身を包んでいようと内部に衝撃を伝導させる。装甲服を着た彼には恐らくスタンガンであるネイガルは通用しないため、このエンリルに頼るしかない。

直接傷を負わせる武器ではないので、殺傷力は低めだ。対物ライフルや架空武装を用いるよりは、致命傷を負わせてしまう可能性は低いだろう。

「……………」

フレイズマルは俺が武器を手にしたのを見ても、歩調を変えない。

コートの内側に両腕を隠しているのが、かなり厄介だ。攻撃手段と間合いが分からない。

こういう場合、相手にイニシアチブを取らせるのは非常に危険だ。こちらから仕掛けて、相手の行動選択を狭めなければ。

集中し、無意識の底に沈む”悪竜フェアニルを呼び起こす。

知覚が拡大し、全てが手に取るように分か——。

「っ!？」

眼前に、死があった。

それは、月光を浴びて輝く鋭い切っ先。俺の眉間を狙い、既に放たれていたナイフ。

反射的にエンリルを振り上げ、銃身でナイフを弾く。

コートの内側から完全なノーモーションでナイフを投げたのだろうが、全く予測できなかった。

そしてほんの一瞬ナイフに注意を向けた間に、彼の姿は視界から消えている。

「っ!？」

背筋に走る悪寒。視界の右端に、銀色の輝きが過ぎった。

右方を見ると、そこには黒い銃を手にしたフレイズマルの姿。

深い風穴が——死の闇を孕はらんだ銃口が俺を見つめている。

火花と共に、放たれる銃弾。

右手のエンリルで防御しようと試みるが間に合わず、右の手首

を貫通する。だがそれでわずかに軌道を逸らした銃弾は、俺の耳を通り過ぎた。

焼け付くような熱さと激痛が右手から脳に襲い掛かる。

「くそっ！」

俺は右腕を振るって吹き出す血をフレイズマルの顔に浴びせた。フードから覗く白銀の装甲が俺の血を斑まだらに染める。

視界を遮ることができたのか、彼の動きが一瞬だけ停滞した。その隙を見逃さず、俺はエンリルを左手に持ち替え、弾切れになるまで連続で撃ち放つ。

硬質な撃突音が響き、コートが千切れ飛ぶ。

フレイズマルは一発目を右腕の装甲で弾いた後、残りの弾丸は全て体捌たひさばきで躲かわし切った。

何とか再び距離を稼いだ俺は、エンリルの弾倉に物質変換で弾を補充し、銃口を彼に向ける。

フレイズマルは破けたコートの内側から、右腕をだらんと垂らしていた。持っていた銃も取り落としている。振動弾を受けた以上、しばらくは痺しびれて使い物にならないはずだ。

手痛い一撃を喰らってしまったが、これで条件は互角。

そう考えたのも束つかの間——フレイズマルは右腕を持ち上げ、感覚を確かめるように手を握っては広げた。

（嘘だろ——もう、動かせるのか？）

俺は信じられず、奥歯を噛み締める。

恐らくは最善の角度とタイミングで弾丸を弾き、衝撃を最小限に抑えたのだろう。

互角どころではなく、俺は一方的に追い詰められたことになる。右手から流れ落ちる血が、体温を奪っていった。もはや右手には痛み以上の感覚がない。

（これほど、差があるなんてな）

かつて俺が魅入られた男は、想定していた以上の力を有していた。

加えて俺の方は、以前キーリと戦った時よりも感覚が鈍い気が



する。いつもなら意識的に痛みをシャットアウトすることも可能なのだが、今はそれもできない。

俺はフレイズマル以上の”人殺し”になることを忌避し、自らの”悪竜”<sup>ファフェニール</sup>を無意識に抑え込んでしまっているのかもしれないかった。

恐らく俺は、これ以上自分が何か別のモノになってしまおうのが嫌なのだろう。

深月が知る”俺”から、遠ざかってしまうのが許せないのだろう。

「全く、いつまで手間取ってるんだ？」

すると俺の後ろから声が聞こえた。振り向くと亮が歩いてきた。

「あいつがニブルの刺客か」

そう言って亮は俺に近づき、負傷した右腕を手を当てると、徐々に傷が塞がってきた。

「お前がこんな傷を負うなんてな……傷は治したし、体力も回復させたからこれで大丈夫だ」

「ああ、ありがとう」

俺は亮にお礼を言い、フレイズマルに向けてエンリルを構える。

フレイズマルはコンバットナイフを構える。

——ブワアア……。

その時、空がざわめいた。

突風が庭園を吹き抜け、白い花びらが舞い上がる。

「とうとう、気付かれたみたいね……」

キーリが呟く声が視界の外から聞こえて来た。

フレイズマルは空を見上げる。そしていったい何を見たのか——後ろへと大きく跳躍すると、俺たちに背を向けて城壁の方へと走り去った。

「な……」

彼からずっと視線を逸らさずにいた俺は、ワイヤーらしきもの

を使って城壁を乗り越える彼を呆然と見つめる。

エンリルをベルトに挟み、俺は強風が吹きすさぶ夜空を仰いだ。

金色の光が、エルリア公国の空を横切る。

「イエロー・ドラゴン——」黄のフレスベルグが来たんだ」

「なっ!？」

亮は空を見上げながら眩き、俺は驚いた。まさかドラゴンが来るとは思ってもみなかった。

「やっと本当の敵が現れたようね」

静かなキーリの声が聞こえ、俺たちは視線を下ろす。

キーリは淡い笑みを浮かべながら俺に近づいてくる。

夜空に金色の軌道を刻みながら、フレスベルグはエルリア公国上空を旋回していた。しかも徐々に高度を下げているようだ。

「まさか降りてくるのか?」

「その通りよ、フレスベルグは私の位置を探りながら降下してきているの」

キーリはそう言いながら服の袖を捲り上げ、右腕を夜空に晒す。

そこには昨日と同様、包帯が巻かれていた。

「スレイプニルもフレイズマルも、私にとってはそれほど脅威じゃないわ。たとえ私を殺してしまえるほどの力があっても、逃げればいいだけの話だし。でも……アレは違う」

キーリは話しながら包帯を解いていく。

「一度気付かれてしまえば、絶対に逃げ切れない。だから私はミッドガルに——いえ、あなたたちに助けを求めたの」

包帯の隙間から黄色い光が漏れ出した。

それはキーリの竜紋りゅうもんを放つ輝き。

「ねえ、悠、亮。私を——守ってくれるかしら?」

彼女は変色した竜紋を見せながら、俺たちに問いかけた。

## ”黄”のフレスベルグ

「守るしか——ないだろうが！」

「悠、急ぐぞ！ 奴が近づくと前に倒す！」

「ああ！」

悠はキーリの手を掴み、僕たちはホールに駆け戻る。ホール内は少しざわついていた。楽団の音楽も鳴り止んでいる。

視線を巡らせ深月さんの姿を見つけた僕たちは、彼女の元へキーリを連れて行く。

「深月さん！」

「……に、兄さん！ その腕、どうしたんですか!？」

深月さんが血に塗れた悠の右手を見て、裏返った声を上げた。何事かと少し離れた場所にいたイリスさん、リーザさん、アリエラさん、レンちゃん、ティアちゃんも集まってくる。

「ああ、傷は大丈夫だ。もう治ってる。それより、これを見る」

悠がそう言っつて、黄色く変色したキーリの竜紋りゆうもんを深月さんたちに見せる。

「な——」

彼女らは絶句して、キーリの腕を凝視した。

「フレスベルグが来た」

そして僕が短く現状を告げると、深月さんの表情に理解の色が宿る。

「そういう——ことだったんですね」

素早く状況を認識した深月さんは、キーリを睨みつける。

「ええ、そういうことよ」

涼しい顔で頷くキーリ。

「言いたいことはありますが……今は後回しにします」

苦々しい声で呟き、深月さんは最初に僕たちが案内された二階の観覧用テラスへ視線を向ける。

「篠宮先生、警戒レベルA！ タイプ・イエローです！ 私たちは迎撃に向かうので、避難誘導をお願いします！」

周りに混乱が広がるのを防ぐため、深月さんはミッドガルで使われている警戒警報の言い方で篠宮先生に状況を伝えた。

「——了解した」

テラスで頷く篠宮先生の隣で、フィリルさんが身を乗り出す。

「私も、すぐに行くから!」

「いえ、フィリルさんはこのホールに留<sup>とど</sup>まってください! 誰かがキーリさんと、この場所にいる人々を守らなければいけません」

「つ……分かった」

フィリルさんが応じるのを見てから、深月さんは僕たちへと呼びかける。

「皆さん——行きますよ。まずは屋外に出て、対象を目視で確認します」

キーリはホールに残して、僕たちは走り出す。

自然の神々はフレスベルグの”気”に気付いていたので僕がエルリア城周辺に結界を張ることと、僕たちの準備が整えば解除するように指示を出していた。

そのため、今は空を飛んで結界を作っている。いくらドラゴンでも神が作りだした力にはどうしようもない。

「え? え? いったい何が起きてるの?」

ただイリスさんはまだ状況を上手<sup>うま</sup>く把握できてないらしく、一緒に走りながらも戸惑いの声を上げた。

「ねえ、ユウ。そういうことって、どういうことなの?」

ティアちゃんも急な展開に付いてこれていないらしい。

「竜紋が変色していたのを見たぞ? フレスベルグがキーリを狙っているんだ。キーリのドラゴン化を防ぐために——これからフレスベルグを迎撃する」

「ええっ!? 今から戦うの? ドレス汚しちゃったらどうしよう……」

悠の言葉を聞き、自分の着た白いドレスを見下ろすイリスさん。心配の方向がズレているが、そういったことを気にする余裕があるので大丈夫だ。

しかし、一際思いつめた顔をしている少女もいる。

「——フレスベルグ」

アリエラさんは絞り出すように来襲したドラゴンの名を呟き、ぎりつと奥歯を噛み締める。

原作通りで彼女はフレスベルグを憎んでいるようだ。あまり覚えではないが、小さい頃にフレスベルグと遭遇して、周りにいた人々の具現化した魂を喰うところを見たらしい。

たぶんそのことで奴を憎んでいるのだろう。

渡り廊下へ続く扉を潜り、そのまま再び庭園に飛び出す。

天を仰ぐと、ちょうど上空を横切った金色の鳥の姿が瞳に映る。先ほどよりその体軀は大きく見える。

かなり高度を下げて来ているようだが、自然の神々が作った結界のお陰で奴は近づけないでいる。

「あれがフレスベルグ——ミッドガルの領海付近を通過することはよくありましたが、こんなに近くで見るのは初めてですわ」

リーザさんが夜空を舞う巨鳥を見上げて呟く。

ちなみに結界は人間たちの目には見えないため、自然の神々が作っていることには気付いていない。

「フレスベルグは、あらゆる攻撃が通用しなかったことで有名なドラゴンです。けれど悲観することはありません。私たちはこれまで試されたことのないような——強力な攻撃方法を有しています」

深月さんはそう言って、僕たちに指示を出す。

「リーザさんはレンさんと協力して最大威力の陽電子砲を、私はイリスさんに上位元素ダークマターを借りて特大の反物質弾を撃ち込みます。兄さんもテイアさんに協力してもらって、対竜兵装による迎撃、亮さんも気功波での全力攻撃をお願いします！アリエラさんは状況に応じて防壁を展開してください！」

「了解！」

僕たちは声を合わせて応じ、互いにある程度の距離を取って空を見上げた。

「射抜く神槍！」

リーザさんが槍の架空武装を生成し、レンちゃんがそれを巨大化させる。

「五閃の神弓！」  
フリュウナグ

深月さんはイリスさんの上位元素を借りて、通常の数倍はある弓型の架空武装を生成した。

「ティア、頼む」

悠が一度に生成できる上位元素生成量は非常に少なく、巨大な対竜兵装を作り出すには誰かに上位元素を貸してもらおう必要がある。

「うん！ ティアの力、全部ユウにあげるの」

ティアちゃんは頷き、悠の左手を握る。

悠は右手を掲げ、旧文明の兵器を具現する。

「特殊火炮——境界を焼く蒼炎！」

ティアちゃんから流れ込む上位元素によつて、天を衝く巨砲が構築された。

「さてとやるか、……ハアツ!!」

僕は”気”を上げて超サイヤ人になる。すると僕の”気”に気付いた神々が結界を解除した。

僕はかめはめ波の準備をし、フレスベルグに狙いを付ける。

「——牙の盾」  
アイギス

アリエラさんは手甲の形をした架空武装を装備し、フレスベルグからの攻撃に備えた。

「まだ距離はあります。攻撃はもう少し引き付けてからにしてください。フレスベルグの目的がキーリさんならば、必ずこの城に降下してくるはずですよ」

深月さんは準備の整った僕たちに呼びかけ、架空武装に上位元素の矢を番える。

フレスベルグは旋回する範囲を徐々に狭めていた。キーリの位置を絞り込みながら、降下しているのだろう。

その姿が近づいたことは”気”を探っているので分かるが、視界ではいまいち距離感が掴めない。

その理由は輪郭が揺らいでいるからだ。

大まかに鳥の形をしているものの、フレスベルグには確固たる形がなかった。

フレスベルグはキラキラと輝く金色の粒子を体に纏まとっていた。

奴は自身の生命エネルギー、すなわち”気”を体に纏まとい、あらゆる攻撃を無効化しているのだ。今までニブルが奴を倒そうとして、あらゆる手を使ってきたが、その能力によって傷一つ付けることができなかった。

さらに奴は人の”気”を具現化させることができ、それが魂となる。そうすることで数多くの人間を殺しているのだ。

しかし、奴の能力にも弱点がある。それは同じ”気”を干渉させることで無効化にできる。故に皆の攻撃は通用しなくても、僕がいればダメージを負わせることができる。

「動きが変わりました——皆さん、構えて！」

キーリがエルリア城にいることを確認したようで、旋回していたフレスベルグは降下軌道に移った。真っ直ぐ、僕たちの方へと急降下してくる金色の巨鳥。

「各攻撃が有効かを確認するため、波状攻撃で迎え撃ちます。リーザさん、第一射を——」

「分かりましたわ——閃光よ、貫けっ！」

射抜く神槍グングニルの穂先から、眩まばゆい閃光が放たれる。レンちゃんの上位元素を加えて極大化した陽電子の輝きは、一瞬にしてフレスベルグに到達した。

——しかし。

「なっ……」

陽電子砲は直撃したが、フレスベルグは閃光を裂いて降下し続けた。能力で攻撃を無効化したのだ。

速度は減衰せず、それどころかさらに加速している。

深月さんはその様子を見て、五閃ブリューナグの神弓の弦を引き絞った。

「次は私が！——終つひの矢——空ラスト・クオークへ落ちる星——」

ミッドガルの切り札でもある反物質の矢を放つ深月さん。

一直線に向かってきているフレスベルグは回避行動を取ることな

く、正面から深月さんの反物質弾を受け止める。

攻撃を無効化したようで、爆発は起こらなかった。

深月さんの矢はフレスベルグの体表で弾け、そのまま霧散する。

「そんな……何で——」

呆然とする深月さんだったが、すぐに我に返り、悠に顔を向ける。

「兄さん、撃ってください！」

「了解！」

悠は頷き、ティアちゃんの手を強く握る。

彼女から流れ込む上位元素を砲弾のエネルギーへと変換し、境界を焼く蒼炎を放つ。

「——発射!!」

蒼い光球状が、夜天へと昇る。フレスベルグに直撃し、弾けた光が、フレスベルグの体を呑み込んだ。

あまりの輝きに、空からは月も星も消え失せる。

——ズアツ!

けれど、光の中から羽音が響き、夜空に生まれた蒼い太陽を突き破り、金色の鳥が僕たちに迫る。

リーザさんたちの攻撃と同様、全く効いてない。

「つ……亮、頼む！」

「ああ、任せろ！」

僕は両手首を合わせ、体の前方から腰にもっていく。”氣”を集中させ、青い光球状を作り出す。

「かゝめゝはゝめゝ波ー!!」

僕は悟空のかめはめ波をフレスベルグに向けて放つ。

かめはめ波はフレスベルグの体に命中し、爆発が起こる。フレスベルグはダメージを負ったようで体勢が乱れ、体に纏っていた”氣”が消える。

「効いたっ！」

悠が声を上げ、深月さんを見る。深月さんも険しい表情が微かに緩む。

「どうやら、亮さんの気功波が一番有効なようですね。亮さん、第二



射の準備をお願いします。皆さんは亮さんの気功波の後に攻撃してください」

「分かりましたわ。レンさん、お願いします！」

「んー」

深月さんは皆に指示を出し、リーザさんは再び架空武装を生成する。

「ティア、もう一度頼む！」

「分かったの！」

悠もティアちゃんから上位元素を借りて、対竜兵装を生成する。

「ミツキちゃん！ あたしたちも！」

「はいー」

深月さんも先ほどの反物質弾を生成し始める。

僕は片手をフレズベルグに向け、手のひらに”気”を集中させる。やはりフレズベルグも他のドラゴンと同様に簡単には倒れないようだ。

超サイヤ人のまま、ベジータのビックバン・アタックの構えをする。フレズベルグは体勢を立て直し、高度を下げてこちらに向かってくる。

僕の後には皆が攻撃すれば、フレズベルグは倒せる。……そう思った。

「っ!？」

するとフレズベルグの近くが少し歪んだ。しかも歪みは僕は見たことがある。

(空間の歪みだ?!?)

ここ最近、歪みが発生することはほとんど無かったが、このタイミングで出てくるとは思わなかった。

もし生き物が空間の歪みに触れれば、我を失い、超人的な力を手に入れてしまうことになる。歪みは今のどころ僕にしか見えてないよう、皆は気付いていない。

(まずい、このままじゃ奴がパワーアップしてしまう!)

僕は手を翳かぎしたまま、歪みに向かって”神の気”を注ぐが、しかし



の結界によって、僕たちに届くことはなかった。

「———ありがとう、助かった」

悠はアリエラさんにお礼を言うが、彼女はフレスベルグに突っ込んだ場所を険しい表情で睨んでいた。

城の周囲は舞い上がった土煙で、ほとんど何も見えない。しかしフレスベルグはホールに突っ込んだのは間違いない。

「っ……とにかくキーリさんのところへ！ 彼女を守りながら応戦します！」

深月さんが指示を出し、舞空術で空に舞い上がる。ホールに通じる扉は崩壊してしまったので、フレスベルグが突っ込んだ場所から城内へ戻る。

三階分まで吹き抜けになった広大なホールは、悲鳴と混乱の音が響き渡っていた。

濛々とした粉塵ふんじんと金色の粒子に満たされたホール中央に、フレスベルグの姿が薄らうすと見える。

最初に現れた時より大きくなっていて、体に包む光の粒子が拡散しているの、降下時よりも小さく見える。

フレスベルグの近くにはキーリがおり、フィリルさんも架空武装を構えている。

「皆さん、あらゆる方法を試して、攻撃してください！」

深月さんの指示で悠たちは架空武装を構え、僕も”気”を集中する。

クアアアアアアア———！

だが僕たちが攻撃に移るより早く、フレスベルグは甲高い鳴き声と共に翼を広げた。金色の粒子がフレスベルグを中心に放たれ、こちらに押し寄せてくる。

「エアー・ウォール！」

フィリルさんがとっさに風の結界を張るが、粒子は空気の壁を無視して僕たちを呑み込んだ。

「くっ!？」

粒子に包まれた瞬間、体が動かなくなる。意識はあるが、肉体が命

令に従わない。

奴の能力で精神を肉体に封じ込めているのだ。歪みに触れる前の奴なら超サイヤ人でも簡単に弾き返すことができるが、パワーアップしたことで能力も上がっている。超サイヤ人状態でも体が言うことを聞かない。

「あなたたちならフレスベルグに勝てると思ったけど——やつぱり難しかったみたいね」

諦観の混じった声が聞こえ、キーリは言葉を続ける。

「それとも、私を守るためじゃ本気にはなれなかった？」

口を動かさないので答えられない。

僕が油断していなければこんなことにはならず済んだ。

もちろん悠もユグドラシルから兵器のデータを送ってもらえば奴を倒せたが、それをすればまた記憶が失うことになる。悠もこの手は使わずに倒したかったようだ。

「まあ——でも、お礼は言っておくわ。守ってくれて、ありがとう。それと今日は楽しかった。こんな楽しい日はたぶん、人生で二度目よ」

キーリはそう言ってフレスベルグに近づき、奴の正面に立つ。フレスベルグも立ち止まり、キーリを見下ろす。

「さあ——好きにしろさ」

竜紋が輝く右腕を掲げ、彼女はその時を待つ。

ゆっくりと身を屈め、キーリの手に嘴を近づけるフレスベルグ。

(まづい！)

原作を読んでいるため、僕は知っていた。この先に起きる事。だから僕はどうしても今回は変えたかった。

フレスベルグはキーリの竜紋もじつと見つめた後、興味を失くしたように彼女から離れる。

「え……っ」

掠れた声を漏らすキーリ。

スウツと、キーリの竜紋が光を失う。

やはり原作通りだ。そしてこの先の展開も同じだ。

呆然とする彼女の脇を通り過ぎ、フレスベルグはフィリルさんに視線を固定した。

(しまった、やはり原作通りか……)

フレスベルグは身を屈めてフィリルさんに顔を近づける。

辺りに満ちる金色の粒子が一層濃くなる。

そしてその粒子がアルバート王の棺ひつぎを覆った時、ぼうつと人間のシルエットが浮かび上がる。

悠たちは驚いている。

フレスベルグは魂を具現化する能力、エーテルウィンド霊顕粒子という力を使う。

さらに自身の魂を体に纏うことによつて攻撃を無力化し、生物の魂を肉体に封じ込めることができる。

それは未確認媒介粒子エーテルを生成する。ある学者がそう主張したようだ。

しかし、アルバート王の棺に現れたのは本当の魂ではない。あれはフレスベルグ自身が生成して作っているものだ。

曖昧あいまいに揺らめく金色のシルエットは、フィリルを間近から見つめるフレスベルグの前へ滑るよう移動し、粒子で形作られた腕を振り上げた。

——パンツ。

フレスベルグの嘴くちばしが微かに揺らぎ、人影の腕を構成していた粒子が反動で霧散する。

どうやらアルバート王の死体には微かに”気”が残っていたようで、本能的にフィリルさんを守ったようだ。

——クエエエエエ!

フレスベルグはアルバート王の魂おほと思しき粒子の塊に向け、その嘴を開いた。

強い風が巻き起こる。ホール内に満ちていた金色の粒子が逆巻き、風に束ねられ、フレスベルグの口に吸い込まれる。

それはアルバート王の姿を形作った粒子も例外ではなかった。

ザア——と砂の城が崩れるように、粒子で具現化していたアルバート王は輪郭を失う。

魂を喰らう魔鳥、まさに伝説通り、フレスベルグは魂を喰っていた。フィリルさんの目の前で、削られていくアルバート王の魂。

しかし声すら出せない状況で、それを阻める者はいない。

消える寸前、アルバート王はフィリルさんの方を向いた気がした。だがその表情はもはや読み取ることもできず——彼の全ては失われた。

魂を喰って満足したのか、フレスベルグはフィリルさんから離れ、僕たちに背を向ける。

金色の翼を広げ、宙に舞い上がる。

そしてそのまま、ホールの壁に空いた大穴から空へと飛び立っていった。

辺りに満ちていた金色の粒子が薄くなり、体が動くようになる。

「そう——<sup>まが</sup>紛い者の私じゃ、ドラゴンにはなれないのね」

キーリはフレスベルグの去った大穴を見上げながら、乾いた笑い声を上げる。

「ふふっ……あははははっ！ 残念ね、お母様。私はあなたが思ってた以上の役立たずみたい」

そして——自由を取り戻したフィリルさんは、地面に崩れ落ちて泣いていた。

「……っく、……う……ああつ……あああああつ！」

アルバート王の魂が立っていた場所で<sup>うずくま</sup>蹲り、悲痛な声を上げるフィリルさん。

他の者は、何も言えない。

僕はフィリルさんが悲しまないように奴を倒そうとしていたが、僕の中に油断があった。それがこの状況を招いてしまった。

そしてこれからが大変だ。原作通りならまだ戦いは終わっていない。

## 噴水の銅像

しばらくするとエルリア公国の警察が集まってきて、辺りにはわか  
に騒がしくなる。

状況説明は篠宮先生とアルフレッドさんたちが行ってくれること  
になり、戦いで消耗していた僕たちは、ヘレンさんの運転する車で王  
宮に帰された。

車内でもフィリルさんは泣き続け、リーザさんはそんな彼女を胸に  
抱き、頭を優しく撫でていた。

アリエラさんは向かいの席からフィリルさんを沈痛な表情で見つ  
め、キーリは毒気の抜いた表情でぼうつと窓の外を眺めている。

責任を感じている様子で俯うつむいているのは深月さんだ。イリスさん、  
ティアちゃん、レンちゃんは、そんな皆を心配そうに眺めている。

僕は油断……、いや、甘く見ていた。本来フレスベルグ相手なら超  
サイヤ人でも勝てる相手だ。実際に奴の能力を無効化してダメージ  
を負わせることができた。

しかし僕はあの時に全力で攻撃するべきだった。あの時空間の歪  
みが現れたのは想定外だ。もし超サイヤ人の第三形態に変身してい  
れば、奴を一撃で倒せた。

原作を読んでいるため、こうなる事は最初から分かっていた。ミツ  
ドガルに来てから僕は少し変わった。

悠たちを八重さんと同じ仲間だと信頼したため、僕はフレスベルグ  
をなんとかしてでも倒したかった。

だから少しはやる気を出したが、真剣にやるべきだった。そんな後  
悔が残る。

王宮に着くと、フィリルさんはリーザさんに「……もう大丈夫、あ  
りがと」と告げ、自分の部屋に行ってしまう。

「大丈夫なわけ……ないじゃないですか」

リーザさんは悔しげな表情で呟くが、しばらく一人にするべきと考  
えたのか、無理に付いていこうとはしなかった。

「じゃなね……」

僕たちとは別の場所に部屋があるキーリも、力のない声で言っ歩き去る。

彼女の事情は原作で知っているが、今はキーリよりフィリルさんに申し訳がない。

「……………」

深月さんは言いたいことがある顔でキーリの背中を睨んでいたが、結局無言で自分の部屋に入ってしまった。

「おやすみ、モノノベ、オオシマ」

イリスさんも力のない笑みを浮かべて挨拶し、自室の扉を開ける。

「ああ、おやすみ」

「おやすみ……………」

悠と僕は彼女に挨拶を返してから部屋に戻り、椅子に腰掛ける。

杖を取り出して紅茶が入ったコップを作り、一口で飲み干す。

(後悔しても仕方ない。今のフレスベルグについて調べるか)

僕はコップをテーブルに置き、杖の先端にある丸い球体に顔を近づける。球体は画面となり、フレスベルグを映し出す。

フレスベルグはエルリア公国上空を飛び続けていた。僕はその理由を知っている。そしてもうすぐ、奴とまた戦かう。

今までの超サイヤ人では勝てない。今のフレスベルグを倒すには超サイヤ人2になる必要がある。奴を倒すため今度こそ油断しない。

僕は杖を仕舞い、部屋を出る。

◇

アリエラからフィリルが外に居ると教えてもらい、俺は噴水に向かった。

フィリルが心配でベッドに横になっても寝付けなかった。俺はフィリルを探しに部屋を出るとアリエラがフィリルの居場所を教えてくださいました。



それからアリエラと少し話し、彼女の大切な人たちがフレスベルグに魂を具現化されて喰われたことを知った。

彼女も俺が想像もできないほど、大変な人生を歩んできたようだ。アリエラが行っても傷の舐め合いになるだけだと言い、俺が傍そばにいれば良いと判断したようで、丁度呼びに行こうとしていたようだ。

俺は階段を降り、中庭に出られそうな扉を探してフィリルの元へ向かう。

扉を開けるとぐつと冷え込んだ夜の風が吹き込み、俺は体を震わせた。こんな場所に長くいたら風邪を引いてしまう。

とにかくフィリルを屋内に連れ戻そうと、俺は噴水の方へ向かった。

噴水の中央には、鳥と戯れる少女の像が飾られている。今は深夜のためか、水は流れていない。

フィリルは噴水の脇にしゃがみこんで肩を震わせていた。

足音を立てて近づいても反応がないため、俺はとりあえずパーティー用に着ていたスーツの上着を脱ぎ、フィリルの肩に被かぶせる。

「ここは寒い、中に入ろう」

「……物部くん？」

フィリルが顔を上げ、赤い目で俺を見つめた。

「大丈夫——じゃないのは分かっている。でも、このままじゃ風邪を引く」

俺はフィリルの肩に手を置いて言うが、彼女は首を横に振る。

「別に、いい」

「フィリル……」

どうするべきか迷っていると、フィリルは小さな声で問いかけて来た。

「噴水の銅像——これ、何に見える？」

「え？ 女の子が鳥と遊んでる像に見えるが……」

戸惑いつつも、俺は見たままを答える。

「あのね……これ、私なんだって。私がミッドガルに行つてから、お爺じいさま様が作らせたみたいなの。ふふ、あんまり似てないよね」

掠<sup>かす</sup>れた声で答え、ぎこちなく笑うフィリル。

「いや——言われてみれば、そう見えなくもないな。今よりだいぶ幼いが、何となく分かる気がする」

「そう？ 私にはやっぱり、別人に思えるけど。ただ、お爺様には私がこんな風に見えていたのかなって……それが、気になる」

じつと——祖父の目から見た自分を、フィリルは眺めていた。

「けど——もう、確かめられない。質問することも、お別れを言うことも、お礼を伝えることも——何も、できない。最後の最後まで、守られていただけだった」

強い後悔が滲<sup>にじ</sup>む声で、フィリルはまた顔を伏せる。

「守られるのは、別に悪いことじゃないだろ」

俺は彼女の肩へ置いた手に力を込めて言う。

「え……？」

「孫を守ろうとすることに、きつと理由も打算もない。ただ、守りたいから守ったんだと思う。それを最後まで——魂になっても貫き通したんだ。俺がお祖父<sup>じい</sup>さんの立場だったら、きつと悔いはない」  
フィリルは俺の顔をじつと見た後、小さく息を吐いた。白く染まった息が風に流され消えていく。

彼女は噴水の銅像を再び目を向けて呟く。

「それ、私の意思は関係ないって……言ってる気がする」

「まあ、極論を言うと思うけど。でも、守るっていうのはある意味、一方的な行動だ。相手の意思がなくても成立する」

俺が言葉を返すと、フィリルは悲しい表情を浮かべる。

「そんなの、寂しすぎる。守られる側の気持ち……考えてない」  
「かもな。だけど、そういう守り方しかできない人間もいるんだよ」

俺は胸の奥にちくりとした痛みを感じながら言う。

たぶん、俺もそうだ。深月とイリスを守るため、俺は大きな代償を支払った。

それは——相手のことしか考えない自己満足。その結果、俺は深月を偽り、イリスを傷つけた。

あれほど亮から注意されていたことを無視して俺は力を得た。

「物部くんは、ひどいね。お爺様が満足してるっていうのなら……私が泣くのは、私のためでしかなくなっちゃう。泣き止むしかないよ」

フィリルは噴水の銅像を見たまま言う。

「いや、別に自分のために泣くのも悪いことじゃない。ただ——  
——もつと暖かい場所だな」

俺はできるだけ優しい口調で屋内に戻るように促す。

「……分かった。もう少し、暖かい場所で泣くね」

こくと頷くフィリルだったが、彼女はそのまま俺に抱き付いてきた。

「なっ!?!　ファイ、フィリル?」

「物部くんの腕の中なら、たぶん……泣いていいぐらいには暖かいよね?」

俺の腰にぎゅっと手を回し、胸に額を押し付けてくるフィリル。

突然のことに驚き、触れる柔らかな膨らみに動揺するが、彼女が肩を震わせているのを見て落ち着きを取り戻す。

「——ああ」

俺は肯定の言葉を返し、フィリルの頭に手を置いた。

さらさらとした髪を指で梳くと、彼女は静かに涙を流し続ける。

この前、俺はシャルロット学園長に頭を撫でられた時、照れ臭さと心地よさを感じ——自分が認められ、受け入れられているような気持ちを抱いた。亮も一緒に撫でられたので、少なからずそう同じことを思っているだろう。

だからフィリルにも安心して欲しくて、優しく頭を撫で続ける。

上着をフィリルに貸しているので肩が寒いが、彼女を抱いているので体の前面は暖かい。

そのまま夜風に吹かれつつ、俺は彼女のか細い嗚咽を聞く。

しばらくして泣き声が途切れると、フィリルはごしごしと目元を擦って顔を上げた。

「物部くん……鼻の頭、赤い」

「まあ——かなり冷え込んでるからな。フィリルの方は目が赤いぞ」

彼女の頭に手を置いたまま表情を緩ませる。

「お揃い？」

「かもな」

「ふふ——」

フィリルは小さく笑い、俺から離れた。

「ありがと、少し落ち着いた。物部くんが風邪引くと悪いから、そろそろ戻る」

冷たい指で俺の手を握り、宮殿の方へ歩き出すフィリル。

だが——。

「っ……」

彼女は突然顔を顰め、左肩の辺りを押さえた。

「どうした？」

「分からない。何だか、急に熱くなって——」

ドレスの肩口をずらし、フィリルは異変を感じた場所を確認する。胸元が見えそうになり、俺は慌てるが——彼女の「えっ……」という声で逸らしかけた視線を戻した。

左肩にあったのはフィリルの竜紋。その端が、微かに黄色く変色している。

「まさか……」

俺は目にしたものが信じられず、掠れた声で呻いた。

そしてそこに、昏い声が夜空に乗って流れてくる。

「まあ、そんなことだろうと思っていたわ」

中庭の剪定された生垣の陰から、キーリが姿を現した。

「いつからそこに……」

「ついさつきよ。いちやついてるあなたたちが窓から見えたから、気になって様子を見に来たの」

「別にいちやついていたわけじゃない」

「そこに拘ってる場合じゃないだろ？」

すると後ろから亮が息を漏らしてやって来る。

「今大事なのは、フィリルさんの変色した竜紋だ。色からしてフレズベルグだろうな」

呆れた口調で指摘してくるが、それは分かっている。ただ、少し冷静になる時間が欲しかったのだ。

「これは、フィリルが見初められたってことなのか？」

俺は一部が変色しているフィリルの竜紋を見ながら、キーリと亮に問いかける。

「ええ、そうなるわね。彼の言う通り、フレズベルグで間違いないわ。たぶんフレズベルグは私のような紛い物じゃなく、本来の適合を見つけたのよ。さつき、あの場ね」

フィリルを見ながらキーリは答える。

「紛い物っていうのは、どういう意味だ？ キーリもフレズベルグに見初められていたんじゃないのか？」

「私の竜紋はフレズベルグの波長に合うよう、強引に作り変えられていただけよ」

「作り変えられていたって、まさか——」

そんなことが出来るのはキーリの創造主であるヴリトラだけだ。エルリア城でキーリから自分の正体を明かしてくれた。

どうやら亮も知っていたが、それをフィリルの前で口にすることはできなかったため、俺は途中で言葉を切る。

「そう、たぶんあなたの想像している通り。だから私は紛い物。あらゆる意味で、ね」

皮肉げな口調でキーリは言う。

「キーリ……」

「そんな目で私を見ないで。今、同情するべきは、フレズベルグのつがいを選ばれた彼女の方でしょ？」

俺が僅かに抱いた憐れみを敏感したキーリは、苛立った様子でフィリルを示した。

「つがい……か。じゃあ、フレズベルグはまた——」

「彼女の竜紋が完全に変色したら、もう一度やってくるでしょうね。ティアの時には、十時間ほどで竜紋の変色が完了して、その後

にバジリスクが移動を開始したわ。恐らく竜紋の変色が終わらないと、その子をつがいにはできないんだと思う」

「十時間……」

既に変色は進行しているのだから、タイムリミットはそれよりも短いだろう。

先ほどの邂逅かいこうで見初めたのだとしたら、最悪あと六時間ほどしかない。

フィリルに興味を示しながらも飛び去ったのは、まだ彼女の準備が整っていなかったからなのか。

そういえばイリスの時も、彼女が最初に変調を訴えてからリヴァイアサンの進撃まで間があった。

「私が、フレスベルグに——」

フィリルは呆然と自分の竜紋を見つめていた。

「っ!? しまった!?!」

すると亮が大声を出して明後日の方向を見る。

「ニブルに見られてた……」

「なっ……」

どうやら亮は人の気配を遠くからでも察知できるようで、ニブルの気配を感じ取ったようだ。

「フレスベルグが来る前にフィリルさんが殺されてしまう。すぐに篠宮先生と深月さんに報告しよう。後のことはそれからだ」

「ああ、わかった」

俺たちは急いで屋内に戻り、篠宮先生と深月に事情を話した。

## データの誘い

屋内に戻った後、僕たちは深月さんに事情を説明した。まず最初に篠宮先生の元を訪ねたが、まだ戻ってきていないようだったので、深月さんの部屋に行った。

事情を説明した後、深月さんは携帯端末で篠宮先生に連絡を取った。

さらにフレスベルグを倒すため、『魂を具現化する未知の媒介粒子』という論文の執筆者、宮沢健也とコンタクトを取るつもりだ。

宮沢健也という人間は知っている。原作でも出てきた人物である。会うのは一ヶ月以上先になるだろう。

今はそれよりフレスベルグとニブルを倒すことだ。先の話をするより、今をどうするかを考えるべきだ。

自室に戻り、杖を取り出してフレスベルグの様子を見ていた。さつきよりも高度を下げて飛行している。

今のフレスベルグは原作以上に厄介な相手だ。空間の歪みに触れたことで戦闘力が倍増している。これは超サイヤ人2になる必要がある。

今度こそ奴を倒す。悟空のように油断はしない。

しかし、問題が一つある。それは悠のことだ。

悠はまた、ユグドラシルと取引をして、兵器のデータを手に入れるつもりだ。

僕は反対したが、アイツは頭を下げてお願いしてきた。記憶を取り戻す方法があったのを思い出したので、今回だけ許可した。

本当はさせたくなかったが、頭を下げてまでお願いされたことと、ミッドガルに来てから悠たちとの間に友情が芽生えたせいで、最後まで反対することはできなかった。

アイツは原作通りで真っ直ぐな性格と無自覚な女誑たらしだ。イリスさんたちが好きになる理由が分かる。

しかし、この先何があるか分からない。原作通りにいかない場合がある。その時は僕が皆を守らねばならない。

僕は作戦会議があるまで、瞑想めいそうをする。

◇

「そんな……フィリルちゃんか——」

俺はイリスの部屋に行き、フィリルの竜紋りゅうもんが変色したことと、深月が作戦を練ってくれていることを伝える。紅潮しているイリスの顔が、見る間に青ざめる。

「竜紋が完全に変色した時、きつとまたフレスベルグはやって来る。深月は頑張ってくれるだろうが、それまでに何か対策を立てるのは難しいと思う」

推測を述べると、イリスが焦った表情を浮かべる。

「じゃ、じゃあ、どうするの？ まさか、あたしの時みたいにならないよね？ モノノベとミツキちゃんが喧嘩するなんて、もうやだよ？」

二ヶ月以上も前、イリスがリヴァイアサンに見初められた時、俺と深月はイリスをどうするか喧嘩したことがある。

最終的に深月は俺の意見を受け入れてくれた。イリスは俺たちがまた喧嘩することを心配している。

「心配するな。俺にはまだ手があることを、ちゃんと伝えてある。

それに亮にも何かあるみたいだ。他に方法があるうちは、深月も最悪の選択は選ばないさ」

俺がそう答えると、イリスの表情に不安な色が浮かぶ。

「モノノベ……何を、するつもりなの？」

震える声で問いかけてくるイリス。恐らくある程度、予想は付いているのだろう。

この状況で俺が取り得る選択肢は、他にないからだ。

「もう一度、ユグドラシルの力を借りる」

「だ、ダメだよ！ そんなことしたらまた——」



イリスはさつきよりもひどく焦った様子で、俺の腕を掴んだ。

「分かってる。けど、俺にできるのはもうそれだけだ。亮の力でも倒せるか分からない。俺は、ファイリルを見捨てられない」

事実、亮の変身でも奴には敵わなかった。アイツが神でも、力には限界があると知った。たとえ奥の手を使っても、ユグドラシルと取引をしてマルドゥークの兵器を手に入れば勝つ可能性が高くなる。

「そ、それはあたしだって同じ気持ちだけど……でも、そこまでしてもフレスベルグを倒せるとは限らないじゃない」

だが俺は首を横に振る。ユグドラシルと契約した時に聞いた言葉をイリスに言う。

「ユグドラシルは言ったんだ。自分以外のドラゴンを殲滅しろって。なら俺の脳へ転送しようとしたデータの中に、フレスベルグに通用する兵器がある可能性がある」

ユグドラシルから送られてきた力の情報——旧文明の兵器データはあまりに膨大で、俺はその転送を途中で止めてしまっている。さらに体への負担も掛かるため、亮が体力を回復してもらっている。

対竜兵装マルドゥークも、一部の装備を不完全な状態で物質化している有様だ。さらなるダウンロードでマルドゥークのデータを補完すれば、突破口が開けるかもしれない。

「でも、でもっ……」

イリスの目に涙が溢れる。

「お、おい——」

ぼろぼろと涙を零し始めた彼女を見て、俺は慌てる。

「ミツキちゃんとの思い出を忘れちゃったこと、すごく苦しんでいたのに。それなのに……これ以上、忘れるなんてダメだよ。モノノベは忘れるんじゃない……思い出さなきゃいけないのに……」

彼女はただ、俺のことだけを想って泣いていた。

俺が記憶を失くすことで自身が傷つく可能性を二の次にして——

「っ……」

これ以上、イリスの泣き顔を見ていられず、俺は彼女を抱きしめる。

甘いイリスの香りに鼓動が速まり、薄いパジャマ越しに感じる彼女の温かさに強い愛おしさを覚えた。

「モノノベ……う？」

「——ごめんな」

彼女の頭を撫でながら、俺は謝る。

記憶のことを話して重荷を背負わせてしまったこと。深月に対して引け目を感じさせてしまったこと。彼女の気持ちに真正面から応えられなかったこと。こんなにも心配してくれているのに、止めるわけにはいかないこと——。

それら全てに対する謝罪を、その一言に込めた。

「もう、決めちゃってるんだね」

涙声でイリスが言う。

「ああ」

イリスの言葉に俺は答える。

「モノノベは……色んなことを忘れて、今のモノノベじゃなくなっちゃうんだよね？」

「たぶん——そうなる」

今度は何を失うのか、予想も付かない。この前のように、忘れたことすら気付かないかもしれない。

だが——今の俺でなくなるのは、間違いなかった。

「じゃあ……教えて」

俺の服をぎゅっと掴んで、イリスが掠れた声を絞り出す。

「え？」

俺の服が、涙で濡れていくのを感じた。

「モノノベが忘れたくない大切な思い出、あたしに教えて。もし忘れちゃっても大丈夫のように、あたしが憶えておくから！」

顔を上げ、涙を零し、細い腕を震わせながら、イリスは叫ぶ。俺の瞳を強い眼差しで見つめ、訴える。

「イリスが、憶える？」

胸が大きく高鳴った。抑えていた感情が、心の奥底で揺れる。

「うん、あたしは……絶対に今のモノノベを忘れない。モノノベ

が忘れてたくないことも忘れない。だって——一番大好きな人のことだもん！」

心臓が止まってしまうかと思うほど、胸が苦しくなった。愛おしさが溢れ、俺はイリスの体を強く抱き寄せる。

「っ……………ありがとう、イリス」

それ以外に、彼女へ返せる言葉は思い付かなかった。

それから俺は時間の許す限り、イリスに思い出を語った。

◇

深月さんは王宮に戻ってきた篠宮先生の部屋にキーリも含めた全員を招集し、固い声で現状を伝えた。

フィリルさんの竜紋が八割以上が黄色く染まっており、これまでの進行速度から計算すると完全変色まであと二時間ほどだ。

そして深月は作戦を立案できなかったことに謝る。

「どうやら”エーテルウィンド霊頭粒子”の仮説を唱えた宮沢健也とコンタクトを取ったが空振りに終わったようだ。」

深月さんは謝るとき、ちらりとレンちゃんの方を見た。

原作を知っているため、レンちゃんと宮沢健也の関係は知っている。深月さんはそのことについて何も言及せず、話を続ける。

深月さんの表情にはレンちゃんを気遣うような色が垣間見える。

「現在の段階では、フレスベルグに対する有効な作戦は立案できていません。ですが……………」

深月は僕と悠の方を縫すがるように見つめる。

分かっている——と俺は頷き返し、皆の前に歩み出る。

「俺と亮には、奥の手がある。だから諦めないで欲しい。フィリルを救える可能性は、まだゼロじゃない」

「奥の手？ それはいったい何ですか？」

リーザさんが当然の質問を向けてくる。

「僕の場合は更にパワーアップできることだ。フレスベルグの時は倒せるって油断があつたが、次は必ず倒してみせる」

僕がそう言うと、皆の表情が緩くなる。

「そうですか……ではモノノベ・ユウはどんなものですか?」

続けてリーザさんは悠に視線を向けて問いかける。

しかし悠には、それに答える言葉を持っていない。

原作通りなら、ユグドラシルへのアクセスはまだ行っていない。データのダウンロードは記憶や感情を塗り潰してしまうほどの負担が脳と体に掛かる。ゆえにデータの内容が分からないリスクがあるうと、ダウンロードは戦闘直前で行うしかないのだ。

「すまない。今は——言えないんだ」

「なっ……ふざけているんですか?」

リーザさんが一步前に出て強い口調で悠に言う。

「ふざけてない。俺は本気だ。頼む、信じてくれ。絶対に亮と共に奴を倒してみせる——イリスを救った時のように」

「っ……」

リーザさんは悠の言葉に、息を呑んだ。

「頼む……」

悠は頭を下げる。部屋にはしばらく沈黙が落ちた。

ユグドラシルとの取引を深月さんたちに知られるわけにはいかない。そうなればミッドガルの司令官である篠宮先生がどんな判断をするかは不明だ。最悪、身柄を拘束されることも考えられる。

「僕からも頼む。深くは聞かないで欲しい」

フレスベルグを倒すためには悠の力も必要だ。僕も頭を下げてください。

「亮……」

悠は少し顔を上げて僕の方を見る。

やがてリーザさんが嘆息する。

「……………はあ、仕方ありませんわね。それを言われたら、何も言い返せませんわ。あなたたちの力がなければ、リヴァイアサンを倒せなかったのは事実ですから。根拠はなくとも、あなたたちの実績を信

頼いたしましょう」

僕たちは頭を上げると、リーザさんがやれやれという表情を浮かべていた。

他の皆からも異論は上がらない。

「では——第二次フレスベルグ迎撃戦は、兄さんと亮さんを中心として行います。兄さん、作戦内容に関しての指示を出してください」

深月さんは竜伐隊りゅうばつたいの隊長として話を進める。

「まずは、周囲にできるだけ被害の出ない場所で戦いたい。どこか適した場所はあるか?」

「……それなら、大瀑布だいはくふの付近がいいと思う。あの辺りは民家がないし、夜明け前の今なら誰もいないはず」

フィリルさんが小さく手を挙げ、意見を言う。竜紋の変色が分かった時とは違い、表面上は落ち着いて見える。

彼女の言葉を聞いて、深月さんは頷く。

「では迎撃場所は大瀑布周辺にしましょう。篠宮先生、作戦地域の封鎖手続きをお願いしてもいいでしょうか?」

「分かった。任せておけ」

篠宮先生は深月さんの言葉に頷き、即座にどこかへ電話を掛ける。

悠はその様子を見ながら、僕は一つ留意しなければならぬことを告げる。

「気になるのはニブルの動きだな。奴らはキーリの監視を命じられてるそうだが、変色をした竜紋を見せたのは中庭だ。近くに気配を感じたから見られてる可能性がある」

僕の発言を聞いたキーリは「そうね、甘く見ていい相手じゃないのは確かだわ」と相槌あいづちを打つ。

「では、どうしますか?」

表情を固くして問いかける深月さん。

「作戦開始までに、俺がニブルからの脅威を排除する」

悠は簡潔に答え、フィリルさんの方へ顔を向ける。

「そういうわけでフィリル——これから俺とデートしてくれる

か？」

「え……？」

悠の突然の誘いに彼女はぽかんとした表情を浮かべる。

そういえば原作でもそうだった。たぶん悠にとって、女の子をデートに誘うのは生まれて初めてだろう。

## VS フレイズマル

夜明け前の町を、俺はフィリルと二人で歩く。

空気はとても冷たいが、防寒対策はしっかりしてきたので問題ない。フィリルは暖かそうなコートともこもこした生地かふの帽子を被かつている。俺は動きやすさを優先し、厚手のジャケットとマフラーという格好だ。

目的地は大瀑布だいばくふを一望できる広場——フレスベルグとの決戦を行う地点。

俺たちは王宮から徒歩で、大瀑布へと向かっていた。

「……仕掛けてくるかな」

フィリルが白い息を吐き出し、抑えた声で問いかけてくる。

「竜紋りゅうもん変色のことを知っているなら……間違はなく。相手もフレスベルグが来る前に、ケリを付けたいだろうからな」

俺はポケットに手を入れ、雲の多い空を見上げながら答える。神である亮は人の気配を広範囲に察知できるため、アイツが見られていたと言うなら本当だろう。

「もし何も起こらなかつたら、これ……ただのデートだね」

フィリルが俺の方を見て呟く。

「それならそれで、悪くないだろ」

「……うん、そうかも」

くすりと小さく笑い、頷くフィリル。

「ねえ、物部くん？」

「何だ？」

「デートなら……手、繋つなぐ」

フィリルはコートのポケットから手を入れ、そんなことを言い出す。

「え？ い、いや、それは……」

俺は焦りながら周囲を見回した。

自身もニブルに狙われているキーリだけは王宮に居残りだが、他の皆は離れた場所から俺たちを監視している。戦闘になった場合は俺

の援護はせず、ファイリルを遠距離から守るよう頼んであった。  
その中には当然イリスもいるので、彼女の目を気にしてしまう。

「ダメ？」

けれどファイリルの瞳が心細そうに揺れているのを見て、俺は諦めの息を吐く。

「ダメじゃないが——手、冷えるぞ？」

「じゃ、こうする」

ファイリルは俺のポケットに手を突っ込み、指を絡める。

「お、おい」

「……これなら、あつたかい」

微かに頬を染め、彼女は笑う。

「う……」

どうしようもなく照れ臭くなって、俺は視線を逸らした。

もし亮にバレたらからかうだろう。

東の山稜さんりょうが淡く白み始め、星の光が薄くなってきている。

「私、男の子とデートするの、初めて」

「まあ、お姫様だもん。俺も初めてだ」

もしかしたら覚えてないだけで、小さい頃にしたのかもしれない。

「そうなんだ……一緒だね。そんな私を誘ったんだから、物部く

んは……王子様になる覚悟、あるんだよね？」

首を傾げ、悪戯いたずらつぽく笑いながらファイリルは俺に問いかけた。

「な——お、王子様？」

俺は予想外の言葉を聞き、動揺する。

「ないの？」

ポケットの中でぎゅつと手を握り、体を寄せてくるファイリル。柔らかな胸が腕に触れた。

「ファイ、ファイリル……」

彼女がどこまで本気か分からず、俺は戸惑う。

「これが最後かもしれないから、今だけ王子様になってくれると

……嬉しいな」

俺の肩に頭を預け、ファイリルは震える声で囁いた。



それを聞いて俺は、彼女がただ不安で、怯おびえているのだと気付く。  
「最後じゃない。俺が絶対に何とかする。だからそんな諦めたよ  
うなことを言うな」

彼女の手を握り返し、俺は強い口調で宣言した。

「うん……そうだね、ごめん。物部くんに励まされると、本当に何  
とかなる気がしてくる。でも……」

フィリルは表情を翳かげらせ、俺をじっと見つめる。

「今の物部くん、お爺様じいさまと同じ顔してる」

「同じ顔？」

俺が聞き返すと、フィリルはこくと頷く。

「守るって、決めた顔。守ってくれるって、信じられる顔。でも――

――すごく一方通行な感じがする、そんな顔」

俺の顔から目を離さず、フィリルは言葉を防いだ。

「……………」

心の内を見透かされた俺は、視線を逸らした口を嚙つかむ。

「物部くんは、私のために何をしようとしているの？」

フィリルは心配そうな表情で問いかけてくる。

「――大したことじゃない。ただ、やれることをやるだけだ」

「そう、やっぱり私の言葉は届かないんだね。お爺様の時と、同  
じ」

悲しそうに呟いたフィリルは、白い吐息を風に流す。

「……………」

再び沈黙を返した。何と言えればいいのか、分からない。

「いいよ、分かった。今は物部くんに、一方的に守ってもらう。で  
も、今日を人間のままで生き延びられたら……やり返すね」

「え？」

思いがけぬ言葉に驚き、フィリルの方を見ると、強い眼差しに射抜  
かれる。

「一方的に、やり返すから……覚悟、してて」

強気な笑みを浮かべて告げるフィリル。

冷や汗が頬を伝うが、彼女が明日のことを考えてくれるのは――

悪くない。

たとえそれが俺にとって、苦難の日々だとしても。

「ああ、お手柔らかに頼む」

フィリルの瞳を見つめながら微笑み返す。

「うん、そうする」

彼女は表情を変えぬまま、こくんと頷く。

——チリツ。

その時、首筋が微かに粟あわだ立った。

まるで針のような、鋭く細い殺気。

俺は瞬時に意識を切り替える。自我を深く沈め、代わりに無意識の怪物——俺の内に眠る”悪竜”ファフニールを呼び起こす。

殺意の線は、俺ではなくフィリルに向かって伸びていた。

対物装甲——ダマスカス09P。

ギイイイン！

フィリルの眉間を狙って放たれた弾丸を、小さな装甲板で弾き飛ばす。

「え!？」

目の前で散った火花に、驚くフィリル。

「心配ない。すぐに終わらせる」

俺はフィリルを安心させるために、優しく微笑みかけた。

「あ……う、うん」

微かに頬を染め、フィリルは頷く。

そして俺は一歩前に出て、銃弾が放たれた方向へ視線を向けた。

——ガチャン。

一つ先の角から”彼”が現れた。

コートの下に銀色の装甲服を纏まとった男——フレイズマル。フードの陰から硬質な輝きを覗かせ、彼は俺たちに近づいてくる。やはり亮の言う通り、フィリルの竜紋変色を把握していたようだ。

昨夜、俺は彼に圧倒された。けれど今は、何故なぜだろうか……負ける気がしない。

俺の中に、もう躊躇ためらいはなかった。彼を殺し、自分が変わってしまった

うことなど、どうでもいいことに思える。

それはきつと、俺がこれからとても大切なものを失おうとしているからだろう。

忘れることが怖い。どうしようもなく恐ろしい。俺の中にはまだ、恐怖の感情がこんなにも残っている。

この恐怖に——失うことに比べれば、変わることなど恐れるに値しない。

かつてないほどに、意識が鋭く澄み渡る。

背後にいるフィリルの息遣いと、彼女を包む風の流れ。複数の場所から向けられている鋭い視線。彼方かなたから微かに聞こえてくる滝の音。空高く横切った、鳥の羽音——。

第六感も含めたあらゆる感覚が拡大し、まるで世界を支配しているかのような全能感に満たされる。

すると体から力が溢あふれたように感じる。何故かは分からないが心の底から力が込み上げてくる。

何かを纏まとっているような感覚だ。

「俺がいる限り、フィリルには指一本触れさせない。向かってくるなら、殺して止める」

俺は静かに宣言した。フレイズマルは、殺気をもって俺に応える。昨夜の焼き直しのように、コートの内側からノーモーションで放たれるナイフ。

だが今の俺には、彼の行動が手に取るように予測できる。彼を凌駕りょうがする”悪竜”と込み上げてくる力が俺の体を突き動かす。

俺は身を捻ひねりつつ、飛来したナイフの柄つかを左手で掴み取る。

対甲兵器——エンリル。

そして空いた右手に対装甲兵用の銃を生成。エンリルを構えると、フレイズマルが次に動く行動が分かる。

俺は振動弾をを撃ち放つ。いつものように撃つても、見切られると感じた俺は少し軌道を晒して数発放つ。

するとフレイズマルは銃弾を掻かい潜くぐるように避けようとするが、予想外に放たれた弾道が彼の体に直撃する。

フレイズマルは膝を突き、俺を睨む。

どうやら全ての振動弾を喰らったようだ。

常人なら一発目が命中した時点で昏倒する。だが彼は何発もの銃弾を受けながらも膝を突いて踏み止まった。

何故か彼が動きが理解できる。どう攻撃すれば相手に有効なのかが手に取るように分かる。

左腕を見ると、微かに蒼い光が包み込んでいた。体を確かめるとどうやら蒼い光を纏まとっているようだ。

まるで亮が変身した状態の様な気がする。もしかしたら、”悪竜ファフニール”の力には俺の知らない秘密があるのかもしれない。

そう思っていると、フレイズマルが立ち上がり、コートの内側からナイフを取り出し俺に向けて投擲とうてきする。

それに気付き、銃を構えて引き金を引く。

銃声と同時に、耳障りな金属音が響き渡る。

銃弾と激突したナイフが、くるくると空高く舞い上がる。

続いで二射目——フレイズマルと俺の発砲音が重なる。

彼の放った弾丸を、今度は振動弾で迎撃する。弾道を合わせることなど、今の俺には造作もない。

二連続する激突音。一つ目は振動弾が弾丸を弾いた音で、二つ目はそのまま直進した振動弾が彼の銃に命中した音。

フレイズマルの持つ銃が明後日の方向に吹き飛び、伝わった振動が彼の姿勢を崩す。

俺はその隙を見逃さず、エンリルの残弾全てを至近距離から撃ち込んだ。

乾いた発砲音が何度も鳴り響く。

命中した振動弾はコートを千切り飛ばし、彼の体を大きくのけぞる。

しかし彼は再び踏み止まる。さすがにそれだけで倒すのは難しいが、ノーダメージではない。

それだけで、十分。彼は今、俺の前に命を晒していた。人殺しの”悪竜”はそよ隙を逃すことなく喰らいつき、牙を突き立てる。

対物兵装——イシユタル。

俺はエンリルを手放し、本来狙撃に用いる対物ライフルを物質変換しで作り出す。

（じゃあな、フレイズマル）

俺は胸の内でも別れを告げた。

彼の本当の名も、顔も、声も、俺は知らない。けれど魅入ってしまったほどに強かった男のことを、俺が初めて殺すことになる人間の姿を心に刻む。

俺は長大な銃身をフレイズマルの左胸に突き立て、躊躇ためらいなく引き金を引いた。

重い銃声が轟とどろき、彼の左胸の装甲が爆発するように弾け飛ぶ。だが

——ボンッ！

装甲服の内側から、蒸気のような白い煙が凄まじい勢いで吹き出した。

「くっ!?!」

視線を煙で覆われた俺は、イシユタルを手放してフレイズマルから距離を取る。もしかしたら忍ばせていた煙幕弾を撃ち抜いてしまったのかもしれない。

今の一撃には確かな手ごたえを感じていたが、俺は彼の反撃に備えて間合いを保ち、煙が晴れるのを待った。

静まり帰った黎明れいめいの町に冷たい風が吹き、フレイズマルの姿が露あらわになる。

地面に横たわり、ぴくりとも動かない。

装甲の前面は先ほどの爆発のせい、大きく内側から割れていた。

「……………」

違和感を覚え、慎重に彼に近づく。そして——俺は装甲服の中が既に空っぽなのを目をした。

「逃げた……………のか?」

俺はその光景を見て眩く。煙の中から誰かが去る気配など感じられなかった。装甲の裂け口から見ても、中から出るのは少し難しいよ

うに思える。

けれど——それ以外には考えられない。まさか最初から空っぽだったわけではないのだから。

フレイズマルから俺に悟られることなく、撤退することができてもおかしくない。深手を負わせたのは間違いないので、撃退したと考えていいはずだ。

「ふう……」

結果的にはあるが、人を殺さずに済んで微かに安堵あんどを覚えた。

あと、残る問題は——。

「スレイプニル！ お前たちがいるのは分かっている！」

気配を殺して見ているようだが、亮の察知能力のようにどこで見ているのが手に取るように分かる。

彼らの役割は監視と事後処理。だからここまでは手を出してこなかったが、フレイズマルが敗れた場合にどんな行動を指示されているかは分からない。

「見ての通り、フレイズマルは倒した！ お前たちはさつさとこれを片付けて撤退しろ！」

俺は腕でフレイズマルの装甲服を示し、言葉を続けた。

「もしお前たちもファイリルを狙うと言うなら、容赦しない。死にたい奴だけ、掛かってこい」

そう言い捨て、俺はファイリルの元へ戻る。

「物部くん。守ってくれて、ありがとう。その……カツコよかったです」

ファイリルはどこかぼうつとした顔で俺を見つめ、感謝の言葉を告げた。

「礼を言うのは、まだ早い。本番はこれからだ」

俺はそう言ってファイリルと共に、目的地である大瀑布だいはくふへの歩みを再開する。

スレイプニルが攻撃して転じることなく監視を続けた場合でも、俺は彼らを無力化するつもりでいた。

ふと体を見ると、まだ蒼い光が俺を纏っていたが、ファイリルは俺の

状態に何の疑問もない表情を浮かべていた。

どうやら俺の状態に気付いてないかもしれない。亮なら何か知ってるかもしれないと思い、戻ったら聞こうと思う。

しかし今はフレスベルグ戦に集中するため、不安要素はここで全て取り除いておかなければならない。

気を緩めることなく、足を進める。

しばらく進んでから振り向くと——フレイズマルの装甲服はなくなっており、スレイプニルの気配も消えていた。

どうやら、退いてくれたらしい。

これでやるべきことは、あと一つ。

俺の全てを懸けて——”黄”のフレスベルグを倒すことだけだ。

## V S 黄のフレズベルグ

東の山脈から太陽が顔を覗かせ、空の雲が昏い灰色から朝焼けの色に染め変えられていく。

眩い朝日は足元の影を長く伸ばし、湖から流れ落ちる大量の水を壮大に彩った。

今日も轟音を響かせるエルリアの大瀑布、少し離れた広場の中央からフレズベルグが攻めてくるのを待っていた。

ニブルからの刺客、フレイズマルを倒して合流した悠とフィリルさんと共に、ブリュンヒルデ教室の仲間が集合した。

しかし僕は驚いていた。それは悠がフレイズマルと戦闘を開始した直後のことだ。

僕は人間の”気”を探ること探ることも、実力も知ることができない。

悠から放たれる”気”は人間と同じ力を感じていた。三年間もニブルで訓練をし、今では常人以上の力を持っている。

だが、フレイズマルとの戦闘で僕は驚きを隠せなかった。悠からは、神の気を感じた。

戻ってきた悠を見ると、蒼い光を纏っており、皆は気付いていなかった。

何故悠が神の気を発しているのか今でも分からない。しかし、思い当たる節はある。

推測だが、悠の中に”悪竜”の力を持っているため、それが原因だと思っている。

原作を読んでいるため、悪竜のことは知っている。もしかすると……いや、やめておこう。今はフレズベルグを倒すことが先だ。

僕の傍には、今でも神の気を放出している悠とフィリルさん、深月さんとイリスさんがいる。

リーザさん、アリエラさん、レンちゃん、ティアちゃんの四人は僕たちを遠く囲むようにして、広場の端で配置に付いていた。

周辺道路は封鎖されているので、他に人の気配はいない。



「神の気？」

悠はフィリルさんたちに聞こえないように神の気を教えていた。

「ああ、何で君が神の気を操ることができるとかは知らないが、たぶん誰かを守りたいって思う気持ちだが、”悪竜”の力を違う方向に覚醒したのかもしれないぞ？」

僕は悠を少し安心させるため、推測している事を小声で話す。

「まあ、推測だから本当のことは知らんがな。しかし神の気が使えるってことは、神の素質が僕以上にあるかもな」

「そ、そうか……？」

嫌味を言うが、少し安心した。悠が変わってしまったのではないかと心配していた。この世界は原作とは少し違うので、予想外の展開にならずに済んだ。

「悠、もし死んだら僕の代わりに世界神にならないか？」

「い、いや、遠慮しておく。それよりもうすぐ来るかもしれないぞ？」

悠はそう言って視線を逸らす。まあ、冗談はさておき、フレスベルグの”気”を探るとすぐ近くにいた。

「あと少し、ですわね」

深月さんが変色を終えようとしているフィリルさんの竜紋りゅうもんを確認し、緊張した声で呟いた。

「そうだね」

刻一刻と迫る。悠はもうすぐユグドラシルと取引し、記憶を失う。

本当は忘れたくないと思っっているだろう。しかし悠はフィリルを守るために選択した。

記憶を取り戻す方法は知っているが、この先悠はいろんな困難を乗り越えるだろう。

「では作戦を確認します。フレスベルグを視認後、接近される前に兄さんと亮さんが攻撃。撃破し切れなかった場合は、私たちが全員で迎撃する——という段取りでいいんですよね？」

深月さんが僕たちに視線を向けて確認する。

「ああ」

「では、もう一つ。この作戦が失敗した場合は、どうしますか？」  
深月さんが悠と——広場のベンチに腰かけているフィリルさんへ問いかける。

「それは……」

悠は言葉に詰まった。今回はイリスさんの時のように、ドラゴンになるぐらいなら殺してくれと頼まれているわけではない。最悪の結末に至った場合、フィリルさんが何を望むのか——僕たちは知らない。

原作では自分で命を絶つつもりのようなのだが、この世界ではどうなるのかは知らない。

視線をフィリルさんに向けると、彼女は小さく息を吐いて答える。

「大丈夫、私は自分で決着をつけるよ。死にたくはないけど……  
都の時みたいみやくに、深月たちをずっと苦しめるのは嫌だから」

篠宮都——篠宮先生の妹で、クラーケンに見初められ、ドラゴン化した深月さんの親友。深月さんは彼女を自分の手で討った妻に、ずっと苛さいなまれていた。全てのドラゴンを倒すというのは、その償いの一つ。

そんな深月さんをずっと見て来たからこそなのだろう、フィリルさんはコートの内ポケットからコンバットナイフを取り出した。

「それは、フレイズマルの——」

どうやらニブルの刺客が持っていた武器のようだ。

それに原作通り、フィリルさんは最悪の事態を考えて、自分の手でケリをつけるつもりだ。

「さっき拾っておいたの」

フィリルさんは覚悟の光を瞳に灯してナイフを自分の体に刺す構えをする。

すると悠は、フィリルさんからナイフを取り上げた。

「そんなもの、絶対に使わせないからな」

「……うん」

フィリルはこくと首を縦に振る。

「あ——」

だがそこで彼女の顔に苦痛の色が走った。

「ファイリルちゃん、どうしたの？」

イリスさんが焦った声で問いかけると、ファイリルさんは竜紋のある肩を押さえて呻く。

僕は既に奴が近づいてくることに気付いていた。

「っ……熱い」

「み、見せてくださいー！」

深月さんが慌てて彼女の襟を広げ、肩口の竜紋を確認する。これまでは比較にならないほど竜紋が黄色く輝いている。

「竜紋が完全に変色しました。兄さん、亮さん——フレスベルグが来ますよ」

僕たちにそう報告した深月さんは、広場の端に散った皆にも手を挙げて合図を送った。

リーザさんたちは架空武装を生成し、空に視線を向ける。

「さてと、準備をするか！」

僕はまず、超サイヤ人になる。さらに力を上げ、超サイヤ人2になる。

「「「なっ!?!」」」

周囲の悠たちは驚いていた。全身からスパークが走っており、髪の毛がさらに逆立っている。

今までの変化と比べ物にならないと分かったのだろう。

「これがお前の奥の手か？」

悠が僕の姿を見て問いかけてくる。

「そうだ。奥の手じゃないが、今までの変身よりもパワーやスピードが上がってるからな。これでフレスベルグを倒せる」

僕はそう答え、空を見上げる。

「俺もやらなきゃな。イリス、頼む」

悠も曇った空を見上げ、イリスさんに手を差し出した。

悠はユグドラシルから得られるデータがどんなものかは知らないが、今までの対竜兵装と同じ規模であるなら、物質化するなら誰かの上位元素を借りる必要があると考えるだろう。

実際その通りだ。だが、今までの対竜兵装とは少し違う。僕は原作を知っているため、どんな武装なのかは知っている。イリスさんは悠の手をじっと見つめてから首を横に振る。

「モノノベ、やっぱり今回はミツキちゃんの方がいいと思う」「え?」

「ミツキちゃん、皆への指示はモノノベに上位元素を渡しながらもできるでしょ? だから、あたしと代わってくれない?」

悠の返事を聞かず、イリスさんは深月さんにそう言った。

「そんな急に――」

「お願い。きつとミツキちゃんと一緒にの方が上手くいくから!」

真剣に訴えるイリスさんを見て、深月さんは渋々と頷く。

「そこまで言うのなら……分かりました。イリスさんはフィリルさんの傍そばに付いていてください」

深月さんは悠の左手を、右手でそつと握る。

「頑張つて、モノノベ。繋いでいけば、失なくさないでしょ?」

どうやらイリスさんは、悠が少しでも深月さんのことを忘れないように役目を代わったようだ。

「イリス……」

悠は彼女の名前を呟き、上空に視線を戻す。

すると太陽がまだ山の縁にあるというのに、天頂にある雲の向こうが急に明るくなる。

「お出ましのようだな」

フレスベルグの来襲を察知した僕は空に向かって呟く。

そして悠は深月さんの上位元素を借りて、奴を屠ほぶるための遺失兵器ロストウェポンを構築する。

「マルドゥーク……念式連装砲、彼岸シを貫く方舟ア!」

ユグドラシルからデータを受け取ったようで、真っ黒な上位元素から変換されていく、旧文明の兵器。

回転可能な砲座の上に、二連装の砲塔が具現化する。これまでの兵器より小さいため、ほぼ完全な形で構築した。

この兵器は、高密度に圧縮された精神波は微量の未確認媒介粒子エーテルで

も具現化し、物理的な干渉力を得ることができる。

つまり、自らの生命エネルギーを使つて攻撃する兵器だ。しかもそれだけではない。

悠は今、神の気を操れているので、莫大な威力が出せる。

これならフレスベルグを倒せることができる。

「亮、いくぞー！」

「了解！」

金色の粒子が、ちらほら雪のように舞い始める。

悠はその粒子の根源——フレスベルグへと、己の気を打ち込む。

「——発射！」  
ファイア

「ビックバン・アタック!!」

二門の砲口と僕の気功波が同時に放たれる。

フレスベルグは歪みに触れて変色した時のように、翼を羽ばたかせて制動を掛ける。

だがフレスベルグの回避行動は間に合わず、僕たちの攻撃が全て奴に命中する。

舞い散る金色の翼。

「……効いた」

イリスさんが歓声を上げる。

しかしフレスベルグは空中で乱れた体勢を立て直し、旋回軌道に移った。

命中し、ダメージを与えられたが、まだ奴を倒せるほどではない。

悠が放つ神の気もまだ本人は使いこなせていないのだろう。軌道も僅かに逸れていた。

僕の攻撃も命中したが、それでも奴は生きている。

力尽きるまで攻撃し続けるのみだ。

僕は両手をフレスベルグに向け、悠のマルドゥークも奴を標準を合わせる。

「墜ちろっ!!」

「かくめくはくめく波!!」

僕たちは奴に攻撃する。

僕は平気だが、悠は自分の”気”を使って攻撃するのは初めてなのだろう。息切れしており、神の気を使うのにも負担が掛かっている。フレズベルグは大瀑布だいはくふの上空を高速で旋回し、僕たちの砲弾と気功波を回避する。

当たらない。手数が足りない。

着実に高度を下げてフレズベルグは近づいてくる。辺りに舞う金色の粒子もだんだん濃くなっていく。

このまま接近されれば、また粒子に包まれて身動きを封じられてしまう。

「頼む、イリスも俺に上位元素を！」

そう言っただけ悠は空いていた右手を、振り返らないまま後ろに伸ばす。

どうやら悠はもう一基の砲塔を作るつもりだ。

「わ、分かった！」

イリスさんは悠の右手をぎゅつと掴み、彼女の上位元素を借りる。

「彼岸ウツクサを貫く方舟フナ——第二砲塔！」

悠はフレズベルグに砲弾を撃ち続けながらも、その隣に二基目の念式連装砲を構築した。

僕もパワーを上げ、もう一度かめはめ波を放つ。

「波ー!!」

「発射っ!!」

僕と同時に悠は砲弾を放つ。

だがフレズベルグは器用に体を捻ひねり、攻撃を躲かわす。辺りの粒子が濃くなり、タイムリミットが迫る。

このままでは、間に合わない。

僕は奴の動きを封じるため、体中に気を高める。

「悠、僕がフレズベルグの動きを止める。その間に奴を倒してくれ！」

「分かった、ファイリル……頼むっ！」

僕は両手をフレズベルグに向け、悠はファイリルさんに上位元素を借りるように叫ぶ。

「え、で、でも……いざという時は、自分の命を——」

「後のことはどうでもいい！ 今、全力で戦えば道を開けるかもしれないんだ！ 生きたいなら——俺に力を貸してくれ！」

「っ……………うんっ」

フィリルさんは悠に近き、後ろから抱き付いてきた。

三人分の上位元素を扱うことなど普通は不可能で、体への負担が大きい。けれど、兵器の設計図という揺らぎのないフィルターを通すことで、悠はフィリルさんの上位元素を制御している。

「よし、準備はできた」

フレスベルグの動きを封じるくらいの“気”は溜めることができた。

「萬國驚天掌っ!!」

両腕を腕を突き出すと共に電撃を放射し、フレスベルグの動きが止まった。武天老師の技で、相手の自由を奪うが、人間なら感電死してしまうほどの威力だ。

しかも超サイヤ人2の状態で放っているため、威力は数百倍はある。フレスベルグは動きを封じられ、逃れることはできない。

「悠、今がチャンスだ！」

「任せろ！ 彼岸を貫く、方舟——第三砲塔おおっ!!」

悠はとつづくに処理能力の限界を迎えており、苦しそうに叫ぶ。

けれど悠は頭に耐え、三基目の念式連装砲を放つ。

「発射っ！」

六発のうち二発が直撃し、金色の巨鳥は完全にダメージを負う。

「発射、発射、発射発射っ——!!」

ありったけの力を振り絞り、奴に三基の“彼岸を貫く方舟を連射する。

命中する度に金色の粒子が飛び散り、フレスベルグが纏う光の衣は無くなっていった。

フレスベルグも自らの生命エネルギーを使っているため、消耗も激しい筈だ。さらに僕と悠の攻撃を喰らえば瀕死状態になるのも当然だ。

「皆さん——撃ってください！」

深月さんは左手を高く上げ、勢いよく振り下ろす。それが攻撃開始の合図だ。

広場を囲むように布陣していたリーザさんたちが、空に向けて架空武装から攻撃を放つ。

光の衣を失ったフレスベルグに、皆の攻撃が直撃する。

——クアアアアアアアアアツ!!

苦しげな声を響かせるフレスベルグ。粒子ではなく、本物の羽毛が空に舞い散る。

片翼を失ったフレスベルグに、悠は三基の砲塔を操作し、砲弾を放つ。

「——ファイア発射っ！」

フレスベルグの体に真っ直ぐ吸い込まれる六発の光球。

そして——巨大な爆発がフレスベルグを呑み込んだ。

爆風と共に飛び散る金色の粒子。

徐々に爆発は消え、金色の巨鳥は跡形もなく消滅していた。

僕は超サイヤ人を解除し、上空を見つめる。

フレスベルグの”気”は完全に消えていた。つまり僕たちの勝利だ。

「倒したようだな」

僕がそう言うと、皆は歓声を上げ、僕たちの方へ駆け寄ってくる。

悠を見ると、今にも倒れそうな状態で、ふらふらと揺れていた。

僕はすかさず近づき、悠の体を支える。

「悪い………亮」

「全く、無茶し過ぎだ」

本当に悠は原作通り、無茶ばかりする奴だ。僕も人のことは言えないけど。

「あ——」

悠の背中から離れたフィリルさんが、驚きの声を上げた。

「どうかしたのか?」

僕がフィリルさんに問いかける。



「今、あそこにお爺様じいさまがいたような——」

彼女の指差した方を見ると、そこには薄れて消えていく金色の粒子があるだけだった。

「フレスベルグに取り込まれた魂が……解放されたって風に考えられる。もし何か伝えたいことがあるなら……今、言っておいたらどうだ？」

もうろう朦朧とした様子の悠が促すと、フィリルさんはこくと頷く。

「そうだね、もし本当に、お爺様がいるなら……伝えなきゃ」

彼女は祖父の姿を垣間見た場所に視線を向ける。

それと同時に悠は体力の限界を迎えたようで気を失った。

「……ありがとう」

悠を支えていると、フィリルさんが絞り出すように感謝の言葉を告げる。

## 取引の代償

「お疲れ様——悠、亮」

大瀑布だいぼくふの展望広場からほど近い建物の屋上で、キーリ・スルト・ムスperlヘイムは呟いた。

王宮から密ひそかに抜け出し、全てを見届けていたキーリは、気を失って大島亮に介抱かいぼうされている物部悠を遠くから眺め、口の端を緩める。ニブルに狙われている彼女は王宮で待機するように言い渡されていたのだが、そんな命令に従う理由はなく、好意を抱いている物部悠と、ドラゴンを圧倒した経歴を持つ大島亮の戦いを見られるのであれば、多少の危険などどうでもよいのだ。

「おい、貴様！　これを解け！」

すると彼女の足元から憤りに満ちた声が響く。キーリは水を差されたという表情で、視線を下に向ける。そこには全身を縄で縛られたニブルの特殊部隊、スレイプニルの狙撃兵——ジャン・オルテンシアの姿があった。

「煩うるさいわね、ちよつと黙ってなさい」

キーリが睨にらむとジャンの口元に上位元素ダークマターを生成し、猿ぐつわへと物質変換された。

「うー、うーっ！」

声が出せなくなったジャンは呻うめきながら、無意味に身を振ねじる。

そんな彼を見て、キーリは呆れた表情で話しかける。

「あのね、言っておくけど……私はあなたを助けてあげたのよ？　もし彼女を狙撃していたら、あなた——彼らに殺されていたわ」キーリは屋上の端に転がったスナイパーライフルをちらりと見て、深々と嘆息した。

彼女は物部悠が警告したにも拘かかわらず、ここからファイリルを狙おうとしていたのだ。恐らくは、フレスベルグの撃破失敗に備えてのことだったのだろう。

しかしフレイズマルを一蹴した今の彼ならば、狙撃態勢に入った時点でジャンの存在に気付き、容赦なく排除しようとしたはずだ。

さらに大島亮はスレイプニルの配置している場所を特定したように、余計な手出しをしないようにエネルギー弾を空中に留まらせたのだ。

ドラゴンボールのピッコロが17号と第十宇宙のルバルトに使った技だ。

「んーっ！」

「あら、怖い顔。まあ確かに、あなたと彼女を助けたのは、ただのついでだけどね？ 私はあなたに聞きたいことがあるのよ」

「んうー！」

ジャンはそれより早く縄を解けとキーリを睨み続ける。

「——フレイズマルって、いったい何？」

キーリがそう問いかけると、ジャンはぴたりと呻くのを止めた。その表情に恐れの色が浮かび、体が微かに震え始める。

「その様子だと、あなたも見ていたみたいね。彼の中身を」

「……………」

ジャンは肯定に等しい沈黙を返した。

「あれを使っていたのはあなたの上官なのよね？ そいつは何？」

私の悠に、何をするつもり？」

顔を顰め、首を一回だけ横に震るジャン。

「んんー！」

そして何か文句を言うような感じで呻く。キーリはジャンの表情を見て、いやらしい笑みを浮かべる。

「——ふふ、悠は私のものじゃないって言いたそうな顔ね。嫉妬かしら？」

「んぐうーっ」

顔を真っ赤にし、ジャンは縛られた体をじたばたさせる。

「ふふ、可愛い反応。ちよつとだけあなたのこと気が入ったから、一つ忠告してあげる。あなたがフレイズマルのことを何も知らないなら、知るべきではない立場だということよ。けれどあなた……優秀過ぎるその目で見てしまった」

表情を固くするジャンに、キーリは憐れむような眼差しを向けた。

「こういう場合、大抵は不幸な結末が待っているものよ。悪いこととは言わないから、上官の元へ戻るのは止めておきなさい」

「……………」

ジャンは視線を逸らし、沈黙した。

「あらあら、途方に暮れた顔をしちゃって。察するに、ニブルの他には居場所がないって感じかしら。仕方ないわね——じゃあ私があなたを攫さらってあげる」

「っ!？」

目を見開き、ジャンは驚いた表情を浮かべる。

「ここ数日賑にぎやかだったから……また一人に戻るの少し寂しいのよ。居場所がない者同士、道連れにはちようどいいでしょ」

「ん——」

全力で頭を横に震る。災害指定されているキーリと一緒に居たくないのだ。

「そんなに嫌？ 悠のためだと言っても？」

「——？」

どうしたことだとジャンはキーリに視線で訊たずねる。

「今回の件で確信したわ。彼はあなたの上官をはじめ、複数の得体の知れない何かに目を付けられている。このままだと彼は——その何かに奪さらわれてしまう」

キーリの瞳に狂おしい光が宿った。

「私は、そんなの嫌。あなたもそうでしょ？」

「……………」

キーリは内心、大島亮なら物部悠を守れると思っていた。最初は彼を警戒していたが、王宮で会話をし続けている間に意気投合したのだ。

大島亮は強い。得体が知れないが、彼と話すだけで信用できると思えるようになっていた。

しかし、エルリア城であった予想外の展開を思い出していた。

どんなに強くても、内情を知らなければ同じことがまた起きると思  
い知ったのだろう。

「だから、共通の敵を排除するまで協力しようってこと。殺し合いは、またその後」

キーリはにこやかに微笑みながら、ジャンの猿ぐつわを外す。

「そういうことで、自己紹介してくれるかしら？ ジャンって呼ばれてたみたいだけど、本当の名前があるんでしょう———お嬢さん」

そう問われたジャンはひどく動揺した表情を浮かべたが、やがて小さな声で答える。

「……ジャンヌ」

「あなたらしい名前ね。高潔で勇敢で———幸が薄そう」

キーリはくすくすと笑って身を屈め、不機嫌な顔になった少女の頬を指先で撫でた———。



プルルルル———。

個人端末から鳴り響く電子音で目が覚めると、そこは俺にあてがわれた王宮の部屋だった。手を伸ばして枕元に置かれていた個人端末を探り当て、画面を見る。

時間は午後七時。フレスベルグとの戦いから十二時間以上が過ぎていた。そして今俺を呼び出している相手の番号は非通知。まあ、誰なのかは大体予想が付く。

ベッドに寝転んだまま、仰向けの姿勢で応答ボタンを押す。すると画面にロキ少佐の顔が写し出された。

『———ようやく繋がったか。その様子だと今目覚めたところかな、物部少尉』

「はい……できればもう少し眠っていたかったです」

対竜兵装を三基も物質変換し、さらに砲弾が生命エネルギーを用いるものだったため、疲労はまだ完全に抜けていなかった。

『それは悪かったな。だが、まずは君の勝利を祝わせてくれ。おめでどう。あのフレスベルグを打倒した君の功績と、人類への貢献は、言葉では言い表せないほどに多大なものだ』

「フレイズマルをフィリルに差し向けておいて、よく言いますね」顔を顰め、俺は皮肉交じりに言い返す。

『そうかね？ あれは妥当な判断だったと思うが。より優秀な方に重要な案件を任せるのは、当然のことだろう？ 君がフレイズマル以上に優秀な兵士で、本当によかったよ』

「……………」

相変わらずだ。この男は、何も変わらない。

どう運命が転ぼうと、自分が望まない結果にだけはならないよう、手を打っている。

『それはそうと、目覚めたばかりというなら教えておこうか。キーリ・スルト・ムスペルヘイムが姿を晦ましたと、ミッドガル側から連絡があった。君たち本来の任務は、残念ながら失敗に終わってしまったようだ』

俺は大して驚きもせず、溜息を吐いた。フレスベルグの目標がキーリではなくフィリルになった時点で、キーリが俺たちと一緒にいるメリットは何もなくなったのだ。

『あともう一つ、我がスレイプニルの隊員——ジャン・オルテンシア軍曹も姿を消した。状況から考えて……キーリに拉致された可能性が高い』

「なっ……………」

今度ばかりは驚きの声を漏らす。全く予想もしていなかった情報だった。

どうしてキーリがジャンを——。

『本当はこの件について君へ訊ねるのが目的だったのだが——寝起きの君に問うても仕方がないだろう。もしも何かジャン軍曹の情報を得る機会があれば、教えて欲しい』

「……………」

頷きながらも、俺は内心で考える。ジャンの居場所が知れた時、口

キ少佐にそれを知らせるのは本当に正解なのだろうか。俺はロキ少佐が何を考えているのか、全く分からない。正体を語ってくれたキーリよりもずっと、彼は得体の知れない存在だった。

『用件はそれだけだ』

「待ってください。最後に一つだけ聞いてもいいですか？」

『……何だね？』

目を細め、ロキ少佐は俺を促す。

「ロキ少佐は、この機会に俺を仕上げると言いましたが……その目的は果たされましたか？」

ロキ少佐がキーリを殺すように協力を持ちかけた時に言った言葉だ。

『いや——それについては思ったほどの成果は得られなかったよ。フレイズマルより性能が上であることは証明されたものの、君はまだ不完全な“悪竜”のままだ。最初から薄々と感じてはいたが、君の中には何か邪魔なモノがあるらしい』

「どうやら亮の言っていた“神の氣”ではなさそうだ。てつきりそれだと思っていたが、確か亮は“悪竜”の力が違う方向に覚醒したと言っていたことを思い出す。」

「邪魔な……モノ？」

鋭いロキ少佐の眼差しを浴びて、冷や汗が頬を伝える。

『まあ——邪魔なのはお互い様かもしれないがな』

ロキ少佐はそう言って通信をプツンと途切れた。

個人端末をベッド上に放り出し、俺は大きく息を吐く。

彼の言葉はいつも俺を不安にさせる。

——ガチャ。

扉の開く音が、静かな室内に響いた。

「お目覚めのようですね。モノノベ・ユウ」

部屋の中に入ってきたのは、制服姿のリーザ。彼女は部屋の明かりを点け、俺の方に寄ってきた。後ろには深月とイリスがいた。他は自室にいるのだろう。

「兄さん、大丈夫ですか？」

深月は心配そうな表情を浮かべながら近づいてくる。  
ミッドガルの生徒会長であり、竜伐隊りゅうばつたいの隊長。そして——俺の  
義妹。

そういう情報と知識は持っている。忘れてはいない。同じ宿舎で  
暮らし、朝と夜は一緒に食事をし、強大なドラゴンへ共に立ち向かつ  
た記憶もある。だが——。

「……兄さん？」

深月が表情を曇らせ、ぼうつとしている俺の額に手を当てる。

ひんやりとした小さな手。女の子の細い指。それ以上のことは何  
も感じない。

他人に体を触れられるのは、少し緊張する。

「熱は——ないようですね。お腹は空いていますか？ 食欲が  
あるなら、食事を運んでもらえるよう頼んでみます」

「いや、大丈夫だ。まだ何かを食べたい気分じゃない」  
俺は自分の喉から出た固い音声こわねに、愕然がくぜんとする。

これまで俺は、こんな声で深月と会話をしていなかった。  
あまりにも大きなズレを感じる。今、深月と話すのはあまり良くな  
い。

「そうですか。では私たちはこれで失礼します。あと、大浴場が  
空いてますので、無理が無ければ使ってください」

そう言って深月たちは部屋を出て行くが、イリスはずっと俺に視線  
を向けていた。

——パタン。

扉が閉まるとすぐに俺はベッドを飛び降り、扉に鍵を掛ける。そし  
てそのまま窓へ向かい、中庭に面したテラスへと出た。

「はあ、はあ、はあ……」

胸が痛い。心が苦しい。この状況で頼れるのは彼女だ。  
助走を付け、隣のテラスへと飛び移る。その勢いのまま窓を開けて  
イリスの部屋に飛び込むと、部屋に戻ったばかりの彼女が目を丸くし  
た。

「モノノベ？」



「——イリス！」

俺は彼女に駆け寄ると、その華奢きゃしゃな肩を強く掴む。

「頼む、教えてくれ！俺に物部深月のことを……頼む！」

「お、落ち着いてモノノベ——い、痛いよ……」

「あ……わ、悪い」

謝り、腕から力を抜く。イリスは強張こわばった俺手を両手で掴み、揺れる声で問いかけた。

「何を、忘れたの？もしかして……あたしのことも、ホントは憶おぼえてない？」

俺は奥歯を噛み締め、首を横に振った。

「いや——イリスのことはちゃんと憶えてる」

「よかった、それじゃあ、何を——」

「……三年前より昔のこと、全て」

失ったものを、俺は言葉にする。

「——え？」

「ニブルとミッドガルでの記憶は、はつきり思い出せる。けどそれ以前の記憶が、全て曖昧あいまいだ。その間に得たはずの知識は手操り寄せられても、そこから思い出に繋がらない」

「そんな……」

愕然がくぜんとするイリスに、俺は自嘲気味の笑みを向けた。

「分からないんだ。深月がどんな妹だったのか。兄妹になる前の深月を忘れてしまった挙句——今度は、妹だった深月まで忘れた」

「モノノベ……」

涙を浮かんだ瞳で俺を見つめるイリスに、俺は訴える。

「深月を見ても、妹だっと思えないんだよ。手が触れても、安心しないんだ。俺は……俺は、深月の——家族ですらなくなった」

「つ……大丈夫、大丈夫だから！」

イリスが俺の体を抱きしめて言う。

「モノノベは、まだミツキちゃんのお兄さんだよ！だってこんなに悲しそうで、辛つらそうなんだもん！家族じゃない人のために、こんなに苦しんだりしないもん！」

「イリス……けど、俺は——」

「大丈夫、あたしは憶えてるから！ モノノベにたくさん話してもらったミツキちゃんの思い出——一つも忘れてない！ これから全部、モノノベに伝えるから……ミツキちゃんのこと、家族じゃないだなんて言わないで」

俺の背中を撫なでながら、イリスは強い口調で告げた。

「……………ありがとう」

ぐっと拳を握り、俺は感謝の言葉を口にする。

イリスは俺が落ち着いたのを見ると体を離し、これまで聞いたことのないような決然とした声で言った。

「安心して。あたしが何とかしてみせるから」

真っ直ぐ俺の目を見つめるイリス。

「それにオオシマだっているんだよ。たとえオオシマが無理だと言っても、あたしは諦めないから」

イリスの透き通った瞳の中に、激しい感情の炎が揺れている。

「待ってくれ、イリス。ユグドラシルは——」

俺は反論しようとするが、彼女は強い口調で俺の言葉を遮ってしま  
う。

「——分かってるよ。ユグドラシルは、他のドラゴンを倒すために協力してくれているんだよね。ファイリルちゃんを守れたのも、あたしが今こうしてられるのも、そのおかげ。でも……」

彼女は小さな拳を握りしめ、鋭い敵意を込めて、こう宣言した。

「あたしは、絶対にモノノベの記憶を取り戻す。ユグドラシルを

——倒してでも」

## 王子様

「ふう……温まる」

俺は温かいお湯に浸かっていた。戦いの後に目覚めてから大浴場に來ている。

大浴場に向かう少し前、亮に記憶のことを話すと、やはりそうなたかと理解していた。

亮は今までユグドラシルから送られてくるデータやマルドゥークを生成するときの体への負担を和らげてくれた。そのおかげで体への負担は軽減され、違和感がないくらいに動ける。

神でも記憶を元に戻すことはできないと言っていたが、今後は記憶を取り戻すため協力してくれるようだ。

亮にもイリスがユグドラシルとの取引について知っていると話すと、協力してくれる人が一人でもいるなら心強いと納得してくれた。

それから今後のことを話した後、亮と別れて大浴場へと向かう。温まっているとバジリスク戦での温泉を思い出す。あの時は深月とリーザが喧嘩をしており、俺は深月にリーザの気持ちを考えるように言い、リーザも深月を許すために罪と向き合った。

その時フィリルから温泉を一日だけ貸切にしてもらったが、お礼としてみんなの裸を見せると言ってく俺がいることを黙って連れて來たのだ。

結果、ティアにはバレてしまったが、深月たちには知られずに済んだ。

あんなにドキドキしたのは初めてだ。

「それにしても広いな」

俺は浴室を見回した。大浴場は豪華で広い。正直場違いではあるが何故か落ち着く。

お湯に浸かっているとフレスベルグとの戦いの疲れが飛んでいくようだ。

亮は先に入ったようでもう部屋で休んでいる。

当然ここには誰も入ってこないと思うっていた。

しかし、正面から人がやってくる。湯気で顔や体が見えないがタオルを脱いで温泉に入ってきた。

誰も入ってくるはずがない大浴場にイリスが入ってきたのかと思っただ。

リヴァイアサン戦で、イリスがつがいとなった時に、浴室に入ってきて背中を流してくれた。

それにさつき記憶が欠けていることを話したのももしかしたらそのことかもしれないと思う。

その人はどんどん近づいてきて俺は焦る。

湯気は少し晴れてきた。もしかしたらイリスだと予想していたが、その予想は外れた。

「物部くん、大丈夫?」

現れたのはフィリルだった。体はお湯で隠れているが胸が浮いており、驚きのあまり立ち上がった。

「フィ、フィリル!? 何でここに!」

俺が理由を聞くとフィリルは頬を染めて微笑む。

「物部くんとお風呂に入りたくて、来ちゃった」

「んなつ……」

フィリルはそのまま近づき、心配そうな表情を浮かべた。

「深月から物部くんが、目を覚ましたって聞いたから安心したけど、体の方は大丈夫?」

「あ、ああ、もう大丈夫だ。心配かけてすまない」

正直に言うとまだ疲れは取れてはいないが風呂に浸かっているため、少し楽になってきた。

「謝らなくちゃいけないのは、私。ごめんね……私のために、無理させて」

俺の頬に手を添え、上目遣いで俺を見つめるフィリル。

「いや、別に俺だけが頑張ったわけじゃないさ。フィリルも力を貸してくれたし、亮たちの援護がなければ、フレスベルグを落とす切れずに接近を許していたかもしれない」

「それでも……私を守ってくれたのは、やっぱり物部くんだよ。」

ありがとう」

フィリルはそう言いながら、俺の方へにじみ寄ってくる。

「え？　　ちよ、ちよと待て——」

「待たない。物部くんには一方的に守られたから、私も一方的にお礼する」

俺の背中に手を回し、自分の方へと引き寄せるフィリル。

「っ!？」

体から二つの豊かな双丘の感触が伝わってきて、さらにそのままぎゅつと抱きついてきた。

「物部くん、こうされると嬉しいよね？」

温泉の時も喜んで

くれたし」

「~~~~~!!」

お互い裸のため、フィリルの肌と胸の感触が直に伝わってきて、声が出ない。顔もだんだんと熱くなるのがわかる。

「前は三秒だけだったけど、今日は……ううん、これからは時間制限はないから」

優しい声が耳朶みみたぶを撫で、俺は自分の理性を保つのに精一杯で、どんどん耐えられなくなってきた。

「あと、前に言ったこと……無しで」

「?。」

俺は何のことか分からず、眉を寄せる。

「覚悟がないと、惚れちゃダメって言ったけど、あれ……撤回。私に、惚れていいよ……物部くん」

「なっ!？」

すぐ傍そばで囁ささやかれた言葉に動揺し、俺はフィリルを押ししてしまった。

「え?。」

フィリルの一言で俺は理性を保つことができなくなり、無意識に両手で彼女の体を押ししてしまった。しかし、ぷにゅんつと音がして見ると、手のひらにはフィリルの柔らかい二つの胸を掴んでいた。

「——っ!？」

「も、物部くん……大胆だね。……………えっち」

フィリルは頬を染め、恥ずかしそうに俺の右手に自分の右手を添えてきた。

「わっ、悪い！　　い、今のはわざとじゃ……」

俺は両手を離し、慌てて誤解を解こうとした。

「……もしかして、小さい方が好きなの？」

フィリルは自分の胸に手を当てて聞いてきた。

「い、いや、そういうことじゃなくて……さっきの言葉にびっくりして、無意識に押ししてしまったんだ」

俺は正直に言うと、フィリルは首を傾げた。

「覚悟のこと？」

「ああ……」

俺が頷くと、フィリルは微笑んだ。

「だって覚悟なんてなくても、物部くんは……もう……私の王子様だからだし」

「お、王子様？」

「私、物部くんにドキドキしちゃったの。だから物部くんも……私に惚れてくれると、嬉しいな」

彼女の眩しい笑顔に、俺はしばし見惚れた。

しかしそこで背筋が凍った。

「も、モノノベ……フィリルちゃん何やってるの？」

後ろから声が聞こえ、振り返るとイリスが引きつった笑みを浮かべていた。

体はタオルを巻いていて、湯気で曇っていてもイリスのスタイルがはつきりと分かる。

「イリスも来てたんだ。……でもどうしてここに？」

フィリルも気づいたようで、イリスを見上げる。

「も、モノノベが心配で背中を流そうと思って……」

イリスはもじもじしながら言った。

やはり俺の記憶のことで風呂場に来たのだろう。

「そっか、なら一緒に物部くんに入ろうよ」

フィリルは手招きでイリスを誘った。

「ええっ!?! いいの!」

「うん、二人きりもいいけど、お風呂は大勢の方がいいし」

「あ、ありがとう。……じゃ、じゃあ」

そう言つてイリスはタオルを体が見えないように脱いで入つてきた。

イリスの胸がお湯に浮き、視線がそつちに向いてしまう。

「えい」

「っ!?!」

イリスは俺の左腕に抱きついてきた。腕は双丘の谷間に挟まれ、イリスの肌が直に感じる。

「い、イリス」

俺は視線が胸に行かないようにイリスの顔を見た。こうでもしないと平常心を保つことができない。

「それより、二人はさっきは何を話してたの?」

イリスは上目遣いで俺たちに聞いてきた。

「いや、それは——」

「物部くんはプロポーズしてたの」

俺は慌てて言い訳の言葉を口にしようとしたが、フィリルの声で掻き消された。

「ええっ!?! そうなの!?!」

イリスは驚き、俺の顔を見た。

「モノノベ、フィリルちゃんと結婚しちゃつうの?」

イリスの表情はおどおどしており、悲しそうな目で見つめる。

「イリスは物部くんと結婚したいの?」

フィリルは首を傾げてイリスに訊ねた。

「え、あ、あたしは、その……」

イリスは頬を真っ赤にして視線を逸らし、それを見たフィリルは何かを閃いたのか、俺の腕を放してほんと手を叩いた。

「それならいい方法がある」

「いい方法?」

きよとんとした表情でイリスが問い返す。

「うん……あのね、まずこのエルリア公国は、同性婚が認められているの」

「へ、へえ——進んでるんだね」

イリスが戸惑いながら相槌を打った。

「だから……私がイリスと結婚したら、すべて全部解決」

「へ……!?!」

俺とイリスはぽかんと口を開けた。

「王族だけは重婚が認められているからイリスだけじゃなくてテイアもみんなも結婚できるんだよ。悪くないと、思わない?」

「そっか……って、待って!　それだとモノノベと結婚して

るのフィリルちゃんだけだよ」

「ふふふ、バレちゃった」

悪戯っぽく笑い、フィリルは肩を竦めた。

「もう……でも結婚かあ」

イリスは羨ましそうに俺たちを見つめていた。

「……………」

イリスの体に目を引かれ、豊かな双丘を見てごくりと唾を呑み込む。

「物部くん、やっぱり大きい胸が好きなんだ」

「ええっ!?!　モノノベって大きな胸が好きなの?」

フィリルはあらぬ誤解をし、イリスはその言葉に驚き、自分の胸を手で隠した。

「い、いや、そういうわけじゃない。ただ……可愛い女の子二人と一緒に風呂は……流石に意識してしまう」

誤解を解こうとするが、フィリルとイリスの柔肌が伝わってきて、だんだん言葉を小さくなる。

「そうなんだ……やっぱり男の人って意識しちゃうんだ」

イリスは納得した様子で頬を染める。

「……あの本にあった通りだね」

「本?」



フィリルの言葉に俺は首を傾げて聞き返した。

「フィリルちゃんと言った本に、男の人は大きい胸が好きで、少しでも当たると喜ぶって書いてあったんだよ」

「……一体どんな本なんだ？」

俺は何の本か分からず、フィリルの方を見た。

「男性向けの本だよ。物部くんの気持ちを知りたくて」

フィリルは恥ずかしそうに目を逸らしながら答えた。

「もしかして、違うの？」

「い、いや……」

確かに間違いではないが、正直に答えるのも恥ずかしくなる。俺は目を下に向けた。

「人それぞれだと思うぞ。……俺は、その……」

「その反応だとモノノベは嬉しいんだ」

イリスの言葉には男として否定できなかった。

「まあ、大ききとかは気にしないが、嬉しいといえば……嬉しい」

俺は男として正直に答えるしかなかった。

「そっか、よかった」

「……やっぱり嬉しいんだ」

フィリルとイリスは真っ赤になった顔で息を吹き返し肩までお湯に浸かった。

俺も肩をゆっくり浸かりろうとするが、視界が歪んできた。

長く風呂に入っていたせいで、のぼせてきたようだ。

「じゃあ俺はもう上がるが、二人はどうする？」

俺は立ち上がろうとする前に二人に聞いた。

「私は、もう少しここにいる」

「あたしも。モノノベはゆっくり休んでね」

フレズベルグとの戦いで気を失った俺に、二人は気を遣って先に上がらせてくれた。

「ああ、ありがとう」

俺はそのまま立ち上がり、脱衣所に向かおうとした。

「「え？」」

すると突然、二人は声を漏らして俺の体を見た。

俺は訳が分からず、二人の視線が向いているところを見ると、今まで下に巻いていたタオルが脱げていた。

「あ」

今になって気付き、二人の前に自身の下半身を晒してしまった。

二人の視線がある一点に注がれ——数秒後、イリスとフィリルの悲鳴が大浴場に響き渡った。

◇

フレスベルグとの戦いから約十二時間。僕は杖の先端にある球体に向けて話しかけていた。

『そうですか……空間の歪みがありましたか』

「はい。すぐに修正しましたがこの世界のドラゴンが歪みに触れてしまい、倒すのに少し苦労しました」

僕は神官王様に連絡を取り、今回の件を伝えていた。

十二の世界に起きる自然現象である空間の歪みはここ最近起ころなくなっていた。僕たち”神界”の神々はその原因を調査していたが何一つ分かっていない。

『先程世界中を確認しましたが歪みが発生したのは第十二世界だけです。他の世界は一向に起きないようです』

「そのようですね、少し前に義晴と連絡を取りましたがあの世界でも歪みが起こってないそうです。ミッドガルに戻ったら僕も調査します」

『分かりました。全王様にはそう伝えておきます』

球体に映し出された神官王様は微笑みながらお辞儀をする。

この神は誰ひとに対しても丁寧ひとに接してくれる。ドラゴンボール超に出てくる大神官と同じ性格と言動、そしてこの立ち振る舞いだ。

全王様と同じくらいに頭が上がらない神様だが、見た目に合わず大

食らいで暇さえあれば十二の世界に来ていろんな店を食べ歩いている。

本人は隠していてバレてないつもりがいるが、全王様以外の神には知られている。まあギャップがあつて初めて知った時は驚いた。

『では私はこれで失礼します』

「あつ、待ってください。報告のついでに確認したいことがあります」

『確認ですか?』

僕が呼び止めると神官王様は聞き返す。

「実は”神器”についてです。何か紛失したとか盗まれたとかそういう報告はありませんか?」

『いえ、そのような連絡はありません。何かありましたか?』

「い、いえ……無いなら構いません。では失礼します」

『はい』

僕は神官王に頭を下げて通信を切った。

(”神器”は無くなつてないのか……)

僕は椅子に深々と座りながら机に置いてある紅茶の入ったカップを手にして口につける。

昨日、フレスベルグがエルリア城に襲来してきた時、奴の能力で魂を肉体に封じ込まれたことだ。

僕は一瞬だけ”神の氣”を放つて奴を倒そうとしたが、何故か出せなかつた。

”神の氣”が出せなかつたのは初めだった。そのせいでフィリルさんにあんな光景を見せてしまった。

”神の氣”を封じることができるのは”神界”にある”神器”と呼ばれる神様専用の道具だけ。

あの会場にいたのはこの世界を担当する自然の神々だけだった。ある理由で誰かが”神器”を使った可能性があると考えた僕は自然の神々に連絡を取った。

しかし自然の神々たちは持つておらず、神官王様に歪みの件での報告ついでに確認を取った。

それでも何も無かったが神が”神の氣”が出せないのは異常だ。”神器”で力を封じ込む以外に考えられなかった。

(……仕方ない。ミッドガルに帰ったら歪みの件と一緒に調べるか)

僕は着替えとタオルを持って王宮の大浴場に向かう。先に悠が来ているので記憶のことが話せる。

扉を開けようとした時、男湯でイリスさんとフィリルさんの悲鳴が聞こえたことに驚いた。

原作を思い返すが、この展開は一ヶ月以上先になると考えた。しかしこの世界はラノベの展開とは少し違っていることを思い出す。

(悠たち楽しんでるな。原作では描かれてない展開ってことか)

どんな状況なのか察した僕は自分の部屋に戻ってシャワーを浴びることにした。

## ミドガルズ・カーニバル 面白い情報

第九世界。武道派の人間が多く、文明は第一世界、第十二世界でいうところの中世ヨーロッパに類似している世界。

この世界を管理している”世界神”レイチエル・スミスは、かつて何万人の武道家をたった一人で圧倒した武器の使い手で、ほとんどの国では英雄と崇められる存在である。

しかし百年以上も前、仲間裏切られた彼女は罪を擦り付けられ、監獄の中で亡くなった。

そのあとはレイチエルの無実は証明され、かつての仲間は法で裁かれた。そして数々の伝説を作ったレイチエルは、後に”武術の神”と崇められることになった。

それからレイチエルは”絶対神”ゴッド、後に全王と改名する最高位の神と出会い、世界を管理する”世界神”となる。

あれから一年、”世界神”となったレイチエルは自分の故郷である第九世界で仕事をしていた。

「レイチエル、これでいいの？」

第一世界の”世界神”河本義晴は、レイチエルと共に空間の歪みを調査していた。

「ええ、ここで間違いないよ」

レイチエルは杖の先端にある丸い球体を見つめていた。

一週間前に発生した歪みとその翌日に突然消えたという情報が”神界”に入ってきた。

歪みを中和する方法は、神が発する”気”を注ぎ込むことで消すことができる。

つまり、歪みが消えたのは神だけが持つ”気”を注ぎ込むことだからである。

しかし、他の神々は第九世界で仕事をしていないと言う。もちろんこの世界を管理しているレイチエルも然り。

そのため、手が空いているレイチエルと義晴が現場に来ていた。

「ここ最近になって歪みが突然出現してから消えるなんて、初めてだわ」

「ああ、恵さんもそんなことを言っただけ」

義晴はブリーフケースの中から丸い球体を取り出し、地面に置くと半円状のサークルが義晴とレイチエルを包みこむ。

「それって”神器”？」

「ああ、誰も来ないように結界を展開してるんだ」

義晴が取り出した球体は、”神器”に住む神々しか使うことが許されない道具。それを”神器”と呼ばれている。

「これでこの世界の人間が近づいてくることはないな。そういえば亮のクソ野郎は”神器”が紛失したとかなんとか言っただけで神官王様に聞いてたな？」

「そういえばそうね。でもどうしてかしら？」 ”神器”が紛失したことなんてないからね」

「当然だ、”神器”の管理は厳重だからな。無断で持ち出そうとすることは絶対に不可能だ。あの馬鹿、何訳の分からないことを聞いてるんだ……」

義晴は舌打ちをしながら杖を取り出して歪みの情報を調べる。

「それにしても、歪みが消えるのは不自然だ、一体誰の仕業なんだ？」

「ん？ どういうこと？」

レイチエルが問いかけると、義晴は周りを見回しながら口を開く。

「歪みを消すことができるのは俺たち神々しかできないんだぞ？ 自然になくなったなんて有り得ないだろ？」

「でも歪みを消すには”神の気”を注ぎ込む必要があるから、何かしらの現象で中和されたのかもしれないよ？」

「そんな事例は聞いたことがない。大体そんなことが起こったら誰だって気付くだろ」

「そっか、じゃあ今回は神の誰かについて？」

「いや、それはない。”神の気”を注ぎ込むには現象が起こって

る世界に行かないとできない。亮の野郎は自分の担当する世界に行ってるし、俺たちは“神界”で仕事してたからな。もしかしたら神になれなかった人間の仕業だと俺は思う」

「あ、なるほど」

義晴の推測を聞いたレイチエルは手を叩いて納得する。

「じゃあその人たちを調べてみようか。ちょうど調査も終わったことだし」

「そうだな」

二神ふたりはそう言つてその場を去つた。

しかし二神ふたりは気付かなかつた。遠くから様子を見ていたフードを被つた男の存在に……。



薄雲の向こうに月明かりがぼうつと滲にじむ、静かな夜。

柔らかな夜風を愉たのしむように、二人の少女が歩を進める。

一人は長い黒髪を靡なびかせ、もう一人は月光に映えるプラチナブロードを風に遊ばせていた。

黒髪の少女は髪と同じ色のドレスを纏まとい、プラチナブロンドの少女は軍服姿。

ちぐはぐな印象を受けるが組み合わせの少女たちは、歩きながら辺りに立ち並ぶ窓のない建物を見回す。

「ジャンヌちゃん——ここで間違いないのね？」

黒髪の少女が落ち着いた声で問いかけた。

「……馴れ馴れしい呼び方をするな、キリー・スルト・ムスペルへイム」

ジャンヌと呼ばれたプラチナブロンドの少女は、不機嫌な声で黒髪の少女——キリーに言い返す。

「別にいいじゃない。可愛いあなたにはお似合いよ、ジャンヌ

ちゃん」

キーリはいやらしい表情で彼女を見つめる。

「黙れ、蹴り転がすぞ」

緑色の瞳で睨みつけるジャンヌだが、キーリは楽しげな様子で笑った。

「あら、怖い。今は同じ目的のために協力する仲間なんだから、もう少し仲良くして欲しいわね」

「お前もフレイズマルと同様、隊長に害を及ぼす者だ。馴れ合うつもりはない。もちろん隊長の近くにいたアイツもな」

ジャンヌは鋭い視線でキーリを睨む。

「アイツ？」

「ドラゴンを倒す存在、大島亮という男だ」

ジャンヌは神である大島亮を良くは思っていないようだ。

「あの男は底が知れない、何を考えているのかが分からない。オレはあの男が隊長をいつ裏切るのかが心配でならない」

「そんなことはないわ。彼は確かに世界の脅威となる存在だけど、エルリアで話した彼はとてもいい人だったわ」

「信じられんな。お前も奴と同じとオレは思っている」

「あら、心外だわ。私は彼と同じで悠のためを思って行動しているのに」

キーリはわざとらしく溜息を吐く。

「テロリストの言葉など、信用できるものか」

「何言ってるの。ここへ一緒に忍び込んだ時点で、あなたも私の同類よ」

皮肉っぽい口調でキーリは言い、辺りを示す。

彼女たちがいるのは、夜の散歩に適した憩いの場などではない。

広い敷地を取り囲むのは、高いフェンスと高圧電流が通じた鉄条網。窓のない四角い建物の入り口や、通路の角には、死角が生じないように監視カメラが設置されている。

ここは、ニブル西ヨーロッパ方面第三基地。一般人が立ち入ることを許されない軍事施設だ。



「……………」

複雑な表情で視線を逸らすジャンヌ。

「ここまで来たんだから、覚悟を決めなさい。あと、さっきの質問にもちやんと答えてくれないと。この基地に、フレイズマルの手がかかりがあるのは間違いないの？」

キーリは軽やかな足取りでジャンヌの視線の先へ移動し、首を傾げて問いかけた。

「……少なくとも、足取りを辿ることはできるはずだ。フレイズマルがスレイプニルと合流する際に使ったヘリには、この基地の識別番号が記されていたからな」

澁々といった様子でジャンヌは答える。

「ふうん、なら一時的にであれ、彼がこの基地にいたのは間違いなわけね。じゃあとりあえず、その辺りの情報を探ってみましよう」キーリはそう言うと、道のど真ん中を堂々と進んでいく。ジャンヌは辺りを見回しながら後に続いた。

しかしその時、行く手の死角から見回りの兵士が現れる。

「っ!？」

反射的に戦闘態勢に入ろうとするジャンヌだったが、キーリは余裕の表情で首を横に振った。

「大丈夫よ。静かにしていれば気付かれないから」

キーリの言葉通り、兵士たちは横を素通りしていく。

「まるで、魔法だな……………」

兵士たちの姿が見えなくなつてから、ジャンヌは嘆息と共に呟いた。

「空気を熱して、光の屈折率を調整しただけよ。効果範囲は狭いから、あまり離れないでね」

大したことではないという風にキーリは言つて、近くの建物に近づく。他の建物と同様に窓はなく、入り口の扉は電子錠でロックされていた。カードキーと暗証番号が必要なタイプのようだ。

「回路を焼き切れれば開くかしら」

電子錠に手を翳し、炎を生成するキーリ。

「やめろ、壊れて動けなくなるだけだ。仕方ない——」

ジャンヌは手の平大の機械を取り出すと、電子錠に取りつけて手早く操作する。十秒もかからず、扉のロックが外れる音が響いた。そうして彼女たちは屋内へと侵入する。

建物の内部にも監視カメラやセンサーがあつたが、二人は難なくそれらを突破し、事務室らしき場所に辿り着いた。並んだデスクの上にはパソコンが置かれている。

「ひとまず、ここを調べてみましょうか」

キーリの言葉にジャンヌは無言で頷いた。

パソコンを起動させ、目的の情報を手分けして探し始めるキーリとジャンヌ。

カタカタとキーボードを叩く音だけが暗い室内に響く。

「へえ……」

しばらくして、キーリが小さく声を漏らした。

「どうした？ フレイズマルの出入記録が見つかったのか？」

ジャンヌが自分の作業を止めて訊ねる。

「いいえ、違うわ。ちよつと面白い情報が目に入っただけ」

そう言つてキーリは笑みを浮かべる。

「面白い情報？」

キーリの言葉に、ジャンヌは眉を寄せた。

「この前ミッドガルで消し飛ばされた”青”のヘカトンケイルが——日本で再び現れたそうよ。今はユーラシア大陸を西へ横断中みたい」

”青”のヘカトンケイル。”黒”のヴリトラによつて作られたドラゴンであり、キーリと関わりのある存在だ。

「……特に面白い情報とは思えないな。不死と言われるヘカトンケイルがいずれ再出現するのは、ある程度予想されていたことだろう」

ジャンヌはそう言つて再び作業を再開する。

「ふふ、ジャンヌちゃんには分からないかもしれないけれど、これはとても価値のある情報なの。それにヘカトンケイルの進路も、すご

く興味深いわ」

口元に手を当て、まじまじとパソコンの画面を見つめるキーリ。

「ヘカトンケイルはどこへ向かっているんだ？」

「仮に直進したとしたら、いずれドイツとデンマークの国境付近を通過するわね」

「確かその場所は——」

ジャンヌは何か思い当たった様子で、息を呑む。

彼女の反応を見たキーリは頷き、わずかに高揚した声で告げた。

「そう——そこには今、別のドラゴンがいる。グリーン・ドラゴン、”緑”のユグドラシルがね」

## 通学

午前七時過ぎ。”神界”での仕事を終わらせた僕は、深月さんの宿舍に戻っていた。

学園から支給された制服に着替え、三階の食堂で個人端末の画面に映し出された記事を見ていた。

いつもなら朝食を食べている時間だが、悠はまだ寝ているようで深月さんが起こしに行った。

”黄”のフレスベルグとの激闘が行われたエルリア公国から帰還して、今日で三日目。

しばらくは戦いがないので学園生活を送る毎日が待っている。十歳の時、交通事故で死んだ僕は神となってこの世界を管理することになったため、”虚無の世界”で”世界神”たちと戦闘訓練をしているが、最近は休みがちになっている。

学園生活を送るのは六年ぶり、ミッドガルに来てから約二ヶ月半が過ぎようとしていた。

僕は端末を鞆に仕舞い、天井を見上げた。最近は瞑想めいそうばかりで特訓はしていない。

”虚無の世界”にも行かず、書類仕事ばかりしていたので筋力トレーニングは何一つしてない。

すると階段から二つの”気”を感じる。どうやら悠が起きてきたようだ。

入口を見ると制服を着た二人の人間が入ってきた。

一人はこの学園の生徒会長、物部深月さん。もう一人は深月さんの義理の兄、物部悠。僕の親友だ。

「おはよ、悠」

「ああ、おはよう、亮」

悠が挨拶を返し椅子に座る。少し遅めの朝食を取り、僕たち三人は宿舍を出る。

ドラゴン戦において、悠はユグドラシルと取引してマルドゥークの兵器の設計図を手に入れ、何度も勝利に貢献している。しかしその代

償で記憶を失ってしまった。

今では三年前の記憶を思い出せない状態。深月さんとの思い出すら覚えていない。

このことを知っているのは僕とイリスさんの二人だけ。

イリスさんは悠の記憶を取り戻すため、ユグドラシルを倒すことを決意する。

しかし、倒したところで記憶は戻らない。取り戻すにはキリーとティアちゃんの協力が必要だ。

キリーはフレスベルグとの戦いの最中に姿を消し、フレイズマルを調べるために、スレイプニルのジャンヌと共に行動している。

僕は原作を知っているため、この後の展開を知っている。

まあ、そんなことはどうでも良い。エルリア公国から戻って以降――落ち着かない状況だ。

「キヤーっ！」

僕たちが通学する女子生徒たちの前に現れた途端、黄色い歓声が響く。

一瞬びくりとした僕と悠だが、深月さんは余裕のある表情で「皆さん、おはようございます」と挨拶をした。

「おはようございますー！」

すると周囲の女子生徒たちは声を合わせて挨拶を返す。

皆が足を止め、ぼうっとした表情で僕たちを眺めていた。僕と悠はむず痒い<sup>がゆ</sup>想いをしながら、深月さんと並んで歩く。

「いったいこの状況は何なんだ……」

悠が小さな声で呟くと、深月さんが僕たちを見て言う。

「仕方ないですよ。今やブリュンヒルデ教室は、ミッドガルの英雄的存在なんですから」

「英雄？　深月さん、いくらなんでも言い過ぎじゃないか？」

僕がそう言い返すと、深月さんは呆れた様子で息を吐く。

「兄さんと亮さんは自覚が足りませんね。ブリュンヒルデ教室はこれまでのドラゴン討伐において常に作戦の中核を担ってきました。その上、前回はチーム単独で撃破不可能と言われたフレスベルグを打

倒したんです。注目されるのは当然と言えます」

「……そういうものなのか？」

フレスベルグはドラゴンの中で最も難敵とされていた。それが討伐されたとなれば、皆が特に喜び、安心するのも分かる。バジリクスを討伐した時も、皆は喜んでいた。

しかし、僕は神であるため、英雄なんて言われても虫唾むしずか走るはし。

悪い気はしないが、あまりそういう目で見られたくはない。

だが今回は、これまでの注目のされ方が違う。特に悠に向けての視線だ。

「まあ兄さんの場合は——英雄というよりも、王子様として見られているかもしれませんが」

「お、王子様？」

悠にはあまりにも似つかわしくない単語を聞いて、困惑する。

そういうえば原作でもそうだったと僕は思い出す。

「これは主に、フィリルさんのせいですね。ミッドガルに帰ってきてから、色んな人に兄さんの話をしているそうです。兄さんは自分にとって、白馬の王子様だった——って」

少し不機嫌そうな声で言う深月さん。

フィリルさんはフレスベルグに見初められたクラスメイトであり、エルリア公国の王女だ。悠は彼女を守るためにユグドラシルと取引をし、大きな代償を支払って奴を倒した。

主に倒したのは悠であり、これがきっかけでフィリルさんは彼に好意を寄せている。

「白馬の王子様なんて、英雄よりも恥ずかしいな……」

「悠さんよ、そう言ってる割に嬉しそうなのは何故でしょうか？」

僕は悠をからかう。コイツをからかうネタが増えたので当分はこの話題を使うことにしよう。

「……このままだと、不純異性交遊禁止の通達を破る子が出てくるかもしれません。気を付けなさいと」

深月さんは悠を睨んだ後、小さな声で呟く。

「え？ 何か言ったか？」

「——気にしないでください。独り言です」

深月さんはそっけなく答えると、歩調を進め、僕たちは彼女の後に続く。

「あのっ！ お、おはようございます！」

途中、何人かの女子生徒に挨拶される。僕と悠は彼女たちのキラキラした眼差しに困惑しつつも返事をした。

「ああ、おはよう」

「おはよう、良い朝だな」

「……っ！」

すると女子生徒は顔を真っ赤にして走り去る。そんなことを繰り返す度に、どうしてもだが深月さんの機嫌はどんどん悪くなってしまふ。特に悠に對することだろう。

「兄さんに亮さん——人気が出てさぞや嬉しいでしょうが、調子に乗って風紀を乱すような行いはしないでください」

じろりと僕たちを見上げ、釘を刺す深月さん。

「わ、分かっているって」

「心配するな、そんなことはしないと誓う」

迫力に気圧されながら僕たちは頷く。深月さんが放つピリピリした空気を感じたのか、それ以降は僕たちに声を掛けてくる生徒は少なくなつた。

けれど、そのような遠慮をしない者たちもいる。それは僕や悠、深月さんと同じブリュンヒルデ教室に所属する仲間たちだ。

「あつ、ユウとミツキ、リヨウなの！」

弾んだ声が前方から響いてくる。

僕たちの行く手に、クラスメイトたちの姿があつた。早足で進んでいた僕たちは、すぐに彼女たちに追い付く。

「おはよう、ユウ！ ミツキ！ リヨウ！」

一番に僕たちを見つけた少女が、元気な声で挨拶してきた。光の加減で桃色にも見える髪の間からは、二本の赤い角が覗いている。

この少女の名はティア・ライトニング。二ヶ月ほど前、彼女は”ムスペルの子ら”というドラゴン信奉者団体から保護され、ミッドガル

にやってきた。彼女の角はアクセサリーではなく、”本物”。”ムスペルの子ら”のリーダーであるキーリ・スルト・ムスペルヘイムが、上位元素から生体変換によって与えられたものだ。

そしてティアちゃんと一緒にいた他の少女たちも、続いて挨拶してくる。

「三人とも、おはようございます」

長い金色の髪を靡かせて振り返るのは、リーザ・ハイウオーカー。

僕と悠に対する言動は厳しいが、とても面倒見が良く、仲間思いの少女で、ブリュンヒルデ教室は彼女を中心に纏まっていると言っても過言ではない。

「深月、物部くん、大島くん、おはよう」

「ん」

続いてボーイツシユな雰囲気のアリエラ・ルーと、いつも無口だけど僕のことをお兄ちゃんと呼んでくれる赤毛の女の子、レン・ミヤザワが挨拶をする。

「おはよう」

「おはよう、皆」

「おはようございます」

僕と悠、深月さんは手を挙げて皆に応じた。

だがその場にいた最後の一人——文庫本を手にした少女、フィリル・クレストだけは挨拶を口にせず、無言で悠に近づく。

(あ、この展開……やっぱり)

原作通りなら、このあとフィリルさんの取る行動が分かる。

「フィリル?」

悠は疑問の眼差しをフィリルさんに向ける。彼女は文庫本を閉じると両手を広げ、悠に正面から抱き付く。

「なっ!?!」

悠は彼女の行動に動揺し、遠巻きに見ていた女子生徒たちに、大きなよめきが走る。

「……おはよう、物部くん」

背伸びをしたフィリルさんが悠の耳元で囁いき、悠の頬が赤く染ま



る。

(ちよつとからかつてやるか)

僕は二人をからかおうとすると、深月さんは裏返った声が叫んだ。

「ちよつと、フィリルさん！ いきなり何をしているんですか！」

「何って、ハグだよ。愛情の籠こもった、普通の挨拶」

けれどフィリルさんは、平然と落ち着いた声で答える。

周囲からはきやーきやーと騒がしい歓声が聞こえるが、気にもしない様子だ。

「あ、愛情？」

わずかにたじろぐ深月さん。

「まあ、国によって挨拶は違うらしいし、別にいいんじゃない？」

僕がそう言うと、深月さんが睨んできた。

「で、ですが、こういった行動は不純異性交遊に繋がります！」

「フィリルだけずるいの！ ティアもハグする！」

ティアちゃんは悠の後ろに回り込み、悠の背中に抱き付いた。まるでサンドイッチみたいだ。

まだ幼いティアちゃんはこういった恥ずかしいことを平然とするが、フィリルさんはそれ以上に大胆な行動を取るため、原作に無い面白い展開になるだろう。

「もうティアさんまで！ いくら挨拶でも、公衆の面前で過剰なスキンシップは謹つとんでください。風紀に悪影響を及ぼします！」  
顔を赤くして、深月さんは二人を悠から無理やり引き離す。

「深月のケチ！」

不満そうにティアちゃんは文句を言い、フィリルさんは素直に身を引いた。

「そうだと二人とも。次からは誰もいないところであるべきだ」  
僕がそう言うと二人は納得して手を叩く。

「あ、なるほど。それがいいね」

「分かったの！ ユウと二人きりの場所でするの！」

これで悠をからかうネタがまた増えて楽しくなる。

「それはもつとダメです！ 亮さん、フィリルさんたちにそうい

うことを言わないでください」

「ういつす」

深月さんは眉を吊り上げて叫び、赤い目で悠を睨む。

「兄さんもされるがままにならないでください。兄さんさえ気を付けていれば、問題は起こらないんですから」

「き、気を付けるよ」

悠は深月さんの剣幕に押されて、首を縦に振る。

「——それよりも、イリスはどうしたんだ？ 姿は見えないが……」

話題を逸らすようにして、悠はこの場にはいない少女を探す。ブリュンヒルデ教室のメンバーは全員で九人。ここにはあと一人——イリス・フレイアが足りない。

「イリスさんなら寝坊ですわ。なかなか部屋から出てこないの  
で、わたくしたちは先に行くことにしたんです」

リーザさんが溜息を吐きつつ、悠の疑問に答える。

原作を知っているので、彼女がない理由を知っている。

「そっか、まあ……いつものことだな」

そそっかしく、抜けた部分のあるイリスさんは、寝坊や忘れ物が多いのだ。

「兄さんも私が起こさなかった、完全に寝坊してましたけどね」

ぼそりと深月さんが呟くと、リーザさんが呆れ混じりの眼差しを悠に向ける。

「もしかして——あなたは毎日、深月さんに起こしてもらっているんですか？」

「い、いや、毎日じゃないぞ？ ちよつと寝過ごした時だけだ」

「深月さんを当てにしているのなら、同じことですわ。全く……妹に頼っている間は、一人前の男性とは呼べませんわよ？ ほら、頭にも寝癖が少し残っていますし」

リーザさんはそう言って、自然な動作で悠の髪を撫でつける。

悠とリーザさんの距離が近づき、またもや辺りから女子生徒たちの「きゃー」という声が響く。その声ではつとしたリーザさんは真っ赤

にして悠から飛び離れた。

「な、何をさせるんですか!?!」

「何って……リーザが勝手に頭を撫でたんだろう」

悠も少し動揺しつつ、リーザさんに当然の反論をする。

その様子を見ていたフィリルさんが、生暖かい微笑みを浮かべてリーザさんの肩に手を置いた。

「気持ちは分かるよ、リーザ。物部くんってカッコいいのに隙があるから、つい構いたくなっちゃうんだよね?」

「確かに、そういう面はあるかもしれないわね……って、わたくしが同意したのは隙があるという部分だけですからね! 別にカッコいいとは思っていませんから!」

リーザさんは悠に指を向け、早口で捲<sup>まく</sup>し立てる。

「じゃあ大島くんはどう思う? 彼って隙を見せないけど構ってもらおうと意外な一面を知ることがあるよね」

懲りずにフィリルさんが僕のことを聞く。彼女もリーザさんをからかうのだ。

「確かにそうですね。カフェテリアで食事している時は満遍の笑みで浮かべていて可愛いとは思いますが……って、またしても何を言わせるんですか! オオシマ・リヨウも余り調子に乗らないでください!」

「え? ああ……」

顔を真っ赤にしたリーザさんは僕を指差す。

そして赤くなつた顔を隠すように背を向け、ずんずんと学園に向かって歩き始めた。

「皆さん、行きますわよ。ここで話しこんでいては全員遅刻してしまいますわ」

「あ、待ってリーザ」

フィリルさんが駆け足でリーザさんを追いかけ、僕たちも後に続く。

遠巻きに僕たちのことを見ていた女子生徒たちも、きゃーきゃーとはしやぎながら歩みを再開する。

気付いてはいたが、いつの間にかギャラリーがかなり増えている。

普段は同じ教室の仲間としか接する機会がないが、こうして他クラス的女子たちに包囲されるとその男女比に圧倒されてしまう。

ミッドガルのクラスが十人未満の少人数制でよかったと心から思っている。

## 行事

リーザさんたちと一緒に登校した僕だったが、ホームルーム開始のチャイムが鳴ってもイリスさんは現れなかった。

僕は原作を知っているため、彼女が来ない理由を知っている。

「もう篠宮先生が来てしまいますね」

深月さんがそう言った直後、教室の扉が開いて担任の篠宮先生が入ってきた。

ミッドガルの司令官であり、大佐という地位を持つ女性だ。

頭の後ろで纏めた黒髪を靡かせ、篠宮先生は教壇の上に立つ。

「起立」

号令を掛ける深月さん。

皆が礼をして着席するのを確認してから、篠宮先生は口を開いた。

「今日はいくつか重要な連絡事項があるが——その前にイリス・フレイアのことを伝えておこう。彼女は今日、熱を出して欠席だ。遠征の疲れが出たのだろうな。他の者も体調が悪いと思ったら、無理せず申し出るように」

その言葉を聞いた皆は少しざわつく。

「……寝坊したのは、熱があつたからなんです。ちゃんと確認すればよかったですわ」

リーザさんが後悔したように呟くのが聞こえた。

原作通り、イリスさんは熱を出して寝込んでいるようだ。遠征の疲れもそうだが、悠の記憶を取り戻すために色々と考え込んだせいかもしれない。

彼女はユグドラシルを倒すためにある決断をする。この後の展開は知っているが、僕は黙っておこう。

「篠宮先生——放課後、見舞いに行ってもいいでしょうか？」

悠は手を挙げて、篠宮先生に問いかけた。

イリスさんが熱を出してしまったのは悠自身にも責任があると考えてのことだろう。

「他の者なら構わないが、君は男子だから……女子寮へ入るの

は何かと問題がある」

しかし篠宮先生は難しい表情を浮かべる。やはり男子が女子寮に行くのは許可が降りない。

「キーリとの戦いで俺が入院した時、イリスは見舞いに来てくれました。だから俺もイリスを少しでも元氣付けたいんです」

それでも悠は引かずに頼み込むと、篠宮先生は腕を組んで考え込んだ。

「ふむ……まあ、フレスベルグ戦における君の働きを思えば、そのぐらいの希望は叶えて然るべきか。私の出す条件を守れるのであれば、許可してもいいだろう」

「許可ですか？」

「ああ、一つはイリス・フレイア自身の許諾を取ること。二つ目は、寮生の誰かが同行すること。三つ目に、必要ない場所には立ち入らないこと。四つ目は、門限までには寮を出ること。そして最後に、大島亮。君も彼に着いて行くことだ。お願いできるか？」

どうやら僕も彼女の見舞いに行くことを条件に出してきた。たぶん男子一人だけでは心配なのだろう。

「僕は構いません」

僕もこのあと仕事はないため、彼女の見舞いは行きたいとは少なからず思っていた。

「亮、ありがとう」

「気にするな。今日は暇だったからな」

悠に感謝の言葉を言われると、少し照れてしまう。

「よし、ではイリス・フレイアの許諾を得られたら、六限後のホールームで報告するように」

そう言っつて篠宮先生は教室を見回した。

「——他に質問はないな？　なら連絡事項へ移ろう」

こほんと小さく咳払いせきほらいをし、少し間を取った後、篠宮先生は重々しく告げる。

「まず、あまり良くないニュースからだ。ヘカトンケイルが再び姿を現したらしい」

「どうとう、ですか」

深月さんが暗い声で言う。ヘカトンケイルの気を感じ取っていたため、僕は最初から知ってはいた。

「ああ、やはり殺し切れてはいなかったようだな。今のところ奴がこちらへ向かってくる様子はないが、以前のように突然ミッドガルに出現する可能性も否定できん。常に心構えだけはしておいてくれ」ミッドガルに出現したのはキーリが潜り込んでいたので、突然現れることはない。

だがこの先の展開を知っているため、心構えをしておくのは必要だ。

真剣な表情で皆に注意を促した後、篠宮先生は表情を緩めた。

「さて次だが、こちらは暗い話題ではない。まあ君たちにとって、少しばかり大変なことになるかもしれないが……」

どこか面白がるような顔で篠宮先生は僕たちを見回す。

「大変ということは、また何かの任務ですか？」

リーザさんが篠宮先生に問いかけた。

「そうだな、ある意味では特別任務とも言える。この度——学園長の発案で、一ヶ月後に学園祭が開催されることになった」

「が、学園祭？」

戸惑った声を上げるリーザさん。しかし僕以外の皆も同じである。まあ、原作を読んでいるため、知ってはいた。

「このミッドガルが学園として機能し始めた当初はまだ”D”も少なく、催し物と言えば年末のクリスマスパーティーぐらいなものだった。けれど生徒数もクラスの数も増えた今ならば、それなりに賑やかなものにできるだろう——という学園長のお考えだ」

学園として行事が一つ増えるのは僕も嬉しい。しかし僕は本当の理由を知っている。

篠宮先生はそこまで説明したところで、少し声を低くした。

「それにこれは生徒たちのためだけに発案されたイベントではなく、対外的なアピールも兼ねている。この学園祭は、我々が前回の任務を失敗したツケだと考えて欲しい」

(やっぱりそうか……)

ある程度は予想していた。

前回の任務は、フィリルさんの故郷であるエルリア公国へ赴いてキーリ・スルト・ムスペルヘイムを保護し、ミッドガルに移送することだった。

だがその最中にフレスベルグが来襲。何とかフレスベルグは撃破したが、キーリは姿を晦まし、当初の任務は失敗に終わってしまった。皆は何故、学園祭を開催と繋がると疑問を抱いているだろう。

「キーリ・スルト・ムスペルヘイムは、ニブルが反社会的な”D”を処分しているとメディア前で公言し、それは今も波紋を呼んでいる。そして彼女を保護できなかったことで、我々ミッドガルの信用にも傷がついた。そのためミッドガルが”D”による”D”のための教育機関であることをアピールする必要に迫られたのだ」

篠宮先生は言葉を続け、皆は納得する。

「ということは、その学園祭には外部の方々が大勢来られるのですか？」

話を聞いたリーザさんが、質問を投げかける。

確かに外部へアピールするならば、外から人を招かなければ意味がない。

「ああ、各国の要人や大口の出資者、生徒たちの親族の招待を予定している。もちろん厳しい審査をクリアした者に限られるがな」

親族。悠はニブルに連れて行かれるよりも前の記憶を失っている。両親の顔すら思い出せない状態のため、記憶が失っていることを知られてしまうだろう。

しかしそのことは心配していない。

問題は僕の方だ。僕の両親を呼ぶわけにはいかないが、神々を出席するとすれば、学園長直々に許可を貰う必要がある。

呼ぶのは神官王様と神官様、あとは八重さんを招待しようと考えている。しかし他の神たちは正直招待したくない。

恩義はあるが、皆にはあの神たちを合わせたくないからだ。今回は黙っておこう。



「学園祭では、各クラスでそれぞれ出し物を用意してもらおう。今日はイリス・フレイアが欠席しているので先送りにするが、後日話し合う場を設けるので、それまで企画案を練っておくように。あと——  
—物部悠、大島亮」

篠宮先生は最後に僕と悠の名を呼ぶ。

「学園祭に関する事で、学園長が君たちに話をしたいらしい。昼休みに学園長室へ顔を出してくれ」

「分かりました」

僕たちは口を揃えて返事をする。ちょうど僕も学園長に用事あったので、昼休みに許可を貰おう。

◇

そして昼休み、僕と悠は指示通り学園長室へと向かう。

学園の重要施設が集まる時計塔は一度ヘカトンケイルに破壊され、僕たちがバジリスク討伐へ出ている間に再建が終わっていた。復旧後の時計塔に入るのは今日が初めて。

もしかしたら学園長室の位置も移動しているかもしれないと考えたが、内部構造は以前とほぼ同じで、学園長室も変わらず時計塔の最上階にあった。

「——よく来たな、物部悠、大島亮」

悠がノックをして部屋に入ると、奥の執務机で書類仕事をしていた金髪碧眼へきがんの少女が顔を上げる。

一見すると同年代か年下にも見えるが、彼女こそミッドガルの最高責任者であるシャルロット・B・ロード学園長だ。隣にはメイド服姿の女性——学園長の秘書であるマイカ・スチュアートさんが立っている。

以前来た時と同じく部屋の窓はカーテンで閉め切られており、薄暗い。

「ん？ いつもの冷蔵庫は無いんですか？」

僕が学園長室を見回しながら学園長の問いかける。

「ああ、私物化するのには良くないとマイカに言われたから。私室に置いてあるぞ？ これでそなたに漁られる心配はないしな」

どうやら僕が冷蔵庫を漁られないように移動したようだ。まあ、あの時はボケでやっていたので同じことはしない。

「あの、学園祭のことで何か用件があると聞きましたが……」  
悠は少し緊張しながら話を切り出す。

「ああ、学園長に外部の者を招くにあたって、一つ問題があつてな。だが、その前に——」

学園長は目を細めると、席を立て悠の方へ近づいてくる。

「左手を見せてみよ」

絆創膏が貼られた悠の左手の甲に視線を向け、学園長が命じる。

「——はい」

悠は言われた通りに左手を差し出した。

「竜紋に何か変化があつたのか？」

「実は以前のようにみみず腫れが——って、あ、待ってください

い。自分で剥がします」

絆創膏ばんそうこうに手を伸ばした学園長を止め、悠は自分で丁寧に剥がす。

学園長と僕は露あちわになつた悠の左手の傷をじつと見つめる。そして学園長は以前と同じように、小さな赤い舌で傷をちろりと舐なめる。

「っ……っ、この前も思ったんですが、舐めて何か分かるんですか？」

悠は疑問を抱いてたことを問いかける。

「これは私なりの診断法だ。気にするでない」

「診断法って……」

戸惑う悠に構わず、学園長は唾液で濡ぬれた傷をじつと見つめた。

「——やはり消えぬか。基本形質そのものが変容していると考えられるな。どうやら以前と同質の傷らしい」

ぶつぶつとよく分からないことを言う学園長。舌で舐めただけで色々と分析できるようだ。神でもできない芸当だ。

「……で？ 悠は新たな物質変換を試したのか？ バジリスクか  
フレスベルグの能力を？」

「いや、まだだ」

僕が問いかけると、悠は首を横に振る。

「そうか、ではここで試せ」

すると学園長が物質変換をするように命じる。

「え？ いいんですか？」

「構わん。生成する上位元素をごく少量にすれば、何が起きても  
影響は小さい」

「わ、分かりました」

悠は頷き、左手の上に直径一センチ程度の上位元素を生成する。

「さて、大島亮。そなたはどうなると思う？ 神の推測を教えてください」

「なるほど……それで僕も呼んだわけか。僕はフレスベルグの能力を手に入れたと思う。あの時、とどめを刺したのは悠だしな。バジリスクの時は僕と悠、そして深月さんの三人で奴に大技を繰り出して倒したからな。これまでの話を聞くと、最後に倒した奴が能力を受け継いでいると考える」

「それなら合点がいくな。そうなると物部悠がバジリスクの能力を所有する可能性は低いな」

「ああ、だが予想外なことは起きるものだ。深月さんの他にリーザさんやアリエラさんが手に入れたかもしれん」

誰が能力を受け継いだのかは知っているが、この世界は原作とは少し違うので確証がない。

「あ……」

すると悠は声を出す。僕と学園長が視線を向けると、悠の手の平には上位元素がきらきらした金色の粒子へ変換し、ふわっと宙へ舞い上がる。

「どうやら僕の推測が当たっていたようだな」

「おお、そなたの言った通りになったな。さすが神だな。つまりこれが”黄”のフレスベルグの能力ということか？」

興味深々に学園長が悠に問いかける。

「はい。これはフレズベルグが纏っていた、魂を具現化する粒子です」

新たな物質変換を行えた驚きに包まれながら、悠は興奮する学園長に答えた。

「悠はフレズベルグの能力を思い浮かべて生成したんだな」

「いや、最初はバジリスクの能力を思い浮かべたが、何も変化がなかったからすぐにフレズベルグの能力を思い描いたんだ」

「……と言うことは、僕と悠以外のブリュンヒルデ教室の誰かがバジリスクの能力を手に行っていることになるな。悠はリヴァイアサンの”万有斥力”アンチグラビティも使えるから、”紫”のクラーケンの能力を持っている深月さんの可能性が高いな」

可能性の話だが、誰がバジリスクの”終末時間”カタストロフを受け継いだのかは知っている。

「そうなるな。では後日、しっかりと検査と測定を行うことにしよう。その時にも二人には協力してもらおうぞ?」

「分かりました」

「ええ、構いません」

僕たちが答えると、学園長は僕たちを見る。

「では本題に入ろう。マイカ、とつとと済ませてしまえ」

「承知しました」

学園長は命じられて、ずっと部屋の隅に控えていたマイカさんが近づいてくる。

「な、何ですか?」

「……!?!」

悠は思わず身構えるが、僕は呼び出された理由を知っている。

「大丈夫です。じつとしていてくれれば、すぐに終わります」

にこりと微笑んだマイカさんは悠の前にしゃがみこみ、ズボンの裾をまくり上げた。

「うわっ、ちよっ……」

「綺麗な足ですね」

困惑する悠に構わず、マイカさんは上着の袖を捲り、何かを確認するようにじつと見つめる。そして今度はメイド服のポケットからメジャーを取り出し、体のあちこちを測り始める。

「物部さんのは終わりました。次は大島さんですね」

そう言つてマイカさんは悠から離れ、同じようにメジャーで測る。

「あ、あの……」

悠は今でも戸惑っているようだ。まあ、何をしているのかは分かる。……本当は逃げたかったが。

「すみません、もう少しお待ちください。あとはこのこと……はい、ありがとうございます」

マイカさんはメジャーをしまうと、一礼して僕から離れる。

「それで？ これはいったいなんですか？」

本当は分かっていたが、分からないふりをして問いかける。

「うむ。実は——いや、やはり今言うのは止めておこう。

準備が整った時にまた話す。逃げられてしまつては困るからな」

「すごく嫌な予感を覚えるんですが……ちゃんと教えてくださ  
い」

悠の言う通りのが起きるが、逃げられないため黙っておこう。

「ふふふ、聞かぬ方がよいと思うぞ？ 知れば学園祭の準備に集

中できなくなつてしまうだろうからな」

「な……いったい何を企んで——」

「秘密だ。楽しみにしている」

いやらしい笑みを浮かべる学園長。僕は構わず口を開く。

「学園長、実はお願いがあります」

「ん？ なんだ？」

「実は今回の学園祭に上司や先輩を招待しようと思つていますが  
——」

「ああ、そのことか。それなら構わんぞ？ 後日話をしたいから  
通信機を貸してくれるか？」

「分かりました。ではどうぞ」

僕はそう言つて通信機をポケットから取り出して学園長に手渡し

た。

「これで楽しみが増えたな……」

再びいやらしい笑みを浮かべる。よし、二日目に来るように伝えるか。

## お見舞い

「……が女子寮か……」

放課後、メールでイリスに訪問の許諾を貰った俺は、クラスメイトたちと共に女子生徒たちが生活する寮へとやってくる。

誰かに同行を頼むという話だったが、自分たちも見舞いがしたいからと、生徒会の仕事がある深月を除く全員が一緒に来てくれた。

その代わりに深月は、今日の授業内容を分かりやすく纏めたプリントを俺に託している。

「あまりジロジロ眺め回さないでください。いやらしいですよわよ？」

全体的に曲線が多く取り入れられたデザインの寮を見上げていた俺と亮に、リーザがジド目を向けた。

「あのな……いくら何でも、建物を見て妙な気持ちを抱いたりはしないさ」

「そうだぞ、まるで僕たちが変態みたいじゃないか」

俺と亮は溜息を吐いて言う。するとフィリルが横から俺たちの顔を覗き込んできた。

「本当に？ 男の人は例外なく変態だって、前に読んだ本に書いてあったけど」

「いったいどんな本だよ……少なくとも俺は、建物で興奮するよきな変態じゃない」

「じゃあ、別の意味で変態なんだね」

「揚げ足を取らないでくれ」

何を言ってもドツボに嵌まっていく気がして、俺は肩を落とす。

「おいおい……まじかよ」

亮が俺に汚物を見る目を向けている。

「なんでお前はそんな目で見えるんだ？」

「だって、お前が女性の体に興奮する変態だつてことは知ってたけど、まさか自分の性癖を皆に公言するとは思わなかった」

「話聞いてただろ！ 皆の前で言ってねえだろ！」

「ということとは自分が変態だつてことは認めるんだね」

俺は亮に向かつて声を荒げると、フィリルのように揚げ足を取られる。

「そ、そんな訳ないだろ……」

「ああ〜！ 目を逸そらした。やっぱり変態なんだ！」

俺を指差しながらからかうように笑みを浮かべる亮。皆は亮の言葉を聞くと一斉に俺に冷たい視線を向ける。

「本当に悠は変態だな」

「じゃあ、大島くんはどうなの？」

するとフィリルは亮に向かつて聞いてきた。

「馬鹿なことを聞くんじゃない。僕は悠みたいな変態じゃ………ない」

亮は急に間を空けて目を逸らしながら言う。何か思い当たる節があるのだろうか。

「オオシマ・リョウ、今の間はなんですか？ まさかあなたもモノベ・ユウと同じ変態ですか？」

リーザが亮に視線を向けて問いかける。

「……まあ、あれだ。悠みたいに些細なことで誤解を招くことは誰にだってあることだし、それが原因で予期せぬ事故が起こることもある。そんな場面を目にすることは何度もあるかもしれないが、そこは広い心で受け入れるのが一番良いと僕は思うぞ？」

「何言ってるんだ？」

亮はそう言つて明後日の方向を向く。

「つまり、モノノベ・ユウと同じことをしてしまつたと言うことですか？」

「………あれは事故だ。欲望を剥き出しにしてやった訳ではない」

どうやら亮も何かやらかしたようで、皆の視線は亮に釘付けだ。

「………あつ、そんなことより早くイリスさんの様子を見に行こうぜ。時間も限られてるし」

「あつ、大島くんが逃げた」



「逃げたんじゃない。さ、早く行こう」

そう言つて亮は足を動かす。それに続いて俺たちも歩き出す。

(そういうえば、この中の誰かがバジリスクの能力を受け継いだ可能性があるって亮が言つてたな)

俺が知る限り、バジリスクを倒した後には異常を訴えた者はいなかった。まあこの件は学園長が対応すると言つていたので、今は任せておくことにしよう。

俺は思考を切り替え、寮の扉を通り抜ける。

エントランスホールに入った途端、ひんやりとした空気が頬を撫でた。

適度な冷房が効いていて気持ちいい。エントランスホールの掲示板には色んな張り紙がされており、深月の宿舍より生活感があった。

女子のいい香りが薄らと満ちているせいで、妙にドキドキする。

「こちらですわ」

リーザの案内に従い、俺と亮はイリスの部屋に向かう。途中、何度か他のクラスの女子に出くわすが、その度にリーザが事情を説明してくれた。

各部屋の扉にはネームプレートが取り付けられており、それを見るとルームメイトがいる生徒と、一人だけで部屋を使っている生徒もいるようだ。

二階の廊下を進んで辿り着いたイリスの部屋には「イリス・フレイア」と書かれたプレートだけが掲げられていた。どうやらイリスにはルームメイトがいらないらしい。

「わたくしが先に入つて、部屋の状態を整えてきますわ。きつと散らかつたままでしょうから」

リーザはそう言つと部屋の扉をノックする。

「イリスさん、入りますわよ」

扉の向こうから「あ……うん」というくぐもつた声が聞こえてきたのを確認し、リーザは室内に素早く入った。そして待たされること約三分。扉の内側から開き、リーザが俺たちを手招きする。

「どうぞ。もう大丈夫ですわ」

「……お邪魔します」

「し、失礼します」

緊張しながら俺と亮はイリスの部屋に足を踏み入れた。火山島やエルリア公国へ赴いた時、現地でイリスに宛がわれた部屋へ入ったことがある。だが、本当の自室を見るのは当然ながら初めてだ。

床には落ち着いた色のカーペットが敷かれ、壁にはカレンダーが掛けられている。家具の空いた部屋には写真や綺麗な貝殻が飾られていた。あの貝殻はミッドガルの海で見つけたものだろうか。

リーザが事前に片付けたおかげか、特に散らかっている印象はない。

イリスは奥のベッドで横になったまま、入ってきた俺たちに笑顔を向ける。

「モノノベ……オオシマ……皆……お見舞いに来てくれて、ありがとう」

力のない声で礼を言うイリスの元に近づき、俺は熱で火照った彼女の顔を覗き込んだ。

「辛そうだな——大丈夫か？」

汗で額に貼りついた銀色の髪を掻き分け、俺はイリスの額に手を当てる。やはり、かなり熱い。

「うん……しんどいけど、お茶も飲んだし……すぐに良くなるよ。」

だから心配しないで」

イリスの返事を聞いて、俺は少し安心する。

「これ、深月から預かったプリントだ。今日の連絡事項や授業内容が纏めてある。あと、お大事になって伝言を預かってきた。」

俺は鞆からプリントを取り出し、ベッド脇のサイドボードに置いた。

「……ありがとう。ミツキちゃんにお礼、伝えて」

「了解だ」

俺は頷き、約束する。すると話の切れ目を待っていた亮たちが、イリスのベッドを取り囲んで一斉に話しかけ始めた。

「ゼリーとスポーツドリンクを買ってきたから冷蔵庫に入れてお

くね」

亮は手にしたビニール袋を揚げて言う。

「ボクは果物を持ってきたんだ。食べられそうなら、リンゴ剥くよ?」

アリエラは赤いリンゴを見せながら問いかけた。

「私とティアとレンはお菓子を買ってきたから」

「ティアはチョコレートなの!」

「ん」

ティアとレンと共にお菓子のお見舞いを差し出すフィリル。

「イリスさん、早く良くなってくださいね」

リーザはイリスの汗をハンカチで拭ぬぐってから、保冷シートを額に貼りつけた。

「皆……あたし、嬉しい。本当にありがとう」

イリスはよほど感動したのか、目尻に涙を浮かべて礼を言う。

そうして皆でイリスを励まし、できる限りの世話をした後、俺と亮はイリスたちに挨拶をして女子寮を後にする。



イリスさんの見舞いから帰った僕は、神界での仕事を終わらせ、”

世界神” 全員で第六世界の”世界神” アンジェリカさんの部屋に来ていた。

「ちよ……やめて……ください。ズルいですわよ。レイチエルさん」

「ふふっ、師匠が弱いだけです」

「なっ……言いましたわね。これならどうですか」

「っ……今のは、油断した」

レイチエルさんと恵さんは格闘ゲームをしており、熱を帯びた言葉を交わしながら二人は激しくぶつかり合う。

「二神とも……言つてて恥ずかしくないの？」

その光景を見ていた第六世界の”世界神” アンジェリカさんがゲームに没頭している二神ふたりに問いかける。

「今はそれどころではありません。ピンチなんですよ。逆転してみせますわ」

恵さんはテレビ画面に視線を向けながら早口で答える。

「アンジェリカ、ちょっと待つて。もう少しで終わるから」

レイチエルさんはコントローラーをカチャカチャと素早く操作しつつ、余裕のある声で言う。

「わたくしはまだ諦めていませんわよ！ 逆転のチャンスは必ずありますわ——」つて動きを封じられてしまいましたわ!？」

「とどめです」

「ぐっ……ああ、今度こそ勝てると思いましたが」

がくりと肩を落とし、コントローラーを手放す恵さん。

テレビ画面には双剣を持って倒れる騎士の少女と、勝利ポーズを決める薙刀を持つ少女が映っていた。

「悔しいですわ。またしてもレイチエルさんに負けるなんて……」

「これで三百戦全勝です。師匠もまだまだですわ」

レイチエルさんは胸を張る。ちなみに貧乳であるため、本人はそのことを気にしている。

「ではアンジェリカさん。次はあなたですわ。イライラした気持ちをあなたに全て撃ち込みますわ」

「要するに私はストレス発散相手ですね……分かりました。望むところですよ」

アンジェリカさんはレイチエルさんと代わり、コントローラーを握る。

「では私は魔法使いで勝負します」

そう言つて画面に映し出される魔法使いの少女をセレクトして、対戦が始まる。

ちなみにアンジェリカさんの家にはゲームがたくさんあり、月に一

回は”世界神” 全員集まって楽しんでる。

家にはテレビが数台あるため、先輩たちは好きなゲームをしている。

ちなみに僕は第十世界の”世界神” グランさんと3Dアクションゲームをしている。

エディットしたキャラクターを使ってダンジョンを進んでいる。

「もうそろそろ中間地点に着いてもいいはずなんだが……」

「そうですね。結構進んだと思いますが、もしかしたらボスキャラが出てくるかもしれませんね」

冒険者風のキャラは森の中を進み、体力ゲージは半分以上ある。

「あ、あそこに出口がありますよ」

画面には森の出口らしきものがあり、奥には光で先が見えない。

「そうらしいな。よし、敵が襲って来る前にクリアするぞ」

「了解」

返事をした僕はコントローラーでキャラを操り、もう一人のキャラクターと共に森を抜け出すが、その先は毒の沼地だった。二人のキャラは毒の沼地にはまり、体力ゲージがどんどん下がっていく。

「しまった!? 亮、早く抜け出すぞ!」

「ま、待ってください」

コントローラーをカチャカチャと素早く動かし、何とか沼地を脱出する。

しかし二人のキャラの体力ゲージは半分以上減ってしまい、赤く点滅している。

「ここは木の実を探して回復しましょう」

「ああ、敵を倒して肉を食うにはリスクがあるからな」

そう言ってキャラを操作して再び森の中へ足を踏み込む。

「グランさん、あそこに何かあります」

僕は森の先にある赤い何かを見つける。

「でかした。早速行くぞ」

二人のキャラは先にある赤い物体に近づく。しかしその赤い物体はスライムのようにうによよしていた。

「あれはレッドスライム。近くにいるモンスターそのものに変身するモンスターです」

「肉は無いから回復は難しいか。んっ、あれは？」

グランさんはレッドスライムの近くにドラゴンタイプのモンスターを発見する。

「インフィニティドラゴン!? 一撃必殺」インフィニティエンド”を使うほとんど登場しないモンスターだ」

「まさかここで出会うなんて……ってグランさん!? レッドスライムがインフィニティドラゴンに変身してます!」

「何っ!?!」

グランさんはレッドスライムを見ると、既にインフィニティドラゴンへと変身を遂げており、こちらに向けて攻撃態勢に入っている。

「仕方ない。」インフィニティエンド”に注意して奴を倒すぞ!」

「はい!」

それから僕たちはドラゴンに変身したスライムを倒し、近くにあった木の实を手に入れて生き延びた。



「おっはよーっ!」

翌日、イリスさんは元気な声で挨拶をして、リーザさんたち女子寮組と共に教室へ入ってきた。

「おはよう。よかった、風邪は治ったんだな」

「元気になってよかったな」

近づいてきたイリスさんに僕たちは挨拶を返す。

「うん、もうばっちりだよ」

ぐっとガッツポーズをして、復調をアピールするイリスさん。

皆が挨拶を交わしつつ席に着く中、イリスさんは足を止めて深月さ

んへ話しかけた。

「そうだ、ミツキちゃん。昨日貰ったプリントに学園祭をやるって書いてあったけど、本当なの？」

「ええ、学園長の発案で一ヶ月後に開催されることになったそうです。今日はイリスさんもいますし、たぶんクラスの出展内容を決めることになると思います」

深月さんはイリスさんに今日の予定を伝える。

「へー、楽しみだね！ ミツキちゃんは何かやりたいことある？」  
「一応オーソドックスな企画をいくつかピックアップして来ましたが……特に何かを強く推すつもりはありません」

深月さんは真面目な顔で答える。皆に選択肢を示すのが自分の役割だと割り切っているようだ。

「じゃあ、モノノベとオオシマは？」

イリスさんは僕たちにも話を振ってきた。

「僕は特にないな。悠はどうするんだ？」

「んー……俺も、別に何でもいいかな」

僕は十歳の頃に死んで神になったため、学園祭と言われてもピンと来ない。

悠も三年前より昔の記憶を失っているせいで、具体的なイメージが湧かないのだろう。

「えーっ！ 二人とも、もっと真剣に考えようよ！」

「そんなこと言われてもな。まあ、色々と案が出たら、その中から真剣に選ぶよ。それよりイリスさんは何かやりたいことがあるのか？」

「もちろん！ あたしは——」

と、イリスさんが答えようとしたところで予鈴が鳴った。

キーンコーンカーンコーンというチャイムの音が途絶えた後、イリスさんは悪戯いたずらっぽく笑う。

「——やっぱり秘密。後で発表するよ」

そう言っつてイリスさんは自分の席に着く。

病み上がりとは思えないほど、テンションが高い。それだけ学園祭

の開催が嬉しいのだろう。

確か、原作でもそうだった。そういえば何を発表したのかは忘れてしまった。

（まあ、思い出そうとしなくてももうすぐ知るからいいか）

そう思い、僕も自分の席に戻る。

そして深月さんの言葉通り、朝のホームルームで篠宮先生は一時限目の予定を変更して、学園祭の出展内容を決める時間にすることを告げた。

「——連絡事項は以上だ。後の進行は、ひとまず物部深月に任せる」

「分かりました」

篠宮先生に代わって教壇へ立った深月さんは、皆を見回してから口を開く。

「それでは、まず出し物の候補を挙げてもらいたいと思います。何か提案のある方はいますか？」

深月さんが問いかけると、真っ先にイリスさんが手を挙げた。

「はい！」

「イリスさん、どうぞ」

「あたしね、金魚掬すくいがやりたい！」

「……………え？」

しばらく沈黙した後、深月さんは呆気にとられた表情を浮かべる。

「日本のお祭りでは定番なんですよ？ フィリルちゃんに貸してもらった漫画にも、よく出てきたし」

「えっと、学園祭は祭りと言っても、そういうお祭りとは少し意味合いが違うんですが…………」

「ダメなの？」

悲しそうに問いかけるイリスさん。そういえばそんなことを言っていたことを思い出す。

「いえ、ダメというわけではありません。ただ現実的な問題として、金魚を用意するのは厳しいと思います。生きている動物の持ち込みに関して、ミッドガルはかなり厳しいですから」



「そっか……残念」

心底がっかりした様子でイリスさんは手を下ろす。原作と同じでよほど憧れを抱いていたのだろう。

「他に、何かありませんか？」

再び深月さんが意見を求めると、今度はフィリルさんが挙手して発言する。

「ホラーハウスとか、どう？ 日本風にして、お化け屋敷でも可」

「いいですね。日本では学園祭の定番です」

まともな意見が出たことに少しほっとした様子を見せながら、深月さんはフィリルさんの提案を黒板に書き留めた。

すると僕の後ろに座るティアちゃんが、悠の方を振り向いて訊ねる。

「ねえ、ユウ。オバケヤシキって何なの？」

「怪物とか幽霊とか、そういう怖い扮装ふんそうをして訪れた人を驚かせるアトラクションだよ」

ティアちゃんの質問に悠は答える。三年前より昔の記憶は失なくしてしまったが、知識までは失ってはいないようだ。

お化け屋敷と聞くと、家族で遊園地に行った時のことを思い出す。

”世界神”になってから仕事をする毎日で、一度も行ったことがない。

「えっ!? ティア、怖いのはヤなの」

「大丈夫さ。もしやることになっても、俺たちは怖がらせる側だ」

「けど、怪物になるのは怖い……」

——怪物になる。

その言葉はドラゴンに見初められた”D”が、同種のドラゴンに変貌へんぼうしてしまう現象を連想させた。

ティアちゃん自身も”赤”のバジリスクに見初められ、自身が同類の怪物になるのを怖がっていた。

悠とティアちゃんの会話を聞いたアリエラさんが苦笑を浮かべる。

「ホラーハウスは止やめておいた方がよさそうだね」

「ん」

レンちゃんがアリエラさんの言葉に同意して頷く。

「そうですね。皆が楽しめることが前提ですから」

深月さんは小さく息を吐き、黒板からホラーハウスの文字を消した。

この後も色んな案が出てきて、僕たちブリュンヒルデ教室の出し物は和風喫茶ということになった。

実行委員は悠とリーザさんがなり、一ヶ月後の学園祭に向けて動き出したのだった。

## リーザの涙

放課後、僕は”神界”で悠とリーザさんの様子を見ていた。

原作では第五巻で、リーザさんがメインの物語である。今回悠は彼女にユグドラシルとの契約を話す筈だ。

リーザさんはハイウオーカー・グループという多数の企業を傘下に収める大財閥の令嬢である。

ミッドガルの大口スポンサーでもあり、グループ傘下にはニブルの兵器を生産している企業もある。

彼女は将来を約束された人間で、原作と同じで両親から婚約者を決めるように言われているようで、しかも自分たちが認められた婚約者候補の中から選ばせるようだ。

大財閥の娘として生まれた時点での宿命らしく、リーザさんは婚約者の選択を少しでも先延ばしにしたいようだ。

彼女も悩んでいるようで、悠の悩みを解決する代わりに恋人の”振り”をしてほしいと頼むようで、最終的に悠は同意する。

ここで悠はリーザさんにユグドラシルとの契約を話すのだ。難しい難題ではあるが、彼女は悠のために引き受けてくれる。

しかし彼女が何故悠に頼むかは知っている。今は気付いてはいないが、彼に好意を抱いているからだ。

悠が入学してから厳しく接していたが、徐々に悠を仲間として受け入れ、今では恋心を抱くようになっていた。

本人はツンデレなため、認めようとはしなかったが、後に自分で自覚するだろう。

本当は覗くつもりはなかった。本来、原作ではイリスさんの見舞いに行った時に、誰かに協力を依頼するようにイリスさんから言われるが、そんな展開は起こらなかったのだ。原作通りに動いているか心配になっていた。

しかし、そんな心配は無駄だった。僕は杖の先端にある球体を画面にして悠たちの様子を映し出して見ていたので、電源を切って書類仕事を始める。

最近、歪みが全ての世界で再び出現するようになったが、突然消えるという現象が起こっていた。

調査に向かっていた第十一世界の”世界神”小早川恵さんは、神の仕業だと推測している。

実際、そんなことができるのは”世界神”だけであるが、僕を含めた先輩たちはここ最近歪みを修正していない。

誰の仕業か分からないので、僕たちは他の世界に行って調査をしなければならぬ。

今のところ、僕が担当する第十二世界はまだ歪みが起こっていない。

悠とリーザさんのやり取りを見る前にも確認したが、出現しなかった。

僕は書類仕事をしながら今回の件を考える。

「亮さん、そろそろ行きますよ」

第五世界の”世界神”生駒八代さんが近づいてきた。

「すぐに終わらせますので先に行ってください」

僕は手を休めずに八代さんに伝える。

「では私も手伝いますので書類を分けてください」

八代さんは自分の仕事をすぐに終わらせてから、他の神の仕事を手伝ってくれる優しい神様だ。しかし生真面目すぎるのがたまに傷だが。

しかし、頼りになるので見習いの頃から色々とお世話になっている。

最近と同じ世界を担当している”山の神”レベツカさんに好意を寄せているようで、仕事を終わらせた後は二神ふたりでデートをしているようだ。

もちろん誘っているのは八代さんで、生真面目さは少し治ってきている。

「亮さん、そちらの世界では歪みは未だに発生していないようですね」

書類を作成しながら八代さんが今回の件について話しかけてきた。

「そうですね……原因を突き止めてますが、まだ分かってはいません」

「自然現象ですから原因は私たちでも分かりませんよ」

「そうですが、第五世界では大量発生していると聞きますよ。何かあるのではないかと僕は思います」

八代さんが担当する第五世界では、十二の世界の中で歪みがたくさん発生しているようだ。

今のところ僕と八代さんが担当している世界では、突如歪みが消えるという現象は起こっていない。

八代さんはこの機会に原因を突き止めるつもりで僕を誘ってくれたのだ。

「本当にすみません。書類仕事を手伝わせてしまつて」

「お気になさらず。困った時はお互い様ですよ」

やはり八代さんは優しい。自分には厳しいが、他人には優しい神様で、皆も頼りにしている。

「これで終わりました。すぐに行きましょう」

「はい」

書類仕事を終わらせた僕たちは、第五世界へ向かった。



翌日の昼休み、購買でパンと飲み物を買った俺とイリスは、屋内のベンチで昼食を共にしていた。

日差しの強い屋外で食事をする生徒は滅多にいないため、屋上はがらんとしていた。

人気のない場所を選んだのはもちろん、リーザからの依頼ひとけについてイリスに説明するため。

昨日の放課後、リーザから両親の前だけ恋人の”振り”をして欲しいとお願いされ、俺は返事をまだしてはいない。

今日中には返事をするつもりだが、イリスにこのことを伝えるため、こうして昼休みに誘ったのだ。

ちなみに亮は色々忙しそうだったため、まだこのことは話していない。

たぶん神としての仕事があるのだろう。昨日までは普通に過ごしていたが、今日は授業が終わると何かと教室を出ていた。

「恋人の振りって……何で？」

説明不足だったため、まだ半ば呆けたまま、イリスは俺に質問する。

「理由はまだ話してくれなかった。俺はこの話を断るのなら、深入りさせたくないだろう。ただ、引き受けるとしても俺がするのはあくまで”振り”だし、それでリーザの悩みはきちんと解決するらしい」

「そ、そうなんだ……」

イリスは安堵したように呟く。

「まあでも、恋人を演じることになるわけだから……イリスが嫌だって言うなら断るつもりだ。その時はリーザから何とか事情を聞き出して、別の解決法を探してみる」

「モノノベ……」

ぼろぼろとイリスの瞳から涙が零れた。

「なっ——ど、どうしたんだ？」

「あたしのこと……気にしてくれたことが、嬉しくて。最初の話を聞いて、もうモノノベが、あたしのが好きじゃなくなったんだって……そう思ってたから」

「そんなわけないだろ。さっきは誤解をさせるような話し方をして悪かった」

俺はイリスの頬に右手添え、涙の粒を親指で拭う。

「……モノノベの焼きそばパン、半分くれたら許してあげる」

イリスは俺が持つてる焼きそばパンに視線を向けて、小さく笑った。

「了解」

俺はイリスの頬から手を離し、焼きそばパンを半分に割って差し出

す。

「うん——じゃあ、許した」

制服の袖で涙を拭き、イリスは俺から受け取った焼きそばパンをもぐもぐと頬張った。

それからしばらくして、彼女はぽつりと言う。

「一日だけなら……いいよ」

「無理してないか？」

先にパンを食べ終わって青い空を見上げていた俺は、イリスの方に視線を向けた。

「うん、だってリーザちゃんが困ってるんだもん。モノノベが力になってあげて」

「……分かった」

「お願いね。あ、でも——」

頷いた俺にイリスは微笑みかけ、顔を寄せてくる。

「い、イリス？」

動揺する俺の頬に、イリスの唇と舌が触れ——離れた。

「ほっぺに青のりが付いてたら、カツコつかないよ？」

赤い顔で言うイリスを見て、俺の顔も熱くなる。

「な……だ、だったら言ってくればいいだろ」

「そうだけど、今はこうしなかったの」

照れ臭そうにイリスは頬を掻き、少し早口で言葉を続けた。

「次の時間はホームルームだね。今日も学園祭の話し合いをするんでしょ？」

「ああ、昨日俺とリーザが放課後に話し合った内容を伝えた後、メニューの詳細や今後必要になる作業の役割分担を決める予定だ」

それを聞いたイリスは、首を傾げる。

「役割分担か……料理担当になったら、料理の練習とかあるよね？」

「ああ、たぶんな」

皆の料理指導は深月と亮に頼むことになるだろうなと考えながら、俺は頷く。

「じゃあ、あたしが何か作ったら味見してくれる？」

「もちろんだ」

「ホント!? 約束だからね？」

イリスは嬉しそうに声を弾ませ——いつもの明るい笑顔を見せてくれた。

◇

昨日は八代さんと共に第五世界に向かい、空間の歪みを調査をした。幸い何事も無く、大量発生した歪みを全て修正した僕たちは、そのまま”神界”へと戻り、仕事の報告をしたあとに深月さんの宿舎へと戻った。

その翌日、第一と第五、そして僕が担当する第十二世界以外の各地で歪みが突然発生し、そのまま消えるという現象が起きていた。

それを知ったのは午前五時前。僕はオートメイドに二人分だけの朝食を作るように設定し、食堂に朝食はいらないと書き置きをしてから宿舎を出た。

それから授業が始まる前にはミッドガルに戻り、休み時間の間に”神界”に向かって仕事をするというハードなことをしていた。

下界では昼休みで、”神界”では午後十一時半。つまり夜ということだ。

なんとか仕事を終わらせた僕はそのままミッドガルに戻ろうとしたが、第四世界の”世界神”エドワードさんが止めた。

”神界”での時間と下界の時間の流れは大きく違うので、僕はエドワードさんの家に泊まっていた。

「まさか歪みが大量発生してそのあとすぐに消えるってどういうことだ？」

「僕に聞かないでください。今は神官様たちが原因を突き止めてくれていますので、もう少し待ちましょう」



紅茶の入ったコップを片手に僕とエドワードさんは今回の件について話していた。

「あんた、そろそろ寝なさい。明日も仕事でしょ？ 亮くんも休みなさい」

キツチンから出てきたのはエドワードさんの奥さんで第四世界の”海の神”という地位に座っているカリーナさんが僕たちそう言った。

「ええ、いいじゃないか？ 俺たちはまだ起きてたいよ」

エドワードがそう言うのと、カリーナさんは手から水を生み出し、エドワードさんに向けて掛けようと構える。

「あんた？ そういえば夜中までゲームしてたね。それに酒を自分のクロゼットに隠して見つからないようにコソコソ飲んだんじやなかったかしら？」

「っ!?!」

カリーナさんはエドワードさんに微笑むがその笑顔が怖い。十二の世界にいる”海の神”をまとめ上げるカリーナさんは全王様を除いて神の中で怒らせたらやばいと言われている。

そんなカリーナさんを怒らせれば、”世界神”以上の潜在能力を解放するという噂もある。あれは本当かもしれない。

「わ、分かった！ もう寝るからそんなに怒らないでくれ。さあ、亮。今日は俺たちの部屋で寝ような？」

「そ、そうですね。では”お神さん”、おやすみなさい」

僕たちがカリーナさんに挨拶をすると、生成した水を消し、満遍の笑みを浮かべる。

「ええ、おやすみなさい。風邪引かないようにね。神様になっても風邪やインフルエンザはなるからね。亮くんもお腹出して寝ないようにね」

「はい、気を付けます」

そうやって僕はエドワードに続いて彼の部屋へと向かった。

本当に怖かった。神様にとっての人生の墓場とは、このことだろうと実感する。



昨日の放課後、学園祭の実行委員としてリーザと共に教室で書類作成をしていた。

リーザも結構重い悩みを持っていたようで、俺はリーザの両親の前で恋人の振りをすることになった。

そのため、俺たちは恋人を演じるためにリーザがおすすめるスポットで、恋人として自然に振る舞う練習をしていた。

深月に着替えて海に浮かぶのが彼女の楽しみ方のように、俺もその気持ちがあかった。

リーザが持つてきた昼食を食べ終え、俺はリーザに秘密を打ち明ける。

俺が三年前、故郷へ侵攻してきたヘカトンケイルを撃破するためにユグドラシルと取引を行い、対竜兵装を始めとする旧文明の兵器データを手に入れたこと。

だがその代わりに、記憶の一部をなってしまったこと。

取引を行うたびに体に負担が掛かり、亮が和らげてくれたこと。

そしてリヴァイアサン戦とフレズベルグ戦でも同様に新たな力を求め、また記憶を失くしてしまったこと――。

順を追って、俺は話していく。

リーザは最初顔を青くして何度も質問してきたが、話が進むに従って何も言わなくなった。

怒っているような、悲しんでいるような――どちらとも取れない表情でじつと見つめながら、黙って俺の話を聞いている。

「――そういうわけで、今の俺は三年前より昔のことを何も思い出せない状態なんだよ」

俺は現状を伝え、続けて今の気持ちを口にした。

「最初は力を得るために必要な対価だったんだと、記憶のことは

諦めてた。けど、このことを知っているイリスと亮が俺の記憶を絶対に取り戻すって言うてくれて……俺もやれることをやることにしたんだ。ただ——」

「わたくしに相談を持ちかけた、というわけですか」

俺の言葉尻を引き取って、リーザが言う。

その声音には、はつきりとした怒気が籠こもっていた。

俺は一瞬、自分が怯ひるんだのを自覚しつつ、首肯しゅけんする。

「ああ」

——パン！

左頬に衝撃が走った。リーザが俺の頬を平手で打ったのだ。

普段の俺なら反射的に避けていたかもしれない。

けれどリーザの瞳に涙が滲にじむのを見たせいで、全く動くことができなかつた。

「とりあえず——こうすることが恋人としても、クラスメイトとしても、適切な行動だと判断しました」

リーザは俺を叩いた手をぎゅつと胸元に抱き、静かに告げる。

「……そうだな。たぶん間違っていないと思う」

左頬がひりひりと痛むのを感じながら、俺は頷いた。

「色々と一人で抱え込む深月さんにも困っていましたが——あなたには彼女に輪を掛けてひどいですわ！ 勝手に代償を支払って、勝手にわたたくしたちを守って、勝手に苦しんで……自分勝手にも程があります！」

リーザは激しい口調で俺を責めるが、その瞳からは涙が零こぼれた。

「——すまない」

「謝るぐらいなら、もっと早くに相談してください！ せめてフレズベルグとの決戦前に打ち明けてくれたら、やれることがあったはずですよ！」

悔しげな表情を浮かべ、リーザは肩を震わせる。

「悪い。リーザを信用していなかったわけじゃないんだ。ただ、

深月だけには知られたくなくて……軽々しく口に出さなかつた」

俺はもう一度彼女に謝る。

「深月さんがこのことを知れば、わたくし以上に怒って悲しんで——深く傷つくでしょうからね。けど、それでも彼女は、あなたが全てを打ち明けることを望むはずですわ」

苦々しい声でリーザは言い、俺を睨んだ。

「——リーザは、深月にも話すべきだと思うのか？」

「もしもわたくしが、あなたのクラスメイトとして相談を受けていたら、そう主張したかもしれません。けれど今のわたくしは、あなたの恋人のつもりでいますから……あなたの望みを尊重しましょう」  
納得しているというわけではなさそうだったが、リーザはそう言うしてくれる。

「ありがとう、リーザ」

「お礼を言うのは早いですわよ。わたくしはあなたの相談に対して、まだ何のアドバイスもできていません。正直ここまでの難問だと思っ

て、まだ何のアドバイスもできていません。正直ここまでの難問だと思っ

「いや——リーザがそんな風に泣いてくれただけで、何だか気

持ちは楽になった。だから礼は言わせてくれ」  
目を少し赤くしたリーザに俺は心から感謝の言葉を告げる。

「全く……その程度で満足してもらっては困りますわ。わたくしを頼ったのですから、もっと高望みしてください。今すぐには無理ですが、手を尽くして何かあなたの記憶を取り戻す糸口を見つけてみます」

リーザはそう宣言した後、おもむろに体育座りから正座へと体勢を変えた。

「だから——とりあえずは、わたくしに膝枕されなさい」

「へ？ な、何でそうなるんだ？」

急な申し出に俺は戸惑い、リーザの白い太ももと彼女の顔を交互に見つめる。

「先ほどは恋人のつもりであなたを叱りました。ですから次は、慰めて差し上げます。ほら、早く横になってください」

リーザに肩を引つ張られ、俺は彼女の膝を枕にして寝転がった。柔らかな太ももの感触と、素肌から香る彼女の匂いに心臓がどくと高鳴る。

見上げた視界では、水着に少し圧迫された彼女の双丘が大きな面積を占めていた。

「えつと……り、リーザ？」

焦りながら彼女の名を呼ぶと、額にそつと温かな手が置かれる。

「大切なものを犠牲にしてまで、わたくしたちを守ってくれて——本当にありがとうございます。やり方は決して正しいとは言えませんけど……あなたがいなければ、わたくしは大切な家族を失っていたでしょう」

リーザは俺の頭を撫でつつ、優しい声こわね音で感謝の言葉を紡ぐ。

「とても……辛つらかったですわよね。ずっと頑張ってきたのですから、今だけでも心と体を休めてください。わたくしが——傍そばにいますわ」

「あ……」

彼女の言葉がじわりと胸の奥へ染み込み、心の底にへばりついていた焦燥感が消えていくのを感じた。

頭を撫でるリーザの手が気持ちよくて、俺は目を閉じる。

「寝ても構いませんわよ。今のわたくしは、世界中の誰よりあなたをたいせに想おもっている恋人です。安心して、全てを委ねてください」

子守唄にも似た、リーザの柔らかな言葉に導かれ、自然と眠りに落ちていく。

そうして俺は、彼女の膝枕で眠り——目覚めた時には夕方になってしまっていたのだった。

## 学園祭準備

リーザとの特訓から一日を挟んでの月曜日——ブリュンヒルデ教室は学園祭に向けて、本格的に動き出した。

とは言っても金曜日の放課後に申請した資料はまだ届いていないので、衣装の製作には入れない。

そのため、まずは料理の練習をすることになったのだが——。

「き、切るよ？ 切っちゃっていいんだよね？」

イリスが危なっかしい手つきで包丁を構え、皆を監督する深月に訊ねる。

「ああっ、待ってください！ 添える指は、丸めて猫の手にするように言っただじやないですか！」

深月が血相を変えて、イリスを注意した。

「ティア、ワカメ入れるの！」

「ストップ！ 量が多過ぎます！ お湯に入れると一気に増えますから、少しで十分です！」

さらに今度は鍋に大量のワカメを入れようとするティアの動きを深月が止める。

何と言うか、見ていると不安になってくる。

四時限目のホームルームを練習時間に当て、家庭科室に集まった俺たちは、簡単な和食メニューに挑戦していた。器材や足りない器具は、深月の宿舎から持ってきたものだ。

日本食をまともに作れるのは深月だけなので、先ほどからずっと皆の間を忙しなく行き交っている。

しかも料理経験が豊富なのは、深月と亮の他にアリエラだけらしく、あとは料理初心者ばかり。

亮は和菓子や洋菓子しか作ったことがないらしく、他の料理を作るのは初めてのようだ。

俺はニブルのサバイバル訓練で現地調達の捌き方は習っていたが、普通の料理経験はないに等しい。ただそれでも、その技術は役に立った。

「物部くん……切るの速いね」

「ん」

黙々と具材を刻んでいると、俺の両サイドで作業をしていたフィリルとレンが感心の眼差しを向けてくる。

「まあ刃物は扱い慣れてるからな。ただ味付けに関しては全然分からないから、深月任せだ」

サバイバル料理の味付けは、香辛料で臭みをごまかすとか、かなり大雑把なものだったので、繊細な和食への応用は利かない。

「こっちの作業は終わったよー」

向かいの調理台で作業をしていたアリエラが俺たちに言う。

「ふう……疲れましたわ。まさかオオシマ・リヨウも料理経験が豊富だとは知りませんでしたわ」

「まあ、スイーツしか作ったことがないから僕も少し疲れたよ」

アリエラと亮にサポートされながら仕事を終えたリーザが、額の汗を拭<sup>ぬぐ</sup>った。

そうして何とか四限終了までに調理を終え、昼休み開始のチャイムと共に食事が始まる。

メニューは白いご飯と味噌汁<sup>みそしる</sup>、卵焼き、焼き魚だ。

「モノノベ！ お味噌汁に入ってる大根はあたしが切ったんだよ！」

「ティアはお味噌とかワカメを入れたの！」

イリスとティアが、味噌汁を手にした俺にキラキラした眼差しを向けてくる。

「——いただきます」

俺は二人に促され、まず味噌汁に口を付けた。

だがその途端、予想外の甘さに思わずむせる。

「けほっ、けほっ……な、何だこの甘ったるい味噌汁は……」

俺の言葉を聞いたイリスは、不思議そうに首を傾<sup>かし</sup>げた。

「あれ？もしかして最後に入れたお砂糖が多過ぎたのかな？」

「い、イリスさん、私はそんな指示を出していませんよ！」

深月が慌てた様子で味を確かめ、イリスに詰め寄る。

「何だかちよつと塩辛かったから、砂糖で調整しようと思って」

「そういう時は水を足して薄めればいいんですよ……」

イリスの返事を聞いた深月は、額を押さえて溜息を吐いた。

「もう、イリス！ 勝手なことをしちやダメなの！」

「ご、ごめん……」

ティアにも怒られ、イリスはしゅんと肩を落とす。

「はは……」

俺が彼女たちのやり取り苦笑していると、横からとんとんと肩を叩かれた。

「物部くん、口直しに……私の、食べて？」

そちらを見ると、フィリルが一口サイズに切った卵焼きを差し出している。

「お、おい——あむ」

俺が返事を返事をする間もなく迫ってきた卵焼きが、俺の口に放り込まれた。

最初は普通の卵の味がしたが、一口噛んだ途端、ひどい苦さが口内に広がった。

「……苦い」

俺が正直に感想を述べると、フィリルはきよとんとした表情を浮かべる。

「あれ？ 焦げ目が付いていた方が美味しいって聞いたから、片面をじっくり焼いてみたんだけど……」

「焼き過ぎだつて。ほら、内側がもう真っ黒だろ？」

フィリルの皿に残る卵焼きを指差した。焦げた面を内側にして巻いてあるので、一見すると普通だが、その断面からは炭化した部分が覗いていた。

「料理つて奥が深いね……あ、苦い」

フィリルも自分で一口食べて、渋い顔をする。

「大島くんが焼いてくれた魚は美味しいよ」

「ん、初めての割には良いかもしれんけど、焦げ目が付き過ぎたな」



アリエラが箸で摘んだ焼き魚の身を口に運ぶ。  
そうして初めての料理練習は、色々課題を残して終了した。  
(次の練習では、俺もちゃんと皆の様子に気を配ろう)  
甘い味噌汁と苦い卵焼きを何とか完食した俺は、心にそう誓ったの  
だった。

◇

放課後、第八世界に来ていた。この世界を管理する”世界神”パトリックさんと共に歪みの調査に来ていた。

この世界に来てから三つの歪みを修正し、最後は洞窟の奥に歪みを発見した。

「この二日は普通通りですね」

「そのようだな。だが警戒だけはしろ。何者かがこの近くにいるという情報を出ている」

実は今回の任務は歪みの修正だけでなく、この世界で不審な動きをする人間がいるという情報を掴んだのだ。

「もし今回の件について嗅ぎ回ってる輩がいるかもしれない」

杖の先端にある球体をライトにしたパトリックが呟く。

「しかしその輩とは一体どんな奴でしょうか？」

「それを調べるのがオレたちの任務だ。あともう少しで着くぞ。油断するな」

「了解」

僕たちは洞窟の奥にいる人の気配を感じ取り、いつでも攻撃できるように体の内側で”気”を高める。

「そういえば気付いてたか？」

パトリックさんが僕に聞いてきた。

「何がですか？」

「八重ちゃんが髪飾りをしているのを」

「えい!? あ、ああ……そのことですか」

僕はドキツとして顔を逸らす。実は一週間前、エルリア公国から帰還した日の夜、”神界”に行き、全王さまや神官王、先輩たちにお土産を渡した。

八重さんにもエルリア名物の饅頭を上げたが、その後に八重さんと二神ふたりきりになった時に髪飾りをプレゼントしたのだ。

他の神たちに見られると色々とからかわれるので、二神ふたりになるタイミングを見計らって彼女に渡したのだ。

その時、八重さんは余程嬉しかったようで、抱きついて僕の頬にキスをしたのだ。

あの時は心臓が高鳴り、気絶しかけた。それ以降は距離を置いているが、今でもあの髪飾りをしてきている。

「もしかして亮がプレゼントしたとか」

「そ、そんなわけじゃないですよ。自分で買ったんじゃないんですか？」

この神はからかうのが大好きなので、そのことを知られたくない。

「ふくん、そうなんだ」

パトリックさんが微笑みながら僕の方に視線を向ける。やっぱりさっきの反応で勘付いたようだ。

「あ、もうすぐ出口ですよ。警戒してた方が良いと思いますよ?」

進んでいる道の奥を見ると、広場みたいになっているのが分かり、指差さて伝える。

「へえ……まあ、この件は”神界”に戻ってからにするか」

「遠慮しておきます」

そんな会話をしているが、僕とパトリックさんは気を緩めてはいない。いつ何が起きても対処できるように周りを警戒している。

広場にはまだ人の気配がある。こちらには気付いていないのか、ザクザクと音が聞こえ、”気”も最初に感じた時のまま変化しない。

僕たちが広場に出ると、一人の人間がスコップで穴を掘っていた。どうやらこの洞窟どうくつは鉱山のようで、聞こえていたのはスコップで穴を掘る音だった。

「どうやら他の人間は休憩しているようだな」

「パトリックさん、あそこに歪みがありますよ」

穴を掘っている人間の近くに空間の歪みを見つける。傍そばにいる人間は気付いていない。

「よし、気付かれないように修正してくれ」

「分かりました」

そう言っただけは歪みのある方に右手を向けて”神の気”を注ぐ。歪みは徐々に消えていき、人間に気付かれずに任務は完了した。

「じゃあ戻るか」

「そうですね。問題はないようですし、戻って仕事しましょう」  
そう言っただけ僕たちは来た道に戻っていった。

◇

「――昨日に言った通り、できる限りユグドラシルのことを調べてきましたわ。未確定情報を含めて、気になるものは全部ピックアップしました」

放課後、今日の活動報告書を纏まとめ終わったりリーザが鞄かばんから個人端末を取り出す。

彼女の指先には絆創膏ばんそうこうが巻かれていた。料理中に切ってしまったのだろう。

彼女は画面にユグドラシルの情報を表示させる。

まず目に飛び込んでくるのは、歪いびつな形をした大樹の画像だ。

「これ、ユグドラシルの写真か？」

俺はリーザに確認する。

「ええ、最近撮影された中では一番鮮明なものですわ。見ての通り、ユグドラシルは樹木に酷似した外見をしています。ただし普通の植物とは違い、根のような足で移動が可能。一年でおよそ二十メートルずつ成長しており、現在の体長は五百メートル近くあります」

領き、彼女は説明をしながらユグドラシルに関する情報を映し出す。

「最初の出現地点はノルウェーの山岳地帯。そこからゆっくりと南下し、現在はデンマークとドイツの国境付近で動きを止めています。あとユグドラシルがドラゴンだと認定されたのは二十年前ですが、実際に現れたのはヴリトラが姿を消した直後だという話も聞きました。まあ正確な記録はないため、本当かどうかは分かりませんが」「ヴリトラが消えた直後って……」D”の生まれる前になるよな。そんな話は初耳だ」

俺は驚きながら言う。

「話の真偽は別として、そのように主張する方がいることは確かですわ。当初は”突然現れた大きな木”と地元民の間で噂うわさになっていたようです。リヴァイアサンなどが活動を開始するまで動くことはなかったそうなので、ドラゴンだと認識されなかったのでしょうか」二十五年前に黒のヴリトラが出現し、その後人間の中に”D”が生まれ始め、それに呼応するかのように他のドラゴンたちが現れた……。この順番なら、ドラゴンが”D”をつがいとするために目覚めたという解釈が成り立つ。

けれど”D”が生まれる以前に出現していたとなれば、ユグドラシルの目的は”D”をつがいとすることではないと考えるのが自然だ。

「あなたの話ですと、ユグドラシルは他のドラゴンの殲滅せんめつを求めているんじゃないよね？」

「ああ、ユグドラシルは確かにそう言っていた」

「だとするならば、出現時期についての話にも少し信憑性しんぴょうせいが出ますわね。けれどこれはあくまで未確定情報ですから、その上に推論を重ねるのは危険です。今はまず、わたくしが調べてきた他の情報を聞いてください」

リーザは端末画面を切り替え、調べた情報を説明する。

「ユグドラシルに対してはこれまで三度、大規模な攻撃が実行されましたが——そのどれもが兵器の不調によって失敗に終わります」

「兵器の不調？ 攻撃が効かなかったとか、防御されたとか、そういうことじゃなくてか？」

「はい。ユグドラシルに近づいた戦車や航空機は例外なく異常をきたし、遠距離から放たれたミサイルも明後日の方向に飛んで行く有様だったそうです」

俺はリーザの説明を聞いて腕を組む。

「これはわたくしの仮説ですが、ユグドラシルは電気に関する能力を持っているのかもしれませんが。異常をきたしたのはコンピュータ制御の兵器だけでなく、電気を動力とする全てのものだったという話ですから。つまり、あなたから兵器データを受け取る際に脳が記憶できる情報は電気信号のを使っているかもしれません」

「どうやらリーザも俺と同じことを考えていたらしい。」

「そうだな。その可能性は高いと思う」

俺はリーザの言葉に同意して頷く。すると彼女は、心配そうに俺を見つめる。

「二つ……確認したいのですが、あなたは普段からユグドラシルと繋がっているんですの？」

慎重な口ぶりで問いかけてくるリーザ。もしかしたら電気信号で体に乗っ取られることを心配しているのかもしれない。

「いや、心の中で呼びかければ反応するが、繋がったって感じがするのは情報を受け取る時だけだ。それに亮から不用意に呼びかけるのは注意するように言われたから、ドラゴン戦以外では呼びかけていない」

「そうでしたの。それなら安心しましたわ。彼にもユグドラシルについて話しておきますので、今後はユグドラシルの電氣的な干渉を受けたと仮定して、記憶を取り戻す方法を探ってみます」

「ああ。ありがとう、リーザ」

俺はリーザに礼を言い、今日の実行委員の仕事を終わらせた。

しかしその二週間後——”緑”のユグドラシルと”青”のヘカトンケイルが接触し、地上から二体のドラゴンが消滅した。

## 青と緑

「——なかなか、壮観な景色ね。跡形もないわ」

キーリ・スルト・ムスペルヘイムは、爆心地を眺めて呟く。

ユグドラシルの来訪によって放棄された、ドイツ・デンマーク国境付近の田園地帯。そこには今、何もなかった。

荒れ果てた畑も、寸断された道も、巨樹の姿をしたドラゴンすらも、存在しない。

何もかもが消え去った跡には、幅数キロに渡る巨大なクレーターが広がっている。綺麗な半球状にくり抜かれた大地は、そこで凄まじい爆発が起こったことを示していた。

「いったい、ここで何が……」

キーリの隣で呆然と呟くのは、ジャンヌ・オルテンシア。ニブルの軍人であり、訳あってキーリと共に行動している。

彼女たちは小高い丘の上から彼方のクレーターを見つめている。

「さあね。その瞬間を見ていない私たちに分かるのは、これがヘカトンケイルとユグドラシルの接触によってもたらされた結果だということだけよ。まさかこれほどとは、私の想像を遥かに超えているわ」

まるで世界の一部を抉り取られるかのような風景を見ながら、キーリは答えた。

「ニブルなら何が起こったのかを記録しているはずだ。また基地に潜り込めば詳細を探れるが——どうする?」

ジャンヌは巨大なクレーターを見ながらキーリに聞く。

「あら、ジャンヌちゃんにしては珍しく積極的ね。けど必要ないわ。大事なのは過程じゃなくて、結果だから」

クレーターの方から吹く風に髪を靡かせ、目を細めるキーリ。

「結果? どういう意味だ」

聞き返すジャンヌに、キーリは硬い表情で頷く。

「それはね、これでユグドラシルが滅びたのかどうか——それだけが重要なよ」



「つい先ほどニブルから報告が入った。ユグドラシルとヘカトンケイルが——消滅したらしい」

「なっ!?!」

二週間間後、ようやく発注した資料が届き、俺たちブリュンヒルデ教室は衣装の製作に入っていた。

意外にもファイリルは裁縫のスキルがあるようで、深月と共に衣装製作の指揮の下、作業をしていると、篠宮先生が緊急の連絡を告げた。

「まず経緯を説明しよう。復活したヘカトンケイルがユグドラシルのいる方へと向かっていることは、早い段階で判明していた。だが過去二十年間、ヘカトンケイルは他のドラゴンと接触したことがない。今回も途中で進路を変えるだろうというのが、大勢の見方だったと聞いている」

作業を一時中断して自分の席に着き、二体のドラゴンが消滅した経緯に耳を傾けた。

「だがその予想は外れ、ヘカトンケイルはユグドラシルへ接近。ニブルは異常事態であることを認識し、両者の動向を観察した」  
皆は真面目な顔で話を聞いている。

「……………」

普段はどこか余裕の表情の亮でさえも、真剣に聞いていた。

ユグドラシルは俺にとって単なるドラゴンの一体ではない。現状では協力関係にある存在だ。そして俺の記憶を取り戻す上、最後に頼ることを考えていた相手でもある。

取り返しのつかない事態が起こってしまった予感に、俺は強い焦りを覚えていた。

「モノノベ……………」

そんな俺に気付き、左隣に座るイリスが心配そうな眼差しを向け

る。

俺は何とか「大丈夫だ」と無理やり笑い、篠宮先生の話に意識を集中した。

「そして今から一時間前、距離約二千メートルまで接近したヘカトンケイルに対して、ユグドラシルが攻撃を始めたそうだ」

「攻撃!?! ドラゴン同士が戦ったんですの!?!」

リーザが驚きの声を上げる。

それは当然の反応だ。ドラゴン同士の戦闘など、これまで例外がない。

「ああ、テリトリーを侵す者に対する迎撃行動だったのかもしれないが、これに応じてヘカトンケイルも戦闘を開始。ユグドラシルの枝や根に刺し貫かれながらも進撃を続けたヘカトンケイルは、眩まばゆい光を放つて大爆発を起こした」

「自爆して、刺し違えたということでしょうか?」

深月が掠かすれた声で篠宮先生に問いかけた。

「観察していた分には、そのように見えたかもしれんな。けれど実際のところは分からない。ただ結果として、ユグドラシルがヘカトンケイルもろとも消し飛んだのは事実だ」

それを聞き、深月は表情を硬くする。

「これまでの例を考えるなら、ヘカトンケイルは滅んでいないと見るべきでは? いずれ復活するかもしれませんが」

「そうだな。これまでの事例を考えて、君の考えも否定できん。だが今のところ復活したという報告はない。つまり、一時的な状況かもしれないが———現在この地球上には、我々を脅かすドラゴンがいなということになる」

皆が息を呑む音が重なり、教室がざわつく。

二体のドラゴンが消滅し、”黒”のヴリトラは消息不明———。

篠宮先生の言う通り、俺たちの脅威となるドラゴンは世界のどこにもいない。

「まだ気は抜けないものの、今回の事態は我々にとって好都合なものだと考えていいだろう。事態に動きがあればまだ報告する。君



「私たちは学園祭の準備に戻ってくれ」

そう言うのと篠宮先生は慌ただしく教室を後にした。今回の件で色々とまだやることがあるに違いない。

「兄さん、私も少し行つてきますね」

深月は篠宮先生を追うように席を立つ。竜伐隊りゅうぼつたいの隊長として、より詳しい話を聞きに行くつもりなのだろう。

「ああ……分かった」

俺は上の空で返事をしたが、急いでいた深月は俺の様子には気付かず、早足で教室を出て行つた。

(これは、本当に好都合な状況と言えるのか?)

俺は教室の天井に視線を向けながら考える。

ユグドラシルが他のドラゴンと同様に人類の敵ならば、確かに好都合。けれど味方であったのなら、大きな損失だ。

もしも姿を消していたヴリトラが現れ、俺たちが窮地きゆうちに陥つた時――

――もはらユグドラシルの力は頼らず、新たな兵器データを得ることができない。

フレスベルグの時のように神である亮でさえも敵わないかもしれない。

記憶に関する問題もあるが、それを別にしても手放しで喜べる事態ではなかった。

そして放課後――いつものように実行委員として教室へ残つた俺とリーザだったが、今日はそこにイリスと亮の姿もあった。

「そういえばイリスさんもオオシマ・リヨウと同じで彼の事情は知っているんでしたわね」

リーザは真剣な表情のイリスを見て、思い出したように呟く。

「うん、だからユグドラシルが消滅したって聞いて……心配になったの。モノノベ、大丈夫?」

俺の顔をじつと見つめ、問いかけてくるイリス。

「俺は何も変わらない。ユグドラシルにそんな異変が起きていた

ことも、全く気付かなかった」

不安げなイリスを安心させるように微笑み、異常がないことを伝えた。

「気付かなかったということは、やはり奴とは常に繋がっているわけではないようだな」

篠宮先生の話から一度も口を開かなかった亮が言う。

「まあ、悠の驚いた顔を見た時からそう思っていたがな。それよりユグドラシルのことだが、僕の予想ではまだ生きているかもしれない」

「っ!? どうしてそう思う?」

「奴は電気信号みたいなものでこれまでニブルの兵器を不調させている。それは人や植物も同じことだ。近くにある植物に意識を移し、操りそして復活するかもしれない。これまで事例がないだけで、完全に消滅したとは考えにくい」

亮の言うことは一理ある。バジリスクと同じで俺たちが知らない能力を持っている可能性がある。

「貴方はそう考えていますのね」

「ああ、悠の記憶を奪うことだってできるからな。僕の推測では電気関係の能力じゃないかもしれない。それはあくまで能力の一部であって他にあると考えている」

亮はそう言って天井に目を向ける。するとリーザが俺に質問をぶつけてきた。

「ユグドラシルには呼びかけてみたのですの?」

「いや、まだだ。亮の言う通りに不用意に呼びかけてはいない」

「賢明な判断ですわね。ただ、今は多少のリスクを冒してもユグドラシルが健在かどうかを確認すべきだと思います。オオシマ・リヨウの言う通り、本当に生きているのなら、返事を応じるかもしれないわ」

「分かった」

俺は頷き、心の中でユグドラシルを呼んでみる。

(ユグドラシル、聞こえるか? 聞こえていたら返事をしてくれ)

だが、いくら待っても声は返ってこない。

「……ダメみたいだ」

俺が首を横に振ると、リーザは腕組みをする。

「ということは、ユグドラシルは消滅したと考えるべきかもしれないな。俺の推測は外れてしまったな」

「いえ、貴方の推測は全て間違っていたわけではありませんわ。ですがそうなる選択肢が減りましたわ。ですが、記憶を取り戻す方法は他にあるかもしれません。彼のことにはわたくしに任せて、オオシマ・リヨウとイリスさんは学園祭の準備に精を出してください」

リーザがそう断言すると、亮とイリスが頷く。

「了解した」

「うん……分かった。でも、リーザちゃん——」

一旦言葉を切り、リーザを真正面から見つめるイリス。

「記憶を取り戻す方法はあたしじゃ思い付かなくて、リーザちゃんに頼るしかないけど——モノノベのことは、あたしも精一杯支えるから」

「え……?」

リーザはイリスの強い眼差しに気圧けおされてか、少し体を後ろに引く。

「モノノベに思い出を託されたのはあたし。だから全部リーザちゃんとオオシマ任せにはできないよ。あたしも、自分のできることを探してみる」

につこりと微笑み、イリスは鞆かばんを持って教室の入り口へ向かう。

「モノノベのことも、学園祭も、一緒に頑張ろ！　じゃあ——また明日！」

「は、はい」

手を振るイリスにリーザは上擦かった声で応じた。俺も「また明日」と挨拶し、手を振り返す。

「じゃあ僕も宿舎に戻るか。それじゃ」

「ああ」

そう言つて亮もイリスの後を追うように教室を出る。

「あの子……何だか、変わりましたわね」

「そうか？」

俺はいまいちピンと来ずに、首を捻<sup>ひね</sup>る。

「ええ、少し前までは頼りなくてふらふらしている印象でしたのに、今は何か強い芯があると感じます」

「強い芯……」

それは俺がイリスに強<sup>し</sup>いてしまったものかもしれないと、俺は罪悪感めいたものを覚えた。

そんな俺の様子をリーザは窺<sup>うかが</sup>うように見つめ、躊躇<sup>ためら</sup>いがちに口を開く。

「あの……もしかして、あなたとイリスさんは——」

けれど言葉を途中で切り、そのまま押し黙<sup>も</sup>つてしまうリーザ。

「何だ？」

どうしたのかと俺は彼女を促<sup>う</sup>す。

「いえ——やはり、余計な詮索<sup>せんさく</sup>をするのは止<sup>や</sup>めておきます。わたくしはあなたの……本当の恋人ではないんですから」

どこか自分に言い聞かせるような口調でリーザは答え、少し無理を感じる笑みを浮かべた。

「さ、お仕事しますわよ。まずは今日の活動報告書からです」

そうして俺たちはいつものように肩が触れる距離で椅子に座り、実行委員の仕事の片付けていく。

## 学園祭

「では第三回、”エーテルウインド霊頭粒子”測定実験を行う」

学園の地下にある特別演習場に、白衣を着たシャルロット学園長の声が響いた。

「はい」

悠は短く返事をし、左手を掲げる。

ダークマター上位元素で形作った架空武装の銃を構え、目標地点に横たわる巨大な冷凍マグロに向けて構える。

「学園長」

「何だ？」

「この絵面、少しシニール過ぎませんか？」

悠はジークフリートを構えながら学園長に問いかける。

「……言うな。私とて、笑いを……堪こらえているのだ」

肩と声を震わせながら答える学園長。

「つて、もう笑ってますよね?! 滑稽こっけいだと思うなら、もつとまとも

なものを用意してくださいよ……」

「だから言ったじゃないか。僕が人間の死体を作るから冷凍マグロなんて必要ないですよ」

冷凍マグロを作ったのは僕であるため、学園長が用意したものではない。

「何を言う。そなたが作ってくれたことはありがたいが、もしアスガルやニブルにバレたらどう説明すればいいのだ？」

学園長が肩を竦すくめる。

「まあ加工食品なだけ、前回よりマシか。今回は僕が作りだして正解だったな」

フレスベルグ撃破により悠が獲得した新たな力——エーテルウインド霊頭粒子の生成。

ユグドラシルとヘカトンケイル消滅の報告があつてから四日後——今日はその測定と分析を行う、三回目の実験だ。

悠がフレスベルグの能力が継承されたことが判明してから約二週

間の間に、もう二回も実験は行われている。

だがそのどちらとも、満足な成果は上がられていなかった。それは“  
エーテルウインド  
霊顕粒子”の持つ、特殊な性質のせいだった。

「悠が物質変換で作りに出す金色の粒子が、フレズベルグの能力と同質のものだからな。魂を具現化する媒介物質だと学園長は考えているんだ。まあ、死体が残っている特殊な“気”がその人間に具現化するから実際は魂じゃないからな。それでも効果を観測したいがために僕が一番大きな死体を作り出したということだ」

「ま、そういうことだ。ありがたく思え」

亮が説明した後、学園長がびしつと冷凍マグロを指差して胸を張る。

前は食堂棟から借りた加工肉などで試したのだが、特に何も起きなかった。そこで今回は僕が丸々一匹、神が作り出した冷凍マグロを作りだしてそれを試そうというわけだ。

ちなみに僕はこれまでの実験で神としての見解を述べた。それを元に今日を入れて三回も実験ができているのだ。

「人の死体を運び込むのは、外部の人間に不審に思われるし、アスガルに報告しなくちゃならない。だから僕が死体を作ってもそれの上に報告するわけにはいかないということだな。しかし体の大きさを選ぶより脳の大きさを選んだ方が良かったんじゃないのか？」

僕が説明し、最後に問いかけると学園長が舌をなめずりして言う。

「そう言うな。国際的組織であるミッドガルには倫理上の制約も多くてな。知能が高い生物を実験に使うと、各方面の反発が大きい。黙って実験してもバレる可能性がある。それにマグロなら実験後に美味しく頂けるではないか」

「今のが本音なんですね……」

悠が肩を落として学園長に向けて言う。

「ふふ、ちよつとした役得だ。それにここには神がいるのだ。いつでも作り出すことができるから便利ではないか」

「実験のために能力を作ったんだ。それ以外には使わんど。それより悠、早く実験を始めてくれ」

「わ、分かった」

僕が急かすと、悠は返事をしてジークフリートを構え直した。意識を集中してフレスベルグの力を思い描いているようだ。

「エーテル・フリッド」  
「霊顕弾」

悠はイメージした力を弾丸に変え、トリガーを引いた。

放たれた上位元素の弾丸は金色の粒子に変換され、冷凍マグロを包み込む。

マグロにある”気”がその形へと具現化したら、今以上にシユールな光景になるだろうと思い、僕は観察する。

だが特に何も起こらないまま、金色の光は薄れて消えてしまう。

「今回もダメだったな」

「ああ、やはり高度な知性体である必要があるかもしれん」

学園長が残念そうに呟いた。

「——これで今日の実験は終わりですか？」

悠がジークフリートを下ろして問いかけてくると、学園長が首を横に振る。

「いや、今回はもう一つ試したいことがある。マイカ、位置に着け」

学園長がそう呼びかけると、演習場の扉が開いてメイド服姿のマイカさんが現れた。

彼女はつかつかと冷凍マグロの方へ歩を進め、その傍そばで足を止める。

「今度はマイカに向かって撃て」

「——え？」

悠が本気かと学園長の瞳を見つめ、僕は説明する。

「フレスベルグと交戦した際、僕たちは金色の粒子に包まれて身動きが取れなかったんだ。今やるのはそれを再現できるかの実験だ。最初は僕が実験台だったが、今の僕にやっても効果がないからな。だからマイカさんがやることになったんだ」

「けど、いきなり人間相手に試すのは危険じゃ……」

「心配ない。マイカはとても頑丈だ」

マイカさんを心配する悠に、学園長は自信を込めて断言する。

「大丈夫ですから、どうぞ遠慮なく」

当のマイカさんもニコニコと笑みを浮かべながら、悠を促した。

実験台に**抜擢**されたというのに、全く緊張している様子がない。異様なほど肝が据わっているようで、やはり人間レベルとしても只者ではない。

「……分かりました」

不安そうな表情を浮かべながら、悠はジークフリートの銃口をマイカさんに向け、フレスベルグの力をイメージした弾丸を放つ。

撃ち放たれた弾丸は金色の粒子となって、マイカさんの体を包み込む。

「どうだ、マイカ？」

学園長は彼女に呼びかけるが、返答がない。マイカさんは笑みを顔に貼りつけたまま、硬直している。

「マイカさんは喋れないんです。僕や悠もフレスベルグにやられた時に動きを封じられましたから」

僕は学園長にそう言いつつ、マイカさんの様子を見守った。

しばらくして粒子は薄れ、それと共にマイカさんは**まばた**と瞬きを行う。

「あ、動けるようになりました」

手を握ったり開いたらしながら報告するマイカさん。

「ふむ、フレスベルグ戦の状況は再現できたが、魂の具現化を確認することは叶わなかったが、これでそなたの力がフレスベルグと同質のものである可能性が高まった」

満足そうに学園長は頷き「ごくろうだった」と僕と悠の背中を叩いた。

実は今回の実験に悠は“神の気”を使わないように言っている。シャルロット学園長に知られば、これからずっと実験に付き合われるためだからだ。

「残る大きな懸念は行方の分からないバジリスクの能力か。ブリュンヒルデ教室の誰かが持っているかだな」



「そうですね。学園祭に備えてという名目で健康診断を実施したが、前回の検診から竜紋りゆうもんに変化のある生徒は見つかりませんでしたし」

マイカさんが近づいてきて、相槌あいづちを打つ。

「外的な変化がないということは、本人も気付いてない可能性が高いな。いったいどうすればいいのか……」

「実は神が使える道具、神器しんきがたくさんあるんです。神々の世界に戻って準備をしますので皆に気付かれないように検査してみましようか？」

「ほう、神の世界にも道具があるのか。これから先バジリスクの能力を知らずに開花する可能性があるかもしれないからな。では学園祭が終わってから頼むぞ。マイカも良いか？」

「はい、私も方法を調べておきます。大島さんありがとうございます」

話し合いを始めた僕と学園長、そしてマイカの間に悠が遠慮気味に声を上げる。

「あのー……今度こそ、実験は終わりですよ。学園祭の準備もあるんで、もう戻っていいですか？」

「ん？ ああ、すまない。そなたらは多忙だったな。けれど少し待ってくれ。まだ別件の用事が残っている」

学園長は僕とマイカさんの会話を止める。

(まずい、やっぱりあのことか)

僕はあのかことを思い出す。

「別件？」

にやりと笑う学園長に悠は聞き返す。

「ミッドガルの学園長として頼みたいことがあるのだ。学園祭が二日間行われることは、そなたも知っているな」

「はい、まあ……」

「二日間にした理由は来場者を区分するためだ。ミッドガルに係おおよけが深く、公おおやけにしていけない機密情報も知る立場の人間と、そうでない者とを一緒にはできない」

「なるほど、悠や僕はミッドガル関係者の中では男の”D”と知られているが、世間には知られていない。どんな波紋を呼ぶか分からないからか」

「そういうことだ」

世間では僕たちのことは知られていない。フィリルさんの両親——エルリア公国の王族は、ミッドガルに多額の出資を行っているため、少しは知っているのだ。

つまりミッドガルの出資者であるリーザさんの両親は二日目に来るということになる。

「そこで考えたことがある」

学園長はパチンと指を鳴らす。するとマイカさんが小走りで扉の向こうへ駆けて行き、すぐに何かを持って戻ってきた。

「そなたらのことを知らぬ者たちは、学園祭一日目に纏めて招く。その際、そなたらにはこれを着てもらいたい」

学園長がマイカさんに目くばせすると、彼女が運んできたものを僕たちに差し出す。

「学園の制服……？ こ、これって女子用じゃないですか！」

「つまり僕たちに女子生徒の振りをするというのか」

「そういうことだ」

以前マイカさんが僕たちの体をメジャーで測ったのはこのためだった。しかし僕はどうしても聞きたいことがあった。

「学園長、前に神々と連絡するといつて僕が通信機をあげましたよね。あれはどうなりました？」

「ああ、実は神たちにも事情があるようだったが、ほとんどは初日に来るそうだ」

教室中に僕が笑い者になる未来が見える。



慌ただしい時間はあつという間に過ぎていき、学園祭一日目——  
僕と悠は試練の時を迎える。

「ふ、ふふ……に、兄さん、りよ、亮さん……か、可愛いですよ」  
変わり果てた僕と悠の姿を眺めた深月さんが、お腹なかを抱えて笑って  
いた。

「——悪いが、可愛いと言われても全く嬉しくない」  
女性用の制服を身に付け、長髪のウィッグを被かぶった悠が仏頂面で言  
う。

「お前のほうがまだマシだ？　僕なんて着物だぞ？　初日が当番  
だから制服以上に恥ずかしいぞ」

僕は悠と同じ長髪のウィッグを被り、薄紫色の着物を着ていた。

「そ、そうだな……」

「悠、この場で破壊するぞ？」

僕の格好を見て笑いを堪えている悠に右手を翳かざして破壊のエネル  
ギーを作り出す。

「ま、待ってくれ……もう笑わないから」

「……しようがないな。まあ、我慢するしかないか」

学園祭一日目はほとんどの”世界神”が来るそうだ。全王様と神  
官王様は仕事で来られないが、笑い者になるのは避けられない。二日  
目は八重さんが来るように二神ふたりで色々と楽しめる。

「オ、オオシマ……似合うよ」

「う、うん、そうだよ……似合ってる」

「イリス、フィリル、笑ったら、大島くんが……可哀想じゃないか」

「アリエラさんだって笑っていますわよ。ですが……オ、オオシ  
マ・リヨウ……なかなか着慣れてますわね」

「……お姉ちゃん」

最初は悠と深月が教室に入り、皆は女装した悠に関心したりしてい  
たが、僕が入った途端に皆は笑いを堪え始めた。

「レンちゃんは僕の格好を見て”お兄ちゃん”ではなく、”お姉ちゃ

ん”と呼ぶ。

「リョウ、似合ってるの」

「……………ありがとう」

ティアちゃんは関心した眼差しを向けてくれるのでこれが唯一の救いだった。

「そ、それでは、本日の予定を確認しますから、皆さん適当に座ってください」

深月さんは皆に指示を出して、自分は教壇の上に立つ。

適当に座れと言ったのは、もう教室内には僕たちの席がないからだ。

前日のうちに教室から机を運び出し、代わりに客用のテーブル席を四つ配置し、教室内は”何となく和風っぽいもの”で装飾されていた。

深月さんが持ってきた雛人形ひなが、多数の招き猫に囲まれて飾られている光景は、どこことなくシユールだ。ちなみに招き猫はレンちゃんのもので、エルリア公国に買った招き猫も飾ってある。

「二日目の和風喫茶運営を担当するのは、イリスさん、アリエラさん、レンさん、フィリルさん、そして亮さんです。イリスさんたちは衣装に着替えた後、五名はウォーミングアップと試食を兼ねて全員分の朝食を作ってもらいます」

「うん、頑張る！」

イリスさんが深月さんに気合いっぱいの声で返事をする。

「学園祭の開始は午前九時。最初のシフトはイリスさんと亮さんが接客で、フィリルさんとアリエラさん、レンさんが調理です。けれど混雑した場合は、接客を一人にして三人で調理を行なってください」

「よど 澱みない口調で深月さんは説明を続ける。

「午後になったら、混雑具合を見て一人ずつ三十分の休憩を取るように。その際は接客と調理二人ずつの体制でお願いします。では、準備開始です！」

深月さんの号令と共に、今日の当番であるイリスさんたちが教室を

出て行った。

調理や着替えは隣の空き教室で行うため、彼女たちが着替えたらすぐに向かうつもりだ。

しばらく経ち、アリエラさんが僕を呼びに来て教室を後にする。

◇

朝食後、開店準備に取り掛かった僕、イリスさん、フィリルさん、アリエラさん、レンちゃんの四人だったが——そこで予想外の事態に直面する。

「すごい列だね……」

廊下の窓から外を窺うかがいながらイリスさんが呟く。

まだ開店前だというのに、ブリュンヒルデ教室の入り口には長蛇の列が出来ていた。

「なんでこんなに混んでるんだ？」

ブリュンヒルデ教室はドラゴン戦の中心として戦ってきたため、学園内では英雄とされていると深月さんが言っていた。しかし列を見ると終わりが見えず、他に理由があるのだろう。

「これは大島くんのせいだね」

「え？ どうしてだ？」

フィリルさんの言葉に疑問を投げかけると、アリエラさんがやれやれと肩を竦すくめる。

「今日は大島くんが店頭に出るって噂を聞きつけて集まったんだよ。しかも女装で出るから女子は盛り上がっているとと思うよ」

「ん、”お姉ちゃん”は人気者。おかげでお客さんがいっぱい」  
レンちゃんがこくと頷く。今日は僕のことを”お姉ちゃん”と呼ぶそうだ。

「この状況で大島クンを接客から外したら、間違いなくクレームが出るね。だから大島くんにはずっと接客担当だよ」

「わ、分かった」

僕はこの状況に困惑しつつ、アリエラさんの言葉に頷いた。

そういえば原作でも同じ状況があったことを思い出す。悠の女装に盛り上がっていたため、僕がこの格好でも同じことが起きるだろう。

「もうすぐ時間だよ。早く準備しよ」

「そうだな」

イリスさんの言葉を聞いた僕たちは開店準備を再開した。時間ギリギリで準備が終わり、学園祭が始まった。

「わ、本当に亮様だ！ 着物姿が凛々しいです！」

「亮様、握手してください！」

「あの……サインを貰ってもいいですか？」

黄色い声を上げる客の女子生徒たちに、次々とそのようなことを求められ、僕は焦る。

（ちよつと待て、これは予想外だ）

もしかしてからかわれてるのかと考えるが、僕を見つめる少女たちの瞳は本気で、その迫力に気圧けおされそうになる。

今は女子生徒の客が多く外部の人間は誰もいないため、女子生徒たちは僕のことを亮様と呼んでいる。

僕以外の四人は隣の空き教室で調理をしているため、接客は僕一人だけだ。

お客の注文を全て聞き、空き教室に向かって注文の内容を伝える。

「ここまでとは思わなかった」

「あはは……大島くん、大変だね」

「ああ、たが始まったばかりだからな。頑張らないと」

少し気合を入れた僕はイリスさんと共に料理を持ってお客の元へ戻った。

少女たちの勢いに圧倒されそうになるものの、なんとか接客をこなす。

「やっと解放された……」

午後になつてようやく女子生徒の列が途切れ、外来のお客が並び始めたところで、僕は調理を行う空き教室へ下がることを許された。

途中、悠と深月さんの両親が来たので、接客をしながら挨拶をする。今日のためにミッドガルに来てくれたようで、家族が恋しくなってきた。しかし気持ちを抑えて仕事に集中した。イリスさんたちにも挨拶し、女子生徒の列が途切れたと同時にブリュンヒルデ教室を後にする。

接客はアリエラさんとフィリルさんが行なっており、空き教室には僕とイリスさん、そしてレンちゃんちゃんの三人だ。

「もう少しで材料が無くなるよ？ どうする？」

イリスさんが料理の材料を見ながら問いかけてくる。女子生徒がおかわりをたくさんしてきたため、余分に発注された材料も無くなりかけていた。

「材料が無くなったら今日の運営は終わりだな。フィリルさんやアリエラさんにも伝えてるか」

「ん」

そう言いながら調理を進め、外来のお客を全員捌さばいた。教室はお客が誰一人おらず、材料はもうすぐ底を尽くようだった。

「ふう、なんとか終わったね。材料もあと十人分しかないよ」

フィリルさんが材料を確認しながら言う。

「じゃあ無くなったら終了の張り紙を出すか」

僕はそう言いながら張り紙を手にする。すると空き教室からアリエラさんが入ってきた。

「大島クン、知り合いの人が十人来てるよ」

「……来たか」

覚悟は既に決めている。ブリュンヒルデ教室には“神の氣”を十人ほど感じ取っていた。それも僕と八重さん以外の“世界神”だ。

「よし、その人たちで終わりにしよう。アリエラさん、終了の張り紙を出しておいてくて」

「了解」

そう言って僕はアリエラさんに張り紙を渡し、ブリュンヒルデ教室へと向かう。

「いらっしやいませ、お客様」

僕が教室に入ると”世界神”全員が目を丸くする。そして数秒後、教室中に笑い声が響いた。

「ガハハハハ、亮！ お前なんだその格好は！」

第三世界の”世界神”ルドルフさんが手を叩きながら爆笑する。

「ルドルフさん、笑ったら……失礼ですよ」

笑いを堪えながらルドルフさんの肩に手を置くのが第二世界の”世界神”弥生さん。

「亮！ 傑作だよ。ギャハハハハハ」

第一世界の”世界神”義晴が僕を指差して笑い、他の”世界神”たちは腹を抱えて笑っていた。

「そりやどうも……」

引きつった笑みを浮かべて義晴の言葉に応える。イリスさんたちは料理を運びに教室に入る。

「おお、亮さんのご友人ですか。始めまして。生駒八代と申します。亮さんがいつもお世話になっております」

そう言っただけを立っただけは第五世界の”世界神”八代さん。それに応じて先輩たちが共に一礼する。

「い、いえ、こちらこそ。オオシマには助けられてばかりです」

イリスさんが料理を提供して言う。

「今後ともよろしくお願いします」

第十一世界の”世界神”恵さんが笑顔で言う。しばらくして料理が運び終わり、一日目の運営は終わりを迎えた。

「とても美味しいわ。毒を使った魔術を使えばもつと美味しくなりますね」

アンジュリカが卵焼きを口に運びながらとんでもないことを口にし、彼女の発した単語に反応したフィリルさんが首を傾<sup>かし</sup>げる。

「毒？」

「なっ!?! なんでもないよ。気にしないで」



「う、うん」

アンジェリカちゃんは神々最強の魔術師。レンちゃんと年が近いが、幼い頃から魔術師としての教育を受けてきたみたいだ。

「おい亮、酒はないか？ 日本食を食べてると酒が欲しくなる。ぐはははは」

グランさんが手を挙げて酒を持ってくるように言ってくる。

「学園祭ですよ。あるわけないじゃないですか」

「ご飯うめくな。墓場で食っても不味くない味だ」

パトリックさんが意味の分からないことを口にしてきた。

「そこ、変なことを言わないでください。さっさと食べて帰れ」

教室には僕たち”世界神”とイリスさんたちしか居ないので、いつもの口調で話す。

「大島クンの知り合いって変わってるね……」

アリエラさんが引きつった笑みで話しかける。

「そういう神たちなんだよ。飲み物買っで行くけど何がいい？」

「じゃあお茶をお願い」

そう言っってイリスさんたちに飲み物のリクエストを聞き、女子用の制服に着替えて近くの自動販売機へ向かう。

廊下を歩いていると軍人らしき”気”を感じ取る。相当な手練れのようなだが、どこか悠な少し似ていた。

僕はその気と原作を照らし合わせてある軍人を思い出す。原作でしか知らないため、ここで会うのは初めてだ。僕は人気ひとけのないところに向かう。

後ろから付いてくるのはさつき感じた”気”を放つ人間。廊下を歩き、人がいないところで足を止める。

後ろをつけていた軍人は同じく足を止める。そして僕は口を開く。

「軍人にしては流石だと言っておこう。だが所詮はその程度。気配を完全に消せていないな。午後に貴方がミッドガルに来たことは気配で分かってましたよ」

僕が振り返るとニブルの軍服を着た男——ロキ・ヨツンハイム少佐がいた。

「驚いたよ。私の想像を遥かに超えているよ。まさか気付いていたとは……」

ロキ少佐は笑みを浮かべながら近づいてくる。

「ロキ・ヨツンハイム。ニブルの少佐にして、悠の元上司か。学園長を——いや、”灰”のヴァンパイアを憎んでいるそうだな……英雄の息子」

僕が威圧するとロキ少佐は無意識に身構えた。

「申し遅れたな。ブリュンヒルデ教室の大島亮だ。悠の親友で特殊な力を持つ”D”。まあ、知ってるか。ロキ・ヨツンハイム」

正直僕は自分が認めた相手以外は威圧して話すようにしている。この男も後に役には立つが、所詮は人間レベルが低い存在。大したことはない。

「ご丁寧にも。自己紹介は必要ないね。君に会うのは初めてだが、本当に只者ではないようだ」

「そりやどうも、嬉しくないけど。先に言っておくけど——」  
「っ!?!」

高速で動き、ロキ少佐の間合いに入り、鳩尾みぞおちを殴る。その間に隠し持っていたカメラを盗み取った。

どうやら学園に仕掛けるつもりで持ち込んだようだ。僕はすぐにロキ少佐から離れる。

「悠やミッドガルの生徒、先生、そして学園長や秘書に危害を加えてみる。僕がその場で”破壊”するからな」

ロキ少佐は鳩尾を押さえながら僕の方を見る。最初は信じられないという表情をしていたが、徐々に落ち着きをとりもどした。

「なるほど、本当に大したものだよ。私が反応できないなんて……」

「あんたは舐めすぎだ。これを見な」

僕はロキ少佐から奪ったカメラを見せるとロキ少佐は驚く。

「破壊」

僕はカメラに向けて唱えると、カメラは光の粒子となって消えていく。

「分かったらさっさと帰れ。ニブルには良い方向をするようお願いするよ」

彼はニブルの視察団としてミッドガルの学園祭に派遣されたのだらう。

「……それは脅しかな？」

「いや、単なるお願いだ」

僕がそう言っているとロキ少佐が急に笑う。

「ふふ、やはり君は面白い。私の部下に欲しかったが仕方ない。今回は引き下がるとしよう」

「僕の実力を分かってないようだな。さっさと帰りな」

「ああ、そうするとしよう。また会おう、大島亮君」

そう言っってロキ少佐は後ろを振り返って歩く。

(また会おう、まあそうだな。また会う日が来るな)

そう思った僕は近くの自動販売機で飲み物を買って教室に戻った。その途中、深月さんが焦った表情で廊下で会い、悠が倒れたことを知る。

## 誤解

「よかった——気が付いたんですね。兄さん」  
瞼まぶたを開けた俺は、こちらを覗き込む深月の顔と、夕日に赤く染まった天井を目にする。

「……、は……」

まだはつきりとしめない意識で俺は深月に問いかけた。

「保健室ですよ。兄さんが突然気を失ったと聞いて、すごく心配したんですからね？ 検査では特に問題ありませんでしたが、もうしばらく休んでいてください」

深月は安堵あんどと腹立ちが混ざった複雑な表情で、俺を見下ろす。

「俺は……どのくらい寝てたんだ？」

「大体五時間ほどですね。残念ながら一日目の学園祭は終了してしまいました」

それを聞いて、俺は大事なことを忘れていたことに気付く。

「父さんと母さんは？」

「兄さんの寝ている顔だけ見て、帰りましたよ。全く……安心させるどころか、余計な心配を掛けてどうするんですか？」

深々と嘆息して深月は言う。

学園祭一日目、リーザとティアと共に他クラスの出し物を回っている最中に俺は急に気を失い、目が覚めた時には保健室にいた。

「そっか……もう、帰ったのか」

申し訳なさを感じながらも、俺は少しほっとしてしまった。

三年前より昔の記憶を失った俺は正直両親と会うのが怖かった。

「そういうえば、ティアと出し物を全部回る約束をしたのに——  
—悪い事をしたな」

心に余裕が生まれると、そんな後悔が湧き出てくる。

「大丈夫です、ティアさんも気にしていませんよ。皆、兄さんのことをただただ心配していました」

「今……ティアたちは？」

「教室で今日の後片付けと、明日の仕込みをしています。兄さん

は明日の当番ですが、無理はしないでくださいね」

深月は俺を労わ<sup>いた</sup>つてくれるが、その言葉に頷<sup>いた</sup>くことはできない。

「いや、大丈夫だ。明日はちゃんと自分の仕事をするよ」  
俺はそう言つて、体を起こす。

明日は喫茶店の当番だけでなく、リーザの恋人役として振る舞う大事な役目もあるのだ。

決して休むわけにはいかなかった。

ミッドガルにいる間だけでも自由でいたいと願う彼女の望みを、俺は叶<sup>かな</sup>えたい。

俺にとつてもこの学園は、重い縛鎖から逃れられる楽園のような場所だ。

だからこそ俺は、リーザの思いを理解できるような気がする。

「兄さん」

けれど深月は、そんな俺をとても心配そうに見つめていた。



「来てくれてありがとうございます」

僕は先輩たちに頭を下げた。明日の準備が始まる前に僕は今日来てくれた”世界神”たちにお礼を言う。

僕が”世界神”になつて五年と半年が経とうとしていた。それまで先輩たちに勉強と戦い方を教えてもらつた師匠のような存在。それまで僕は何一つ恩を返すことができなかった。

そのため僕は今日は先輩たちを学園祭に招待した。僕が顔を上げると皆は腹に手を当てて笑いを堪えていた。

「……何がおかしいんですか？」

「そりやおかしいよ。亮が頭を下げるなんて……今日は槍が降つてくるんじゃないか」

腹を押さえながら義晴が笑いながら言う。

「僕だって頭ぐらい下げますよ。そのどこがおかしいんですか？」

「神としてのプライドが高いお前がそんな行動することがおかしいって言うってんの」

「ガハハハハハハ、そりやそうだな。亮、あんまり恩返ししようなんて思うなよ」

「え?」

ルドルフさんの言葉に僕はおかしな声を出す。

「亮さんが元気であるだけで私たちは十分ですよ。ですからそんな気を回さなくて大丈夫です」

八代さんが呆れながら僕の肩に手を置く。

「そうですよ。今日は亮くんのおかげで楽しめました。感謝しますよ」

「弥生さん……」

僕は改めて先輩たちの凄さを思い知る。

”世界神”は変わり者が多く、正直関わりたくない時もある。しかし彼らは芯だけはしっかりしており、周りを惹きつける力を持っている。僕が気を使っていることを見抜いていたようだ。

「なんだか……すみません」

「謝りすぎだぞ? 義晴なんかお前と同期のくせに偉そうに我々と接しているんだから、ちよつとだけ甘えてもいいんだぞ?」

パトリックさんがそう言うと、先輩たちはうんうんと頷く。

「あまり甘えすぎるとアタイが成敗しますからね」

「レイチエル、あなただって”世界神”になった時からわたくしたちに甘えてたと記憶してますが?」

「し、師匠! それは忘れてくださいよ!」

レイチエルさんが恵さんの背中をポカポカ叩くと皆は笑う。

「そんな訳だ。亮は重い悩むことがあるからな。まあ、まだ子供だから仕方ないか」

「あんたは大人の癖にゲームや漫画が大事だけどね」

エドワードさんにツツコミを入れるグランさん。自分がどうでも

いいことに気を配っていたことに呆れてきた。

「それじゃあわたくしたちは帰りますわ。明日はいよいよデートですわね」

「なっ!?!」

恵さんの言葉に僕は驚く。学園祭二日目は第七世界の”世界神”八重さんを招待している。

このことは僕と八重さんしか知らない筈が、何故皆が知っているのか疑問が湧く。

「誰だつて知ってますわ。ここにいないと言うことは明日招待している。そういうことですよね?」

僕は見抜かれたことに戸惑う。すると弥生さんが近づいてきて僕の耳元で囁く。

「八重さんは楽しみにしていますよ。どうか彼女を……姪めいをよろしくお願いします」

実は八重さんは第二世界の”世界神”飯島弥生さんの姪で本人はそのことを知らない。

「はー!」



翌日——学園祭二日目。

一日目と同様、早めに登校したブリュンヒルデ教室のメンバーは、打ち合わせを終えてから朝食の準備に移る。

今日の接客と調理を担当するのは、俺、深月、リーザ、ティアの四人。

俺は女子とは別室で着替え、調理を行う空き教室に入った。

女子の着替えはやはり時間が掛かるようで、深月たちは少し遅れて現れる。

「ユウ、お待たせなの!」

薄い桃色の着物に着替えたティアが、元気よく駆け寄ってきた。

「わあ！ ユウ、すっごく素敵なの！」

甚平風の和服を着た俺に、彼女はキラキラした眼差しを向ける。

「——ありがとうございます。ティアも可愛いぞ」

俺は少し照れ臭い気持ちになりながら、ティアの頭を撫でた。

「えへへ……嬉しいの。昨日のユウは可愛かったけど、やっぱりカッコいい方がティアは好きなの」

「そ、そのことは思い出さなくてくれ……」

俺は額を押さえて、溜息を吐く。

「兄さん、もしかしてまだ調子が悪いんですか？」

だがそんな仕草を勘違いして、深月が心配そうに問いかけてきた。

「いや、大丈夫だ。ちよつと昨日の女装を思い出して、気分が暗くなっただけだ」

俺の返事を聞いた深月は、苦笑を浮かべる。

「なら、よかったです。今日訪れるのは兄さんと亮さんの存在を知っている方々です。安心してください」

「ああ——と、それにしても……深月は和服がよく似合うな。かんざしもいい感じだ」

俺はまじまじと着物を纏う妹の姿を眺める。

着物の出来も素晴らしいが、それを着る深月自身も細かい部分に気を遣っていた。結い上げた髪に輝くかんざしが、全体の雰囲気を引き締めている。

「あ、ありがとうございます。このかんざしは昨日、父さんと母さんから貰ったんですよ」

頬を染めて、かんざしに手を触れる深月。

「そっか……和風喫茶をやるから、用意してくれたんだな」

結局俺は昨日会えなかったので、両親の顔を思い浮かべることもしかない。そのことに対し、罪悪感に近い思いを抱く。

だが俺がそんなことを考えながら深月の着物姿を見ていると、脇から遠慮がちに袖を引かれた。

「も、モノノベ・ユウ。わたくしの着物はどうなんですか？」



少し責めるような声でリーザが問いかけてくる。山吹色の着物を着た彼女はとても新鮮で、魅力的だった。

「リーザ、すごく綺麗だ」

今日は大事な本番。今から気合を入れるために真っ直ぐに瞳を見つめて感想を言う。

「はわっ」

だが俺がそう言った途端にリーザは顔を真っ赤にする。

「……ありがとうございます」

胸を押さえ、リーザは瞳を逸らす。

「兄さん、リーザさん……いったい何をやっているんですか？」

そんな俺たちを見ていた深月が、訝いぶかしげな視線を向けてきた。

「な、何でもありませんわ！ さあ、朝食を作りますわよ」

ごまかすようにリーザは作業用のエプロンを身に着けながら言う。そうして朝食の調理が始まった。

俺はリーザと並んで味噌汁みそじるの具材を刻みながら、まだ顔の赤い彼女に小さな声で問いかける。

「なあ、リーザ。いつ皆に説明するんだ？ 結局ミーティングじゃ言えなかったし……」

今日リーザと恋人の振りをすることを、俺たちはまだ皆に伝えていない。

「この後、朝食中に話すつもりですわ。あなたが口を出すと妙な誤解を与えるかもしれないので、説明は全部わたくしに任せておいてください」

「了解。確かに説明の仕方を間違えると、まずいことになるかもしれないから……」

恋人役を頼まれたとイリスに説明した時、俺は彼女に凄まじい誤解をさせてしまった。それを考えるとリーザの方が適任だろう。

だが、その時の俺は気付いていなかった。

リーザが普段の調子を出せないぐらいに、緊張していたことを。

「あ、あの！ 実は今日、わたくしはモノノベ・ユウと恋人になりますの！」

和気藹々とした食事中、何の前置きもなくそう叫んだリーザの第一声に、皆がポカンとした顔を向ける。

「ちよつ……リーザ、その言い方はまずいだろ！」

口は出すなと言われていたが、俺は黙っていられずに声を上げる。

「あつ——そ、そうですわね」

我に返ったリーザは慌てながら席を立ち、こほんと咳払いをする。

「驚かせてしまい、申し訳ありません。少しわたくしの話を聞いてください」

呆然としている皆の注目を集めてから、リーザは改めて説明を始めるが、今度も大事な部分がすっぽ抜けた内容になってしまう。

「わ、わたくしは今日、彼を恋人として両親に紹介します。つ、つきましては、それに関するご協力を——」

「両親について……リーザ、物部さんと結婚するの？」

フィリルが焦った表情でリーザに問いかける。

それを聞いたティアも血相を変えて、叫んだ。

「い、いくらリーザでもダメなの！ ユウはティアの旦那さまになるの！」

そして表情を失くした深月が、俺に視線を向ける。

「——兄さん、どういうことですか？」

さらにイリスが泣きそうな顔で俺を見つめた。

「も、モノノベ……リーザちゃんと結婚しちゃうの？」

「つて、何でイリスまで誤解するんだよ！ イリスには事情を説明してあるだろ！」

俺は混沌とした状況の中、イリスにツッコむ。

「へえ……二人がそんな関係だったなんて、知らなかった。いつからなんだい？」

驚いた様子のアリエラに訊ねられたリーザが、あたふたとしながら答える。

「え、えつと、彼に今回の件をお願いしたのは一月前ですわ」

「そんな前から二人は付き合ってたんだ……そういえば最近、やけに仲が良かったもんね」

「ん」

うんうんと頷くアリエラに、レンも同意する。

「ち、違いますわ！ そういう意味じゃないんです！」

慌てて誤解を解こうとするリーザ。しかし説明しようとするればするほど、話はおかしな方向に解釈されてしまう。

すると今まで一言を発していなかった亮が口を開く。

「つまり二人は今日一日恋人の振りをして、リーザさんの両親に紹介する。そういう解釈で良いんだな？」

「「「「「え？」「」「」」」」」

亮の一言で俺とリーザ以外の皆はおかしな声を上げる。

「は、はい、そうです。両親には恋人役として紹介しますの。です  
ので、どうかご協力をお願いします」

こうして亮のおかげで誤解を解くことができた。しかし今までの亮ならこの状況で俺やリーザをからかうだろうと思っていた。  
そんな疑問を抱きながら皆に恋人の振りについて説明した。

## 神とデート 2

朝食後、教室を出た僕は学園の乗降口へと向かった。今日は第七世界の”世界神”井上八重さんを学園祭二日目に招待しているため、迎えに行っている。

本当は昨日を招待しようと考えていたが、何故か二神ふたりきりで学園祭を楽しみたいと思ったからだ。

自分でもどうしてそんな感情を抱いたのかは分からない。しかし他の”世界神”たちと纏まとめて招待したくないと真っ先に思った。

先輩たちに知られないようにしたが、バレてしまったのは予想外だった。でもここはからかわれても我慢するしかない。”神界”に戻ってどんなことがあっても我慢しようと思意する。

僕は階段の段差に足を踏み出しながら気持ちを落ち着かせていた。朝食中は心臓がバクバクと激しく音を立てて悠たちに気付かれないか心配でたまらなかった。

悠たちには一神ひとりで他クラスの出し物を楽しむと言っているため、昨日当番だったイリスさん、フィリルさん、アリエラさん、レンちゃんふたりの四人を避ける必要がある。

彼女たちに嘘を吐いてしまったという理由もあるが、一番の理由は知られたくないというのが本音だ。あの時「友達を招待しているから二神ふたりで楽しむ」と言えばよかったと後悔している。

しかしもう遅い。何としてでも彼女たちから避けなければならない。僕は深呼吸をしながら一階の昇降口へ向かう。

その近くには外部の方が大勢いる。僕と悠の存在を知る人間たちを招待しているとシャルロット学園長が言っていたので、普段通りに男物の制服を着ている。

昨日は女装していたので、八重さんを誘わなくてよかったとほっとしている。

周りを見回すが八重さんの姿がどこにもいない。既に”神の気”を感じ取っているが、”気”は小さくてどこにいるのかが分からない。

僕は”神の氣”を発して待っていると、八重さんの”氣”がこちらに近づいてくるのを感じた。

僕は近づいてくる”氣”の方向に目を向けると、私服姿の八重さんを発見する。

日除けの帽子を被り、肩が露になった涼しげな白いワンピースを身に着けていた。

さらにエルリア公国で買った花の髪留めを八重さんにプレゼントしたため、彼女の髪にあるのを見て、僕は少し嬉しくなる。

八重さんは僕に気付き、笑みを浮かべながら近づいてきた。

「亮ちゃん、おまたせ〜」

そのまま近づいて僕に抱きついてきた。

「ちよっ!?!」

八重さんの二つの双丘の感情が体に伝わってくる。僕の体を両手で抱きしめ、八重さんは僕の体に顔を埋める。

彼女は公共の場でも大胆な行動をしてくるので恥ずかしくなる。廊下にいる人たちは僕たちに注目しているが、しばらくしてヒソヒソと小声で話す声が聞こえてくる。

「や、八重さん、人が見えます！ は、離れてください」

「え〜、仕方ないな」

八重さんは渋々僕から少し離れ、日除けの帽子を取る。

「亮ちゃん、今日は誘ってくれてありがとう」

「気にしないで。今日は二神ふたりで楽しみましょう」

「う、うん」

僕がそう言うと八重さんは頬を赤く染めて頷く。

「髪留め付けてくれたんですね」

「ええ、亮ちゃんからのプレゼントだもの。特別な日に付けるって決めてるからね」

八重さんは照れながら右手で髪留めを触れる。すると何かを思い出したかのような表情を浮かべる。

「義晴くんから教えてもらったけど、今日は女装はしてないんだね」

「あの野郎……余計なことを」

どうやら義晴の馬鹿が昨日の女装を八重さんに話したようだ。

「映像を見たけどとても可愛かったよ」

「あ、ありがとう」

八重さんの笑みを見ていると、何故か女装のことを言われても照れてしまう。

「そんなことより早く行こうよ。今日は思う存分に楽しんでね」

僕は彼女の手を引つ張りながら階段を登る。すると彼女は恥ずかしそうに目を逸らす。

「これって……デートだよな？」

「え？」

八重さんの言葉に足を止め、時間が止まったように感じる。

デートという言葉聞いた僕は顔が赤くなるのが分かる。デートと言えば男女交際で必ずある行動である。僕たちは付き合っていないが、周りから見れば彼氏彼女に見えるのだろう。

「そ、そうだね。周りから見れば付き合ってるように見えてるから、デートと誤解されるかもね」

「亮ちゃんはそれでいいの?」

八重さんが首を傾げながら問いかけてくる。

「……周りは気にしないようにしようよ。まあ、嫌じゃないから」  
「っ!?!」

僕の言葉を聞いた八重さんは顔を真っ赤にして下を向く。

「……わたしも」

八重さんは小声で呟くが、何を言ったのかは聞こえなかった。周りはまだ僕たちを注目している。

「そ、そろそろ行きましょう。人に見られてますよ」

「えっ!?! そ、そうだね。い、行きましょう」

そうやって僕の手を繋ぐ八重さん。彼女の温もりを感じながら、そのまま僕たちは階段を上りながら他のクラスへと向かった。

ミッドガル学園の”D”たちは、皆それぞれの”教室”に所属している。

クラス数は僕たちのブリュンヒルデ教室を筆頭に——ガルヒルデ教室、ヘルムヴィーゲ教室、シュヴァルトライテ教室、オルトリンデ教室、ジークルーネ教室、ヴァルトラウテ教室、グリムゲルデ教室、ロスヴァイセ教室——の九つ。

これらの教室名は原作通り、北欧の戦乙女フルキューレから取られている。僕や悠のような例外はいるが、基本的に”D”は若い女性ばかりなので、”ドラゴンに立ち向かう乙女”という意味を込めて戦乙女フルキューレの名を付けられたのだろう。

レンちゃんのように極めて頭の良い人間や、ティアちゃんのように事情があつて例外的に配属される人間もいるが、基本的には年齢の近い人間が同じクラスになる。

上位元素生成能力が覚醒するのは第二性徴期前後が多く、悠や深月さんに近い年代の”D”が所属するクラスは複数ある。そして逆に幼い”D”は少ない。

ロスヴァイセ教室は、そんな幼い”D”たちが集められたクラスだ。

まずはホラーハウスに行きたいと八重さんが言ったので、最初にロスヴァイセ教室の出し物に向かったのだが——。

「ありがとうございます！」

「また来てねっ！」

お化けの仮装をした少女たちに見送られ、僕はふらふらと彼女たちの教室から外に出る。

「っ、疲れたな……」

「ええ、若い子のテンションに付いていくのは疲れてしまうわ」  
八重さんもげつそりとした表情で頷く。ちなみに下界と神界の時間の流れは違う。ドラゴンボールに出てくる”精神と時の部屋”と同じで、下界での一分は神界では六時間となるので僕と八重さんは約二千年も生きてきたことになる。

見た目は悠と同じくらい若く、神界での年の流れは下界と同じであ

るため年齢は十六歳である。

ロスヴァイセ教室の出し物はホラーハウス。しかし恐怖感はずゼロで、終盤は僕の存在に気付いたようで仮装少女が興奮してじゃれつかれてしまいかかり消耗した。

「次はグリムゲルデ教室で劇があるみたいだぞ」

「そこに行きましょう。少し落ち着きたいわ」

僕たちは次にグリムゲルデ教室へと足を向ける。

グリムゲルデ教室の出し物はショー形式らしく、入口で中世風の衣装を着た少女が呼び込みをしていた。

「えっ……りよ、亮様ですか!？」

呼び込みの少女は僕たちの方を見るなり、顔を輝かせる。

「亮様?」

八重さんは首を傾げながら僕を見る。

「クラスメイト以外からはそう呼ばれているんだよ」

「へえ、そうなんだ」

そういえば彼女は原作でティアちゃん仲間が良かった少女だ。名前はマユミちゃん、ミストルティンを支える竜<sup>りゅうばつ</sup>伐隊の中に加わっていた。

すると教室の中から一斉に他の少女たちが顔を出す。

「わ、ホントに亮様だ! 隣にいる人も素敵な方ですわ」

「やはり亮様も悠様と同じくらいカッコいいですね!」

彼女たちは黄色い声を上げながら感激する。

「人気者みたいね」

八重さんがクスツと笑う。

「あの、この方は亮様のお知り合いですか?」

マユミちゃんが八重さんを見ながら問いかける。すると八重さんが僕の腕に抱きついてきて、とんでもないことを口にする。

「はい、亮ちゃんはわたしの彼女です」

八重の言葉にグリムゲルデ教室の少女たちがさらに黄色い声を上げる。

「ちよっ?!? 何言ってるだ!?!」



「今日は亮ちゃんとデートなの。亮ちゃんを慕ってくれてありがとう」

八重さんが僕の腕に抱きしめながら頭を下げる。

「いいいえ、とんでもないです。今日は楽しんでください。ほらマユミ！ 早く案内して！」

そうやって僕たちへきらきらした眼差しを向ける少女。

「亮様の彼女、綺麗な人ですわ」

「そうだね、お似合のカップルね」

「あたしたち、応援しなくちゃ」

彼女たちの声が聞こえてきて、非常に落ち着かない。

「亮様、えっと……」

「私は八重よ、井上八重」

「八重様ですね、ではこちらへ！ 特等席にご案内しますね」  
マユミちゃんはそう言っ僕たちを導く。

彼女たちの教室には小さな舞台が設置されていた。原作を知っているため、グリムゲルデ教室の劇がどんな内容なのかは予想していた。

「私たちの出し物は演劇なんです！ 双子の勇者ユウとリョウの冒険、ご覧になってくださいね！」

予想していた通りだった。そのタイトルに嫌な予感を感じると、教室は暗くなり舞台がライトアップされる。

そこから始まったのは、双子の勇者ユウとリョウが悪のドラゴンをばったばったと退治していく物語。

主役は当然僕と悠をモデルにしており、それを眺めている最中、僕はずつと穴があったら入りたいと胸のうちで叫んでいた。

「ぶっ、勇者リョウ——大活躍だったね」

「その呼び方やめてくれない？」

八重さんは笑いながら僕をからかう。劇の間中、彼女はずつと声を押し殺して笑い続けていたのだ。

そういえば原作通りなら悠たちも、グリムゲルデ教室の演劇を見ていると思ひ出す。

僕は恥ずかしくなり、彼女の手を引っ張りその場を後にする。そしてたどり着いたのはオルトリンデ教室の写真展だった。

「ここにしよう。面白い展示がしてあるかもな」

「ええ、笑いが込み上げてくるからここで落ち着きましょう」

「……………」

無言で八重さんにジド目を向ける。

教室の中に入ると、写真が展示された室内は女子生徒と外部の人間で溢あふれていた。

「思ったよりも、混んでるね」

八重さんが意外そうに呟いた。

「何がそんなに人気なんだ？」

不思議そうに僕は視線を巡らせる。

展示されている写真はミッドガル内で撮影された写真ばかりで、どれも美しいがこれほどの集客力があるとは思えない。

「あれ？ 奥の方が混んでるよ？」

八重さんが特に女子生徒が集中している場所を指差す。

「行くか」

そう言っ僕たちは人波を掻かき分わけて進んでいく。そうして辿り着いた場所には、予想外のものが展示されていた。

「二日目限定の特別展示、悠様 亮様特集？ これは…………」

パネル上部に設置されたキャプションを読み上げた僕。

「亮ちゃんの写真があるよ」

展示されている写真を見た八重さんが言う。

どこで撮られたものか、奥のパネルには僕と悠の写真が飾られていた。

「こんなにいっぱい…………ん？ こ、これは…………」

すると八重さんは声を震わせてある写真に目を奪われる。

そこには夕日をバックにした水着姿の僕が写っていた。

「いいね！ 水着姿の亮ちゃん。カッコいいよ」

八重さんの言葉を聞いた周りの女子生徒は僕の存在に気付いて視線を向ける。

「亮様よ！ 本物だ！」

「写真で見るより実物のほうがかっこいいですわ」

「亮様、こっち向いて！」

彼女たちは僕に夢中で写真に目を向ける人が誰一人いなかった。

「大人気ね」

八重さんは紙の封筒を手にながら僕を見る。

「それはなんだ？」

「亮ちゃんの水着姿が写った写真よ。サングラスとマスクで顔を隠した人にお金を払ったら貰ったのよ」

まさかオルトリンデ教室はこれを狙っていたようだ。僕と悠の写真を売って売り上げを上げるのが目的らしい。

「や、八重さん、もう出ましよう」

「あ、待つ——」

僕は彼女の手を引っ張り、オルトリンデ教室の外に出る。あれだけ騒がれたら余計に疲れる。

「くだらんものを買ったな」

「むっ、そんなことないよ。かっこいいよ」

「そんなに見たいなら、水着姿ぐらい見せてやるよ」

「えっ——」

僕の言葉に八重さんはおかしな声を出す。そして僕はとんでもないことを口にしたと思い知る。

「い、今のは違う！ それは、その……」

「亮ちゃん、大胆だね」

八重さんは頬を染めながら恥ずかしがる。

「だから違う。言葉の綾で——とにかく他行くぞ」

「あ、待ってよ」

僕はその場を去ろうとして足を運ぶ。後を追うように八重さんが付いてくる。

恥ずかしさのあまり、彼女の手を握るのを忘れてしまった。僕は我に返って八重さんの手を握る。

「すまん。忘れてた」

「気にしないで。それより——」

八重さんは後ろを気にしながら僕の顔を見る。

「ホラーハウスの時からだけど、誰かがずっとつけてるよ」

「え？」

僕は後ろにいる人間の”気”を探るとクラスメイトの”気”を感じ取った。

他クラスの出し物に驚かされていたため、彼女たちに気付かなかった。

「……無視しろ。気付かない振りをするんだ」

「わ、分かったわ」

まさか跡をつけていたとは思わなかった。僕は杖を取り出して彼女たちを映し出す。

「オオシマがリードしてるよ」

「そうだね。大島くん、満更じゃないね」

「二人とも楽しんでるね。これは将来、結婚するんじゃないかな」

「ん」

四人のクラスメイトはひそひそと僕たちに聞こえない声で話していた。

（杖で見てるから聞こえてるんだが……）

僕は彼女たちの様子を見てみると、八重さんが僕の体に抱きついてきた。

「なっ!?!」

僕は驚くと、イリスさんたちも八重さんの行動に驚きの声を上げる。

八重さんを見るといやらしい笑みを浮かべて僕を見つめていた。

「わざとかか？」

「はて？ 何のことでしょう」

八重さんとはぼけた表情を浮かべて顔を逸らす。

「……挨拶しに行くぞ？」

「結婚の？」

「よし、八重さんの恥ずかしい話を”世界神”たちにバラす」

「ちよつ!? ごめん! もうこんなことしないから!」

そう言つて僕は後ろを振り向いてイリスさんたちに近づいた。

「もう少し上手く跡をつけて欲しいものだな。最初からバレバレだぞ?」

「あつ、大島クン」

彼女たちは僕が近づいたことに気付いた。

「本当は今気付いたくせに」

「うるさい……」

「はいはい……どうも、井上八重です。亮ちゃんがいつもお世話になっております」

「亮ちゃん?」

イリスさんが八重さんの言葉に不思議そうに首を傾げる。

「気にするな、八重さんはこういう神ひとなんだ」

「そういうこと。よろしくね」

八重さんがイリスさんたちに頭を下げる。

「あたしはイリス・フレシア。オオシマにはいつも助かってます」

「私はフィリル・クラスト。趣味は読書」

「ボクはアリエラ・ルー。よろしく」

「……レン・ミヤザワ」

イリスさんたちが八重さんに挨拶する。

「言っておくが、友達だからな? 彼女だつて言つてたけど、冗談だからな?」

「あれ? そうだった? わたしたち一緒にベッドで寝る関係なの……」

「なっ!? 誤解される言い方をするな! 一緒に昼寝しただけだろ……あつ」

僕は墓穴を掘つた。八重さんの家に何度も行つた時には一緒に昼寝をした。彼女はそれを言わせるためにあんなことを言ったのだ。

「へえ、そんな関係なんだ」

アリエラさんをはじめとして後の三人は顔を赤くしていた。

「ふふ、ちよつとからかい過ぎたな。とりあえず、これからも亮

ちゃんをよろしくね」

そんなこともあつて僕たちは学園祭を楽しんだ。ちなみにこの後、イリスさんたちは教室に戻って僕たちのことをべらべらと喋ったことを知ったのはもうすぐ始まる戦いの後だった。

## 学園長の正体

「リーザのご両親を昇降口の近くで見かけて、迷われていた様子だったからそのまま連れて来たの。物部くん……リーザのこと、よろしくね」

フィリルは俺とリーザのいる調理用の空き教室に顔を出し、真剣な顔で言う。

「モノノベ、頑張つて！」

「物部クンの成功を祈ってるよ」

「ん」

フィリルと共に戻ってきたイリス、アリエラ、レンも俺を応援してくれた。

そうして、作戦が開始される。

手筈通り、リーザの両親が入店した時点で教室の入り口には一時休憩の張り紙がされた。

並んでいた生徒からは不満の声が上がったものの、整理券を渡して何とか解散してもらった。

誰かが聞き耳を立てないように教室前で見張りをするのは、イリス、フィリル、アリエラ、レンの四人。

亮は何でもガールフレンドと他クラスの出し物を周って楽しんでるそうだ。

接客はリーザと深月が行い、俺はティアと調理役をこなしながら出番を待つ。

「——兄さん、他の方々は退室しましたよ」

しばらくすると深月がやってきて、そう報告した。

「リーザはどうしてる？」

深月にリーザの様子を問いかける。

「ご両親と話し込んでいます。婚約がどうこうという言葉が聞こえたので、すぐにでも行くべきでしょう」

深月は答えながら、手際よく急須から緑茶を淹れる。

「先ほど、お茶のお代わり注文されましたから、兄さんがこれを

持って行ってください」

「——分かった」

俺は深月の淹れてくれたお茶をお盆に載せ、大きく頷いた。

「ユウ、ふあいとー!」

「兄さん、頼みましたよ」

ティアと深月の声援を受け、俺はリーザの元へ向かう。

お盆を手に教室へ入ると、テーブルに座る品の良い夫婦がこちらを見つめた。

(彼らがリーザの両親か)

女性はリーザがそのまま年を重ねた雰囲気、男性の方はすらっと背が高い——まさに”紳士”といった雰囲気だ。

彼らの傍に立つリーザは、俺が来たのを見て安堵の息を吐く。

深月が言っていたように、婚約に関する話をしていただろう。

「お待たせしました」

俺はリーザの両親に一礼してから、運んできたお茶を彼らの前に置いた。

机には分厚いアルバムが広げられており、開かれたページに男性の写真が見える。恐らくリーザの婚約者候補なのだろう。

「ほう……君が噂に聞く男性の”D”か」

俺が横目でアルバムを眺めていると、リーザの父親が興味深そうに俺へ話しかけてきた。

「はい、物部悠といいます」

「私はマーク・ハイウオーカー。リーザの父だ。いつも娘が世話になっているね」

「いえ、そんなことは……」

フレンドリーに手を差し出され、俺は少し面食らいながらも彼の手を握り返す。

彼は、ニブルとも関係が深い大財閥の総帥だ。本来なら、俺が言葉を交わせるような立場の人間ではない。しかしそんな俺の警戒心を解きほぐしてしまうような大らかさが、彼からは感じられた。

続いてリーザの母親も俺に名乗る。



「私はリンダ・ハイウオーカーです。よろしくお願いします」  
柔らかな笑みを浮かべ、会釈をするリンダさん。

「は、はい、よろしくお願いします」  
俺も慌てて頭を下げた。

「そういえばもう一人男性の”D”がいると聞いている。この五年間で数々のドラゴンと戦った経歴を持っているそうだね。今日は非番かい？」

「はい、りよ……大島亮は友人と他クラスの出し物を楽しんでいるようです」

やはり亮のことも知っているようだ。たった一人でドラゴンを何度も倒しているから噂ぐらいは耳にしてもおかしくない。

「そうか、では帰る前に彼に挨拶をしよう」

「そうですね、あなた」

そして会話が途切れるタイミングを見計らっていた様子のリーザが、自然な動作で俺に寄り添う。

早速、彼らに切り出すつもりらしい。

「父様、母様、実はわたくし——彼とお付き合いしていますの」  
はつきりと両親に向かって告げるリーザ。

「ええっ!？」

二人は裏返った声を上げて驚き、マークさんは目を見開く。

「それは……本当なのかい？」

だが彼は落ち着きを失うことなく、慎重にリーザへ問いかけた。

「はい」

リーザは俺の服をぎゅっと握り、首を縦に振る。

覚悟は決まっているのだろうが、それでもリーザの体からは微かな震えが伝わってくる。

俺はリーザの肩に手を回し、ぐっと彼女の体を抱き寄せた。

「あ——」

俺の胸に頭を預けたリーザが、頬を赤くする。

「リーザの言う通り、俺は彼女と付き合っています。もちろんミッドガルのルールを犯すようなことはない、清い交際です」

”D”は二十歳前後になるか、妊娠するかで能力を喪失してしま  
う。なので当然ミッドガルにおいて不純な異性交遊は禁止されて  
いた。俺も深月に何度も釘を刺されている。

だからこそ、そんなミッドガルのルールを破ってはいないことを伝  
えておく必要があつた。

「……そうか」

マークさんは俺の言わんとしていることを正確に汲み取った様子  
で、小さく頷く。

「リーザ、あなたは彼のことを愛しているの？」

リンダさんはまだ動揺した様子で、リーザに訊ねた。

「ええ、わたくしは彼を心から愛しています。ですから……」

リーザは強い口調で断言し、机の上に広げられたアルバムを視線で  
示す。

「——今は、他の方のことは考えられません」

「そう……」

途方に暮れた様子のリンダさん。  
するとマークさんの瞳が潤み出し、涙を零す。

「そうだったのか。それでリーザは婚約のことを……」

マークさんはポケットの中からハンカチを取り出して涙を拭う。

「あなた、よかつたわね」

「ああ、こんな嬉しい日はない。娘の初恋を祝福するしかない」  
マークさんとリンダさんはパチパチと拍手をする。

「え……」

これから一悶着あるだろうと身構えていた俺は、肩透かしな気分  
になる。

リーザは以前、自分たちが本当の恋人であると示せば、両親は素直  
に引き下がるだろうと言っていたが——それは本当だったようだ。  
けれど、あまりに物分かりが良過ぎて逆に不安を覚える。

俺たちを祝福する彼らに、俺はぎこちない笑みを返すことしかでき  
なかつた。

「物部くん……いや、ミスターユウ。どうか娘のことをよろしく

頼むよ」

「は、はい……」

マークさんは俺が頷くのを確かめ、テーブルに広げていたアルバムをぱたんと閉じる。

「リーザ、あまり彼を困らせるようなことはするんじゃないぞ?」

「——もちろんですわ」

リーザは緊張が解けた声で答えた。状況が理想的に進んでほつとしたのだろう。

「では、私たちはそろそろお暇いじましよう」

「そうですね」

マークさんの言葉にリンダさんは頷き、二人は席を立つ。

「あ———ありがとうございます」

退室する両親を追い掛けていくリーザ。

出入口まで彼らを送り、リーザは頭を下げる。俺も「ありがとうございます」をしました」と大きな声で言い、彼らを見送った。



「どうやら上手くいったようですね。リーザさんも、兄さんもお疲れ様です」

リーザの両親が去った後、皆が教室へ入ってくる。恐らく、外で耳をすませていたのだろう。

深月は安堵あんどの表情を浮かべ、俺を労ねぎらってくれた。

「作戦成功なの!」

嬉しそうにティアが万歳をする。

「物部くん、リーザを助けてくれて……ありがとうございます」

フィリルはぺこりと頭を下げた。リーザのことが、本当に心配だったのだろう。

「物部くんなら大丈夫だと、ボクは思ってたよ」

「ん」

アリエラ、レンも作戦の成功を祝福し、イリスも俺たちに笑顔を見る。

「モノノベ、ご苦労様。リーザちゃん、よかったね!」

「はい——皆さんが協力してくれたおかげですわ」

リーザは笑顔を浮かべて応じる。彼女の表情は心から笑っているように見えた。

「じゃあ、あたしたちは学園祭の見物に戻るね。オオシマにも報告しておくから」

そう言つて今日が非番のイリス、フィリル、アリエラ、レンの四人は教室を出て行った。

「私たちの方は今から休憩へ入りましょう。私とティアさんでまかないを作つてきますから、お疲れの兄さんたちはここで待つていてください」

「ティア、頑張るの!」

深月とティアは調理用の空き教室へ行つてしまう。

「……ありがたいですわね。さ、座りましょう」

リーザは俺を促し、先ほどマークさんたちが座つていたテーブルに着いた。

俺もリーザの対面を下ろす。

「なあ、リーザ。本当に上手うまくいったのか?」

二人きりの教室で、俺は躊躇ためらいがちに問いかけた。

「っ!? え、ええ……もちろんです」

するとリーザは頬を赤く染めて目を逸らす。

「父様は……精一杯青春を謳歌おうかしなさい——」つて言われましたわ」

「それだけか? 俺のことは何か言われなかったか?」

「え、ええ、あなたのことは……な、何も言われませんでしたわ。ですからこの話は終わりにしましょう」

さつきより顔を赤くして話を終わらせる。本当は何か言われたのかと疑うが、本当が何もないと言うので俺は無理に聞こうとはしな

かった。

「そ、そうか。リーザが言うなら仕方ないな」

何故か気まずい空気になる。リーザがここまで同様するのは分らないが、少しは彼女の役に立ったようだ。

「そ、それより……お礼がまだでしたわね」

するとリーザは顔を寄せ、俺の頬に口付けた。

「なっ!？」

俺が驚いて頬に手を当てると、リーザは悪戯いたずらっぽく笑って言う。

「今回のお礼——わたくしからの気持ちです」

そして彼女は照れ臭そうに椅子をずらして、俺から距離を取った。

「で、ですが、本来の交換条件を忘れていているわけではありませんからね。あなたの記憶を取り戻す方法についても模索中ですわ。まだ適切な方法は見つかっていませんが……とりあえず中間報告と、現状での提案をさせていただきます」

無理やり話を逸らすように、リーザは早口で告げる。

だが俺の頬に残る唇の感触は、そう簡単に消えはしない。

「あのさ、リーザ。さっきのキスは——」

「いいから、黙って聞いてください!」

あの口付けに込められた気持ちとはいったい何だったのか——  
そう問いかけようとする俺だったが、顔を赤くした彼女に遮られる。

これ以上余計なことを言うと、噛み付かれそうな勢いだ。

「わ、分かった。話を聞かせてくれ」

彼女を宥めるなだるように頷き、リーザの話を聞く態勢を作る。

「全く……では話しますわ。まず、調べてみて分かったことは、記憶はそう簡単に失われるものではないということ。失われたように見えても、それは単に思い出せない状態であり、記憶自体は脳に残っていると考えられます」

「けど、俺の記憶はユグドラシルからダウンロードした兵器データで上書きされたんじゃないかと思うんだ。その場所はやっぱり、記憶は消されてしまっているんじゃないのか?」

俺が疑問を口にする、リーザは首を横に振る。

「いいえ、その考え方は間違いですわ。そもそも人間の脳は、新しいことを覚えたからといって古い記憶が消し去ったりしません。仮にそんな脳の記憶形式を無視する上書きが行われてたら、脳や人格そのものが破壊されてしまうでしょう」

「じゃあ、俺の記憶は……本当に残っているのか？」  
信じられない思いで俺はリーザに問いかけた。

「既に脳へ定着している長期記憶が、いきなり消えてしまったというのは考えにくいですわ。脳が物理的に破壊されれば別ですが、あなたにそういった障害は確認できませんでした。実を言うと昨日、あなたが気を失った後——綿密に脳を検査してもらったんです」  
昨日のアクシデントを逆に利用したリーザに、俺は感心する。

「知らなかった……リーザはやっぱり頼りになるな」  
「と、当然ですわ」

照れたように頬を掻いた後、改めてリーザは話を続けた。

「なので、そうしたことから考えて——あなたの状態は極めて不自然なんです。単純に莫大なデータを送り込まただけで、記憶喪失になるとは思えません」

リーザは俺の目を見て、はっきりと断言する。

「仮に何らかの不具合で記憶障害が起きているとしても、過去の記憶から失われることはありません。まだ定着していない、最近の記憶から忘れてしまうのが自然ですから」

「そ、そうか……」

何故ニブルへ連行される以前の記憶ばかりが失われるのか——その疑問は、俺にもあった。

「ですからわたくしは、ユグドラシルから兵器データ以外のものが送り込まれているのではないかと、推測しています」

「兵器データ、以外？」

俺が唾を呑んで問い返すと、リーザは真剣な表情で頷く。

「例えるなら——コンピューターウイルスのような何か、でしょうか」

「なっ……」

「情報」として脳に入り込み、明確な意図をもってあなたの記憶を遮断する——そんな電子的ウイルスに近い性質のものが悪さをしているのかもしれないと、わたくしは考えます」  
ぞわりと悪寒が背筋を這い上がる。

——。  
彼方から、何かノイズ混じりの音が聞こえた。

「以前お話ししたように、ユグドラシルが電氣的な干渉力を持つのなら、不可能ではないはずですが。昨日はあなたが気絶していたので十分な脳波検査は行えませんでした。後日改めて精密な検査を——」

——  
リーザの声が遠くなり、代わりにどこかから響くノイズ音が大きくなっていった。

——脅威、認識。疑念、払拭……不可能。修正可能範囲を、大幅に逸脱。

音は声となり、脳内で響き渡る。

——状況、検討。今後、ノイズの確保が困難となる可能性あり。即座に行動を開始するべきと結論。脅威を排除後、権能を回収する。

もうリーザの声は聞こえない。この無機質で機械的な声は、まさかユグドラシル……。

頭が軋む。雑音混じりの声で思考が歪む。

突き刺すような頭痛に襲われ、意識が眩んだ。

「がっ!?!」

しかしそれは、俺の口からでた苦鳴ではなかった。

「え——?」

目の前の光景に、啞然とする。

俺の左腕が——勝手にリーザの首を絞め上げていた。

「う……あ……」

苦しげな表情で俺を見つめるリーザ。

「な、何で?! お、俺はこんなこと——」

慌てて左腕を離そうとするが、その意思が伝わらない。感覚はあるのに、腕が思うように動かない。

——圧縮種子、展開。意識侵食を開始。

右腕で自分の左手を引き剥がそうとするが、その右手にも上手く力が入らない。

「ユグドラシル、なのか？ お前が、俺の体を——！」

だが俺の声を無視して左手の指にリーザの喉に食い込んだ。

「くっ……誰か！ 誰か来てくれ!!」

俺は大声で教室の外に呼びかけるが、助けは現れない。

休憩中の教室前には客はおらず、隣の空き教室で調理している深月たちにまでは声が届かないのだろう。

最後の手段で上位元素<sup>ダークマター</sup>を生み出した途端、激しい頭痛が襲う。

そして生成された上位元素は俺の意思と関係なく、細い木の蔓<sup>つる</sup>となつて左腕に巻き付いた。

植物へと変換……それは普通の”D”には不可能な生体変換の領域だ。

（ユグドラシルがやったのか？）

左腕へ巻き付いた蔓は、外側からも俺の動きを支配する。

リーザの首を絞め上げる力が、いつそう強まる。

もはや声を上げることもできないのか、リーザが苦しげに口を開ける。

「っ……り、リーザっ！ 上位元素から爆発物を生成して、俺の腕を吹き飛ばすんだ！」

必死に俺はリーザへ訴えた。

しかしリーザは目尻に涙を浮かべながら、微かに首を横に振る。

苦しくて難しいのか、それともそんなことはできないという意味なのか——。

「くそっ！ このままじゃ——お願いだ、誰かいないのか!？」

誰でもいい——頼むからリーザを助けてくれっ!!」

もはや叫び続けるしかない。リーザは俺の腕を振り払おうともしていたが、次第に抵抗が弱まってくる。



「何をやっとするか！ 大莫迦者!!」

けれどその時——ドンツと外から扉を蹴り破り、小柄な人影が飛び込んでくる、

「が、学園長!？」

金色の髪を靡かせ、碧眼で俺を睨むのは、ミッドガルの最高責任者であるシャルロット学園長。

「お願いします！ 体が言うことを聞かないんです！ 俺はどうなってもいいですから、リーザを助けてください！」

もはや彼女以外に縫れる者は学園長しかない。

「ちっ——何という有様だ」

学園長は舌打ちすると俺たちの元へ掛けて来て、飛びつくように俺の左腕へ噛み付く。

「何らかに操られているのなら——さらにその上から支配すればいい」

学園長はそう言うと、犬歯をさらに左腕へと深く刺し込んだ。

その途端——まるで麻酔でも投与されたかのように、左腕の感覚が遠くなる。

リーザが絞め上げる指も緩み、彼女は俺の手を振り払って、地面に倒れ込んだ。

「ごほっ、けほっ！」

喉を押さえ、咳を繰り返すリーザ。

——他因子、混入。侵食率低下。行動制御、維持困難。緊急事態につき、端末を切り離して離脱する。

頭の中でユグドラシルの声が響き、左腕に巻き付けていた蔓が自然にうねり、素早く離れると、そのまま開いていた窓に向けて跳躍する。

そのまま窓の外に消える蔓を見て、学園長は「逃したか」と毒づいた。

「シャルロット様、いきなり走りだしてどうしたんですか？ と

——あら、いったいこれは……」

そこにマイカさんが現れ、只ならぬ俺たちの様子に目を丸くする。

「マイカ、非常事態だ。適当な理由を付けて来賓たちを島外へ退避させよ。それと端末を通して生徒たちへ警戒レベルAを傳達。ハルカには竜伐隊りゅうばつたいを率いて”動く蔓”を捜索するように伝えてくれ。疑問はあるだろうが、事情は追って連絡する」

「——は、はい、承知いたしました」

マイカさんは表情を引き締めて一礼し、教室の外へと駆けていく。

「けほっ、けほっ……はあっ……はあ……」

静かになった室内に、リーザの咳と荒い呼吸が響いてくる。

「リーザ……すまない」

本当は彼女を助け起こしたかったが、今の自分が近づいていいのかわからず、俺は立ち尽くしたまま謝罪する。

「はあっ……はあっ……そんな顔、しないでください。わたくしは……大丈夫ですから」

顔を上げたリーザは、ぎこちない笑みを浮かべて俺に言う。

「あなたの体を動かしたのは、ユグドラシルです。わたくしも迂闊うかつでしたわ。こうなる可能性も考えていたのに……ユグドラシルが消滅したと聞いて、気を抜いていましたわ。やはり大島亮の言ったことは間違っていないませんでした」

自分の責任でもあると、リーザは首を横に振った。

「リーザの推測は当たってたんだ。俺の頭には、兵器以外のモノが送りこまれていた……また、いつ操られるかも分からない」

リーザの首を絞め上げてしまった自分の左腕を見下ろし、俺は悔しさを滲にじませて呟く。

ユグドラシルは滅びていなかった。ずっと——俺の中にいたんだ。

「その心配はない。今のところ、そなたの体は私が支配しているからな」

だが、学園長は確信に満ちた口調でそう断言する。

「支配……？」

そういえば俺の腕に噛み付いた時もそんなことを言っていた。

「そなたと、そなたを侵していたものを一時的に支配下へ置いた

ことで、大体の状況は把握した。全く——こうなったのは、ユグドラシルとの取引を隠していたそなたの責任だぞ?」

学園長は腰に手を当てて、俺を睨む。

「なっ……どうしてそのことを——」

「支配すれば、分かる。支配とはそういう権能だ」

「権能……? 学園長は——いえ、あなたはいつたい、何者なんですか?」

俺は学園長に得体の知れないものを感じ、問いかけた。

「そうだな……こうなつてはもう、正体を明かすしかあるまい」

学園長は何故か少し嬉しそうな様子で頷き、大仰に手を翳した。

「我こそは人類の監視者、人間種の王! この世界を裏から支配する黒幕だ!」

薄い胸を張って堂々と断言する学園長。

「は、はあ……」

俺は何と反応すればいいのか分からず、曖昧な相槌を打つ。

「何だその間抜け面は。信じられぬか?」

「いえ、信じられないというより、何かピンも来ない感じで……」

いきなり世界を支配する黒幕だと言われてもスケールが大き過ぎて亮がこの世界の神だと言われて以来、戸惑ったのは久しい。

「では誤解を受ける覚悟で言い換えよう」

学園長は一呼吸置いて、言葉を続ける。

「私の先代は、自らをこう呼んだ。グレー・ドラゴン、”灰”の

ヴァンパイアと——」

## 蠢く蔓

イリスたちが”それ”に出会ってしまったしたのは、ただ不運と  
言うしかない。

ブリュンヒルデ教室の窓から飛び出し、地面へと落下したのは蠢く  
”蔓の塊”。

人目を避け、物陰へと移動していた”それ”は、偶然——学園祭  
の渡り廊下で少女たちに出くわした。

「な、何あれ?!」

イリスは驚きの声を漏らす。

奇妙な物体を見て立ち竦んだのは、一緒に学園祭を回っていたイ  
リス、フィリル、アリエラ、レンの四人。

普通なら悲鳴を上げて逃げ出す状況。しかし彼女たちは、これまで  
何度も厳しい戦いを潜り抜けた竜伐隊のメンバーだった。

「皆、気をつけて! よく分からないけど、普通じゃない」

まだ”それ”に関する情報が伝わっていない段階ではあったもの  
の、フィリルは即座に皆へ警戒を促す。

退避することなく、身構える少女たち。

「双翼の杖!」

イリスは架空武装の杖を生成し、”それ”に相対した。

フィリルも本の形をした架空武装を作り出し、アリエラとレンも後  
に続く。

だが彼女たちが架空武装を手にし、戦闘態勢に入ったところで変化  
は起こった。

「えっ!」

イリスの持つ杖状の架空武装が歪む。

ぐにやりと、まるで溶けるように。

その現象は皆に連鎖し、彼女たちの持っていた架空武装は黒い  
上位元素の球体へと戻り——”それ”の元へと引き寄せられた。

そして彼女たちの手を離れた上位元素は、”それ”に癒着して再び  
形を歪ませる。

上位元素の表面が濁った緑色に染まり、不気味に蠢く。  
瞬く間に膨張した上位元素は、弾けるように緑色の蔓へ変貌し、”  
それ”の一部となってしまう。

「な……」

信じられない現象を前にして、フィリルは驚きの声を漏らした。

上位元素から変換された蔓は絡み合い、太さと長さを増し、彼女らへと襲い掛かる。

「皆、逃げてっ！」

最も早く驚きから我に返ったアリエラが、皆へ撤退を促した。

”それ”に背を向け、逃げ出す彼女たち。

だがその判断は、少し遅過ぎた。

「きゃあああああっ!?!」

少女たちの体に巻き付く蔓状の触手。

——コド・フュンフ  
第五権能、確保。

彼女らを捕まえた”それ”は満足げに、体を蠢かせる。

しかし彼女らの悲鳴を聞きつけ、そこに一組の男女が現れた。

「な、何だこれはっ……」

夫婦と思われる身なりのいい男性と女性は、少女たちを捕縛した”

それ”を見て驚愕する。

——人類の支配者層と認識。自己防衛において、排除より捕縛が適切と判断。

そして”それ”は地面を這うように蔓を伸ばし、素早く彼らの足を絡め取った——。



”神界”。神々たちが住む世界。その中央に位置する高い建物は、神々が仕事場としている天上塔。

今、”世界神”たちは仕事に追われていた。

”世界神”の仕事は、自分が管理している世界の文明レベルの調査と分析、世界の脅威となる存在の排除、そして世界に起きる空間の歪みという自然現象を消すこと。

十階に位置するフロアは”世界神”の仕事場。デスクでの仕事は主で、自身が管理する世界での仕事は一日に平均八時間。

「いつになつたら終わるんだよ」

第一世界の”世界神”河本義晴は、書類仕事をしながら愚痴を漏らす。

彼は何百時間も家に帰っておらず、書類仕事と自分が担当する世界に発生する歪みを修正をしていた。

「仕方ないよ。急な仕事が入ってくるか分からないもの。どんな時でも臆せず対応するのが神として必要なことよ」

隣のデスクで書類仕事をしているのは第二世界の”世界神”飯島弥生。神々の中でも一番の力持ちで、皆のお姉さんの存在である。

実は”神界”に流れる時間と下界で流れる時間は違っており、下界での一分は神界では六時間。

ドラゴンボールに出てくる”精神と時の部屋”と同じである。

そのため、神々は何千何万という年の中で生きている存在であり、彼らは殺されない限り病気で死ぬことはない。

「でもこんなに仕事がいっぱいなのは何十年ぶりかしら？ 他の皆は下界での仕事で出かけてるわね」

「ああ、こんなに仕事をしたのは”世界神”になって初めてだ。休みたいけど頑張るしかないな」

そう言って義晴は両腕を伸ばして気合を入れる。

彼は知的なことが大好きで、ノートパソコンや書類の入ったブリーフケースを肌には離さず持ち歩いている。

外に出てもパソコンをいじったり書類仕事をしたりと仕事神とい

うあだ名がつけられている。

その他にも第一世界で死んだ人間が行く天国にある学会にも出席しており、神になる以前は百年に一度の天才と言われた少年だった。

「そういえば亮と八重は今頃デートか……。羨ましいな、俺も早く彼女が欲しいな」

義晴は生まれてから一度も恋をしたことがないため、愛や恋という感情を感じたことがない。

そのため彼は恋や愛など、生物が必ず持つ感情を研究している。

「あら、恋がしたいの？ だったらお姉さんが教えてあげるわ」

「仕事はもうすぐ終わりそうだな。帰ったら学会に出す資料を仕上げないとな」

弥生の冗談を華麗にスルーした義晴は作業速度を上げる。

「無視することないじゃない。ワタシは恋愛経験豊富なのよ？

何だったら恋に必要なものだってあげるわ」

「やめてください、聞きたくありません」

弥生はこれまで数々の人間たちを手玉に取った神であり、第二世界の人間たちは”世界最悪の魔女”と恐れられている。

「大丈夫よ、アンジェリカから貰ったB.L本や薄くて興奮する本だって貸してあげるから」

「しつこいですよ！ ホントにやめてください！ 全く……裏の

性格を知らない亮たちは幸せだな」

義晴は溜息を吐いて、デスクに置いてあったコーヒーを飲む。

弥生の性格を偶然知ってしまった義晴は、彼女のことを苦手になったのだ。義晴以外の”世界神”はそのことを知らず、頼れるお姉さんと憧れる神もいる。

弥生の裏の性格を知るのは義晴と第二世界の人間のみで、全王や神官王、その下の地位にいる神々たちでも知らない。

「あの時は焦ったわ。まさか義晴くんが入ってくるとは思わなかったもの。全王様や神官王様に知られたらワタシ……神様辞めるわ」

「じゃあバラしますよ。こんな秘密を抱えてる俺の身にもなって

くださいよ」

その言葉を聞いた弥生は、舌を舐め回すような表情で義晴を睨む。

「義晴くん？ 喋ったら……どうなるかしら？」

「っ!？」

義晴は弥生に恐怖を感じ取り、身構えてしまう。

彼女から放つ威圧感で体が動かない。彼女に恐怖を感じた義晴は涙目で首を縦に振る。

「分かりました。どうか許してください」

すると弥生は満遍の笑みを浮かべ、それまで感じた恐怖が収まる。

「ならいいわ」

「ふう……死ぬかと思ったよ。……ん？ これはっ!？」

義晴は何かを感じ取ったようで、杖を取り出して先端にある丸い球体を見る。

「どうしたの？」

弥生は義晴の様子を見て問いかける。

「何だこれは……」

そこに映し出されたのは、フードを被った男が空間の歪みに向けて”神の氣”を注ぎ込む場面だった。

「どういう事？ この人間は何者かしら？」

「分からない。だが、只者ただものじゃなさそうだ。あそこは第十二世界、亮が担当している世界だ。俺は神官王様に伝えてくる。弥生さんは他の”世界神”たちに連絡してくれ」

「分かったわ」

そう言つて義晴は急いで神官王のいる部屋へと駆け出した。

ちなみに学園祭でデートしている亮と八重もフードの男を杖で見しており、すぐに現場へと向かっていた。





「グレー・ドラゴン……」 灰のヴァンパイア？」  
俺はシャルロット学園長の口にした名を、呆然と繰り返す。

「学園長はドラゴン、なんですか？ それともヴァンパイアということは——吸血鬼？」

一緒に話を聞いていたリーザも、呆気に取られた表情で学園長へ聞き返した。

「さて、な。実を言えば、私にもよく分からん。あの怪物たちのように巨大でもなく、破壊的な力も持っていない。ただ、私の先代が吸血鬼のオリジナルであることは確かだ」

学園長はそう答えた後「まあ、吸血鬼の伝承は噂に大量の尾びれが付いた代物であるから、一緒にされるのは不本意だがな」と付け加えた。

「きゅ、吸血鬼のオリジナル……？ じゃあ、グレー・ドラゴンってというのは……？」

俺は頭の中が上手く整理できず、学園長に疑問の眼差しを向けた。

「まあつまり、ヴァンパイアと呼ばれた私の先代は、自分と他のドラゴンが本質的には同じものではないかと考えた——ということだよ」

遠い目をして答える学園長。

「そう言われても……さっぱり理解できません。ちゃんと俺たちに分かるように説明してください」

大事な部分だけははぐらかされているような気分になり、俺は学園長にそう訴える。彼女は口元に笑みを浮かべ、口を開いた。

「——数百年前に現れた一人の男。その者は生まれながらに人間を支配する力と、世界を守らなければならないという強い目的意識を持っていた。それが私の先代だ」

まるで昔語りをするかのように、学園長は言葉を紡ぐ。

「彼はその力を用いて、人間が世界を壊してしまわぬように管理を始めた。近代になり、強力な兵器を手にした人類が自滅の道を辿らなかつたのは——ひとえに彼のおかげだ」

学園長は「彼は核戦争を止めて、世界を救ったのだぞ」と冗談めか

して付け足し、俺に視線を向ける。

「彼はドラゴンに関する仮説を立て、ドラゴン共が現れた時にこう考えたのさ。あの怪物も自分と同様、何らかの役割を果たすために強力な権能を与えられた存在ではないか——と」

そう言った後、学園長は肩を竦める。

「だからこそ、自分自身にもグレー・ドラゴンという名を付けた。その称号を継がされた私は、いい迷惑だったかな」

グレー・ドラゴン——”灰”のヴァンパイア。

学園長が言った「継いだ」と聞いて俺は先代のことを口にする。

「継いだということは、その先代は今……」

「ああ、もうこの世にはおらんよ。私に面倒事を押し付けて逝ってしまった。私は正直、彼ほど世界を大切には思っていない。けれど、彼の為したことを無駄にするわけにもいかんから、こうしてミツドガルの学園長を務めているのだ」

やれやれと学園長は溜息を吐いた。

「学園長として働くことが、世界を守ることになるんですか？」

「現在、人間社会で最も大きな火種は”D”だ。世界安定のためミツドガルという場は欠かせない。ゆえに私は、ここを守っておる。ドラゴンではなく、人間からな」

皮肉を少し交えた口調で答える学園長を見て、俺は安堵の息を吐く。

「ドラゴンと言われた時は驚きましたが……学園長は、俺たちの味方と考えていいんですね？」

「味方でなければ、そなたらを助けたりはせんだろう。とりあえず、これで納得できたか？ 納得できたのなら——これから私の指示に従って、そなたが持ち込んだ厄介事の後始末に当たってもらおうぞ？」

腕を組み、俺を睨む学園長。

「……はい。尻拭いは自分でします。けど、最後に一つだけ聞かせてもらっても構いませんか」

「何だ？」

「その先代と、学園長はどういった関係だったんでしよう?」  
俺の問いに学園長は苦笑を浮かべ、小さな声で答えた。

「——私の父だ」

「え?」

俺とリーザは学園長の言葉を聞いて言葉を失った。

「……すまない。この話は終わりにさせてくれ」

「い、いえ、すみません。親父さんのこととは知らず……」

「気にするな。悲しい思い出だが、昔の話だ」

学園長は悲しい表情を浮かべて視線を逸らす。余計なことを聞いてしまったと俺は反省する。



「現在、ミッドガル内にはユグドラシルとかわしき存在が侵入している。既に監視カメラの映像から行方を追跡し、動ける人員を使って捜索中だ。それと今のところ、竜紋りゅうもんが変色した生徒は確認されていない」

あれから時計塔の司令室へと場所を変え、学園長は集まった者たちに対して現状を簡潔に告げる。

司令室内にいるのは学園長と俺、リーザ、深月、ティア——あと、監視システムを操作している職員の女性オペレーターたち。

大型のモニターにはミッドガル各所の映像が映し出されていた。

「あの——それは、本当にユグドラシルなんですか?」

先ほど状況を知らされたばかりの深月が、手を挙げて学園長に質問する。

あその後、昼食を作り終えて教室に現れた深月とティアは、事情も分からぬまま司令室まで連れて来られたのだ。

イリス、フィリル、アリエラ、レン、そして亮の五人は学園祭の見物で教室を離れているため、司令室にはいない。端末へ連絡が入って

いるはずなので、じきに合流できるだろうが……心配ではある。あの”動く蔓”が潜む今のミッドガルに、安全な場所はないのだから。

学園長は皆の不安な眼差しを受け止めながら、深月に答える。

「断言はできませんが、植物状の外見からして可能性は高いだろう。よって目標の呼称は暫定的にユグドラシルとする」

「ユグドラシルだとしたら、いったいどこから……来客に混じって侵入したのでしょうか？」

疑問を口にし、眉を寄せる深月。学園長は俺の方をちらりと見た後、こう答えた。

「今のところ、侵入経路は不明。追って調査させるが、今はユグドラシルの排除が最優先だ。非常に小さな蔓の塊であったことから”本体”ではなくその一部——端末であると考えられるが、野放しにはしておけん」

「どうやら、俺のことを公にするつもりはないらしい。隣に座るリーザが安堵した様子で囁きかけてくる。

「よかったですわね。まあ——あなたがユグドラシルと密かに通じ、結果的に生徒や各国の賓客を危機に晒したことが知られれば、ミッドガルと”D”の信用は地に堕ちます。こうする以外に、選択肢はないのでしようけど」

「……それに全部事情を話したら、学園長の立場や能力も明かす必要が出てくるしな。けど——たとえば皆に糾弾されなくても、俺は責任を取る。絶対に」

リーザの言葉に頷きながらも、俺は右手をぐつと握りしめる。

学園長に噛み付かれた左腕は、まだ感覚がなくて動かさなかった。支配というのがいったいという能力で、俺の体にどんな作用を及ぼしているのかは分からない。

けれどたぶん、左腕の自由は完全に奪っておく必要があるのだろう。

「あまり一人で背負い込まないでください。知っていて上に報告しなかったのは、わたくしも同じですわ」

リーザは労わるように、俺の右手に手を重ねる。

「けど、これでもし何かあったら——」  
学園長のおかげで、リーザを手に掛けてしまうことは避けられた。  
しかし今後どんな被害が出るかは分からない。

「シャルロット様、ご報告です！」  
マイカさんが慌ただしく司令室に入ってきて、学園長に呼びかける。

「——戻ったか。来客の退避状況はどうだ？」

「ほぼ、完了しました。けれど三名、行方の分からない方がいます。そして生徒の中にも五名、応答のない者が……」

「誰だ？」

「来賓のハイウオーカー夫妻と井上八重という少女、ブリュンヒルデ教室のフィリル・クレスト、レン・ミヤザワ、アリエラ・ルー、イリス・フレイア、そして大島亮です」

その報告を聞いた俺たちは息を呑む。

イリスたちが……まさか——。

「父様と母様が行方不明？ フィリルさんたちだけでなく、オオシマ・リヨウまで……？」

リーザは青ざめた顔で呟いた。

「フィリルたちに、何かあったの？」

ティアは心配そうに声を上げ、深月は表情を険しくする。

「ユグドラシルと接触した可能性がありますね……」

憂慮ゆうりよしていた事態が現実のものとなる。

（まさか亮までもか？）

亮はこの世界の神であり、本気を出せばドラゴンだろうと倒してしまふほどの力を持つ。

ユグドラシルに捕まることは無いだろうと思っていたが、一向に現れないところを見るとその可能性が高い。

「俺、探しに行きますー！」

じつとしてはいられず、席を立つ。

「待て。もう少し情報が集まるのを——」

学園長が制止の声を上げた時、司令室のオペレーターが鋭い声で報

告を皆に伝えた。

「ユグドラシルの搜索に当たっていた篠宮司令から、アリエラ・ルーを保護したとの報告です。至急伝えたいことがあるそうなので、お繋ぎつなします」

すると司令室の大きなモニター画面が切り替わり、篠宮先生とアリエラが映し出される。

「アリエラさん！ 大丈夫なんですか!？」

制服があちこち破けているアリエラの姿を見て、深月が焦った声で問いかけた。

『ボクは平気さ……けど、ごめん。レンたちは捕まって……助け出せなかったよ』

アリエラはハアハアと荒く呼吸をしながら答える。

『あれはボクたちの上位ダークマター元素を奪って、巨大化したんだ……だから、架空武装で戦うのは、ダメだよ』

「アリエラさん、レンさんたちが捕まったのは分かりましたが、亮さんとは一緒でしたか?」

『ううん……大島くんとは一緒じゃないよ……少し前に宿舎に戻るって言ってたけど——』

そこで限界が来たのか、アリエラはがくと気を失ってしまう。

どうやら亮は無事のようなだが、アリエラの言葉に疑問を抱く。

学園と深月の宿舎までには距離があるが、亮ならすぐに気付くはず。もしかすると、神の仕事でミッドガルには居ないのかもしれない。

モニターでは篠宮先生がアリエラの体を支え、説明を続ける。

『今彼女が話した通り、対象は上位元素に干渉することができるようです。発見しても不用意に架空武装を生成しないよう通達しましたが……全員からの応答はまだありません。もし既に交戦状態にある者がいた場合、対象のさらなる強大化が懸念されます』

篠宮先生がそう言った直後、ズウウウウンと低い振動が足元から伝わってくる。

「どうした、何があった!？」

オペレーターに向けて学園長が鋭く問いかけた。

「ミッドガル北西の密林地帯で爆発！ 映像、出します！」

複数あるモニターのいくつかが同時に切り替わり、濛々<sup>もうもう</sup>と煙を上げる密林地帯を映し出す。

煙の中で、歪<sup>いびつ</sup>な影が揺れた。

風が吹き、煙が流れると——捻<sup>ね</sup>じれ蠢<sup>うごめ</sup>く大樹の姿が現れる。枝葉が絡み合ったような腕と、太い根の足を動かし、それは「歩行」を開始した。

「対象、学園へ向かって進行してきます！」

「どうやら、逃げるつもりはないらしいな」

学園長はオペレーターの報告を聞き、俺のいる方へ顔を向ける。

「あなたを……取り戻すつもりかもしれませんが」

リーザが小さな声で呟いた。

事情を知る学園長とリーザは、ユグドラシルの目的が俺だと判断したようだ。

恐らく、そのよそは正しい。だとすれば俺は身を隠した方がいいのだろう。

けれど——。

「学園長、提案があります」

俺は学園長と視線を合わせ、強い口調で告げる。

「何だ？ 捕らわれている者がいる以上、下手に手は出さなぞ」

目を細め、学園長は俺に訊ねた。

「ですから、俺が人質を助けに行きます。ユグドラシルが上位元素に干渉する力を持っているのなら、竜<sup>りゅう</sup>伐隊は奴<sup>やつ</sup>に近づけません。けれど俺は、架空武装を用いない戦い方に慣れていきます」

「……一人ではあまりに無謀だ。大島亮がこの場にいるなら勝機があるが、我が友がいないのだ。それに接近戦を挑める大きさではあるまい」

学園長は画面に映るユグドラシルの姿を見ながら言う。周辺の木々と比較する限り、大きさは十メートルから十五メートルといったところだ。これまで戦ってきたドラゴンに比べれば小さい方だが、人

間が生身で挑むにはスケールが違い過ぎる。

「兄さん、学園長の言う通りです。架空武装で戦えないなら、防衛用の兵器で足止めして、その上で皆さんの救出を——」

「それはたぶん、無理ですわ」

だが深月の言葉をリーザが遮った。

「なっ……どうして——」

「ユグドラシルは電氣的な干渉力を持つと聞いています。恐らく防衛用の兵器は役に立たないでしょう。このシステムですら、いつまで持つか分かりませんわ」

リーザがそう言った直後、モニターのいくつかにノイズが走り、暗転する。

「——監視カメラが何台か機能停止したようですわね。映像の途絶えたカメラとユグドラシルとの距離を教えてください！ それ

が恐らくユグドラシルの干渉可能範囲ですわ」

リーザに命じられたオペレーターが「は、はい！」と答え、慌ててパネルを操作した。

「およそ五十メートルです！」

「以前調べたユグドラシルに比べると、かなり狭いですわね……まだ十分な力を発揮できていないのかもしれないかもしれません。それにもしかしたら……電子的な干渉可能範囲と上位元素に干渉できる範囲は、同じである可能性もありますわ」

オペレーターの報告を聞き、リーザは腕を組んで呟く。

「どういうことですか？」

深月が眉を寄せてリーザに訊ねた。

「人間の思考は、言わば脳内の電氣的な活動です。そして上位元素はそんな人間の意思に感応して変化を起こしますわ。ならば思考や意思というものを電氣的に再現すれば、上位元素にハッキングを仕掛けることが可能かもしれません」

「つまり……機械に干渉している力と上位元素に干渉している力は、同じものかもしれないということですか」

リーザの考えを聞いた深月は、口元に手を当てる。



「もし五十メートルまで接近が可能なら、モノノベ・ユウの援護は可能です。なのでわたくしが彼と共にいきますわ」

「え——リーザは、俺を止めないのか？」

俺は彼女の言葉に驚く。事情を知る彼女は、俺がユグドラシルに近づくのを反対すると思っていたからだ。

そんな俺の反応を見て、苦笑を浮かべるリーザ。

「……止めませんわ。止めたところで、あなたは行くのでしよう？」

その声音こわねと表情には、諦観だけでなくとても温かいものが混じっているように感じられ、俺は奇妙な安心を覚えた。

「ああ——もちろんだ。よく分かったな」

「当然です。本日限定とはいえ、わたくしはあなたの恋人ですから」

俺の言葉にリーザ得意げに微笑み、大きな胸を張る。

「ティアも行くの！ ティアはユウの未来のお嫁さんだもん！」  
元氣よく手を挙げ、ティアがこちらに駆け寄ってくる。

「もう——兄さんたちだけで行っても、他の竜伐隊と連携が取れないじゃないですか！ 私も行つて現場で指揮を執ります！」

深月もそう言つて席を立つと、学園長が俺たちに鋭い眼差しを向ける。

「物部悠……やり遂げられるか？」

学園長は、短く、それだけを訊ねてくる。

「やり遂げます。必ず」

「——そうか、分かった。ならばそなたを信じよう。信じなければ、友にはなれぬだろうからな」

にやりと笑い、学園長は俺たちを送り出す。

それまでは自由の利かない左腕に頼りなさを感じていたが、今は学園長が近づくを貸してくれているのが分かるようで——動かない左腕が、逆に心強かった。

## V S 第一世界の世界神

「この者がここ最近、十二の世界に出現する空間の歪みを修正しているということですね」

神官王が議長を務め、画面に映し出されたフードの男を口にする。

”神界”の中央に位置するビル、”天上塔”二十階にある第一会議室では緊急招集が掛かっていた。

集まっているのは全ての頂点に立つ全王、その前に君臨する神官王、そして現場に向かっている亮と八重以外の”世界神”たち。

神々達は歪みを修正する存在に対して議論を交わしていた。

「歪みを修正できるのは、神の気”を”持つワシたちだけじゃ。人間ごときが出来る訳がないのじゃよ」

真ん中の席に座るルドルフが画面に映るフードの男を見ながら大声で話す。

「だが我々以外に歪みを修正する人間はいません。亮と八重ちゃんはずっと中として、オレたちにはアリバイがある。世界神が現場にいないならアイツは人間以外に他ならない」

パトリックはルドルフに対して異論を唱える。

歪みを修正することが許されているのは”世界神”のみであり、他の神が修正すれば重い処罰を受けることになる。

それ以前に人間が歪みを修正したとなれば、危険人物として排除される。そのため、この役目は”世界神”が処理することになっている。

「とにかく私たちは早急にフードの男の素性を調べるしかないでしょう？ 今は亮さんと八重さんに任せて私たちは彼の素性を探ることに専念しましょう」

「八代の言う通りだな。ワッシたちが今すべきことはこのフードの男を調べること。これから忙しくなるぞ」

八代の意見にグランも賛成する。彼らは同期で普段は正反対な二神だが、神としての芯は強く真っ直ぐな性格の持ち主だ。

「ではすぐにフードの男を詮索しましょう。俺たちも今日は残業

するか」

「エドワードさんにしては珍しいですね」

「珍しいとは何だパトリック。俺っちだっただまには残業するさ」

「冗談ですよ？ いつもゲームばかりしてるあなたが……」

ふっ

「ああ？」

小さく笑うパトリックにエドワードはガタツと席を立ち、威圧しながら睨む。

「落ち着きなさい、二神ふたりとも？ 全王様と神官王様の前で喧嘩しないの」

二神ふたりの中に割って宥なだるレイチエル。

彼女の言葉に我に返った二神ふたりは全王を見て、顔が青ざめる。

「そ、そうだな。喧嘩している場合じゃないな。済まないパトリック」

「えっ!? い、いえ、オレこそ小馬鹿にするようなことを言ってますみません」

二神ふたりは慌てて席に座り、議長を務めている神官王が口を開いた。

「では皆さん、フードの男の件はあなた方”世界神”に任せます。これにて緊急招集を終了します。全王様、何か一言はございますか？」

神官王は全王に視線を向けて訊たずねる。

「じゃあ皆、頑張つてね。期待してるよ」

「「「「「「はっ！」「」「」「」」」」」」

全王は満遍の笑みを浮かべて”世界神”たちに告げた後、第一会議室を出て行く。

「それでは皆さん、解散です」

そう言つて神官王も全王に続いて部屋を出る。

会議室に残ったのは十神じゅうごんの”世界神”。彼らは杖を取り出して自分が管理する世界に起きた歪みについて調べ始めた。



「ごめんね八重さん。この世界の問題に付き合わせて」

「気にしないで。最近歪みが消える現象は私たちの間で問題になつてたもの」

僕と八重さんはサハラ砂漠のど真ん中に来ていた。

学園祭を楽しんでいる最中、突然この場所に”神の氣”を感じ取った僕たちは誰も見られない場所に移動して、杖で”神の氣”を感じた場所を調べた。

するとそこにはフードを被った男がサハラ砂漠に出現した空間の歪みに向けて”神の氣”を注ぐ場面を見つけた。

僕は神官王様にこのことを伝えると既に”世界神”に緊急招集を掛けたことを知り、僕たち<sup>ふたり</sup>二神はフードの男を捕まえるためにサハラ砂漠へと向かった。

サハラ砂漠に行くまでに時間が掛かり、歪みが出現した場所には誰一人おらず、足跡すらなかった。

僕たちはフードの男の”氣”を探るが感じ取れなかった。

「とりあえず神官王様には報告しておくよ。八重さんはそのままフードの男を探してくれ」

「分かったわ」

僕は八重さんに指示を出して杖で神官王様に連絡する。

「神官王様、今よろしいでしょうか?」

画面には神官王様が写っており、少し揺れていることから移動中と判断する。

『はい、こちらは既に緊急招集は解散しておりますので大丈夫です』

僕の予想は合っていたようで、神官王様は笑顔でそう言う。

「今現場にいますがフードの男は何処にもいません。”氣”を探ってはいませんが感じ取ることができません。どこかへ移動したと

思われます」

『そうですか……では何かありましたらまた報告をお願いします。"世界神" たちにはフードの男を詮索しておりますので仕事は"神界"に戻ってからで大丈夫です』

「分かりました」

そう言っただけは通信を切ろうとするが、神官王様は何かを思い出したような表情を浮かべる。

『不運でしたね。八重さんとデート中なのに』

「なっ!？」

まさか神官王様までからかってくるとは思わなかった。

「し、神官王様までからかわないでください! とにかくこの件はもう少し調べますので待っていてください!」

そう言っただけは神官王様の返事を聞かずに通信を切り、しばらくして溜息を吐いた。

「全く……デートじゃないのに」

僕は呟きながら杖を仕舞って八重さんを見る。すると八重さんの頬は赤く染まっており、僕の目が合うと恥ずかしそうに視線を逸らす。

「ん? どうしましたか?」

「……なんでもない。気にしないで」

どこか不機嫌さも感じ取れるが、どうして彼女が恥ずかしそうにしているのが分からない。

「でも顔が赤いですよ? 熱でもあるんじゃないですか?」

少し心配しながら八重さんの額に自分の額を当てて体温を確かめる。すると彼女の顔が真っ赤になる。

八重さんが急に僕の顔を両手で押して離れようとする。

「りよ、亮ちゃん!? だ、大丈夫だよ! だからそんなに心配しなくていいよ」

「えっ、は、はあ……そうですか? 八重さんがそう言うなら……」

本当に大丈夫じゃないかと心配するが、本人が大丈夫だと言うのな

ら問題無いのだろう。

「そ、それより亮ちゃん。この世界を調べたけどフードを被った男はもういないよ。多分何処かの世界に移動したと思うけど、まだ調べる?」

八重さんは杖の先端にある球体を見ながら教えてくれた。

「そっか……じゃあ僕たちはミッドガルに戻りましょう。まだ時間もありますので学園祭を楽しみますか?」

「ホント!・じゃあ早く行こうよ!」神界”に行く前に亮ちゃんのクラスに行つてみたい」

何故か上機嫌になって僕の腕を引っ張る八重さん。そんなに学園祭を楽しみにしていたのだろうと伝わってくる。

「分かりました。ですが八重さん? クラスメイトの前で彼女なんて冗談を言わないでくださいね?」

「ええ、それじゃ面白くないよ。ここは彼女つてことにした方がいいと思うよ?」

「なんですか? 僕たちは親友なんですから彼女じゃありませんよ」

「えっ? 親友?」

僕が親友と口にするのと八重さんが何故か驚く。

「……友達じゃなくて?」

「ええ、そうですよ。僕たち親友じゃないですか? どうしました?」

「……そっか、親友か……」

何処か嬉しそうに微笑む八重さん。彼女が嬉しがることを言った覚えがないが、僕はミッドガルに戻るために彼女の手を握ろうとする、イリスさんとフィリルさん、レンちゃんの”気”が小さくなるのを感じた。

「っ!?!」

八重さんも気付き、さらに得体の知れない生き物の”気”がどんどん大きくなるのを感じ取る。

「何が起こっているだ?」

僕は何が起こっているのかが分からず、杖を再び取り出してミッドガルを映し出す。

そこにはイリスさんたちが動く巨樹に拘束こうそくされる姿が映し出された。

この巨樹はグリーン・ドラゴン——緑のユグドラシルだ。

「ユグドラシルっ!? なんでミッドガルに……」

一瞬何故ユグドラシルがミッドガルに出現したのかが分からなかったが、僕は原作を思い出した。

学園祭二日目、悠はユグドラシルに左腕を乗っ取られ、リーザさんを殺しかけた。そこに現れたシャルロット学園長が悠の左腕を支配してユグドラシルは逃走する。

偶然居合わせたイリスさんたちは上位元素ダークマターを生成するが、ユグドラシルに干渉されて巨樹となって捕まった。恐らくユグドラシルは悠を連れ去るのが目的なのだろう。

僕はそのことを今思い出し、少し焦り始めていた。

「亮ちゃんやばいよ。彼女たちの”気”がどんどん減ってるわ。早く行かないと」

「そうだな、すぐに行こう!」

僕は杖を仕舞い、八重さんと共に”気”を上げて体を浮かせ、ミッドガルへと向かう。

「おいおい……ピラミッドが……」

その数秒後、緊急招集の件を伝えるために村の近くにやって来た第一世界の”世界神”義晴。

「こんなに派手にやるとは……、この世界のドラゴンは想像以上にやるな……」

辺りを見回すと、民家やピラミッドがボロボロに破壊されていた。一ヶ月前にサハラ砂漠をテリトリーにしていた”赤”のバジリスクが破壊した後だった。

「今はそれどころじゃないな。えっと、亮と八重はこの辺りにいると聞いたがいらないな」

義晴は亮と八重の”気”を探り、二人はミッドガルに向かっている

のを感じ取った。

「亮たちはミッドガルに向かっているのか。招集の件を伝えたいところだが……ぐっ!？」

義晴が言い終わる直前に背後から針のような物で刺された。痛みはないが、油断しておりまともに食らってしまったようだ。

「な、なんだ……目の前がクラクラして……」

針には痺れ薬が塗られており、義晴が体を動かそうとしても力が入らない。

すると背後からフードを被った男が現れ、ポケットの中から麻酔針ますいぼりを取り出すと、義晴の首を針を刺す。

「うっ!？」

義晴はそのまま倒れてしまい、意識を失った。フードを被った男は義晴に気付かれないように”気”を完全に消しており、無音の吹き矢で彼を狙ったのだ。

「世界神」といっても所詮はこの程度とは……」

男は更にポケットの中から奇妙な道具を取り出す。

手にしているのは”神界”の神々しか使うことが許されている”

神器”。彼が手にしているのは生き物を自分の意のままに洗脳して操る”神器”だ。

「神器 よ……起動せよ」

男が手にした”神器”から赤いの煙が飛び出し、義晴の体を包み込む。

「……この計画に奴は邪魔だ。アイツを倒してこい」

フードを被った男はそう言ってその場を去っていく。義晴を包み込んでいた煙は徐々に消えていき、義晴はゆっくり体を動かして立ち上がる。

義晴の目は赤くなっており、”神器”の影響によりフードを被った男に洗脳されてしまった。

「……………」

義晴は”気”を上げてミッドガルの方向へ向かう。目的はただ一つ、フードの男が最も憎む相手を殺すため。





僕と八重さんはミッドガルへと戻っていた。

ミッドガルに”緑”のユグドラシルが現れ、被害を大きくなるのを防ぐため、”世界神”<sup>ふたり</sup>二神は舞空術で空を飛んでいた。

（悠達なら今のユグドラシル相手でもギリギリ勝てるが、何が起きるか分からない。もしかしたら、近くに歪みが起きる可能性がある）  
一ヶ月前、エルリア公国に突如現れた”黄”のフレスベルグ。僕たちと交戦していたフレスベルグだが、突然発生した”空間の歪み”により、フレスベルグはパワーアップしてしまった。

もしユグドラシルが”歪み”に触れれば、悠たちに勝ち目はなくなる。

そうなるのを防ぐため、僕達はミッドガルへと急いでいたが、ある違和感を感じていた。

どんなに急いでも目的地にたどり着けない。まるで同じところをぐるぐると回っているかのように。

「亮ちゃん……」

「ああ、分かっている」

八重さんも違和感に気付いたようだ。僕達は動きを止め、周りを見回す。

目に映るのは変わらない風景。海も空も何一つ変わらない青く輝く風景。

しかし亮と八重には分かっていた。いや、感じ取っていた。

何処の誰かも分からない敵からの視線とその気配。”世界神”に戦いを挑む<sup>あわ</sup>哀れな敵。

僕は超サイヤ人ゴッドに変身し、八重さんは”神の気”を発する。

どこから仕掛けてくるかも分からない敵。

この状態で姿を見せる敵はまずいない。しかし僕達の前に姿を現

わす敵、そこには思いもよらない”世界神”が現れる。

「……………」

第一世界の”世界神”、河本義晴。”世界神”という役職では同期であり、僕と同じ第一世界出身である。

いつもと変わらない義晴、しかし彼から放つ”気”はとても異常であった。

”神の気”の中でもとても荒れている力。たとえその力を隠しても”世界神”なら僅かでも分かる。

恐らく誰かに操られているのだろう、何者の仕業かは分からない。しかしこれだけは分かる。

”世界神”でも操ることができるのは”神器”だけ。そしてこの異次元空間を作り出せるのも”神器”である。

(八重さん、僕がアイツの相手をします。義晴の隙すきを付いて透明の気弾を心臓近くに放ってください)

(分かったわ)

小声で僕は八重さんに指示を出す。義晴は無表情のまま構える。僕は八重の前に出ていつでも攻撃できるように拳を突き出す。

いつ始まるか分からない間。先に仕掛けてきたのは義晴であった。

「?!」

やはり戦闘スタイルは同じであった。彼の強みは強靱な足腰から放つ攻撃。

彼は「ONE PIECE」に出てくる海賊たちの技、”覇気”、”六式”。そしてドラゴンボール超のバジルの技。

「嵐脚ランキヤク・手裏剣しゅりけん」

鋭い蹴りで手裏剣状の”飛ぶ斬撃”を繰り出す。

「ギャリック砲!」

ベジータの技で迎え撃ち、義晴の放った”飛ぶ斬撃”を破壊する。

この攻撃だけでも”世界神”なら隙が出る。しかし八重さんは透明の気弾を放たない。

義晴を見ると明らかに八重さんを警戒している。やはり僕の方に注意を向けないといけない。

僕は義晴の懐ふところに近づき、接近戦を挑む。ここは相手の動きを封じ込むため、遠距離での戦闘を避ける。

僕は拳、義晴は脚を交えて戦う。接近戦で挑んだため、八重さんは僕に当てないように隙を伺っているのだろう。

「……シャイニングブラスター」

対する義晴も強さは変わっていないかった。脚から気弾を放つ。

「くっ!？」

バジルが使う技を放ったことで、僕の顔に直撃する。その攻撃により、頭から血が出るのが分かる。

それでも僕は義晴の隙を突くために攻撃を喰らっても気にせず拳を振るい続ける。

”世界神” 同士の戦闘は宇宙を破壊する程に及ぶビツクバンそのもの。

”神器” によって作り出されたこの空間でも一分でさえもたない。

一刻も早くこの戦闘を終わらせる必要がある。

僕は義晴に隙を作らせるため、人体の急所を狙いいつも威力を弱める。

義晴は僕の攻撃を全て受け止めるが、どう見ても僕が優勢に立っていた。

すると義晴は右手で”気”を練って巨大な金棒を生成し、僕に向かって振りかざす。

「……らいめいはつけ雷鳴八卦」

「ぐはっ!？」

義晴は”四皇カイドウ”が使う技で強烈な一撃を与え、僕は吹っ飛ばされないように踏ん張る。

この技は”ルフィ”の”ギア4”の状態でも瀕死になるほどのダメージを与える技で、他の”世界神”でも重傷を負うほどの力を持っている。

まともに受けたため、全身から血が出てきた。

「柳モチ」

義晴は”気”を練って、何本もの左足を僕の頭上に掲げる。この技

は”三将星カタクリ”が使う技の一つ。

(八重さん、サングラスを準備して)

(分かったわ)

僕は八重さんに念話を送ってから、両手を広げて頭の横に揃える。

「太陽拳！」

全身の気を発し、目くらましさせる。この技は天津飯、悟空、クリリンが使用した簡単な技。攻撃力は無いが、相手に隙を突かせることができる。

そのおかげで義晴は両手で目を覆う。その間に八重さんはサングラスをして、先ほどから準備していた透明の気弾を義晴の心臓近くに打ち込んだ。しかし——。

「なっ!?!」

義晴は目が見えないにも関わらず、八重さんの放った攻撃をかわした。どうやら、”見聞色の覇氣”で攻撃を回避したのだろう。

「熱息」  
ホロレス

口から熱風を吹き出す義晴。またしてもカイドウの技を使ってきた。八重さんは攻撃を避けるが、義晴の放った熱風は突如として方向を曲げる。

「そんな……」

熱風が向かう方向は先ほどの攻撃を避けた八重さんのいる場所。どうやら、確実にダメージを与えることを考えて放ったのだろう。

僕は咄嗟とっさに八重を守ろうとして、熱風の前に移動した。そして気のバリアを発生させるが、間に合わず義晴の攻撃をまともに喰らった。

「亮ちゃん!?!」

「だ、大丈夫です……それより、早く義晴を——」

「武装」

義晴は僕に接近し、両脚に”武装色の覇氣”を纏まとわせる。

”覇氣”を纏うことで攻撃力も上がる。先ほどまで防戦一方であった義晴が徐々に押し始める。

「……………悪魔風脚羊肉ショット」  
ディアブルジャンプムートン

右脚からなる高熱の蹴り。恐らくこの技で仕留めるつもりだろう。

このままでは僕がやられてしまう。そのため、僕は全身に気のバリアを作り、態と攻撃を受ける。

義晴の右脚が首、肩、背、鞍下、胸、太ももの順に僕の体を蹴り、全身を纏うバリアを貫く。最後には僕の鳩尾みぞおちに蹴りを入れる。やはり義晴の攻撃は一撃でも喰らうと相当なダメージを負う。

しかし僕は義晴の右脚を掴み、動きを封じ込む。

「はっ!？」

八重さんは僕が作った隙を突いて、義晴に向けて人体にだけ影響を与える気弾を放つ。

義晴は八重さんの攻撃を喰らい、僕はその隙に杖から”神器”を取り出す。

その”神器”は相手を眠らせる機能を持ち、操られた神を正気に戻すことができる。

僕は”神器”のボタンを押し、義晴に近づける。

すると”神器”から放たれる超音波により、義晴から異常な気が消えていく。

義晴はその場で気を失い、倒れそうになった体を支える。その瞬間、僕たちの周りを覆っていた空間も一瞬にして消えていく。

体中から痛みを感じ、全身がボロボロの状態。骨折していないのが奇跡だ。

意識はもうろうとしているが、それでもなんとか動ける。

八重さんは僕たちに近づき、義晴の肩を持つ。

「亮ちゃんは先に行つて。義晴くんのごことは私に任せて」

「ありがとう」

八重さんの言葉に甘え、僕は治療せずにユグドラシルと交戦しているクラスメイトたちの元へと向かう。

## V S 緑のユグドラシル 1

ユグドラシルと交戦し、イリスとフィリル、レン、そしてリーザの両親を無事に救出することができた。

あれから亮はまだ来ていない。恐らくアイツも手こずっているのだろう。

「ありがとうございます。あなたのおかげで、両親もフィリルさんたちも無事救出できましたわ」

リーザが架空武装の穂先をユグドラシルに向けつつ、俺に礼を言った。

リーザたちはユグドラシルが上位元素の干渉されないようにおよそ百メートル近い距離を取って、援護をしてくれた。そのおかげでイリスたちに怪我は無く、リーザの両親は安全な場所に避難させた。

「いや、リーザの正確な援護射撃のおかげだよ。じゃあ後は——  
—ユグドラシルを一気に消し飛ばすだけだな」

俺はイリスの手を掴んだまま、ユグドラシルの方へと向き直る。

だが木の根を蠢かせる巨樹の姿を見た途端、ぞくりと背筋が震えた。

何か……先ほどまでとは雰囲気が違う。

——脅威認識、自己保存を最優先。

脳内で、ユグドラシルの声が響く。

それは相変わらず機械的で、抑揚のない声音だったが……何か、強い感情のようなものが伝わってきた。

「兄さん、早くイリスさんから上位元素を借りて対竜兵装の構築を！」

けれど深月の指示が耳に届き、俺は余計な思考を振り払う。

ユグドラシルの変化は気になるが、今は奴を倒すのが第一だ。

「分かった。けど、ここで撃つとミッドガルにも大きな被害が出るぞ？」

「大丈夫です。対ヘカトンケイル戦と同じ手を使います。私たちが風でユグドラシルを空高く吹き飛ばしますので、兄さんは空中でユグドラシルを撃滅してください」

およそ三ヶ月前——ヘカトンケイルが突如としてミッドガルに出現した時、俺たちはその方法で奴を消し飛ばした。

今のユグドラシルは、ヘカトンケイルに比べればかなり小さい。宙へ持ち上げるのは難しいことではないだろう。

「了解だ。イリス、やるぞ」

ユグドラシルを睨みつけているイリスに、俺は呼びかける。

「……うん。できればモノノベの記憶について色々知りたかったけど——もう倒すしかないみたいだね」

イリスは表情を曇らせながらも小さな声で呟き、渋々と首肯した。

「対竜兵装——マルドゥーク」

俺はイリスの上位元素を借りて、巨大な砲塔を構築していく。

「特殊火砲、境界を焼く蒼炎！」

具現するのは現代の技術では再現不可能な、旧文明の兵器——その一部。

回路やパイプが剥き出しになった基部から、十数メートルにも及ぶ砲身が伸びる。

「皆さん、これより最大規模の空気生成でユグドラシルを空へ吹き飛ばします！ カウント5！」

俺が対竜兵装の構築を終えたのを見て、深月が竜伐隊へと指示を出した。

俺とイリス以外の全員が架空武装を構え、グラウンドの端にいるユグドラシルを見据える。

「4、3、2、1——放てっ！」

深月の号令と共に、皆が上位元素から空気へと物資変換を行う。

ごうっ、と突風が巻き起こり、グラウンドの砂を舞い上げながらユグドラシルの巨体を呑み込んだ。

砂煙の向こうに揺らめくユグドラシルの影が、空へと昇っていく。高く、高く、吹き上げられたユグドラシルは砂煙を突き抜け、太陽

の下にその身を晒した。

「今です、兄さん！」

「おうっ！」

俺は精神と連動する対竜兵装を操作し、宙に舞うユグドラシルへ狙いを付ける。

だが――。

「っ!？」

砲塔が軋み、ガタガタと振動した。上手く意思が伝わらず、狙いがぶれてしまう。

(これはまさか、ユグドラシルの電子干渉!?)

まだ十分な距離があるはずなのに、俺は驚愕する。

けれど驚きに見開かれた俺の瞳が、その答えを捉えた。

上空のユグドラシルからこちらへ伸ばされた――細い枝。

(枝を伸ばすことで、干渉範囲を広げたのか!)

恐らく砂煙を目隠しにして、枝を伸ばしていたのだろう。

これでは狙いを付けることができない。すると脳内からユグドラシルの声が響いてきた。

――緊急、危険、脅威を認識。

ユグドラシルが恐れているのが分かる。機械的な言葉を発しているが、俺には恐怖を感じていると伝わってくる。

奴が脅威に感じるもの、その意味に俺は理解できた。

「ビックバン・アタック!!」

後ろから大きな声が聞こえた。皆は気付き声が出した方へと向く。

そこには頭から血を流し、制服がボロボロになった亮が”気”の砲弾をユグドラシルへ向けて発射した。

”気”の砲弾はユグドラシルの長く伸ばした枝に直撃し、大きな爆発を起こした。

細い枝が消滅したことで、砲塔の軋みが収まった。

「亮！」

俺は大声で亮の名前を呼ぶ。どうやら仕事を片付けたようだ。

「悠、今だ！ ユグドラシルを倒せ！」



「ああ……発射っ！」

ユグドラシルの方へ向き直し、制御を取り戻した境界を焼く蒼炎を放つ。

蒼く輝く砲弾が空へと撃ち上がり、砲身は発射時の発熱に耐え切れず、融解した。

(当たれっ！)

俺は胸の内です。

しかし、亮の放った気弾の爆発により、ユグドラシルが空中で僅かに浮き上がり、砲弾はユグドラシルの枝葉を掠め——天高くで雲だけを吹き飛ばす。

その爆風に圧されるようにして、ユグドラシルがこちらへと落ちていく。

「っ——迎撃！」

深月が焦った声で指示を出すのが、構えた弓型の架空武装“五閃の神弓”の輪郭は歪み、上位元素の塊へと戻ってしまう。

その現象は皆にも連鎖した。

「わたくしの”射抜く神槍”が!？」

リーザの架空武装も形を崩し、ユグドラシルの方へと昇っていく。フィリルやレン、竜伐隊の上位元素も、彼女たちの手を離れた。

俺の対竜兵装が電子干渉を受けたのと同様に、深月たちの上位元素もユグドラシルにハッキングを受けてしまったのだろう。

「僕に任せろー！」

すると亮は俺たちの近くに着地し、両手を広げてユグドラシルに定め。

「くらえ……っ!？」

すると電子干渉を受けた上位元素の半分が亮の周りへと集まる。

そして亮に触れた瞬間、爆発を起こした。

「亮っ!？」

ユグドラシルによる電子干渉により、上位元素を爆発させたのだらう。

攻撃を受けた亮はその場で膝を突き、そのまま両手から血を流す。

「くっ……こんな攻撃、いつもなら平気なんだが……」  
深傷を負った亮を見た深月が指示を出す。

「全員退避！ とにかくユグドラシルから距離を取ってください！」

深月の指示を聞いた皆は、その場から逃げ出す。

「大島くん、大丈夫？」

「亮お兄ちゃん……しっかりして」

「ああ、すまない……」

フィリルとレンは亮の体を支え、避難しようとその場を後にする。

「イリス、逃げるぞ！」

俺もイリスの手を強く握って、駆け出した。

「う、うん」

イリスは頷いて足を動かすが、視線は上空へ向いている。今でも俺の記憶のことを気にしているのだろう。

深月たちから奪われた上位元素ダークマターは、ユグドラシルの枝へと集まっていく。

俺は走りながらも空を仰いで、ユグドラシルの行動を警戒した。

——脅威、排除。

頭の中で響く声に、首筋が粟立あわたつ。

ユグドラシルから伝わってくる感情の正体に、俺は気付いた。

これは、殺意だ。

「モノノベ！ 何か来る！」

ずっと視線をユグドラシルへ向けていたイリスが、切羽詰まった声を上げる。

そして——ユグドラシルの殺意は、上位元素を介して具現化した。

ハッキングされた上位元素が形を歪ゆがめ、無数の細い枝となって地上へと降り注ぐ。

「皆っ！ 避けろっ!!」

俺は間に合わないことを悟りつつも、声を上げた。避けきれないし、守りきれない。

きつと、誰かが傷つき、誰かが死ぬ。これはそういう攻撃だ。

亮が無事ならなんとかなるが、現れた時から傷を負っていたため、防ぎようがない。

そして凄まじい勢いで伸びた枝は、皆を貫く寸前に軌道を変える。

「っ!？」

イリスが息を呑む。

全ての枝が向かう先は、俺のすぐ傍。

俺と手を繋いで走る彼女。

「まさかこの殺意は、イリス一人に向けられたものだったのか!？」

俺は右足を軸にして身を捻り、回転するようにしてイリスと立ち位置を入れ替える。

とっさにできたのは、それだけだった。

「がはっ……っ!？」

腹部に焼き付くような熱さと異物感。少し遅れて激痛が脳を揺さぶり、俺はイリスの手を離す。

イリスを狙っていた枝の一つが、俺の体を貫いていた。

他の枝は、俺に触れる直前ね止まっている。

「モノノベー！」

イリスが顔面を蒼白にして、俺の体を支えた。

「兄さん!？」

「ユウ!？」

遠くから深月たちの声が耳に届く。

——ノイン負傷。非常事態。対応検討——

頭の中にユグドラシルの音が響き、ずるりと腹部に刺さった木の枝が引き抜かれた。ごぼりと傷口から血が溢れる。恐らくユグドラシルは、俺を傷つけるつもりはなかったのだろう。

伸びた枝は落下中のユグドラシルの元へと引き戻され、戸惑うように蠢く。

「ぐっ……」

俺は右手で傷口を押さえるが、激痛と失血で眩暈に襲われ、地面に膝をついた。

「モノノベ……血が、血がたくさん……」

顔を歪め、目に涙を浮かべてイリスは狼狽える。

俺は痛みを堪えながら、そんな彼女に言う。

「イリス——逃げろ！ ユグドラシルは、お前を殺す気だ！」

地上へと落下してくるユグドラシルの姿は、霞む視界の中でみるみる大きくなっていく。

今は俺を傷つけたことに困惑している様子だが、先ほどの攻撃は明らかにイリスの殺害を目的としていた。

次に狙われたら、もう守りきれない。

「……………さない。許さない——」

しかしイリスは俺の声が聞こえていないのか、激情に駆けられた瞳で上空のユグドラシルを睨んだ。

背筋がぞくりと震える。

ユグドラシルの殺意を感じた時とは比較にもならない。

あまりにも強く、純粋な怒りに、俺は圧倒された。

「あたしは、あなたを許さないっ!!」

イリスが掲げた手の平に、杖が出現する。

彼女の架空武装——”双翼の杖”。

「ダメ、だ……上位元素はユグドラシルにハッキングされて——」

俺は掠れた声で彼女を止めようとしたが、途中で異変に気付いた。

赤い——。

彼女の架空武装は白銀色だったはずだ。

それが今は、鮮やかな赤色に染まっている。

それはまるで没する太陽のごとき眩い赤光。

表面の物質化で微かに色づいているわけではない。杖そのものが

赤い輝きを放っている。

俺はその色を——光を知っていた。

——コード・フュンフ第五権能、発動。脅威レベル、最新。対象をフュンフ・バジリスクの後継と認識。

脳内でユグドラシルの無機質な声が響いた直後、引き戻されていた無数の枝が再びイリスを狙って落ちてくる。

明確な殺意を込めた、致死の攻撃。

どう足掻あがこうが躲かわせる量ではなく、回避が可能な速度でもない。しかし——。

「来ないでっ!?!」

イリスの叫びと共に、杖から赤い閃光まぶたが放たれた。

あまりに眩まぶしくて、俺は反射的に目を閉じる。そして次に瞼まぶたを開いた時——イリスに迫っていた枝のほとんどは塵ちりとなっていた。

消し飛んだ枝の断面は固く硬化し、ひび割れている。

間違いない。これはバジリスクが用いた時間を吹き飛ばす能力……”終末時間カタストロフ”。

リヴァイアサンやフレズベルグの能力が俺に受け継がれたように、“終末時間”も誰かへ継承されていることは想定していた。それがイリスだったことは驚きだが、決して意外ではない。

けれど……おかしい。

今ここは、ユグドラシルの干渉圏内だ。

イリスが上位元素ダークマターを変換してバジリスクの力を再現しているのだとしたら、途中でユグドラシルの干渉を受けてしまうはず。

それなのに、イリスの赤い杖は煌々こうこうと輝き続けている。

(まさかイリスは、上位元素ダークマターを介さずにあの赤い光を生み出しているのか?)

信じられない思いで、俺はイリスを見上げた。

彼女はただ、怒りの眼差まなざしでユグドラシルを睨にらんでいる。

俺のために——怒っている。

たぶん、自分がバジリスクの力を使っている自覚もないのだろう。

「絶対に——許さないっ!!」

激情のまま叫び、イリスは赤い杖を振りかざす。

目が眩むような輝きが、世界を黄昏色たそがれいろに染め変えた。

落下するユグドラシルの巨体を呑み込む、赤き光の柱。

時を剥奪はくたつする閃光が、ユグドラシルを風化させていく。

——存在維持、不可能。端末を放棄——

ユグドラシルの声が微かに聞こえ、遠くなる。

常識の枠外にいるドラゴンであろうと、生物である以上は時間の流れに逆らえない。

時の果てに行き着くのは、平等なる死。

光が消え、砕け、細かな破片になった巨樹の残骸ざんがいが、パラパラと地面に降り注ぐ。

「はあっ……はあっ……はあっ……」

イリスは肩で息をしながら、ユグドラシルの消えた空を仰いでいた。

その手から赤い杖が消え、力尽きた様子で座り込むイリス。

だが彼女はすぐに俺の方を向くと、震える手をこちらへ伸ばす。

「モノノベ……大丈夫だよ。すぐにみんなが助けに来るから」

傷口を押さえている俺に優しく語りかけ、イリスは俺の頬に触れる。

「イリス——」

出血と激痛で霞む意識の中、俺は彼女の名を口にした。

本当は問いかけたい言葉が山ほどあるのだが、もはやそれを声にする力がない。

「兄さん!」

「悠!」

「ユウ!」

「物部くんっ!」

皆が俺を呼ぶ声と、近づいてくる足音を聞きながら、俺は目を閉じる。

「モノノベ・ユウ！　しっかりしてください！」

最後に耳へ届いたのは、やけに必死なリーザの声だった。

## 可能性

「おお——目覚めたか」  
瞼まぶたを開けると、そこにはシャルロット学園長の顔があつた。視線を動かしながら状況を確認し、途切れる前の記憶を辿たどる。

「ここは、病室ですか？」

心電図を表示する機器や、用途が分からない物々しい器具が置かれた白い部屋を見て、俺は学園長に問いかけた。

「病室というか、集中治療室だ。とはいえ、心配するでないぞ？  
そなたの傷は大方塞ふさがっておる」

「え……そんなはずは——」

確か俺は、ユグドラシルの枝に腹部を貫かれ、その痛みと出血で気を失ったはずだ。あれだけの深手が、すぐに癒いえるはずはないだろう。

だが右手で傷口の辺りに触れてみても、痛みがない。不思議に思つて上半身を起こし、病院着をめくつて傷口を確認する。

だがそこにあつたのは、大きなカサブタだけ。

「俺は、どれだけ眠っていたんでしよう？」

まさか数週間眠り続けていたのかと、俺は焦る。

「三時間ほどだ」

けれど返ってきた答えは、遥かに短いものだった。

「なっ……三時間？」

「ああ、そなたらの働きでユグドラシルの端末は撃破できたが、後始末や来賓客への事情説明などで、ハルカたちはまだ大忙しだ。イリス・フレイアがバジリスクの能力を用いたことも騒ぎになっているが、こちらはそなたや物部深月の前例があるゆえ、大きな問題にはならぬだろう」

現状を淡々と説明する学園長。だがたった三時間しか経っていないのなら、俺の状態と矛盾する。

「け、けど、そんな短時間で傷が塞がるわけではないですよ」

「——まあ、普通はな。ただそなたにもう、私の正体を隠す必要



がない。ゆえに支配の力で治療を促進した」

「学園長の能力は、そんなことまでできるんですか……」

俺は感心しながら呟く。

「私の支配とは、自らの体液を相手の体内に送り込み、私と精神や体機能を同調させることで成立するものだ。傷口を舐めて唾液で濡らせば、不老不死に近い私の治療力がそなたにも一時的に宿るのだよ」

「唾液……じゃあ、俺を止めるために左腕に噛み付いたときも——」

「そう、傷口から唾液を送り込んだのだ。というか——私が不老不死という部分には驚かんのか？」

不思議そうに学園長は首を傾げる。

その仕草は妙に子供っぽくて、可愛いらしく思えた。

「学園長とその先代が正体が吸血鬼のオリジナルってことは驚きでしたが、それ以上にアイツの存在が——」

「ああ、大島亮か……」

俺の脳内に亮の顔が浮かび上がる。アイツはこの世界の神であり、俺たちに無い不思議な力を持っているため、学園長の正体や能力にはイマイチ驚けない。

「そういえば、亮は大丈夫ですか？」

「心配はいらん。私が治療してすぐに彼奴は目覚めたからな。全く、流石と言うべきだな。神の生命力は常識を遥かに超えている」

どうやら亮も無事だと知り、安心して息を漏らす。

「これからそなたを大島亮のいる一般の病室へ移ってもらう。さすがに無傷ということにはできぬから、彼奴と同じで数日は入院してもらう」

「分かりました」

もし俺や亮が入院していなければ、学園長の正体を知られてしまうからだろう。

「彼奴にも私の正体を明かしたからな。さすがに神だけあって驚きはしなかったがな」

「そうてすか……」

まあ、亮なら学園長の正体は知っていたであろうと予想する。神として仕事をしているなら、調べ上げることできるからだ。

しかし俺はある疑問を思い浮かべる。

不老不死なら、どうして学園長の先代は死んでしまったのか。

吸血鬼の伝承は噂うわさに尾びれが付いているが、不老不死というのが本当なら、その言葉通り不死身であると考えられる。

学園長に質問しようとするが、立ち入ったことを聞くのは良くないと踏みとどまった。

「物部悠、そなたに一つ知らせておきたいことがある」

学園長は真剣な表情になって告げる。

「知らせですか？」

「ああ、少し前、ユグドラシルと思わしき大樹が、日本に出現した」  
「な——」

俺たちが倒したユグドラシルは、小さな端末が巨大化したものに過ぎない。あれを倒したところで、ユグドラシルが滅びたなどとは考えていなかった。

だがいきなり日本に現れるというのも、全くの予想外だ。

「それ以降、そなたへの干渉力も強まっている。このままいくと私の支配と拮抗きつこうするやもしれん。可能であるなら、即座にユグドラシルを滅ぼすべきなのだが……」

学園長は途中で言葉を切り、表情を曇らせる。

「どうしたんですか？」

「私は今、そなたの中にあるユグドラシルの一部を支配して押さえつけておる。そして支配することで、私はユグドラシルがどういう存在であるかを理解してしまった」

硬い声で学園長はこう続けた。

「ユグドラシルを滅ぼすことはできん。いや……してはならんだ。あれを倒すには——地球上の全植物を消し去る必要があるのだから」

◇

学園長と話し終えてしばらくすると、悠が集中治療室から僕のいる病室へ移ってきた。

どうやら僕と同じように学園長の能力で傷は塞がったようだ。

完全に治ってはいないが、僕たちの傷は殆ど癒えている。しかし、無傷だったことにするのは無理があるため、数日間入院することになった。

目覚めた時には既に治療をした後で、目覚める前には悠への治療を済ませていたようだ。

学園長は自身の正体とその能力を明かしてくれた。

やはり原作通り、人間を支配する権能を持つ”灰”のヴァンパイアであった。

原作を知っていたため、驚きもしなかった。まあ、神という立場にいるため、初めて知っても他人事みたいに流してただろう。

今は来賓たちの対応を手伝っており、ここにはいない。

悠がこの部屋に移ってくる前に八重さんに連絡した。

義晴は無事だと知り、会議の内容を伝えるためにこの世界に来たようだ。

僕たちを探している途中、何者かの敵に操られたようで、それが誰なのかは知らないらしい。

八重さんは一度、ミッドガルに戻って深月さんたちに僕が負傷した経緯を嘘を交えて話してくれた。

八重さんいわく、ミッドガルに潜り込んだ作業員との戦闘で、彼女を守るために体を張って負傷したということになっている。

深月さんは僕の正体を知っているため、本当のことは伝えてくれたようだが、リーザさんたちには僕が神であることは内緒にしているため、正体を明かすことはできない。

やはり嘘を吐くのは心が痛い。いつか本当のことは言おうと思っ

ているが、それがいつになるのかは分からない。

今は義晴を襲った敵について調べることよりも、日本に現れたユグドラシルをなんとかするのが優先である。

悠や学園長に仕事の内容を話せば、彼らを危険に晒すことさらになるため、義晴を襲った敵については話さないことにした。

悠とユグドラシルについて話しをしていると時間が経ち、空に一番星が輝いていた。

——コンコン。

その時、部屋にノックの音が響く。

「兄さん、亮さん、起きて大丈夫ですか？」

病室に入ってきたのは深月さんを始めとするブリュンヒルデ教室の面々、そしてリーザさんの両親であるマーク・ハイウオーカーさんとリンダ・ハイウオーカーさんだった。

マークさんたちは僕と同じで頭や腕に包帯を巻いている。この病棟で手当てを受けていたのかもしれない。

同じくユグドラシルに捕らわれていたイリスさん、フィリルさん、レンちゃんは、彼らほど傷を負っていないようだった。

ただ——一人ユグドラシルから逃げて悠たちに情報を伝えたアリエラさんは、かなりの無理をしたのか腕にギプスを嵌めていた。

八重さんは既に”神界”に帰っており、彼女たちの中にはいなかった。

「ああ、思ったより軽傷だったらしい。血もたくさん出て慌てたが、急所は外れていたみたいだ。亮も重賞を負わなくてよかったな」  
「そ、そうだな。僕は生命力だけは生まれつきいいからな。数日もしたら悠と一緒に退院できるよ」

悠は適当な言い訳をし、僕も彼女たちに心配させないように笑顔を向ける。

深月さんは僕たちの表情から本当に問題ないようだと思っただけで、ほっと息を吐く。

「そうですね……安心しました」

「ユウ、リョウ、死んじゃわなくてよかった……」

ティアちゃんはぽろぽろと涙を零しながら言う。そんな彼女を隣にいたフィリルさんが抱きしめ、僕たちを睨んだ。

「物部くんは大島くん、あんまり心配させないで欲しいな。私も、泣いちゃいそうだったんだから」

「キミたちは相変わらず無茶をし過ぎだよ」

「ん！」

アリエラさんとレンちゃんはフィリルさんに同意して頷く。

「皆……悪かった」

「本当にすまない」

僕と悠が謝ると、腰に手を当てたリーザさんがずいっと前に歩み出てきた。

「どれだけ謝っても足りませんわよ！ モノノベ・ユウ、あなたは本当に無茶な行動をし過ぎですわ！ 一歩間違えば死んでいたかもしれないですよ！」

リーザは悠に向かって言った後、今度は僕に視線を向けて指を指す。

「あなたもですわよ、オオシマ・リョウ！ あなたの友人を守るために体を張って怪我をした拳句、治療もせずになたたくしたちのいるグラウンドに向かってユグドラシルと戦い、さらに重傷を負ったのですよ。二人にはわたくしがどれだけ心配したのか、分かりっこないんです！」

赤くなった目で僕たちを見据えるリーザさん。

彼女が右腕を震えているのを見て、叩かれるのを覚悟する。しかし彼女は左腕で震える手を抑える。

「けど……ですけど……ありがとうございます。父様と母様を助けていただいたこと、怪我を負ってまでわたくしたちを助けてくれたことは……本当に感謝していますわ」

震える声でリーザさんは礼を言う。するとマークさんとリンダさんも前に出てきて深々と頭を下げた。

「君たちに助けていただいたこと、心から感謝する」

「ありがとうございます」

「いい、いえ、そんな——皆の協力あつてのことですし……俺はそんなに大したことはしてません」

「僕は役に立つどころか、足手まといになっただけです。お礼を言われることはなにも……」

僕たち怪我人は慌てて首を振った。

悠は役に立ったが、僕は彼らの足を引つ張ってしまった。もし僕が気弾を放たずに枝だけを切つてきれば、悠の対竜兵装はユグドラシルを消し去っていたはずだ。

「いいや、たった一人であの怪物の懐ふところに飛び込むことなど、並みの方にはできんだらう。それに君も怪我を負つてまであの怪物に立ち向かつたのだ。謙遜けんそんすることはない」

マークは首を横に振りながら言葉を続ける。

「やはり私の娘には、きちんと男を見る目があつたらしい」  
「え？」

リーザさんが彼の言葉を聞いて、驚いた表情を浮かべる。

「君たちの名前を聞かせてもいいかね？」

マークさんが僕たちを交互に見ながら言う。

「はい——俺の名は物部悠です」

「僕は、大島亮といいます」

僕たちはマークさんに名乗る。

「ありがとう。今度ともリーザのことをよろしくお願いするよ、ミスター・ユウ、ミスター・リョウ。君たちのことを憶えておく」とするとマークさんは悠の方を向く。

「ミスター・ユウ、もしよければ、リーザとの将来を真剣に考えてみて欲しい」

「将来……？」

思いがけない言葉に、悠は唾然あぜんとする。

「と、父様！ そのことは今言わなくても——」  
真つ赤にして、慌てふためくりーザさん。

僕は彼女の言葉に違和感を覚える。

「リーザに彼氏が君だと知った時は、私は少なからず君を認めて

いたからね」

「なっ……」

この言葉を聞いた僕は驚いた。原作では悠のことは最初は認めておらず、他に男がいないから悠を選んだと、そう思っていたはずだった。

しかしこの世界は原作とは多少違っている。恐らくマークさんたちは娘に幸せになってもらうために、悠か彼氏と知った時に認めたのだと知る。

マークさんは柔和な微笑<sup>ほほえ</sup>みを浮かべる。

「無理にとは言わない。ミッドガルを卒業するのはまだ先だ。それまで考えていて欲しい」

マークさんは腕時計を目に通して、リンダさんに視線を向けた。

「そろそろ帰らねばならない時間だ。行こう」

「はい」

「あつ、待つてくださいい！」

部屋を出ようとする二人を、リーザさんが慌てて追いかける。

彼らが病室から去ると、急に室内が静まった。

「に、兄さん、どうするんですか！ リーザさんとの結婚相手として、彼氏役になった時から認められたんですよ!?!」

我に返った深月さんが、裏返った声で叫ぶ。

「今のはやっぱりそういう意味だったのか？」

話に付いていけなかった悠は、呆然<sup>ぼうぜん</sup>と問い返す。

「けど、物部くんがよければって感じだったじゃないか。強制されないなら、別に問題はないと思うけど」

「ん」

アリエラさんの言葉にレンちゃんも頷<sup>うなず</sup>く。

「でも……リーザ、本気になったりして。物部くんも、まんざらでもなさそうだったし」

フィリルさんがぼつりと呟<sup>つぶや</sup>いた途端、病室の空気が張りつめた。

「リーザさんもまんざらでもなかったな。なにせ悠を恋人役に選んだんだから、好意を抱いててもおかしくはないな」

僕の言葉を耳にした深月さんが念を押すように悠に問いかけてくる。

「兄さん、恋人の振りはあくまで演技だったんですね？」

「ユウ！ 結婚するならティアとなの！」

ティアちゃんもぴよんぴよん飛び跳ねて主張する。

「み、皆、落ち着いてくれ」

二人を宥めながら皆の後ろにいる彼女を見る悠。

目が合ったようで、イリスさんはびくりと肩を揺らす。

先ほどからイリスさんは一言も発していない。彼女の瞳には、微かに怯えた色が浮かんでいた。

ここは原作通り、自分のせいで怪我をさせたことを気にしているのだろう。

そしてユグドラシルとの戦闘でも、原作と同じで上位元素を介さずにバジリスク的能力である”終末時間”を生み出していた。

彼女自身はそのことに気づいていない。

悠や深月さんのような前例があるため、バジリスク的能力を用いたことは問題ではないと思っっているだろう。

ドラゴンの能力を再現できるようになっても、それはあくまで上位元素を生成してできたもの。

しかしイリスさんのしたことは次元が違う。

僕はその理由を知っているが、悠たちが知るにはまだ早い。

原作を思い出す。第五巻、最終章と殆ど同じ展開。そして学園長は原作で悠にある可能性を口にしていて、それを思い出す。

恐らくここに移る前にも悠に話しているに違いない。

その可能性は殆ど合っている。

その言葉はこうだった。

イリス・フレイアは、ドラゴンになった可能性がある——と。



## エメラルド・テンペスト それぞれの思い

「ねえ、ジャンヌちゃん、面白いことを教えてあげましょうか？」  
ドイツ、フランクフルトにある空港近くのホテル。

その一室のベッドに寝転んでテレビを眺めていたキーリ・スルト・ムスペルヘイムは、バスルームから出て来たジャンヌ・オルテンシアに話しかけた。

「結構だ。貴様にとって面白いことは、オレにとっては大体が不快な事柄だからな」

ジャンヌは、濡れた髪をタオルで拭きながら答える。

「そう？　悠に関する事なんてただけど」

「何だど？　隊長に何かあったのか!？」

キーリの言葉にジャンヌは顔色を変える。

「あら、やっぱり聞きたい？　悠のことになると食い付きがいいわね」

「ぐっ……」

キーリはからかうように微笑むと、ジャンヌはバツが悪そうに視線を逸らす。

「いいわよ、教えてあげるわ。実はね……さっきのニュースで、ミッドガルにユグドラシルが現れたって言ったの」

にやにやしながらキーリは言う。

「な——ユグドラシルが？　隊長はどうなった!？」

「さあ、そこまでは分からないわ。けどユグドラシルはすぐに撃退されたらしいから、大丈夫なんじゃない？　本当に悠のことになった途端に、ジャンヌちゃんは可愛くなるんだから」

「っ……う、うるさいー!」

顔を赤くし、それをタオルで隠すジャンヌ。

その様子を見てキーリは楽しそうに笑う。

「あとね、面白いことはもう一つあるのよ。ジャンヌちゃん、テレ

ビを見て。まだニュースは続いているわ」

ジャンヌは促<sup>うなが</sup>しつつ、キーリはテレビの音量を上げた。

「これは——」

テレビへ視線を向けたジャンヌは、言葉を失った。

『日本の富士山麓<sup>ふじさんろく</sup>に突如として出現した巨大樹——それに伴<sup>ともな</sup>い、周辺十数キロでは原因不明の電波障害が発生しており——』

テレビ画面には、スケールが把握できないほどに巨大な木が映し出されていた。同じ画面に映っている富士の山よりも高く、天辺<sup>てっぺん</sup>は雲に隠れて見えない。

「日本にこんなものが……?」

「ええ、そうよ。ジャンヌちゃんは、この前ユグドラシルと一緒に消滅したヘカトンケイルが、どこから現れたか憶<sup>おぼ</sup>えてる?」

キーリは笑みを浮かべながら問いかける。

「確か、基地で見た資料だと——再出現が確認されたのは日本だったような……」

「正解。面白い符合よね。たぶん……あのとてつもなく大きな木こそが、ユグドラシルの本体だと思うわ」

そう言ってキーリはテレビ画面を指差した。

「どうしてそんなことが分かる?」

「——あなたより多くのことを知っている私には、あなたに分からないことが分かるのよ」

キーリは曖昧<sup>あいまい</sup>な言葉でジャンヌを煙に巻き、目を細める。

「恐らく彼も知っているかもしれないわ」

「彼もだど? ……まさかアイツのことか?」

ジャンヌはある男を思い浮かべる。それは五年前、ドラゴンをたった一人で圧倒した不思議な力を持った男。

「ええ、大島亮のことよ。もしかしたらただけどね。けど、彼ならユグドラシルのことも知ってるかもね」

「ふん、ますます野放しにはできないな。貴様もその男も」

ジャンヌは大島亮を警戒し、一切信用していない。

「ジャンヌちゃん、次の目的地は日本よ」

「ん、日本……」

ジャンヌはテレビ画面を見ながら呟いた。

「そう———ヴリトラが現れた地であり、私と悠にとつても特別な場所。それにニブルの基地で見つけたフレイズマルのデータにも、この国を経由した記録が残されていた。きっと、これから”何か”がこの国で起きるわ」

キーリは硬い表情で答えると、リモコンを操作してテレビを消す。そして渴望を滲ませながら、囁くように言葉を続けた。

「私はその場に居合わせなくちゃいけないの。彼とつり合う存在に———なるために」



第四世界のある森の中。フードを被った男は、杖の先端にある丸い球体に映し出された映像を見ていた。

「……………」

フードの男は、ある三神の戦いを見ていた。

それは第十二世界の上空での戦い。第一世界の”世界神”と第十二世界の”世界神”、そして第七世界の”世界神”が戦闘を繰り広げていた。

「やはり、”世界神”二神を相手にするのは無理があつたか」

彼は三神の戦闘が終わるのを見届けると、顔を上に向けてふうと息を吐き出す。

「まあ、”世界神”を操っただけで倒せる訳ではないことは最初から分かつてはいたが、隙を付けば私の手で倒すことはできる」

フードの男はそう呟くと、映像を消して球体を操作する。

彼は十二ある世界のうち、文明レベルが上位に上がっている第三世界を選び、映像を映し出す。

球体には、文明が発達して大都会となった街が映し出された。その

近くにある路地裏の奥に、ある紫色の歪みを見つける。

「ここにもあったか……空間の歪みが」

空間の歪み。全世界に起こる自然現象であり、“世界神”が仕事で浄化しなければならぬ。

“世界神”しかできない仕事である。しかし、それは立場上の話。神だけが発する気を注ぐことで中和され、現象を無くすことができる。

そのため、自然の神々でもやろうと思えばできる。

「全世界に必ず起きる自然現象……美しい世界を守るためには必要な仕事ということか」

そしてフードの男も、神の気を扱える存在。

彼に纏わることがあるとすれば……かつて神々の世界で、“世界神”になれなかった人間。

いや、元人間と言うべきかもしれない。人間をやめ、神になれなかったフードの男。

そんな彼は今、ある野望のために動いている。

「……神は一神で十分だ。自然の神々と“世界神”を倒した後

は、“絶対神”ゴッド……いや、全王を殺す」

フードの男は眩きながら、球体に向けて手を翳す。手のひらから出てくる紫色の波動。気配に敏感な生物でも感じ取ることができない力。

禍々しい邪気が込められているが、体の内側にのみ増幅されたクリアで質が高い力、これこそが“神の気”である。

神の領域に達しているものしか感じ取ることができない力。“神界”の神々たちはその力を操り、感じ取ることができぬ。

フードの男から放たれた神の気は、球体に映し出された映像を超え、路地裏にある空間の歪みに達する。

神の気に触れた瞬間、歪みは消えていき、数秒後には無へと変える。

「これで歪みが消えたか。デスクで仕事をしている“世界神”たちも、もうすぐ気付くはずだ……ん？」

彼はこの世界の遠くから、“世界神”の気を感じ取った。その“世

界神”はフードの男がいる森へと近づいてくる。

「この世界を管理するエドワード・タッチか。ここで戦うのは避けるとしよう」

第四世界の”世界神”エドワード・タッチが仕事でやって来たのを知り、この森から逃げる準備をする。

「……私こそが神に相応しいのだ。今は”神界”の神どもから逃げるか」

フードの男は杖を懐ふんどころに仕舞うと、舞空術ぶくうじゆつで体を浮かせる。

そして彼は怒りを露あらかにしてその場を後にする。

「……必ず奴に復讐する。あのサイヤ人もどきめ」

◇

その少女は、多くのことを知っていた。

普通なら掛け算や割り算を習う程度の年齢で少女が遊んでいたのは、大人でも解くのが難しい複雑な照明問題。

少女は同年代の子供が知らないようなことを、たくさん、たくさん、その小さな頭に詰め込んでいた。

いつもの数学定理、学術書や図鑑から得た知識、機械と対話するための言語スクリプト——数え上げれば切りがない。

しかし少女が本当に解き明かしたいと願っている問いの答えだけは、いつになっても見つからないままだった。

そして今日も少女は、白く大きな背中をじつと見上げる。

白衣を着た少女の父は、ずっとある研究に没頭していた。

ヨーロッパにあるイタリアの街に現れた”青”のヘカトンケイルを一撃で仕留めた少年。

”D”にはない不思議な力でドラゴンの一体を撃破し、それを聞いた少女の父は彼が使用した能力を研究しており、少女に背中を向けていた。

何の研究をしているか分かっていない少女は、彼を振り向かせる方法を考えていた。

お父さん——と、呼びかける少女。

しかし彼は振り向かない。椅子に座り、無言でパソコンのモニタを見つめている。

それでも少女は諦めず、何度も何度も彼を呼ぶ。

おとう——。

「うるさい。少し静かにしてくれ」

だが、返ってきたのは彼の冷たい言葉。

振り返らないまま、彼は少女を叱る。

少女はぴくりと身を竦め、声を喉の奥に呑み込んだ。

静まり返った部屋に響くのは、彼がキーボードを叩く音だけ。偶に言葉を発するとすれば、「例の少年は一体どんな能力なんだ？」と口にするだけ。

下唇を噛み、泣きそうになるのを堪える少女。

そうして少女は、いつものように学術書を手に取り、研究室の隅で読み始める。

けれど、開かれた本のページにポタポタと涙が滴り落ちた。

分からない。

どうすれば彼が振り向いてくれるのか。

そんな日々が振り返され、いつしか少女は言葉を口にするのを止めた。

それは、ただ父を不快にするだけのものだったから。

二人でいるのに、孤独を感じる毎日。

だがある時——突然二つの出来事が起きた。

一つは少女が父の目を盗んで外の世界に飛び出した日のこと。

行く当てのない少女に優しく声をかけてくれた少年。彼は少女を連れて公園や街を周り、夕方になるまで遊んでくれた。

少女にとって特別な一日であり、数年ぶりに味わった楽しさと喜びの感情。

彼は少女を無事に家まで送り、去り際にこう名乗った。

「僕はせかいしんだよ」

そう言つて彼は少女の頭を撫で、その場から去つていく。

——せかいしん？

少女にとつて知らない言葉、意味が分からなかった。

けれど彼から感じた温かい手の感触と優しい言葉。まるで”兄”のようだった。

戻つてきた少女は、いつもと変わらない父の姿を見る。外の世界に行つていたことに気付いていない様子だった。

また外に出れば彼と遊んでくれると楽しみにしていたが、その日以降会うことはなかった。

もう一つの出来事は、彼と別れた次の日のこと、少女に”姉”ができた。

どこことなくボーイッシュな印象の少女。まるで昨日知り合った少年のような優しさを持っていた。

昨日のことを思い出す少女に、ボーイッシュな少女は快活な笑みを浮かべて挨拶をする。

「ボクはアリエラ・ルー。今日からよろしくね、レン」

## 友人のシャル

上位元素生成能力者” D”たちが集う南海の要塞島——ミッドガル。

第二次性徴が始まるにつれて能力に目覚め、体が成熟すると共に能力を失う彼女たちの多くは、教育を必要とする年代の子供だ。

そのため、ミッドガルには” D”のための”学園”が作られた。

ちなみに僕は” D”ではなく”神”である。とある事情のため、ミッドガルに通っている。

” D”たちには僕が”神”であることは親友の物部悠とその妹物部深月、そしてミッドガルの学園長シャルロット・B・ロード以外秘密にされている。

学園の敷地内には様々な施設があり、最新の設備が整った医療棟も存在する。

一週間前、ユグドラシルとの戦いで深手を負った僕と悠は、その医療棟で療養することになったのだが——。

「学園長……眠くなってきたんで、そろそろお終いにしませんか？」

ベッドの上に座って向かい合う金髪碧眼の少女に、親友の悠は躊躇いがちに声を掛ける。

小柄で、十代の少女にしか見えない外見ではあるが、彼女はミッドガルの最高司令官たるシャルロット・B・ロード学園長その人だ。

ぶかぶかの白衣を纏う姿は”ごっこ遊び”をしているようにしか見えないものの、彼女は医師免許も持っており、現在は僕たちの担当医として治療を行ってくれていた。

悠はともかく、僕は治療を行うことを何度も断ってきた。

僕はこの世界を担当する”世界神”、創造と破壊を司る神である。

そのため自分一神で治療をすることができるが、シャルロット学園長がしつこく説得してきたため、仕方なく彼女に任せている。

”世界神”としての仕事もあるため、学園長の目を盗んで神々の住む世界”神界”に戻っている。



しかし検診と称して病室を訪れた彼女は、もう三時間もここに留まっている。

「待て、少し静かにしている。私は今、熟考中だ」

整った眉を寄せ、桜色の唇をへの字にして考え込む学園長。彼女の視線は、悠との間に置かれた将棋盤に注がれていた。

「俺たち、一応は入院患者なんですよ？　夜更かしは体に悪いと思っただけです」

「そなたらの怪我は私が癒してやっただろう。体は既に健康体なのだから、もう少し私に付き合おうがよい。よし———これでどうだ！」

学園長はパチリと駒を動かし、得意げに悠を見る。

そう、完治に長い時間を要するはずだった僕たちの怪我は、既に癒えている。明日からはもう授業にも出席する予定だった。

それを可能としたのは学園長の有する”能力”によるもの。

彼女は、体液を媒介として他者を支配できるドラゴン———”灰”のヴァンパイア。

人類が自滅の道を辿らぬよう人間社会を裏から管理してきた存在。我々神々ほどではないにしても、その功績は世界に多大なる影響を及ぼしている。

この世界が滅亡しなかったのも、彼女のおかげである。

ユグドラシルに操られた悠の左腕も、今は学園長のおかげで沈黙している。

ただその代わり、左腕は悠の意思で動かすこともできなくなっていた。

「残念ながら詰みです。はい、王手」

悠は溜息を吐き、自由の利く右手で駒を王将の前に置く。

「なっ、取った駒を使うなど、卑怯ではないか！　私はその気になれば支配下にあるそなたらの心を読むこともできるのだぞ？　それをせず、こうして正々堂々と戦っているというのに！」

慌てふためき、悠が置いた駒を指差す学園長。

ちなみに僕は心を読まれないように”神界”から持ってきた”神

器 を使って彼女の体液を全て取り除くことにした。

神々の世界でも守秘義務があるため、心に鍵を掛けることはできるが念のために治療を行ったその日に体から抽出した。

この様子を見ると学園長の支配下から抜け出したことは気付いていないようだ。

「卑怯と言われても、これが将棋のルールですから。一応、最初に説明しましたよ?」

「むむ……駒の動かし方さえ覚えていればいいだろうと聞き流していたようだ。まさか、チェスにない要素もあつたとは……思ったより複雑なゲームだな」

学園長は腕を組み、悔しげに勝敗の決した盤上を見つめる。

「初めてだと覚えることが多くて、少し難しいかもしれないね。まあ、俺も別に強いわけじゃないんで、ルールを把握すれば学園長の方が上手くなりますよ。さっきやったチェスでは、亮にも完敗でしたし……」

「まあ、戦いにおいて戦場を見極める眼を養っているからな。自然とどう動かせばいいのか分かるもんだ。よし、もう寝るか」

「……ふわ……それもそうだな」

欠伸あくびをしながら悠は僕の言葉に同意して将棋盤を片付けようとするが、学園長は不満げな表情を浮かべた。

「待て、もう一勝負だ。せっかくそなただと遊ぶために日本のボードゲームを取り寄せたのだから、これで終わりにするのは勿体もったいない」

「また今度でいいでしょう? 暇な時ならいつでも相手にしますから」

眠い目を擦り、悠は学園長を説得する。しかし彼女はむすつとした顔で駒を並べ始めてしまう。

僕はその隙に自分のベッドに戻ろうとするが、彼女は右手で駒を並べてながら左手で僕の病院着を掴む。

「そなたにもまだ一度も勝っておらぬぞ? このまま寝かすわけがないだろ」

「負けず嫌いだな……」

僕は仕方ないなどその場に留まり、悠も諦めた様子で初期位置へと戻す。

すると学園長はさらに将棋盤を取り出して僕の前に置き、駒を並べて始めた。

「二面打ちだ。これでそなたらを同時に相手できる」

「そこまでするか?」

どうやら僕と悠の二人掛かりで倒すつもりだ。

仕方なく同意し、しんと静まり返った深夜の病室で僕たちの対局が始まった。

「それにしても、これはあれだな」

悠の歩兵を取った学園長が、その駒を手に乗せてこびや呟く。

「あれ?」

「相手を倒すだけでなく、それを己の陣地に取り込み、自らの力とする——何となく、我々とドラゴンの関係に似ていると思わぬか?」

学園長に問われ、僕はこんな会話もあったと原作を思い出し、学園長の角を奪う。

「——そうですね。俺たちはドラゴンを倒すことでその能力を獲得し、逆に俺たちが負ければ、ドラゴンは”D”をつがいにしてしまふ……似ていると言えば似ているかもしれませんが」

悠も駒を動かしながら学園長の意見に同意する。

「だろう? ゆえに我々の戦いは、一度の勝敗が大きく戦局を左右する。物部深月が”紫”のクラーケンを、そなたが”白”のリヴァイアサンと”黄”のフレズベルグを倒し、その能力を再現可能になったことが以後の勝利にも繋がった。しかし——」

そこで学園長は表情を曇らせる。

悠は彼女の懸念を察し、抑えた声で問いかけた。

「……イリスのことですか?」

僕たちのクラスメイトであり、いつも明るく真っ直ぐな少女——  
イリス・フレイア。

イリスさんはユグドラシルとの戦いで、上位元素を介さずに”  
終末時間”を行使した。”終末時間”そのものを生成したイリスさ  
んは、物質変換でドラゴンの能力を再現している悠や深月さんと根本  
が異なる。その異差は”D”という枠組みから外れるほどである。  
ちなみに僕は原作を知っているため彼女が”終末時間”そのもの  
を使える理由を知っている。

もちろん悠たちが知るにはまだ早い。

「ああ、もし仮にイリス・フレイアがドラゴンになってしまったの  
だとしたら、彼女はどちら側なのだろうと思っただけだ」

相對する二つの盤上にある駒たちを眺め、学園長は不安混じりの言  
葉を漏らした。

悠は将棋の駒を前に進ませつつ、学園長の瞳を見つめる。

「イリスは、人間です。バジリスクみたいな化け物じゃありませ  
ん」

どうやら原作通り、学園長は悠にイリスさんがドラゴンになった  
可能性があると言った口にしたようだ。

悠は彼女の言葉に納得できないでいるのだろう。

「悠、そんな怖い顔をするな。学園長はあくまで仮説の一つを  
言っただけだ。僕の見解でもそう思っているが、本当のことは何も分  
からないままなんだ」

「大島亮の言う通りだ。それにもう綿密な身体検査を行ったが、  
肉体的な異常は見つからなかった。イリス・フレイアをドラゴン扱い  
するつもりはない」

僕の言葉に便乗しながら苦笑し、肩を竦める。

「それなら、よかったです」

安堵の息を吐く悠だったが、学園長はそこで真剣な表情を作った。

「大事なものは、在り方よりも生き方だ。ドラゴンかどうかなど、突  
き詰めればどうでもいい。彼女が在り方に振り回されてしまわぬよ  
う、そなたらが気をつけてやれ」

「——分かりました」

「ああ」

悠は真面目に頷くが、僕は返事だけをする。

すると学園長は満足した様子で表情をむる緩めた。

「私もまた、グレー・ドラゴンなどという肩書きを継がされた身だが……そなたらの側に立つことを選び、そう生きている。そなたらという友人も得ることができ、私は今の生き方に満足しているよ」

学園長が浮かべた微笑みには素直な嬉しさが滲み出ている、僕は胸が痛くなる。

僕は一度交通事故で死に、神として転生したため自分を人間としてではなく神として生きてきた。

僕よりも立派に生きている学園長を見ると自分がどんなにちっぽけな存在であるかを思い知らされる。

在り方は神ではあるが、生き方としては人間として生きているため彼女たちを見習っていいこうと思った。

「こ、光栄です……」

悠は学園長の微笑みに照れ臭くなったようで、視線を逸らしていた。

しかし悠のそんな反応をお気に召さなかったのか、学園長は不満げに頬を膨らませた。

「だが——その他人行儀な話し方はどうにかならぬのか？　今は友人として遊んでいるのだから、立場を気にする必要はないのだぞ？」

「へ？　いや、そう言われても……」

「まあ、友人といっても……」

僕たちは明確な上下関係のある職場で過ごしてきたため、どうしても目上の人物には硬い言葉遣いになってしまう。それはもう、癖のようなものだった。

「むう、またそのように畏まる。よし、決めたぞ。私が将棋での勝負に勝ったらそなたらは敬語を禁止する。あと、私のことは気安くシヤルと呼ぶがいい」

やはり原作通りの展開になってしまった。

「ちよ、ちよつと待ってください。学園長はミッドガルの最高責

任者なんですから、それじゃあ周りに示しが付きませんって」

「何、私たちの時だけで構わん。では——本気で行かせてもらうぞ」

学園長は表情を引き締め、ぱちりと駒を動かす。

「……まあ、俺たちが勝てば諦めてくれるんですよ」

悠は溜息を吐きながら駒を前に進める。

「何を言ってる。私は勝つまでやるつもりだ」

にやりと不敵に笑う学園長。

悠はその言葉に啞然とし、今夜は学園長が勝つまで眠れないことを悟ったようだ。

「仕方ない。どうせ僕たちはそう呼ばなきやいけないんだ。勝負だ、シャル」

「おおっ！　そなたはそう呼んでくれるのか。嬉しいぞ、我が友！」

◇

瞼の向こうに眩い光を感じ、目を開く。

気付くと朝になっていた。窓から白い朝日が差し込み、病室を明るく照らしている。

（確か昨日は学園長と亮で将棋をして……）

記憶を辿り、思い出す。

学園長は本当に勝つまで諦めず、俺たちは眠気で意識が朦朧としていた隙を突かれ、三局目で負けてしまった。

そこからの記憶は無く、恐らく気を失うようにして、眠りに落ちたのだろう。

顔を左に向けると、隣のベッドで寝ているはずである亮の姿がなかった。恐らく神の仕事やらで出かけているのだろう。

起き上がりとして体を動かすと、違和感に気付く。右腕がやけに

重い。

左に向いた顔を右に向けると、すぐ目の前に学園長の整った顔があった。彼女は俺の右腕を枕代わりにして寝転び、俺を宝石のような碧眼へきがんで見つめている。

「よい朝だな。誰かの温もりを感じながら寝るといいうのも、悪くないものだ」

学園長は心地よさそうに俺の腕に頬を摺すり寄せ、柔らかな口調で挨拶をした。

「なっ……ど、どうして学園長がここで寝ているんですか？」

俺は言葉に詰まりながら問いかける。

「昨夜は私が勝つと同時にそなたは眠ってしまったからな。大島亮は少し前に神の仕事で出かけて行ったぞ。もちろん私の名前を呼んでな」

学園長はそう言って俺に近づいてきた。

「きちんと約束を果たしてもらおうと、大島亮と同時に起きた時から待っておったのだ。ほれ、今は私たちだけだ。遠慮なくシヤルと呼べ」

ベッドの中で身を寄せ、学園長は俺の体を揺する。ふわりといい匂いが鼻腔びこうを撫なで、柔らかな肢体が触れ合い、俺は自分の顔と耳に血が昇るのを感じた。

「ち、近いですって、少し離れてください」

「断る。昨夜の勝利報酬を得るまで、私は離れぬぞ。有耶無耶うやむやにされては堪かたらぬからな」

ますます頑かたくなに、俺へしがみ付く学園長。このままでは埒らちが明かない。

「……分かりました。じゃあ、約束通りにします」

俺は覚悟を決め、深呼吸をする。

「よし、来るがいい」

わくわくした様子で学園長は俺を待ち受けた。

俺は学園長と視線を合わせ、友人らしい口調で言う。

「おはよう、シヤル」

途端、満面の笑みを浮かべる学園長。

「おお、やればできるではないか！ よいぞ、それでこそ我が友だ！」

学園長は嬉しそうに俺の頭を撫でる。

細い指に髪を梳かれ、俺は照れ臭さと心地よさが混じり合う、何とも言えない気持ちで溜息を吐いた。

「これでいいんだな？」

「ああ、満足だ。無理を聞いてもらった分、私もそなたのために力を尽くさなければ」

学園長は緩んだ表情を引き締め、真面目な顔で言葉を続ける。

「——日本にユグドラシルと思わしき巨大樹が出現して以降、そなたへの干渉力が強まっている。私でも、いつまで押さえ込んでおけるか分からぬ。ゆえに、可能な限り早くユグドラシル討伐の手段を見つけよう」

「けど、ユグドラシルを倒すには、地球上の全植物を消し去る必要がある——って前に言っただけだったか？ というか……そうまでしないと倒せないかもしれないなんて、ユグドラシルはいったいどういう存在なんだ？」

以前、聞きそびれたことを俺は訊ねる。敬語を意識して抑えているため、微妙に話し辛い。

「私はそなたを支配した時、ユグドラシルの本質を感じ取ったが……まだ物証はない。現在、アスガルの研究所に裏付けと対策を依頼しているところだ。じきに何らかの返答があるだろう。詳しいことはその時に話す」

「アスガル……上層部の研究施設か」

アスガルとは、ミッドガルやニブルの上部組織にあたるドラゴン対策を行う国際機関。恐らく学園長の正体を含め、多くの機密情報を把握しているのだろう。そうでなければ、学園長が何故ユグドラシルの正体に迫る情報を得たのかと、疑問を抱くはずだ。

「世界でも指折りのドラゴン研究者たちが集まる場所だ。そなたは彼らと私を信じ、動くべき時まで体を休めておけ」



「——分かった。シャルを信じて待つよ」

俺が頷くと、学園長は満足そうに笑みを浮かべる。

けれどその時、ガラツと音がして病室の扉が開かれる。

「モノノベ、オオシマー、朝だよ！ もう起きてる？」

病室に入ってきたのは、昨夜話題の中心にもなった少女——イリス・フレイア。

「えっ……？」

だが、明るい笑顔を浮かべていたイリスの表情が、こちらを見た瞬間に強張る。

そんな彼女の後ろから、ブリュンヒルデ教室のクラスメイトたちが姿を見せた。

「兄さんに亮さん、今日から授業に出るといってお話でしたので迎えに——」

血の繋がらない俺の妹——物部深月は、病室のベッドに同衾している俺と学園長を見て硬直する。

旧文明の兵器データをユグドラシルからダウンロードする代償として、俺は三年前よりも前の記憶をほとんど失ってしまった。そのため深月と家族だった頃の思い出もなく、彼女が何を考えているのかわからないことも多いのだが……今だけは例外だ。

真っ赤になり、まなじり 眦を吊り上げる深月がどんな感情を抱いているのかは誰が見ても明白。

「に、兄さん……いったい何をしているんですか！」

俺の方を指差して震える声で深月は叫ぶ。

深月に続いて病室へ入ってきた他の皆も、顔を赤くして問いかけて来た。

「モノノベ・ユウ！ これはどういうことなんですの!？」

長い金髪の髪を逆立てそうな勢いで、リーザ・ハイウオーカーは俺を睨む。

「物部くんと学園長……何してたの？」

いつも本を読んでいて、あまり表情を変えることのないフィリル・クレストが、底冷えのする微笑みを浮かべていた。

「学園長だけズルいの！ ティアもユウと一緒に寝る！」

赤い二本の角を生やした幼い少女——ティア・ライトニングは、一人違う意味で腹を立てている。

「だ、ダメだよ、ティア。あれはイケナイことなんだから」

そんなティアをアリエラ・ルーが窘めた。リボンで纏めた後ろ髪がぴよこりと弾む。

「んー」

赤毛の長髪を揺らし、レン・ミヤザワがこくこくと頷く。

「ちよつ、ぐ、誤解だ！ 話を聞いてくれ」

俺は慌てて言い訳をしようとするが、それを遮るように学園長が口を開いた。

「——ふむ、学園の生徒にみつともないところを見せてしまったか。実を言うと昨夜は遅くまで、こやつと大島亮の三人で激しい攻防を繰り返していたな。そのまま疲れて一緒に寝てしまったのだ」  
学園長はするりとベッドを降り、皆に事情を説明する。

しかしそれを聞いたイリスたちは、ますます顔を赤くする。

「お、遅くまで激しい攻防……」

呆然と学園長の言葉を繰り返す深月。また妙な勘違いをしていそうな雰囲気だ。

「まだ少し寝足りないが……今日の執務があるゆえ、私は学園長室に戻るとしよう。皆は勉強に励んでくれ」

けれど学園長は深月たちの様子には構わず、病室の扉へ向かった。そして部屋を出る直前に振り返り、俺に不敵な笑みを向ける。

「大島亮に伝えておけ。次までにもつと練習して、今度やる時はそなたらを圧倒する。ひいひい言わせてやるつもりだから、覚悟しておけ——とな」

激しく誤解を招く言葉を残し、病室を去る学園長。

残された俺は、恐る恐る皆を見回した。

ティアだけはきよとんとした顔をしているが、他の皆は顔を火照らせ、俺を鋭い眼差しで睨んでいる。

「兄さん……生徒同士の不純異性交遊が禁じられているからと

言って、まさか亮さんと一緒に学園長を……」

握りしめた拳をわなわなと震わせる深月を見て、俺は首を全力で横に振った。

「ち、違う！ 昨夜は単に遊んでいただけで——」

けれど俺の言い訳を聞いたファイリルが強い口調で問いかけてくる。

「学園長とは、遊びなの？ 爛ただれた……大人の関係？」

「変な意味に取らないでくれ！ やましいことは何もしてない」

俺は必死で説明するが、彼女らの誤解は根深く、神々の世界から帰ってきた亮のおかげで納得してもらおうまでに十分ほどの時間を費やした。

もし亮があのまま帰ってこなければ誤解を解くのは不可能だったかもしれない。

## 最高位の神

「全く……将棋をしていただけなら、早くそう言ってく下さい」  
医療棟からブリュンヒルデ教室のある校舎に向かう途中、深月はむくれた顔で言う。

「いや、何度も言ったが信じてくれなかったんじゃないか……」  
俺は濃い疲労の混じった溜息ためいきを吐いた。

「そ、それはあまりにも言い訳っぽかったから……あ、そんなことよりお二人の怪我の具合はどうなんですか？」

バツが悪そうに話題を変え、深月は俺の左腕と腹部、亮の両腕に視線を向ける。

今の俺たちは病院着から制服に着替え、俺は左腕にギプスを嵌はめている。服に隠れて見えないが、腹部には亮の両腕と同じように包帯を巻いていた。

「僕はなんとか動かせるようになったよ。けど悠は大丈夫か？」

「心配ない。左腕の完治はもうしばらく掛かりそうだが、腹の包帯はじきを取れると思う」

傍目にはかなりの重症と映るかもしれないが、学園長のおかげでとつくに怪我は治っている。

ギプスは左腕を動かせないことを誤魔化すカモフラージュで、腹部と亮の両腕に巻いている包帯も本当は必要ない。

ユグドラシルと俺の関係、亮の正体、そして学園長の能力を知らない者には、俺たちは一週間入院するほどの重症をおったことや、俺の左腕の骨にヒビが入っていることを説明してあった。

「なら、安心しました。けど無理はしないで、兄さんは運動や実習は見学してくださいね」

「分かっている。心配してくれてありがとう」

「えっ……あ、はい」

俺が礼を言うと、深月は少し驚いた様子で頷うなずき、微かすかに頬を染める。もしかしたら、俺らしくない言い方をしてしまったのかもしれない。

深月を”家族”として見ていた俺なら、この場面では改まって礼を言わないのだろうかと考えるが、記憶を失くしている俺に正解が分かるはずもなかった。

「深月さんは心配性ですわね。お二人のことなら大丈夫ですわ。特にモノノベ・ユウならこの程度の怪我は問題ありませんわよ」

リーザが横からポンと俺のギプスに触れる。

彼女は全ての事情を知っているため、俺の左腕が負傷していないことも理解していた。

「リーザ……そんなに物部くんと大島くんのことを、頼もしく思ってるんだ？」

けれどフィリルは、リーザの言葉を別の意味で捉えたらしく、からかうように口を挟んでくる。

「なつ、わたくしは別に……いえ、まあ、モノノベ・ユウはユグドラシルから両親を助けてくれましたし、オオシマ・リョウに至っては最初から頼もしく思っていました、その……」

やけに動揺し、顔を赤くするリーザ。

フィリルは彼女の反応を見て、微笑を浮かべた。

「それに”恋人の振り”もしたし、ね。一気に物部くんと仲良くなっちゃって、私……少しだけ悔しいな」

そう言いながら、フィリルは俺に身を寄せてくる。彼女の豊かな胸が肘に当たり、俺は慌てた。

「お、おい、フィリル？」

「ねえ、物部くん。私にも少しだけでいいから、恋人の振り——ううん、王子様の振りをして欲しいな」

焦る俺を上目遣いで見つめ、そんなことを言い出すフィリル。

「ちよつとフィリルさん！ わたくしはあくまでその必要があったから、彼に恋人役を頼んだんです。今、彼が王子様役をする必要なんてないじゃないですか」

俺が何か言う前に、リーザが俺からフィリルを引き離す。

「えー……リーザだけ、ずるい」

「ず、ずるくなんてありませんわ！ 深月さんに代わって風紀の

乱れを正しただけです」

不満げに睨むフィリルから視線を逸らし、言い訳っぽくリーザは答えた。

「ねえねえユウ！ ティアはユウに、旦那さま役をして欲しいの！」

だが今度は後ろからティアが飛びついてくる。首に手が回され、息が詰まった。

「ティ、ティア、苦しい……」

「ダメだよ、ティア。物部クンは怪我人なんだから」

その様子を見ていたアリエラが、ティアを注意してくれる。

「あ、ごめんなさいの！ どこか痛かった？」

慌てて地面に降り、不安そうに謝るティア。

「いや、息苦しかったただだから大丈夫だ。リーザの言う通り、この程度の怪我は全然問題ないしな」

「よかったの。でも……旦那さまのことを考えなかったティアは、お嫁さん失格なの」

安堵あんどの息を吐くものの、ティアはしゅんと落ち込んでしまう。

「そ、そんなことないって。元気いっぱいティアを見ているだけで、俺は明るい気持ちになる。ティアのことをお嫁さん失格だなんて言う奴は、誰もいないさ」

必死に俺がフォローすると、ティアは窺うかがうように俺を見上げる。

「ホント？ じゃあ……ユウも？」

「え、そ、それはまあ、これはあくまで客観的な意見というか——」

自分で言った手前、否定することもできずに俺は曖昧あいまいに頷く。

「キヤツカンテキ？ よく分からないけど、ユウがティアのことをお嫁さんって認めてくれたの！ じゃあユウ、ケツコンしよ！」

しかし俺の曖昧な表現はティアに通じず、彼女は顔を輝かせて万歳をした。

「ま、待て、それとこれとは話が——」

「お嫁さん失格じゃないのに、ケツコンはダメっておかしいの！」

「それは確かにそうかもしれないが……」

理屈で押ししてくるティアに俺はたじろぐ。

だが逃げ場を失いかけた俺に助け船を出す者がいた。

「ティアちゃん、モノノベを困らせちゃダメだよ」

俺とティアの間に割り込んできたのは、イリス。彼女は腰に手を当ててティアに注意する。

「むー、イリスはいつも邪魔するの。やっぱりイリスもユウとケツコンしたいの？」

「ええっ!? あ、あたしは……」

耳まで顔を火照らせ、俺を横目で窺うイリス。

だが彼女はハツとした様子で深月の方を見ると、慌てて首を横に振った。

「そ、そういうことじゃないよ。ティアちゃんの年じや結婚できないのに、無理を言ったらモノノベが困っちゃうって意味で……」

どこか苦しそうな表情でイリスは答える。それを見て、胸の奥がずきりと痛んだ。

イリスは“記憶を失う前の俺”が、深月と結婚の約束を交わしたことを知っている。“本当の物部悠”が一番大切なのはたぶん深月なのだと、俺自身が話してしまったためだ。

以来、イリスは深月に対して遠慮している。きっと俺の記憶が戻った時のことを考えているのだろう。

今——俺とイリスは、互いを一番大切に想っている。

だが、そんな“今”はやがて失われるのだと、イリスは覚悟してしまっているようだった。

だから俺も、今の想いが正しいのか自信が持てない。それが揺るがぬものだと、確信できないのだ。

そうして俺とイリスは、バジリスク戦後に想いを伝えあつてからずっと——二ヶ月近く同じ場所で足踏みをしている。前に進むこともできず、後にも退けぬまま、時間だけが過ぎていた。

「何だかイリス、ホントのこと言っていない気がするの」

ティアはそんなイリスの想いを敏感に察したのか、不満げに呟く。

「ほ、ホントだつて！ あたし嘘なんか吐いてないよ。ね、オオシマ？」

「ん？ あ、ああ、確かにティアちゃんの年齢じゃまだ結婚はできないが、そんなに急ぐことはないぞ。もつと今を楽しんでいかなきゃ。結婚前にすることだつて、たくさんあるからな」

急に話を振られた亮は、少し戸惑いながら答えた。

「そうなの!? ケツコン前にはどんなことをするの?」

「そ、それは……」

亮は困った表情を浮かべて言葉を濁らせる。すると亮はアリエラの肩にポンと手を置く。

「そういうのは経験豊富なアリエラさんに聞きな。僕は男だからあまり知らないけど、彼女は僕より役に立つことを知ってるぞ?」

「ちよつ!? お、大島くん!」

亮はアリエラを巻き込み、彼女は驚きながら亮を見る。

「後は任せた」

「えっ、そんな……」

「そうなの? ねえ、アリエラ。ティアに教えてなの!」

亮の言葉を聞いたティアは、目を輝かせながらアリエラの腕を引っ張り、答えをせがんだ。

アリエラには悪いが、俺が話題の中心から逸れてホツとする。

イリスと亮はまたティアに追及されるのを避けるためか、俺からそそくさと離れて行き、レンと三人で会話を始め出した。

会話の相手がいなくなつた俺は、何となく辺りを見回す。

ちようど建物を繋ぐ渡り廊下に出たところで、学園の中庭とグラウンドが見渡せる。

敷地の隅には、学園祭で使用したと思しき廃材が積まれていた。

皆で準備をし、和風喫茶を開いた学園祭。

亮と一緒に女装する羽目になったり、リーザの両親の前で恋人の振りをしたり、ユグドラシルの端末と戦ったり——凄まじく濃い二日間だつたように思う。

まだあれから一週間しか経っていないのだ。



そうして思い出に浸っていると、レンが亮との会話の最中に学園祭で出た廃材をぼうつと見つめていた。

その横顔がやけに寂しそうで、俺は躊躇ためらいがちに声を掛けようとするが、亮が何かを察したように話題を変えてきた。

「レンちゃん。この前作った機械なんだけど、ちよつと専門技術が必要などころがあるんだよ。だから教えてくれないかな？」

「んー」

するとレンは目を輝かせながら亮の話に乗ってきた。まるで本当の“兄妹”のように見える。

そういえば、エルリア公国に行った時からいつも以上に仲良くなっていたことを思い出す。

未だに俺は彼女から警戒されているようで、亮に心を開いているレンを見て自分が悲しくなってきた。

まだ彼女と会話をしたことがないため、どうすればいいのかが分からない。

正直レンはミッドガルに入学してから、俺との間に壁を作っていたため、今でも携帯端末を使って会話にに応じてくれると壁がなくなるのは不可能じゃないかと思ってくる。

しかし俺はレンより、亮の話題転換を聞いて疑問を抱く。

亮も彼女が学園祭で使った廃材を見つめていたのを分かっているため、普通なら学園祭のことを聞いてくるはず。

だが、亮は彼女の作る機械の話題を振っていた。レンはブリュンヒルデ教室の中で賢いため、一人で精密な機械を作ることができる。

十三歳と俺たちよりも年下ではあるが、飛び級してこのクラスに配属している。そのため俺たちの知らないことまで知っている。

誰が聞いても違和感のない会話ではあるが、俺は亮が話題を切り替えたことに疑問を抱いていた。

いくら亮が神であろうと分かるはずだろうか。

まるで先のことがかかった上で行動しているかのように。

——プルルルルルルル。

突然、深月の制服から電子音が聞こえてきて、ポケットから小型の

通信機を取り出し、硬い口調で通信機の向こうに呼びかけた。

「——学園長ですか？ はい、放課後に……………そうですね。か。ええ———そうですか。ちなみにその方は……………えっ!? わ、分かりました。皆さんに伝えておきます。はい———」

どうやら通信の相手は学園長らしい。しかし深月は驚いた様子で会話を続け、俺たちはどうしたのかと彼女に視線を向けていた。

やがて用件が終わったらしく、深月は通信機を外して俺たちに向き直る。

「兄さん、学園長からのお知らせです。今日の放課後、私たちにお会いしたい方が来るとのことなので、学園長室に来るようにとのことです」

深月が俺たちにそう告げると、近くにいたリーザが質問する。

「お会いしたい方とは、いったいどんな人なんですか？」

すると深月はレンの隣にいた亮に視線を向け、皆も注目する。

「なんでも亮さんの知り合いだと言っております」

「え、僕か？」

亮も少し驚いた様子で聞き返す。どうやら本人も知らなかったようだ。

そして俺は初めて知ることになる。亮よりも上に立つ最高位の神がいることを……。



放課後、俺と深月は指示通り学園長室へと向かっていった。

学園校舎から時計塔への移動中、俺たちはこれから会う亮の知り合いについて話していた。

ちなみに篠宮先生は、今日の昼休みから海外にあるアスガルの研究所に出張していてミッドガルにはいない。

恐らくユグドラシルの件で何かあったのだろう。

俺たちはエレベーターに乗り込み、学園長室のある最上階へと向かう。

亮の知り合いはほとんどが他の世界を担当する神であるため、その誰かだろうと思う。

しばらくして時計塔の最上階に止まり、ドアが開く。

亮は何かを思い出したかのような表情を浮かべ、男子トイレへと向かった。

本人は少し時間が掛かるとのことで俺たちだけで学園長室の前へ進む。

俺は扉をノックする。その直後に「どうぞ」と聞き覚えのある声が返ってきて、皆は俺に続いて学園長室へと入る。

部屋の中はいつもより明るくなっており、学園長室独自の独特な匂いはしなかった。カーテンも開いており、お客が来るとのことで部屋を模様替えしたようだ。

部屋には学園長とその隣に立つメイド服姿を着こなす秘書のマイカ・スチュアートさん、そして部屋の真ん中には学園長と変わらない小柄の女性とその後ろに立つ二人の男性がいた。

小柄の少女は“全”と書かれた見たこともない民族衣装のようなものを着ており、後ろの男性も少女とほとんど似ている服を着ていた。

どこからどう見ても普通の少女と変わらない。この人たちが亮の知り合いなのだを知る。

「よく来てくれた。清らかな乙女、そして我が友……おや、大島亮の姿が見えないが……」

学園長は俺たちを見渡し、亮がいないことに気付く。

「亮はさっきトイレに行きました。もうすぐ来ると思っています」

「そうか、では彼奴きやつが来る前に紹介をしよう」

すると学園長は小柄の少女に視線を向け、彼女は一步前に出る。

「みんな、初めましてなの。亮くんがお世話になってるのね」

少女はティアのように幼い子供のような口調で挨拶をする。

「ボクは全王、よろしくなのね」

少女は自己紹介し、俺たちも続いて挨拶をする。

「物部悠です、よろしくお願いします」

「妹の物部深月です。こちらこそよろしくお願いします」  
最後に挨拶を終えた瞬間、扉からノックが聞こえた。

「どうぞ」

マイカさんが返事を返すと、扉が開き廊下から亮が入ってきた。

「すみません、少し遅れました……………なっ!？」

すると亮は少女の姿を見ると、急に驚き顔を青ざめる。

「お、おい、嘘だろ……………あ、あの、あのお方は……………」

亮は震えながら呟き、俺たちは驚きながら亮に視線を向ける。

「ぜ、全王様!!」

亮は恐怖したような表情で少女の名前を口にする。

「亮くん、久しぶりなのね」

少女は亮に挨拶するが本人は驚いたまま硬直する。

「りよ、亮さん、あの方はいったいどなたなんですか？」

深月は亮に近づいて小声で質問する。

「全王様……………十二の世界全ての頂点に立たれるお方だ」

亮の言葉を聞いた瞬間、学園長とマイカさんを含めた俺たちは目を見開いた。

この小柄の少女が、世界の頂点に立つ存在であることを知った。ということは、神様の中で一番偉い方となる。

皆は再度全王と名乗る少女を見る。学園長やティアと同年に見える彼女、一番偉い神様を想像していたが、思っていたイメージとだいぶ違っていた。

亮はハッと我に返り、俺たちの前に立ってお辞儀をする。

「よ、ようこそ、全王様！ ほ、本日は、お日柄も宜しくて足元の悪いなか……………」

「うん」

側から見ればおかしな日本語で話しているが、亮がこんなにも焦るのを見るのはブリュンヒルデ教室の一同とビーチで遊んだ時以来だ。

「全王さんって確かビーチで深月が言ってた……………」

「ええ、私も初めて会いますが、予想していたのとだいぶ違いますね」

俺と深月は小声で話しながら亮と全王さんを交互に見る。

「きよ、今日はどのようなご用件で？」

「今日はね、亮くんがお世話になつて皆に挨拶をしようと思つてきたのね。あと、この一週間、亮くんの仕事が遅いから心配になつて来ちゃつたのね」

全王さんは今回の目的を言う。

ユグドラシルとの戦いで負傷したため、神としての仕事が遅れていることも目的のうちに入っているようだ。

「ご、ご心配を掛けて申し訳ありません」

亮はお辞儀をしながら謝罪する。まさかこんなに焦る亮を見てみると、どれだけ全王さんが偉いのが伝わってくる。

学園長とマイカさんも亮の行動に戸惑った様子だ。すると学園長は何かを思い付いたようで、不敵な笑みを浮かべながら口を開く。

「そう言えばこんなことを聞いてたな。仕事よりも乙女たちとキャツキヤツウフフなことをしたいとな」

「なっ!? 学園長僕はそんなこと一言も言っていないぞ!」

学園長の言葉を聞いた亮は声を荒げながら否定する。

「そうだったか? それに最近ミッドガルに通っているだけで仕事を忘れることができる。正しく楽園のようだとも言ってたな」

「そ、そんなことは……」

すると亮は反論できないのか、お辞儀をしながら悔しがるように呻る。

それを聞いた全王さんは表情を一切変えずに亮を見ていた。

「ん~~~~、じゃあもう亮くんをクビにしちやおうかな」

全王さんの言葉を聞いた亮は、驚きを露わにした直後に土下座をする。

「えっ!? も、申し訳ございませんでした!! ど、どうかお許しください、ちゃんとノルマは達成させますので、何卒どうかお許しを……」

先ほどまでからかっていた学園長も、亮の反応を見て俺たちと同じように啞然とする。

亮のこんな姿を見るとは思いもよらなかつた。ここまで慈悲を求める状況を目にしてると、改めてこの小柄な少女がどれだけ偉いのが伝わってくる。

「あの亮さんが土下座するなんて……」

深月は亮の意外な言動を見て眩きです。正直俺も土下座をするとは思っていなかった。

「なんてね、冗談なのね」

全王さんの発した言葉で亮は立ち上がって、大量に出た汗を拭う。

「あ、焦った……」

「ごめんね、ボクが冗談を言うのと皆今の亮くんみたいに焦るもんね。本当にごめんね」

どうやら冗談のようだと笑顔で謝る全王さん。

「でもよかつたの。亮くんがちゃんと学園生活を送れているか心配だったの。これからも亮くんをよろしくなのね」

すると全王さんは俺たちに視線を向けてお辞儀をする。

「い、いえ、こちらこそ」

深月が戸惑いながら返事をし、俺は頭を下げる。

「案ずるでない。彼奴のことは任せてくれ。またいつでも来て構わんぞ」

「ホント?」

すると全王さんは目を輝かせながら学園長を向く。

学園長はいつも通りの口調で全王さんに言う。彼女はどんな立場の人が相手でも態度を変えない。

「じゃあ約束、また来るね」

「ああ、約束だぞ」

学園長はそう言いながら握手をしようと右手を差し出す。

「「なっ!?!」」

すると全王さんの後ろに位置していた二人の男性と亮が驚きの声を上げる。

亮は口を開けたまま驚いており、二人の男性は恐怖の色を浮かべていた。

まるでこのあと恐ろしいことが起きるかのよう。

マイカさんも察した様子で、学園長に声を掛けようとするがその直後に全王さんが右手を出して握手に応じた。

その途端、亮と付き人の二人はふうと息を吐き返す。最悪の事態が起きなかったみたいだ。

こうして見ると学園長は全王さんよりも背が高く、姉妹と言っても過言ではない。

すると学園長は全王さんの手を友達と接するように持ち上げて、腕相撲をするかのように握り直す。

「お、おい!?!」

しかしこの行動により再び恐怖を露わにする亮たち。

当の学園長は亮たちが驚いていることに気付かず、全王さんは微笑みながら手を離す。

「いいのいいの。面白いのね、君」

満足した様子で後退し、俺たちに挨拶をする。

「じゃあね、帰るね」

「ああ、またな」

学園長が返事をし、亮も続けて頭を下げる。

「お疲れ様でした!」

「うん」

そう言つて全王さんたちは歩きだし、マイカさんはお見送りをして学園長室を後にする。

全王さんたちが去った後、亮は学園長に近づいて怒りを露わにする。

「あんたな、全王様はその気になれば世界そのものを作り出すだけじゃないで、全ての世界を一瞬で消す力を持つてるんだ! 一歩間違つてたら危なかったぞ」

亮は全王さんの能力を口にし、俺たちは彼女に恐れを抱く理由を知る。

「そ、そうなのか……それは悪かった」

「……いや、僕も最初に言うべきだった」

こうして俺たちは学園長室を後にし、宿舎に戻るまで亮は魂が抜けた抜け殻の状態だった。

後に亮は全世界の運命を掛けた挨拶が幕を閉じたとき口にしていた。

ちなみに今日の深月は女子寮に泊まるようで、全王さんの正体とその能力以外をイリスたちに話し、クラスメイトに亮の弱点を知られるようになった。



## 日本到着

事態に動きがあったのは、僕と悠が授業に復帰してから四日後のことだった。

二時限目、近代史の授業が行われている最中にシャルロット学園長と秘書のマイカさんが現れた。

アスガルに所属するある研究所から、ユグドラシルを倒せる”可能性”が提示されたようで、それが成功するかを試すために僕たちブリュンヒルデ教室が出向を要請してきたことを知らされる。

その際に悠が”黄”のフレズベルグの能力”エーテルウインド 霊顕粒子”を使えることも深月さんたちに知られてしまった。

原作通りに進んでいるようで、アスガルの研究者はユグドラシルを討伐するには悠の”霊顕粒子”を必要としていた。

学園長はアスガルの要請に応じるようで、この機会にユグドラシルを討伐させるつもりだ。最初は僕たちが現地に向かい、後から追加の人員も送るそうだった。

ユグドラシルを倒すために早く実行したいようで、出発は今日からだ。しかも場所は日本で、アリエラとレンちゃんは表情を曇らせていた。

日本にある極東支部第一研究所は彼女たちにとって嫌な思い出のある場所ということは知っていた。

悠もアリエラさんとレンちゃんの異変に気づき心配していたが、私たちは苦笑を浮かべながらも誤魔化していた。

「——大丈夫だよ、レン。ボクが付いてるから」  
「ん……」

二人の会話を耳にしていたが、僕は気づかないふりをしていた。彼女たちの関係に突っ込めば、レンちゃんを傷つけることになる。

レンちゃんはアリエラさんと話し終わると僕の方に視線を向けていた。彼女は僕を”お兄ちゃん”として接してくれている。

僕もレンちゃんのことを”妹”として見ている。そう思うと実の妹である冬美を思い出す。レンちゃんと同じくらい可愛いかった。

どうしているのか気になるが、今はユグドラシルを倒すことが先だ。授業を中断し、僕たちは日本に行く準備をするため教室を後にする。

何度も言うが僕は一度死んで神になっている。そのため死ぬ前にこの世界の原作を読んでいるため、最終巻以外の展開は知っている。レンちゃんにもう一人”お兄ちゃん”が出来ることやキーリの目的が達成されること。

この先どうなるかも知っている。そのためミッドガルに戻ってきた時、僕を除いたブリュンヒルデ教室のクラスメイトたちの竜紋りゅうもんが変色し、悠によって見初められることも……。



ミッドガルは日本の南方に位置する孤島。以前赴いたフィリルさんの故郷——ヨーロッパにあるエルリア公国ほど離れていない。

そのため僕たちは航続距離の長い輸送用のヘリで、直接ミッドガルから日本へ運ばれることになった。

「ふう……もう限界ですわ」

ヘリの狭い機内で、リーザさんがうんざりとした声を漏らす。プロペラの音が煩うるさく、隣にいる悠にしか聞き取れないが、僕は微かに声と音を聞き分けられるため、彼女の声を耳にしていた。

僕たちは壁際のシートに座り、じつと目的地へ着くのを待っている。

向かいのシートに座る深月さんたちも表情に疲労が滲にじんでいた。

機内には外の景色を眺められるような窓はなく、閉塞感が強い。細かい振動が手元を揺らすため、読書などで暇を潰すこともできない。

僕の力でこの空間の揺れを一切無くすることは出来るが、皆に正体を明かすことになるため、こうして大人しく座っている。

こんな状態でもフィリルさんは本を読もうとしていたが、確実に酔

うからと言って悠が一時没収していた。原作通り船に乗った時もう酔っていたので、良い判断だろう。

このへりはニブルで使われる軍用で、民間用と違って乗り心地は考慮されていない。少し前までニブルに在籍した悠は、この居心地の悪い輸送へりにも慣れていているが、リーザさんたちにはかなりキツイだろう。

シャルロット学園長はそれを分かった上で”速さ”を選んだのだと考えられる。やはり時間の余裕はなさそうだ。

僕は右隣に座るレンちゃんを見る。彼女は硬い表情で中空を見つめており、左手で僕の袖を掴んでいた。

レンちゃんの右隣にはアリエラさんも座っており、表情を曇らせていた。

彼女たちにとってこれから向かうアスガルの研究所は二度と行きたくない嫌な思い出のある場所だ。

”世界神”になる前に原作を読んでいるため、事情を知っている。僕はレンちゃんが不安にならないように左手を彼女の頭の上に置く。

「ん？」

彼女は僕の方へと硬い表情のまま顔を向ける。僕は微笑みながら言い聞かせるように言う。

「ユグドラシルを倒せばすぐにミッドガルに帰れるから、それまで僕と一緒にいるからね」

そう言うとレンちゃんは少し安心したようで、表情を緩ませてこくりと頷く。

「ん……ありがとう」

やはり原作で描かれてる絵より実物の方が可愛い。無口で恥ずかしがり屋だが、仲良くなるそうでもない。

幼稚園の頃の冬美にそっくりだ。あの頃は人見知りでいつも僕の傍を離れようとせず、話しかけても口を開こうとしなかった。

容姿は似てないが、まるで過去を見ているようで懐かしくなる。

アリエラさんはそんな僕たちのやり取りを見ており、暗い表情が少しだけ明るくなっていた。

「ん」

するとレンちゃんは笑みを浮かべてながら今まで掴んでいた裾を離し、その左手で僕の右手を握ってきた。

エルリア公国で仲良くなつて以来、会話に応じてくれている。僕のことをお兄ちゃんとして接してくれていると嬉しくなる。

もしかしたら、数年前に会ったことを思い出しているのかもしれない。いや、その可能性は低い。もし思い出しているのなら聞いてくるからだ。

あの時は名前は名乗らず、”世界神”と答えたため、思い出したとしたら必ずそのことについて質問してくる筈だ。

聞いてこないところを見ると、やはりエルリア公国の騒がしい葬式の最中にお兄ちゃんとして仲良くなつたと思われる。

今更あの時遊んだのが自分だったと明かすことにはしない。正体がバレるわけがないという慢心があったから”世界神”と名乗つたのだ。

そんなことを思いながら周りを見渡すと、深月さん、フィリルさん、ティアちゃんが対面に座る悠の方へと睨んでいた。

悠の隣に座るリーザさんとイリスさんは彼に寄りかかり眠っていた。

(ああ……こんなこともなつたな)

原作での内容を思い出し、思わず笑みがこぼれる。悠は必死に言い訳をしており、プロペラの音で微かにしか声が聞こえなかった。

目的地到着を報せる内線連絡が聞こえたのは、それから約三十分後のことだった――。

ヘリが着陸したのは、高いビルの屋上にあるヘリポート。

ミッドガルから長い移動を終え、僕以外の皆は疲れた足取りでヘリを降りる。時刻は夜の十時。ミッドガルと経度の差はあまりないので、時差はほとんど生じていない。

ここが東京湾岸地区にあるアスガルの研究所。レンちゃんと出

会った場所に間違いない。ビルの周囲には病院を連想させる飾り気のない白亜の建物が立ち並び、記憶に残っていることを確信する。

へりは僕たちを降ろした後、すぐに飛び立ってしまおう。原作と同じように、燃料補給をするために近くにあるニブルの基地へ向かったよ。うだ。

「きゃっつ」

強い風が吹き付け、イリスさんが髪を押さえる。ミッドガルに比べればかなり気温は低いものの、寒いというほどではない。

常夏の島にいる悠たちは季節感が麻痺しているだろう。今は九月で、日本では秋に差し掛かる頃合いだ。

どんな環境でも仕事ができる神にとっては、なんてこともない。寒ければ”気”を上げて体を温かくし、暑ければ”気”で風を生成して涼しくするなど、便利な能力である。

日は完全に沈んでいるが、空は眩しい街の明かりに照らされて赤紫色に濁っていた。星はほとんど見えず、天に輝くのは月と空を行き交う飛行機の航空灯だけ。海側の景色は深い闇に沈んでいる。

けれど陸側に視線を向ければ、そこには見事な夜景が広がっていた。高層ビルの頂上で明滅する赤色灯、窓から漏れる無数の明かり、繁華街を彩る照明。連なる光の列は、高速道路を走る車のものに違いない。

(僕の生きていた世界と対となる世界の東京……)

僕の故郷は北海道で、東京に来たことは一度もない。しかし対となる世界と同じ国に来るのは半年振り、今は杖で場所を確認できるがいろんな国を周りながら空間の歪みを修正してきた頃が懐かしい。

「東京へは子供の頃に何度か来た程度ですが、それでも何だか帰ってきた」という感じがしますね」

「まあ、三年ぶりの日本だからな。自分たちの街じゃなくても、そんな気持ちになるさ」

深月さんと悠の話し声が聞こえた。二人は数年ぶりに日本に帰ってきたから懐かしいのは当然と言える。

「それにしても……誰も出迎えに来ませんわね」

長い金髪を強い夜風に晒しながら、リーザさんが辺りを見回す。ヘリポートのある屋上には、ブリュンヒルデ教室の生徒と、篠宮先生の姿しかない。

「あそこから、勝手に入ってこと？」

フィリルさんがビル内部への昇降口を指差して言う。

けれど篠宮先生は首を横に振った。

「いや、ヘリから連絡を入れた際には、案内の者が来るという話だった。もう少し待とう」

「……誰が、来るんだろうね」

アリエラさんがぼつりと呟く。

レンちゃんはそんなアリエラさんと僕の服をぎゅっと掴み、再び緊張した表情を浮かべる。

そこでようやく昇降口の扉が開き、白衣を着た男性が小走りで駆けてくる。

「やあやあ、申し訳ない。少々手の離せない仕事があつて遅れてしまった」

申し訳なさそうにボサボサの髭を掻き、無精髭を生やした顔に愛想笑いを浮かべる男性。

彼が現れた途端、レンちゃんの顔が強張る。

「やつぱり、か……」

アリエラさんも歯を噛み締め、鋭い眼差しで睨みつけている。殺気に近く、ビリビリとした攻撃的な感情が伝わってくる。

(なるほど、この男か……)

僕は二人の反応に確信を持つ。この男が原作に出てくるロクでもない科学者だと知る。

「いえ、お忙しいところお出迎えいただき感謝いたします。私は篠宮遥<sup>しのみや はるか</sup> ミッドガルの司令官であり、彼らの担任教師です。今回は

物部悠をはじめとする生徒たちの引率として同行いたしました」

篠宮先生が挨拶をし、男性に手を差し出した。

「私はこの研究所の所長を任されています宮沢健也<sup>みやざわ けんや</sup>です。よろしくお願いします」

男性は名乗り、篠宮先生と握手を交わす。

宮沢健也、彼こそレンちゃんの父親で、“黄”のフレスベルグの能力である”エーテルウィンド霊頭粒子”の論文を書いた本人だ。

「貴方が”霊頭粒子”の論文を書かれた方ですか……」

深月さんが驚いた様子で問いかけ、ちらりとレンちゃんの方を見る。彼女もフレスベルグの能力を解明した科学者が目の前にいることに驚き、悠もエルリア公国でその名前を聞いたことを思い出したようだ。

「ん、そうだが——君は？」

「申し遅れました、私は物部深月といます。竜伐隊りゅうばつたいの隊長です」

ぺこりと頭を下げ、深月さんは挨拶をする。

「物部深月……そうか、君が反物質の……確かフレスベルグ戦の時に連絡があったと、後から聞いたよ。ちょうどその時は色々タイピングが悪くてね、応じられなくてすまなかった」

「いえ、そんなことは……あの論文だけでもすごく参考になりました」

「そう言ってもらえると嬉しいよ。で、君がいるということ……”カタストロフ終末時間”を使った子もいるのかな？」

宮沢健也はそう言っ僕たちを見回す。

「——あ、それ、あたしです」

イリスさんが控えめに手を挙げた。

「おお、これは思いがけぬ幸運だ。もし可能であれば、少しでもデータを取らせてもらえないか？」

「えっ……まあ、時間があつたら」

目を輝かせる宮沢健也に気圧けおされながら、イリスさんは曖昧に答えた。

「ぜひ頼むよ。それで——君たちが物部悠とティア・ライトニングだね」

今度は悠とティアちゃんに視線を向け、宮沢健也は確認してくる。

「俺たちのことは、知っているんですか？」

悠は戸惑いながら訊ねる。

「顔は知らなかったが、見れば分かるさ。男性の”D”の一人で、アンチグラビティ”万有斥力”と”エーテルウインド霊顕粒子”の再現に成功した君と、生体変換によって”角”を与えられた彼女には会いたかった」

興奮した様子で彼は悠たちに詰め寄ってくる。

「この人……何だか怖いの」

ティアちゃんは彼の勢いに怯え、悠の背後に隠れた。

「ああ、すまない。少し熱くなってしまったようだ」

宮沢健也は悠たちから少し離れると今度は僕と目が合った。すると再び目を輝かせながら僕に近づく。

「君が噂の大島亮だね。”D”には持ち合わせていない”気”という不思議な力を使ってドラゴンを何度も倒したと聞いているよ」

「ど、どうも……」

僕は苦笑を浮かべて頭を下げる。

（原作通りかよ……しかも僕の隣に実の娘がいるのに気付かないのか？）

そう思いながらも口には出さなかった。レンちゃんは緊張した表情で自分の父親を見るが、彼は自分の娘にすら気付いてない様子だ。

「今度……いや、できることなら今すぐにでも君の力を調べたい。

何しろフレスベルグに攻撃を与えることが可能な力だからね」

「は、はあ、恐れ入ります。ところで、ユグドラシル討伐と”霊顕粒子”についてですが——」

「ああ、そうだった……まずは長旅の疲れを取ってくれ。とりあえず客室と食堂へ案内する」

そう言って昇降口へと歩き出す宮沢健也。悠たちは後に続くこうとするが、そこで鋭い声が夜風を裂く。

「待ってよ」

声の主はアリエラさんだ。怒りの籠った眼差しで彼を睨みつけていた。

「何だ？」

「……それだけかい？」



低い声でアリエラさんは彼に問いかける。「何だ？」という言葉に僕はここまでクズであるのかと思ひ知る。

「ん……う？　もしかして、君はアリエラか？　それにレンまで——君たちも来ていたんだな」

宮沢健也の言葉にびくりと肩を震えるレンちゃん。

「今、気付いたってわけ？　よっぽどボクたちに興味がないんだね」

強い皮肉と敵意の混じった口調でアリエラさんは言葉を返す。

事情が分からない悠たちは戸惑いながら顔を見合わせ、深月さんと篠宮先生は、憂慮の表情を浮かべていた。

二人は僕と同じで彼とアリエラさん、レンちゃんの間係を知っているようだ。

「いや、そんなことはない。久しぶりに会えて嬉しいよ。けど、どうしてここへ来たのかな。今回、特に君たちのことは必要としないのだが」

僕たちの視線が集まる中、彼は心底不思議そうな顔で疑問を口にする。

レンちゃんは俯うつむいたまま、ぎゅっと小さな拳を握りしめた。

「——っ」

その瞬間、アリエラさんが地を蹴り、たった一步で彼との距離を詰める。鋭く腕を振り上げて殴るつもりだ。

深月さんたちは、あまりに素早い彼女の動きに反応できない。僕なら止められるが、三人の事情を知っているため、彼女を止めようとしなかった。

しかし悠はアリエラさんの動きに反応し、彼の顔面を狙って放たれた拳を受け止めた。

「落ち着け、アリエラ。事情は分からないが、暴力は良くない」  
「っ……っ」

奥歯をぐっと噛み締め、アリエラさんは拳を引くが、その瞳はまだ彼を睨みつけていた。

彼はきよとした表情でそんなアリエラさんを見つめ、何ら驚い

た様子もなく問いかけてくる。

「——もういいかい？ それじゃあ中へ案内するよ」  
くるりと背を向け、彼は昇降口へ歩いていった。

原作と同じ展開だと知っていたが、正直殴られれば良かった思っている。

しかし悠の言ったことに間違いはなく、事情を知らなければ僕でもそうしただろう。

「相変わらずだね……ホントに、どうでもいいんだ。ボクに殴られることも——レンのことも」

悔しそうに呟くアリエラさんにレンちゃんは僕の腕を引っ張りながら近づき、彼女の手をぎゅっと掴む。

悠は二人に問いかけ、宮沢健也との関係を知る。



宮沢健也に先導されて昇降口から研究所に入り、エレベーターで客室のある十八階のフロアへと降りる。

エレベーターの表示によると、このビルは二十階建てのようだ。

それぞれに宛てがわれた客室へ荷物を置いた後、俺たちは研究所内にある職員用の食堂へ案内された。

セルフサービスのようで、皆好きなメニューを注文して受け取り着席するが、空気は重い。悠たちはアリエラさんの話を聞いてから、ずっとこんな雰囲気だ。

ただ、宮沢健也だけは気にした様子もなく、マイペースに施設内の説明を続けている。

「これがゲスト用のIDカードだ。客室の鍵も兼ねているから、自室の部屋番号が書かれているものを取ってくれ。このIDカードで立ち入れるのは十八階の客室フロアと食堂のあるここの十階、そして一階のエントランスになる。外出は自由。基本的に私は、君たちの行

動に口を出さない。立ち入られて困る場所には最初から入れないようになっっているからね」

彼はそう言っつて、番号だけが記された飾り気のないIDカードを机に置き、僕たちはそれぞれのIDカードを手に取ると、彼は席を立った。

「——じゃあ私は一旦席を外させてもらうよ。これでも多忙だね。食事が終わった頃に、また迎えに来る。対ユグドラシルの作戦に関する話はその後、会議室で行おう」

こちらの返事を待たず、彼は早足で食堂を出ていく。

彼がいなくなったことで、ようやく場の緊張が和らいだ。

ずっと彼を睨んでいたアリエラさんは、自分を落ち着かせようと深呼吸をし、レンちゃんは俯き、下を向いていた。

「では、いただきましょう」

深月さんが呼びかけ、食事が始まる。

悠と深月は箸を進めながら小声で話している。アリエラさんとレンちゃん、宮沢健也のことについてだ。

深月さんは宮沢健也に関しては知っているが、彼女たちの関係は知らないようだ。

隣ではイリスさんが篠宮先生と街の観光について話していた。今後の予定は決まっつてないようで、自由行動ができる日があれば出来るようだ。

その際、建物の中から二人の放つ”気”を感じ取る。どうやら僕たちの知っつている奴らのようだ。

ドンッ！

その時——突然爆音が響いて来て、建物全体が鳴動する。食堂の窓ガラスがガタガタと揺れた。

「え……何？」

「爆発……？」

フィリルさんが戸惑っつた様子で周囲を見回し、リーザさんは何事かと眉を寄せる。

「ユウ、見て！ 窓の外！」

ティアちゃんが食堂の窓を指差す。

暗くて見え辛い、煙が上がっている。

ジリリリリリリ——。

そこで警報が鳴り始め、辺りが急に騒がしくなった。食堂外の廊下を、武装した警備兵が駆けていく。

悠は席を立ち、窓際へと近づいて呟く。

「単なる火事……じゃなさそうだな」

あの二人の脱出は荒い。もっとスマートに気付かれない方法があるのに。

「皆、状況が分かるまでこの場で待機だ。けれど何か起こっても対応できるよう、架空武装を生成しておけ」

篠宮先生が浮足立つ僕たちに指示を出す。

「分かりました——五閃の神弓！」

即座に深月さんは応じ、弓型の架空武装を作り出した。皆も深月さんに続いて架空武装を生成し、僕もビルが破壊しない程度に気を高める。

皆、固唾を呑んで窓の外を眺める。

すると突然、煙の中から何かが飛び出した。

赤い火の尾を引いて、空へと昇っていく黒い影——。

「今の何だったのかな？」

アリエラさんが呆然と呟くが、皆は答えられない。

一瞬のことで、僕以外はその姿をはっきり捉えることはできない。

遠ざかる赤い炎は空高くで反動してこちらへと戻ってくる。

「こっちに来るようだ」

僕は近づいてくる火の尾を見ながら呟く。

「皆さん、窓から離れて！」

深月さんの号令で全員が窓から距離を取る。ちょうどそのタイミングで、落ちてきた火の尾が窓の外で停止した。

そこで皆は黒い影の正体を知る。

紅に燃える炎を纏い、それを推進力にして滞空しているのは長い黒髪を靡かせる少女、そしてもう一人は彼女の腰にしがみ付いているプ

ラチナブロンドの男装女子。

原作を知っているため、彼女たちが日本に来ていることは分かっていた。

「キーリ……それに、ジャン？」

悠は驚きながら彼女たちの名前を口にする。

黒髪の少女はキーリ・スルト・ムスペルヘイム。ドラゴン信奉者団体”ムスペルの子ら”のリーダーであり、災害指定されている”D”だ。

男装女子の名前はジャンヌ・オルテンシア。軍事組織ニブルに所属する軍人で、悠が隊長を務めていた特殊部隊スレイプニルの凄腕スナイパー。

悠の前では自分が女であることは隠しているようで、名前もジャンという偽名で名乗っている。

一緒にいるところを見ると、原作通りキーリと共に行動していたようだ。

キーリは上位元素ダークマターを用いて”熱”を生成する。窓ガラスが赤熱し、ぐにやりと飴あめのように融解させた。

溶けて開いた窓ガラスの穴から、熱と焦げ臭さを孕はらんだ風が吹き付けてくる。

「——本当に悠がいたわ。あなたの”目”は、やっぱりすごいわね」

窓枠に降り立ち、ジャンヌへ話しかけるキーリ。

「だから言っただろう。隊長の姿を私が見逃すものか」

ジャンヌは得意げに応じるが、キーリの腰に掴つかまったままなのであまり格好は付かない。まだ体は半分宙にあるので、手を離すわけにはいかないのだろう。

「どうしてこんなところに……？」

悠が呆然としながら疑問を口にすると、キーリは視線を悠に向けて微笑んだ。

「ちよつと探し物があってね。日本にあるアスガルの研究所やニブルの基地を、しらみつぶしに回っているところだったのよ」

「なっ……じゃあ、さっきの爆発もキーリたちがやったのか？」  
「ええ、見つかったから緊急脱出したの。そのまま逃げようと思ったんだけど、ジャンヌちゃんがあなたを見かけたっていうから——」

「おいっ、キーリ！」

ジャンヌが慌てた様子で叫ぶ。よっぽど本人に自分が女であることを知られたくないようだ。

「……ジャンヌちゃん？」

悠はキーリが口にした言葉に眉を寄せる。

「ああ、ごめんなさい。言い間違えちゃったわ。そういえば、あなたの名前はジャンヌだったわね」

キーリはからかうように言うと、ジャンヌは怒りを堪えてながらで歯を噛み締める。

「後で憶えている……」

「ふふ、怖い怖い。もう間違えないから許してね——ジャン」  
愉快そうにキーリは答える。

「僕たちの前から急に姿を消したから何処かで野垂れ死んだのかと思ってたよ」

皮肉を込めて言うと、キーリとジャンヌは僕の方へと視線を向ける。キーリは微笑んだままだが、ジャンヌは僕を見た途端に睨む。どうやら警戒しているようだ。

「あら、酷いことを言うのね」

「冗談だ、しかしこうして見ると仲がいいな。友情でも芽生えたのか？」

「な、何を言う！ そんな感情など抱いておらん。オレはキーリと同じで貴様を信用してなどいない！」

初対面ながら警戒心むき出しにされたらどこか傷つく。

だがそこで廊下から何人かの気を感じ取り、警備兵が食堂へ突入してくる。

「動くな！ 投降し——うわっ！」

警備兵が銃を構えた瞬間、先ほどの窓ガラスのように融解した。

警備兵たちが慌てて手放した銃は床に落ち、中の火薬に引火して爆発する。

これはキーリの”禍炎界”ムスベルヘイム。目に見えない微小な上位元素で空間を満たし、予備動作なく任意の場所に高熱を生み出す戦闘方法だ。

「邪魔が入っちゃったわね。話はまた今度、改めて。あなたが日本にいるなら、機会はあるはずだし」

キーリはそう言うのと窓枠を蹴って、虚空に身を躍らせる。

「じゃあね」

にこやかに手を振り、キーリはジャンヌを連れて天高く飛んで行く。

彼女たちが日本に来ていることは分かっていたが、この先に僕が予想もしていない大きな波乱が起きる予感を抱いていた。

## 大きな欠点

「——到着早々、慌ただしくなってしまったね。けれど侵入者が”ムスペルの子ら”のキーリだったとは……会えなかったのがとても残念だ」

宮沢健也みやざわけんやは本当に惜しいことをしたという表情で呟く。場所は食堂と同じ階にある会議室。

キーリたちが姿を消した直後にやってきた彼は、突然の事態に戸惑う僕たちをここへ連れて来たのだ。

「キーリに……会いたかったですか？ 災害指定された危険人物なんですよ？」

悠は宮沢健也の言葉に驚き、問いかけた。

「彼女は現状で唯一、生体変換を可能とする”D”だと聞いている。研究対象として極めて興味深い」

語気を強めて彼は力説する。アリエラさんはそんな彼に冷めた眼差しを向けつつ、悠に話しかける。

「物部クン、その人は研究以外のことに興味がないんだよ」

「……みたいだな」

悠は彼とは価値観が違うことに溜息ためいきを吐き、レンちゃんは彼から顔を背けて無言で窓の外を眺めていた。

宮沢健也のことを知っている僕は本当にレンちゃんの父親なのかと疑問を抱く。

「キーリのデータを得られなかった惜しいが——今は気持ちを切り替えよう。さあ、私の考えたユグドラシル討伐プランの説明を聞いてくれ」

改まった様子で宮沢健也は本題に入る。

手元のノートPCを操作すると部屋が暗くなり、天井から白いスクリーンが降りてくる。

そしてそこに、巨大な木の映像が映し出された。

「これが富士の樹海に出現した、ユグドラシルの映像だ。ドイツとデンマークの国境付近をテリトリーとしていた時に比べ、大きさは



およそ二十倍。現在は高さ五千メートルに達しており、なおも成長を続けている」

「五千メートル……」

悠はあまりの大きさに驚く。

「ユグドラシルの出現場所と、急激な成長の理由に対する私なりの見解はあるが……それはひとまず置いておこう。問題は、ユグドラシルがどういう存在なのかということだ」

彼はそう言うと、スクリーンの映像を切り替えた。

「突然ユグドラシルがミッドガルに出現したのは、君たちにとって大きな災難だっただろう。しかしおかげで多くの価値あるデータを得ることができた。ユグドラシルが電氣的干渉の応用によって<sup>データマター</sup>上位元素にハッキングを行ったことは、新たな発見の一つだ。そしてさらに、優秀なドラゴン研究者でもあるシャルロット学園長からは、とても興味深い”仮説”を提示していただいた」

少し含みのある言い方で彼は言う。

学園長が提示した仮説というのは、支配の力によって彼女が感覚的に把握した”ユグドラシルの本質”に関することだろう。

原作でも知られていないが、恐らく彼も学園長の正体を知る一人なのだろう。学園長が特殊な能力を有していることを知る者でなければ、彼女の仮説は根拠が全くないものになってしまう。

「その仮説を検証し、裏付けを行い、ユグドラシルという存在の全貌が浮かび上がった。あれは……地球上に存在する全植物の中樞意識だ」

「中樞意識？」

耳慣れぬ言葉に悠は眉を寄せた。

「例えるなら、ユグドラシルは植物同士のネットワークによって構築される生体コンピュータ……その<sup>オペレーションシステム</sup> O S と言えるかもしれない。ユグドラシルから周辺の植物へと微弱な電気信号が発信されていることを、私たちは観測している」

彼の言葉に僕たちは顔を見合わせる。イリスさんとティアちゃん  
は意味がよく分からなかったようで、きよとんと首を傾<sup>かし</sup>げていた。

「お前の言った通りだったな」

「少しだけだな」

僕の隣にいた悠が小声で呟いた。

ユグドラシルとヘカトンケイルが同時消滅したことを聞いた後、悠とイリスさん、リーザさんに宮沢健也と似た仮説を話した。あの時のことを覚えていたようだ。

他の皆は大体のイメージを把握したようだったが、篠宮先生はいまいち納得できないという様子で彼に質問した。

「植物のコンピューター……それでは植物そのものがドラゴンと  
いうことになりましたが——しかし、ミッドガルにも植物はありません。ユグドラシルに敵意があるのなら、もっと早く何らかの行動に出  
ていてもいいのでは？」

すると彼はいい質問だというように、得々と説明を始めた。

「そう単純な話でもないのさ。観測の結果、周辺植物の間で高度な情報処理が行われている形跡はないんだ。そのことから考えて、情報処理能力を有するのはあの巨大な——ユグドラシルと呼ばれている大樹だけなんだろう。あれは言わばCPUであり、ユグドラシルの本体。他の植物は外部メモリのようなもの。ゆえに意思を持って行動できるのは、あくまで本体だけだと推察できる」

それを聞いたイリスさんは、身を乗り出して発言する。

「じゃあ、あの本体を倒しちゃえばいいんだよね?！」

たぶん悠の事情を知っているがゆえに、気が急せいでいるのだろう。だが彼は首を横に振った。

「いや、ドイツ・デンマークの国境でユグドラシルはヘカトンケイルと共に消滅したが——その後、知っての通りミッドガルに現れた。それを倒した後も、こうして日本に出現している。本体を破壊するだけでは解決にならない」

「た、確かに……」

イリスさんは語気を弱め、もどかしそうに唇を噛かむ。

「恐らくユグドラシルの意識は植物が形成するネットワーク上にあり、CPU本を破壊してもまた別の植物が新たなCPUとなるだけな

のだろう。成長し、発達したCPUを破壊することで、ユグドラシルの性能を削ぐことはできるはずだが……その効果は一時的なものだと考えられる」

「で、でしたら植物を根絶しない限り、ユグドラシルは倒せないということになるじゃありませんか!」

顔を蒼白にし、声を上擦らせるリーザさん。彼女も事情を知っているため、少し感情的になっている。

「確かに、ユグドラシルを根本から滅ぼそうとするならそれ以外に方法はない。だがそんなことは不可能に近いし、できたとしても植物が絶えた世界で人間は生きていけないだろう」

宮沢健也は声のトーンを変えず、淡々と絶望的な推測を語った。

「けれど——あなたには、何か考えがあるんだよね?」

冷静に話を聞いていたファイリルさんが、彼へ真剣な声で問いかける。

「ああ、もちろん。だからこそ、私は物部悠と大島亮の出向を依頼したんだよ」

彼は僕と悠に視線を向け、薄く笑った。

「僕たちに何かできることがあるんですか?」

彼の作戦を知っているが、一応聞いてみた。

「ある。今のところ物部君にしか再現できないフレスベルグの能力——”エーテルウインド霊顕粒子”と大島君にしかできない”気”という力が、ユグドラシル打倒の鍵になると、私は考えているのだ」

「何故、”霊顕粒子”と亮の力が……」

悠は理解できずに問い返すと、彼はスクリーンの表示を切り替えた。

わずかな暗転の後、フレスベルグ戦の画像が映し出される。金色の粒子を纏うフレスベルグと、それを気功波と対竜兵装で撃ち落とそうとする僕たちの姿……近くに人の気配があることに気付いてはいたが、まさかあの戦いを詳細に記録していたとは思わなかった。

「精神と肉体——この二つが健全な状態を保っていなければ、生物は正常に活動できない。ユグドラシルの肉体を滅ぼすことが不

可能なら、精神の方を破壊すればいい。二人の“霊顕粒子”とフレスベルグの纏う“魂の衣”を撃ち抜いた兵器と力があれば、それは可能だ」

画像にある悠の対竜兵装と僕の気功波を示し、はつきりと断言する宮沢健也。

篠宮先生は彼の言いたいことに気付いた様子で眉を動かし、彼に先を促す。

「宮沢所長、詳しく説明してもらえますか？」

「——まあ、難しいことじゃないんだ。作戦自体はとても単純だよ。まずユグドラシルの本体を半壊させた後、“霊顕粒子”を散布。その後ユグドラシルの精神——魂が具現化したならば、フレスベルグを倒した兵器と“気”で奴の魂を物理的に破壊する。ただ、それだけさ」

彼の説明を聞き、皆は息を呑んだ。

原作を知っているため、大体の作戦は分かっていた。

本体をいくら変えられるのなら、形のないユグドラシルの意識そのものを破壊すればいい。作戦の方向性は間違っていないが、僕はそれだけで倒せないことは分かっている。

「本当に……それで上手くいくのでしょうか？ 兄さんの上位元素生成量では、十分な“霊顕粒子”を散布できないのでは……」

僕たちに視線を向けた深月さんに、悠は苦笑いを返した。

「確かに——俺の生成量は少なすぎるからな」

普通の“D”が一度に生成できる上位元素は最低でも十トンだが、悠は約十キロしかできない。

けれどそうした疑問の声を聞いても宮沢健也は動じず、にこやかに口を開いた。

「皆の不安はもつともだ。だからこの作戦が実行可能か検討するためにも、まずは詳しいデータを取らせてもらいたい。できれば今すぐ」

期待の籠った眼差しを彼は僕と悠に向ける。作戦のためというよりも、研究者としての興味と好奇心を強く感じた。

しかし悠たちからすれば急ぐことに異存はないだろう。ユグドラシルが今でも成長し続けているのなら早く討伐するべきだと考えるからだ。

「いいんじゃないか？　悠もそう思うだろ？」

「ま、まあな」

「おお、ありがとう。できればティア君、深月君、イリス君も協力をお願いしたい。今回の作戦に直接関係はないが、君たちが有する特殊性が突破口になる可能性もあるからね」

彼は僕たちに礼を言い、ティアちゃんたちにも協力を求めた。

「ティアはユウたちに付いて行くの！」

「あたしもモノノベが行くなら……」

ティアちゃんとイリスさんは承諾するが、深月さんは篠宮先生の方を見て訊ねる。

「篠宮先生、どうしましょうか？」

「——生徒の心身に負担が掛かるような検査でなければ許可しましょう。もし妙な実験を行おうとすれば、即座に止めていただきます」

篠宮先生は彼に強い口調で告げた。

「分かってているさ。彼らの生成した物質の検査と、口頭での質問をさせてもらえば十分だ。薬物は一切使用しないし、体にも指一本触れないことを約束しよう」

彼は軽い口調で請け合って、席を立つ。

「では、私に付いてきてくれ。研究区画にある検査室へ案内する」  
だが部屋を出ようとする彼に、リーザさんが声を掛けた。

「あの、わたくしたちはどうすればいいのでしょうか？」

先ほど名前を呼ばれなかったリーザさん、フィリルさん、アリエラさん、レンちゃん。

彼は彼女たちを見回して、「ああ——」と興味なさげに呟く。

「君たちのデータは特に必要ないから、部屋に戻ってくれて構わないよ」

「っ……」

その返事を聞いて、アリエラさんが奥歯を噛み締めた。レンちゃんは何の反応も見せず、下を向いている。

今の言葉で彼女たちが傷ついたことは理解した。やはりこの男は実の娘に対しても興味がないうる。

分かっただけはいたが、僕は今の言葉で彼を殴ろうとしたが、流石に暴力は良くないと思い留まる。

その代わりに、僕や他の皆は責めるように彼を睨む。

「……？ 何だい？」

だが、彼はどこ吹く風だ。自分の言葉がアリエラさんたちを傷つけた自覚もないのだろう。

「——じゃあ、私たちは先に戻ってるね。皆、行く？」

フィリルさんが場を取り成すように口を開き、リーザさんはアリエラさんを宥めるように肩へ手を置いた。

そうしてリーザさんたちが静かに会議室を出て行った後、僕たちは宮沢健也に先導されて研究区画へ向かったのだった。



「——後はボクたちで頑張ってくれ、か。彼はやっぱり何も変わってないね。ユグドラシルのことなんて、本当はどうでもいいんだよ」

深月さんから検査室での話を聞いたアリエラさんが吐き捨てるように呟く。

「……ん」

レンちゃんも同意するように頷いた。

検査室へ向かった僕たちは悠、深月さん、イリスさん、ティアちゃん、僕の順番で検査を受けた。

「宮沢健也は悠の生成した”エーテルワインド霊頭粒子”を間近に見たことに感動していた。」

あの表情を見ると本当に研究にしか興味がないことが伝わった。深月さんの反物質の検査に協力したが、イリスさんは”終末時間”カタストロフの試行を断った。

ミッドガルでユグドラシルと戦ってから一度も使っていないようで、学園長から危険だから勝手に使わないように言われたようだ。

宮沢健也は残念がっていたが、こればかりは仕方なかった。そして意外なことに彼が最も時間を割いたのはティアちゃんへの問診だった。

ティアちゃんは彼の質問に全て答え、悠たちは彼女の角に少し知った。

なんでも彼女たちがドラゴンになるためにキーリから与えられたこと。そしてこの角は何かと戦うために必要なものだということ。

ティアちゃんがバジリスクに見初められると”もうその角はいらないわね”と言ってこれ以上のことは教えてくれなかったようだ。

ちなみに僕はその角が何のために重要なものなのかは知っていたが、いずれ皆が知ることになるため、言わなかった。

宮沢健也は彼女が普通の”D”であることに落胆していたが、順番が僕に回ってくると、最後に残っていたデザートを食べるかのような表情で検査をした。

僕が”気”を試行すると、彼は悠が使った”霊顕粒子”以上に感動して、色んな質問をしてきた。

彼は超サイヤ人になってほしい頼まれたが、力が強すぎて周りに被害が出ると断った。

彼は当然残念がっていたが、一時間で検査は終了した。

想定していたより早く終わり、彼は研究結果を纏まとめながら結果を口にした。

どうやら彼が考えた作戦をそのまま実行するのは不可能というのが答えだった。

検査をして、”霊顕粒子”によって具現化した魂のサイズは、肉体の大きさに比例するようで、一度に生成する量が少ない悠では足りないとのことだった。

しかし希望はあった。”D”は上位元素を貸し借りすることで足りない量を補うことにし、リーザさんたちに手伝ってもらったことになった。

検査を終えた彼は”後は君たちで頑張ってくれ”と言って興味が尽きたように部屋を出て行った。

ひよつとしたらユグドラシルのことも僕たちからデータを得る口実程度にしか思っていないのかもしれない。

そして僕たちも部屋を後にして、現在は研究所十八階にある深月さんの部屋で皆と作戦会議が行われていた。

「まあ、必要な情報は頂きましたし、ここからは私たちの仕事であることも事実です。なので今はまず、ユグドラシルをどう倒すかを考えましょう」

深月さんは腹を立てているアリエラさんを宥め、テーブルに置いたノートパソコンの画面にユグドラシルの画像を表示させる。

シングルベッドの上に肩を寄せ合って座る皆の視線が、深月さんに集まった。

「現状、ユグドラシルを滅ぼすのは限りなく不可能です。なので宮沢所長が提案したように、ユグドラシルの体ではなく精神を破壊して無力化するのが、最も有効な手段と言えます。しかし大きな問題点が二つ——」

深月さんは悠に視線を向け、言葉を続ける。

「一つは、兄さんの上位元素生成量ではユグドラシルの魂を具現化させるに足る”エーテルウインド霊頭粒子”を散布できないだろうということ。そしてもう一つは、射程の問題です」

「射程？」

悠はどういうことかと眉を寄せる。

「ユグドラシル周辺の地域では電子機器の異常が起こっていると聞いています。恐らくユグドラシルが電気的な干渉を行っているのでしょう。ミッドガルでのこのを考えれば、その干渉範囲内では私たちの上位元素もハッキングされてしまう可能性が高いです」

「近づけない、ということですね……」



リーザさんの眩きに、深月さんは頷く。

「はい。正確な干渉範囲に関してはデータの提供をお願いするつもりですが、テレビの報道などを見る限り、現在の干渉範囲は十五キロ前後と思われます。しかもユグドラシルは成長していますから、その範囲はますます広がっていくでしょう。ですが……」

「僕のならユグドラシルの干渉を受けることはない、ということかとか」

「ええ、そうなりますね」

僕の“気”はユグドラシルの電気信号に干渉できないため、近距離での攻撃も可能となる。

「ユグドラシルは巨大ですし、バジリスク戦時と同様、リーザさんに長距離狙撃してもらう手もあります。最終的にとどめを刺すのは兄さんと亮さんです。亮さんは大丈夫ですが、兄さんは十五キロ以上離れた地点からユグドラシルを狙えますか？」

深月さんに質問された悠は腕を組む。

「フレスベルグを倒した”彼岸を貫く方舟”は狙撃に適した兵器じゃない。一発の威力は大きくないから、対象を破壊するには大量の弾を叩き込む必要がある。けど十五キロも離れたところから撃つても当てるのは難しいし、威力も落ちるだろう。正直……難しいな」

悠の答えを聞いた深月さんは、口元に手を当てる。

「となると……可能な限り近づきたいところですね。電氣的な干渉が原因なら何か手を打てるかもしれないし、宮沢所長にも相談して対策を考えましょう」

すると、そこで篠宮先生が口を開く。

「その辺りのことは、私が引き受ける。貸しはあまり作りたくないが、ニブル側にもコンタクトを取ってみよう」

「ありがとうございます、篠宮先生。では、私たちはもう一つの問題解決に力を注ぎます」

篠宮先生に礼を言い、深月さんは再び悠に視線を向けた。

「兄さん——レンさんに上位元素を借りて、架空武装を構築してみてください」

「え……レンに？」

悠は驚き、レンちゃんの方を見た。

「っ」

お互いの視線が合うと、レンちゃんはアリエラさんの陰に隠れてしまふ。

「はい、レンさんの上位元素生成量は私ちの中でも飛び抜けて膨大です。それでもユグドラシルの魂を具現化させるのに足りるかは分かりませんが、”霊顕粒子”散布の補助にはレンさんが適任だと思います」

「——というわけだが、今のままじゃ無理だな」

深月さんに続いて僕が言う。

「ああ、分かっている。上位元素の受け渡しを練習するしかない」

「いや、それ以前の問題だ」

「どういうことだ？」

悠は僕の言ったことが分からないように、首を傾げた。

「僕の方や”D”の上位元素は、その人の思念が宿っている。いわば心の欠片かけらだ。レンちゃんの上位元素を扱うには、レンちゃん自身を理解しなきゃいけないぞ」

「レンのことを理解……」

悠は横にいる赤毛の少女を見下ろす。僕と違って悠は彼女のことをまだよく知らない。

「悠とレンちゃんに足りないのは、訓練よりもコミュニケーションだろう。今よりも打ち解けるためにはどこかに遊びに行くのがいと思う」

「けど、いきなり二人きりはハードルが高くないかな？」

僕の言葉にアリエラさんが異議を唱える。

「そこは皆で出かけて、その中で可能な限りコミュニケーションを取るのがいんじゃないか？」

「……………ん」

レンちゃんは少し迷うような表情を浮かべるが、首を縦に振る。

「それで決まりだな。で、どこか行きたい場所とかあるか？」

僕が訊ねるとレンちゃんは個人端末を取り出し、素早く文字を入力する。

「ん」

端末を僕たちの方に翳すレンちゃん。

表示されているのは、漢字で三文字。

「遊園地？」

悠がその文字を読み上げると、レンちゃんは頬を紅潮させてこくりと頷いた。

## 遊園地

日本は”黒”のヴリトラが現れた場所であり、”D”という存在が最初に確認された国でもある。

そのため、ドラゴンを信奉する人々にとって日本は聖地に等しい。また逆に、ドラゴンや”D”を敵視し、排斥しようとする人々にとっては全ての元凶——呪われた地とも言えた。

そして日本の首都、東京には、そのような両極端な思想を持つ人々が多く集い、新興宗教的性質を持つ団体がいくつも生まれている。

ドラゴン信奉者団体とドラゴン排斥者団体の小競り合いは、東京においてちよつとした社会問題になりつつあった。

「馬鹿みたい」

都心の高級ホテル——その最上階スイートルームの窓から、キーリ・スルト・ムスペルヘイムは冷めた目で地上を眺める。

ホテル近くにある広い公園では、早朝から二つのデモ隊が睨み合っていた。最近では珍しくもないドラゴン信奉者団体とドラゴン排斥者団体の衝突だ。

「ドラゴンを崇め<sup>あが</sup>ようが、敵視しようが、あなたたちは人間でしかないのに……」

心底呆れた声音で、キーリは呟く。

最も過激なドラゴン信奉者団体”ムスペルの子ら”で神子<sup>みこ</sup>として崇められている彼女だったが、思想を同じくしているわけではない。

単に便利だから使っているだけ。

一言頼めば、こうして団体の息が掛かったホテルを用意してくれる忠誠心は有難かったが、また同時に滑稽でもあった。

キーリは蚊帳<sup>かや</sup>の外で勝手に争う愚者たちから視線を外し、部屋の隅で黙々と銃の手入れをしているジャンヌ・オルテンシアの元へ近づく。

「ねえジャンヌちゃん、いつまでむくれてるの？ いい加減、機嫌

直してよ」

「……………」

猫などで声で話しかけるキーリに沈黙を返すジャンヌ。

「悠の前でジャンヌちゃんって呼んだことなら謝ったじゃない。それに、あなたが女の子だって悠にバレても、別に問題ないでしょ？」  
キーリの質問を聞いたジャンヌは、ぴたりと銃の手入れを止めた。かすかに震える手で銃を床に置き、ジャンヌは怒りの表情でキーリを睨む。

「問題大有りだ！ オレは男として隊長と信頼関係を築いてきた。なのに本当は女だったと知られたら、これまで積み重ねてきたものが台無しになってしまう」

「そう？ あなたが可愛い女の子だと知ったら、むしろ悠は喜ぶかもしれないわよ？」

「た、隊長はそのような軟派な男ではない！ 誰よりも強く、気高く、なおかつ優しい理想の——」

「ああ、ストップ、ストップ。その話はもういいわ。あなたの隊長自慢は、耳にタコができるほど聞かせてもらったから」

うんざりとした様子でキーリはジャンヌの言葉を遮った。

「分かっているならいい。今後は隊長を侮辱するような発言は慎め」

「……はいはい。ジャンヌって、本当に面倒臭い性格してるわね」  
呆れながら溜息ためいきを吐くキーリ。

「貴様にだけは言われたくない」  
むすっとした表情を浮かべ、ジャンヌはそっぽを向く。

「もう、またヘソを曲げないですよ。近いうちに悠と会わせてあげるから、ね？」

子供に言い聞かせるような口調で、キーリはジャンヌを宥なだめた。

「隊長と……？」

「ええ。」ムスペルの子ら”のメンバーに、悠がいた施設を見張らせているわ。動きがあったら連絡が入るはずよ。何とか機会を見つけて、悠たちと接触しましょう」

「隊長と会えるのは、まあ、嬉しいが……貴様の目的はいったい何だ？ フレイズマルの正体はまだ掴つかめていない。隊長に報告できる

「ことは何も無いぞ?」

警戒の色を瞳に宿し、ジャンヌはキーリを睨む。

「——悠たちはたぶん、ユグドラシル討伐のために日本へやってきたんだと思うわ。だとしたら、私には伝えるべきことがあるの。悠と……ティアに」

「ティア?」

「ああ、ジャンヌちゃんは知らなかったわね。今、悠たちと一緒にいる角がある子よ」

そう説明するキーリの顔を見て、ジャンヌは驚きの声を漏らした。

「貴様も……そういう顔ができるんだな」

「え? 私、何か変な顔をしてたかしら?」

きよとんとするキーリに、ジャンヌは頷きを返す。

「らしくない、優しい顔だった」

ジャンヌの返答を聞いたキーリは緩やかに苦笑を浮かべた。

「——そう。それは確かに私らしくないわね」

キーリは小さな声で呟き、続けようとした直後に扉からノックが聞こえた。

「あら、誰かしら?」

キーリは扉の方に視線を向け、ジャンヌは床に置いた銃を手にする。

もし悠たちに動きがあれば携帯端末から連絡が来るはず。もしかしたらホテルの従業員かもしれない。

二人がそう思っていると扉が開き、予想外の人物が入ってきた。

「なっ!?! キサマは——」

「あら、あなただったの」

「二人とも、さつきぶりだな」

ジャンヌとキーリは驚いた。扉から現れたのは悠たちの仲間にして、この世界で一番偉い神、大島亮だからだ。

亮は何食わぬ顔で部屋を見回し、スイートルームに足を踏み入る。

「伝えたいことがあって来た」

「伝えたいこと?」

キーリは首を傾げるが、ジャンヌは亮に向けて銃を構える。

「キサマ、どうしてここが分かった」

すると亮は肩を竦めながらジャンヌが手にしている銃を取り上げる。

「そんなに警戒しないでくれ。伝えたいことがあるから来ただけだ。あと、研究所の近くに不審な動きをする奴がいたから、お前たちの仲間だと思ったんだ。だから近くにいいそうなホテルを探して見つからないようにここまで来たのさ」

「そうなの？ 流石あなたね」

キーリは感心した表情を浮かべ、亮は彼女にジャンヌから取り上げた銃を渡す。

「大したことじゃない。それより伝えたいことだが……俺たちは遊園地に行くつもりだ」

「遊園地？」

「ああ、ユグドラシル討伐のために必要なことなんだ。そこで俺が皆の目を盗んでティアちゃんを連れてきてやるよ」

亮は要件を言うと、ジャンヌは隠し持っていた銃で再び銃口を向ける。

「それはどういうことだ？」

「別に裏はないよ。ただ、キーリはティアちゃんに会わなきゃいけない用があると思って親切にしているだけだよ」

「そういえば、ティアの角のことはあなたも知っていたわね」

キーリは納得した様子で亮を見つめる。

「でもどうしてそんなことを？」

「ティアちゃんの角はユグドラシル討伐ために与えたものだろう？ お前が直接伝えなきゃいけないと思ったからだ。大丈夫、ティアちゃんにはちゃんと説明するし、皆にもバレないように会わせてやるよ」

亮はそう言っただけで部屋を後にする。

彼はこの世界の神であるため、キーリの正体とティアの角について知っている。

そのため、亮はこれから起きる事態を想定して動いている。彼の正体を知る者は数少ない、側から見れば信用できないが、キーリは亮を信頼できる存在だと思えた。

◇

二十五年前、ヴリトラ出現によってかなりの被害を受けた東京は、復興の際に大規模な区画整理を行った。

そのため二十五年前とそれ以後とでは、街の風景そのものが違う。もちろん昔の名残を残す場所もあるかもしれないが、自分に言わせればまるで別物だ——と、僕たちが乗る車の運転手は、懐かしむように話す。

「はあ……そうなんですか」

僕は曖昧な相槌あいづちを打ちつつ、外の景色を眺めた。

目に入るのは立ち並ぶ高層ビルと、それを凌しのぐ巨大な電波塔。道路と立体的に交差するモノレールの線路。構造物に遮られる狭い空には、航空機が行き交っている。

悠はレンちゃんと親睦を深めるため——作戦行動の一環として皆で遊びに行くことになった僕たちは、車で近場の遊園地へと向かっていた。

車を運転するのは研究所で働くアスガルの女性職員だ。五十歳前後に見える彼女は非常におしゃべりで、車に乗ってからかれこれ三十分——ずっと途切れることなく話し続けている。

彼女が運転する大きめのバンには、ブリュンヒルデ教室の生徒全員が乗り込んでいた。ただ、篠宮先生はミッドガル側の代表者として色々仕事があるらしく、研究所に残っているためここにはいない。

「一番ショックだったのは、壊れた東京タワーがそのまま解体されてしまったことですねえ……私たちの世代にとって、あれは東京のシンボルみたいなものですから」



運転手はしみじみと語るが、そんな昔のことなど知らない僕たちは、何も共感できない。正直黙ってほしいと思っている。最初の方は愛想よく返事をしていた悠たちも、今は少々困った表情を浮かべていた。

ティアちゃんとイリスさんにいたっては、彼女の言葉など全く耳に入っていない様子で外の景色を見てはしゃいでいる。

ちなみにティアちゃんにはキーリたちと会うことはまだ話していない。状況を判断してから話そうと考えているからだ。

レンちゃんは少し緊張しているのか、アリエラさんの隣でじつと下を向いていた。

「また、あんなことにならないければいいんですが……二十五年前を知っている人間は、みんな戦々恐々としています。街は平和に見えますが、これでも結構大変なことになってるんですよ？ あの馬鹿でかい木が近くに現れたせいで東海道方面の鉄道は全て運休。陸路で関西へ行くには北陸側から回り込むしかなくなって、今は飛行機の国内線が大混雑です」

ぺらぺらと喋りつづける運転手。すると悠は疑問を感じたのか、運転手に質問した。

「そんな状況で遊園地は開いているんですか？」

「ああ、それやら大丈夫ですよ。出発前に確認してあります。遊園地で働いている方たちも大変ですよねえ。これぐらいのことじゃ休みを貰えないんだから。まあ良くも悪くも、皆この二十五年で竜災に慣れたってことでしよう」

運転手は苦笑し、他人事ひとごとのように答えた。

それから十分後、彼女の言葉通り開園していた遊園地へ車は到着する。

数えきれないほどの車が並ぶ駐車場で僕たちを降ろした運転手は、明るく僕たちを送り出した。

「では、楽しんできてください」

「ありがとうございます。帰りは色々寄り道もしたいので、交通機関を乗り継いで戻るつもりです」

「そうですね、なら私はこれてま」

礼を言う深月さんに軽く頭を下げ、彼女は車を発進させる。

「ふう……」

遠ざかる車を見送り、溜息ためいきを吐く深月さん。

「もしかして、帰りもあんなにぺらぺら喋られるのが嫌だからあんなことを言ったのか?」

「……何のことですか? せっかく日本に来たんですし、色々と見て回りたいたったですよ」

僕の問いに、深月さんは少し言い訳っぽくとぼける。

「ここが遊園地!? すごい! おっきな車輪があるの!」

敷地の外からでも見える巨大観覧車を目にしたティアちゃんが、興奮した様子で叫ぶ。

「わあ! あたし、こんなに大きな遊園地に来たの初めて!」

メルヘンチックな遊園地の外観を眺めて、イリスさんも感激していた。

そんな中、フィリルさんは不安げな表情を浮かべる。

「な、何だか……危険そうな乗り物がいっぱい」

(あ、そうだった。彼女はたしか……)

城壁を横した敷居の向こうに覗く——ね振じりくねったジェットコースターの線路や、垂直落下系のアトラクション。その威容を前にフィリルさんは青くし、僕は原作を思い出す。

「あれ? フィリルは何となく、怖いのか平気そうなイメージだったんだが」

フィリルさんの反応が少し意外だったのか、悠は彼女に声を掛ける。

僕と悠はフィリルさんが驚いたり、怖がったりしているシーンを見たことがない。

「ホラーゲームとか、お化け屋敷とか、そういう精神的なのは大丈夫だけど……ああいう絶叫系は苦手。自分で空を飛ぶのと違って、全部機会任せで不安だし……」

「そうなのか。じゃあ、あんまり無理しなくていいからな」

「——ううん、私頑張る。何事も経験。苦手なものも、物部くんと一緒なら好きになれるかもしれないし」

「な……」

強がって微笑むフィリルさんに悠はたじろぐ。

(恋する乙女……今の悠を見てると腹が立ってくるな)

他人の恋愛を見守るのは楽しいが、親友がモテるのは正直ムカついてくる。

「ちなみにリーザは、私と正反対。絶叫系は得意だけど、精神的に怖いのは全然ダメ」

「ちよつとフィリルさん！ 何でいきなりそんなことをバラすんですか！」

フィリルさんの言葉を耳にしたリーザさんが、顔を赤くして詰め寄ってきた。

「何となく、私だけ弱みを見せるのが嫌だったから」

悪びれずに言うフィリルさんは肩を落とす。

「全く……わたくしを道連れにしないでください。モノノベ・ユウ、言っておきますが……お化け屋敷ぐらいは全然平気ですからね！」

悠をキツと睨み、念を押すリーザさん。

「わ、分かってるって」

彼女の視線に気圧けおされながら悠は頷く。

するとそこにアリエラさんがレンちゃんちゃんの背中を押して悠に近づいてくる。

「ほら、レン。今日は物部クンと仲良くなるのが目的なんだから、ボクの背中に隠れちゃダメだよ」

「ん！ んー！」

レンちゃんはじたばたと抵抗していたが、悠の前まで来ると顔を赤くして俯うつむいてしまう。

「もう……レンは本当に恥ずかしがり屋だね。物部クン、レンは別に嫌がっているわけじゃないから、優しくリードしてあげてよ」

「——分かった」

悠は身を屈め、レンちゃんにそつと手を差し出す。

「そんなに硬くならずには、とりあえず一緒に楽しもう。遊園地に来たかったんだろ？」

レンちゃんは悠の手をじつと見つめ、そろそろと手を伸ばし——悠の服の袖口を掴んだ。

「これが精一杯、だな。つて——僕の服まで掴んじやったよ」

僕は苦笑を浮かべ、僕服を、掴んだレンちゃん。

「んう……」

彼女は僕の服を離そうとしない。

「——仕方ないな。悠、レンちゃんが慣れるまで、僕も傍そばにいるしかなさそうだ」

「いや、むしろその方が俺も助かるよ。レンとはあんまり話したことがないからな。つて——直接会話したことないのは皆も同じか」

悠は頭を掻くが、アリエラさんはきよとんとした顔で首を傾げた。

「え？ ボクはレンと会話したことあるけど？」

「そ、そうなのか？」

悠は驚いてアリエラさんに聞き返す。

「わたくしもありますわ」

「私も」

僕たちの話を聞いていたリーザさんと深月さんが、小さく手を挙げる。

「私は、数えるほどしかないかも……」

「あたしも、本当に何回かだけだよ」

「ティアはまだ二回だけなの！」

フィリルさん、イリスさん、ティアちゃんの三人も回数は少ないが、レンちゃんと会話した経験はある。

「僕はエルリア公国の行ったときからだな」

一応僕も二人の時は端末無しで会話をしている。

「物部クン、レンは別に言葉を喋れないわけじゃないんだよ。ただ……ちよつと臆病なだけなんだ。仲良くなれば、きつと話せるよう

になると思う」

アリエラさんはレンちゃんの赤毛を撫でながら、悠に言う。

「そっか——分かった。まずはレンと話せるようになるのが、第一目標だな」

僕が訓練以前の問題だと言ったのがよく理解できたようだ。

「では、皆さん。入場口へ行きましょう」

「おう」

皆へ呼びかける深月さんの言葉に応じ、僕は悠とレンちゃん、アリエラさんと並んで歩き始めた。

## アリエラの生い立ち

明るく軽快なBGMの流れる園内は、意外と空いていた。

今日は平日ということもあり、客は家族連れよりもカップルや修学旅行生らしき学生の姿が目立った。

制服を着ている僕たちも、恐らく修学旅行生に見えているに違いない。

遊園地のマスコットらしいペンギンが、子供たちに風船を配っている。だがやたら目力のある表情と、異様に細長い外観が絶妙に不気味で、子供は風船を受け取ると走って逃げていく。

これはキモ可愛いという路線を突いたデザインかもしれない。子供には不人気だが、女子中学生の一団にはやたら気に入られ、記念写真をせがまれていた。

「あつ、モノノベ！ あのペンギンかわいいね！」

イリスさんの感性もあれを可愛いと認識したらしく、顔を輝かせてマスコットのペンギンを指差す。

「そ、そうだな」

悠はあまり近づきたくないのか、ぎこちなく頷いた。正直僕も近づかなくなかった。

ミッドガルに来る前、第七世界の”世界神”と下界に降りて一緒に遊園地に行った日を思い出す。

八重さんもキモ可愛いデザインのマスコットを見て可愛いとはしゃいでいたが、あまりにも不気味だったため、僕は吐きそうになった。

しかし、あの時の遊園地とは違ってここのキモ可愛いマスコットはあのペンギンだけで我慢はできる。

「えー……ティアは何だか怖いの」

「ん」

やはり低年齢層には受けが悪いようで、ティアちゃんとレンちゃん  
は眉を寄せて呟く。

「それで、まずはどれに乗ります？ わたくしは、さつきから悲鳴

が聞こえてきているあのアトラクションが気になってますわ」

リーザさんは弾んだ声で、ジェットコースターを指差す。原作通り、絶叫系のアトラクションは好みようだ。

「私は、まだ心の準備が……。もう少し大人しいのに乗りたいな」引きつった顔でフィリルさんは異論を唱えた。

「レンも緊張しているし、その方がいいね。最初は出来るだけ皆一緒に乗れるものにしようよ」

アリエラさんもそう提案する。

「なら、まずはあれでどうでしょう?」

皆の意見を聞いた深月さんが指し示したのは、非日常が詰まった遊園地の中で最もメルヘンチックな乗り物——メリーゴーランド。

正直この年で乗るのは抵抗があり、悠も何か言いたげな表情をしている。しかし、レンちゃんは顔を輝かせながら悠の袖をぎゅつと引つ張っていたため反対の言葉を口にしなかった。

「……じゃあ、乗るか」

悠が深月さんに応じると、レンちゃんは嬉しそうに首を縦に振る。そうして僕たちは一つめのアトラクションへと足を向けた。

「わーっ、すごいの! ぐるぐる回ってる!」

上下に揺れつつ回転する白馬型の座席に乗ったティアちゃんが歓声を上げる。

「何だかこういうの懐かしいねー」

「そうですね、子供の頃を思い出します」

イリスさんの言葉に深月さんは同意した。”世界神”になる前、僕が小さい頃に遊園地へ最初にメリーゴーランドに乗ったことを思い出す。

あの頃の冬美は怖がりで、アトラクションに乗る時はいつも僕の傍そばにいた。

「酔う……」

フィリルさんは既に気持ち悪そうな様子で、二人乗りをしている

リーザへもたれ掛かっていた。

僕と悠、レンちゃん、アリエラさんは馬車型のスペースに乗り込み、ぐるぐる回る遊園地の景色を眺めていた。

レンちゃんは窓から身を乗り出して他の皆に手を振り、普段から考えられないほど浮かれていた。

「レン、楽しそうだな」

「ん」

悠が声を掛けると、レンちゃんはこくと首肯する。

「遊園地に来たかったみたいだけど、何か理由があるのか？」

けれど悠が続けて問うと、彼女は少し迷うような表情を浮かべて沈黙した。

悠は何かマズイことを聞いてしまったのかと、アリエラさんに視線を向ける。

「——ボクもレンが遊園地に来たかった理由は知らないよ。何か切っ掛けがあるなら、ボクがレンの家族になる前のことだろうね」

「……ん」

アリエラさんの言葉に、レンちゃんは小さく頷く。

遊園地に行きたかった理由……彼女のお母さんがまだ生きていた頃のことだろう。

「そっか、まあ言いにくいことなら無理に言わなくていい。ちよつと気になったただけだからさ」

水を差したくないと思ったのか、悠は引くことを選択したようだ。

まあ、もう少ししたら話してくれると僕は分かっている。

「ん」

レンちゃんは少しほつとしたような表情で笑い、再び馬車の外に視線を戻した。

「そんなに焦るな。まだ時間はあるんだから、ゆっくり理解していけばいい」

「それもそうだな」

悠は早く彼女のことを理解しようと気が急せいてしまったのだろう。僕は悠に焦らないよう語りかける。



レンちゃんに視線を向けると先ほどのように浮かれていた。こうして見ると小さい頃の冬美にそっくりだ。

容姿は似てないが、臆病な性格は同じで”世界神”になってから一度も故郷に帰ったことがない。今度顔だけでも見に行こうと思う。

メリーゴーランドの後はコーヒーカップに乗り、その次はリーザさんが楽しみにしていたジェットコースターに挑戦した。

二人ずつ並んで座る形式のコースターはオーソドックスな作りだったが、コースは国内で最長を誇っており、うねうねと捻れ、ぐるぐると円を描くコースは遊園地の敷地全体をまたがっていた。

イリスさん、ティアちゃん、リーザさん、深月さん、アリエラさんの五人は急降下するコースターを楽しんでいたが、フィリルさんは一人本気で悲鳴を上げていた。

レンちゃんは目をぎゅつと瞑<sup>つぶ</sup>つて、体を固定するバーを懸命に握りしめていた。

悠は「落ちたりしないから目を開けてみろって」と声を掛けてコミュニケーションを取っていた。

ジェットコースターの次に向かったのは、不気味な洋館を模したホラーハウス。

リーザさんは他の絶叫系アトラクションも乗りたがっていたが、フィリルさんとレンちゃんがかなり消耗していたのでインターバルを置くことにしたのだ。

ここで余裕を失くしたのは、リーザさんとティアちゃん。リーザさんは悠の肩に摑<sup>つか</sup>まり、ティアちゃんは腰に抱き付いていた。

深月さんも平然を装いながら彼の服を摘んでおり、レンちゃんも服の袖を強く摑<sup>つか</sup>んでいた。

その一方で、フィリルさんとアリエラさんはどんなお化けが出るかと弾んだ声で会話していた。

青白い不気味な照明が灯<sup>とも</sup>る廊下を進んでいると、ガラガラガラ――

―と雷の効果音とともに窓に現れた怪物のシルエットに、僕とアリエラさん以外は怖がって悠に抱き付いていた。

フィリルさんに至ってはタイミングを見計らってたが。

悠はしがみ付く皆をずるずると引き摺りながら出口に向かうところを僕とアリエラさんは楽しんで見ていた。

「疲れた……」

ホラーハウスで体力を消耗した悠は、ベンチに座って空を仰いでいた。

「悠、モテモテだったな」

「からかうなよ」

今、僕たちがいるのは遊園地内にあるフードコート。

太陽は中天にさしかかり、皆も少し休憩したそうな様子だったので、ここらで昼食を摂ることにした。

フードコート端の大きなテーブル席で、場所取りとして残った僕と悠は、背もたれに体重を預けて空を眺めていた。

他の皆は、フードコートを囲む店舗へ食べ物を買って行った。僕たちの分も頼んであるため、今は待っているだけだ。

すると後ろからアリエラが気配を消して足音を立てないように近づいてくる。

僕は気が緩んでいても生物の“気”を感じ取ることができると、たとえ気配を消してもすぐに分かる。

「物部クン、大島クン」

悠は気付いてないようで、急に視界から現れたアリエラさんに驚く。

「つと……もう戻って来たのか？ 足音を消して近づくななんて、趣味が悪いぞ」

悠は少し動揺しながら文句を言う。

「ふふ、少しキミたちをびっくりさせたくてね。それにしても大島クンは驚いてないところを見ると気付いてたのかい？」

「まあな、気配がほんの僅かだけ出てたから誰かは分かってたよ」  
気配を感じ取らせないで近づくと存在は全王様や神官王様、そして他の”世界神”ぐらいただ。

「流石だね、やっぱりキミは只者ただものじゃないね」

「ああ、それにしても他の皆は遅いな。結構時間が経った筈だ」

「皆はキミたちの昼食を何にするかで揉もめてたから、ボクだけ先に戻って来たんだ」

アリエラさんはそう言っただけで僕の隣に腰を下ろす。その手にはホットドッグが握られていた。

フードコートに視線を向けると、確かに深月さんたちが何やら議論している姿を見つける。

「今のは驚いた。気配の消し方といい、前に見た体術といい、アリエラも只者じゃないな。それに宮沢所長の養女だって言うし……その辺のこと、少し聞いてもいいか?」

昨日からずっと気になってたようで、悠は緊張しながら彼女に問いかけた。

「——いいよ。物部くんにはレンと仲良くなってもらうためにも、教えておいた方がよさそうだからね」

アリエラさんはホットドッグを一口齧かじってから頷き、話し始めた。

「ボクが生まれたのは争いが絶えない国で、人間同士の争いに巻き込まれてボクの大切な人たちは命を落とした。その魂を喰くらっていったのが、イエロー・ドラゴン——」  
「黄」のフレズベルグ。当時のボクはフレズベルグのことをすごく憎んでね、とある組織に身を寄せたんだ」

「とある組織?」

ここまで聞き、原作通りの生い立ちだと知る。

「ムスペルの子ら」みたいな、ドラゴン信奉者団体とは真逆の主張を持つ組織——いわゆる、ドラゴン排斥者団体ってやつだよ。結構過激な組織でさ、戦闘技術とかそこで習った」

「なっ……けど、そういう団体は確か”D”のことも敵視してなかったか?」

悠は驚きながらも疑問を覚え、アリエラさんに質問した。

「うん……だからまあ組織にいられたのは、ボクが上位元素生成能力に目覚めるまでだったよ。」D”になったボクは下手したら殺される場所だったけど、温情で闇ルートを通じて宮沢健也に売り払われたんだ」

「ま、待て、それって人身売買じゃないか！」

アリエラさんはさりりと説明したが、「D”の売り買いは紛れもなく犯罪だ。悠が驚くのも当然の反応だ。」

「そう——当時の彼は、エーテルウインド霊顕粒子の論文が原因で学会を追放されていてね。個人で研究を進めるために、非合法な手段で”D”の研究サンプルを手に入れようとしたのさ。彼は数々の特許で莫大な財産を持つてたらしいけど、それをほぼ使い切ったらしい」

肩を竦め、呆れ混じりに言うアリエラさん。

「そうになると養女は単なる建前で、本当は実験台にされたということか」

「まあね、でも彼はすごく丁寧に接してくれて、ボクの嫌がることは何一つしなかったよ。最初はいい人かとも思った。けど——”妹”として紹介されたレンへの態度を見て、その考えが間違いだって気付いたんだ」

声に僅かな怒りを滲ませ、アリエラさんは言葉を続ける。

「彼がボクを丁重に扱ったのは、自分の研究に必要なことから……研究とは関係ないレンへの態度はそっけないものだったよ。レンと仲良くなるほど、彼に対して怒りは募ったけど……生活は不自由なかつたし、それなりに満たされていた。でも——」

そこでアリエラさんの表情が翳った。

「レンちゃんも、上位元素生成能力に覚醒したんだな」

「うん、そしてそのことを知った彼は、こう言った。サンプルが二人いるなら、多少無茶をしても構わないか——って」

「な……アリエラかレンのどちらかを、使い潰すつもりだったのか？」

アリエラさんの言葉を聞いた悠は、驚いた表情を浮かべ、彼の”気

”から怒りを感じた。

「たぶんね。だから、ボクはレンを連れて逃げ出し——警察に保護を求めた。その結果、彼は人身売買と”D”の隠匿によって身柄を拘束され、ボクたちはミッドガルに送られたんだ。でも……彼は結局、法で裁かれることなく今の地位に就いた」

「どうして……」

悠は納得ができずに呟くと、アリエラさんも不満を隠さずに述べた。

「彼の研究がアスガルキとって価値あるものだったんだろう。もしかしたら研究内容を材料にした司法取引が行われたのかもしれない。詳しいことは分からないけど、彼は檻おりの中にいるべき人間なのは確かさ」

軽蔑けいべつの表情で吐き捨てるアリエラさん。

「アリエラさんは、彼を恨んでいるのか？」

「——ボク自身は、彼に何かされたわけじゃない。彼が組織から引き取ってくれなかったら殺されていたかもしれないし、恨むのはお門違いだろう。ただ、レンのことは怒ってるよ。レンがほとんど喋らなくなったのは、彼のせいなんだから」

アリエラさんは深月さんたちと一緒にいるレンちゃんへ視線を向け、はつきり告げる。

「どういうことだ？」

「レンのお母さんは、ずいぶん前に亡くなっているんだ。ボクが引き取られるよりも、ずっと昔にね。それ以来——彼は研究にのめり込んで、レンが話しかけても”うるさい”と相手にしなくなったらしい。そんな時間が長く続いて、レンは喋ることを諦めてしまったんだと思う」

「喋ることを、諦めた……」

それはとても悲しく、やるせない言葉だった。

「けど、レンも本当はお喋りしたいはずなんだよ。テキストでは、あんなに饒舌じょうぜつなんだからさ」

「——そうだな」

悠は苦笑して頷く。

レンちゃんが端末に打ち込む文章は、いつも遠慮がなく、口が悪いとすら思えるほどだ。それだけ彼女の内側には、外に出たい言葉が溢あふれているのだろう。

「レンは”うるさい”って叱られることに怯えてる。だから物部くんはそんなことを言わないって、安心させてあげたらいい。大丈夫、大島くんにも心を開いたんだからきつとできるよ」  
明るく笑ってアリエラさんは断言する。

「そう言ってくれるのは嬉しいが……なんだか落ち着かないな。アリエラにはもつと厳しいことを言われるかも思ってた」  
悠は照れくさそうに頭を搔かく。

「これまで一緒に過ごして、戦って——色んなキミを見てきた上での評価だよ。まあ、キミがミッドガルに来たばかりの頃は色々言っただけど、今は信頼してるってことさ」

アリエラさんも少し恥ずかそうに視線を逸らし、ホットドッグをまた一口齧かる。

「あ、そうだ。二人とも、一口食べるかい？」

アリエラさんは食べかけのホットドッグを差し出した。

「ん、いいのか？」

「うん。深月たちが遅くて、お腹減ってきただろうし」

「じゃあ、一口だけ」

僕はアリエラさんの好意に甘え、一口だけホットドッグを齧る。

ソーセージの熱い脂とケチャップの甘さ、マスタードの辛み、パンの柔らかな食感が口の中に広がる。

僕に続いて悠もホットドッグを齧る。

「ん、美味しいな」

「ああ、そうだな」

「ならよかった」

僕たちの感想にアリエラさんは微笑む。

「でも、アリエラはこういうの嫌がるかと思ってたよ」

「……どうして？」

悠が口を付けたホットドッグを頬張り、アリエラさんは首を傾げた。

「いや、だって間接キスだろ？」

そう言った途端、アリエラさんは体を硬直させる。そして見る見るうちに、彼女の顔が真っ赤になっていった。

「ぼ、ボクはそんなつもりじゃ——」

その反応を見て、彼女が単に気付いていなかったただけだと悟る。

わたわたと慌てるアリエラさんだが、既にホットドッグは口の中。アリエラさんは顔を火照ほてらせたままホットドッグを咀嚼そしゃくして呑み込み、僕たちを半眼で並んだ。

「……二人とも、分かった上で食べたんだ？」

「僕は気にしないけど、悠は意識してたんだ」

「ま、まあ……アリエラが気にしてなさそうだったから、俺も意識しない方がいいかと思ったけど……」

「だ、だったら最後まで指摘しないで欲しかったよ」

指にちよつとだけ付いたケチャップを舌で舐めたり、アリエラさんは赤い顔で呟いた。

二人のやり取りを見ているとからかいたくなる。

「ごめんね、二人がイチャイチャしてるのに邪魔者がいて」

「な……」

僕は微笑みながらからかうと二人は真っ赤な顔で僕を見る。

「ち、ちがうよ、ボクはイチャイチャなんて……」

「じゃあなんで動揺してるんだ？」

「そ、それは……」

彼女の反応を見ていると楽しくなる。

「じゃあ僕は皆が遅いから様子を見てくるよ。あとは若いお二人で」

「お、おい、亮！」

そう言って僕は席を立てて深月さんたちの所へ向かう。

戻ってくるまで二人は頬を赤く染めたまま沈黙していたようだ。

## 二人目のお兄ちゃん

昼食の後は再び皆でアトラクションを回り——あつという間に楽しい時間は過ぎていく。

気づけば太陽は傾き、空は茜色あかねいろに染まり始めていた。

「あまり帰りが遅くならない方がいいでしょうし、次で最後にしましようか」

深月さんは園内の中からくり時計を見上げ、そう提案する。

「だったら、締めはやっぱりあれだよね」

アリエラさんが指差すのは、園内でジェットコースター以上の存在感を放つ大観覧車。

悠の袖をぎゅつと掴つかんでいたレンちゃんは、顔を輝かせて頷いた。見上げるのにも首が痛くなるほどの大きさだ。

さすがに一つのゴンドラに全員は乗れないため、四人ずつに分かれることになる。

「じゃあ、僕と悠、レンちゃん、アリエラさんで先に乗るか」

僕が提案すると、残る深月さん、リーザさん、フィリルさん、ティアちゃんは聞き分け良く頷いた。

「うん、いつてらっしやいなの！」

ティアちゃんはそう言っ僕たちに手を振る。

すると悠は何か違和感を感じたのか、眉を僅わずかに寄せてティアちゃんたちに視線を向ける。

実は悠がレンちゃんとコミュニケーションを測っている間に僕たちは大観覧車で二人きりにしようと話し合っていた。

ちなみに提案したのはリーザさんで、ティアちゃんが駄々をこねないのはそれが原因である。

一番ごねそうなティアちゃんが素直に見送ることに違和感を感じたのだろう。しかし悠はそれ以上気にした様子を見せずにレンちゃんと共に回ってきたゴンドラに乗り込んだ。

その瞬間、僕たちの作戦に気付いた悠はすぐに振り向き、僕とアリエラさんはゴンドラの外で手を振った。



「おい、まさか——」

悠は驚いて問いかけてくるが、僕は悪戯いたずらっぽく笑みを浮かべる。

「最後ぐらい、二人きりで楽しんでこい。レンちゃんもそろそろ、僕とアリエラさんがいなくても平気だろ？」

「ん！ んっ！」

レンちゃんは焦った様子で首を横に振るが、係員によってボタンと扉に閉じられ、ゴンドラが地上を離れて登っていく。

アリエラさんは何も言わず「二人頑張つてね」という表情で悠とレンちゃんを見送った。

「計画通りだな。二人が戻ってくる頃には仲良くなっている筈だ」

「そうだね、後はボクたちで乗ろうよ」

そう言つてアリエラさんはゴンドラに乗るように促うながす。

しかし僕にはやる必要があるため、首を横に振る。

「いや、僕はやめとくよ。ちよつと知り合いに会いたいからそこに行つてくるよ」

「そうですか、じゃあ私たちで乗りましょう」

深月さんがそう言ふと皆はゴンドラに乗ろうと近づくが、ティアちゃんはもじもじしながら首を横に振る。

「ティアちゃん、どうしたの？」

イリスさんがティアちゃんの様子に気付いて問いかけると、ティアちゃんは恥ずかしそうにスカートを押しさえる。

「ティア、ちよつとトイレに行きたくなつて……」

「そっか、じゃあ僕が付いていくよ。皆は先に乗つといて」

「分かりました。ではティアさんをお願いします、オオシマ・リョウ」

リーザさんがそう言つて僕たちを見送り、ティアちゃんを連れて近くのトイレへと向かった。

ティアちゃんが女子トイレに入っていくと、近くにあったゴミ箱に中身が空っぽの小さなボトルを捨てる。

実はフードコートで昼食を取っている時、僕はティアちゃんの飲料

に尿が早く出やすくなる薬品を気付かれないように入れた。

時間帯を計算して、皆がゴンドラに乗るタイミングでトイレに行かせるようにタイミングを見計らって混入させた。

理由として、僕はこれから二人の少女たちにティアちゃんを会わせるのが目的だからだ。

そのためどうしても皆の目を盗んで会わせるしかなかった。気を探ると、あの二人には待つてるように言っておいたのでその場を動いていない。

しばらくしてティアちゃんがトイレから出てきた。

「お待たせなの！」

スツキリした表情を浮かべるティアちゃんに聞く。

「ティアちゃん、これから知り合いに会わなくちゃいけないから一緒に付いてきてくれないか？」

「うん、分かったの」

ティアちゃんはそう答え、僕たちは“鏡の城”へと向かう。

正直こんなことをして罪悪感があった。ユグドラシルを倒すためとはいえ、手の込んだことをするのはどうしても気が引けるが、悠の記憶を取り戻すためにはこうするしか方法がなかった。

そう思いながら足を運び、“鏡の城”に着いて中に入る。

内部は鏡張りの廊下になっており、向かい合わせの鏡が無限の虚像を作り出している。

そのため奥行きや広さは把握できないが、二人の気を感じ取っている。ぶつからないように奥に進む。

床と天井も鏡張りの通路を歩いていると、キーリとジャンヌさんを見つけた。

「よ、待たせたな」

「あら、遅かったわね」

僕が声を掛けると二人は気付いてこちらに視線を向けた。

「き、キーリ……」

ティアちゃんは驚き、僕と彼女たちを交互に見る。

「ごめんねティアちゃん。実はキーリが君と話しがしたかったみ

「ただだから連れてきたんだ」

「ティアと……？」

僕がそう告げるとティアちゃんは首を傾げる。

「ああ、ティアちゃんの角のことだね」

そう言っつて僕はティアちゃんの背中を押してキーリに近づける。

キーリは状況がいまいち飲み込めないティアちゃんに微笑む。

「ティア、あなたに教えなきゃいけないことがあるの」



俺はレンにユグドラシルの取引について全て話した。リヴァイアサンとフレスベルグとの戦いで記憶を代償に兵器を手に入れたこと。フレスベルグ戦で今の自分が三年前の記憶が失っていること。ユグドラシルから送られる兵器のデータにウイルスデータが含まれていて操れたこと。亮がこの世界の神であること以外全て話した。

なぜ話したかと言うと、レンのことを知るには俺のことを知ってもらわなきゃいけないと思ったからだ。

レンはずっと俺の話を聞いてくれた。全てを話すと彼女は拳骨<sup>げんこつ</sup>を握って俺の頭をコツンと小突いた。

「……レン？」

「んー」

叱責するような声を上げ、レンは個人端末を取り出して素早く文字を打ち込み、俺の方に翳<sup>かざ</sup>す。

「——もつと早く言え。こんなところで遊んでいる場合じゃない。急いで戻って、上位元素<sup>ダークマター</sup>の受け渡しを練習しよう……」

俺が表示されたテキストを読み上げると、レンは何度も首を縦に振った。

「怒ってないのか？」

驚いて問いかけると、レンは再び文字を打ち込む。

——怒っているけど、それどころじゃないから。

画面の文字を読み、俺は肩から力を抜いた。

「ありがとう。レンは優しいな」

「っ……」

俺が礼を言うと、レンは頬を赤くして視線を逸らす。

「上位二元素の受け渡しを早く成功させたいのは、俺も同じだ。けど亮が言った通り、今必要なのは俺とレンのコミュニケーションだと思う。だからここでもう少し、話ができると嬉しい」

俺たちを乗せたゴンドラは、もうすぐ観覧車の一番高い場所に差し掛かるうとしていた。まだ時間はある。

「ん……」

レンは自分を落ち着かせるように深呼吸をし、考えながら端末に文字を打ち込んだ。

——分かった。何か聞きたいことがあれば聞いて。わたしも全部、本当のことを言う。

真剣な表情で端末を翳したレンは、そう提案してくれる。

「じゃあ——遊園地に来たかった理由を、教えてくれないか？」

最初訊ねた時には拒絶された。恐らく言い難いことなのだろう。

けれどアリエラすら知らなかったその理由を知ることが、レンを理解すふ取っ掛かりになるような気がしたのだ。

レンは一瞬表情を硬くしたが、こくんと頷いて端末に文字を入力し始める。

そして俺に向けられた端末の画面には、こう書かれていた。

——昔、お父さんとお母さんと一緒に遊園地へ行ったことがあって、すごく楽しかったから。

「そういうことだったのか……」

普通に考えれば、言いよどむ理由ではない。けれどレンの母親は既に亡くなり、今の宮沢健也は研究にのめり込んでレンを蔑ろないがしにしている。

誰かに理由を話せば、自分自身も過去と現在の落差を意識せざるを得ない。それが辛くて、レンは答えることを拒んだのだろう。

「レンのお母さんは、どんな人だったんだ？」

——明るくて、さばさばしていて、気弱なお父さんを引つ張り回していた。

レンが打ったテキストを読み、俺は苦笑する。

「男勝りな人だったんだな」

俺の言葉にレンは頷き、テキストで答えを返した。

——うん。お姉ちゃんとお兄ちゃんに少し似てた。

「お姉ちゃん？ それにお兄ちゃん？」

俺が戸惑って聞き返すと、レンは慌ててテキストを書き直す。

——アリエラと亮お兄ちゃんのこと。

「ああ、そうか。レンはアリエラをお姉ちゃん、亮のことは亮お兄ちゃんって呼んでるんだな」

「っ……」

するとレンは顔を赤くして、俺のひざを無言でぽかぽか叩いた。

「いや、別に恥ずかしくないって。レンにとって、アリエラは本当の家族だって意味で、亮のことも同じように思っているってことだろ？」

問いかけるとレンは赤い顔で小さく頷く。

——うん。アリエラとは普通に話せるし、亮お兄ちゃんとは二人きりの時に話してる。

レンが翳した端末の文字を読み、俺は微笑んだ。

「羨ましいな。俺もそれぐらい仲良くなれたらいいんだが」

「……………」

俺の言葉を聞いたレンはこちらをじっと見つめてくる。

「どうしたんだ？」

訝<sup>いぶか</sup>しんで訊ねると、レンは手にした個人端末に視線を落とした。

それから一分ぐらいかけて、ゆっくりテキストを打つレン。

何か伝えたいことがあるのだろうか、俺は黙ってレンが文章を書き終えるまで待つ。

「……………ん」

そしてレンが俺に見せた端末の画面には、長い時間を掛けた割に、

とても短い文章が表示されていた。

—— 亮お兄ちゃんみたいに、悠お兄ちゃんって、呼んでもいい？

「え……………」

驚いてレンの顔を見ると、彼女は耳まで真っ赤にして、顔を伏せる。

「んー」

だが端末は降ろさず、俺に答えを促<sup>うなが</sup>してくるレン。

もしかしたら、これがレンにとって最大限の歩み寄りかもしれない。だったら断る理由はなかった。

「—— ああ、いいよ」

俺の返答を聞いたレンは、端末をぎゅつと胸に抱き、真っ赤な顔で俺を見つめる。

「……………」

何か言いたげにレンは口をぱくぱくさせるが、声は出ない。

(まさか……………)

その様子を見て、俺は気付く。

先ほどレンは、お兄ちゃんと呼んでもいいかと訊<sup>たず</sup>ねた。それは、つまり——。

「……………ゆ……………」

レンの吐き出す息の中に、微かだが音が混じる。

「ゆ……………ゆう……………」

震える声が、言葉を紡ぐ。

「……………ゆ……………ゆうお……………」

絞り出すように、小さな音を繋<sup>つな</sup>いでいく。

彼女の葛藤と緊張が伝わってきて、俺の鼓動も速くなっていくのを感じた。

空を遊覧するゴンドラの中、痛いほど空気が張りつめ——。

「……………悠……………お兄、ちゃん」

か細く、風音に紛れてしまいそうな声が、おれの耳へと届く。

その瞬間、何とも言えない喜びと気恥ずかしさで胸がいっぱいになった。

「お、おう」

緊張が伝染していた俺は、上擦った声で応じる。  
するとレンはほっとした表情になり、体から力を抜く。

「——悠お兄ちゃん」

そして今度は、先ほどよりも自然な口調で同じ言葉を繰り返すレン。  
ン。

「おう」

俺も二度目は少し余裕を持って答えることができた。

レンは嬉しそうに顔を緩め、柔らかな笑みを浮かべる。

「悠お兄ちゃん」

「ああ——これから俺も、レンのお兄ちゃんだ」

「ん」

こくんお領き、レンは機嫌よさげき足をパタパタ動かした。

これからレンは繰り返し、繰り返し、俺を「悠お兄ちゃん」と呼び、俺はその度に照れ臭さを覚えながら返事をする。

レンが口にしたのは「悠お兄ちゃん」という言葉だけで、俺たちのやり取りは会話とは呼べないものだったが——言葉を交わすほどに、レンとの距離が縮まっていく感覚があった。

そうこうしているうちにゴンドラは一周し、地上へと戻ってくる。

「レン」

先にゴンドラから降りた俺は、レンに手を差し出した。

「ん」

レンは少し躊躇<sup>ためら</sup>ったが、今度さ俺の袖ではなく手を握ってくれる。

俺の手を支えにして、ぴよんとゴンドラから降り立ったレンは、頬を染めて俺にこう言った。

「悠お兄ちゃん……ありがとう」

◇

キーリはティアアちゃんと話し終えると今回のユグドラシル討伐に

ついて口を出してきた。

「僕たちはユグドラシルの精神破壊を計画してるが、今のままじゃどんなに頑張っても失敗するな。キーリもそう思ってるだろ？」

「ええ、あなたたちよりもずっと前から、ユグドラシルを倒す方法を模索してきたからだから」

「ユグドラシルは、上位元素ダークマターに干渉できるからな。お前の母親——」

「キーリはヴリトラの上位元素によって作られた存在であることは知っている。事情を知らないティアちゃんやジャンヌにとっては、上位元素生成能力を”D”に与えた母なる者という意味に聞こえるが——キーリは本当の意味でヴリトラの娘なのだ。」

「そうよ。二十五年前、お母様はユグドラシルから逃れるために姿を消したの。それがヴリトラ消失の真実よ」

「予想はしてたよ。ということは、黒のヴリトラはユグドラシルから隠れながら上位元素ダークマターで作った端末で架空武装みたいなものなんだな」

「ええ」

「最初から知ってはいたが、改めて聞くと”世界神”の僕でも驚くほど便利な能力だ。」

「ついでに言うと、私はお母様とヘカトンケイルを繋ぐ中継点のようなものだった。お母様とリンクした私の竜紋リゅうもんを介して、ヘカトンケイルはその場に現れたり、上位元素を補充することができるの」

「ミッドガルにヘカトンケイルが現れたのもお前を介して出現させたということか」

「その通りよ。だけどお母様は、私をフレスベルグのつがいにするため、生体変換で竜紋を書き換えてしまった。だからもう、私を中継点にはできないわ。しかも見初められたのは私じゃなかったんから、馬鹿なことをしたわよね」

「そうやってキーリは肩を竦すくめる。」

「エルリア公国でフレスベルグに見初められたのは、キーリではなくファイリルさんだ。自らを”紛い物”と呼ぶキーリは選ばれなかった。」



その時、彼女はひどく傷ついた様子で今も微かな“痛み”が見て取れる。

「私とお母様のリンクは切れているから、もう一度竜紋を書き換えることも不可能。こうして私は自由になれたけど、それまでずっとお母様の指示で動いていたもの。天敵であるユグドラシルを何とかするっていうのも、私に与えられた命令の一つだったわ」

キーリは強い口調で告げた。

「今のままじゃユグドラシルの干渉を防げない。すぐに解析されて中和される。仮に攻撃が成功してユグドラシルの精神を破壊できたとしても、また新しい中枢意識を構築するだけか」

「ええ、作戦を成功させるにはティアの力が必要よ」

そう言ってキーリは一瞬だけティアの方に視線を向けた。

「ありがとう、参考になった」

「何が参考になった、よ。最初から知ってたみたいじゃない」

「はて、何のことやら」

冗談っぽく笑い、ティアちゃんを連れて“鏡の城”の出口に向かうとするとキーリは呼び止めた。

「——あ、待って、あともう一つあるわ」

僕とティアちゃんは足を止めてキーリとジャンヌの方を向く。

「何だ？」

「あなたたちがいる研究所……ちよつと異常よ。他の施設に比べてセキュリティの厳しさも群を抜いているし、施設管理者の権限でロックされている区間が多すぎるわ」

「そうなのか？」

あの研究所のことは知っているが、知らないふりをして聞き返す。

「ええ、あそこの所長は、かなりの研究区間を一人で占有しているということよ。きな臭い感じがするから、気を付けなさい」

「……分かった、悠たちにも伝えておく」

そう言っ僕たちは再び足を動かして“鏡の城”を後にする。

宮沢健也が所長を務める研究所、あそこのことはほとんど知らないが、一っだけ知っている。

研究所の地下深くにある生命体の”気”を感じ取っていた。今後、その生命体がこれから悠たちを大きな事件に巻き込むことも知っている。

僕たちは悠たちがいる大観覧車へと向かっている。ティアちゃんには悪いことをしてしまった。

しかしユグドラシルを倒し、悠の記憶を取り戻すにはこの方法しかなかった。

「ごめんね、騙すつもりはなかったけど……嫌だった？」

僕が問いかけるとティアちゃんは首を横に振った。

「ううん、大丈夫なの。キーリの話を聞いたときは驚いたけど、ティアはちよつと怖いなの……」

「そうだな。自分が別の何かになるのは怖いけど、決めるのはティアちゃん自身だ。たとえティアちゃんが人間じゃなくなっても僕や悠、皆は嫌いにならないさ。それだけは保証する」

「っ！ うん！ ありがとうなの！」

僕の言葉を聞いたティアちゃんは笑みを浮かべる。

「よし、じゃあ皆にキーリが言ってたことを伝えよう。ユグドラシル討伐のヒントになるかもな」

「うん！」

僕とティアちゃんは悠たちの元へ戻り、キーリから聞いたことを伝えた。

## 研究成果

悠たちにキーリと話したことを伝え、僕たちブリュンヒルデ教室の生徒一同は、寄り道することなく真つ直ぐ研究所へと戻った。

その際、余計な負担を掛けてしまうと思つた僕は、ティアちゃんの色については話さず、キーリと二人で何かを話していたことを伝えた。

そして篠宮先生を交え、キーリから聞いた話をまた最初から伝えた。

「ヴリトラ消失の理由や、ヘカトンケイルの正体——とても興味深い話ではありますが、証拠は何もありません。鵜呑みにするのは危険ですね」

改めて情報を共有した後、深月さんは慎重な意見を述べた。

場所は以前と同じく深月さんの部屋。僕はベッドの上に座つて話を聞いていた。

「——けれど、キーリの話を無視することもできん。ジャミングの有効性を検証して欲しいとニブルに依頼していたのだが……先ほど返答があり、キーリが言った通りの結果になった。ジャミングの効果はほんの一瞬で、すぐ無効化されてしまうらしい」

重い声で応じるのは篠宮先生だ。今日、研究所に残っていた彼女は、ニブルとのやり取りを行っていたのだろう。

「では……今のところ、接近して攻撃を行うことは不可能ですね。それにキーリさんの言葉が本当なら、作戦が成功してもユグドラシルは倒せないということになりますわ」

リーザさんが張りつめた声で呟く。

「でもでも、無理かもしれないからって何もしないわけにはいかないよ！」

必死な様子で声を上げたのはイリスさん。

悠の状態を知っているがゆえに、焦っているのだろう。

「……イリスの言う通り。今は、やれることをやるしかないと思う」

フィリルさんが落ち着いた声でイリスさんに同意した。

「となると、やっぱり現状は物部クンとレンの連携を強化してくしかないんじゃないかな」

「そうだな、今日一日でずいぶん仲良くなったみたいだし、一度ここで協力して架空武装を作ってみたらどうだ？」

アリエラさんの言葉に同意した僕は、架空武装を作るように言うと、レンちゃんは悠の前に近づく。

レンちゃんは少し緊張しながらも悠を上目遣いで見上げた。

「じゃあ、やってみるか」

「ん」

悠が話しかけると、レンちゃんはこくと頷いた。

悠は手に装飾銃型の架空武装を生成し、レンちゃんが手を添える。

レンちゃんの上位元素データマターが流れ込んだようで、悠の架空武装が膨張し、形が歪ゆがむ。

他人から大量に送られてくるエネルギーを瞬時に使うのは相当な技術と鍛錬が必要になってくる。もし遊園地に行く前だったら必ず失敗していただろう。

「っ……」

しかし悠はレンちゃんから送られてくる上位元素の量に驚いたものの、意識を乱さずに集中している。

その証拠に、不自然に歪んでいた悠の架空武装の形が修正されていき、どんどん大きくなっていく。

仲良くなるというのは、互いを知るということ。

遊園地で悠はレンちゃんの想いの伝え方を知り、レンちゃんは悠の想いの受け取り方を知った。

信頼できるからこそ頼られ、時に頼ることができる。そうでなければ他人の力を制御することは不可能。

まだ二人は”何となく”のレベルではあるが、大観覧車から戻った二人は本当の兄弟に見えるほど仲良くなっていた。

これならいけると誰もが思ったが、上手くいきかけて気持ちが緩んでしまったのだろう。

悠の架空武装は五倍ぐらいの大きさに膨張したところで、細かな泡となつて崩壊してしまつた。

「ああ……惜しかったね。でも、たった一日ですごい進歩だと思ふよ」

失敗してしまつたものの、アリエラさんはパチパチと手を叩いた。

「———そうですわね。あとは反復練習あるのみでしょう。何度も試すうちに、コツを掴めるはずですよ」

リーザさんも満足そうに頷く。バジリスク討伐の際、彼女はレンちゃんと上位元素の受け渡しを何度も練習していた。とりあえずスタートラインには立てたと判断していいだろう。

だが僅かに浮き立つ空気の中、ティアちゃんだけは一人黙つて俯いていた。

「ティア？」

悠は気になつて声を掛けると、ティアちゃんはびくつと驚いた様子で顔を上げた。

「え、ユウ……どうしたの？」

「ああ、いや———ちよつと様子が変に思えてさ」

悠の言葉を聞いたリーザさんもティアちゃんに視線を向け、眉を寄せる。

「そういえば、キーリさんはティアさんと二人で話をするために遊園地に来たんですわよね。いったい何の話だったんですの？」

「……………」

問いかけられたティアちゃんは、迷うように視線を彷徨させた。

キーリと話した内容、それを今は考えているのだろう。

僕は少し後悔している。キーリと会わせるためにフードコートで買ったティアちゃんの飲料に細工したことだ。

原作では、悠たちの隙についてジャンヌがティアを強引に攫つて“鏡の城”で二人だけ話す展開になる。

しかしユグドラシルを何とかするにはキーリたちの協力が必要と判断したため、僕は穏便に済ませるために手を打った。

間違つたことをしている自覚はあるが、僕が心配しているのはその

先の未来についてだ。必ず起こる戦いのためには必要なことだと思っている。

「言いにくいことなら無理に話さなくてもいい。けど、もし何か困っているならいつでも相談してくれ」

「……わかったの」

悠は慌てて口を挟み、ティアちゃんは小さな声で返事をして頷く。リーザさんは溜息ためいきを吐き、「絶対に約束ですわよ?」と念を押した。「では、もう夜も遅いですから、今日は解散にしましょう」

今の段階でこれ以上議論できることはない判断したのか、深月さんは作戦会議の終了を告げる。

そうして僕たちは深月さんの部屋を出て、各々の部屋に戻った。

僕に宛てがわれている客室は、深月さんの真向かいにある悠の部屋の隣。

室内の家具はベッドと机、クローゼットのみ。あとは浴室とトイレだけしかないシンプルな部屋だ。フィリルさんの故郷、エルリア公国の王室で泊まった時の部屋に比べてかなり狭い。

僕はベッドに腰を下ろして先端に丸い球体のある杖を取り出す。

昨日から”世界神”の仕事をしてないため、球体に空間の歪みがある場所を映し出す。

歪みがある場所は五ヶ所。この世界の人間は誰も気付いておらず、歪みに触れて暴走した生物はいない。

僕は球体に手を翳かきして空間の歪みがある場所に”神の気”を注ぎ込む。

歪みは徐々小さくなり、数秒して消えていく。

空間の歪みは世界に起こる自然現象。世界のバランスが保たれている証拠で、十二の世界に一人ずつ担当している”世界神”だけが浄化することを許されている。

一ヶ月くらい前、歪みが発生してから突然消えていくという事態が起こり、学園祭二日目でフードを被った男が歪みを浄化していることを知った。

僕は第七世界の”世界神” 八重さんと共にフードを被った男がい

たサハラ砂漠に行ったが、既に移動しており誰もいなかった。

そしてミッドガルに戻る途中、“神器”らしき力で誰かに操られた第一世界の“世界神”義晴によって突然襲い掛けられた。

何とか義晴の正気を取り戻したが、本当は何をされたのか覚えておらず、誰に操られたかすらも分からなかった。

恐らくフードを被った男が僕たちに気付いたのか、邪魔されないように義晴を操ったのだろう。

その際、義晴は“神器”によって操られており、今回の事態は神の誰かが仕組んだと皆は議論している。

しかし全員アリバイがあり、学園祭以降フードの男は今も姿を現してはいない。

他の“世界神”はフードの男について調べているが、何も分かっていない。しかし歪みは通常に発生しており、消えることはなくなった。

僕もフードの男を調べたいが、今はユグドラシルを何とかするのが先だ。この世界ですることが無くなった僕は神々が住む世界“神界”に向かい、雑務の仕事をすることにした。

数日は書類仕事をしてないため、山のように溜まってたためフードの男を調べることはできない。

急な事態が起こるまで書類とにらめっこする日々が再び訪れた。



俺を乗せたエレベーターは自動的に地下四階まで下降し、扉が開く。

そこは廊下ではなく既に広い研究所で、部屋の中央には白衣を着た宮沢健也の姿があった。

深月の部屋を出た俺はイリスの部屋へ向かい、イリスとリーザ、そして亮しか知らない秘密をレンに打ち明けたことを伝えた。

その後はイリスの”終末時間”カタストロフが上位元素を介さずに使用できることを気付かせないためにユグドラシルが電子干渉されない範囲で使うように言い聞かせた。

その後は他愛もない話をして時間を過ごしていると、端末から連絡が来た。

相手はレンの父親、宮沢健也で何故番号を知っているのかを聞くが、彼の立場ならすぐに調べ上げることが可能だと言われた。

宮沢健也は実験に協力して欲しいと一方的に言われ、俺は仕方なく承諾した。

「来てくれて助かるよ物部君」

人当たりの良さそうな笑みを浮かべる宮沢健也は、相変わらずのぼさぼさ頭と無精髭だ。

彼の姿を見て今日、アリエラから聞いたレンの過去を思い出す。

レンが喋ることを諦めたのは、宮沢健也のせいだと言う。

一言言っただけがやりたいが気持ちはあるが、彼を責めても効果がないことは既に分かっている。

でも、彼と関わることで、レンのために何かができるかもしれない。そう思い、俺は実験に協力した。

「俺一人を呼び出して、いったい何の用ですか？」

俺は警戒しながら問いかけた。

脳裏に過ぎるのはエレベーターに向かう際に亮から送られたメール。

亮はキーリから俺に研究所のことを伝えるように言われたようで、それをメールに送ってきた。

その内容は、この研究所が異常にセキュリティレベルが高く、区画の多くを最高責任者である宮沢健也が占有しているとのこと。

ここは地下四階。エレベーターの表示では地下五階までなので、かなりの深部と言える。

他の研究員の姿が見当たらないことを考えると、このフロアは彼だけが入れ場所の一つなのかもしれない。

「先ほども言ったように、個人的なお願いがあってね。私の研究



に協力して欲しいんだが……正式に依頼するとなればミッドガル側に研究内容を明かさねばならなくなる。それは少しかり都合が悪いんだ」

「そんな後ろ暗い研究への協力なんて、御免です」

依頼の内容を聞き、俺は鋭く切り捨てた。予想はしていたが、やはりろくでもない用件だったようだ。

「そう結論を急がないでくれ。これは君にとつてもメリットがある提案なんだ。ユグドラシルとの決戦前に、”エーテルウインド霊頭粒子”の効果をきちんと確かめておきたくはないかい？」

「……どういうことですか？」

俺は疑問を隠すことなく、空々しい彼の笑みを見つめる。

「君の作り出す”エーテルウインド霊頭粒子”が、本当に魂を具現化させる力を持つのかどうか——それを私も確かめたいと思っているんだよ。だが、その検証実験に最も有用な検体は、人間の死体。しかし外部の色を窺うかがっているミッドガルは、そのような実験の実施や協力は認めまい。だから、ここで密かに試してみないかと提案しているのさ」  
「よど澱みない口調で宮沢健也は目的を語った。

「なっ……じゃあまさか——」

俺は絶句し、広い研究所を見回す。

「そう、人間の死体ならある。だが、そのことについて君が深く考える必要はない。君は指定された場所に”エーテルウインド霊頭粒子”を放ち、結果を見るだけでいい」

表情を変えずに、彼は平然と頷いた。

まあ、ここはアスガルの研究所だ。研究用のサンプルとして人間の死体があってもおかしくはない。身元不明の死体などを研究に流用するシステムもあると聞く。恐らく非合法なものではない……はずだ。

「効果を確かめないまま本番に挑むのは、リスクが大きいはずだ。失敗した場合、君だけでなく仲間たちも危険な目に遭う。そんなことは君も望まないだろう？」

考え込む俺に、彼は畳み掛けてきた。

「……………分かりました」

迷った末、俺は首肯する。彼の思い通りになるのは癪だが、”霊頭粒子”の効果を確かめられる機会を逃したくない。戦場ではほんのわずかな差が生死を分ける。亮がこの世界の神であるため頼りになるが、俺も少しでも力になれるのなら、断ることはできなかつた。

「おお、ありがとう。では早速始めよう。こちらへ来てくれ」

宮沢健也は顔を輝かせ、早足で研究所の奥へと向かう。そこには大きな隔壁があり、彼は横にあるパネルを操作し始める。

「……何が？」

彼に追いついた俺が問いかけるのと同時に、重い音を立てて隔壁が開き始めた。

隙間から白い靄と冷気が流れ込んでくる。

「見れば分かるさ」

彼は短く答え、隔壁が開き切るのを待たずに中へと入っていった。仕方なく俺も後に続く。隔壁の内側は、まるで冷凍庫の中だった。足元から這い上がる冷気に、俺は身を震わせた。

室内は研究室からの照明が射し込むだけで薄暗い。そして白い冷気が蟠る床の中央に、四角く細長い金属製の箱が置かれていた。

箱からはいくつものパイプが伸びており、それは室内の壁際に設置された良く分からない機器に繋がっている。

「あの箱の周辺に”エーテルウインド霊頭粒子”を散布して欲しい」

宮沢健也は部屋中央の箱を指差した。

「ひつぎ棺……？　じゃあ、あの箱の中には——」

「ああ、死体がある」

あつさりと答え、彼は俺を視線で促す。

説明すべきことはもうないという態度だ。

けれど俺は物々しい室内の様子に、警戒心を抱いた。

（あの棺の中に入っているのは、本当にただの死体なのか？）

実験に使用するだけの死体をこれだけ厳重な部屋に安置しておくということは、違和感がある。ここが研究サンプルの保管室だとして、棺が一つしかないのも不自然だ。

だが、これ以上のことを聞いても答えてくれそうにはない。

架空武装——ジークフリート

とりあえずやるしかないかと、俺は上位元素ダイクマターを生成し、それを装飾銃の形へと変えた。

ごくりと、彼が唾を呑みこむ音が耳に届く。

横目で窺うかがうと、彼は棺の方を凝視していた。

俺は今の彼に尋常ではない雰囲気を感じたが、そのまま架空武装の引き金を引いた。

「エーテル・フリット霊顕弾」

架空武装に用いている上位元素を全て込め、弾丸を撃ち放つ。発射と同時にジークフリートは消失し、放たれた弾丸は棺の上でエーテルウインド“エーテルウインド霊顕粒子”に変換された。

金色の粒子が弾け、棺の周囲を覆う。

するとそこに、微かな輪郭が浮かび上がった。

「おおっ!!」

歓声をあげる宮沢健也。

俺もその現象に息を呑みつつ、様子を見守る。

曖昧だったシルエットが次第にはつきりしてきて、背格好が分かるようになった。

女性……のようだ。

しかし細かな顔立ちが見分けられるようになる前に、金色の粒子は急速に薄まり、浮かび上がっていた像と共に消滅していった。

”エーテルウインド霊顕粒子”によって具現化された魂は、棺の中に眠っている人物なのだろうか。

けれど俺は棺に入っているのが誰か分からないため、中身を知っている宮沢健也の方に視線を向けるが、彼は目を見開いて歓喜に震えていた。

「ははっ……ははははははっ！ ああ……レナ、やはり私たちの推論は正しかったんだ。もっと、エーテルウインド“エーテルウインド霊顕粒子”の濃度を上げられるかい？ 具現化した魂とコミュニケーションを取れるか試してみたい！」

「い、いえ、今のが最大生成量なんで、これ以上は……」

彼の勢いに圧おされつつ、俺は答える。

「そうか……なら他の誰かに協力を——と、これはまだ難しいのだったね。いや、いい。ありがとう、今は魂の存在を確認できただけで十分だ。早く研究を完成させなければ……そうすれば、きつと……」

ぶつぶつと呟きつつ、彼は棺の方に熱の籠った眼差しを向けていた。

レナ、もしかしたらレンの母親なのかもしれない。アリエラがレンと家族になる前に亡くなったと聞いたため、もしかしたら棺の中に入っているのはレンの母親と推測する。

「本当にありがとう……研究への協力、感謝するよ。また何か依頼することがあるかもしれないが、その時もよろしく頼むよ」

そう言っつて彼は照明を消して部屋を後にする。

俺は急いで部屋を出て彼と共にエレベーターへと乗り込む。

その間、俺の右腕が僅わずかに震えていることに気付いた。何故かは知らないが、妙な胸騒ぎは収まらず自分の部屋に戻るまで警戒心を緩めることはなかった。

## 一方的な親子喧嘩

第七世界。高度な文明と高い技術を持つ人間たちが住んでいる世界。かつて第十二世界にも影響を与えたという噂もある。

高度な文明だけでなく、森や草原などの自然も存在しているため、人類が滅ぶことは方に一つもないと言われている。

この世界を担当している”世界神”は井上八重さん。僕と同じ年で神としては先輩である。

計画を立てて行動するのが大好きで、予想外の展開になってもまるで予知していたかのように対処して計画通りに事を進めることから、凜とした女神と呼ばれている。

僕はそんな彼女を心から尊敬している。他の”世界神”にも敬うが、八重さんほど仕事を忠実にこなす神ひとはいない。

正直”世界神”の中でこの神と戦うのは非常にやりにくい。ドラゴンボール超に出てくる殺し屋ヒットの時飛ばしと同じ能力を持っている。

時間を数秒先まで飛ばし、人体にだけ影響を与える衝撃波を放つなど特殊な能力を使用する。

しかし、その能力を使わないとしても戦闘力は”世界神”と互角。”世界神”は皆仕事の合間を縫って特訓をしているため、気を抜かなければ互角の勝負になる。

それに加えて時飛ばしを戦闘中に使用すれば”世界神”でも不利な戦いを強いられる。

僕を含めて他の”世界神”は対策をしているが、僕は正直やりたくない。孫悟空ほど戦闘に楽しさを抱いているわけではないため、なんとしてでも避けたいのだ。

もしこんな神ひとが敵だとしたらゾツとする。  
同じ”世界神”で良かったと心からそう思っているほどだ。

僕は今、八重さんと一緒に第七世界で仕事をしている。その仕事とは――。

「フハハハハハ！ どうした？ ”世界神”の力はこの程度か

！」

「く、まだまだだよ！ 亮ちゃん、行くわよ！」

「はー！」

僕たちは第七世界のマッドサイエンティスト、ドクター・チャンと彼が作り出した機械生命体を相手に戦闘を繰り広げていた。

ドクター・チャン。第七世界に文明を発展させた世界一の科学者で、第七世界の先代”世界神”と交友関係にあった科学者だ。

しかし彼は自分の私欲のためなら世界を滅ぼしても構わないほど身勝手な悪の科学者だ。

そのため、第七世界の先代”世界神”が辞めた後、今日まで機械生命体を作りだして世界を破壊している。

僕と八重さんは五年前から協力して、ドクター・チャンと戦ってきた。そして彼は自身で最高傑作と称している機械生命体を僕たちと戦わせている。

彼が作り出した機械生命体の名はモスコミュール。そう、ドラゴンボール超に出てくる第三宇宙の破壊神ミュールが操縦しているロボット、モスコと同じ外見をしている。

しかもその大きさはモスコの三倍はあり、手や巨大な眼から気功波を繰り出してくる。しかも頑丈で僕や八重さんが協力しても互角に渡り合えるくらい強い。

八重さんの時飛ばしから繰り出させる正拳突きも頑丈な体には通せず、人体にだけ影響を与える衝撃波も一切効果を発揮しない。

そのため僕たちは苦戦を強いられていた。

「フハハハ、私の最高傑作の前では手も足も出ないだろう！」

さっさとモスコミュールに倒されたらどうだ？」

ドクター・チャンは高笑いしながら問いかけてきた。

「私たち”世界神”を舐めないでくれるかしら？ 今までではほんの小手調べ。本気になれば手も足も出ないのは貴方たちよ！」

「ふん、強がりなみつももないのだよ。いい加減降参しろ！」

そうやってドクター・チャンは右手に持っていた杖を僕たちに向けてる。すると杖の先端からレーザービームを放ち、僕たちは回避する。

「八重さん、このままでは体力を使い果たしてしまう。早く決着をつけないとまずいぞ?」

「ええ、分かってるわ。けどモスコミュールの頑丈な体には私たちでも傷をつけることはできないのよ。どうしよう……」

僕と八重さんはモスコミュールの攻撃を避けながら話し合う。

正直、ここまで苦戦を強いられるとは思わなかった。僕は何とかしてモスコミュールを倒す方法を考えている。

臨機応変な対応ができる八重さんでもお手上げの状態をどうすることもできない。

しかし、僕の脳裏に親友の悠を思い浮かべる。あいつはどんな状況でも諦めない。自分を犠牲にしてまで体を張ったり、ドラゴン相手に突破口を見つけたってきた。その結果、イリスさんたちを救ってきたのだ。

僕がここで諦めれば悠たちに顔向けができない。なんとしてでもドクター・チャンの野望を阻止したい。

そう決意すると僕はドラゴンボール超のアニメを思い出す。力の大会で悟飯は第六宇宙のナメック星人相手に師匠のピッコロと協力して戦った戦法を思い浮かべる。

(この方法ならいける)

僕はそう思い、モスコミュールの手から放たれる気功波を回避しながら八重さんに近づく。

「八重さん、作戦を思い付きました」

「えっ!? どんな作戦なの?」

「実は……」

僕は悟飯とピッコロが使用した戦法を話すと、八重さんは次第に笑みを浮かべる。

「それいいじゃない! やりましょうよ、私がああ機械を引き付けるから亮ちゃんは気を貯めてね」

「分かった!」

返事をした僕は八重さんから十歩ほど離れ、杖を取り出してドクター・チャンが僕を認識できないように僕の周りに熱を生成する。

キーリが原作に使用した光の屈折と同じことをして、額に右手で人差し指と中指を当て気を集中させる。

「っ!? 第十二世界の世界はどこに行った!？」

ドクター・チャンは急に姿を消した僕に驚き、周りを見渡す。その間に気を貯めているため、時間稼ぎにはなる。

「はっ!!」

その間に八重さんは両手から気功波を繰り出し、モスコミュールも対抗して眼から気功波を放つ。

両者全くの互角で、誰かが気を抜けば相手の力を押し負けてしまうほど力は拮抗していた。

するとモスコミュールは使っていない右のアームで八重さんを捕まえ、左のアームから気弾を生成する。

「フハハハ、これで終わりだ!!」

ドクター・チャンは勝利を確信したのか、高笑いする。モスコミュールは生成した気弾をそのまま放とうとする。

しかし、僕は周りの温度を標準を戻し、人差し指と中指に溜めた気をモスコミュールに差した。

「待たせたな、覚悟はいいか? まかんこうさつぱう 魔貫光殺砲っ!？」

僕はあの台詞を口にしながらピッコロの技を放った。螺旋を纏ったような高速ビームはモスコミュールの頑丈な体を貫き、機械生命体の動きが止まる。

左のアームから生成された気弾は消えていき、八重さんを拘束していた右のアームは次第に開いてきた。

ドクター・チャンは高速で繰り出されたビームがモスコミュールの体を貫いたことに驚き声を荒げる。

「ば、馬鹿な!? 私の作り出した最高傑作が——」

「いけ! 八重さん!!」

「分かったわ! はあっ!!」

八重さんは力を振り絞ってモスコミュールに放っていた気功波の威力を上げた。

気功波はモスコミュールを飲み込み、爆発と共に姿を消した。ドク



ター・チャンも八重さんの攻撃を喰らい、気絶していた。

「勝った、勝ったよ亮ちゃん！」

「なっ!?!」

八重さんは勝利を確認した後、僕に勢いよく抱きついてきた。

体に当たる八重さんの豊かな双丘が強く押し付けられ、女の子の甘い香りびこう鼻腔をくすぐり、頭の中がぼうつとしてきた。

「や、八重さん？ ああ……」

「ありがとう！ 亮ちゃんの作戦が上手くいったよ！ 本当にありがとう！」

八重さんは感謝の言葉を言いながら顔を僕の体に埋める。

こうして僕たちの日常的にこなす仕事の一つをやり遂げ、ドクター・チャンは拘束して第七世界の刑務所に収容されることになった。

僕たちは神々が住む”神界”に戻り、仕事とプライベートの時間を両立しながら過ごしていき、僕は担当している第十二世界へと向かった。



翌日の朝食後、俺とレンは本格的にダークマター上位元素受け渡しの練習を始めた。

最初は上手くいかなかったが、リーザが俺たちのコーチ役として同行してくれたことで次第にコツをつか掴んでいき、レンの上位元素を扱えるようになった。

最初は架空武装が五倍ぐらいに膨張したところで限界を迎えていたが、太陽が天頂へ差し掛かる頃には数メートル規模の架空武装を作れるようになっていた。

俺は練習を合間を縫って宮沢健也の研究室へレンを連れて行くことにした。

今の状態でも、昨日より多量の“エーテルウインド霊顕粒子”を生成することは可能だ。

それを伝えれば、彼は研究に協力してくれる筈だ。

あれが本当にレンの母親であるレナさんの棺ひつぎなら、レンに見咎みとがめられることを避けようとするかもしれないが……断られた場合でも、それはそれで判断材料になる。

俺は覚悟を決めてレンについてきてほしいと伝えると、レンはじつと見つめて小さく頷いてくれた。

その日の夜、夕食後——俺は内線で宮沢健也に連絡を取り、訪問の許可を得た。

そしてレンを部屋まで迎えに行ってから、以前と同様にエレベーターへ乗り込み、地下四階にある研究室へと向かう。

「昨日と同じ実験を、レンと一緒にやらせて下さい。今日は昨日より多くの“霊顕粒子”を生成できるはずです」

宮沢健也は研究室の前で待っており、俺は要件を伝える。

「もちろんオーケーだ。さあ、こちらへ来てくれ」

彼は快諾かいだくし、俺たちを研究室奥こ隔壁前まで先導した。

どうやら彼は、レンにあの棺や女性の魂を見せることを気にしていないようだ。

もしかしたら当てが外れたのかと不安になるが、ここまで来たら後戻りはできない。

重々しい音を立てて開いた隔壁の内側に足を踏み入れ、再び白い棺と対面する。

「んう……」

レンは室内の冷気き身を震わせていた。

「レン、色々と疑問はあるだろうけど……今日の練習通りに上位元素を貸して欲しい」

俺は右手にジークフリートを生成した後、レンへ声を掛ける。

レナさんの魂と会えるかもしれないとは、まだ言えない。もしダメだった時、期待を裏切られたレンはとても傷ついてしまうだろう。

「ん。信じる」

レンはこくりと頷き、小さな手を俺の架空武装に添えた。その途端、ジークフリートは急激に膨張し、五メートル近い大きさとなる。

「——レン、ストップだ。これ以上は部屋に収まらなくなる」俺は何かと架空武装の形を維持しつつ、レンを止めた。部屋の大きさもあるが、今日一日の練習では、まだこの規模が限界。少しでも気を抜けば崩壊してしまうので、長く維持することもできない。

俺はその前に、架空武装の形で留めた上位元素を全て”霊顕粒子”へと変換した。

エーテル・ブリッド  
「霊顕弾！」

巨大な上位元素の砲弾が放たれ、金色の粒子へと変わる。

棺の周囲どころか、部屋全体が輝く粒子に包まれた。

「っ……」

空間を濃い粒子が満たしたことで、身動きが取れなくなる。声も出せない。

これは——フレズベルグに動きを封じられた時と同じ現象だ。生きている人間が粒子に包まれると、魂が肉体に閉じ込められたような状態となり、体を動かさなくなるのだ。

少し、加減を間違えたかもしれない。レンや宮沢健也も驚いた表情のまま、硬直してしまっている。

そんな高濃度の”エーテルウインド霊顕粒子”の中、棺の上に女性のシルエットが浮かび上がった。

天描画のように微細な粒子によって象かたどられた輪郭。

次第に細かな顔の造作や、髪型も見分けられるようになる。だが——。

(違う……)

それは、夕食前にレンから見せてもらった写真の宮沢レナとは別人だった。

肩の辺りで綺麗に切り揃えられた髪の色は分からない。”霊顕粒子”で構成されているため、頭の上からつま先までま全部が金色だ。しかし日本人的な顔立ちをしていることから、恐らく黒ではないかと

推測する。

年は、若い。俺とそう変わらないのではないだろうか。

そしてどこか——違和感を覚えた。誰かに似ている……そんな印象。

具現した少女の魂は無表情で立ち尽くしている。意識がないのか、ぼうつと中空を見つめていた。

声を掛けてみたくても、粒子が濃すぎて体は動かない。

そのまま時間だけが過ぎ、粒子が薄くなるにつれて少女の姿も曖昧になっていった。声が出るようになった頃にはもう少女の姿はなく、溜息ためいき吐く。

「……レナさんじゃ、なかったのか」

落胆があまりに大きかったため、つい声に出てしまう。

それを聞いた宮沢健也は「ああ、そういうことか」と納得した声を上げた。

「物部君は、あれがレナの棺ひつぎだと思っていたわけだね？」

「っ!？」

レンが驚いた顔で俺を見る。

「……はい。昨日、あの魂を見た時……あなたはレナと呟いていたので」

今さら誤魔化しても仕方ないだろうと、俺は頷いた。

「残念ながら、棺の中にあるのはただの研究サンプルだ。レナの名を口にしたのは、彼女と共に研究していた”霊頭粒子”の性質を確認できたからさ。今回も興味深い現象を見せてもらい、感謝するよ」  
義務的に礼を言う宮沢健也から俺は視線を逸らす。彼はレナさんと自分の研究が正しかったと証明されて、喜んでいただけだったのだ。

「……悠お兄ちゃん？」

レンが説明を求めるように、俺の服を引っ張る。

「ごめんな、レン。俺はもしかしたらレナさんの魂に会わせてあげられるかもしれないと思って、レンをここに連れて来たんだ。けど、当てが外れた」

俺は申し訳ない思いを抱きながら、レンに謝った。  
すると宮沢健也は苦笑を浮かべ、話しかけてくる。

「君は本当に……レンのことを考えてくれているんだな。ここま  
で来ると、煩わしい以上に尊敬するよ」

彼の言葉には強い皮肉が込められていたが、それは俺にとりより  
彼自身へ向けられているようにも感じられた。

「——たぶん君は、私とレンが普通の父親になることを望んで  
いるんだろう。けれど、それはもう無理だ。これ以上この問題を放置  
すると研究にも差し障りそうだから、ここではつきりさせておこう」  
嘘っぽい笑みを消し、彼は真面目な表情で言う。

「私は、娘ではなく研究を選んだ父親失格の男だ。研究のためな  
ら手段を選ばない最低な人間でもある。こんな私に、もう期待などす  
るな」

「っ……」

レンが息を呑み、ぐっと力を込めて俺の服を握りしめた。

そして宮沢健也は目尻に涙を浮かべたレンに向けて、決定的な言葉  
を口にする。

「よく聞くんた、レン。私は——君を愛せない」

レンがぼかんとした表情で彼を見上げる。

「あんたはっ——」

俺は彼を殴り飛ばしたい衝動を懸命に堪えた。

レンを軽率にここへ連れて来たことを後悔する。こんな言葉を聞  
かせたかったわけじゃないのだ。

「……っ」

レンが顔を伏せ、小さな声で何かを呟く。

「……………らい……………らい……………」

「レンっ」

肩を震わせ、レンは口の中で同じ言葉を繰り返していた。  
声は次第に大きくなり、レンは顔を上げて——叫んだ。

「嫌いっ！ お父さんなんて、大っ嫌い!!」

初めて聞くレンの怒声が室内に反響し、俺は呆然と猛る彼女の姿を

見る。

レンは真正面から父親を睨みつけていた。その強い眼差しを受け、宮沢健也は笑う。

そこには何故か、安堵あんどの色が含まれているような気がした。

「——それでいい。私を嫌って、私以上の愛を探すんだ。そうすればきつと、レンは幸せになれる」

「わたしはもう、幸せだもん！ お姉ちゃんも悠お兄ちゃんもいるから——お父さんなんていらさない！」

それは、どうしようもないほどの決裂。

けれど俺の目には、初めて二人がぶつかっているようにも見えた。

「では、問題ないな。私は遠慮なく研究に没頭するよ」

「勝手にして。わたしは、悠お兄ちゃんたちと仲良くするもん」

レンはそう言うのと、俺の手を引つ張ってエレベーターの方へと向かう。彼女の表情は何か吹っ切れたような、清々すがすがしい顔をしていた。

宮沢健也の方を見ると、彼はもうこちらに背を向けている。

「悠お兄ちゃん、ありがとう」

歩きながらレンが礼を口にした。

「え？ いや、俺は感謝されるようなことなんて何もしてないぞ？」

それどころか何もかもが空振りで、大失敗だったと言っている。

「ううん、お母さんに会わせようとしてくれて、嬉しかった。それにお父さんと喧嘩できて……よかった」

首を横に振って、レンは告げる。

「レン……」

俺のせいで——レンをここに連れて来たことが切っ掛けで、二人の関係はどうしようもなく破綻した。

辛くはないはずだ。けれど、レンが泣かず前を進もうとしているのなら、俺が口にするべきは謝罪ではなく、彼女の背を押す言葉だ。

「——よし。レンがあくのクソ親父に一言言ってやったことを、アリエラと亮に報告しに行くか」

「ん」

俺の言葉にレンは笑顔で頷く。

そして俺たちはエレベーターに乗り込もうとするが、その時——  
甲高い警報音が研究室に鳴り響いた。

「何だ——？」

俺とレンは足を止め、辺りを見回す。

「どうした？」

宮沢健也は足早く内線電話を取り、電話の向こうへ問いかける声が微かに聞こえてくる。しばらく様子を窺<sup>うかが</sup>っていると、彼は電話を置いて、こちらに声を掛けて来た。

「——二人とも、緊急事態だ」

「何があつたんですか？」

俺はレンと共に彼の方へ向かう。

レンは少し気まずそうな顔をしているが、今は気にしている場合はなさそうだ。

「ユグドラシルが急速に枝を伸ばして、周囲への干渉範囲を広げているらしい。数時間後には、この研究所付近にも電気的な障害が発生するだろう」

「なっ……何で突然——」

「さあね。君たちが準備を整える前に、先手を打ってきたのかもしれないな。ともかく、君たちは一階の正面玄関へ向かってくれ。他の”D”たちにも連絡を入れる。車を回すから、急いでユグドラシルから遠ざかるんだ。干渉範囲に入ってしまうと、君たちは上位<sup>ダークマター</sup>元素を生成できなくなってしまうからね」

こんな状況でも焦りを見せず、彼は淡々と指示を出す。

「分かりました。では、行きます」

俺が頷くと、彼は軽い口調で答える。

「ああ、私がここで研究を続けられるように精一杯頑張ってくれ」  
その言葉に顔を顰<sup>しか</sup>めたレンは、あかんべーを返して俺の手を引っ張った。

「……悠お兄ちゃん、行く」

「おう」

俺は苦笑をしつつ、レンの後に続いてエレベーターに乗り込んだ。

◇

「飛ばしますからシートベルトはちゃんとしてくださいよ?」

そう言って大型のバンを発進させたのは、遊園地に行く時もお世話になった中年の女性運転手だった。

”神界”で仕事を終えた僕は下界に戻り、ユグドラシルが動き出したことを知った。

僕は玄関口で悠とレンチちゃん、深月さん、リーザさん、フィリルさん、アリエラさん、ティアちゃん、篠宮先生と合流して、指示通りシートベルトを着用して、緊張した顔を見合わせる。

下界では就寝前の時間だったようで、リーザさんとフィリルさんは髪が濡ぬれていた。たぶんちようどお風呂に入っていて、慌てて支度をしたのだろう。

「篠宮先生、完全に予定外の事態ですが——これからどうしますか?」

張りつめた空気の中、深月さんが篠宮先生に訊ねる。

「詳しい情報が集まるまでは、東へ逃げてユグドラシルから距離を取る。干渉範囲の拡大速度、および正確な境界線が判明したら攻撃に転じよう」

篠宮先生は膝に置いたノートパソコンを操作しつつ、返事をした。アスガルやニブルから情報を集めているのかもしれない。

「そうですね……際限なく枝を伸ばされれば、何もできなくなってしまう。範囲外からユグドラシルが伸ばした枝を破壊して、干渉範囲を押し戻さなければ」

リーザさんが頷き、窓の外に目をやる。

時刻は夜の十時。外は闇に沈んでいた。暗い景色の中、外灯や窓の明かりがあつという間に過ぎ去っていく。



電子干渉の影響はまだ付近に及ぼしていないが、湾岸に沿う高速道路へ入ると、西へ向かう道路が大渋滞を起こしていた。恐らく道の先が干渉範囲に入ったせいで、車が動かなくなったのだろう。

東への道も混雑しているが、今は辛うじて車が流れている。

「干渉範囲を押し戻して……その後は？　現状維持？　それとも……討伐作戦を実行する？」

フィリルさんが先の方針について疑問を口にすると、アリエラさんが応じる。

「ここはもう、作戦を実行するしかないよ。たとえ倒し切れなくても、あんなに巨大化したユグドラシルは破壊しておくべきだと思う」

深月さんはアリエラさんの言葉に頷き、皆を見渡す。

「私も、同意見です。可能な限り接近してユグドラシル本体を叩きましょう。その後、兄さんは可能であれば、エーテルウインド 霊頭粒子<sup>①</sup>を散布し、対竜兵装と亮さんの気功波による精神破壊を狙ってください」

「了解」

「分かった」

僕と悠は返事をする、窓から東京の夜景がよく見えてきたが、数えきれないほどの電気の明かりが西側から削られるようにゆっくりと消えていった。

「ユグドラシルのテリトリーが、東京都心にまで迫ってきたようですよ。何だか……街が次第に死んでいくようです」

リーザさんは灯火が失われていく街を見つめて呟いた。

しかし悠にとっては感傷に浸る余裕はないようだ。原作のように左腕が勝手に動くことがないように、右手で左腕を押さえていた。

「悠お兄ちゃん、平気？」

小さな声でレンちゃんが悠に訊ねる。

「——ああ、今はまだ大丈夫だ」

他の皆に聞こえないように会話をしているが、僕には丸聞こえだ。二人の仲は観覧車から降りた時よりも深まっており、このままいけば原作通り成功するが、何故か嫌な予感がする。

分からないが、何かが起こるようで不安になってきた。しかしやるしかない。どんな状況になっても僕がなんとかするしかない。

そう意気込んでいると、ノートパソコンを操作しながらどこかに電話をしていた篠宮先生は、通話を切って僕たちに告げた。

「ニブルの監視衛星からデータを回してもらい、ユグドラシル周辺の電磁波異常区域——つまり奴が電氣的な干渉を行っている範囲を、リアルタイムでモニターできるようにした。それによると干渉範囲が広がるスピードは次第に落ち、現在は時速三十キロ程度。既に十分な距離を稼いでいる。逃亡は終わりだ」

そう言うのと篠宮先生は運転手に近くへ停めてくれと頼んだ。

運転手は「了解しました」と答え、ちょうど差し掛かったパーキングエリアへハンドルを切る。

「上層部のアスガルは日本政府と緊急協議を行い、竜災特別対応の許可を得た。これで手続き上は”D”の戦闘行為も問題ない。ただし住民や街に被害が出るような攻撃は固く禁じる」

篠宮先生が話を続けている間に、車は駐車スペースに停まった。

僕たちは車から降り、ユグドラシルの枝が迫っているはずの夜空を見上げる。

「暗いから、枝なんて見えないよ……」

イリスさんが不安そうに呟いた。リーザさんも高速道路から見える景色を眺めて頷く。

「それも計算の内かもしれませんがね。昼間は薄らと見えたユグドラシルの本体も、今はどこにあるのかさっぱりですわ」

「……ここからだ、ユグドラシルまでかなりの距離があるしね。というか、近づくのにも、すごく時間が掛かりそう」

憂鬱そうにフィリルさんが言葉を零した。

「夜だと狙撃できる距離も短くなるし、本体への攻撃は夜明け後にした方がいいんじゃないかな？」

アリエラさんの提案に深月さんは首肯する。

「——そうですね。安全圏から枝を攻撃しつつユグドラシルへ距離を詰め、夜明けと同時に本体へ総攻撃というプランでどうでしょ

うか？」

篠宮先生に意見を求める深月さん。

「それが賢明だろうな。しかしそうなるのかなりの長丁場となる。班を分け、交替で休憩を取りつつ進軍しよう。物部深月、フィリル・クレストを一班。アリエラ・ルー、レンミヤザワを二班。リーザ・ハイウオーカーとティア・ライトニング、大島亮を三班とする。飛行技術のない物部悠とイリス・フレイアは待機だ。君たちは攻撃の要ともなる。今の内に十分休息を取っておくように」

悠とイリスさんは篠宮先生の言葉に頷いた。

「はい、分かりました」

「了解ですっ」

そして篠宮先生は続けて皆へ指示を出す。

「各班は、一人が照明を生成し、もう一人が視認できた枝へ攻撃するという役割分担を行うように。残骸が市街地へ落下しないよう、砕く、斬る、という攻撃は控えて欲しい。焼き尽くすか、消し飛ばしてしまうのが最も安全だろう。もし残骸が落下した場合は、照明役の者が即座にフォローしてくれ」

「——はいー」

僕たちは声を合わせて答え、最初に深月さんとフィリルさんがバンから降りて作戦を実行した。

その間、悠の様子が少しおかしくなっていることに僕以外気付かなかった。

恐らくユグドラシルが語りかけてくるのだろう。悠は皆に心配されないように平然を装う。

僕は少し仮眠を取ることにしたが、先ほど感じた嫌な予感的中することに気付くことはできなかった。

## 暴露

ある程度ユグドラシルの干渉範囲を押し戻した後、僕たちは移動を始める。

渋滞する高速道路を降り、一般道から西へ。

その間ずっと照明光が夜空を明るく染め上げ、爆発音が空気を断続的に震わせていた。

今のところ破壊した残骸が落下するという事故は起きていない。

一時間経つと篠宮先生は深月さんとフィリルさんに帰投を命じ、戻ってきた二人と入れ替わりでアリエラさんとレンちゃんが出て行く。枝を攻撃し続けていた深月さんたちの消耗は大きいらしく、シートに体を預けてすぐに眠ってしまった。

僕は昼夜問わずに行動できるため、すぐにでも手伝いたいが僕が神であることは悠と深月以外の皆には内緒にしている。

そのため僕は行動が制限されており、正体がバレるようなことはできない。今できることは悠の体がユグドラシルに乗っ取られないようにウイルスがあると思われる脳に気を注いでいる。

神の気を送っているため、ユグドラシルの電子干渉で体に乗っ取るうとしても体に影響は出ないが、悠に語りかけてくることは可能だ。

そのため今もユグドラシルの声が聞こえている筈だ。

流星にそこまでのことをすれば皆から不審に思われるためしていない。

さらに一時間経ち、日付が変わる。

戻ってきたアリエラさんとレンちゃんは、やはりくたくたになっていた。

「僕たちの番か、二人とも行こう」

「ええ、分かりましたわ」

「——うん」

リーザさんとティアちゃんに呼びかけて、僕たちは車から降りた。

その間に僕は深月さんたちの体力を回復させ、気を少し上げながら舞空術を使う。

超サイヤ人の状態になれば周りに少しだけ影響を与えてしまうため、普通の状態に対処することにした。

「ティアちゃん、上位<sup>ダイクマター</sup>元素で明るくしてくれ」

「分かったの」

僕が頼むとティアちゃんは少し暗い表情を浮かべながら上位元素を生成して周りを明るくする。

案の定、ユグドラシルの枝が迫ってきた。しかしドラゴンの一部としても所詮は植物。超サイヤ人に変身せずとも対処できる。

「オオシマ・リョウ、油断しないでください」

「了解だ」

僕とリーザさんは枝への攻撃、ティアちゃんはユグドラシルの猛攻が見えるように周りを照らし、一時間皆を守り続けた。

その一時間が経とうとしていた頃、走っていた車が道路の脇に寄って停車した。

恐らく通るはずだったルートが渋滞で塞がっていて、新しいルートを探しているのかもしれない。

ちやうど一時間が経ち、僕たち三人は車に戻った。

「お疲れ」

悠はまだ眠ってなかったようで、僕たちを労<sup>ねぎ</sup>った。ティアちゃんは「うん……疲れたの」と、元氣のない笑みを返した。

「深月さん、フィリルさん、起きて下さい。交替ですわよ」

リーザさんは熟睡中の深月さんとフィリルさんの肩を揺すって、目覚めさせる。

「ん……了解です」

「ん、おはよう……じゃなかった」

車から出る前に体力を回復させたため、ぐっすり眠れたのだろう。二人は通信機を装着して空へ上がった。いった。

リーザさんとティアちゃんは席に座って仮眠の体勢をとる。

僕も少し仮眠を取ろうと思い、座つてすぐに目を閉じた。しばらくしてリーザさんが悠に小声で会話をする声を耳にする。

「あなた——もしかして、ずっと起きていましたの？」

「いや……さつき、ちょうど目が覚めただけだ」

悠はリーザさんに余計な心配を掛けないように否定した。

「嘘ですわね」

「な、何でそんなことが分かるんだよ」

「恋人の嘘くらい、見抜けますわ」

そう言うと、リーザさんは篠宮先生に問いかけた。

「篠宮先生、車から降りてもいいですか？」

「もうしばらくはここで待機の予定だ。それまでなら構わん。ただし、離れるなよ」

篠宮先生がそう返事をするとう悠とリーザさんは車を降りた。恐らく悠はユグドラシルがずっと語りかけてくることを話すのだろう。

二人が降りて数十秒してから、ティアちゃんがリーザさんと同じことを篠宮先生に問いかけ、車を降りると二人の後を追った。

(ああ、そういうえばこんな展開になるんだったな)

この先の展開を知っているため、ティアちゃんがこの先どんな選択をするのかも分かる。

しばらくして、ティアちゃんが先に戻ってきた。目を瞑った状態で彼女がどんな表情をしているのかが分からない。

それから悠たちも戻ってきて車の中は寝息を立てる音で満ちていた。

(あ……歪みの調査するのを忘れてた、けど後でいいや)

僕も篠宮先生に断りを入れてから車を降りるべきだったと後悔したのはユグドラシルの本体を目の当たりにしてからだった。

◇

事態が動いたのは、午前四時。

深月さんとフィリルさんの第一班に三回目の出番が回ってきた直後だった。

「何だ——これは……!?!」

助手席の方から聞こえて来た篠宮先生の声に、僕は顔を上げる。僕と共に顔を上げた悠、仮眠に入ろうとしていたリーザさんとティアちゃんも、驚いた様子で目を開いた。

『枝の成長速度が急に上がりました！ 対処が追い付きません！』

『前からだけでなく、横からも来てる!』

通信機を通じて、深月さんとフィリルさんの声が漏れ聞こえてくる。

「攻撃を続けつつ、念のため高度を下げろ。すぐに応援を向かわせる」

篠宮先生は早口で指示を出すと、僕たちの方を振り向いた。

「全員起きろ！ 緊急事態だ。ユグドラシルが枝を急速に伸ばし、干渉範囲を広げている。二班と三班も協力して対処に当たれ」

その声にアリエラさんとレンちゃん、イリスさんも目を覚まし、急停車した車から運転手以外の全員が降りた。

ティアちゃんの上位元素で作り出した照明光が、凄まじい速度で迫る枝の影を浮かび上がらせている。

車の中で篠宮先生が言葉を続けた。

「電磁波異常区域が左右からも広がり、私たちを包囲しようとしている。二班は右、三班は左から来る枝に対処せよ」

「はいー」

篠宮先生の指示に僕たちは頷き、空へと舞い上がる。

リーザさんたちは架空武装を生成し、迫り来るユグドラシルの枝へ攻撃をする。

「はあっ!!」

気功波で攻撃をしながらユグドラシルの干渉範囲を分析する。

ここに来て枝の成長速度が異常であること。原作を知っているため、その理由を知っているが、これは余りにも異常だ。

僕はユグドラシルの気配を探ると、その近くに空間の歪みを感じ取った。

どうやらついさつき出来たばかりの歪みで、ユグドラシルの枝が触れたことで力を増したようだ。

しかし今でも成長し続けることについては原作にある通りの展開だ。

僕は皆に気付かれないように枝への攻撃をしつつ、ユグドラシルの近くにある空間の歪みに神の気を送る。

歪みは数秒後に消えたが、ユグドラシルの猛攻は今も尚続いている。

「っ——電磁波異常区域の増大が止まらない。このままでは通信が妨害され、干渉範囲のモニターも困難になる。全班、一旦帰投だ！地上に戻り、視界内の枝掃討に専念せよ」

焦りを滲ませて篠宮先生が指示を出してきた。それを聞いた僕たちは高度を下げて車に近づいた。

そして先ほどと同じように迫って来る枝へと攻撃する。

「喰らえ、ビックバン・アタックー！」

ベジータの技を繰り出し、枝を数本消滅させる。

「薙げ、閃刃ー！」

リーザさんが槍の架空武装、射抜く神槍を振るい、眩いレーザーで正面の枝を纏めて薙ぎ払う。

「三の矢——月を穿つ虚空ー！」

続いて深月さんが放った矢は右側の枝を塵へと変えた。

「フレア・バースト・オクテットー！」

左から迫っていた枝を薙ぎ払うのは、フィリルさんが放った八発の炎弾。

他の皆も訓練を続けてきた成果を出したが、ユグドラシルの枝を消し飛ばしてもすぐに新たな枝がこちらに近づいてきた。

「キリがないの……」

ティアちゃん空に爆炎を放ちつつ、弱音を零した。

「一応凌げてはいるけど、このままじゃ身動きできないよ」

「ん」

アリエラさんもキツそうな表情で眩き、レンちゃんが同意の頷きを



返す。

「——もうしばらく現状を維持して欲しい。十五分経つても枝の成長速度が落ちないようであれば、撤退して態勢を立て直そう」  
篠宮先生は考えた末に、そんな決断を下した。

このまま行けば僕以外の皆は体力が削られて耐えられない。できるならこのまま進軍したいが、僕の正体がバレてしまうため、撤退せざる得えない。

僕たちは迫り来る枝に攻撃し続けて十五分が経とうとする。

その時——後方、東の方角から緋色の熱線が空を薙ぎ、一気に気温が上昇したことで見える周囲の枝が全て焼失する。

「この攻撃、まさか……」

僕はこんなことができる一人の少女を思い浮かべて東の空を見上げる。

こちらへと近づいてくる光が目映る。光はあつという間に大きくなり、それが炎を纏った少女が地上へと降り立った。

その少女はキーリ・スルト・ムスペルヘイム。一緒に行動しているジャンヌ・オルテンシアの姿は見えないが、僕が予想していた通りの人物だった。

「キーリ……やはり来たか」

「全く、私の警告を無視して無茶なことをするなんて……まあいいわ。とにかく撤退しなさい。今のユグドラシル相手に持久戦は無意味よ」

「無意味って……何で断言できるんだ？」

キーリは呆れた様子で言うと、悠が彼女に問いかける。  
するとキーリはユグドラシルがいる西の空へ、憐れむような眼差しを向けた。

深月さんとリーザさんはキーリのことを気にしつつも、じわじわと迫ってきた枝に攻撃を再開する。

僕も気功波を繰り出し、彼女たちの援護をする。

「ヘカトンケイルがヴリトラ——お母様の作ったモノだって彼から聴いてるわよね？」

「あ、ああ」

キーリは僕の方に視線を向けながら質問し、悠は戸惑いつつも頷く。

「私を切り捨てたことで、お母様はヘカトンケイルとの中継点を失ったわ。そこからのことは推測だけ——追い詰められたお母様は、新たなヘカトンケイルを作って天敵のユグドラシルを排除しようとしたのよ」

「ヘカトンケイルがユグドラシルを巻き込んで自爆した時のことか？」

原作と同じ展開になったことを僕は思い出す。

「ええ。けど、それは失敗に終わった。そしてたぶんユグドラシルは、ヘカトンケイルが出現した位置から、お母様が隠れていた場所を割り出したんだと思う」

「ヘカトンケイルが出現した位置って、まさか——」

悠は徐々にヴリトラの消息について知った。

復活したヘカトンケイルの出現した場所は日本。詳しい場所は憶えてはいないが、キーリの話と原作で起こる展開を照らし合わせと……。

「そう、まさにこの辺りよ」

キーリは表情を変えずに答え、僕たちの話を聞いていた篠宮先生が、驚愕の声を漏らす。

「『黒』のヴリトラは……ずっと富士の樹海に隠れていたというのか？」

「恐らくね。日本にいるのは知っていたけど、私も正確な位置は教えられていなかったわ。まあ地中に潜っていたとか、そういう普通な『隠れ方』ではなかったはずよ」

キーリは頷きつつも、そう補足した。確かにそんな隠れ方ではユグドラシルどころか、人間にもすぐ見つかってしまうだろう。

「お母様は、オリジナルの上位<sup>データ</sup>元素生成能力を持つドラゴン。そしてユグドラシルは上位元素への干渉が可能——ここまで言えば分かるでしょう？ ユグドラシルが何故こんなにも巨大な姿で出現

したのか……どうして持久戦を挑んでも無駄なのか——その理由が」

悠を試すように見つめ、キーリは訊ねた。

「ユグドラシルがエネルギー源にしているのは……ヴリトラの上位元素なんだな？」

ミッドガルで”D”の上位元素を奪って成長したように、今のユグドラシルもヴリトラの上位元素を用いて巨大化したのだ。

「ええ——お母様はたぶん、ユグドラシルの苗床なえどこにされたのよ」

悠の言葉を、キーリは淡々とした口調で肯定した。

「そうか……」

悠はそう呟き、今の状況を目にして打つ手が無いことを悟る。

「皆、撤退しよう」

覚悟を決めたようで、悠は皆に呼びかける。

僕はこの先、どんな展開になるのかを知っている。そのため、反対してくる少女に視線を向けた。

「ダメっ!!」

視線の先にあるティアちゃんが、攻撃の手を止めて否定の声を上げる。

「ユグドラシルは、今、絶対に倒さなきやダメなの！　ティアがユウを守るの！」

「俺を、守る？」

「……………」

ティアちゃんは悠に強い眼差しを向け、その様子に彼はようやく気が付いた。

「まさか、リーザとの話を聞いて——」

外で悠はリーザさんと話して戻った時、少しだけ違和感に気付いていたようだ。ティアちゃんは二人の後を追って、話を聞いていたのだ。

ティアちゃんはこくと頷き、目尻に涙を浮かべる。

車の周囲に展開し、枝へ攻撃を続けていた深月さんたちが、何事かとティアちゃんに目を向けた。

悠は秘密が皆に知られないように止めようとするが、その時にはもう手遅れ。

「このままだと、ユウはユグドラシルに体に乗っ取られちゃうんでしょ？」

ティアちゃんは震える声で、悠が皆に隠してきたことを叫んだ。

「——っ!?!」

その言葉に息を呑み、攻撃の手を止めたのは深月さん、フィリルさん、アリエラさんの三人。

既に秘密を知るイリスさん、リーザさん、レンちゃんは、心配そうな眼差しを悠に向ける。

事情を知らないはずの篠宮先生は動揺を見せないが、彼女が学園長に悠とユグドラシルとの関係について聞かされていることは知っていた。

キーリも驚きを浮かべていたが、すぐに納得した表情へと変える。

「そう——あなたはユグドラシルにも狙われていたのね。道理で……ふふ、これで確定だわ。やっぱり私の目に狂いはなかった」

何故か嬉しそうに微笑むキーリ。彼女の目的も知っているため、疑問には思わない。

「兄さん……どういうことですか？」

深月さんが揺れる眼差しで悠を見つめていた。

## テイアの覚悟

「あそこにベンチがありますわね」

「——バス停だな。座るか」

数時間前、俺とリーザは車に降りてちょうど近くにあったバス停のベンチへと並んで腰を下ろす。

「今のところ、作戦は順調ですわ。ユグドラシルは枝を伸ばすだけで、何もしてきません。こちらにとっては都合がいいですが、正直……不気味です」

リーザは夜空に瞬く爆発を眺めながら、不安を零した。

「もしかすると、おびき寄せられているのかもしれないな」

「わたくしたちが接近すれば、本体を破壊されるリスクが高まるのに……ですか？ あなたには、何かそう考える根拠があるんですね？」

俺を至近距離から見据え、偽りのない答えを要求するリーザ。

「……………ああ。誘い出されているのは、たぶん俺だ。さつきからずっとユグドラシルの声が聞こえてる。あいつからの干渉が強くなっていくんだ。だから隙を見せないよう、眠らないことにした」

俺は観念し、自分の状態を告白する。

「なっ——どうしてそんな大事なことを黙っているんですか！ でしたら、これ以上ユグドラシルに近づくのは危険ではありませんの？ あなただけでも退いた方がいいのでは？」

「かもしれないが……リーザたちだけでユグドラシルの本体を破壊しても、解決にはならないだろう？ 宮沢所長の説が正しければ、また別の場所に中枢が移るだけ。そうして時間を掛けていたら、たぶん手遅れになる」

左腕のギプスを眺めつつ、俺は答える。

「ここでユグドラシルを無力化しないと、あなたはじきに乗っ取られてしまうというわけですか……」

「たぶんな。学園長に頼めば完全に操られることは避けられるかもしれないが、きつとその時は全身が今の左腕みたいな状態になるん

だろう」

俺は感覚のない左腕を示して言う。

「それは、ぞっとしませんわね。分かりました、もう退けとは言いません。けれど……このままユグドラシルの枝を排除できたとしても、本体からの干渉は残ります。干渉を防ぐ手段がない以上、影響を受けないオオシマ・リヨウと遠方からの攻撃になります……大丈夫ですか？」

不安そうに俺を見つめるリーザ。俺が以前、”彼岸を貫く方舟”は狙撃に向かないと言ったことを懸念しているのだろう。

「大丈夫とは言えないが、それでも——やるしかないだろ」  
俺は苦笑を浮かべて告げた。

「……確かに。では、やり遂げてください」

リーザも笑みを見せて頷く。

「おう。やってやるさ」

できるだけ強気に応じ、俺は空に視線を向けた。

ユグドラシルの枝は確実に排除されていく。このままの調子でいけば、枝を広げる前の干渉範囲——およそ十五キロ地点までは近づけるはずだ。しかし……。

「ただ、ユグドラシルが俺たちをおびき寄せたのだとしたら——  
——こつちが本体へ攻撃を始める前に、次の手を打ってくる可能性は高い」

「それを打ち破らなければ、決戦にすら持ち込めないというわけですね。ユグドラシルが何を企んでいるかは分かりませんが、わたくしが蹴散らしてやりますわ」

豊かな胸を張り、リーザは宣言する。はずみで揺れる双丘を前にした俺は、色んな意味で照れ臭くなって頬を掻いた。

「——頼りにしてる。じゃあ、そろそろ戻るか」

「ええ」

そうして俺たちは車の方へと歩き出した。だが車に乗り込もうとした時、ドアが少し開いていることに気付く。

あれ……ちゃんと閉めたと思ったんだが。

他に誰か外に出たのかと車内を確認するが、皆眠っている。

「どうしたんですの？」

「あ、いや、何でもない」

俺は声を掛けて来たリーザに首を振り、中へと入った。

この時俺はリーザとの会話を聞いていた少女に気付くことはできなかった。

◇

ユグドラシルの枝が押し寄せる窮地の中、悠は皆の視線を浴びて立ち尽くす。

暴かれたのは、悠の秘密。

ユグドラシルに、彼が乗っ取られようとしているという事実。

とうとう——知られてしまった。悠は深月さんだけには秘密にしておきたかったことを。

「物部くん、詳しく話を聞かせて」

「ボクも説明が欲しいな」

フィリルさんとアリエラさんも悠に詰め寄ってきた。

「ユウ、ホントのこと……教えて欲しいの」

一歩も退かないという意志を込め、ティアちゃんは悠を見つめる。

「詳しい事情には、私も興味があるわ」

キーリは視線で悠に説明を促した。

こうなつては、誤魔化しようがない。

「モノノベ・ユウ。もう皆さんにもお話しするしかないようですわね。あなたがドラゴンを屠<sup>ほぶ</sup>ってきた兵器は、ユグドラシルから提供されたデータを元にしたもので——その代償として、あなたは体を乗っ取られてかけていることを」

すると架空武装から放つ閃光で上空の枝を攻撃していたリーザさんが、悠に声をかけた。

「え……う？」

リーザさんの違和感のある台詞に、傍そばで話を聞いていたイリスさんはきよとんとしていた。

ユグドラシルとの取引によって生じた代償は、記憶の喪失。体の乗っ取りは、奴が仕掛けた罠である。

数時間前に二人が話した内容に記憶の喪失については触れていないため、ティアちゃんは体を乗っ取られることしか知らない。

悠もリーザさんの意図に気付いたようで、深月さんたちに説明を始めた。

「——今、リーザが言った通りだ。俺はドラゴンを倒すために、ユグドラシルと密かに取引した。けど、送り込まれたデータの中にはウイルス的なものもあつたらしく、俺は少しずつ——今もユグドラシルに侵食されている」

記憶のことだけを除いて、悠は本当のことを話す。

「ドラゴンを倒すため……？ まさか、兄さんは三年前のあの時に——」

呆然と呟く深月さんは、三年前のことを思い出したようだ。

「ああ——三年前、ヘカトンケイルと戦った時が最初だった」

悠は深月さんに頷き返す。

「物部くん……どうして黙っていたの？ ドラゴンを倒すための武器が原因なら、私の時も取引したんだよね？」

フィリルさんが怒った顔で悠を睨む。

「……すまない。責任とか、負い目を感じて欲しくなかったんだ。それに操られていることが分かったのは最近で、こんなことになるとは思っていなかった」

悠は頭を下げ、フィリルさんに謝った。

アリエラさんはそんな悠を見下ろし、責めるような口調で言う。

「物部クンの気持ちは分かるよ。けど、ボクたちだけ何も聞かされていなかったのは、気に入らないな。この様子だと、リーザだけじゃなくて、イリスやレン、大島クンも知っていたんだろう？」

「まあな」



「ん」

イリスさんはアリエラに視線を向けられると気まずいそうに顔を伏せるが、僕とレンちゃんは頷いた。

「――揉めている暇はないね。文句は後でたっぷり言わせてもらうよ」

アリエラさんは悠を一睨みしてから攻撃に戻った。

「私も……言いたいことはあるけど、今は我慢する」

フィリルさんもこちらに背を向け、枝への攻撃を再開する。

「――面白い話を聞かせてくれたお礼に、私も少し手伝ってあげるわ」

手を一振りし、緋色の熱線ひいろで枝を焼き払うキーリ。

けれどそんな中、深月さんとティアちゃんは悠の顔から視線を逸らさなかった。

深月さんは下唇をぐつと噛み、肩を震わせながら涙を浮かべる。

「み、深月――泣かないでくれ。本当に悪かった。すまない――」

悠は何度も彼女に謝った。

「……謝らなくて、いいです。私が泣いているのは、あまりにも自分が不甲斐なくて……それが悔しくて……だから、いいです」

深月さんは掠れた声かすで言い、ごしごしと涙を手荒く拭った。

「それよりも――一つ、確認させてください。今ので、全部ですか？」

「え……」

「兄さんが、何か隠していることには気付いていました。けれど必死に繕おうとしているのも分かりましたから……あえて聞かなかったんです。そのことを今、とても後悔しています。だから、今度は勇気を出して聞きます。まだ、何か隠していますよね？」

確信を持って悠に問いかけてくる深月さん。

「……ああ」

悠は正直に答え、深月さんの言葉を肯定した。だが、さらに言葉を続けた。

「でも、深月には話せない」

「何故ですか？」

「言えない。今は、まだ」

悠は首を横に振り、赤くなつた深月さんの目を見つめる。

「では、いつになつたら言えますか？」

「——全部、取り戻したら」

悠はこの状況でも本当のことは言わないようだ。

「何を……と聞いても、答えてくれないんでしょね」

深月さんは苦笑を浮かべ、諦め混じりに呟く。

「……すまない」

「いいでしょう——兄さんの頑固さはよく知っていますから、ここでは無理に迫及しません。ですが、最後にこれだけは教えてください。ティアさんは、今ユグドラシルを倒さなければならぬと言っていました。それは、本当ですか？」

表情を引き締めた深月さんは、感情を抑えた声で問いかけてくる。  
「……ユグドラシルからこ干渉が強まっているのは事実だよ。けど、今すぐ乗っ取られるわけじゃない。まだ猶予はあるから、一旦退くべきだ」

悠はそう言うが、タイムリミットはそう遠くはないだろう。恐らく深月さんを安心させるためだ。

「分かりました。確かに竜伐隊の隊長としてはそう判断するしかありませんね。なら——」

深月さんは何かを決意した表情で言葉を途中で切り、篠宮先生の方へ体を向けた。

「篠宮先生。私、物部深月は——勝手ながらりゆうばつたい竜伐隊隊長の責務を放棄します」

「君はいきなり何を……」

深月さんの言葉に呆然とする篠宮先生。

僕と共に枝への攻撃を続けていた皆も、驚きの表情で深月さんを見る。

「私は今から兄さんの妹として、兄さんを守るためだけに戦いま

す。絶対に退きません」

「お、おい——まだ猶予はあるって言っただろ」

「兄さん、私に嘘が通じると思っているんですか？」

悠の嘘を見抜いていたようで、深月さんは吹っ切れたような清々すがすがしい笑みを浮かべながら、ユグドラシルの枝が伸びてくる西の空を睨んだ。

「待て、この状況でどうしようって言うんだ？ 何とかなるのなら、俺だって撤退しようとは言わない」

「確かに今の状況で、干渉範囲から十分に距離を取りながらの進軍は不可能です。けれど、身の安全を考えなければやれることは増えます。指揮官としては失格な考え方ですが……今の私はただの妹ですから」

悠の反論に深月さんは冗談めかして笑い、言葉が続けた。

「前方のみ、最低限の範囲で枝を排除し、なおかつこいらが高速で飛行移動をすれば、前進は可能かもしれません」

「なっ……そんなの、もしユグドラシルの干渉範囲に少しでも捉えられたら即墜落だぞ？ 危険すぎる！」

悠は即座に反対の言葉を叫ぶ。

「——分かっています、ですから、私が一人で行くつもりです。何とかユグドラシルを直接狙える場所まで辿り着き、枝を根元付近から破壊します。そうすれば再成長までにかなりの時間を稼げるでしょう。兄さんたちはその間に進撃してください」

「っ!？」

僕は深月さんの言葉を聞いて焦る。

「深月さん、それはダメだ。ユグドラシルは今も成長しているんだ。一人で行っても根元を破壊するどころか辿り着くことはできないぞ？」

ユグドラシルは空間の歪みに触れてさらに強くなっている。このまま深月さんを本体に向かわせるわけには行かない。

「分かっています。ですが、私は——」

「待って！」

深月さんが言葉を続けようとすると、ティアちゃんが遮った。

「ミツキは、そんなことしなくていいの！ ティアに任せて！」

ティアなら、きつと何とかできるの！」

「え……？」

ティアちゃんの言葉を聞いた深月さんは動きを止める。

「ごめんね。本当は、もつと早く言わなきゃいけなかったの。でも、ティアは今がすつごく楽しくて……何も変わりたくなくて……それで、勇気が出なかったの。けど、もう決めたから」

そう言つてキーリの方に視線を向けるティアちゃん。

(……やっぱりこうなるか)

僕は原作と同じ展開になることを分かっていた。

そう思った僕はキーリに視線を向けると、枝への攻撃を止めてティアちゃんの方に向き直っていた。

「そう——ティアは、生き方を選んだのね」

キーリは優しい口調でティアちゃんに話しかけ、こくとティアは肯定を返し覚悟を宿った声音で告げた。

「お願い、キーリ。ティアに、ユグドラシルと戦える力をちょうだい」

「分かったわ。じゃあ、最後の処理をしてあげる」

キーリはティアにゆつくりと近づく。

「おい、処置つてなにをするつもりだ！」

状況を把握できない悠は、キーリに鋭く問いかける。

「——ティアの角を完全なものにするのよ」

キーリはティアの頭に生えた二本の角に手を翳し、短い言葉を返した。

「角を完全につて……いつたい——」

「ティアはね、対ユグドラシルの切り札として私が育てていた子なの。この角もユグドラシルに対抗するための器官。今はまだ力を発揮できてないけれど、ティアが望むならそれを完全なものにしてもいいつて——遊園地で提案したのよ」

ティアちゃんの角を見つめたまま、キーリは静かに語る。

「あの時、亮と会った時か……」

皆が観覧車に乗っている最中にティアを連れて”鏡の城”で話したことを伝えたため、悠はそのことを思い出したようだ。

「……ティアは遊園地から戻ってきた後、ずっとふさぎ込んでいた。何かに迷っていて……怖がっててもいるようだった。その最後の処置は、ティアにとつて”恐ろしい”ものなんじゃないのか？」

悠はキーリを見据えて、強い口調で詰問した。

「ええ、失敗すればどうなるか分からないわ。仮に上手く行っても——ティアは”D”の枠から外れた存在になる。あなたたちの定義次第では、ドラゴンに分類されるかも」

キーリの台詞を聞いたイリスさんが、ぴくりと肩を竦めた。

今の言葉は、既に”D”の境界を踏み越えたイリスさんの心を大きく揺らしたのだろう。

「ティアに、そんな危険なことをさせられるか！」

「待て」

一歩詰め寄ろうとさ悠を僕は止める。

「亮、離してくて。何でお前が……まさか、知ってたのか」

「……………」

悠は鋭い視線で見つめ、僕は目線を逸らした。

「何で言わなかったんだ。お前、ティアがどうなるか分からないんだぞ？ それをお前は黙っていたのか？ 何で言わなかったんだ！」

悠は僕の胸ぐらを掴んで声を荒げた。彼の言葉に反論できない。

正直この状況にならないように何とかしたかった。だけど僕のようにどうしようもない。それにはある理由があった。

ユグドラシルの権能を”神器”に封じ込めるために、僕は”神界”にある”神器”を五年前から全て探していた。

百個以上ある”神器”の中から、その力を発揮できるものを五個は見つけた。

しかし、その全てはデメリットがあった。使用すれば権能を封じ込める前に耐えられずに大爆発を起こしてこの世界を消滅させる欠陥

品や、使用者だけでなくその周囲に何らかの影響を及ぼすもので、正直そんな物を廃棄しないのか疑問でならなかった。

それにも理由はあるが、もし勝手に廃棄すれば世界に影響を及ぼすのが一番の理由だ。

結局まともに使えないものは無く、どう足掻いてもこの展開になることは覚悟していた。

「お前にとってティアはどうでもいい子なのか!」

「やめてなの!!」

僕が反論しようと悠の腕を掴んで離そうとした時、ティアちゃんが大声を出した。

僕と悠はティアちゃんの方に視線を向ける。

「リヨウは何も悪くないの。ティアが皆にナイショにして欲しいって頼んだの。それに、リヨウはキーリがそんなことしなくてもいいように今日まで考えてくれたの。だからユウ、そんなにリヨウを責めないでなの」

ティアちゃんはそう言うと、悠は彼女に視線を向けながら僕の胸ぐらを掴んでいた手を離れた。

「大丈夫なの。ティアはどう変わっても、ユウのことが一番大好きな——ユウのお嫁さんだから」

ティアは俺たちに笑いかけてきた。そして——キーリの手から生まれた上位元素<sup>ダークマター</sup>が、吸い込まれるようにしてティアちゃんの角と同化する。

「っ——!!」

眩い光<sup>まばゆ</sup>が二本の角から放たれ、ティアちゃんは耳をつんぎくような悲鳴を上げた。

## VS 緑のユグドラシル 2

眩い輝きと、長く尾を引く悲鳴。

「ティアア！」

悠は悲鳴を上げているティアアちゃんに駆け寄った。

最後の処置は一瞬で終わったようで、キーリは翳かざしていた手を降ろし、ティアアちゃんはがくと膝から崩れ落ちる。

脱力したティアアちゃんの小さな体を、悠は滑りこむようにして受け止めた。

「しっかりしろ！ ティアア！」

悠は呼びかけるが、ティアアちゃんは気を失っているようで反応しない。二本の赤い角にも、外見的变化はなかった。

「ティアアちゃん、大丈夫!？」

「ティアアさん！」

後ろから走ってきたイリスさんと深月さんが、ティアアちゃんの顔を覗き込む。

枝の排除で手を離さないリーザさんたちも、青ざめた表情でティアアちゃんを見ていた。

悠は顔を上げてキーリを睨んだ。

「ティアアは、どうなった？ まさか——失敗したのか？」

「それは、ティアアが目覚めてみないと分からないわ。既に完成していた角と、ティアアの脳を接続したの。その負荷に耐えられていれば、きつと——」

キーリが祈るような口調で呟いた時、ティアアちゃんが微かに身じろぎをした。

「ん……」

ティアアちゃんは桜色の唇から、小さな声を漏らす。赤い角の周辺で、ぼちつと小さな電光が瞬いた。

「聞こえる……の」

かす掠れた声で呟きながら、まじた薄らと瞼を開くティアアちゃん。

「よかった——気が付いたんだな」

悠が安堵あんどの息を吐くと、ティアちゃんは瞳を悠の方へと向ける。

「ノイン……ノイン……つて、冷たい声が聞こえるの。これが、ユウを困らせてる、ユグドラシルの声？」

「なっ……ティアにも聞こえるのか？」

悠は驚いた表情でティアちゃんに聞き返した。

「うん……そっか、これがユグドラシル……ユウの、敵」

まだ微睡まじろみのなかにいるような声で呟きながら、ティアちゃんは立ち上がる。

「ティア？」

悠はティアちゃんの様子が妙なことに気付き、声を掛けた。しかし彼女は答えず、ユグドラシルのいる西の方角を見据えた。角の周辺で散る電気の火花が大きくなっていく。

（っ!? ……こんなに力があるのか……）

僕はティアちゃんの気が上がっていることに驚いた。普通の人間ですらこんな力を操るのは有り得ないほど増していた。

「もう……ユウを苦しめないで。静かにしてっ!!」

ティアちゃんが叫んだ途端、辺り一帯に電光ほとぼしが迸った。

「なっ!!」

ボンツと篠宮先生のノートパソコンが爆発し、急に辺りが静かになる。

「ユグドラシルの声が……消えた？」

静けさの中から悠は、呆然ぼうぜんと呟き、左腕が動くか確かめると違和感がないくらいに動かしした。

「どうやら、上手くいったようね」

皆が困惑する中で、キーリだけが満足げな表情を浮かべる。

「ティアは、何をしたんだ？」

悠はキーリに説明を求めた。

「——たぶんティアが構築したのは、ユグドラシルの干渉を完全にシャットアウトする電磁障壁ね。そして想定通りなら、今のティアの上位元素データマターをユグドラシルはハッキングできない。この障壁を保ったまま、ユグドラシルの干渉範囲へ突入可能よ」



「な……そんなことが、今のティアにはできるのか？」  
息を呑み、悠は重ねて問いかけた。

「ええ。そもそも上位元素がユグドラシルにハッキングされてしまうのは、微弱な精神波より、思考を模した電気信号の干渉力が大きいから。だからティアにも思念を電気信号として出力する器官を新たに付与したの」

「それが……あの角か」

悠は電光を纏うティアちゃんの角を見ながら呟いた。

この原理は僕とは少し違うやり方でユグドラシルの干渉を防いでいる。

僕の気功波は精神波の塊で、これでもユグドラシルの電気信号に干渉されるが、僕はその波動に神様にしか持っていない”神の気”を僅かに融合させて干渉できないようにしている。

”神の気”は神と同様の存在や、それを感じ取ることができる者にしか分からないため、ユグドラシルには干渉できないのだ。

しかしティアちゃんはユグドラシルの電気信号と異なる力で干渉して周囲に展開している。

言わば、ティアちゃんとユグドラシルの電気信号による小さな衝突が起こっているため、電子機器にしか影響が出ていないのだ。

「そしてティアには、上位元素を無意識に電気へ変換する癖がある。感情的に変換された上位元素は、電気信号化された思念そのもの。それがさらにティアの干渉力を増大させ、ユグドラシルの干渉を跳ね除けたのよ。それが電磁障壁の正体」

干渉を跳ね除けるには、それを上回るほどの力が必要となってくる。しかし先ほど膨れ上がったティアの気ならばそれを可能としている。

キーリの話を聞いていたティアちゃんが、頭を押さえながらキーリに訊ねた。

「じゃあ……今のティアなら、ユウたちを守れるの？」

「そうよ。あなたが強く念じ、上位元素を生成し続ければ、電磁障壁は維持されるわ。その内側であれば、悠たちの上位元素が干渉を受

けることもないはずよ」

「わかったの……ティア、頑張る」

ティアは頷き、頭から手を離した。そこには玉のような汗が滲んでいる。

増幅した力がティアちゃんの精神にかなりの負荷を掛けているのだろう。体に後付けの器官を付与されて、拒絶反応があるのも当然だ。

僕は枝への攻撃をやめ、ティアちゃんに近づいて手を翳した。

「体に負荷が掛からないようにユグドラシルの本体に着くまでに力を送るよ」

「リヨウ、ありがとなの」

掌てのひらから生成された気をティアちゃんに注ぎ、彼女はお礼を言いながら架空武装である紅の翼を背中に広げた。

「ユウ——みんな、付いてきて。ティアが、ユグドラシルのところまで、連れて行くの」

彼女がそう言うと、リーザさんが無言で歩み寄んでその体を抱きしめる。

「——分かりました。お願いします、ティアさん。けれどあなたは障壁の維持に集中してください。わたくしが、あなたを運びますから」

「ありがとなの……リーザ」

ティアちゃんは架空武装を消し、リーザさんの腰にしがみ付く。

「オオシマ・リヨウ、あなたには言いたいことがあります……それはユグドラシルを倒してからですわ。今はティアさんに力を貸して、終わった後は覚悟してください」

リーザさんは僕が皆に”鏡の城”でのことを忘れてなかったよう  
で、びしっと指先を僕の方へ向ける。

「ああ、分かってる」

僕は頷き、そのままティアに気を注ぎ込む。

「……悠お兄ちゃんは、わたしが運ぶ」

レンちゃんは悠の右手を引っ張って見つめていた。

この後の作戦では、悠とレンちゃんの連携が鍵となる。そのため悠と二人で行動した方がいいだろう。

「ああ、よろしく頼む」

悠はレンちゃんの手を握る。それを確認した深月さんはイリスさんに近づいて、彼女の手を掴んだ。

「では、イリスさんは私が運びましょう。そういうわけで——  
篠宮先生、行つて参ります」

壊れたノートパソコンを手に呆然としていた篠宮先生は、苦笑を浮かべて頷く。

「ああ……もうサポートもできないようだから、後は君に任せよう。竜伐隊隊長——物部深月」

あえて役職名を付けて、篠宮先生は深月さんと呼んだ。

先ほど、責務を放棄すると言った深月さんは、少しバツが悪そうな表情を浮かべた後——姿勢を正して敬礼する。

「了解しました。竜伐隊隊長として、責務を果たします」

◇

ティアちゃんを抱えたリーザさんを中心に、僕たちは夜空を駆ける。

行く手には、凄まじい勢いで成長するユグドラシルの枝。

もう正確な干渉範囲はモニターできないが、気を探るともうすぐ干渉範囲へと近づいていた。

僕たちは用心して高度を下げ、ユグドラシルの干渉範囲へ突入した。

その際、悠たちの架空武装に変化はない。上位元素への干渉と物質変換の妨害をされる気配がないことを確かめ、皆は高度と飛行速度を上げる。空が微かに白んでいるため夜明けが近いのだろう。

先頭を飛ぶのはイリスさんを抱えた深月さん。そして最後尾には

悠を運ぶレンちゃんと、キーリが並んで飛んでいた。

「まさか——キーリも付いてくるなんてな」

悠はレンちゃんの手引かれて空を飛びながら、隣にいるキーリに声を掛けた。

「ここまで来たんだから、最後まで見届けさせてもらうわ。もちろん見ているだけじゃなくて、手も貸してあげる。足を引っ張ったりはしないから安心なさい」

「お前の実力は微塵も疑ってないさ。けど、何か企んでいるんじゃないかと警戒はしている」

悠は決して信用していないことをキーリに伝えた。当然のことだと思っている。しかし僕はキーリの目的を知っているため、エルリア公国で再会した時から警戒はしていない。

僕は飛行しながらティアちゃんに気を注ぎ込むで体力を回復させ、ユグドラシルの枝が来ないように気を張っていた。

すでにここはユグドラシルの枝に覆われた天蓋の下。毛細血管のように空を塞いでいた木の枝が不気味に蠢き、槍のように鋭い無数の枝が僕たちへと殺到する。

「全員、防壁を展開！ このまま強引に突破します！」

深月さんが鋭い声で指示を出した。

「早速出番みたいね」

キーリはにやりと口の端を歪め、片手を天に翳す。

「あんな燃えやすそうな枝なんて、私の”禍炎界”に立ち入るともできないわ」

すると僕たちに迫っていた枝が突如として炎上し、細かな灰となった。

彼女は上空に高熱の見えない壁を展開したのだろう。深月さんたちも風の防壁を張ったようだが、そこに届く前に全ての枝が灰燼と帰す。

次第に明るくなる空の下、行く手には大きな富士の山と、それよりも高いユグドラシルのシルエツトが浮かび上がった。

「目標視認！ 富士山を越えたら、目標までおよそ十キロ——」

狙撃可能距離です。イリスさん、出番ですよ！」

「うん！」

イリスさんは、深月さんの言葉に届く。

「富士山通過後、私とリーザさん、そしてイリスさんで本体へ総攻撃を仕掛けつつ、さらに接近を試みます。フィリルさん、アリエラさんは引き続き防壁を展開。兄さんとレンさんは本体破壊後の”エーデルウインド霊顕粒子”エーデルウインド散布に備えてください。亮さんはユグドラシルの魂が出てきた際に止めとどめをお願いします」

「了解！」

深月さんの指示に僕は頷く。

「——あれ、私は？」

名前を呼ばれなかったキーリが問いかけると、深月さんは冷たい声で答えた。

「手伝っていただけののなら、攻撃に参加してください」

「あら、あんまり当てにされてない感じかしら？」

不満げきキーリは頷く。まあ、当然の反応だな。

すると深月さんに運ばれていたイリスさんが振り返り、明るく笑いかける。

「そんなことないよ。キーリちゃん、一緒に頑張ろ！」

「……ち、調子狂うわね。まあ、いいわ——せつかくティアが作ってくれた機会なんだから。言われるまでもなく、本気で暴れるつもりよ」

瞳に凜びつ猛もつな色を宿らせ、キーリは言う。

雪を頂く富士の山が間近に迫った時、急に枝からの攻撃が止んだ。その時、リーザさんが裏返った声を上げた。

「見てください！ ユグドラシルの形が——」

彼方かなたにあるユグドラシルの高い幹——その中ほどが不自然に膨らんでいく。

そしてその膨らんだ箇所から、異様に太いえたが迫り出すのが見えた。

そこでついに太陽が昇ったらしく、空が一気に明るくなる。後方——

——東からの陽光が微かに僕たちの目を眩ませた時、ユグドラシル方からエネルギーを感じ取った。

「みんな！ 今すぐ急降下なの！」

するとティアちゃんの焦った叫びが耳に届く。

「ユグドラシルが——ティアを狙ってる！」

切迫したティアちゃんの声を聞き、皆は状況が掴めないまま飛行高度を落とした。

次の瞬間——僕たちの頭上を眩い光が駆け抜ける。

「い、今の何!?!」

驚きの声を上げるフィリルさん。

「分からない——何かがユグドラシルの方から飛んできたみたいだったけど……」

アリエラさんも状況を把握できてない様子だ。

「避けて！ まだ狙われてるの！」

そこにティアちゃんの声が響く。

「さらに降下！」

すぐさま皆に命令を出す深月さん。

皆がその指示に従った直後、またもや閃光が上空を通り過ぎた。

「なるほどな……ユグドラシルは電磁誘導で物体を高速射出して攻撃してるかもしれんな」

僕がそう言うと、リーザさんが焦った声で叫んだ。

「それって電磁加速砲じゃありませんの!?! そんなもので狙われたら、回避なんて間に合いませんわよ!?!」

彼女の言葉を聞いたキーリが落ち着いた様子で口を挟んだ。

「——大丈夫よ。ティアは二度も事前に攻撃を察知したでしょう? ティア、何か感じたのよね?」

キーリに問いかけられたティアちゃんは、小さく頷いた。

「うん、何だか、びりって怖い感じがしたの」

「やっぱり——ティアの角は、外からの電磁波にも敏感なのね。

これは意図した能力じゃないけど、ティアがいれば何とか回避は可能はずよ」

そうキーリが言った直後、ユグドラシルからエネルギーを感じ取り、ティアちゃんもそれに気付いて表情を変えて叫んだ。

「っ——また来るの!」

「全員、右へ回避!」

即座に深月さんが号令を出す。

ユグドラシルの幹から突き出した太い枝から、光の玉が放出されるのが見えたが、僕たちのすぐ左脇に眩い光が通り過ぎた。

リーザさんか言った通り、見てから避けることは不可能だ。しかし僕からすればこんな攻撃は”世界神”から何度も喰らっているため、余裕で避けられる。

ユグドラシルはティアちゃんを危険視しているのだろう。悠を無傷で手に入れたいために先に排除しようとしたと思う。

「またまた来るの!」

僕たちはティアちゃんの指示でユグドラシルのレールガン回避しつつ、着実に距離を詰める。

そしてついに、富士の山頂を越えた。

回避したレールガンが富士の三肌を抉り、土砂を舞い上がる中——  
—深月さんは号令を掛ける。

「ユグドラシルの本体へ、攻撃を開始します! 本体がCPUのようなものなら、ダメージを与えることで演算能力は落ちるはず。無制限な成長や再生にも歯止めを掛けられるでしょう」

「了解!」

応じるのは攻撃役のイリスさんとリーザさん。

キーリも「分かったわ」と不敵に笑い、前へと出た。

深月さんは五閃の神弓を構え、イリスさんは左腕で深月さんの腰にしがみ付きつつ、左手を翳す。

「来たれ、来たれ、時の欠片——」

イリスさんが祈るように呟くと、手の中に赤い光が生まれる。紡がれる言葉は、イリスさんが意識を集中させるための呪文。”カダストロフ 終末時間”を使うために多少アレレンジを加えたようだ。

「——ケリユケイオン・カタストロフ 終末の杖!」

掛け声と共に、赤い輝きが杖の形を取って具現する。一見すると色が違うだけの架空武装だが、あの杖に上位元素データマターは用いられてはいない。

以前ミッドガルでイリスさんが見せた”終末時間”の光を収束した杖だろう。

「イリスさん、私に続けてください！」

イリスさんが攻撃準備を行っている間に、ユグドラシルへの狙いを定めていた深月さんが、初撃を放つ。

「終の矢——空ラスト・クオークへ落ちる星！」

放たれるのは、”赤”のバジリスクとどに止めを刺してきた反物質の矢。

けれどその弾道を遮るように、頭上に広がった杖が地上へと殺到し、絡み合い、壁を作り上げた。

その壁と接触した深月さんの矢は巨大な爆発を起こし、杖を消滅させる。けれど距離があったことと空間の歪みに触れてパワーアップしたため、反物質の爆発はユグドラシルの本体には届いていない。

天蓋となっていた枝は、僕たちの頭上からも襲いかかったが、フィリルさんとアリエラさんの防壁によって弾かれる。しかしその間にも、枝によって編まれた新たな壁がユグドラシルの前<sub>に</sub>出来上がっていた。

「あんなに防御を固められては、本体まで攻撃が届きませんわ！」

「大丈夫だよ、リーザちゃん。あたしが全部消し飛ばすから！」

赤い杖の先端をユグドラシルへ向け、イリスさんは鋭く告げた。

「終末よ、成れっ！」

時を破却する赤い光が、黎明れいめいの空を貫き、ユグドラシルが編み上げて枝の防壁を呑み込むと——一瞬で風化させて塵ちりへと変えた。

さらに光の勢いは衰えず、そのままレールガンの発射口を直撃する。

浴びるほどに時を奪うイリスさんの光が、ユグドラシルの巨大な幹を削り取り、貫通した。

レールガンの発射口があった場所に、大きな風穴がかく。



「貫け、閃光っ！」

リーザさんが射抜く神槍の穂先から得意の陽電子砲を放ち、ユグドラシルの上部——枝の根元を直撃した。

本体との繋がりを断たれた枝はびたりと動きを止め、そのままゆっくりと地上へ落下する。

僕たちは落下する枝の隙間をすり抜けるようにして高度を上げ、ユグドラシルの間近に迫った。目の前に聳えるのは、あまりにも大きな巨木。

歪みに触れた影響とヴリトラからの上位元素の干渉により巨大化した樹木。皆はその姿に多少驚いていた。

## 新たな中枢

「今度は、私が行くわよ」

巨大な樹木を目の当たりにしても、キーリは全く臆した様子もなく、右手を天に翳す。

「——禍炎剣」

空へと延びる緋色の閃光。キーリはそれを剣のように振り下ろした。

ユグドラシルの本体を縦一文字に裂いた閃光は、幹の中ほどまで食い込み、大きな爆発を起こす。その衝撃でユグドラシルの幹が左右にバキバキと割れていった。

「今度は——当てます」

そして深月さんは、キーリの攻撃で生じた裂け目を狙い、再び反物質の矢を放つ。

幹の内側から真っ白な対消滅の輝きが溢れ出した。空間の歪みで強くなっても内側は大したことはない。内部で起こった爆発は、ユグドラシルの体を大きく膨張させ、均衡を失った体は自重で崩壊していく。

「そろそろ頃合いでしょう。地上へ降りて”エーテルウインド 霊顕粒子”の散布と対竜兵装と気功波による精神攻撃に移ります」

崩れ落ちるユグドラシルを見て、深月さんは指示を出した。

「分かった」

僕は頷いた後、気を高めて超サイヤ人2へと変身した。

歪みに触れて強くなったユグドラシルを倒すにはそれだけの力が必要だ。全身からスパークが起こっており、皆は巻き込まれないように僕から少し距離を取る。

「まさか、これほどの力を隠し持ってたなんて……」

キーリは驚愕の声を上げていた。エルリア公国の大瀑布でフレスベルグとの戦いの時に変身したが、キーリは王宮に待機していたため、遠くでしか超サイヤ人2の力を見ていない。

僕は悠とレンちゃんが”霊顕粒子”でユグドラシルの魂を具現化

するまで気を貯める。

悠とレンちゃんは上位元素ダークマターの受け渡しと対竜兵装を撃つ準備をするために地上へと降りた。

「悠お兄ちゃん……！」

「ああ、やるぞ！」

悠の手をぎゅつと握りしめていたレンちゃんの手を、強つ握り返す。

このままユグドラシルの体を壊すだけでは、奴はまた別の場所に中樞を移す。

だからその前に——本体を壊した直前に、その中身を引き摺ひずり出し、破壊しなければならぬ。

僕は見通しのいい場所に降りた悠のレンちゃんの元へ向かい、皆は僕たちを守るように空気防壁を展開した。

ティアちゃんがユグドラシルからの干渉を防いでくれている中で、悠は上位元素を生成した。

「架空武装——ジークフリート」

悠が作り上げたのは装飾銃を模した架空武装。

そしてレンちゃんはジークフリートに手を添えた。

「わたし、悠お兄ちゃんのことだけ考える。お兄ちゃんも、わたしのことだけ考えて。そしたらきつと、全部渡せる」

「——分かった」

悠が頷くと同時にレンちゃんの上位元素が彼の元に流れ込んでくるのを感じた。

それは恐らく制御に成功したことのない膨大な量。

しかし、悠の架空武装の形は乱れない。その大きさだけを、安定して増やしていった。

互いが互いのことを強く想うことで、上位元素は無理なく混じり合う。

日本に来てから二日経ち、悠とレンちゃんは特訓を重ねてきた結果が表れる。

架空武装はあつという間に、数十メートルの大きさへと達した。

通常の物質ならば支えることも、バランスを取ることも不可能に近いサイズだが、架空武装を構成する上位元素には気と同じで質量がなく、意思に感応する性質がある。

ゆえに悠が腕力で支えずとも、心で念じるだけで巨大化したジークフリートは宙に留まった。ティアちゃんや電磁障壁を張ってくれているおかげで、上位元素が奪われることもない。

悠は巨大化したジークフリートの銃口をユグドラシルに向ける。

「悠お兄ちゃん、あと少し」

「……分かった」

悠は架空武装が崩壊しないように意識を集中し、レンちゃんの心の色が、架空武装を微かに赤く色づく。

「——これで、全部」

そして、レンちゃんの上位元素が全て悠の架空武装へと注がれた。その全てを悠は魂を具現する金色の粒子を纏った一発の弾丸へ変換する。

「エーテル・ブリッド霊頭弾っ!!」

弾丸が放たれると同時に、架空武装は消滅した。

悠とレンちゃんの全てが込められた金色の弾丸は空へ高く高く撃ち上がり——強い光を放って弾け飛ぶ。

一瞬で空の色が、薄い青から超サイヤ人の放つ気と同じ眩い黄金へと塗り変わった。

きらきらと、光り輝く粒子が空から舞い落ちてくる。

天から降る”エーテルウィンド霊頭粒子”は崩壊していくユグドラシルの本体を、ゆつくりと上部から包み込んでいった。

「どうだ……?」

悠は固唾を呑んで様子を見守る。

宮沢健也が予想した通りなら、ユグドラシルの精神が魂へと具現化されるはずだ。

舞い散る光の中に、輪郭が浮かび上がっていく。

それは、予想していた通りの光景で、僕は驚きはしなかったが皆は驚きに息を呑んでら目の前の光景に圧倒された。

「こんな……ありえない」

その中で呆然と呟いたのはアリエラさん。

崩壊するユグドラシルの体から溢れ出るようにして、その魂が具現化していく。

それは——空を完全に覆い、地平の向こうまで枝を伸ばした大樹の輪郭。

五千メートルどころの大きさではない。もつと遙かに大きい。

不自然に途切れたシルエットから見て、”エーテルウインド霊頭粒子”によって具現化しているのは全体のほんの一部。

原作を知っている僕からすれば、予想していたことだ。しかし悠たちは想像の遥か上だと思いい知ったのだろう。

ユグドラシルの本質は、世界中の植物が構築するネットワークだ。その中身が地球規模の大きさでもおかしくない。

ブリュンヒルデ教室の僕以外は立ち竦むが、僕は気を貯め終わり、悠の方へ向く。

「悠、何ボーツとしてるんだ？ あれを壊すんだろ！」

「っ——！」

僕が声を掛けると、悠は我に返った。

「——レン、もう一度上位元素を借りるぞ。今度は対竜兵装を構築する」

「ん！」

レンちゃんも瞳に戦う意思を灯し、悠の右手をぎゅっと握った。

「対竜兵装マルドューク——念式連装砲、彼岸を貫く方舟！」

悠は再びレンちゃんの上位元素を借り、旧文明の兵器へと変換した。

回転可能な砲座の上に、二連装の砲塔が具現した。全体に光のラインが刻まれた連装砲は砲口をユグドラシルへと向ける。

この砲手は思念を増幅して放つ兵器。気功波と同様に通常の物質では干渉できない精神体にも通じる。

「亮、準備は出来たか？」

「ああ、バッチリだ。いつでも撃てるぞ」

僕は全身の気を両掌に増凝縮し、気の塊をユグドラシルへと向ける。

「かゝめゝはゝめゝ波ー!!」

「発射っー!」

凝縮した気功波と強い意志が込められた砲弾が具現化した精神体に命中し、金色の粒子が宙に舞った。

しかし、歪みに触れてパワーアップしたユグドラシルは精神体にも影響を受けており、僕たちの攻撃では壊れる様子ではない。

「っ——発射! 発射! 発射!」

悠はそれでも諦めずに連射するが、それでも具現化したユグドラシルの精神体は壊れない。

歪みの影響だけでなく、”黒”のヴリトラの<sup>ダークマター</sup>上位元素を干渉して大きくなり続けているため、フレズベルグよりも強い。

僕は超サイヤ人2の状態で気を貯めていたのでかめはめ波を放ち続けられるが、悠は何度も撃つ度に限界が近づいてくる。

「はあっ、はあっ、はあっ……」

悠は何発も撃ち続けたため、荒い息を吐いていた。

「く……そっ……」

散布した”<sup>エーテルウインド</sup>霊顕粒子”が少しずつ薄くなりつつあり、僕は正体がバレる覚悟で超サイヤ人ゴッドに変身しようとした。

その時、悠の周りには皆が集まっていた。本人もその事に気づき、戸惑いの表情を浮かべていた。

「兄さん、亮さん、大丈夫ですか!?!」

「モノノベ! オオシマ!」

「ユウ! リョウ!」

深月さん、イリスさん、ティアちゃんの声が響き、悠は倒れそうになった体を起こすが、今度は後ろによろけた。

「二人とも、しゃんとしてください」

「頑張って……物部くん、大島くん」

「物部くん、大島くん、しっかり」

リーザさん、フィリルさん、アリエラさんが後ろで悠の体を支えた。

「悪い——助かった」

悠が謝ると、一人離れた場所に立つキーリが問いかけてきた。

「悠、もう限界かしら？」

「いや……まだまださ。何だか、力が湧いてきた」

先ほどから僕と悠の気が回復していることは分かっていた。皆の想いが僕と悠に力を与え、悠は何とか耐えていた。

すると悠は精神力が上位元素ダークマターのように受け渡せることに気付いたようで、皆に問いかけた。

「皆、上位元素を明け渡す時の要領で、”想い”を俺たちに送ってくれないか？」

「想い……？」

きよとんとした表情で首を傾げるイリスさん。

「それならいけるかもしれないぞ」

「——分かりました。想いだけですな」

そう言つて深月さんは悠の背中を支え、手に力を込める。他の皆も僕と悠に想いが送られてきた。

それによつて先ほどまでへばっていた悠の体力が徐々に回復していった。

彼岸を貫く方舟アの砲口から強い気が生成されていき、かめはめ波を喰らい続けているユグドラシルの方へと向ける。

「行くぞ——皆」

「はいっ！」

悠の呼びかけに、皆は応じる。そして、全員で声を合わせ——心を撃ち放った。

「発射アツ——！！」

二つの砲口から光が膨れ上がり、ユグドラシルへと放たれる。

発射と同時に念式連装砲は内側から弾け飛び、崩壊した。

二つの光球は絡まり合い、一つの巨大な砲弾となつてユグドラシルの精神体に着弾する。

それにより、砲弾と皆の想いで威力が上がったかめはめ波は爆発を起こし、金色の粒子が大きく舞い上がった。

大気がぴりぴりと震え、”エーテルウインド 霊頭粒子”で構成されるユグドラシルの輪郭が揺らいだ。

霧散した粒子が宙に解けた時、ユグドラシルの精神体には大きな穴があいていた。

けれど——精神体全体が崩壊する様子はない。

しかしこれでよかった。皆の想いで威力が上がったかめはめ波は、実は最初から力を弱めて放ったからだ。

その理由はこれから仕事するある少女のためである。

「これで十分よ」

キーリは満足そうに微笑んで僕たちに近づいた。

「十分って……まだユグドラシルの中核意識は破壊できていないんだぞ？」

「けれど、ダメージは与えられた。だから後はあなたの仕事よ——ティア」

悠に力を貸してくれていたティアちゃんの肩を叩き、キーリは言う。

「ティアの、仕事？」

ティアちゃんはきよとんとした顔でキーリを見つめ返す。

「あなたなら聞こえるでしょう？ ユグドラシルの悲鳴が」

「……うん。でも、めちやくちやで——何を言っているのか分からないの」

「それはまともに中核が機能してない証拠だわ。今ならきつと、ティアはユグドラシルに勝てる」

口の端を歪め、キーリは言葉を続ける。

「あなたの角は、ユグドラシルの干渉を防御するためだけにあるんじゃないわ。それは、ユグドラシルを食い殺すための武器。あなたがドラゴンに至るための力よ」

「角が、武器……ドラゴンに至る——」

何か気付いた様子で、ティアは頭の角に触れた。

「悠を乗っ取ろうとしたユグドラシルに、同じことをやり返してあげなさい。ティアには、それだけの力がある」



「っ——うん！」

自分が何をすべきか悟った表情でティアちゃんは頷き、背中に翼型の架空武装を構築する。

「おい、ティアー！」

悠が止まる間もなくティアちゃんは空へ舞い上がり、ユグドラシルの方へ飛んで行った。

「キーリ、ティアに何をさせるつもりだ！」

悠はどういうことかとキーリを睨んだ。

「——私は、選択肢を示しただけ。全てはティアが自分で決めたことよ。あの子の覚悟を安く見ないで」

強い想いの籠った瞳で睨み返された悠は息を呑んだ。

「あなたたちも、余計なこととはしないで——ティアの戦いを見守りなさい」

さらにキーリはティアちゃんを追おうとしたレーザーさんたちを、鋭い口調で止める。

「あの子が何をしようとしているのかは、すぐに分かるわ」

飛んで行くティアちゃんの背中を見つめ、キーリは静かに告げた。

ユグドラシルの精神体に辿り着いたティアは、そのまま僕と悠があけた穴へと飛び込む。

そして数秒後、ユグドラシルを中心にして眩い電光が迸った。

◇

金色の粒子が舞う空を飛びながら、ティア・ライトニングは思い出す。

初めて彼に——物部悠に出会った時のことを。

当時のティアは、自分自身のことをよく分かっていなかった。

両親はティアのことを人間だと言いながら、物質変換で宝石を生み出すよう求めた。

それからティアと両親は武装集団に捕まり、今度は“D”として  
上位元素生成能力データマターを利用された。

だから——その武装集団から自分を救い出してくれた物部悠に、  
ティアはこう訊ねたのだ。わたしは、なあに——と。

そして彼は、たどたどしく、ティアの母国語で答えた。

『君は——可愛い、女の子、だよ』

それは、とても温かな回答。

そうなりたい、そうであって欲しいとティア自分も願う答え。

ティアは、ずっとその言葉を胸に生きてきた。

キーリと出会い、ドラゴンとして育てられ、バジリスクに見初めら  
れ——一時はその夢を諦めたけど……彼と再会して、リーザたちに  
救われて、ティアは決めた。

リーザたちと一緒に——人間として生きること。

物部悠におって一番可愛い女の子——”お嫁さん”になること  
を。

そして、彼が自分を守ってくれたように、自分も彼を守るのだと。

「ユウは、ティアが助けるからっ!」

ティアは己の架空武装——竜の紅翼ティアマトから風を生み出し、ユグドラ  
シルの精神体内部へと突入した。

辺りは金色の粒子に覆われ、眩しくてほとんど何も見えない。ティ  
アの頭にはユグドラシルの”叫び”が聞こえてくる。

『思考、破綻——崩壊、拒絶——拒否、拒否、修復、最  
優先——』

声だけではない。形にならない感情もティアは角を介して感じ取  
ることができた。

「——怖がってる」

ティアは呟く。

ユグドラシルは怯えている。意識がなくなること、存在が失われ  
ることを、死ぬことを——とても、とても、恐れていた。

『ノイン——必要、必須——未確定、第九機能、唯一の——  
最適、生存戦略——』

そして欲している。

物部悠のことを、生きるために必要としている。

ティアには、そのことがはっきりと伝わってきた。

何を恐れているのかは、分からない。ユグドラシルの思考は支離滅裂で、理解できない。

けれど――。

「あげないのっ」

はつきりとティアはユグドラシルに宣言する。

「ユウは、ティアの旦那さまになつてもらうんだからっ!!」

想いを全てを、上位元素ダークマターに込め、電気へと変換し――解き放った。

電磁フィールドとして拡張されたティアの意識が、ユグドラシルの内側で膨れ上がる。

彼岸を貫く方舟アとかめはめ派による攻撃で破壊され、バグを生んだユグドラシルの中枢システムへ、ティアの意識が入り込んだ。

ユグドラシルへのハッキング――それこそがティアに与えられた角の、真の役割。

「っ……」

頭に走った激痛にティアは顔を顰しかめた。ユグドラシルが抵抗し電気信号として入り込んだティアの意識を追い出そうと足掻あがいている。

「負けないの……今度はティアが、ユウを守るのっ!!」

意志を牙に、感情を爪にして、ユグドラシルの意識を食い破り、引き裂くティア。

上位元素から変換される電気によって限りなく増幅されたティアの思念が、中枢システムを侵食していった。

周囲を包む金色の粒子が揺らぐ。それはユグドラシルの精神体の変容を始めた証明。

『――拒否、拒否、拒否、不可、負荷、不可――消滅、拒絶、拒絶っ――!』

必死に抵抗するユグドラシルだが、CPU本体を物理的に破壊され、その精神にもダメージを負った今、演算能力は極限まで低下していた。そして逆にユグドラシルの意識を喰らったティアの思念は、圧倒的

な処理能力を手に入れていく。

だがあまりに拡大した自我は、彼女本来の在り様を霞かすませてしま  
う。人間が本来持ち得ない処理能力を得たティアの思考に、心が追い  
付かない。

「ティアは……何だっけ?」

膨張した自我の中、彼女の意識が揺らぐ。

すると、どこからか温かい空気が迫ってきた。それは初めて会った  
彼と同じもので、胸に刻まれた彼の言葉が、ティアの意識を繋ぎとめ  
た。

——君は、可愛い、女の子、だよ。

奥歯をぐつと噛み締め、全ての上位元素データマターを絞り出し、ティアは己の  
意思で全てを塗り替える。

「そうなの……ティアは……ティアは、ユウのお嫁さんになる  
のっ!!」

そして彼女の意思は植物が形成するネットワーク内に駆け抜け、ユ  
グドラシルの本質へと手を伸ばした。

彼女は知る。電気を操る能力など、本質の一端に過ぎなかったこと  
を。

その権能の名は——アカシックレコード 全知回路。

ティアはそこで、全てを垣間見た。



ゆらりと、金色の粒子で構成されていたユグドラシルの精神体が歪  
み、溶けるようにして形を変えていった。

「ティアは……何をしたんだ」

驚きながらその様子を眺めていた悠は、すぐにそれ以上の驚愕を味  
わっていた。

揺らぎ、薄れつつある“エーテルウインド 霊顕粒子”がまだ、何かの輪郭を描き出し

た。

それは大樹ではなく——ティア・ライトニングの姿を象かたどっていた。

「上手く行ったようね。今、ティアがユグドラシルの中枢を乗っ取ったのよ」

キーリが嬉しそうな表情で僕たちに説明する。

「な……中枢を？」

「ええ、思考を電気信号として出力できる今のティアは、感覚的な電子干渉——つまりユグドラシルへのハッキングが可能なの。それで中枢をクラックし、自分を新たな中枢として認識させたんでしよう」

淡々と答えるキーリは、「霊顕粒子」が薄れて行くのを見て笑う。

「私は初めから、ティアにユグドラシルを喰くわせるつもりで育てていたのよ。まあ、その時はユグドラシルがここまでの化け物だって知らなかったから、普通に挑もんだだけじゃ失敗していたと思うわ。上手く行ったのは、悠と亮が中枢にダメージを与えてくれたおかげね」確かに中枢を乗っ取るにはこれが最も適した方法なのは原作を読んでいたため分かっていた。

しかしユグドラシルの権能は乗っ取ろうとすればするほど自我を失い、自分が何者なのかすら分からなくなる。

そのため、僕は“魔人ブウ”の他者の技を一度見ただけで、すぐに自分のものにする能力を使った。

その応用として、他者の気と同じ性質を持つ力に変えてティアちゃんに注ぎ込んだ。

その甲斐があったのか、ティアちゃんは自分が分からなくなることなくユグドラシルの中枢を乗っ取った。

朝焼けの空に散っていく金色の粒子。

ティアちゃんの姿を象かたどっていた粒子も消えていき、そのうちがわから現れたのは、崩壊したユグドラシルの残骸。そして——光り輝く翼を背負った、一人の少女。

僕たちの元へと戻ってくる少女を見上げたキーリは、誇らしげに告

げた。

「見て、あれが私の育て上げた新たなドラゴン——ティア・ライ  
トニング・ユグドラシルよ」

## 小さな命

時を少し遡り——処は宮沢健也が所長を務めるアスガルの研究所。

ユグドラシルの干渉圏内に呑み込まれ、電気系統が全てダウンした施設の中は、暗闇に包まれていた。

だが地下四階——窓からの星明かりも射し込まない区画に、何故か薄らとした淡い光が満ちていた。

その光源は研究室の奥、開いた隔壁の向こう。

冷却装置も止まった室内中央にある、開かれた棺。

宮沢健也はその前に佇み、じつと棺の中を見つめていた。

だが静まり返った研究室に、かつんと足音が響く。

そしてさらに、カシャリ——と銃を構える音。

「動くな」

凜とした声が、停滞した空気を震わせた。

「……ああ、そういうえば警備システムがダウンしていたんだっとな。招かれざる客が来るのも仕方ないか。君は誰だい？」

宮沢健也は振り返らないまま、気だるげな声で訊ねる。

「余計な詮索はしないのが身のためだ。命が惜しければ、オレの質問に答えろ」

鋭い口調で告げるのは、ジャンヌ・オルテンシア。ユグドラシルが電気的なシステムを全てダウンさせた隙を突き、密かに研究所へ潜入していた元スレイプニルの少女。

一度は撤退を余儀なくされた研究所の秘密を掴むため、ジャンヌはキーリと別行動を選んだ。

その彼女は元隊長である悠とは会えないと若干悲しんだが、それでも一番慕っている彼の脅威となる情報があるだろうと思ひ、こうして研究所に来た。

「はいはい、どうぞ何でも聞いてくれ。どんな質問にでも答えるよ。死んでしまったら研究を続けられないからね」

命の危機だというのに、宮沢健也は全く恐れた様子もない。

彼女は金色の瞳で宮沢健也の背中と発光する棺ひつぎを交互に見て、言葉  
を続ける。

「フレイズマルに関係する何かを、お前は知っているか？」

ジャンヌはキーリと共に調べていた情報を口にするが、宮沢健也は  
何のことか分からない表情を浮かべた。

「……フレイズマル？ 初めて聞く名だね」

「では、”悪ファフニール竜”については？」

重ねてジャンヌが問いかけると、宮沢健也は少し考える素振りを見  
せた。

「ファフニール ……そういえば、ニブルでファフニール 計画  
なるものが動いていると噂うわさを聞いたことがある。確か、廃棄権能ゴード・ロストの仮  
説に基づいた計画だったか……」

「廃棄権能？」

「ドラゴンが特殊な能力を持っているように、人間にも何か失わ  
れた特別な力があるかもしれない——そんな期待から生まれた眉  
睡な仮説のことさ。実は私もその仮説に興味はあったが、ファフニ  
ール計画にあるものとは別の力を調べている」

「別の力だと？」

ジャンヌは宮沢健也の言葉に反応し、彼は言葉を続けた。

「君も知っていると思うが、五年くらい前から”青”のヘカトン  
ケイルや”紫”のクラークンといったドラゴンを倒している少年の  
力だ」

「っ!？」

ジャンヌはその少年のことを知っていた。五年前、数々のドラゴン  
を圧倒し、今は悠たち”D”のいるミッドガルに住んでいる存在……  
大島亮だ。

彼は世界の創造と破壊を司る神、”世界神”という存在である。

ジャンヌはその少年を全くと言っていいほど信用していない。単  
独でドラゴンを倒す存在が何故悠たちと協力しているのかが疑問で、  
もしかしたら悠の脅威となるだろうと思っているからだ。

「その少年の力は我々人間の発するエネルギーに関係しているよ



うだが、私はまだ詳しく調べてはいないのだ。だからそれ以上は何も言えないよ」

「フアフニール計画については知らないのか？」

「さっきも言っただろう。私は大島亮について調べていると。だから”悪竜”には何も知らない」

彼の返事を聞き、ジャンヌは口元に手を当てて呟く。

「やはりこの件に関して詳細を知るには、アスガルではなくニブルの施設を当たる必要があるか……」

「用事はもう終わったかい？」

宮沢健也が問いかけると、ジャンヌは顔を上げた。

「いや、まだだ。ここで行われている研究についても話せ。他の施設に比べ、この研究所には不審な点が多すぎる」

「……ここはドラゴン対策国際機関アスガルの研究所だ。行われているのは当然、ドラゴンの研究さ」

肩を竦め、答える宮沢健也。

「なら、その光る箱には何が入っている？」

ジャンヌは淡い光を放っている棺を見ながら訊ねた。

「死体だよ」

「……死体？ いったい何の死体だ？」

「ドラゴンの研究をしているのだから、ドラゴンの死体に決まっているだろう？」

「な——」

息を呑み、ジャンヌはゆっくり棺へ近づいて行く。

「確かめさせてもらうぞ。お前は動くな」

宮沢健也に警戒しつつ、棺の中が見える位置に移動するジャンヌ。棺の中に納まっていたのは、太く、中央が膨らんだ銀色の触手。人間大の大きさで、両端は千切れた断面を晒している。そして紫色の淡い光が、触手の内側から溢れ出していた。

「これ、は……」

「パープル・ドラゴン——」紫のクラーケンの残骸だよ。二年前、二体のクラーケンが討伐された時、触手の残骸が大量に海へ漂

流した。ミスリル製の触手は資源として有用で、貴重なサンプルでもあったから、アスガルは可能な限りその残骸を回収したのさ」

宮沢健也は淡々と説明しながら、下を指差す。

「研究所の最下層は巨大なプールになっていてね。そこにはクラーケンの触手が大量に保管されている。その中には三年前に大島亮がカリブ海のセントマーティン島というところでクラーケンと戦った時に引き裂かれた物もある。けれど、その中でもこの残骸は特別なんだ」

瞳にぎらぎらとした探究の光を灯し、彼は棺を示した。

「特別？」

緊張した声でジャンヌは問いかける。

「これは確かに死体さ。クラーケンと化した”D”——篠宮都の残骸だ。けれど、この触手は死体でありながら、命がある」

「何を言っている？ 命があるのなら、死体ではないだろう」

眉を寄せるジャンヌに、彼は苦笑を返した。

「分からないかい？ 言葉が足りなかったかな。私はね、死体の中に命が宿つていると言っているんだよ。触手の内に見える光……それこそが新たな命の輝きだ」

「新たな命……？ まさか——」

ジャンヌは絶句し、不自然に膨らんだ触手を凝視する。

驚愕する彼女へ頷き返し、宮沢健也は厳かに告げた。

「そう、この残骸には——つがいとなったクラーケンの子が宿っているのさ」

◇

朝焼けの光が射す車の地平に向かって、僕たちを乗せた大型バンは走る。

車を運転するのはアスガルの職員である中年女性で、助手席に座る

のは篠宮先生。

僕たちブリュンヒルデ教室の生徒たちは、広い後部座席に並んで腰を下ろしていた。

「ティアちゃん、なかなか起きないね」

悠に寄りかかつて眠るティアちゃんを眺め、イリスさんが心配そうに言う。

ユグドラシルの中枢を乗っ取ったティアちゃんは、僕たちの元に戻ってくるると同時に気を失ってしまった。

それから僕たちは、ティアちゃんを連れて篠宮先生の元まで戻り、車で研究所へと引き返している。

「大丈夫よ。私たちのところへ戻って来た時、ティアはちゃんと自我を保っていた。ハッキング時の負荷も耐えられたんだから、じきに目を覚ますわ」

イリスさんの隣に座るキーリが静かに告げた。

「———というか、何であなたまで車に乗っているんですの？」  
キーリのせいで少し窮屈きゆうくつになった座席を見渡し、リーザさんが訊たずねる。

当然のような顔をしてキーリは車に乗り込んだため、ここまで誰もつつこむ者がいなかったのだ。

「私も研究所に用があるのよ。ジャンヌちゃん……じゃなくて、ジャンが持っているはずだから」

そう、男装女子のジャンヌは悠の前ではジャンという偽名を使って男のフリをしている。

そして彼女が宮沢健也のいる研究所に潜入していることは気を探っていたので分かっていた。

「ジャンが？」

悠は驚いてキーリに問いかけた。

「ええ、だからそこまで運んでちょうだい。協力してあげたんだし、少しぐらい楽させてもらっていいでしょう？」

肩を竦すくめ、キーリは皆に問いかけた。

「……確かに、キーリさんのおかげで助かったのは事実ですから

ね。研究所まではお送りしましょう」

深月は不本意そうな表情ながらも、キーリの願いを聞き入れる。

「でも——このまま戻っていいのかな。ユグドラシルの本体も、根っこの辺りがまだ残ってるし……」

心配そうに後ろの窓——西の空を見ながら言うフィリルさん。

アリエラさんもフィリルさんに同意して頷いた。

「ボクも心配だな。そもそも、いまいち状況が分からない。ティアがユグドラシルの中枢を乗っ取ったって言うけど、この後いったいどうなるんだろう……」

それを聞いたキーリは、肩を竦める。

「ティアは、ユグドラシルっていう大きなシステムの管理者になったのよ。その能力をどこまで扱い切れるかは分からないけど……少なくとも悠が乗っ取られる心配は、もうないと思うわ」

その言葉を聞いて、レンちゃんが安堵あんどの表情を浮かべた。

「……よかった」

小さな声で呟つぶやき、レンちゃんは悠の顔を見つめる。

「悠お兄ちゃん、もう大丈夫そう？」

「——ああ、左腕にも感覚が戻ってる。ギプスを外せば、問題なく動かせそうだ」

悠はレンちゃんに頷きを返し、左腕をぐるぐると回して見せた。

「んん……」

その動きが寄りかかるティアちゃんに伝わったのか、彼女が微妙かすかに呻うめく。

「ティアア？」

悠が呼びかけると、ティアちゃんは薄らまぶたと瞼まぶたを開けた。

「ユウ……？」

悠の顔をぼうつと見つめるティアちゃん。

「ああ、俺だ」

悠が頷くと、彼女はまだ夢の中にいるような表情で口を開く。

「ユウ……ティアね、ユグドラシルの中で、色んなものを見たの。でも……ほとんど思い出せない」

「それでいい。ティアは、ティアであることを覚えていればいいんだ。無理をして、思い出す必要はないさ」

悠はティアちゃんのさらさらした髪を撫なで、できるだけ優しい口調で言い聞かせた。

あんなにも巨大なユグドラシルの精神にハッキングを仕掛けたのだ。どれだけ膨大な情報が彼女の頭の中に流れ込んだのか、想像も付かない。そんなものを把握しようとしたら、脳は正常な機能を保てなくなってしまう。神の僕でもそれは同じことだ。

僕は少し目を閉じてこの世界に空間の歪みが無いか神の気を探る。今のところは発生してないようだ。

いつ歪みが発生するのは分からないが、ここ最近で空間の歪みを浄化しているフードの男が現れてもおかしくないため、周りに気を張り巡らせている。

すると悠とティアちゃんの会話が聞こえていた。皆に届かないほど小さな声で話している。

原作を知っている僕はその内容を知っている。もうすぐ悠の記憶が戻ることは分かっていた。しかしこれから起こるのはある少女二人の恋愛模様だ。

そうなるより先に起こる事態もあるため、関わりと面倒なことになる。その間にフードの男の件が入ってくると苦労する自分が目を映る。

(さて、どうなるかは知ってるけども……面倒なことにならないように)

そう願いを込めて眠気に身を任せて僕は静かに眠りについた。

しかし一ヶ月前から動き出していた唸うねりが関わってくることは無いと予想していたが、それが大きな事態になっていることに今の自分が気づくことはなかった。

## ブラック・メネシス 二つの厄災

目覚めるのは、二つの厄災。

ドツ……ドツ……。

低く、重く、規則的な振動。

暗く狭い研究室の空気が、不気味に震える。

アスガル極東支部第一研究所地下四階——電気系統のダウンによつて館内は闇に閉ざされ、空調や冷却設備なども完全に沈黙していた。

だがドラゴンの死体が安置されている研究室内だけは、淡い紫色の光に照らし出されていた。

光源は棺に納められたクラーケンの残骸。両端が千切れた銀色の触手は、中央部が不自然に膨らんでおり、その内側から紫色の光が漏れ出していた。

棺を覗き込むのは、プラチナブロンドと金色の目を持つ男装の少女——ジャンヌ・オルテンシア。軍服姿の彼女は研究所の所長である宮沢健也に銃を向けたまま、棺の中身を凝視する。

ドツ……ドツ……ドツ……。

響く重低音と共に、触手の内側から漏れる光も明滅していた。

そこでようやく彼女は気づく。これは——鼓動なのだ。

残骸の中に宿った新たな命。つがいとなったクラーケンの子。

この光は生命の輝きであると、先ほど宮沢健也は語った。

ドツ、ドツ、ドツ、ドツ……。

鼓動が速まり、紫色の光が強さを増してゆく。

それはあまりにも不吉な胎動。

もはや加速する心拍を押し留めることは、誰にもできない。

呼吸さえ忘れたジャンヌの前で、膨らんだ触手の表面が細く裂けた。

内から覗いたのは、紫色の瞳。

永い眠りを強いられていた怪物が——今日覚める。

そして……もつ一つの厄災も時を置かず覚醒した。

所は激戦を終えた富士の樹海。

五千メートルもの大きさを誇ったユグドラシルの巨木は、上部が消し飛び——根元付近まで二つに裂けている。

ティア・ライトニングによって中枢機能を奪われ、演算能力も失ったその残骸は、ただ朽ちるのを待つのみ。

だが——変化はユグドラシルの下で起きていた。

大地に食い込んだユグドラシルの根。その隙間から黒い泡のようなものが湧き出ている。

それはまるで、黒色のシャボン玉。

漆黒の泡は、次第に数を増しながら、ゆっくりと空へ昇っていく。

しかし深い樹海の中で、その異常に気付く者はいない——いや、二人ほど気付いていた。

一人はこの世界を五年以上も活動していた神。彼はこの世界のことから起こる未来を知っている。

そのため二つの厄災が目覚めることは分かっていた。

もう一人は正義のため、自らの求めるあるべき世界を築こうとするフードの男。彼はかつてこの世界の神に敗れ去り、復讐を果たすために力を増した元世界神候補。

彼は違う世界からこの状況を一部始終を見ていた。

そうして、二つ目の厄災も解き放たれる。

根に縛られた大地から、自由な大空へと——。



ユグドラシルとの激戦を終えた俺たちは大型バンで研究所へと

戻っていた。

「ユウ……ティアね、ユグドラシルの中で、色んなものを見たの。でも……ほとんど、思い出せない」

ユグドラシルの中枢を乗っ取り、眠りから覚めたティアが夢の中にいるような表情で口を開く。

「それでいい。ティアは、ティアであることを覚えていればいいんだ。無理をして、思い出す必要はないさ」

俺はティアのさらさらした髪を撫で、できるだけ優しい口調で言う。

あんなにも巨大なユグドラシルの精神にハッキングを仕掛けたのだ。どれだけ膨大な情報がティアに流れ込んだのか、想像も付かない。そんなものを全て把握しようとしたら、脳は正常な機能を保てなくなってしまうだろう。

「けど……何か、言わなきゃって……伝えなきゃってことが、あった気がするの」

「だとしても、今すぐじゃなくていい。ゆっくり休んで、元気を取り戻してからにしよう」

「うん……」

こくんと少し不安そうにティアは頷くが、突然はつとした表情を浮かべる。

「——あ、一つだけ思い出したの」

そう呟いたティアの目から、涙が零れ落ちた。

「え？ ど、どうしたんだ？」

俺が慌てて問いかけると、ティアは俺の首に手を回し、ぎゅっと抱き付いてくる。

「ユグドラシルがユウにしたこと、ティア……見たの。たくさん、たくさん……大事な思い出を取られて、きつとユウは、苦しかったの……」

耳元で囁かれたティアの言葉に、俺は息を呑んだ。

イリスたちは、急に泣き出したティアに心配そうな眼差しを向けていた。



亮は<sup>まぶた</sup>瞼を閉じて夢の中にいると誰もが思うが、寝息を立てていないためティアとの会話は聞いているのだろう。

そしてティアは俺にだけ届く囁き声で、こう続けた。

「大丈夫なの。ティアがユウに——思い出を返してあげるから」

「<sup>いた</sup>労わるように悠を抱きしめ、ティアちゃんが耳元で囁く。思い出を奪われた悠の痛みに共感し、涙をぼろぼろと<sup>こぼ</sup>零しながら——。

ちなみに僕は眠気に任せて夢の中に入ろうしたが、二つの気を感じ取ったため気になって眠れなかった。

仕方なく目を瞑ったまま悠とティアちゃんの会話を聞いていると、原作通りの展開へと発展した。

失われた記憶がようやく戻ってくるのだと<sup>あんど</sup>安堵するのが、当然の反応だ。

しかし悠は「頼む」という一言をティアちゃんに返せない。

東京湾岸にあるアスガルの研究所へ戻る車の中、僕以外のブリュンヒルデ教室の生徒と担任の篠宮先生、そして勝手に同乗しているキーリが注目する中、悠は皆に聞こえないように、小声でティアちゃんの耳元に囁く。

「ありがとう、ティア。けど……少し時間をくれ」

「……いいの?」

「ああ、心の準備をしたいんだ」

「そっか——じゃあティア……もうちよつとだけ寝るの」

彼女は悠のために頑張って一仕事しようとしてくれていたのだろう。ティアちゃんは悠に体を預け、すぐに寝息を立て始める。

悠は様子を見ていた皆に向けて声を出す。

「心配しなくていい。落ち着いて、また眠った」

「——少し混乱していたのかもしれないわね。まあ、ユグドラシルを乗っ取った直後なんだから無理もないわ」

キーリはまるで我が子を理解しているような口ぶりで呟いた。

「あれだけのことをして、負担がないはずありませんものね。ゆつくり眠らせてあげましょう」

いつもティアちゃんの世話を焼いているリーザさんも言う。しばらくするとアリエラさんが大きな欠伸あくびを漏らした。

「ふわ……正直ボクたちもクタクタだし、研究所に着くまで休もうよ」

「ん」

アリエラさんの隣に座っていたレンちゃんが、アリエラさんの言葉に同意する。

「そうだね……私も、眠い。本を読む気も起きない」

薄眼を開けると、フィリルさんは眠たそうに目を擦りながら眠気を訴えていた。というか、車の中で本を読むのは完全に酔うため、彼女が気付かないように没収していた。後で返すでしょう。

そんな皆の様子を見て、竜伐隊りゅうばつたいの隊長である深月さんは口を開く。

「では、しばらく仮眠を取りましょう。篠宮先生、構いませんか？」

「構わん——今は休むといい。本当にご苦労だった」

篠宮先生は皆を労ねぎらったが、僕は先に仮眠を取ろうとしていたので、許可を取らずに勝手に取ればいいのにと若干思う。

「おやすみ、モノノベ」

窓の外から射し込む朝日に銀色の髪を輝かせ、イリスさんは悠に笑い掛ける。

「……おやすみ」

悠は彼女に挨拶を返したが、彼は記憶が戻ることに恐怖感じてるのだろう。

悠とイリスさんはお互い両思い。けれど、記憶を取り戻した時……その想いはどうなるのだろうかと思っている。

ティアちゃんの申し出をすぐき受け入れられなかったのは、そんなことを考えてしまったからだろう。

今の想いと自分自身が消えてしまうのではないかという恐れ。

悠はすぐき寝息を立て始めたイリスさんの顔を見つめ、次に深月さ

んへと視線を移した。

深月さんはまだ眠っていないようで、悠の視線に気付いて薄目を開いた。

「兄さんら早く眠った方がいいですよ。研究所に着いて、すぐに休めるとは限らないんですから」

「——ああ、分かった」

悠は深月さんに笑いかけて<sup>まぶた</sup>瞼を閉じた。

大型バンには皆の寝息が響き渡り、僕は二つの気を再び探る。

途中、道が渋滞していたため、アスガルの研究所に帰り着いたのは正午を回った頃だった。

渋滞の原因は、ユグドラシルが引き起こした電子機器の異常。ユグドラシルの中枢をティアちゃんが押さえたことで車は動くようになっていたが、停電時に起きた事故などによって塞がった道は多いらしい。

だが、そうした道を避けてやっと到着した研究所は、原作と同じ展開へと進んでいた。

「何が、あつたんだ……」

眠っているティアちゃんをおんぶした悠が車から降りると、規制線が張られた研究所敷地を前に<sup>ぼうぜん</sup>呆然と眩く。

「煙が見えるけど……火事、なのかな？」

イリスさんが研究所の建物から薄らと立ち昇る煙を見上げて不安そうに首を傾げた。

「停電してる時に事故か何かがあつたんだろ」

僕は眉を寄せて規制線の向こうを眺める。そして研究所の地下深くに気を探るが、僕が探していた生物はいなかった。

施設周辺を固めているのは警察ではなく、武装した兵士たちだ。

「彼らはニブルの兵士ですね。とにかく、事情を聞いてみます」

兵隊のエンブレムに目をやった深月さんは、篠宮先生と共に規制線の傍<sup>そば</sup>に立つ兵士の元へ向かった。

「……何だか厄介なことになっているわね。この分だとジャンヌちゃん——じゃなくて、ジャンと合流するのは難しいかも」

車の窓からそつと顔を覗かせたキーリが、小さな声で呟く。

災害指定されているキーリは、ニブルに追われている立場だ。ここで見つければ面倒なことになるだろう。

「人が集まる前にここから離れた方がいい。今だけは——見ないふりをしてやる」

悠は皆に聞こえないように抑えた声でキーリに告げた。ちなみに僕は悠の横にいるため聞こえている。

「あら、いいの？」

「今回は、まあ……色々世話になったからな」

ユグドラシルを倒すため、ティアちゃんを改造したキーリの行いは、人道的なものとは言えない。僕もユグドラシルを倒す方法を思い浮かばなかったため、彼女に協力した。そんな僕もその件には何も言えない。

悠はキーリがいなければ、全員無事に帰ってこられなかったと思っているだろう。

「そ、ありがとう。じゃあね、悠——また会いましょう。あと、亮も」

軽い口調で礼を言い、キーリは素早く車から降りる。

近くにいたアリエラさんもキーリの動きには気付いていたが、特に止めようとはしなかった。

「次に会った時は敵かもしれないけど……仕方ないか」

アリエラさんは苦笑を浮かべ、キーリを見送る。

「あ——深月たち、戻ってきた」

フィリルさんの声が耳に届き、僕は研究所の方に視線を戻す。

すると深月さんと篠宮先生が、研究所の所長である宮沢健也と共にこちらへ歩いてくるのが見えた。

「ん……」

レンちゃんは僕と悠の傍に寄ってきて、両手でぎゅっと服の袖を握る。

彼はレンちゃんの父親だ。正面からぶつかることでレンちゃんは彼と向き合うことができたが、やはりまだ複雑な想いがあるのだろう。

よく見ると宮沢健也は腕にギプスを嵌めていた。負傷しているようだ。

(奴にやられたのか……)

「やあ、全員無事のように安心したよ。作戦通り、ユグドラシルを討伐できたんだね」

彼は満面の笑みで僕たちの帰還を喜んでみせる。だが僕たちは彼が研究にしか興味のない人間だと知っている。なのでこれは、単なる社交辞令だ。

「はい、まあ……何とか」

悠は皆と視線を交わし合い、曖昧に返事をする。

ユグドラシルは滅んだわけでなく、ティアちゃんが中枢を支配した状態ではあるが——それを彼に教えるつもりはない。そんなことをすれば、ティアちゃんは新たな研究材料として扱われてしまうからだ。少なくともミッドガルに戻り、保護の態勢が整うまではこの事實は明かさない。

この方針については車内で篠宮先生も了承している。”D”の安全と人権を第一に考えるのが、ミッドガルの方針なのだ。

「観測機器が一切使えず、君たちの戦いを見ることができなくて本当に残念だ。報告書を纏める祭には、ぜひ詳細なものを頼みたい」  
宮沢健也は研究者の顔で僕と悠に詰め寄るが、その前にレンちゃんが歩み出した。

「——そんなことより、あれ」

レンちゃんは立ち入り禁止になっている研究所を指差して状況の説明を求めた。

「ああ、そうか……まずは研究所の現状を伝えておかないとね。戻ってきて、驚いただろう?」

「はい、いったい何が?」

悠は嚴重に封鎖された研究所へ視線を向けて事情を問いかけた。

「電子系統がダウンしたことで、設備が不具合を起こしたんだ。地下で爆発が起きて、私も巻き込まれてしまった」

ギプスの嵌められた腕を見せて彼は嘘をつく。

「爆発事故、ですか……」

「ああ、なので研究所はしばらく立ち入り禁止だ。君たちの荷物は職員に運び出されるから、どこか他に宿を探して欲しい」

彼の言葉を聞いたリーザさんは、難しそうな表情を浮かべた。

「宿を探すと言っても、交通網が混乱している現状ではどのホテルも満室だと思いますわ。篠宮先生、このままミッドガルへ帰るわけにはいかないんですの？」

「まだ色々と事後処理がある。今すぐに戻るわけにはいかない。それに異常を来した電子機器のチェックが終わるまで、航空機やヘリは使えないそうさ。少なくともあと二、三日は日本に滞在しなければならぬだろう」

篠宮先生は腕組みをしながら問いに答える。すると深月さんが控えめに手を挙げた。

「あの……でしたら、私と兄さんの実家に来てはいかがでしょう」

「え？ ミツキちゃんとモノノベの家？」

イリスさんが驚きの声を上げ、フィリルさんは胸前で手を叩く。

「私……行きたい。物部くんの家、見てみたいな」

「わ、わたくしも興味はありますが——いきなりお邪魔して大丈夫なんですの？」

そわそわした様子で深月さんに問いかけるリーザさん。

「元々、時間があれば実家に顔を出そうと思っていたので問題ありません。篠宮先生、構わないでしょうか？」

深月さんはリーザさんに返事をした後ら篠宮先生に問いかける。

「そうだな……私は事後処理のため東京に残らねばならないが、君たちはミッドガル帰還の準備が整うまで羽を伸ばしてくるといい。ちよつとした休暇だ」

「ありがとうございますー！」

嬉しそうに深月さんは頭を下げた。しかし悠は、いきなりの帰郷に

茫然<sup>ぼうぜん</sup>としていた。

僕は学園祭で悠と深月さんの両親に挨拶をしたが、悠はユグドラシルのウイルスで気絶したため顔を合わせてはいない。

「兄さん、よかったですね！」

深月さんに笑顔で同意を求められてぎこちなく頷く悠。

「あ、ああ……」

そう言うが、本人はまだ記憶を取り戻すつもりはないだろう。彼はイリスさんに視線を向ける。

「モノノベ？」

イリスさんは悠の視線に気付き、きよとんと首を傾げる。

もし記憶を取り戻せば彼女との恋も終わると思っっているのだろう。しかしこの後、悠の予想もしなかったことが起こることは僕だけが知っていた。